千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 29 集

袖ケ浦市文脇遺跡

（旧石器時代～奈良・平安時代編）

―主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
埋蔵文化財発掘調査報告書２―

平成 31 年３月

千 葉 県 教 育 委 員 会

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 29 集

袖ケ浦市文脇遺跡

（旧石器時代～奈良・平安時代編）

―主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
埋蔵文化財発掘調査報告書２―

平成 31 年３月

千 葉 県 教 育 委 員 会

袖ケ浦市文脇遺跡

（旧石器時代～奈良・平安時代編）

―主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
埋蔵文化財発掘調査報告書２―

序　　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業に係る発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第29集として、主要地方道千葉鴨川線県単道路改良事業に伴って実施した袖ケ浦市文脇遺跡の発掘調査報告書（旧石器時代～奈良・平安時代編）です。調査では、旧石器時代から中・近世に至る多数の遺構・遺物が検出されましたが、本書には中・近世以外の遺構・遺物について収録しています。そのうち弥生時代については、竪穴住居跡をはじめ大型の方形周溝墓など多数の遺構や遺物を検出することができ、当該地区の様相を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成31年３月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　古　泉　弘　志

凡　　例

1　本書は、千葉県県土整備部君津土木事務所による主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県袖ケ浦市上泉字南原618-2ほかに所在する文脇遺跡（遺跡コード229-036）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、平成19年度～平成24年度は千葉県県土整備部の委託を受けて財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団、以下「財団」）が、平成25年度～平成30年度は千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織、実施期間、担当者等は、本文中に記載した。

5　本書の執筆分担は次のとおりで、編集は大谷弘幸が行った。

第１章第１節：高梨友子

第１章第２節：大谷弘幸

第２章：高梨友子、大谷弘幸

第４章：大谷弘幸

なお、土器の種実等圧痕のレプリカ法による同定・分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した（第３章）。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、栗田則久、橋本勝雄、袖ケ浦市教育委員会、袖ケ浦市郷土博物館、千葉県県土整備部道路整備課、同君津土木事務所ほか多くの方々から御指導、御協力を得た（敬称略）。

8　本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

9　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第４図：国土地理院発行　1/25,000　地形図「上総横田」・「姉崎」　平成19年

第１・136・137図：袖ケ浦市発行　1/2,500　袖ケ浦市地形図№27・32　平成５年

10　挿図のスケールは、竪穴住居跡1/80、土坑・陥穴1/40、方形周溝墓・溝1/100、土器復元実測図1/4、土器断面実測図・石製品・土製品1/3を基本とし、その他必要に応じて示した。

11　挿図の竪穴住居跡平面図中、床に表した破線囲み部分は硬化面を表す。遺物実測図中、旧石器ガジリ部分は黒塗りとした。繊維入りの縄文土器は断面に黒丸のマークを入れた。須恵器は断面を黒塗りとした。

弥生土器・土師器の赤彩はその部分を赤く塗り、黒色処理は網掛けをして表現した。そのほかのトーン及び記号の用例は、各図又は各本文中に示したとおりである。

本　文　目　次

第１章　はじめに
第１節　調査の概要……1
１　調査の経緯と経過……1
２　調査の方法と調査概要……1
第２節　遺跡の歴史的環境……6
第２章　検出された遺構と遺物
第１節　旧石器時代……16
１　基本層序……16
２　石器集中地点……18
３　単独出土石器……20
第２節　縄文時代……21
１　陥穴……21
２　土坑……25
３　遺構外出土遺物……25
（１）縄文土器……25
（２）石器……27
第３節　弥生時代……30
１　竪穴住居跡……30
２　方形周溝墓……104
３　土坑……127
４　遺構外出土遺物……132
第４節　古墳時代……137
１　竪穴住居跡……137
２　土坑……141
３　遺構外出土遺物……142
第５節　奈良・平安時代……143
１　竪穴住居跡……143
２　溝状遺構……143
３　遺構外出土遺物……146
第３章　自然科学分析
第１節　レプリカ法による土器種実圧痕の同定……161
１　はじめに……161
２　試料と方法……161
３　結果……161
４　考察……163
第４章　まとめ

第１節　旧石器時代…… 166
第２節　縄文時代…… 166
第３節　弥生時代…… 167
第４節　古墳時代…… 170
第５節　奈良・平安時代…… 170
第６節　土器に付着した種実圧痕について…… 171
写真図版
報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第１図　調査区割と調査年次……３
第２図　下層確認グリッド配置図（１）……４
第３図　下層確認グリッド配置図（２）……５
第４図　文脇遺跡と周辺の遺跡（1:25,000）……７
第５図　縄文～平安時代遺構配置図（１）……９
第６図　縄文～平安時代遺構配置図（２）……10
第７図　縄文～平安時代遺構配置図（３）……11
第８図　縄文～平安時代遺構配置図（４）……12
第９図　縄文～平安時代遺構配置図（５）……13
第10図　基本層序……16
第11図　石器集中地点（28K-62グリッドほか）…19
第12図　単独出土石器……20
第13図　SK-006 ……22
第14図　SK-068 ……22
第15図　2SK-001 ……23
第16図　4SK-052 ……23
第17図　4SK-083 ……23
第18図　7SK-001 ……24
第19図　SK-071 ……24
第20図　2SK-007 ……24
第21図　遺構外出土縄文土器……26
第22図　遺構外出土縄文時代石器（１）……28
第23図　遺構外出土縄文時代石器（２）……29
第24図　SI-001と出土遺物……31
第25図　SI-002と出土遺物……32
第26図　SI-003と出土遺物（１）……33
第27図　SI-003出土遺物（２）……35
第28図　SI-004……35
第29図　SI-004出土遺物……36
第30図　SI-005と出土遺物……38
第31図　SI-006と出土遺物……38
第32図　SI-007と出土遺物……40
第33図　SI-008と出土遺物……41
第34図　SI-009と出土遺物……41
第35図　SI-010と出土遺物（１）……43
第36図　SI-010出土遺物（２）……45
第37図　SI-011と出土遺物……45
第38図　SI-012と出土遺物……47
第39図　SI-013……47
第40図　SI-013出土遺物……48
第41図　SI-014……48
第42図　SI-015と出土遺物……50
第43図　SI-016と出土遺物……50
第44図　SI-017と出土遺物……52
第45図　SI-018と出土遺物……52
第46図　SI-021……54
第47図　SI-026と出土遺物……54
第48図　SI-027と出土遺物……56
第49図　SI-030と出土遺物……56
第50図　SI-031と出土遺物……57
第51図　SI-032と出土遺物……59
第52図　SI-034と出土遺物……60

第53図　SI-035と出土遺物……60
第54図　SI-037……62
第55図　SI-038……62
第56図　SI-039と出土遺物……63
第57図　SI-044と出土遺物……65
第58図　2SI-001と出土遺物 ……66
第59図　2SI-002と出土遺物 ……66
第60図　2SI-003と出土遺物 ……68
第61図　2SI-004と出土遺物 ……68
第62図　2SI-005と出土遺物 ……68
第63図　2SI-006と出土遺物 ……70
第64図　2SI-007と出土遺物 ……70
第65図　2SI-008と出土遺物 ……72
第66図　2SI-009 ……72
第67図　2SI-010と出土遺物 ……74
第68図　2SI-012 ……75
第69図　2SI-013と出土遺物 ……75
第70図　2SI-014と出土遺物 ……76
第71図　2SI-016 ……79
第72図　2SI-018 ……79
第73図　2SI-019と出土遺物 ……79
第74図　2SI-020・023と出土遺物……80
第75図　2SI-021と出土遺物 ……81
第76図　2SI-022 ……81
第77図　2SI-024 ……83
第78図　2SI-025と出土遺物 ……83
第79図　3SI-026 ……86
第80図　3SI-027と出土遺物 ……86
第81図　3SI-028と出土遺物（１）……88
第82図　3SI-028出土遺物（２）……89
第83図　4SI-001 ……90
第84図　4SI-001出土遺物 ……91
第85図　4SI-002と出土遺物 ……91
第86図　4SI-003 ……93
第87図　4SI-003出土遺物（１）……95
第88図　4SI-003出土遺物（２）……96
第89図　5SI-002と出土遺物 ……98
第90図　5SI-003と出土遺物 …… 100
第91図　5SI-004と出土遺物 …… 100
第92図　7SI-003と出土遺物 …… 102
第93図　7SI-004と出土遺物 …… 102
第94図　7SI-005と出土遺物 …… 102
第95図　7SI-006 …… 103
第96図　SS-001と出土遺物 …… 105
第97図　SS-002、SK-007 …… 106
第98図　SS-002、SK-007出土遺物 …… 107
第99図　SS-003、7SK-002と出土遺物…… 108
第100図　SS-004 …… 110
第101図　SS-005、SK-005と出土遺物…… 111
第102図　SS-006、SK-097・098・101（１）… 113
第103図　SS-006、SK-097・098・101（２）… 114
第104図　SS-006、SK-097・098・101（３）と
出土遺物 …… 115
第105図　SS-007 …… 117
第106図　SS-008と出土遺物 …… 117
第107図　SD-029と出土遺物 …… 119
第108図　4SD-029と出土遺物 …… 120
第109図　4SD-030・031 …… 121
第110図　4SD-030・031出土遺物 …… 122
第111図　4SD-032と出土遺物 …… 123
第112図　4SD-033と出土遺物 …… 125
第113図　4SD-038と出土遺物 …… 125
第114図　5SD-002・003と出土遺物 …… 126
第115図　SK-002・003 …… 128
第116図　5SK-001 …… 128
第117図　5SK-002 …… 130
第118図　5SK-003 …… 130
第119図　5SK-004 …… 130
第120図　5SK-005と出土遺物 …… 131
第121図　5SK-006 …… 131
第122図　5SK-007 …… 131
第123図　5SK-008 …… 131
第124図　遺構外出土弥生時代遺物（１）…… 133
第125図　遺構外出土弥生時代遺物（２）…… 135

第126図　SI-036B …… 138
第127図　SI-043と出土遺物 …… 138
第128図　2SI-011と出土遺物…… 140
第129図　2SK-003 …… 141
第130図　遺構外出土古墳時代遺物 …… 141
第131図　5SI-001と出土遺物…… 144
第132図　SD-031 …… 144
第133図　5SD-001と出土遺物 …… 145
第134図　5SD-004 …… 145
第135図　遺構外出土奈良・平安時代遺物 …… 146
第136図　文脇遺跡弥生時代遺構配置図（１）… 168
第137図　文脇遺跡弥生時代遺構配置図（２）… 169

表　目　次

第１表　縄文～奈良・平安時代遺構一覧表……14
第２表　石器集中地点（28K-62グリッドほか）
　　出土石器一覧表…… 148
第３表　単独出土石器一覧表…… 148
第４表　掲載石器・石製品(旧石器以外)一覧表… 148
第５表　掲載土器観察表…… 149
第６表　掲載土製品一覧表…… 160
第７表　掲載ガラス製品一覧表…… 160
第８表　文脇遺跡の圧痕レプリカの同定結果… 162
第９表　文脇遺跡出土の土器圧痕の同定結果… 164
第10表　レプリカ法実施土器点数一覧…… 172
第11表　器種別種実付着率…… 172
第12表　種実圧痕付着部位…… 172
第13表　複数の種実が付着する土器…… 172
第14表　イネの部位別検出状況…… 172
第15表　文脇遺跡種実圧痕集成…… 174
第16表　千葉県下出土炭化種実集成…… 175
第17表　市原市草刈遺跡出土炭化種実集成…… 175

図　版　目　次

図版１　H20調査区調査前（北西から）
　　H19調査区（25G付近、南東から）
　　H20調査区（22F・22G・23F、東から）
図版２　H21-3調査区（東から）
　　H22調査区（9C・9D・10C・10D・11C、西から）
　　H23調査区（北西から）
図版３　8D-82断面（西から）
　　10E-10断面（東から）
　　12D-59断面（南から）
　　18E-20・30断面（東から）
　　26I-78断面（北から）
　　36S-93断面（南から）
　　25G-24遺物出土状況（東から）
　　28K-73ほか断面（西から）
図版４　SK-006
　　SK-068
　　2SK-001
　　4SK-052
　　4SK-083
　　7SK-001
　　SK-071
　　2SK-007
図版５　SI-001
　　SI-002
　　SI-002遺物出土状況
　　SI-003（H19調査分）
　　SI-003（H27調査分）
　　SI-003遺物出土状況
　　SI-004
　　SI-004遺物出土状況
図版６　SI-005
　　SI-006

SI-007
SI-007遺物出土状況
SI-008（H19調査分）
SI-008（H27調査分）
SI-009
SI-010
図版７　SI-011
SI-012
SI-013
SI-014
SI-015
SI-016
SI-016遺物出土状況
SI-017
図版８　SI-018
SI-021
SI-026
SI-027
SI-030
SI-030遺物出土状況
SI-031
SI-032
図版９　SI-034
SI-035
SI-037
SI-038
SI-039
SI-044
2SI-001
2SI-002
図版10　2SI-003
2SI-005
2SI-006
2SI-007
2SI-008
2SI-008遺物出土状況
2SI-009
2SI-010
図版11　2SI-012・013
2SI-014
2SI-018
2SI-019
2SI-020・023
2SI-021
2SI-024
2SI-025
図版12　3SI-026
3SI-027
3SI-028
3SI-028遺物出土状況
4SI-001
4SI-002
4SI-003
4SI-003遺物出土状況
図版13　5SI-002
5SI-002遺物出土状況
5SI-003
5SI-004
7SI-003
7SI-004
7SI-005
7SI-006
図版14　SS-001
SS-002
SS-003（H19調査分）
SS-003（H27調査分）・7SK-002（主体部）
SS-004
SK-005（SS-005主体部）
SS-006周溝
SK-097（SS-006主体部）
図版15　SK-098（SS-006主体部）
SS-008
4SD-029～033
4SD-030

4SD-031・033
4SD-038
5SD-002
5SD-003
図版16　SK-002・003
5SK-001
5SK-002
5SK-003
5SK-004
5SK-005
5SK-006
5SK-007
図版17　5SK-008
SI-036B
SI-043
SI-043カマド
2SI-011・2SK-003
5SI-001・5SD-001
5SD-001遺物出土状況
5SD-004
図版18　旧石器時代石器
縄文時代石器（１）
図版19　縄文時代石器（２）
図版20　縄文時代土器
図版21　弥生時代土器（１）～遺構出土～
図版22　弥生時代土器（２）～遺構出土～
図版23　弥生時代土器（３）～遺構出土～
図版24　弥生時代土器（４）～遺構出土～
図版25　弥生時代土器（５）～遺構出土～
図版26　弥生時代土器（６）～遺構出土～
図版27　弥生時代土器（７）～遺構出土～
図版28　弥生時代土器（８）～遺構出土～
図版29　弥生時代土器（９）～遺構出土～
図版30　弥生時代土器（10）～遺構出土～
図版31　弥生時代土器（11）～遺構出土～
図版32　弥生時代土器（12）～遺構出土～
図版33　弥生時代土器（13）～遺構出土～
図版34　弥生時代土器（14）～遺構出土～
図版35　弥生時代土器（15）～遺構出土～
図版36　弥生時代土器（16）～遺構出土～
図版37　弥生時代土器（17）～遺構出土～
図版38　弥生時代土器（18）～遺構外出土～
図版39　弥生時代土器（19）～遺構外出土～
図版40　弥生時代土器（20）～遺構外出土～
図版41　弥生時代土器（21）～遺構外出土～
ガラス玉、弥生時代石器・石製品
図版42　古墳時代土器（１）
図版43　古墳時代土器（２）
奈良・平安時代土器（１）
図版44　奈良・平安時代土器（２）
弥生時代～奈良・平安時代土製品
図版45　文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）
図版46　文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（2）
図版47　文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（3）
図版48　文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（4）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

調査の経緯と経過、方法と概要、遺跡の地理的環境については、既刊『袖ケ浦市文脇遺跡（中･近世編）－主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書１－』（以下､「中･近世編」）に詳しく記載済みである。本書では、その概略と補足的内容を適宜記載するにとどめる。

発掘調査は、平成19年度から平成24年度まで財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団、以下「財団」）に委託して実施された。その後、未調査区となっていた現道下の調査区について、平成27年度に千葉県教育委員会が実施した。

整理作業は、財団において平成19年度から順次進められてきたが、平成25年度からは千葉県教育委員会が継承して行い、調査成果のうち中・近世について平成28年度に報告書を刊行した。旧石器時代～奈良・平安時代までの遺構･遺物についてはその後も整理作業を続け､平成30年度に報告書を刊行することとなった。

発掘調査・整理作業に係る組織、期間、内容、担当者等は、平成28年度までは中・近世編に記載したとおりで、平成29年度以降については以下のとおりである。

整理作業　**平成29年度**　千葉県教育庁教育振興部文化財課実施
文化財課長　萩原恭一　副課長　島立桂　発掘調査班長　山田貴久
整理内容　原稿の一部～編集（平成19年度～21年度調査分）
挿図の一部～収納整理の一部（平成22年度・23年度調査分）
拓本の一部～編集の一部（平成24年度調査分）
実測の一部～編集（平成27年度調査分）
整理担当者　主任上席文化財主事　高梨友子

平成30年度　千葉県教育庁教育振興部文化財課実施
文化財課長　古泉弘志　副課長　加納実　発掘調査班長　山田貴久
整理内容　校正・収納整理
旧石器時代～奈良・平安時代編報告書刊行
整理担当者　主任上席文化財主事　大谷弘幸

２　調査の方法と調査概要（第１図）

文脇遺跡の発掘調査にあたっては、昭和62年度～平成元年度に財団法人君津郡市文化財センターにより調査された地区や、昭和63年度に財団法人千葉県文化財センター（現・財団）により調査された地区などの既調査区も包括するようなグリッド設定を行った。Ｘ＝－65,800m、Ｙ＝19,200mを起点として、20mごとに南に１、２，３…、東にA、B、C…とする20m四方の大グリッドを設定して、数字とアルファベッ

トを組み合わせて１A、１B、１C…のように呼称した。さらに大グリッドの中には、それぞれ２m四方の小グリッドを設定し、起点となる北西隅を00とし、東に１の位を増して01、02、03…、南に10の位を増して10、20、30…とし、00から99までの番号を付した。これにより、大グリッドと合わせて「1B-12」のように表示することとした。

遺跡コードは229-036で、調査次により枝番などを付した。

遺構名は、調査時には全て遺構種別記号と３桁の数字の組合せにより付したが、調査次により、前年度からの番号を継続している場合と、新たに001から付け直している場合とがある。報告にあたっては、遺構名を区別するため、原則的に調査時の遺構番号を用いるようにしながら、遺構種別記号の前に調査次を表す数字を付けたものもある。

具体的には、平成19年度から平成21年度-1・2で調査を行った遺構については、基本的に調査時の遺構番号を踏襲した。これ以降は調査次ごとに、新たに番号を付けていることから、平成21年度-3として調査した遺構には「２」を、平成22年度（3）として調査した遺構には「３」を、平成22年度（4）として調査した遺構には「４」を、平成23年度で調査した遺構には「５」を、平成24年度で調査した遺構には「６」を、平成27年度で調査した遺構には「７」を遺構種別記号の前に付け、「2SK-001」のように表記することとした。

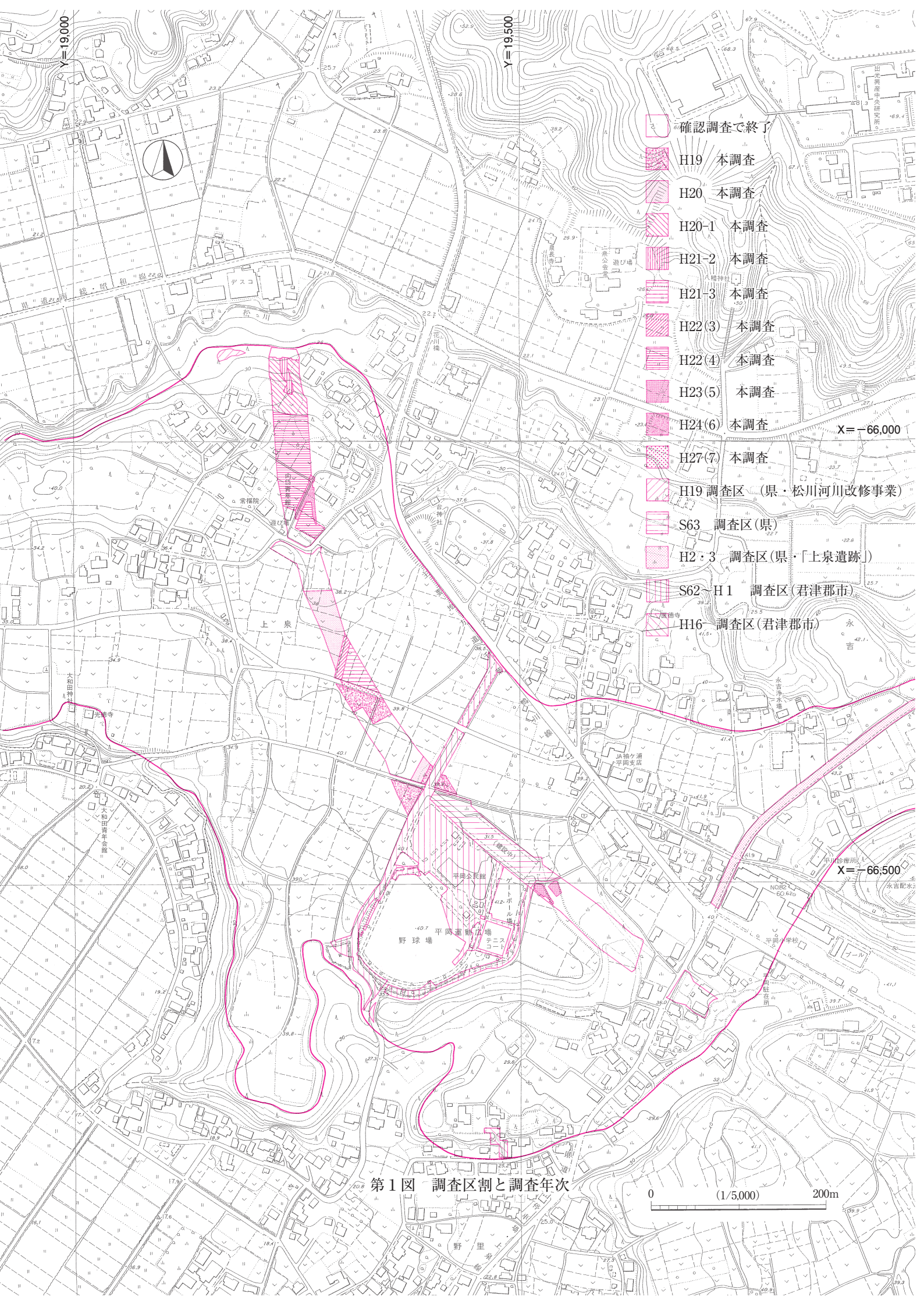
上層調査における、調査成果の年度毎の概要については、中・近世編で取り上げているため、以下では主として下層調査の概要を述べることとする（第２・３図）。なお、各調査次の調査範囲並びに、過去に発掘調査が行われた地点の調査範囲については、第１図に示したとおりである。

平成19年度：調査区は４か所に分かれており、計4,854㎡の調査区に対して228㎡の下層確認調査を行ったところ、３地点で石器が出土した。３地点について拡張して調査を行ったが、それ以上の遺物の出土が見られなかったため、確認調査で終了した。

平成20年度：2,495.8㎡の調査区に対して48㎡の下層確認調査を行ったが、遺物は出土せず、確認調査で終了した。

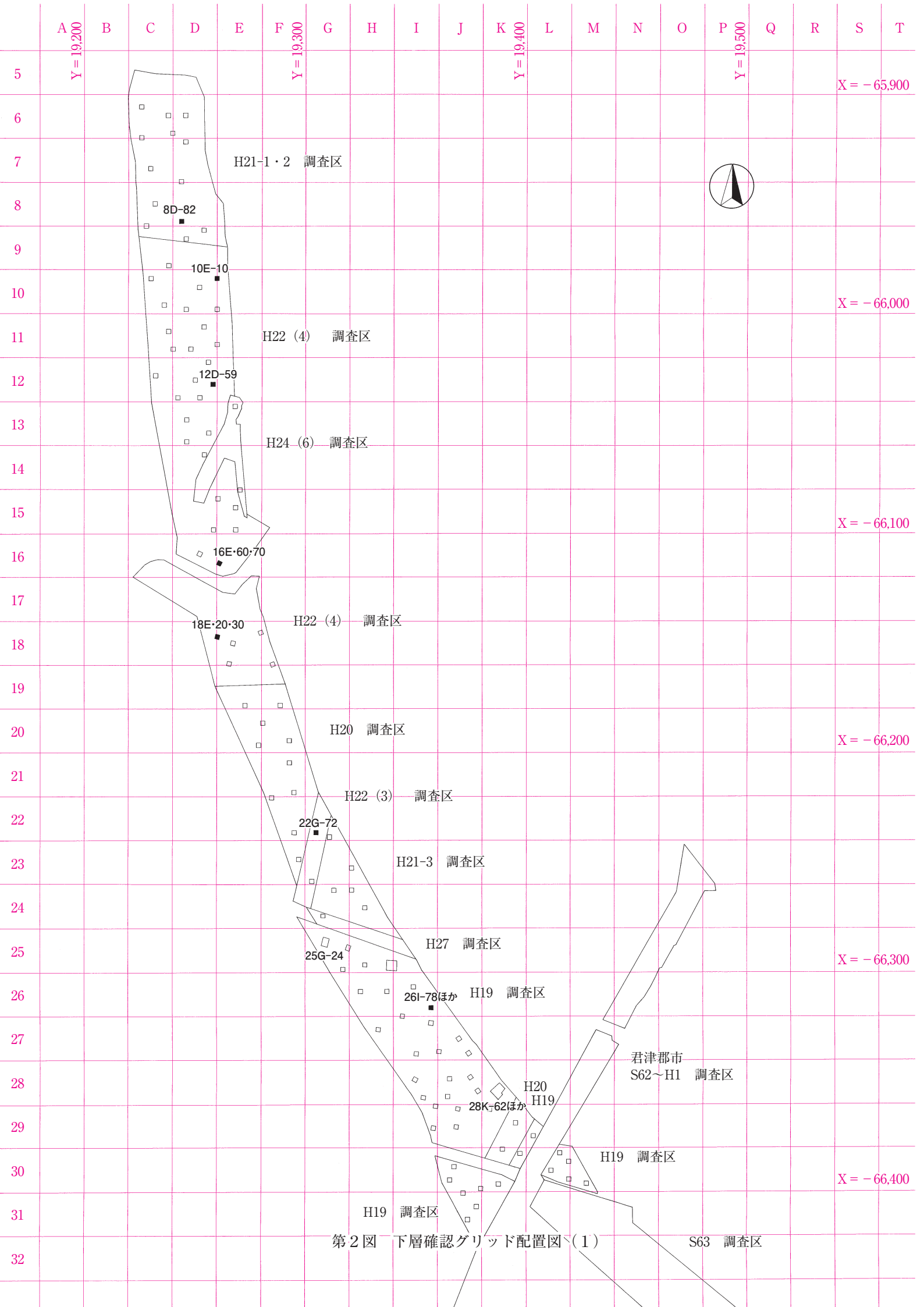
平成21年度：事業区分により２地区に分けて調査を行った。今回報告する中で最北端に位置する地区（-1・2調査区）と、平成27年度調査区の北隣（-3調査区）に位置する地区とである。平成21年度-1・2調査区では2,500㎡に対して52㎡、平成21年度-3調査区では850㎡に対して20㎡の下層確認調査を行ったが、いずれも遺物は出土せず、確認調査で終了した。

平成22年度：進入路確保のため未調査となっていた部分を、平成22年度（3）調査区として、400㎡に対して８㎡の下層確認調査を行った。また、平成21年度-1・2調査区の南に位置する現道を挟む２地区を平成22年度（4）調査区とし、計6,600㎡に対して132㎡の下層確認調査を行ったが、いずれも遺物は出土せず、確認調査で終了した。

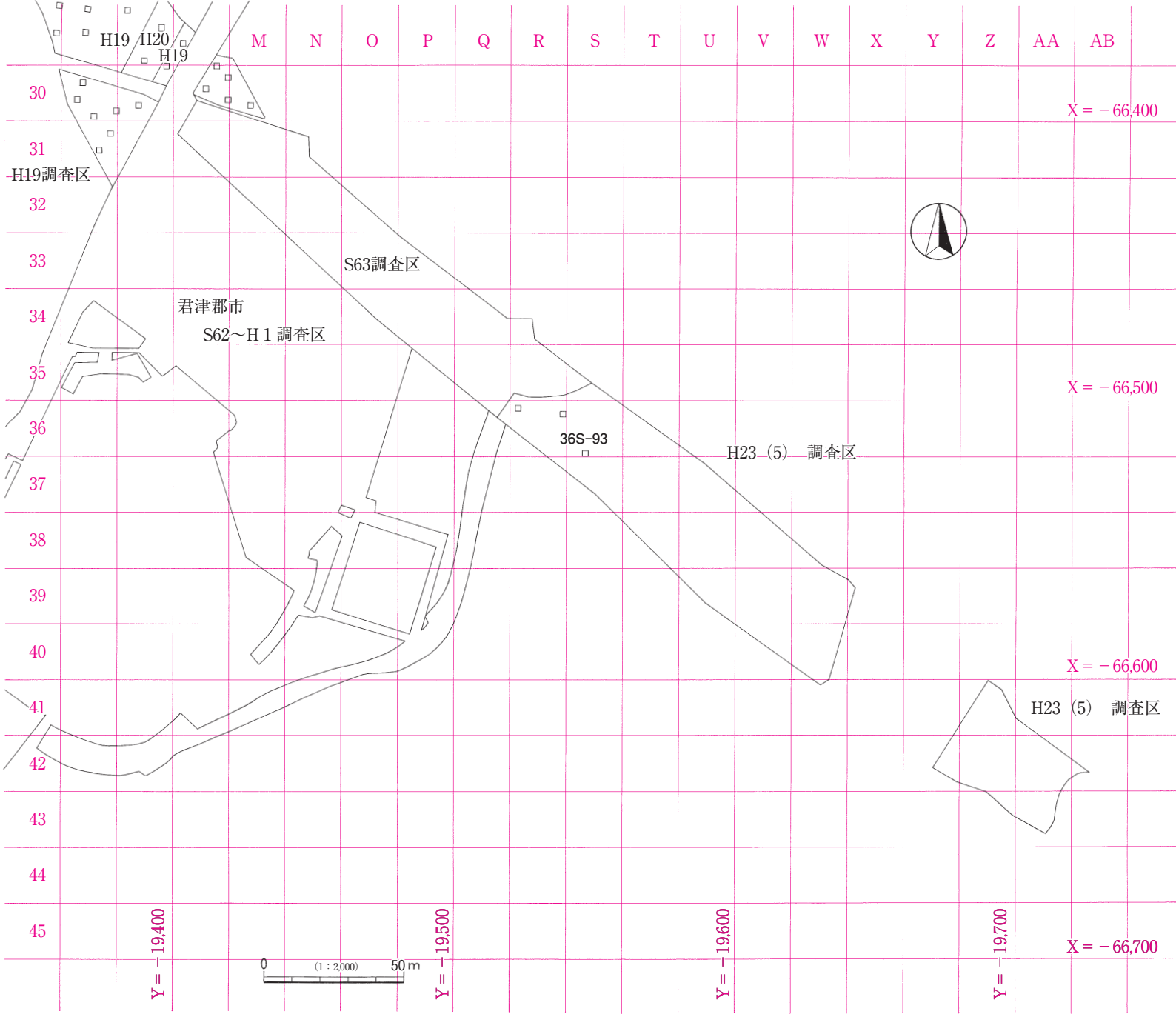


第１図　調査区割と調査年次

0　(1/5,000)　200m



第２図　下層確認グリッド配置図（１）



第３図　下層確認グリッド配置図（２）

平成23年度：今回報告する中で最も南東側に位置する調査区である。立川ローム層は、上層本調査を行った640㎡の部分でしか確認できず、その部分で12㎡の下層確認調査を行ったが、いずれも遺物は出土せず、確認調査で終了した。

平成24年度：平成22年度調査時に現道のため調査不可能であった地区で、250㎡に対して８㎡の下層確認調査を行ったが、遺物は出土せず、確認調査で終了した。

平成27年度：平成21-3調査区と平成19年度調査区の間に残されていた現道部分を千葉県教育委員会が調査した。133㎡に対して４㎡の下層確認調査を行ったが、遺物は出土せず、確認調査で終了した。

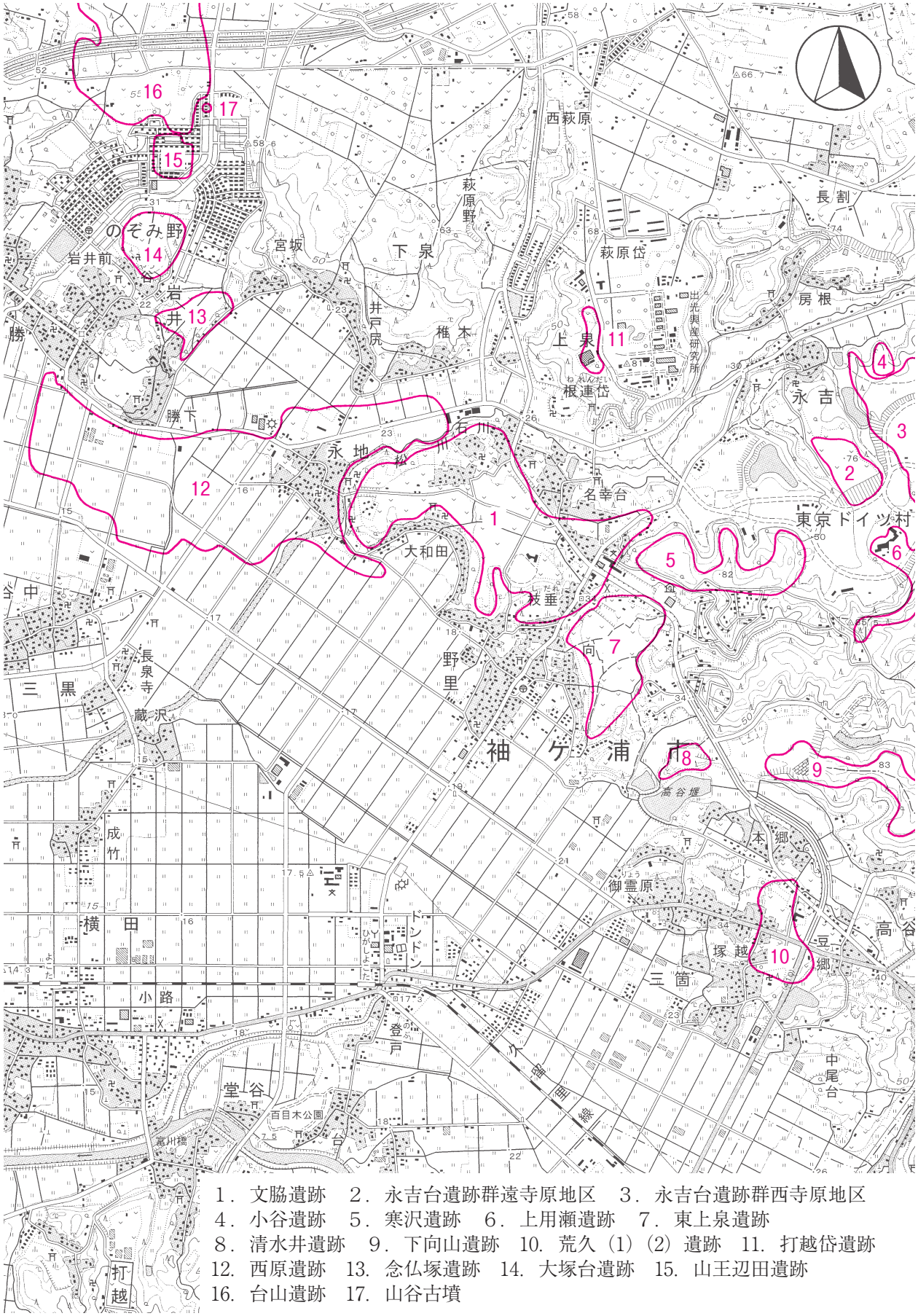
第２節　遺跡の歴史的環境

文脇遺跡の位置と地理的環境については、中・近世編に記載したためここでは割愛し、旧石器時代から奈良・平安時代の歴史的環境について、調査の行われた遺跡の動態を中心に述べることとする（第４図）。

旧石器時代の遺跡は、近年の発掘調査の増加により、徐々に検出事例が増加しつつある。文脇遺跡の東側、松川の上流域に位置する小谷遺跡[注1]からは、Ⅲ層下部から頁岩製スクレイパー、頁岩製石錐など56点の石器が出土した。隣接する永吉台№２遺跡[注2]からは、12か所に及ぶ石器集中地点が検出され、521点の石器が出土している。石器集中地点の出土層位もⅢ層３か所、Ⅲ・Ⅳ層１か所、Ⅳ・Ⅴ層６か所、Ⅴ層１か所、Ⅵ層１か所と立川ローム層上部のまとまった資料となっている。また上用瀬遺跡[注3]では、出土した槍先形尖頭器の中央稜線付近に着柄時に使用されたと考えられるタール状の付着物が確認でき、石器の使用方法を推定する貴重な資料となっている。文脇遺跡の南側に位置する清水井遺跡[注4]からは、Ⅲ～Ⅶ層の範囲で黒曜石製ナイフ形石器２点を含む16点の石器が出土し、荒久（2）遺跡[注5]からは、珪質頁岩製ナイフ形石器１点、頁岩製彫刻刀形石器１点を含む19点の石器が、Ⅲ層～Ⅳ層を中心に出土している。このほか未報告であるが、東上泉遺跡[注6]からは、Ⅵ層～Ⅶ層にかけてとⅨ層～Ⅹ層にかけて、剥片・礫片のブロックがまとまって検出されている。また、文脇遺跡の北側、松川の対岸台地上に位置する打越岱遺跡[注7]では、Ⅳ～Ⅴ層から頁岩製ナイフ形石器１点を含む13点の石器が出土した。さらに北に位置する台山遺跡[注8]からは915点もの石器が出土しており、なかでもⅨa層の第１文化層からは、ナイフ形石器13点を含む921点もの石器が出土し、立川ローム層下部の貴重な資料となっている。

縄文時代早期になると遺跡が散見されるようになり、打越岱遺跡から撚糸文期の竪穴住居跡が１軒検出されたほか、上用瀬遺跡[注9]から、それぞれ条痕文期と鵜ガ島台期の竪穴住居跡が１軒検出されている。また、小谷遺跡、上用瀬遺跡、寒沢遺跡[注10]、東上泉遺跡[注11]、清水井遺跡、下向山遺跡[注12]、荒久（2）遺跡、打越岱遺跡から、陥穴や炉穴が検出されている。特に上用瀬遺跡からは、比較的狭い調査面積にもかかわらず、炉穴が77基も検出され特筆される。このほか君津地域以南の特徴として指摘される当該期の礫群も小谷遺跡、上用瀬遺跡、打越岱遺跡から検出されている。前期になると遺跡数は減少し、文脇遺跡から関山期１軒、諸磯期３軒の竪穴住居跡が検出された以外は遺構の検出は見られない。また、該期の遺物が出土した遺跡も文脇遺跡のほか小谷遺跡、上用瀬遺跡[注13]、清水井遺跡と少ない。続く中期に入ると遺跡数はさらに減少し、上用瀬遺跡から五領ヶ台式土器と十三菩提式土器が若干出土した程度で遺構の検出は認められず、この地域の特色ともなっている。後期になると僅かに遺跡数が増加し、上用瀬遺跡、寒沢遺跡、下向山遺跡、念仏塚遺跡[注14]から遺物が出土し、続く晩期では上用瀬遺跡、清水井遺跡、台山遺跡から晩期終末の遺物が出土しており、小規模な遺跡が散在する傾向を示す。

先の上用瀬遺跡、台山遺跡からは、晩期終末に続いて弥生時代中期中葉の遺物も出土している。いずれの遺跡も沖積低地から離れた比較的標高の高い台地上に立地し、水稲耕作技術受容期の集落立地と生業の関係を考える意味でも興味深い資料を提供している。中期中葉になると文脇遺跡の所在する台地の西側直下の低位段丘上に位置する西原遺跡[注15]から二重の環濠が検出されている。竪穴住居跡は発見されていないが、低位段丘上には集落が展開するものと想像される。また、松川の上流域に所在する小谷遺跡からは、狭い台地上から６軒の竪穴住居跡が検出され、ベンガラ入りの壺などが出土した。小櫃川右岸の荒久（1）（2）遺跡[注16]からは、中期末葉～後期初頭の所産と考えられる方形周溝墓が22基検出され、銅釧やガラス玉が出土したほか、清水井遺跡からは後期前葉の竪穴住居跡３軒、方形周溝墓が５基検出されている。



1．文脇遺跡　2．永吉台遺跡群遠寺原地区　3．永吉台遺跡群西寺原地区
4．小谷遺跡　5．寒沢遺跡　6．上用瀬遺跡　7．東上泉遺跡
8．清水井遺跡　9．下向山遺跡　10．荒久（1）（2）遺跡　11．打越岱遺跡
12．西原遺跡　13．念仏塚遺跡　14．大塚台遺跡　15．山王辺田遺跡
16．台山遺跡　17．山谷古墳

第４図　文脇遺跡と周辺の遺跡（1:25,000）

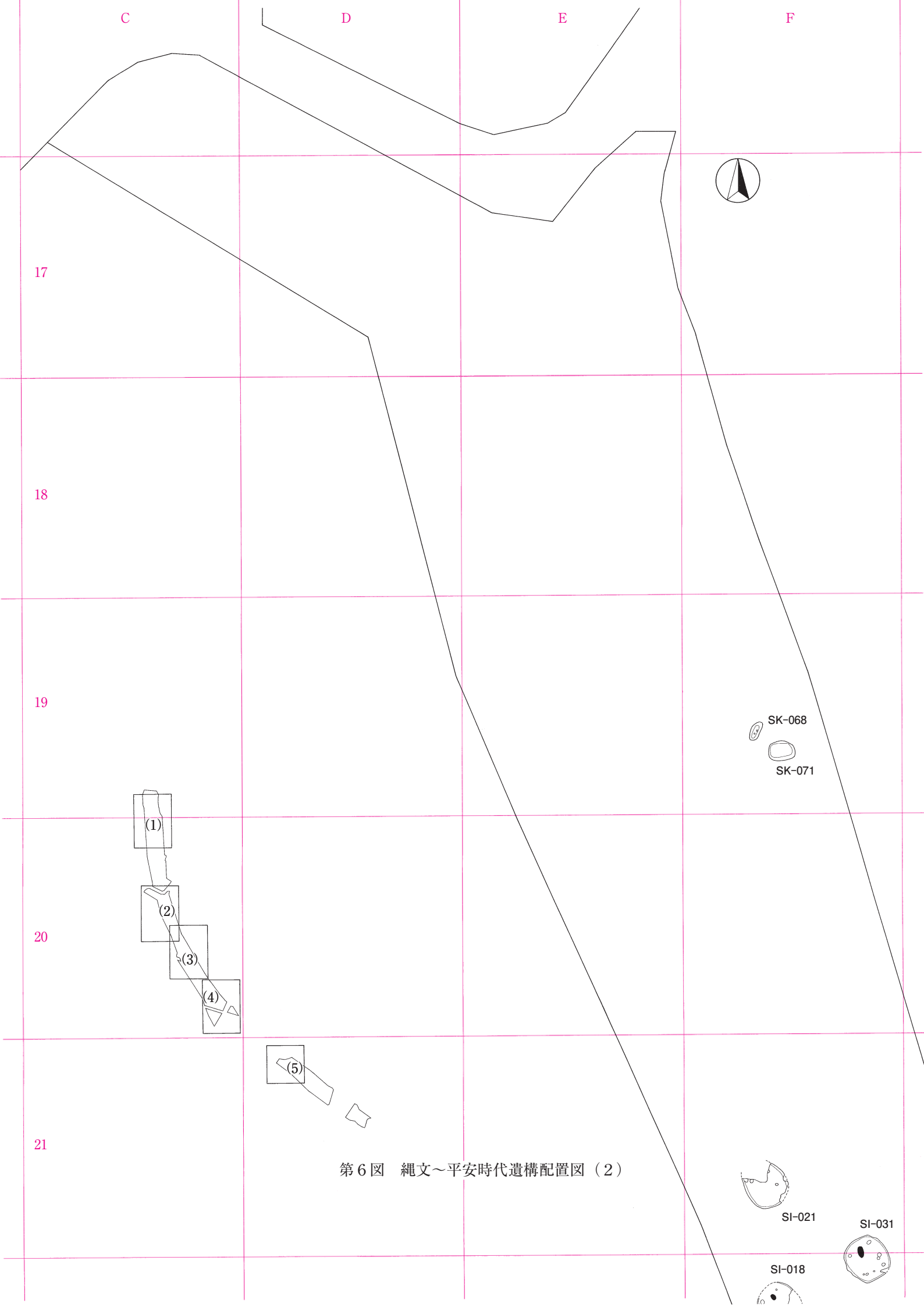
また、松川の対岸に位置する念仏塚遺跡からも後期前葉の竪穴住居跡が３軒検出された。後期後葉～古墳時代前期初頭になると急速に遺跡数は増加し、小谷遺跡や打越岱遺跡のような小規模な遺跡のほか、43軒の竪穴住居跡を検出した寒沢遺跡、66軒の竪穴住居跡を検出した東上泉遺跡、73軒の竪穴住居跡を検出した下向山遺跡のように、近接した範囲で規模の大きな集落を営む遺跡も見られるようになる。

このように古墳時代前期初頭までは、広範囲にわたって大規模な集落が展開し、これに伴い円墳や方墳が各地に造営されたほか、松川の右岸に位置する山王辺田２号墳[注17]や山谷古墳[注18]のような初期の前方後方墳や前方後円墳も営まれるようになる。しかし時代が下るに従って遺跡数は減少し、中期になると文脇遺跡で８件の竪穴住居跡が検出されたほかは、上用瀬遺跡で１軒、念仏塚遺跡で２軒確認されたのみとなる。また古墳も愛宕古墳群[注19]で円墳５基、東上泉遺跡で円墳１基が検出されたのみである。このような減少傾向は後期になるとさらに顕著となり、松川左岸では、今回報告する文脇遺跡で竪穴住居跡が１軒検出された以外に、愛宕古墳群、東上泉遺跡、荒久（2）遺跡で古墳が確認されたのみとなる。これに対して松川右岸では、念仏塚遺跡で４軒、大塚台遺跡[注20]で１軒の竪穴住居跡が検出されたほか、山王辺田遺跡[注21]から該期の古墳が確認されるなど、若干の遺跡の集中が認められる。

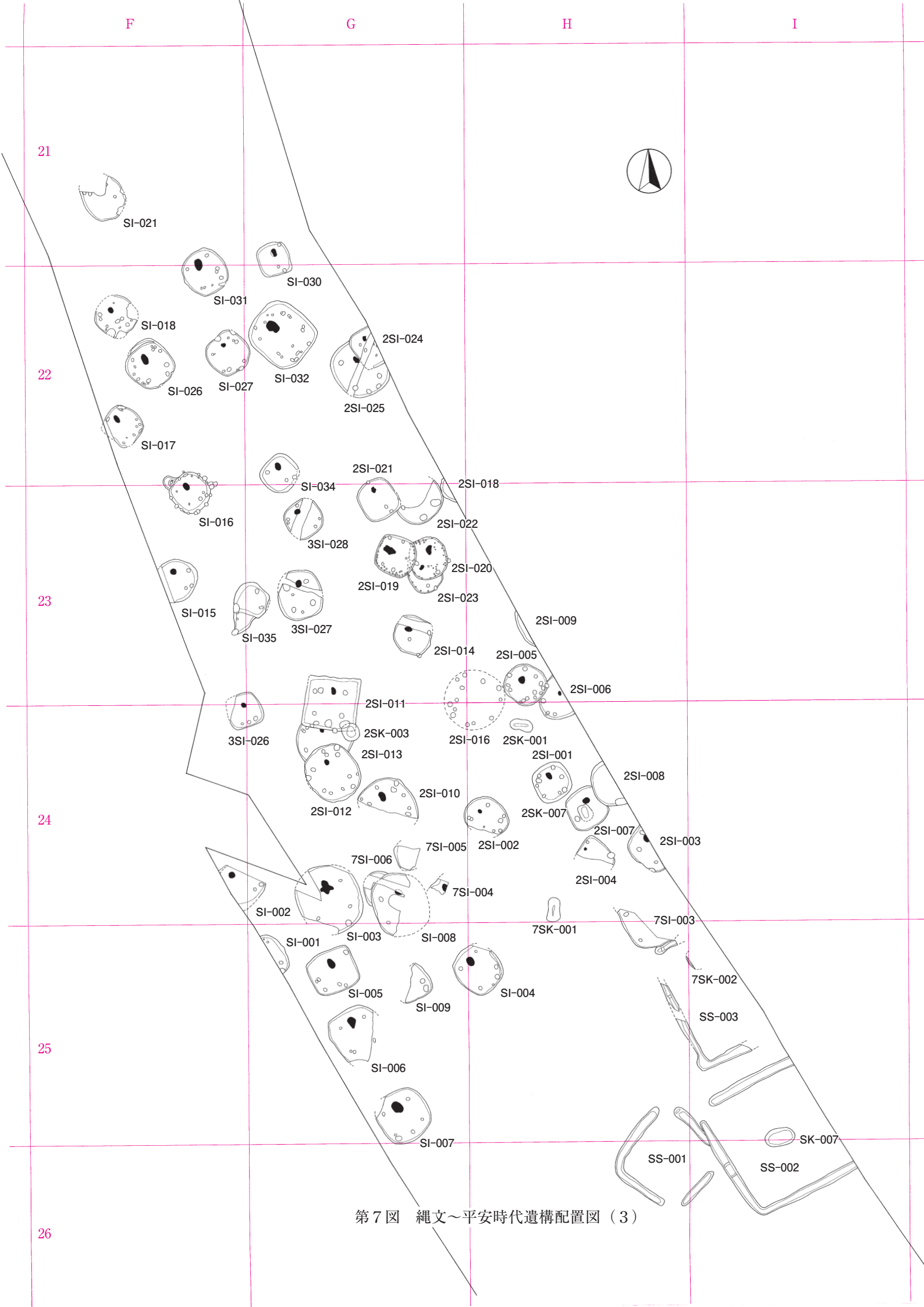
奈良・平安時代になると再び遺跡数・遺跡規模の増大化が認められる。松川の上流左岸の永吉台遺跡群[注22]からは、古代寺院を伴う遠寺原地区、土器生産遺構が発見された西寺原地区、台地の先端部に位置する小谷遺跡で、総数竪穴住居跡200軒、掘立柱建物跡８棟が検出され、８世紀後半から10世紀前半にかけての、地域開発の拠点となる集落と考えられる。また、仏教を中心とした集団が、地域の新たな開発に大きく関わっていたことを示していると言えよう。このほか寒沢遺跡や清水井遺跡など、痩せ尾根上に小規模な集落を営む遺跡が出現するほか、打越岱遺跡のように墓域としてのみ利用されている遺跡も現れる。また、西原遺跡からは呪符木簡が出土し、人々の精神世界を知る貴重な資料となっている。

注１　大崎紀子　1992　『小谷遺跡発掘調査報告書』　財団法人君津郡市文化財センター
２　袖ケ浦市　1999　「永吉台№２遺跡」『袖ケ浦市史　資料編１　原始・古代・中世』
３　小沢 洋・稲葉理恵・井上 賢　2000　『上用瀬遺跡Ⅱ』　財団法人君津郡市文化財センター
４　大崎紀子　1993　『清水井遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
５　小林清隆　1998　『袖ケ浦市荒久（2）遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
６　財団法人千葉県教育振興財団　2013　『千葉県教育振興財団文化財センター年報№38－平成24年度－』
７　野口行雄・小沢 洋・光江 章　1989　『打越岱遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
８　小久貫隆史・渡辺修一・新田浩三　2002　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書10－袖ケ浦市台山遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
９　稲葉理恵　1996　『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
10　注９と同じ
11　土屋治雄・相京邦彦・倉内郁子　1998　『主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書５－袖ケ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡』　財団法人千葉県教育振興財団
12　黒澤 聡　1994　『下向山遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
鳥海 章・西原崇浩　1998　『山王台遺跡・下向山遺跡』　袖ケ浦市教育委員会
13　安藤道由・稲葉理恵　2001　『上用瀬遺跡Ⅲ』　財団法人君津郡市文化財センター
14　光江 章　1987　『念仏塚遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
15　伊藤伸久　1999　『西原遺跡Ⅱ』　財団法人君津郡市文化財センター
16　注５と同じ
小林清隆・高梨友子　1999　『一般国道410号埋蔵文化財調査報告書－袖ヶ浦市荒久（1）遺跡・三箇遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
17　袖ケ浦市　1999　「付編　山王辺田古墳群」『袖ケ浦市史　資料編１　原始・古代・中世』
18　注17と同じ
19　注９と同じ
20　土屋治雄　1997　『袖ケ浦市大塚台遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
21　注17と同じ
22　豊巻幸正・笹生 衛　1985　『永吉台遺跡群』　財団法人君津郡市文化財センター

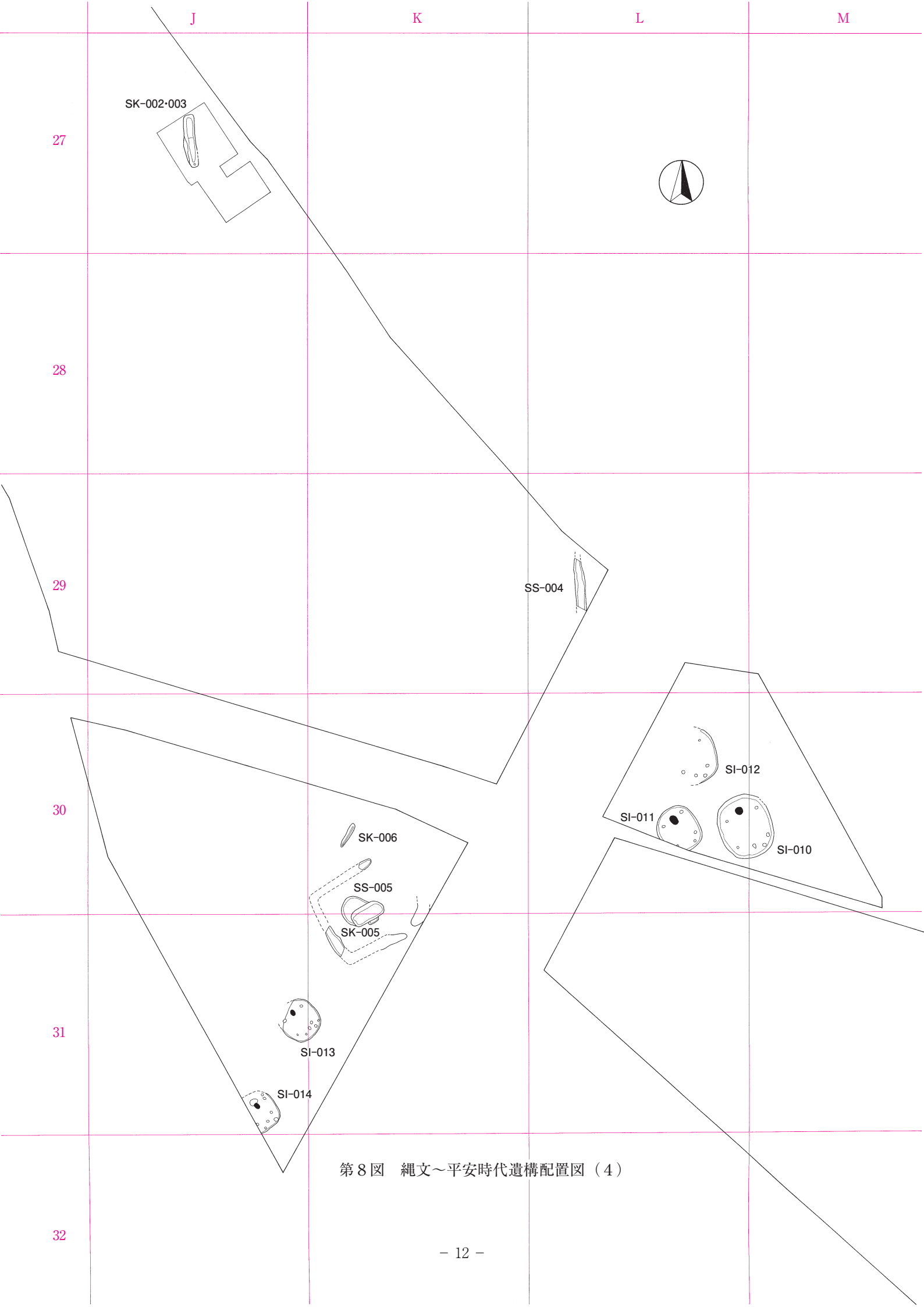
第５図　縄文～平安時代遺構配置図（１）



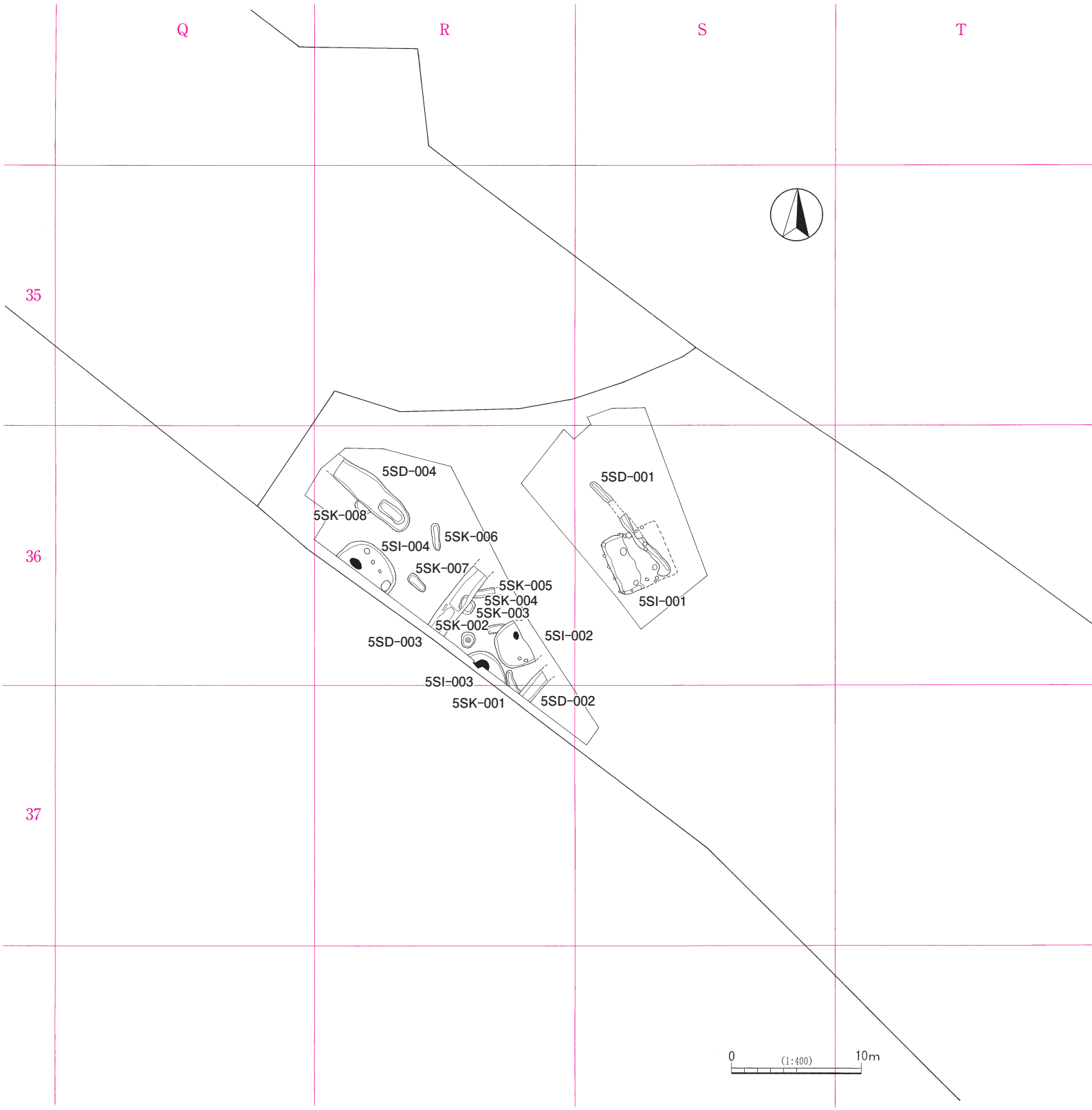
第６図　縄文～平安時代遺構配置図（２）



第７図　縄文～平安時代遺構配置図（３）



第８図　縄文～平安時代遺構配置図（４）



第９図　縄文～平安時代遺構配置図（５）

第１表　縄文～奈良・平安時代遺構一覧表

調査次	調査年度	調査時遺構名	報告時遺構名	遺構種別	位置	時代	備考
	21-1	SD-029	SD-029	方形周溝墓	6C-00・01・10・11・20・21・30・31・40・41・50・51・60・61・70・71・80	弥生中期	
	21-2	SD-031	SD-031	溝状遺構	6C-09・19、6D-00・10・11・20・21・31～33	奈良・平安？	
(4)	22	SD-029	4SD-029	方形周溝墓	10C-36・37・45～47・54・55・64・65・74・75・85・95・96、11C-06	弥生後期	
(4)	22	SD-030	4SD-030	方形周溝墓	10C-53・54・63～65・74～76・85～87・96・97	弥生中期	SD-031と同一遺構
(4)	22	SD-031	4SD-031	方形周溝墓	11C-06・07・14～16・23～25	弥生中期	SD-030と同一遺構
(4)	22	SD-032	4SD-032	方形周溝墓	10C-84・94・95、11C-04・05・14・15・25・26・34～36・44	弥生後期	
(4)	22	SD-033	4SD-033	方形周溝墓	11C-07・16・17・24～26・34	弥生中期	
(4)	22	SD-038	4SD-038	方形周溝墓	11C-44・54・55・65	弥生中期	
(5)	23	SD-001	5SD-001	溝状遺構	36S-20・21・31・32・42・52・53	奈良・平安	
(5)	23	SD-002	5SD-002	方形周溝墓？	36R-98、37R-07・08	弥生？	5SD-003と同一遺構
(5)	23	SD-003	5SD-003	方形周溝墓？	36R-55・56・64～66・74～76・84	弥生？	5SD-002と同一遺構
(5)	23	SD-004	5SD-004	溝状遺構	36R-10～12・20～23・31～33	奈良・平安	
	21-3	SH-086	欠番				2SI-025(弥生住居)柱穴
	19	SI-001	SI-001	竪穴住居	25G-00・01・10・11・20・21	弥生後期	
	19	SI-002	SI-002	竪穴住居	24F-78・79・88・89・99、24G-70・80・90	弥生後期	
	19	SI-003	SI-003	竪穴住居	24G-72～74・82～85・92～95、25G-03・04	弥生後期	H27調査7SI-001（欠番）と同遺構
	19	SI-004	SI-004	竪穴住居	25G-19・29、25H-00・10・11・20・21・30	弥生後期	
	19	SI-005	SI-005	竪穴住居	25G-03・12～14・22～25・33	弥生後期	
	19	SI-006	SI-006	竪穴住居	25G-34・35・43～45・53～55・64・65	弥生後期	
	19	SI-007	SI-007	竪穴住居	25G-76～78・85～88・95～98	弥生後期	
	19	SI-008	SI-008	竪穴住居	24G-76・77・85～87・95～98、25G-06	弥生後期	H27調査7SI-002（欠番）と同遺構
	19	SI-009	SI-009	竪穴住居	25G-17・27・28・37・38	弥生後期	
	19	SI-010	SI-010	竪穴住居	30L-49・58・59・68・69・78・79、30H-40・50・60・61・70	弥生後期	
	19	SI-011	SI-011	竪穴住居	30L-55～57・65～67・76・77	弥生後期	
	19	SI-012	SI-012	竪穴住居	30L-17・18・27・28・37・38・47	弥生後期	
	19	SI-013	SI-013	竪穴住居	31J-39・48・49・58・59、31K-40・50	弥生後期	
	19	SI-014	SI-014	竪穴住居	31J-86～88・97・98	弥生後期	
	20	SI-015	SI-015	竪穴住居	23F-36・37・46・47・56・57	弥生後期	
	20	SI-016	SI-016	竪穴住居	22F-96～98、23F-06～08・17・18	弥生後期	
	20	SI-017	SI-017	竪穴住居	22F-63～65・73～75・84・85	弥生後期	
	20	SI-018	SI-018	竪穴住居	22F-13～15・23～25・33・34	弥生後期	
	20	SI-021	SI-021	竪穴住居	21F-62～64・72～74	弥生後期	
	20	SI-026	SI-026	竪穴住居	22F-34～36・44～46・54～56	弥生後期	
	20	SI-027	SI-027	竪穴住居	22F-38・39・48・49、22G-30・40	弥生後期	
	20	SI-030	SI-030	竪穴住居	21G-90～92、22G-00～02	弥生後期	
	20	SI-031	SI-031	竪穴住居	21F-97～99、22F-07～09・17～19	弥生後期	
	20	SI-032	SI-032	竪穴住居	22G-10～12・20～23・30～33・40～42	弥生後期	
	20	SI-034	SI-034	竪穴住居	22G-81・82・90～92、23G-00・02	弥生後期	H22（3）調査SI-029（欠番）と同遺構
	20	SI-035	SI-035	竪穴住居	23F-49・59・69、23G-40・41・50・51・60	弥生後期	H22（3）調査SI-030（欠番）と同遺構
	21-1	SI-036	SI-036B	竪穴住居	6D-25・26	古墳？	
	21-1	SI-037	SI-037	竪穴住居	6D-24～26・34～37・44～47・55・56	弥生中期？	
	21-1	SI-038	SI-038	竪穴住居	7C-72・73・82～84・92～94、8C-02・03	弥生中期	
	21-1	SI-039	SI-039	竪穴住居	7C-92・93、8C-02・03・12・13・22	弥生中期	
	21-2	SI-043	SI-043	竪穴住居	6C-27～29・36～39・46～48	古墳後期	
	21-2	SI-044	SI-044	竪穴住居	6C-08・09・18・19・28・29・39、6D-00～02・10～12・20～22・30・31	弥生中期	
	21-3	SI-001	2SI-001	竪穴住居	24H-23・24・33・34・43・44	弥生後期	
	21-3	SI-002	2SI-002	竪穴住居	24G-49・59、24H-40・41・50・51	弥生後期	
	21-3	SI-003	2SI-003	竪穴住居	24H-57・58・67・68・77・78	弥生後期	
	21-3	SI-004	2SI-004	竪穴住居	24H-64～66・75・76	弥生後期	
	21-3	SI-005	2SI-005	竪穴住居	23H-81～83・91～93、24H-02	弥生後期	
	21-3	SI-006	2SI-006	竪穴住居	23H-83・93・94、24H-03・04	弥生後期	
	21-3	SI-007	2SI-007	竪穴住居	24H-35・44～46・54～56	弥生後期	
	21-3	SI-008	2SI-008	竪穴住居	24H-25・26・35・36・45～47	弥生後期	
	21-3	SI-009	2SI-009	竪穴住居	23H-52・62・72	弥生後期	
	21-3	SI-010	2SI-010	竪穴住居	24G-35～37・45～47・57	弥生後期	
	21-3	SI-011	2SI-011	竪穴住居	23G-82～85・92～95、24G-02～05・13・14	古墳中期	
	21-3	SI-012	2SI-012	竪穴住居	24G-13・14・22～25・32～35・43・44	弥生後期	
	21-3	SI-013	2SI-013	竪穴住居	24G-02・03・12～14・22～24	弥生後期	
	21-3	SI-014	2SI-014	竪穴住居	23G-57・66～68・76～78	弥生後期	
	21-3	SI-016	2SI-016	竪穴住居	23G-88・89、23H-80・81・90・91、24G-09・19、24H-00・01・10	弥生後期	柱穴のみ
	21-3	SI-018	2SI-018	竪穴住居	22G-98・99、23G-08・09	弥生後期	
	21-3	SI-019	2SI-019	竪穴住居	23G-26・27・35～37・46・47	弥生後期	
	21-3	SI-020	2SI-020	竪穴住居	23G-27～29・37～39・47・48	弥生後期	
	21-3	SI-021	2SI-021	竪穴住居	22G-95・96、23G-05～07・15～17	弥生後期	
	21-3	SI-022	2SI-022	竪穴住居	22G-98、23G-07～09・16～18	弥生後期	
	21-3	SI-023	2SI-023	竪穴住居	23G-37・47・48	弥生後期	
	21-3	SI-024	2SI-024	竪穴住居	22G-25・34～36・44～46	弥生後期	

調査次	調査年度	調査時遺構名	報告時遺構名	遺構種別	位置	時代	備考
	21-3	SI-025	2SI-025	竪穴住居	22G-34～36・43～46・54～56・64・65	弥生後期	
(3)	22	SI-026	3SI-026	竪穴住居	23F-99、23G-90、24F-09・19、24G-00	弥生後期	
(3)	22	SI-027	3SI-027	竪穴住居	23G-32・41～43・51～53・61・62	弥生後期	
(3)	22	SI-028	3SI-028	竪穴住居	23G-02・03・11～13・22・23	弥生後期	
(3)	22	SI-029	欠番				SI-034と同遺構
(3)	22	SI-030	欠番				SI-035と同遺構
(4)	22	SI-001	4SI-001	竪穴住居	11D-78・79・87～89・97～99、11E-70～72・80～82・90～92、12E-00～02	弥生後期	
(4)	22	SI-002	4SI-002	竪穴住居	11E-01・11・20・21・30・31	弥生後期	
(4)	22	SI-003	4SI-003	竪穴住居	9C-75・76・84～87・94～97、10C-04～07	弥生中期	
(5)	23	SI-001	5SI-001	竪穴住居	36S-32・40～43・51～53・61～63	平安	
(5)	23	SI-002	5SI-002	竪穴住居	36R-77・86～88・97・98	弥生後期	
(5)	23	SI-003	5SI-003	竪穴住居	36R-85・86・96・97、37R-07	弥生後期	
(5)	23	SI-004	5SI-004	竪穴住居	36R-40～42・50～53・62・63	弥生後期	
(7)	27	7SI-001	欠番				SI-003と同遺構
(7)	27	7SI-002	欠番				SI-008と同遺構
(7)	27	7SI-003	7SI-003	竪穴住居	24H-96～98、25H-07～09・17・18	弥生後期	
(7)	27	7SI-004	7SI-004	竪穴住居	24G-78・88・89	弥生後期	
(7)	27	7SI-005	7SI-005	竪穴住居	24G-66・67・76・77	弥生後期	
(7)	27	7SI-006	7SI-006	竪穴住居	24G-75・76・85・86・95	弥生億期	
	19	SK-002	SK-002	土坑	27J-44・54・55・64	弥生後期	
	19	SK-003	SK-003	土坑	27J-34・44	弥生後期	
	19	SK-005	SK-005	土坑	30K-91～93、31K-01～03	弥生後期	SS-005の主体部
	19	SK-006	SK-006	陥穴	30K-51・61・62	縄文	
	19	SK-007	SK-007	土坑	25I-93・94、26I-03・04	弥生後期	SS-002の主体部
	20	SK-068	SK-068	陥穴	19F-53・54	縄文	
	20	SK-071	SK-071	土坑	19F-63・64・73・74・75	縄文	
	21-1	SK-097	SK-097	土坑	6C-50・51	弥生中期	SS-006の主体部？
	21-1	SK-098	SK-098	土坑	6C-40・41・50	弥生中期	SS-006の主体部？
	21-1	SK-101	SK-101	土坑	6C-70・71・80・81	弥生中期	SS-006の主体部？
	21-2	SK-121	欠番				SS-006の周溝
	21-3	SK-001	2SK-001	陥穴	24H-02・12	縄文	
	21-3	SK-003	2SK-003	土坑	24G-04・05・14・15	古墳	
	21-3	SK-007	2SK-007	土坑	24H-45・55	縄文	
(4)	22	SK-052	4SK-052	陥穴	10E-90	縄文	
(4)	22	SK-083	4SK-083	陥穴	10C-76・86・87	縄文	
(5)	23	SK-001	5SK-001	土坑	36R-97、37R-07	弥生後期	方形周溝墓の周溝の可能性有
(5)	23	SK-002	5SK-002	土坑	36R-75・76・85・86	弥生後期	
(5)	23	SK-003	5SK-003	土坑	36R-76・77・86・87	弥生後期	方形周溝墓の周溝の可能性有
(5)	23	SK-004	5SK-004	土坑	36R-65・66・75・76	弥生後期	
(5)	23	SK-005	5SK-005	土坑	36R-66	弥生後期	方形周溝墓の周溝の可能性有
(5)	23	SK-006	5SK-006	土坑	36R-34・44	弥生後期	方形周溝墓の周溝の可能性有
(5)	23	SK-007	5SK-007	土坑	36R-53・63・64	弥生後期	
(5)	23	SK-008	5SK-008	土坑	36R-21・31・32	弥生後期	
(6)	24	SK-005	欠番				位置不明
(6)	24	SK-036	欠番				位置不明
(7)	27	7SK-001	7SK-001	陥穴	24H-83・84・93・94	縄文	
(7)	27	7SK-002	7SK-002	土坑	25H-19、25I-10・20	弥生後期	SS-003の主体部
	19	SS-001	SS-001	方形周溝墓	25H-88・89・97～99、25I-80・90、26H-06～09・16～19・27～29、26I-00・01・10・11・20	弥生後期	
	19	SS-002	SS-002	方形周溝墓	25I-62～64・71～75・81～85・90～96、26I-00～07・11～17・22～26・32～34	弥生後期	SK-007が主体部
	19	SS-003	SS-003	方形周溝墓	25H-09・18・19・28・29・38・39・49・59、25I-20・30・31・40・41・50・51・60～62	弥生後期	7SK-002が主体部、H27調査7SS-001（欠番）と同遺構
	19	SS-004	SS-004	方形周溝墓	29L-32・42・52・62	弥生後期	S63君津郡市調査3号方形周溝墓と同遺構
	19	SS-005	SS-005	方形周溝墓	30K-71～72・80～82・90～93、31K-00～03・10～13・21・22	弥生後期	SK-005が主体部、S63君津郡市調査4号方形周溝墓と同遺構
	21-1	SS-001	SS-006	方形周溝墓	6C-01～03・10～16・20～26・30～37・40～48・50～58・60～68・70～78・80～88・90～97、7C-01～05・11～13	弥生中期	SK-097・098・101が主体部、H21-1 SS-002（欠番）・H21-2 SS-004（欠番）と同遺構
	21-1	SS-002	欠番				SS-006の周溝
	21-1	SS-002a	SS-007	方形周溝墓	7C-34・44・45・54・55・65	弥生中期	
	21-2	SS-003	SS-008	方形周溝墓	6C-89・97～99、6D-80・90、7C-07・08	弥生中期	
	21-2	SS-004	欠番				SS-006の周溝
(7)	H27	7SS-001	欠番				SS-003と同遺構

第２章　検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された縄文時代～平安時代までの遺構について、遺構種別記号ごとに調査年度順に掲載した表が第１表で、全体の遺構配置図が第５図～第９図である。本書では時代順に節を設け、遺構の種類ごとに原則的に第１表の順番で報告していくこととし、遺構外出土遺物は、各節の最後にまとめて報告する。なお、第１表で番号の抜けているものは中･近世の遺構であり（中･近世編に所収済み）、表中に「欠番」とあるのは調査が複数年に及び、遺構番号が重複するもの等である。

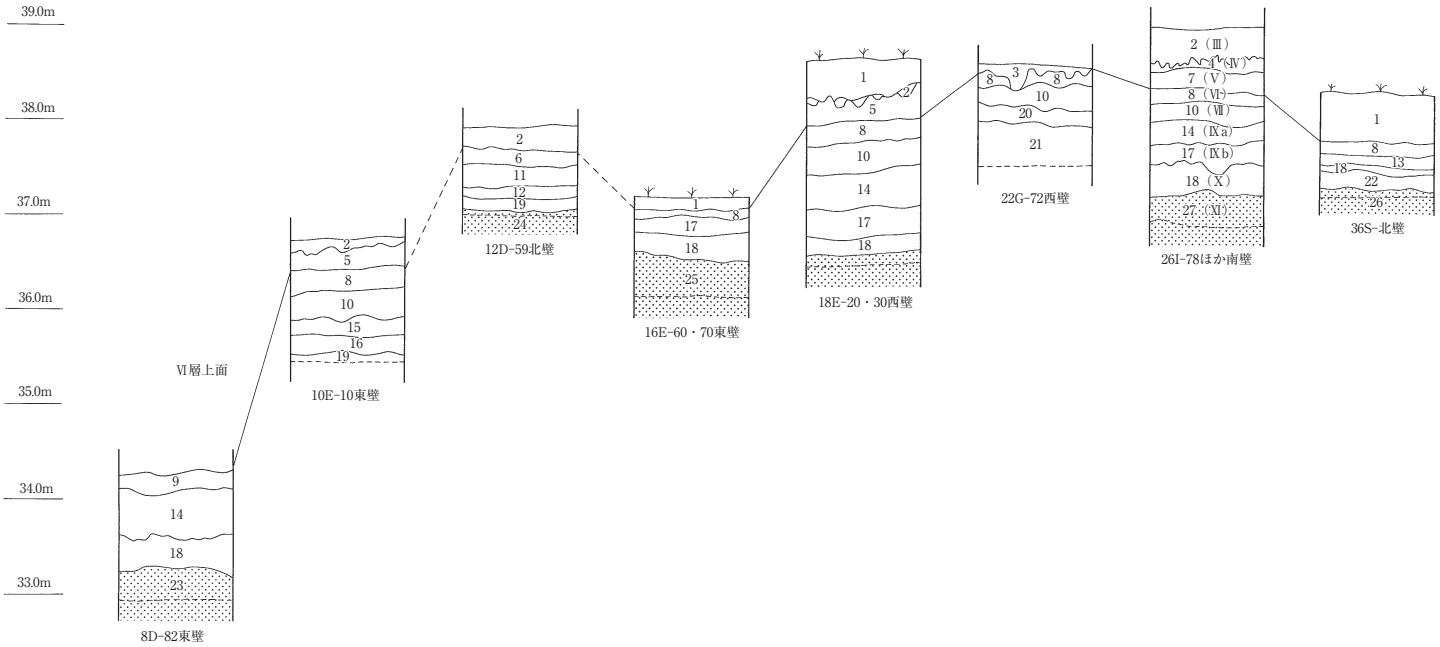
第１節　旧石器時代

今回報告する調査区では、全体的に下層確認グリッドを入れて調査を行ったが、石器が出土したのは平成19年度調査区内の３地点のみで、うち２地点は単独出土であった。出土層位は、土層断面図に対応させると、立川ローム層のⅤ層～Ⅶ層と考えられる。

１　基本層序（第10図）

調査区の長さは約950mに及び、調査区内の地点によって土層の堆積状況は異なっている。標準的な立川ローム層の堆積状況が確認できない地点もあり、確認できても耕作によりハードローム層まで撹乱されている地点もある。地形は概して北へ行くほど標高が低くなるが、その間にも谷が入るなどして部分的に低い場所があり、水浸りにより粘土化したロームが見られる地点もある。なお、平成23年度調査区より南東側では、ローム層は確認できなかった。

調査が多年にわたることから、調査担当者によって見解が若干異なるところもあるが、ここでは調査区



第10図　基本層序

を網羅するように８地点の土層を取り上げ、１層～27層の通し番号を付して、なるべく統一した見解で見ることとする。

土層を掲載した地点は、北から8D-82グリッド（平成21年度-1・2調査区）、10E-10グリッド・12D-59グリッド・16E-60・70グリッド・18E-20・30グリッド（平成22年度（4）調査区）、22G-72グリッド（平成22年度（3）調査区）、26I-78グリッドほか（平成19年度調査区）、36S-93グリッド（平成23年度（5）調査区）の８地点である。これら８地点のうち、最も標準的と言える土層は、26I-78グリッドほかである。立川ローム層Ⅲ層～Ⅹ層までの堆積が確認でき、この周辺を中心に石器も出土した。

第10図中のアラビア数字は土層の通し番号で、説明は以下のとおりである。また、26I-78グリッドほかの土層中、アラビア数字横のカッコ内ローマ数字は、相当すると考えられる立川ローム層である。なお、網掛けした部分は、立川ローム層ではないと判断される土層である。

１層（黒褐色土層）　表土層。36S-93グリッドではⅢ層～Ⅴ層が削られて消滅していた。

２層（黄褐色土層）　立川ロームⅢ層（ソフトローム）に相当するが、18E-20・30グリッドにおいてはⅣ層も一部取り込まれていた。

３層（明褐色土層）　22G-72グリッドで見られるソフトローム層で、立川ロームⅢ層～Ⅴ層に相当する層と考えられる。

４層（明褐色土層）　橙色スコリアを少し含む。クラックが入る。立川ロームⅣ層(ハードローム最上層)に相当する。

５層（明黄褐色土層）ハードローム層で、赤色・青色スコリアを含む。立川ロームⅣ層～Ⅴ層に相当すると考えられるが、明確に区別できない。

６層（暗褐色土層）　12D-59グリッドで見られる層で、堆積はやや疎、粘性がある。立川ロームⅣ層～Ⅵ層に相当すると考えられる。いわゆる水つきロームである。

７層（暗黄褐色土層）立川ロームⅤ層（第１黒色帯）に相当する。スコリアを含む。

８層（明黄褐色土層）ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）を少し包含する。立川ロームⅥ層に相当する。

９層（黄褐色土層）　8D-82グリッドで見られる層で、立川ロームⅥ層～Ⅶ層に相当すると考えられるが、境界は不鮮明である。

10層（明黄褐色土層）赤色スコリアを含む。立川ロームⅦ層に相当する。

11層（暗褐色土層）　12D-59グリッドで見られる層で、赤色スコリアを僅かに含む。堆積は密で、粘性がある。立川ロームⅦ層～Ⅸ層に相当すると考えられる。いわゆる水つきロームである。

12層（暗褐色土層）　12D-59グリッドで見られる層で、赤色スコリアをやや多く含む。堆積は密で堅く、粘性がある。立川ロームⅦ層～Ⅸ層に相当すると考えられる。いわゆる水つきロームである。

13層（暗黄褐色土層）36S-93グリッドで見られる層で、赤色スコリアを多く、黒色スコリアを少し含む。立川ロームⅦ層又はⅩ層に相当すると考えられる。

14層（暗褐色土層）　スコリアを少し含む。立川ロームⅨa層に相当すると考えられる。

15層（暗褐色土層）　10E-10グリッドで見られる層で、立川ロームⅨa層に相当すると考えられるが、や

や柔らかい。いわゆる水つきロームである。

16層（暗褐色土層）　10E-10 グリッドで見られる層で、立川ロームⅨc層に相当すると考えられるが、15層よりも堅く色調が暗い。いわゆる水つきロームである。

17層（暗黄褐色土層）赤色スコリアを含む。立川ロームⅨc層に相当する。

18層（暗褐色土層）　赤色スコリアを少し含む。しまり、粘質がある。立川ロームⅩ層に相当すると考えられる。

19層（暗褐色土層）　堆積は密で堅く、粘性がある。赤色スコリアを少し含む。いわゆる水つきロームである。

20層（明褐色土層）　22G-72グリッドで見られる層で、水を含み、粘土質。いわゆる水つきロームである。

21層（明赤褐色土層）22G-72グリッドで見られる層で、水をかなり含み、粘土質。いわゆる水つきローム。

22層（暗黄褐色土層）36S-93グリッドで見られる層で、粒子が粗く、粘性が強い。いわゆる水つきロームのようである。スコリアはあまり含んでいない。

23層（暗黄褐色土層）8D-82グリッドで見られる層で、武蔵野ローム最上部層と考えられる。

24層（暗黄褐色土層）12D-59グリッドで見られる層で、堆積は密で堅く、粘性がある。立川ロームではない。

25層（暗褐色土層）　16E-60・70グリッドで見られる層で、堆積はやや疎、粘性は強い。

26層（暗黄褐色土層）36S-93グリッドで見られる層で、堆積は密で、粘性は強い。立川ロームではない。

27層（灰褐色土層）　粘性がある。脆い。

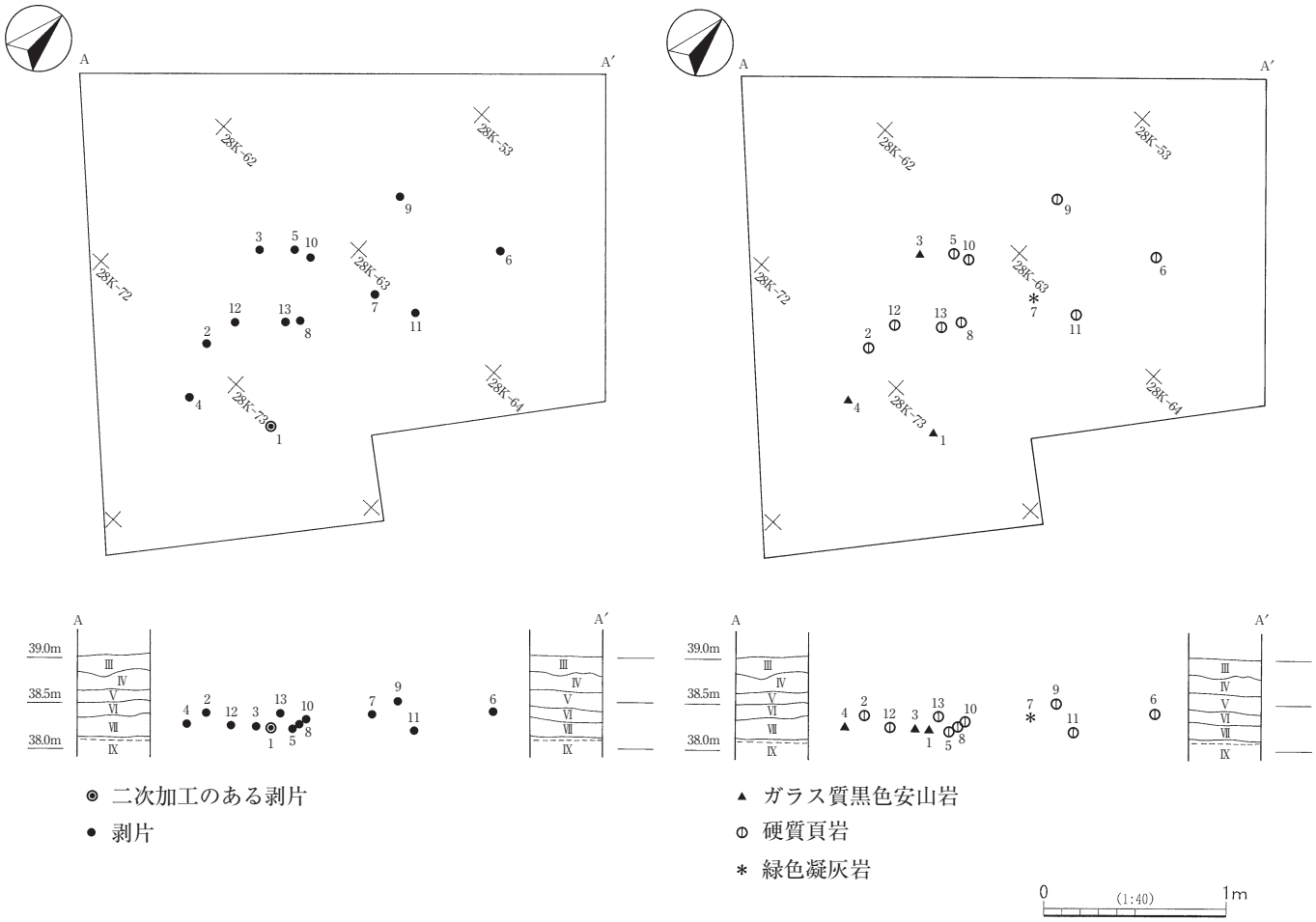
２　石器集中地点

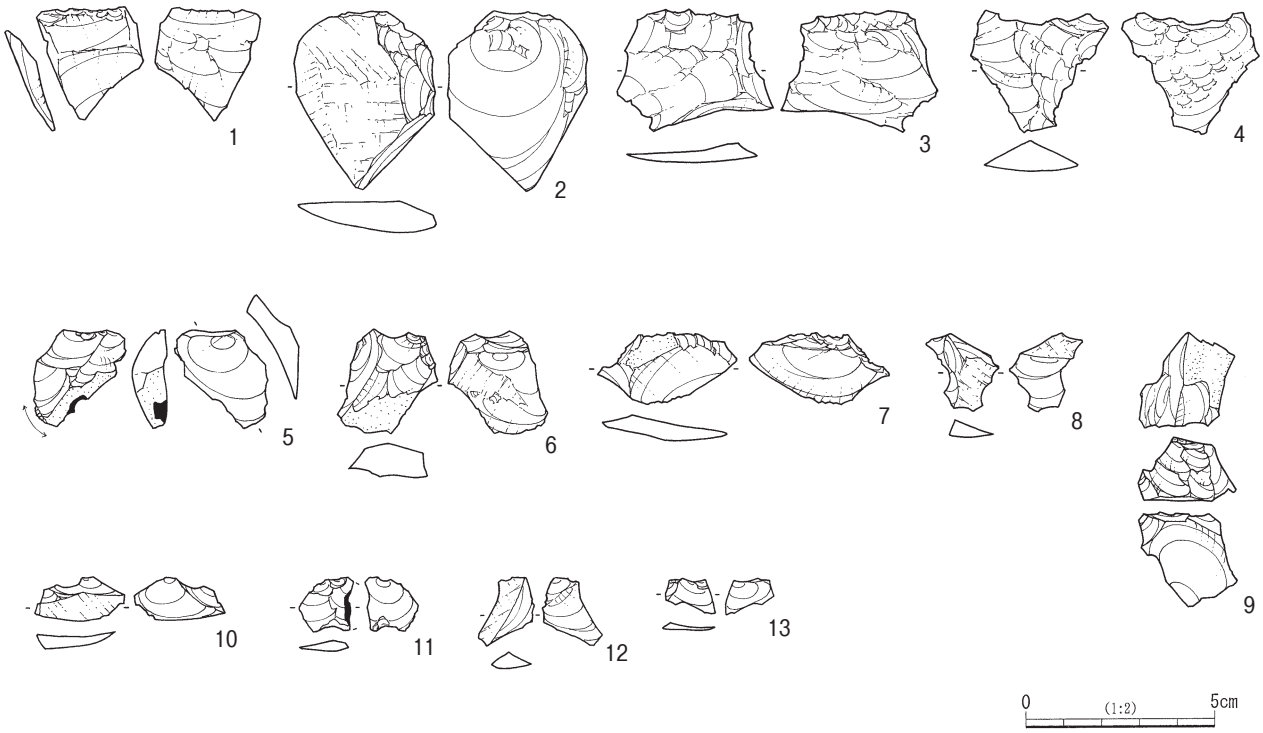
今回の調査区内で確認された石器出土地点は、平成19年度調査区内のみとなっている。25G-24グリッド、25H-79グリッド、28K-62グリッドほかの３地点であり、いずれの調査区内でもローム層が安定的に堆積しているとみられる場所である。但し、３地点のうち、少数ではあるが石器がまとまって出土したのは28K-62グリッドほかの１地点のみである。25G-24グリッドは、剥片が１点のみ出土した。25H-79グリッドは、調査段階では２点が取り上げられたが、１点はガラス質黒色安山岩製の台形様石器でもう１点は石器ではなくチャートの小礫であったため、台形様石器の単独出土と言える。ここでは28K-62グリッドほかの１地点のみを扱うこととし、単独出土の剥片と台形様石器は、上層調査で出土した旧石器とともに別項に掲載することとする。

28K-62グリッドほか（第11図、図版３・18）

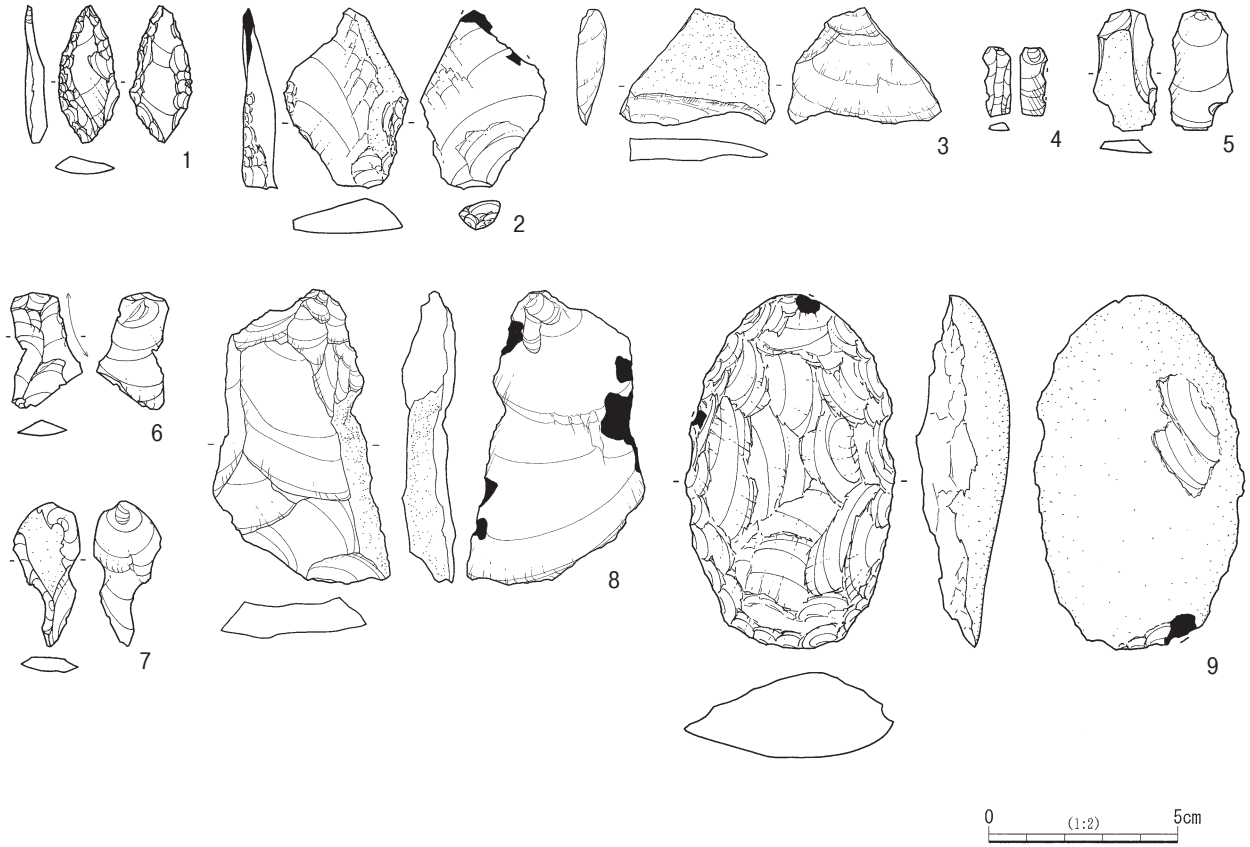
13点の石器が出土した。ガラス質黒色安山岩の二次加工のある剥片が１点あるほかは全て剥片で、石材はガラス質黒色安山岩、硬質頁岩、緑色凝灰岩であるが、主体は硬質頁岩である。出土層位は、土層断面図に対応させれば、いずれもⅤ層～Ⅶ層と考えられる。

１は二次加工のある剥片で、図正面上部に加工痕が見られる。石材はガラス質黒色安山岩である。２～13は剥片で、石材は２・５・６・８～13は硬質頁岩、３・４はガラス質黒色安山岩、７は緑色凝灰岩である。５は図正面下端付近に微細な剥離痕が観察される。





第11図　石器集中地点（28K-62グリッドほか）



第12図　単独出土石器

３　単独出土石器（第12図、図版18）

１～９は２・６を除いて上層調査時に出土した旧石器である。それぞれの出土場所は第３表に示した。

１は珪質頁岩製の小型尖頭器である。２はガラス質黒色安山岩製の台形様石器である。平成19年度の下層確認調査の際に25H-79グリッドから出土し、Ⅸ層一括として取り上げられたものである。３は二次加工のある剥片で、ガラス質黒色安山岩製である。４～８は剥片で、石材は４が黒曜石、５が流紋岩、６がガラス質黒色安山岩、７・８がチャートである。４は下端が折損している。６は左側縁に微細な剥離痕が観察される。平成19年度の下層確認調査の際に25G-24グリッドから出土した。出土層位は、立川ローム層のⅦ層と考えられる。８は今回出土した中では最大の剥片である。石材は頁岩の可能性もある。９はホルンフェルス製の打製石斧である。礫素材で、図背面はほとんど原礫面のままとなっている。

第２節　縄文時代

縄文時代の所産と考えられる遺構は、陥穴６基、土坑２基が検出されたのみである。遺物も、遺構から出土したものは極めて少なく、遺構外からも少量しか出土していない。縄文時代の遺構・遺物について、まずは遺構別に掲載し、その後、遺構外から出土した遺物をまとめて掲載する。

１　陥穴

SK-006（第13図、図版４）

30K-51・61・62グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構SD-005の壁面に、ほぼ同じ軸方向で検出された遺構で、平面形は長軸238cm、短軸38cmの溝状を呈する。断面形は薬研状をなし、底面はほぼ平坦で幅は８cmと非常に狭くなっている。北側がやや深くなり、検出面からの深さは116cmである。遺構の形状から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

SK-068（第14図、図版４）

19F-53・54グリッドに所在する。中・近世の土坑SK-067の壁面で検出された遺構で、平面形は長軸187cm、短軸87cmの長楕円形を呈する。断面形は箱形をなし、底面はほぼ平坦で幅は38cm、検出面から底面までの深さは76cmである。底面中央部にピットが２か所あり、ピットの深さは底面から24cmと25cmである。遺構の形状から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

2SK-001（第15図、図版４）

24H-02・12グリッドに所在する。平面形は、長軸209cm、短軸88cmのややいびつな楕円形を呈する。断面形は漏斗状をなし、底面はほぼ平坦で幅は38cm、検出面からの深さは153cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、下部に行くにしたがってローム粒を多く含む暗黄褐色土となる。遺構の形状や覆土の堆積状況から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

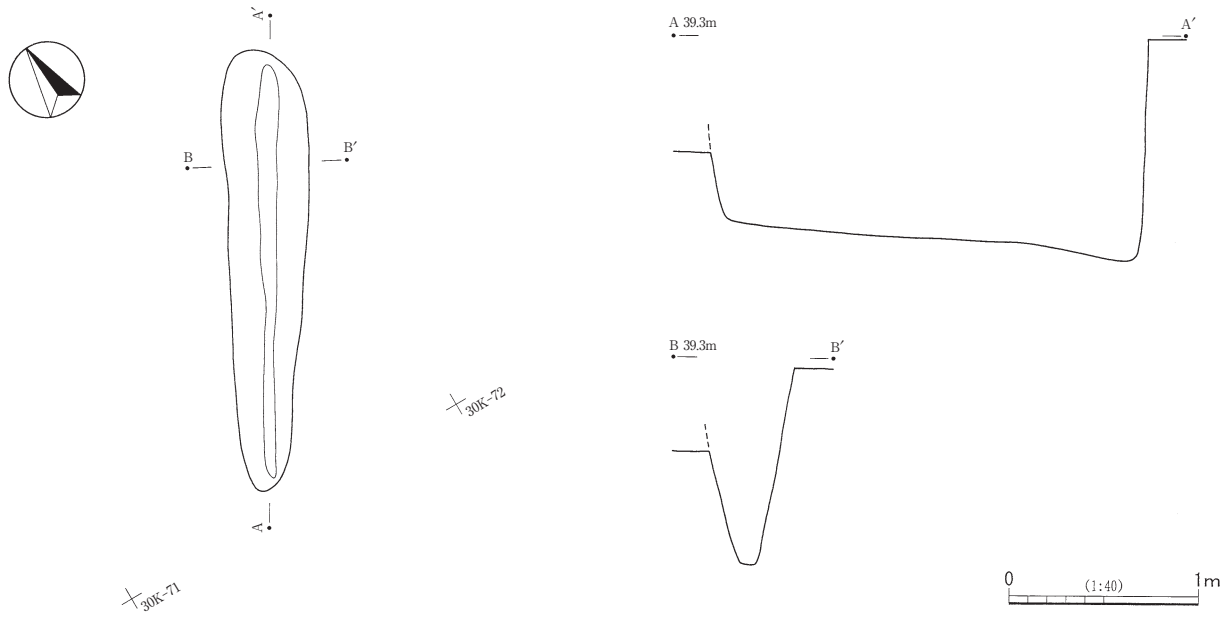
4SK-052（第16図、図版４）

10E-90グリッドに所在する。平面形は、長軸147cm、短軸98cmの楕円形を呈する。断面形は漏斗状をなし、底面はほぼ平坦で幅は27cm、検出面からの深さは88cmである。覆土はローム粒を多量に含む黄褐色土が主体となる。周囲は中･近世の遺構の集中地点であるが、遺構の形状や覆土の堆積状況から陥穴と判断した。

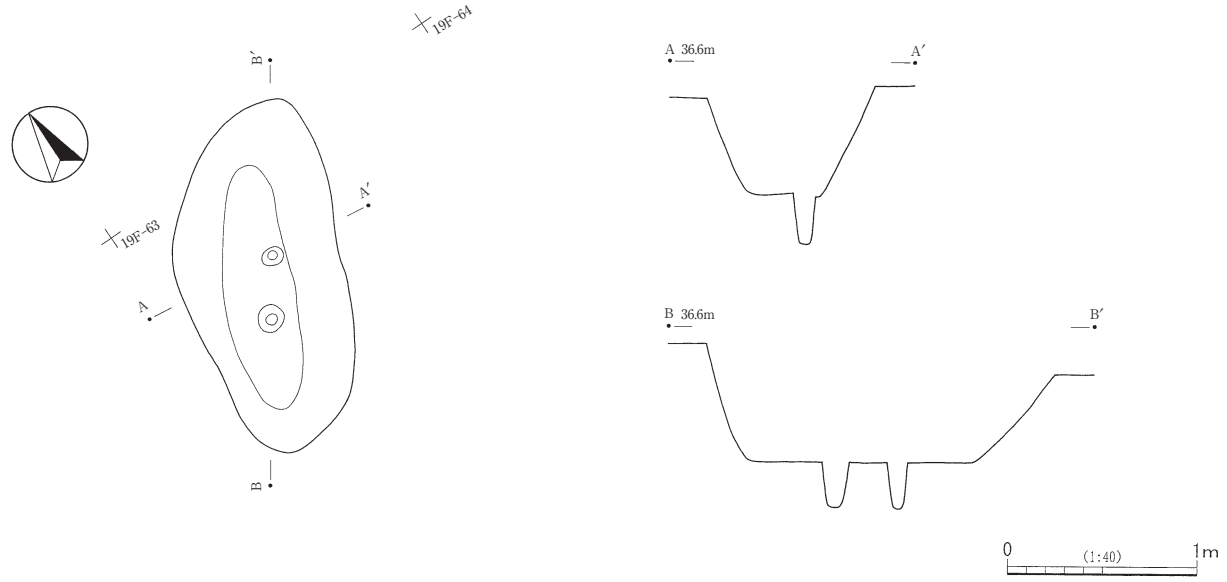
遺物は出土していない。

4SK-083（第17図、図版４）

10C-76・86・87グリッドに所在する。方形周溝墓4SD-030と重複して検出された遺構で、平面形は長軸250cm、短軸118cmの楕円形を呈する。断面形は薬研状で、底面は長軸方向に段状をなし、北西方向が南東方向よりも深い。最も深い部分で検出面からの深さは140cmで、幅は狭いところで12cmを測る。覆土はロー



第13図　SK-006



第14図　SK-068

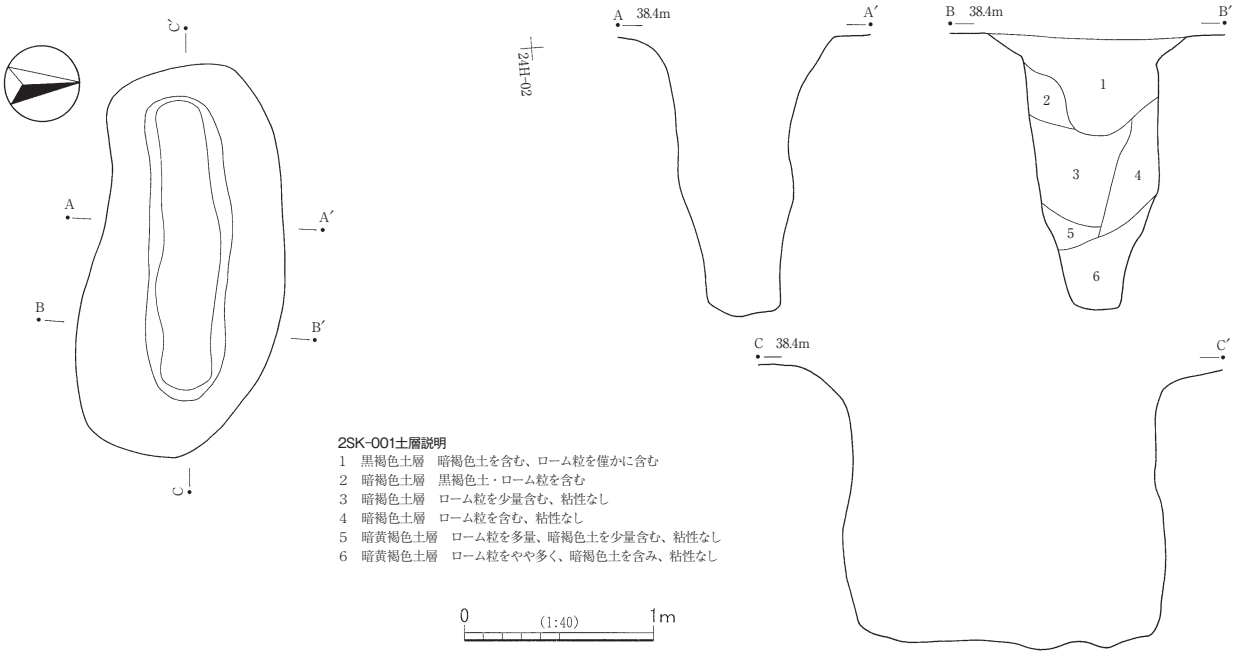
ム粒を含む暗褐色土が主体である。遺構の形状や覆土の堆積状況から陥穴と判断した。

遺物は方形周溝墓からの混入品とみられる弥生土器細片が少量出土したが、図示した遺物はない。

7SK-001（第18図、図版４）

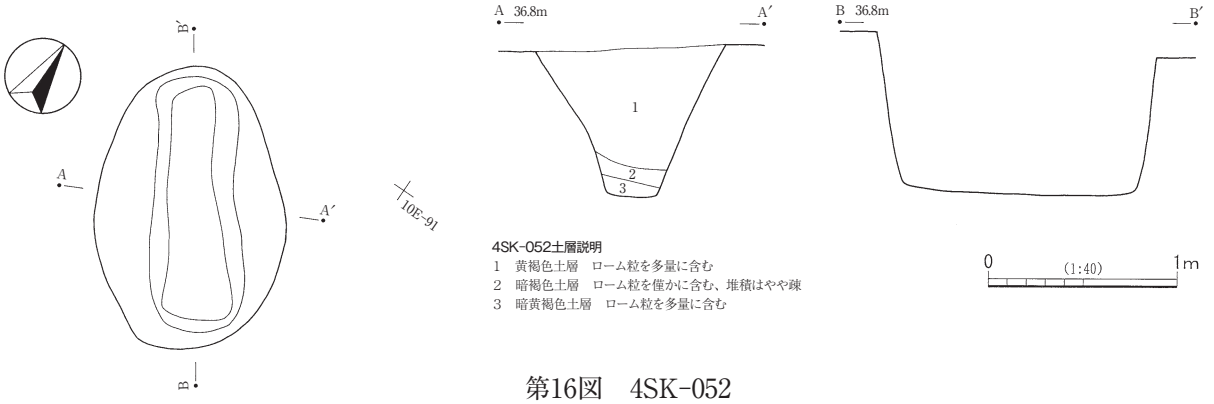
24H-83・84・93・94グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構7SD-009と重複して検出された遺構で、平面形は長軸215cm、短軸102cmの楕円形を呈する。断面形はV字形をなし、底面はほぼ平坦で幅は12cmと狭く、検出面からの深さは114cmである。覆土はロームブロックを含む黒褐色土・褐色土が主体である。遺構の形状や覆土の堆積状況から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。



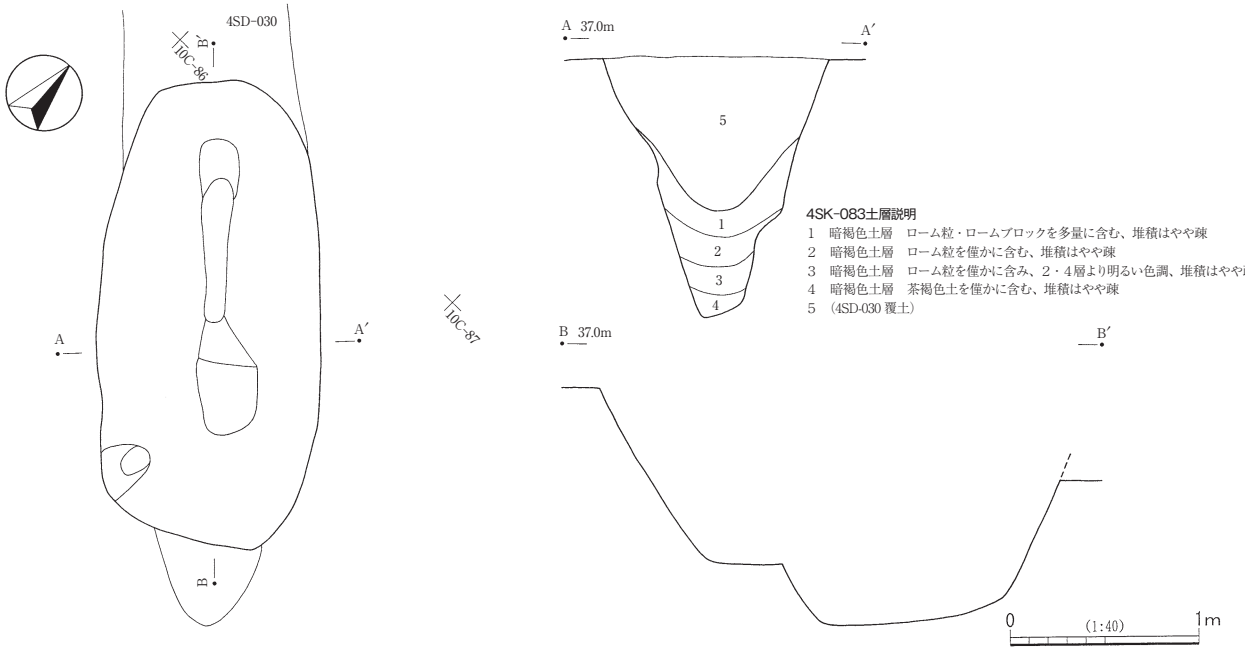
2SK-001土層説明
1　黒褐色土層　暗褐色土を含む、ローム粒を僅かに含む
2　暗褐色土層　黒褐色土・ローム粒を含む
3　暗褐色土層　ローム粒を少量含む、粘性なし
4　暗褐色土層　ローム粒を含む、粘性なし
5　暗黄褐色土層　ローム粒を多量、暗褐色土を少量含む、粘性なし
6　暗黄褐色土層　ローム粒をやや多く、暗褐色土を含み、粘性なし

第15図　2SK-001



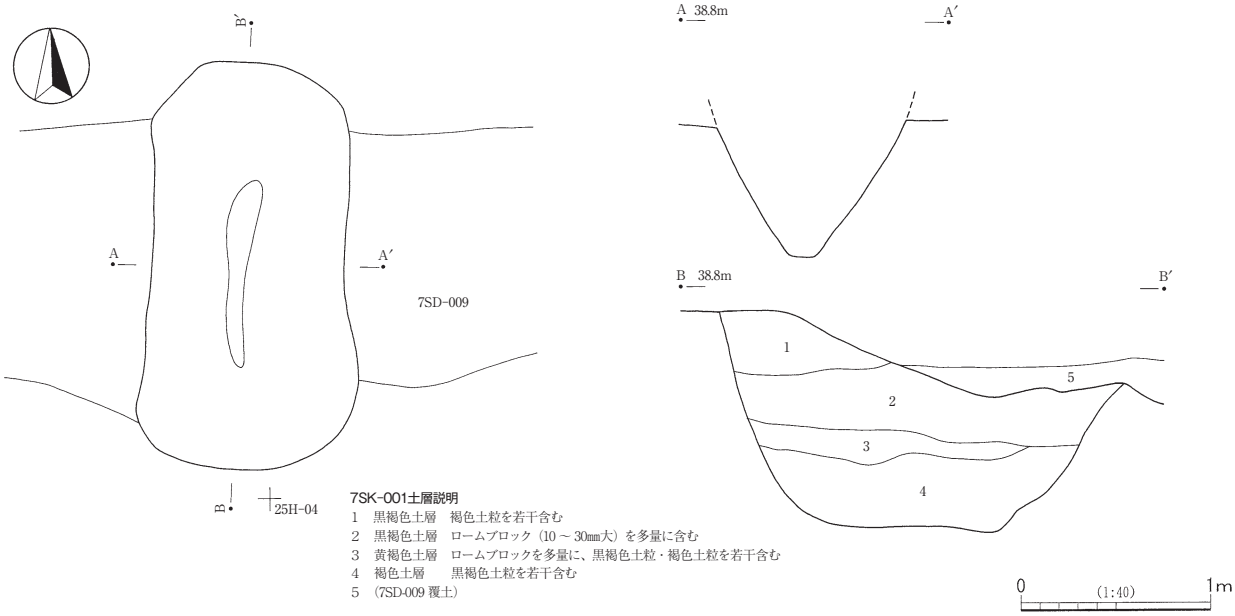
4SK-052土層説明
1　黄褐色土層　ローム粒を多量に含む
2　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎
3　暗黄褐色土層　ローム粒を多量に含む

第16図　4SK-052



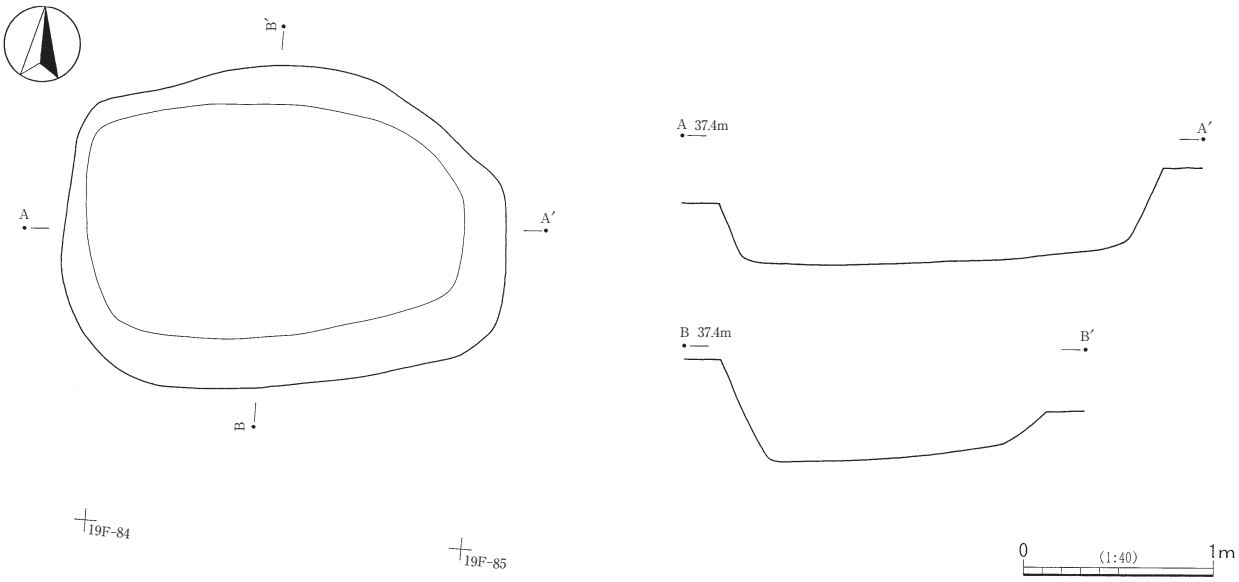
4SK-083土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多量に含む、堆積はやや疎
2　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎
3　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含み、2・4層より明るい色調、堆積はやや疎
4　暗褐色土層　茶褐色土を僅かに含む、堆積はやや疎
5　(4SD-030 覆土)

第17図　4SK-083

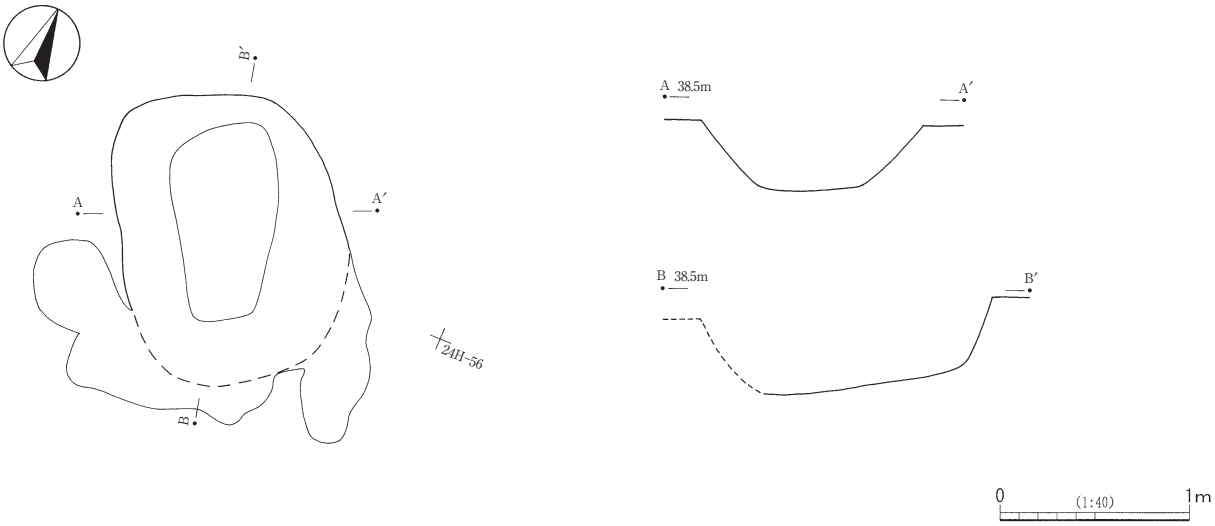


7SK-001土層説明
1　黒褐色土層　褐色土粒を若干含む
2　黒褐色土層　ロームブロック（10～30㎜大）を多量に含む
3　黄褐色土層　ロームブロックを多量に、黒褐色土粒・褐色土粒を若干含む
4　褐色土層　　黒褐色土粒を若干含む
5　（7SD-009 覆土）

第18図　7SK-001



第19図　SK-071



第20図　2SK-007

２　土坑

SK-071（第19図、図版４）

19F-63・64・73・74・75グリッドに所在する。中・近世の遺構が集中する場所に位置するため中・近世の土坑である可能性もあるが、陥穴SK-068に隣接していること、僅かに出土した遺物から、縄文時代の土坑と判断した。平面形は、長軸235cm、短軸270cmの不整楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは62cmである。

遺物は縄文早期土器片が僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

2SK-007（第20図、図版４）

24H-45・55グリッドに所在する。弥生時代の竪穴住居跡2SI-007の貼床を剥がしたところ、撹乱とともに検出された土坑である。時期ははっきりしないが、2SI-007より古いことは明らかであり、便宜的にここに掲載した。平面形は、復元長軸150cm、短軸114cmの隅丸方形を呈し、断面形は皿状をしている。底面はほぼ平坦であるが南側に向かってやや下がっており、最も深い部分で、検出面すなわち2SI-007の床面から43cmの深さである。覆土は大きく２層に分層でき、下層にはローム粒と暗褐色土を含む暗黄褐色土が、上層にはローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

３　遺構外出土遺物

ここでは、後代の遺構覆土や表採など、該期の遺構ではない場所から出土した縄文時代の遺物について掲載する。それぞれの出土場所は、第４表及び第５表に示した。

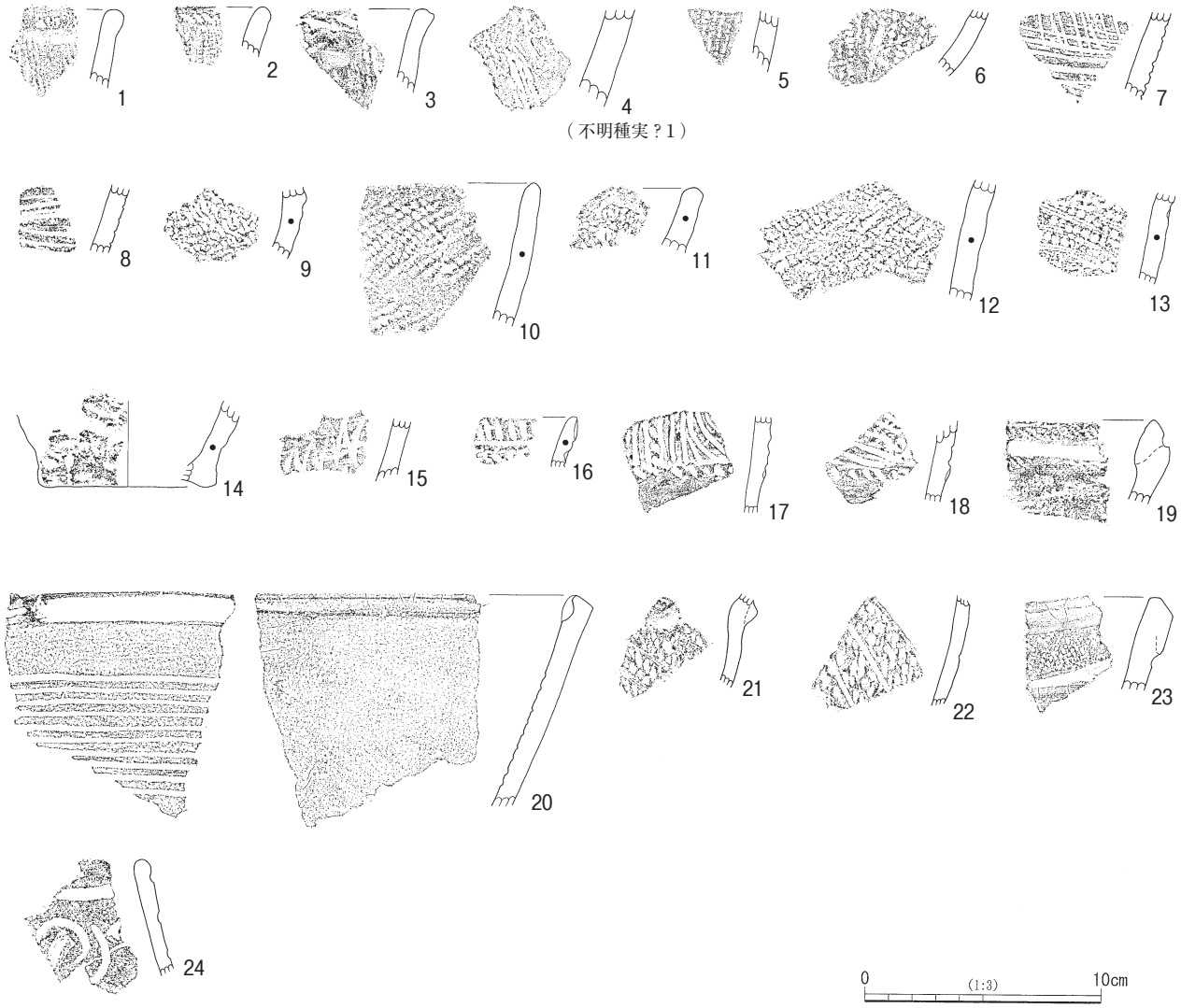
（１）縄文土器（第21図、図版20）

縄文土器は極めて少量しか出土しておらず、掲載したもの以外は僅かしかない。１～８は縄文時代早期、９～16は前期、17～22は後期、23・24は晩期に比定されるものと考えられる。

１～６は撚糸文系土器である。１～３は口縁部破片である。１は器面が摩耗しているが、細かいＲ撚糸文が口縁部まで施文されている。２は口唇部にＲＬ単節縄文、胴部にＬ撚糸文が施される。口唇の頂部はやや尖り、内面側へもやや稜をもって折れる。３は口唇部に刻み状のものが施され、胴部には条間の開いた撚糸文が施文されている。４～６は胴部破片である。４は粗い節のＲ撚糸文が施文されている。器厚が厚く、断面には不明種実の圧痕が１点見つかった。５はＬ撚糸文が見られる。外面にススが付着している。６は丸底となる底部に近い部分と考えられ、粒の大きな撚糸文がまばらに見られる。

７・８は沈線文系土器である。７は格子状に交差する沈線が見られる。横方向の後に縦方向の沈線が施される。８は横走する平行沈線が施文されている。

９～14は胎土に繊維を含む土器で、黒浜式と考えられる。９はループ文と羽状縄文が見られる。10は口縁部の破片で、羽状縄文のみが施文されている。11は波状となる口縁部の破片と考えられる。小破片ではっきりしないが、縄文が施文されている。12は縄文が施文されている胴部破片である。13も胴部破片で、付加縄文が施文され、破片上部には爪形文が見られる。14は上げ底となる底部の破片で、遺存度は10％程度である。復元底径は7.4cmである。内外面とも無文とみられる。



第21図　遺構外出土縄文土器

15は浮島式に比定される土器の胴部破片で、貝殻腹縁文が施文されている。腹縁は平滑な種類の貝による。16は口縁部の破片である。口唇部はやや内そぎぎみとなっており、外面には爪形文が見られる。胎土に若干の繊維を含む。浮島Ⅱ式以降に比定されると考えられる。

17は刻みの施された隆帯が水平方向と垂直方向に１本ずつ見られ、その間に集合沈線が施されている。18も水平方向に刻みの施された隆帯と、集合沈線とが見られるが、地文には縄文が施文されているようである。17・18は堀之内１式に比定されるものと考えられる。19も堀之内式に比定されると考えられる口縁部破片である。太い沈線が施され、沈線より上の口唇部付近には細かい縄文が見られる。

20は直線的に開く器形の鉢と考えられる。外面は、丁寧に磨かれ無文である。内面もミガキにより仕上げられている。口唇部も丁寧に面取りされ磨かれている。口縁部内面には太い沈線が１条巡り、瘤状の突起が１か所見られる。突起の左側にのみ、細い沈線が加えられている。体部内面には、10本の平行沈線が横走している。非常に焼成が良く色調は明褐色を呈しており、加曽利Ｂ１式に比定されるものと考えられる。21・22は加曽利Ｂ２式の粗製土器の破片と考えられるもので、21は押捺の施された隆帯が僅かに遺存している。いずれも地文には大粒の縄文が施文され、その上から斜め方向に浅い沈線を施している。23は

波状口縁になるとみられる破片である。安行３a式に比定されよう。24は僅かに口唇部の残る破片である。入組文が見られる。安行３c式に比定されるとみられる。

（２）石器（第22・23図、図版18・19）

１は有舌尖頭器の先端部で、縄文時代草創期の所産と考えられる。ガラス質黒色安山岩製である。２は尖頭器の破片と考えられる。背面に原礫面が残る。赤色チャート製である。３・４は石鏃である。３は透明感のある黒曜石製で、完形である。４も透明感のある黒曜石製で、先端と基部を折損している。５も黒曜石製で、上部を折損している。石錐の先端部と考えられる。

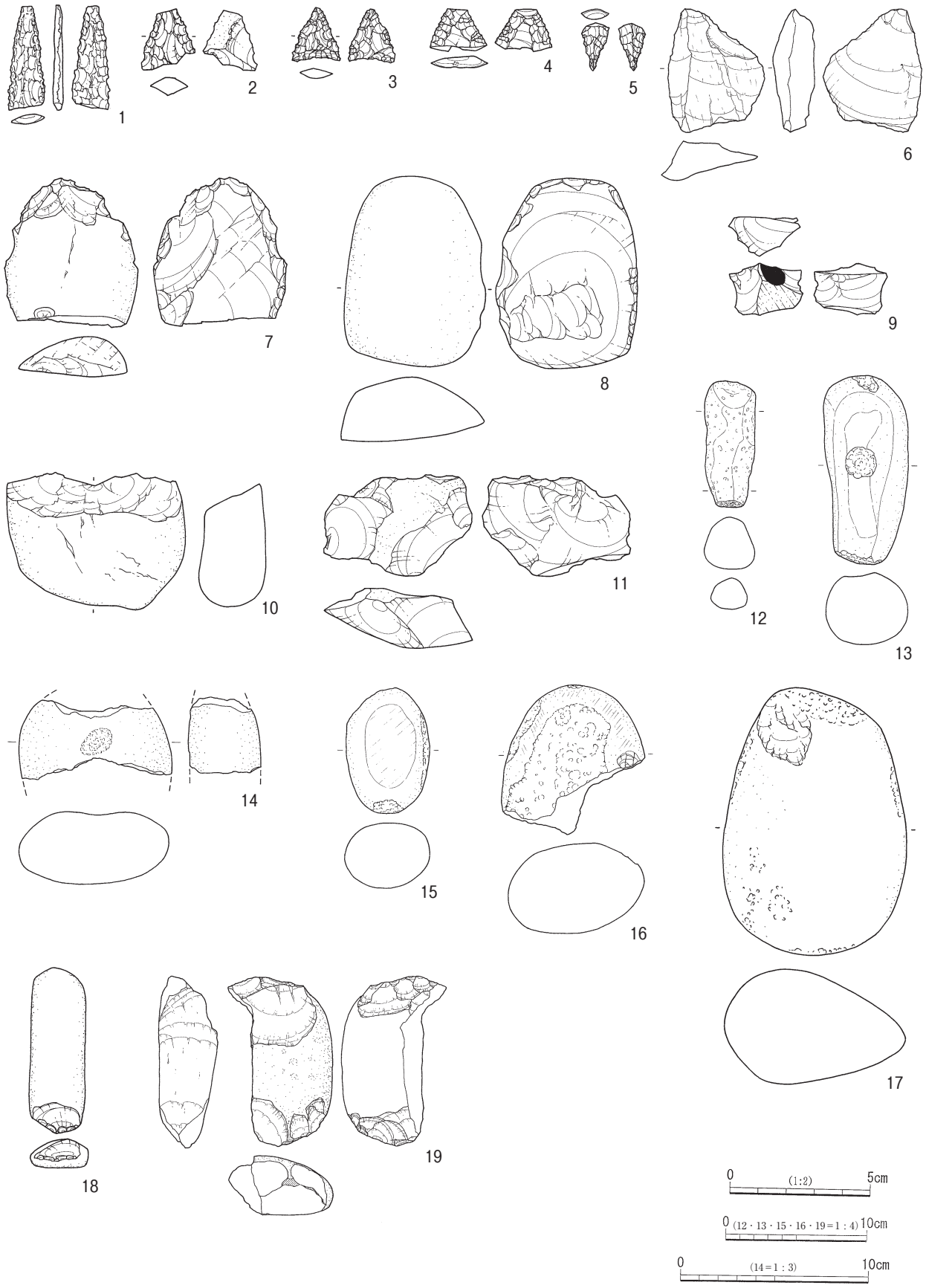
６はチャート製の剥片である。７はチャート製の剥片で二次加工されている。正面・背面の周縁部に加工痕が見られ、下端は節理面で折れている。正面には広く原礫面が残されている。石器の未製品と考えられる。８・９は剥片である。８の正面は原礫面で、背面の周縁部には剥離痕が観察される。ホルンフェルス製である。９は黒曜石製である。10・11はチャート製の石核である。

12は流紋岩製の敲石である。手頃な大きさで握りやすい、細長い形状の礫を素材としている。下端部にのみ敲打痕が見られる。13は石英斑岩製の磨石類で、凹みと敲打痕と摩耗痕を伴う。12よりやや大きいが握りやすい細長い形状の礫を素材としている。敲打痕は下端部に主体的に見られ、上端部にも僅かに見られる。凹みは正面中央部に見られ、その周辺はやや摩耗している。14は安山岩製磨石の破片である。正面中央部に凹みがあり、ほかの部分は摩耗により平滑になっている。やや赤化しており、被熱した可能性がある。15は砂岩製の磨石である。握りやすい大きさの円礫を素材としており、下端と側面に敲打痕が見られる。表面がやや赤化しており、被熱している可能性がある。16は安山岩製の磨石である。敲打痕が正面及び背面、そして縁辺の一部に見られる。敲打痕のある部分以外は摩耗により平滑である。下半部は折損しているが、折れ面も含め全面的に赤化して煤けている部分もあることから、折れた後に被熱したと考えられる。17は石英斑岩製の磨石である。敲打痕･摩耗痕を伴うもので、上下端部を中心に、縁辺部にわたって敲打痕が見られる。正面・背面には摩耗痕が見られる。

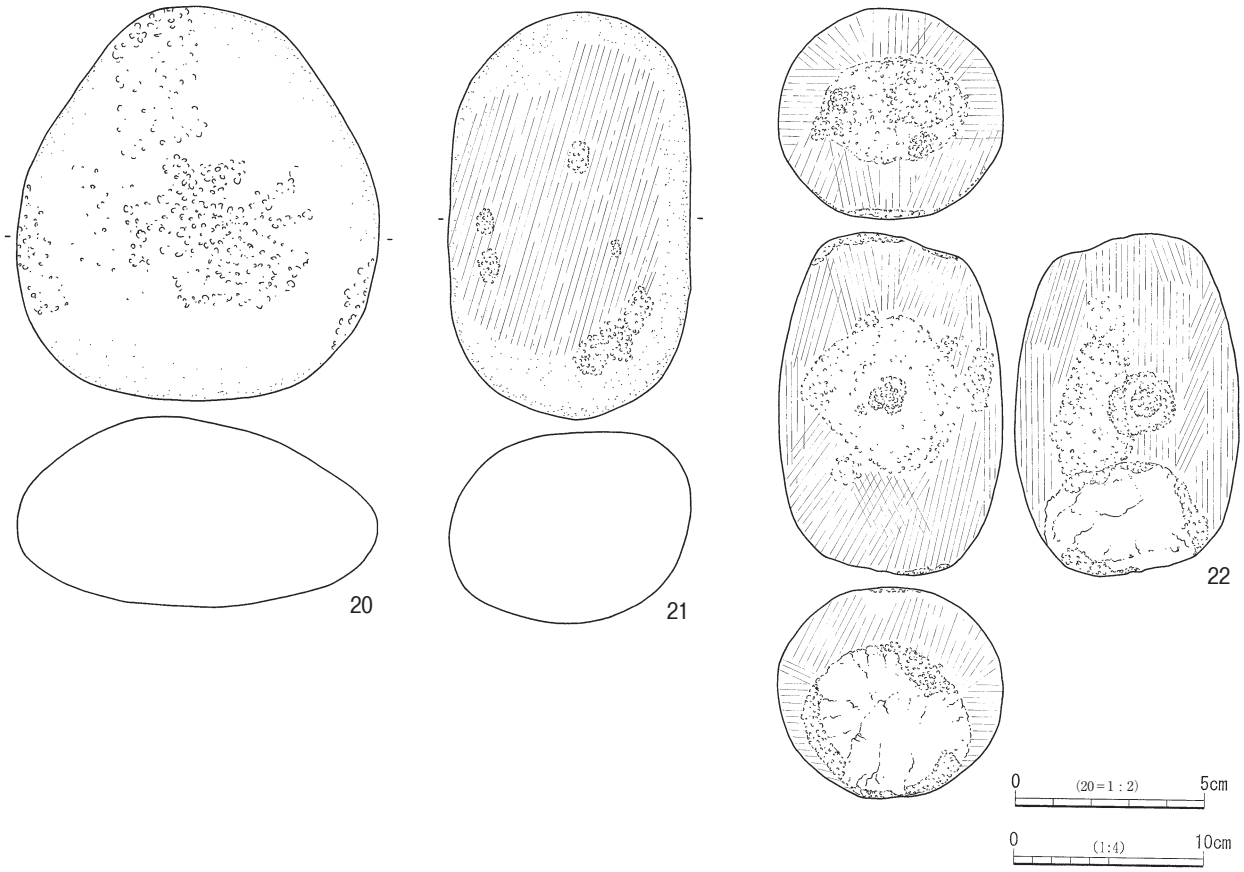
18は二次加工のある礫で、流紋岩製である。正面下端部にのみ、加工痕が見られる。

19は流紋岩製の礫素材の石器で、上下両端から打撃が加えられ、端部はそれぞれ刃部状を呈し、下端部には潰れも見られる（網掛け部分）。左側も使用に伴って折損した可能性があり、クサビやタガネのように使用された可能性が考えられる。便宜的に「楔形石器」としたが、長さは12.0㎝、重量は405gと大型で、栃木県のチャート原産地遺跡である、向山遺跡で出土した「タガネ状石器」に類似している[注1)]。但し､「タガネ状石器」の特徴の一つとされる階段状の剥離痕は観察されず、文脇遺跡近くに石切場等の石材加工遺跡もないことから、それとも異なる石器と思われる。

20は砂岩製の台石である。正面・背面のそれぞれ中央部を中心に敲打痕が観察される。21は石英斑岩製で、全面的に平滑で擦痕が観察されるが、部分的に敲打痕も見られる。台石と考えられる。22は石英閃緑岩製で、台石と考えられる。全面的に非常に平滑で、正面と背面の中央部にそれぞれ凹みがある。下端は折れ面で、縁辺に若干の敲打痕が見られる。表面はやや赤化しており、被熱している可能性がある。



第22図　遺構外出土縄文時代石器（1）



第23図　遺構外出土縄文時代石器（２）

第３節　弥生時代

本遺跡において一つの画期となる時代が弥生時代中期～後期である。但し、弥生時代後期終末と古墳時代前期初頭との区分が必ずしも明確にできないため、これまでの報告書と同様、弥生時代後期としてまとめて報告することとする。検出された遺構は、竪穴住居跡65軒、方形周溝墓15基、土坑10基（方形周溝墓の主体部除く）である。これら遺構についてまず掲載し、その後、遺構外から出土した遺物をまとめて掲載する。

１　竪穴住居跡

竪穴住居跡は65軒検出された。このうち、弥生時代中期の所産と考えられるものはSI-038、SI-039、SI-044、4SI-003の４軒で、SI-037も周辺の状況から、弥生時代中期の可能性がある。そのほかは全て弥生時代後期に位置づけられると考えられる。竪穴住居跡は全ての調査年次を通して遺構種別記号に「SI」が用いられている。第１表の順に掲載する。

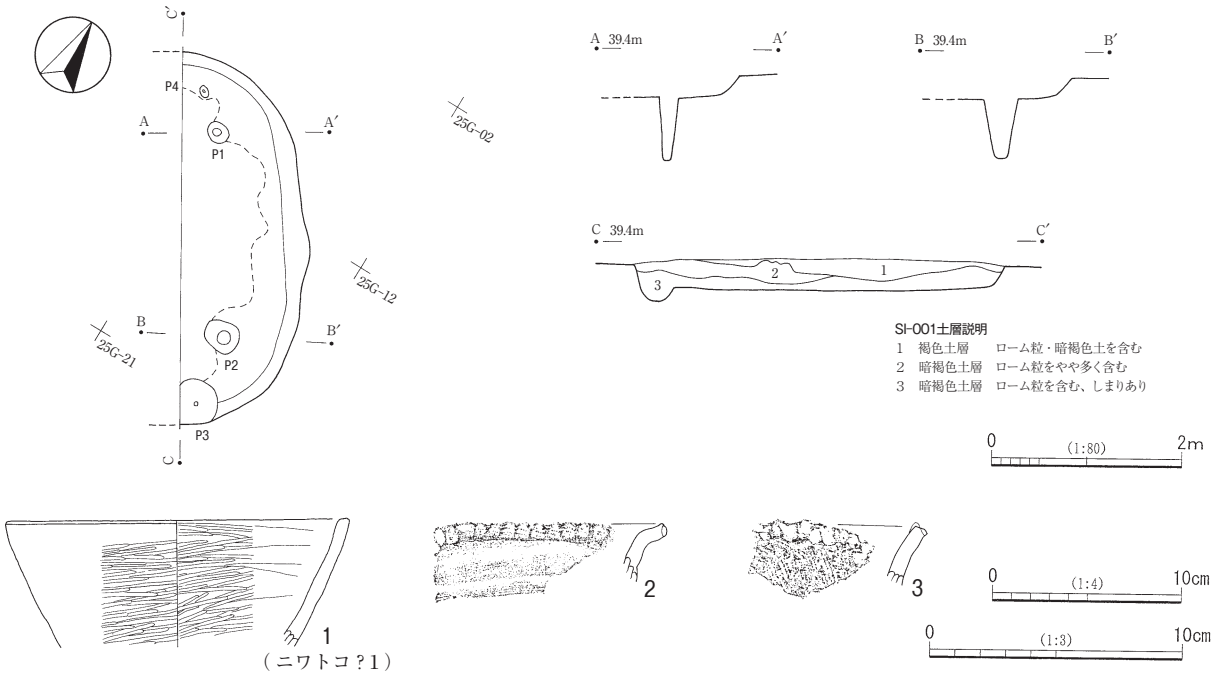
SI-001（第24図、図版５・30）

25G-00・01・10・11・20・21グリッドに所在する。西側は調査区外となるが、平面形は楕円形又は隅丸方形を呈するとみられる。検出された部分の規模は、長軸393cmである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面であるⅢ層上面から床面までの深さは約30cmであるが、表土からの断面観察により少なくともⅡc層上面からの掘込みを確認することができ、その深さは約65cmとなる。壁溝は確認できない。床は広く硬化しており、ピットが４か所確認された。２か所の主柱穴（P1・P2）と１か所の貯蔵穴（P3）及び補助柱穴（P4）と考えられる。ピットの床面からの深さは、柱穴と考えられるもののうちP1が67cm、P2が63cmである。南壁際の貯蔵穴と考えられるP3は、平面が径47cmの円形で断面は漏斗状をなし、床面からの深さは23cmである。また、補助柱穴とみられるP4は深さ16cmである。炉は調査区内からは検出されなかった。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は３点である。いずれも覆土中から出土した一括取上げ遺物である。１は鉢の破片である。内外面に横方向のミガキが施される。胴部内面にニワトコ？の圧痕が１点見つかった。２・３は甕の破片である。２は口唇部に布巻棒状工具によるとみられる押捺列が巡る。遺存部下方には輪積み痕が１段見られる。外面にススの付着が認められる。３は口唇部に棒状工具による押捺列が巡る。内外面ともにハケ調整が施される。外面にススの付着が認められる。

SI-002（第25図、図版５・21・30・44）

24F-78・79・88・89・99、24G-70・80・90グリッドに所在する。西側は調査区外、北側は調査区境界際による調査不能区域となる。また、南側は中世の溝状遺構SD-001に切られており、壁は南東側のごく一部しか検出できなかったため、平面形は明確ではないが、楕円形を呈するものとみられる。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは32cmである。壁溝は確認できない。床は全体に硬化しており、炉１基とピットが２か所確認された。炉は径60cmの円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、焼土を含む。床面からの深さは20cmである。ピットの床面からの深さは、入口ピットと考えられるP1が17cm、貯蔵穴と考えられるP2は、平面が径40cmの円形で、断面は漏斗状をなし、床面からの深さは30cmを測る。

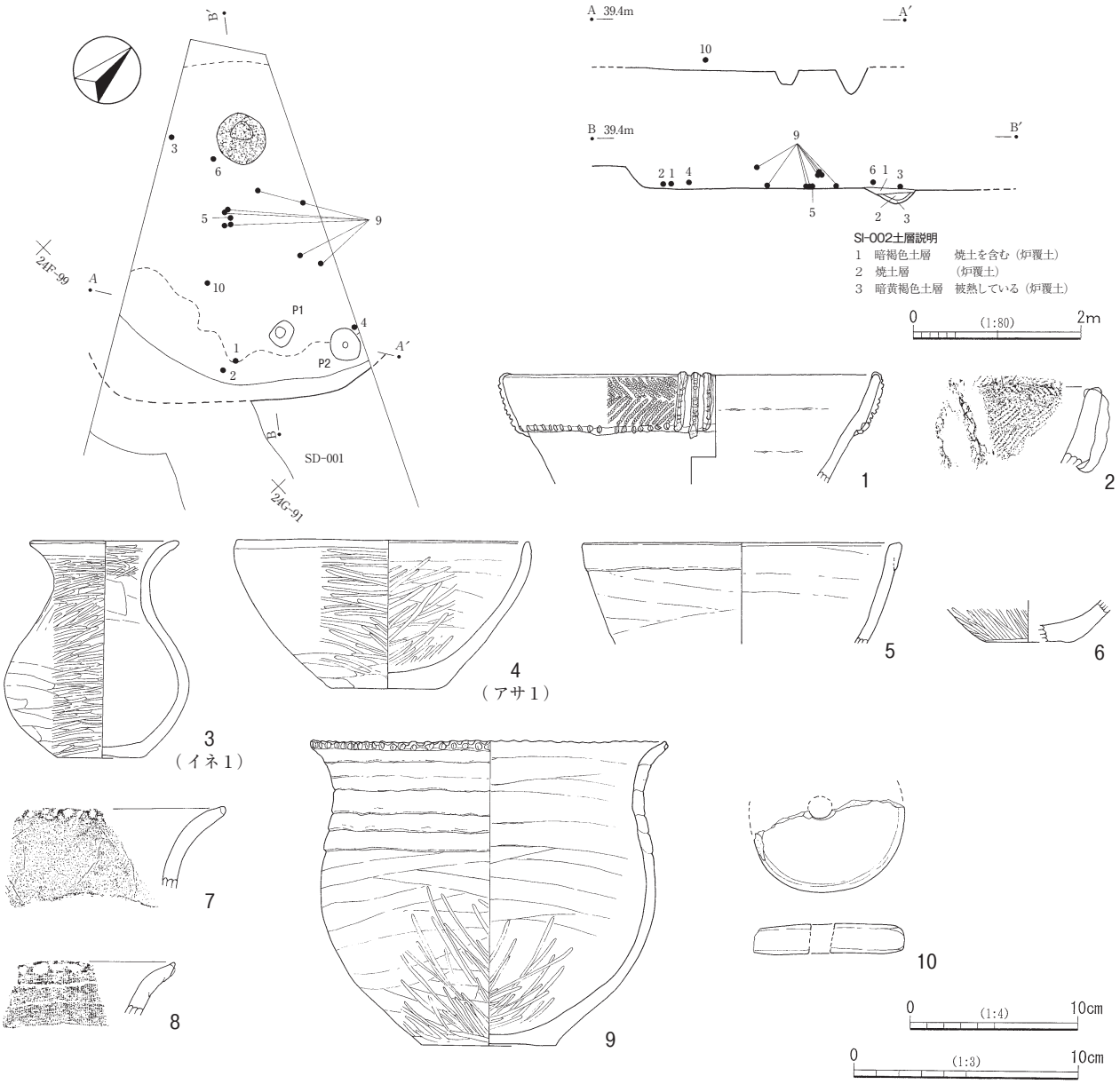


第24図　SI-001と出土遺物

住居覆土は、遺存する南東側の壁際付近には暗褐色土を含む黄褐色土が堆積するが、基本的にはロームブロックをやや多く含む黒褐色土が床上に堆積し、その上に同じくロームブロックを少量含む暗褐色土が堆積していた。

図示した遺物は10点である。９の甕が床面から覆土中層にかけて、10の紡錘車が覆土中から出土した以外は、全て床面直上からの出土である。１～３は壺である。１は口縁部破片で、口唇部と折返しの口縁部外面に縄文を施し、端部に刺突列を巡らせる。また、３本の棒状浮文が貼付されており、浮文上にはヘラ状工具により細かい刻みが加えられている。縄文施文部分以外と内面は赤彩されていた可能性が高いが、明確ではない。二次的被熱を受けている。２も口縁部破片で、口唇部と折返しの口縁部外面に縄文を施し、端部に刺突列を巡らせる。２本の棒状浮文が貼付され、浮文は指頭などにより波状を呈している。内面は赤彩が施されていた可能性が高いが、明確ではない。３は口縁部の20％程度を欠損するだけで、ほぼ完形の壺である。丁寧なつくりで、底部まで磨かれており、上げ底気味の底部も非常に安定が良い。外面全体と口縁部内面に赤彩の可能性があるが、明確ではない。口縁部内面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。４・５は鉢である。４は口縁部の60％を欠損しているが、底部は完存している。内外面とも全体的にミガキで仕上げられており、外面下端にはヘラケズリ痕が残っている。体部外面にアサの圧痕が１点見つかった。５は折返し口縁となっており、内外面とも雑なミガキが施される。６～９は甕である。６は遺存度25％ほどの底部破片である。内面がかなり剥落しており、外面の一部にススの付着が見られる。７は口唇部に上部からの押捺列が巡る。器面が摩耗しており、調整ははっきりしない。８は口唇部に正面からの指頭による押捺列が巡る。頸部には輪積み痕が３段見られる。外面にススが付着している。９と同一個体の可能性もある。９は全体の40％程度の遺存度である。口縁部は20％程度しか遺存していないが、底部は完存する。口唇部には棒状工具などによる押捺列が巡る。頸部には輪積み痕が７段見られ、胴部～底部はミガキが施される。復元口径は20.9㎝、復元胴部最大径は19.9㎝で、口径の方が胴部最大径より若干大きくなるようである。

10は紡錘車である。50％程度の遺存度で、中央部には焼成前穿孔があり、表裏・側面ともミガキで丁寧

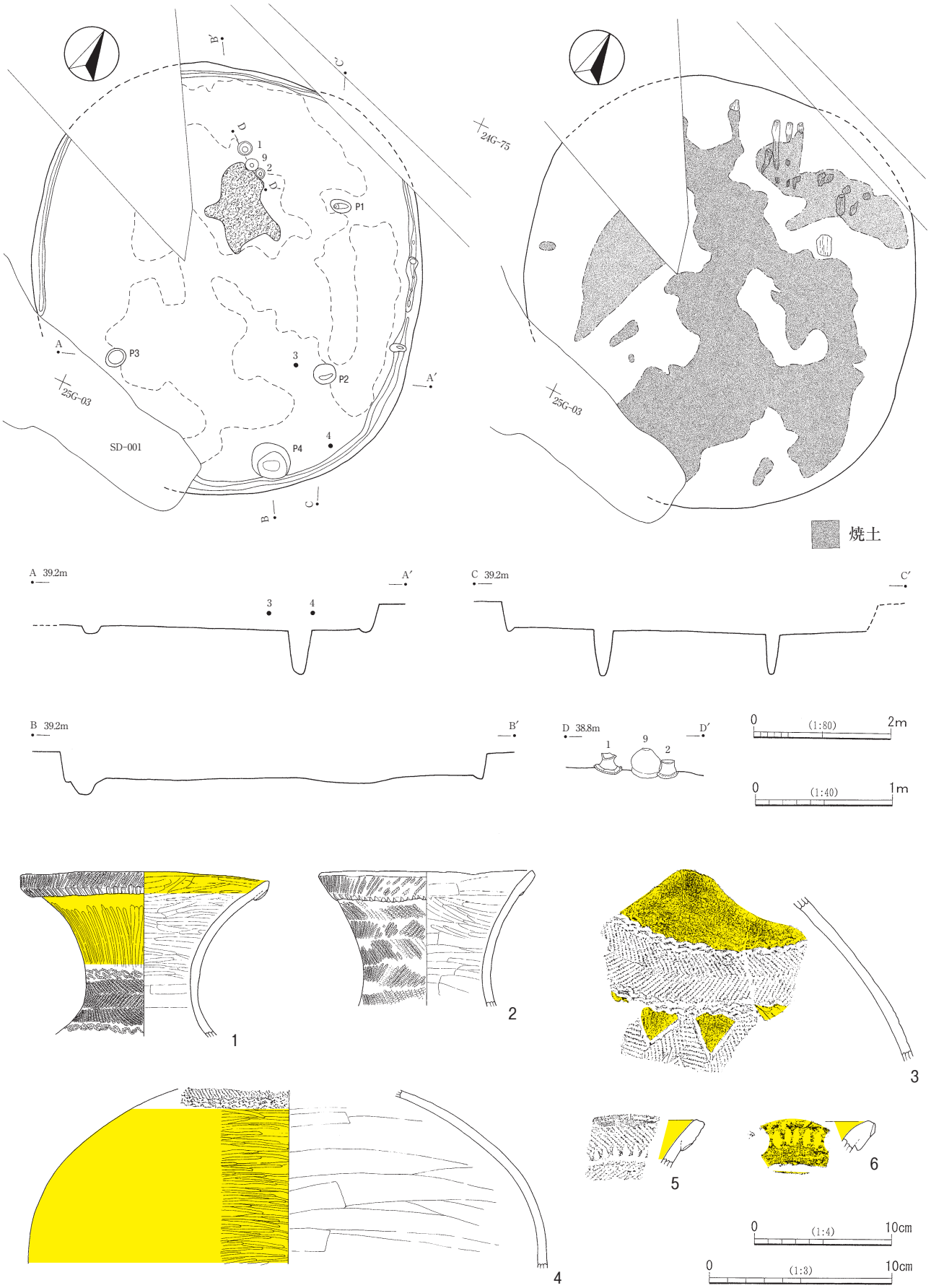


第25図　SI-002と出土遺物

に仕上げられている。胎土には赤色粒子を多量に含む。復元径は7.0cm、復元孔径は10mmである。色調は褐色～暗褐色を呈し、焼成は良い。

SI-003（第26・27図、図版５・21・30）

24G-72～74・82～85・92～95、25G-03・04グリッドに所在する。南側約半分は平成19年度に「SI-003」として調査を行い、北側約半分は平成27年度に「7SI-001」として調査を行った。報告に当たり、遺構名を「SI-003」に統合し､「7SI-001」は欠番とした。遺構の南側は、中世の溝状遺構SD-001に切られている。北側も、一部が調査範囲外により調査不能となっている。平面形は楕円形を呈するとみられ、主軸方向は、N-20°-Wである。規模は、長軸640cm、短軸576cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの床面の深さは48cmである。壁溝は全周するとみられる。床は全体的に硬化しており、炉１基とピットが４か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸130cm、短軸57cmの不整形を呈する。床面からの深



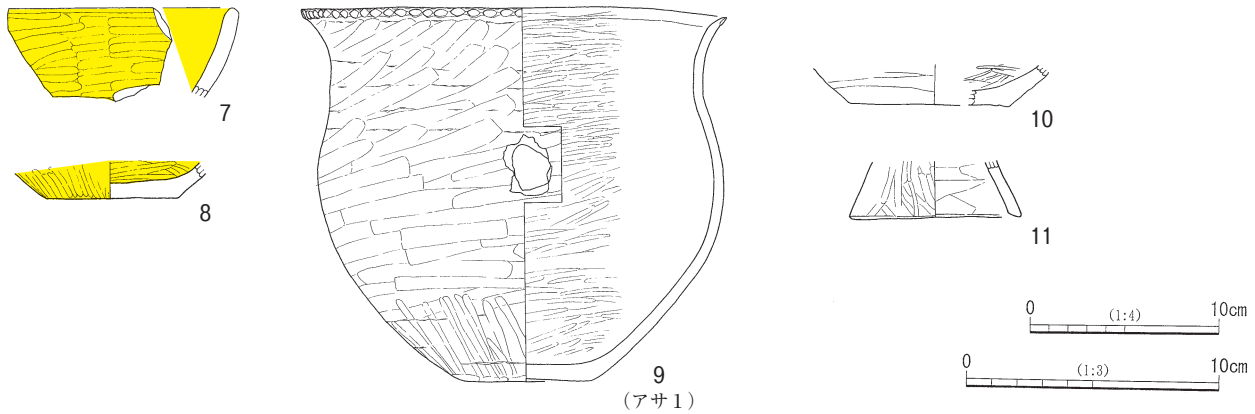
第26図　SI-003と出土遺物（1）

さは28cmで、炉床はよく焼けて硬化していた。ピットは柱穴とみられるものが３か所（P1・P2・P3）と、南側の壁際に貯蔵穴と考えられるものが１か所（P4）検出された。柱穴とみられるピットの深さは、P1が59cm、P2が67cm、P3が10cmである。P3だけ浅く、柱穴ではない可能性もある。貯蔵穴と考えられるP4は平面が径67cmの不整円形で、断面は逆台形をなす。床面からの深さは、27cmである。床面には、ほぼ一面に炭化材を含む焼土が厚さ10cmほどの層をなして広がっていた。北壁では、４本の炭化材が床面上の焼土層から壁の中腹にかけて、斜めに検出された。屋根の垂木と考えられる。住居覆土は床面の焼土層の上にロームブロックを含む暗褐色土や暗黄褐色土が、更にその上にローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。このことから、住居廃絶後、廃材を焼却した可能性が考えられる。

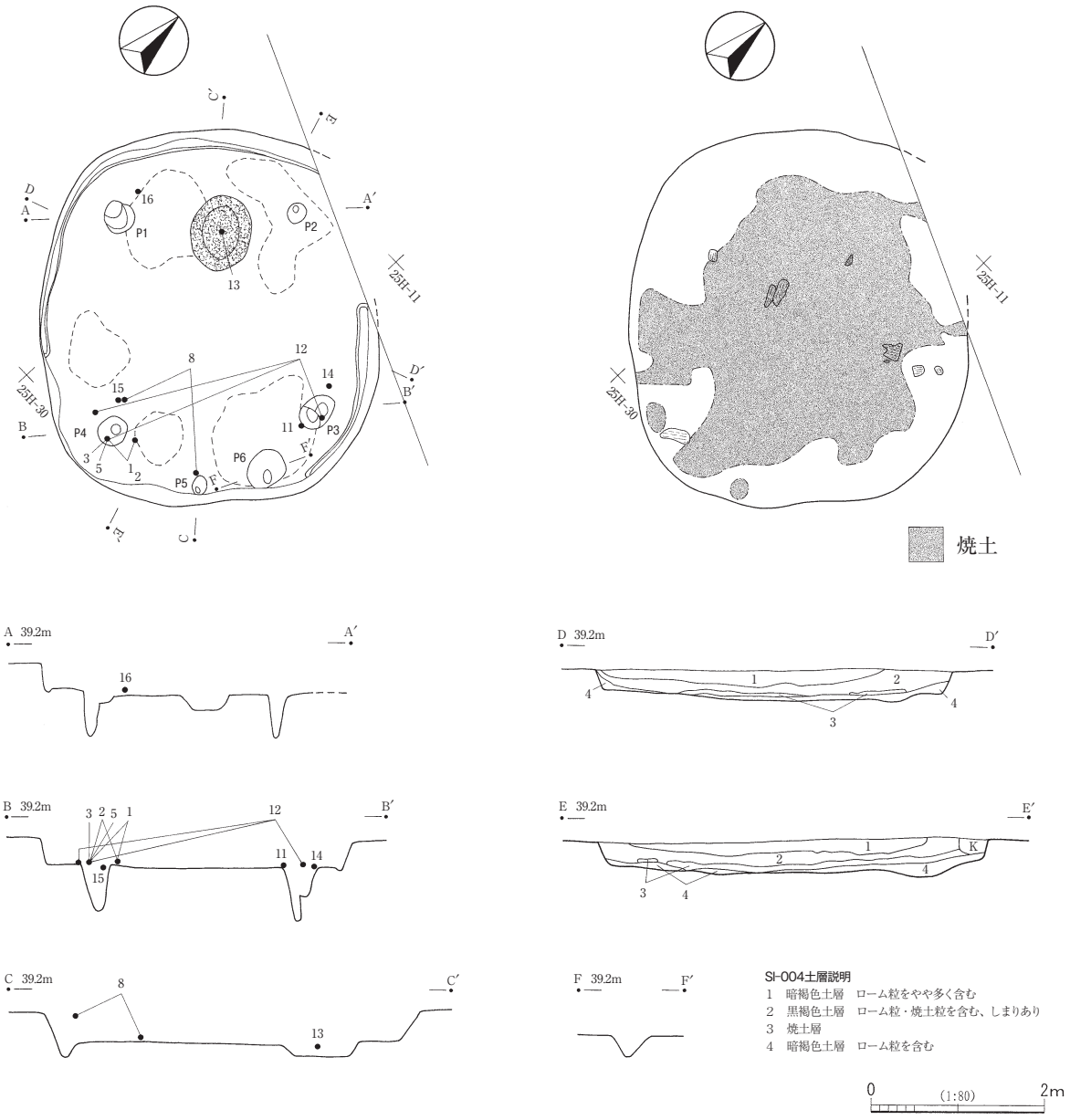
図示した遺物は11点である。炉の北側からは、１・２の壺口縁部～頸部までの部分２点と、９のほぼ完形の甕１点が伏せられた状態で床面上に並んで出土した（図版５）。１～６は壺である。１は頸部から上のみ完存する。口径は長径で18.0cm、短径で17.0cmである。折返し口縁部には縄文が施され、端部には刻み列が巡る。頸部には、２段のS字状結節文により区画された羽状縄文が施される。内外面ともに赤彩が施されている。炉の横から２・９とともに口縁部を下にした状態で出土したもので、破断面が摩滅している状況から、二次的に器台として使用されたと考えられる。内外面の一部と破断面の一部にはススの付着が見られる。調整の特徴や胎土が類似することから、４と同一個体の可能性がある。２も頸部から上のみほぼ完形である。外面は遺存部の全面に羽状縄文が施され、折返し口縁部の端部には刻み列が巡る。器面は摩耗している。破断面が摩滅していることから、二次的に器台として使用されたと考えられる。３は肩部とみられる破片である。文様帯の上部は羽状縄文が２段のS字状結節文に区画され、下部には沈線で区画された山形文が見られる。縄文施文部以外はミガキの後、赤彩が施されている。４は胴部の破片で、２段のS字状結節文で区画された羽状縄文が施され、文様のない部分はミガキが施され赤彩されている。１と同一個体の可能性がある。５は口縁部破片である。全面に縄文が施され、折返し口縁の端部にヘラによる刻み列が巡る。内面は赤彩されている。６も口縁部破片である。折返し口縁の口唇端部に棒状工具による押捺列が巡る。内外面とも赤彩が施されている。７・８は鉢である。７は口縁部破片である。内外面ともミガキの後、赤彩されている。８は底部の60％位の破片で、内外面とも磨かれ赤彩されている。９・10は甕である。９は炉の横から口縁部を下にして出土したものである。口縁部を50％欠くだけのほぼ完形の甕であるが、底部から口縁部にかけて大きな亀裂が入り、胴部が破れたような状態で出土した。被熱か土圧により変形したものと考えられる。口径22.5cm、胴部最大径21.4cmで、若干口径が胴部最大径より大きくなる器形である。口唇部には正面から指頭によるとみられる押捺列が施され、頸部には、ナデ消されているが輪積み痕が５段残る。底部付近には縦方向にミガキが入っている。内面は丁寧にミガキが施されている。胴部最大径付近に、焼成後穿孔が１か所認められる。胴部外面にはススが、底部から口縁部にかけての内面にはコゲが認められる。胴部外面にアサの圧痕が１点見つかった。10は底部の20％程度の破片である。11は台付甕の脚部破片と考えられる。外面にはミガキが施されている。

SI-004（第28・29図、図版５・21・30・44）

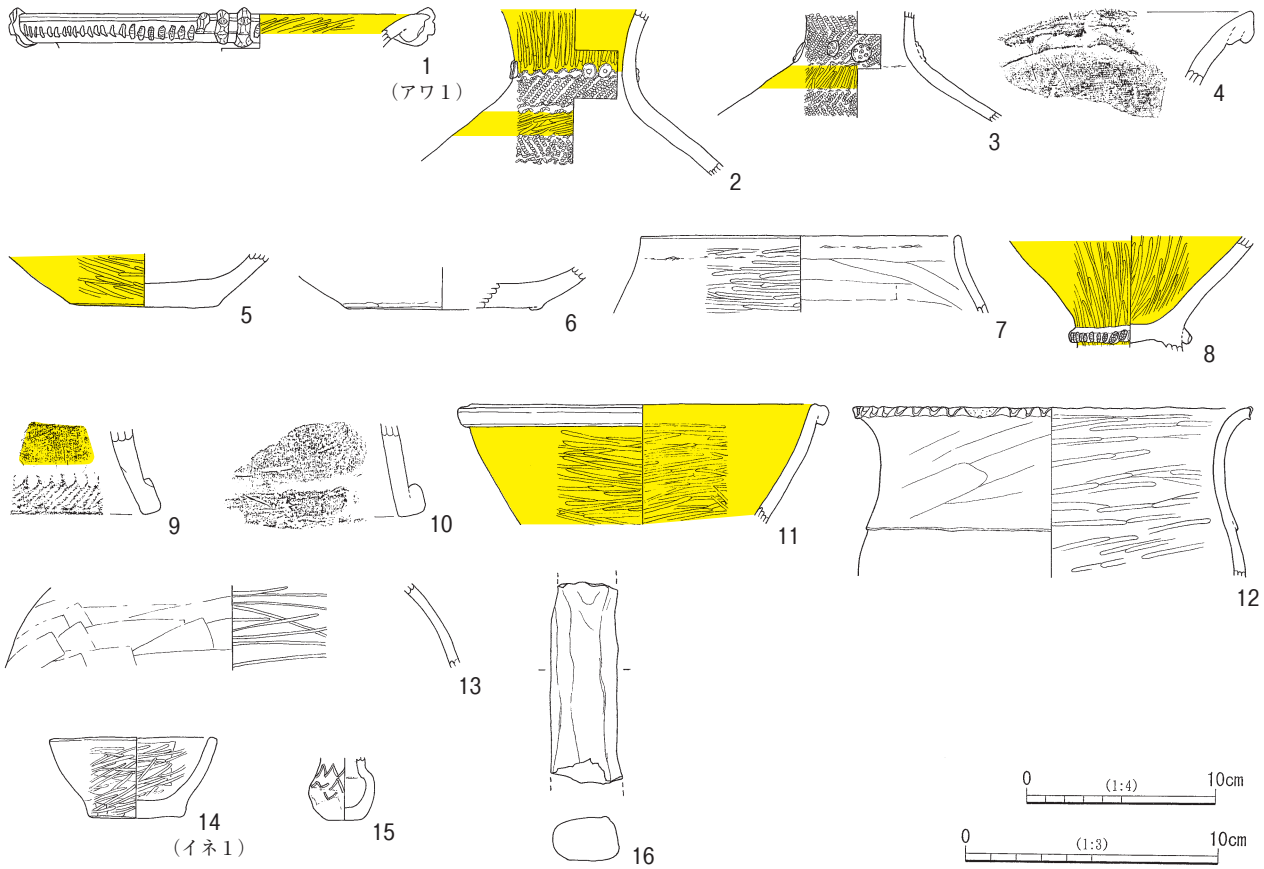
25G-19・29、25H-00・10・11・20・21・30グリッドに所在する。北東側の一部が調査不能区域となる。平面形は丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-47°-Wである。規模は、長軸436cm、短軸396cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは45cmである。東コーナー部と西コー



第27図　SI-003出土遺物（２）



第28図　SI-004



第29図　SI-004出土遺物

ナー部には壁溝が認められる。床は、炉の周辺や遺構縁辺部が硬化していた。床面からは炉１基とピットが６か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸88cm、短軸70cmの楕円形を呈する。炉の中央部分には焼土が堆積し、床面からの深さは16cmである。ピットは、それぞれ主柱穴（P1～P4）、入口ピット（P5）、貯蔵穴（P6）と考えられる。床面からのピットの深さは、主柱穴と考えられる四隅のものは、P1が51cm、P2が49cm、P3が56cm、P4が47cmで、入口ピットと考えられるP5は12cmである。そして、南東壁際にある貯蔵穴と考えられるP6は、平面は径50cmの円形で断面は漏斗状をなし、床面からの深さは23cmである。床面には、間層を挟んで厚さ10cmほどの焼土層が広がっており、炭化材も見られた。住居廃絶後、廃材の焼却が行われた可能性がある。

図示した遺物は16点である。遺物は南東壁際近くの床面直上から多く出土したが、完形に復元できるものは少なく、一括して投棄された可能性が高い。また、二次的被熱によりススが付着したものもある。１～６は壺である。１は口縁部の20％程度が遺存している。３本１単位の棒状浮文が認められ、折返し口縁上には縄文原体による押捺列が巡る。内面は丁寧に磨かれ赤彩が施される。口縁部外面にアワの圧痕が１点見つかった。２は頸部のみ全周遺存しているもので、Ｓ字状結節文に区画された縄文が２段巡り、頸部には２個１単位の円形浮文が４か所配置されている。円形浮文の上には棒状工具の先端による刺突がそれぞれ１か所施されている。施文部分を除き内外面赤彩されている。３は頸部の破片である。外面の摩耗が著しいが、Ｓ字状結節文に区画された縄文帯をもつ。棒状工具の先端で複数刺突された円形浮文が２個認められるが、単位ははっきりしない。外面の施文部分を除いて赤彩が施されている。頸部上端の破断面が著しく摩耗している。４は口縁部破片である。折返し部分はナデ調整、頸部と内面にはミガキが施され

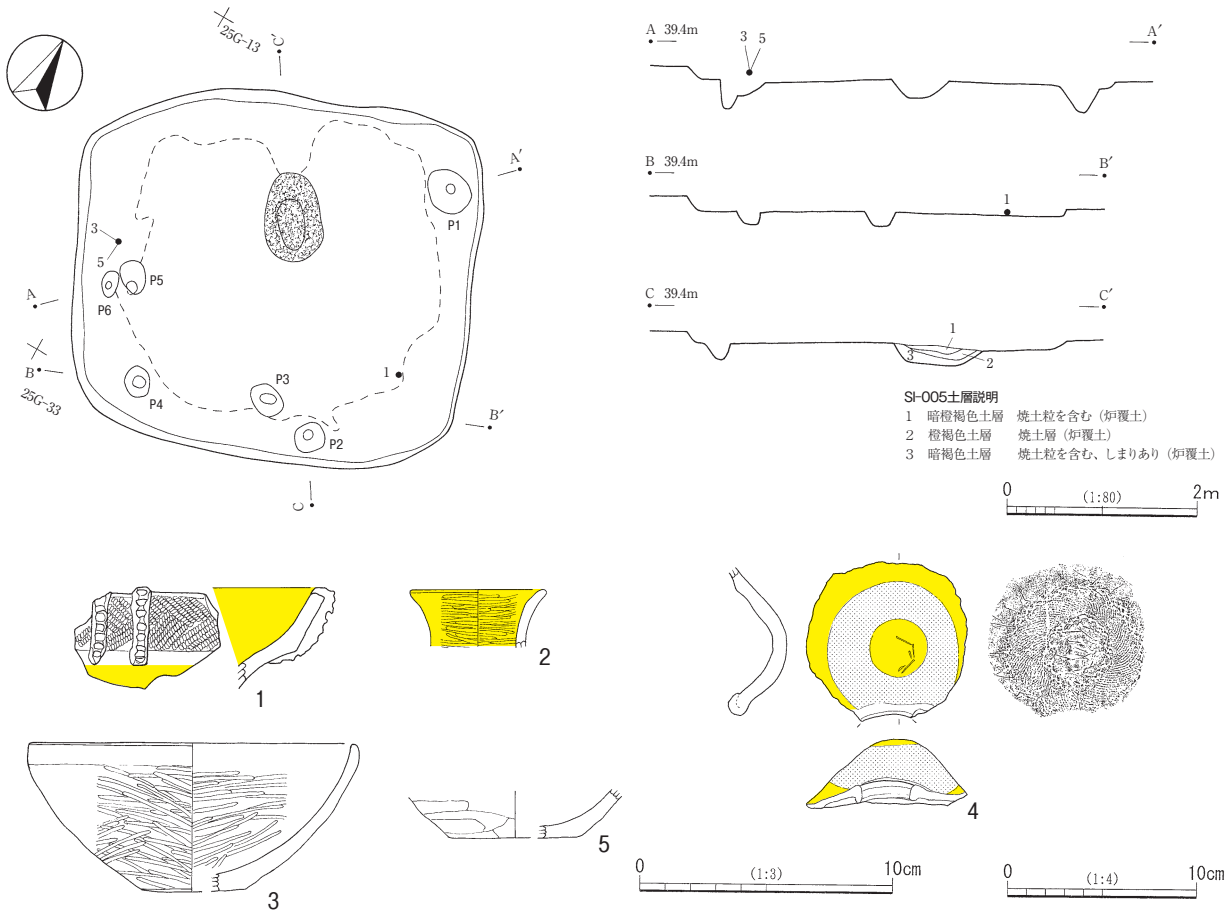
ている。５は大型壺の底部とみられる。80％程度の遺存度である。底部外面とその周縁部が摩耗している。外面には赤彩が施されている。６も底部で、30％程度の遺存度である。甕の底部の可能性もある。７は無頸壺である。口縁部の30％程度の破片である。口唇部は反りながら立ち上がり、やや角張る。１段の輪積み痕が見られる。内外面赤彩の可能性があるが、はっきりしない。８～10は高坏である。８は脚接合部のみ全周遺存する。貼り付け隆帯は半分ほど剥落している。隆帯上は布巻棒状工具による押捺列となっている。内外面赤彩されている。脚破断面が摩滅している。９は脚部と考えられる破片である。折返し部分には縄文が施され、端部は布巻棒状工具による押捺列となっている。施文部以外はミガキが施され、赤彩されている。10も脚部の破片で、器面はやや雑であるが折返しとなっており、高坏と考える。11は鉢で、口縁部の30％程度が遺存している。内面は全て、外面は折返し部分より下のみミガキと赤彩が施されている。12・13は甕である。12は口縁部の40％程度が遺存している。口唇部には上部と正面から交互に押捺列が巡る。外面にはススが付着している。13は胴部の破片である。14はほぼ完形のミニチュアの鉢である。内外面ともミガキで仕上げられている。体部外面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。15はミニチュアの壺とみられる。頸部から上を欠損するほかは完存している。ヘラ描で鋸歯状文が表現されている。

16は棒状の土製品である。手捏ねにより棒状に成形され、指頭により表面調整がなされている。両先端を折損しており、用途や元の形状等は不明である。胎土に砂粒と白色粒子を含む。色調は明褐色を呈し、焼成は良い。

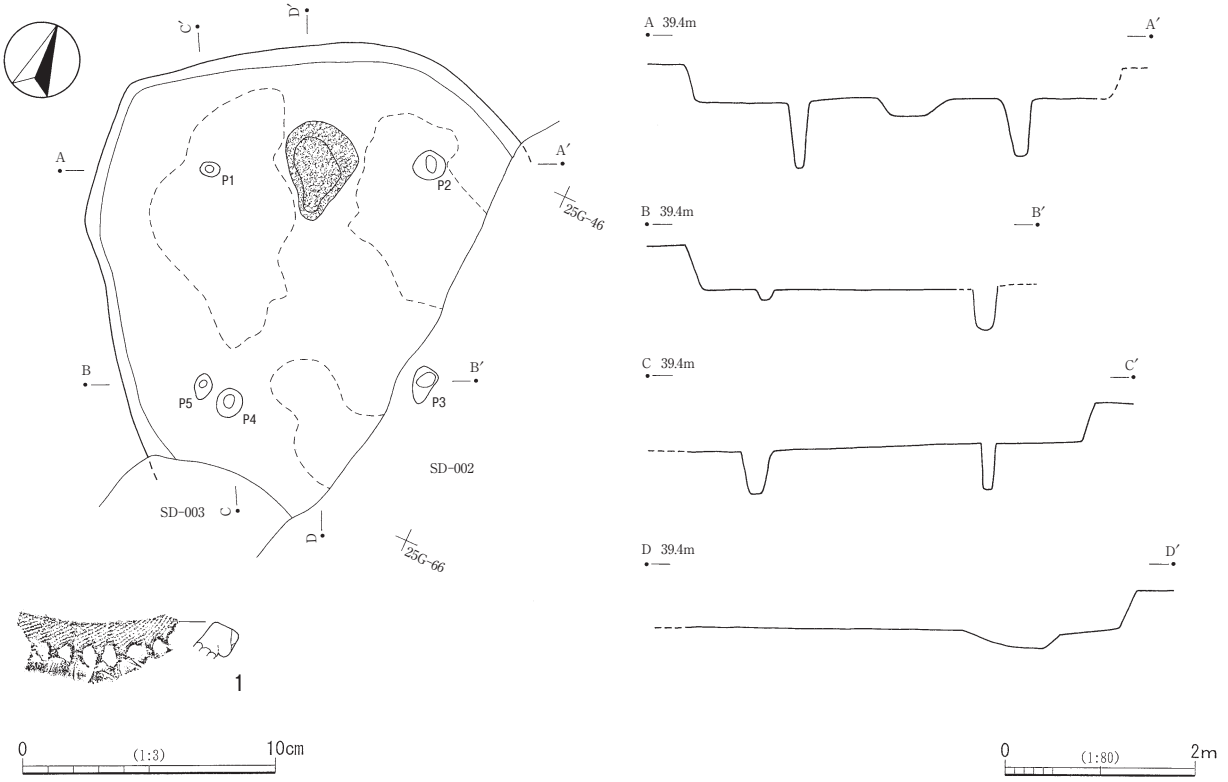
SI-005（第30図、図版６・21・30）

25G-03・12～14・22～25・33グリッドに所在する。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-21°-Wである。主軸方向である北西-南東軸よりも南西-北東軸のほうがやや長く、規模は長軸420cm、短軸384cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは23cmである。壁溝はない。床は中央部分を中心に、広く硬化している。床面からは炉１基とピットが６か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸93cm、短軸60cmの楕円形を呈する。断面は皿状をなし、焼土が堆積している。床面からの深さは23cmである。ピットは配置が不規則でそれぞれの機能ははっきりしないが、床面からの深さは、P1が27cm、P2が17cm、P3が16cm、P4が15cm、P5が30cm、P6が51cmである。なお、P3については、検出位置から入口ピットの可能性がある。

図示した遺物は５点である。１が床面直上から出土したほかは、覆土中からの出土である。１・２は壺である。１は口縁部の破片で、外面の赤彩は棒状浮文を避けるようにやや雑に施されている。内面は、摩耗しているが赤彩は確認できる。２は小型の壺の口縁部破片である。内外面とも赤彩が施され、口唇部は一部摩滅している。３は鉢である。全体の30％程度が遺存している。内外面ともミガキで仕上げられている。４は全体の形状ははっきりしないが、蓋と考えられる。頂部をもつ土器で、縁辺の大部分（口唇部）は破断面となっているが、僅かに遺存する部分は抉れ、折返し状となっている。抉れた部分に指をかけて開閉する蓋と考えたが、異形壺の部分などの可能性も考えられる。或いはこの部分を底部とする土器の可能性もあるかもしれないが、底部とするには非常に安定が悪く、また、内面調整が雑な指ナデで器面に著しく凹凸が認められる状況から、可能性は低いと言える。頂部はやや摩耗しており、調整痕とみられるヘラを当てたような痕跡が複数観察できることから、この部分に何か接着していた可能性もある。図の網掛けした部分は文様帯である。文様帯は拓影図のとおり、２段のＳ字状結節文に区画された縄文帯である。



第30図　SI-005と出土遺物



第31図　SI-006と出土遺物

Ｓ字状結節文は、上部（頂部側）を区画するものは環状に巡っているが、下部（口唇部側）を区画するものは僅かに遺存する口唇部の位置で開放している。施文部以外は、ミガキが施され赤彩される。頂部も、明確ではないが赤彩されていたようである。５は甕の底部と考えられる。底部の40％程度が遺存している。

SI-006（第31図、図版６・30）

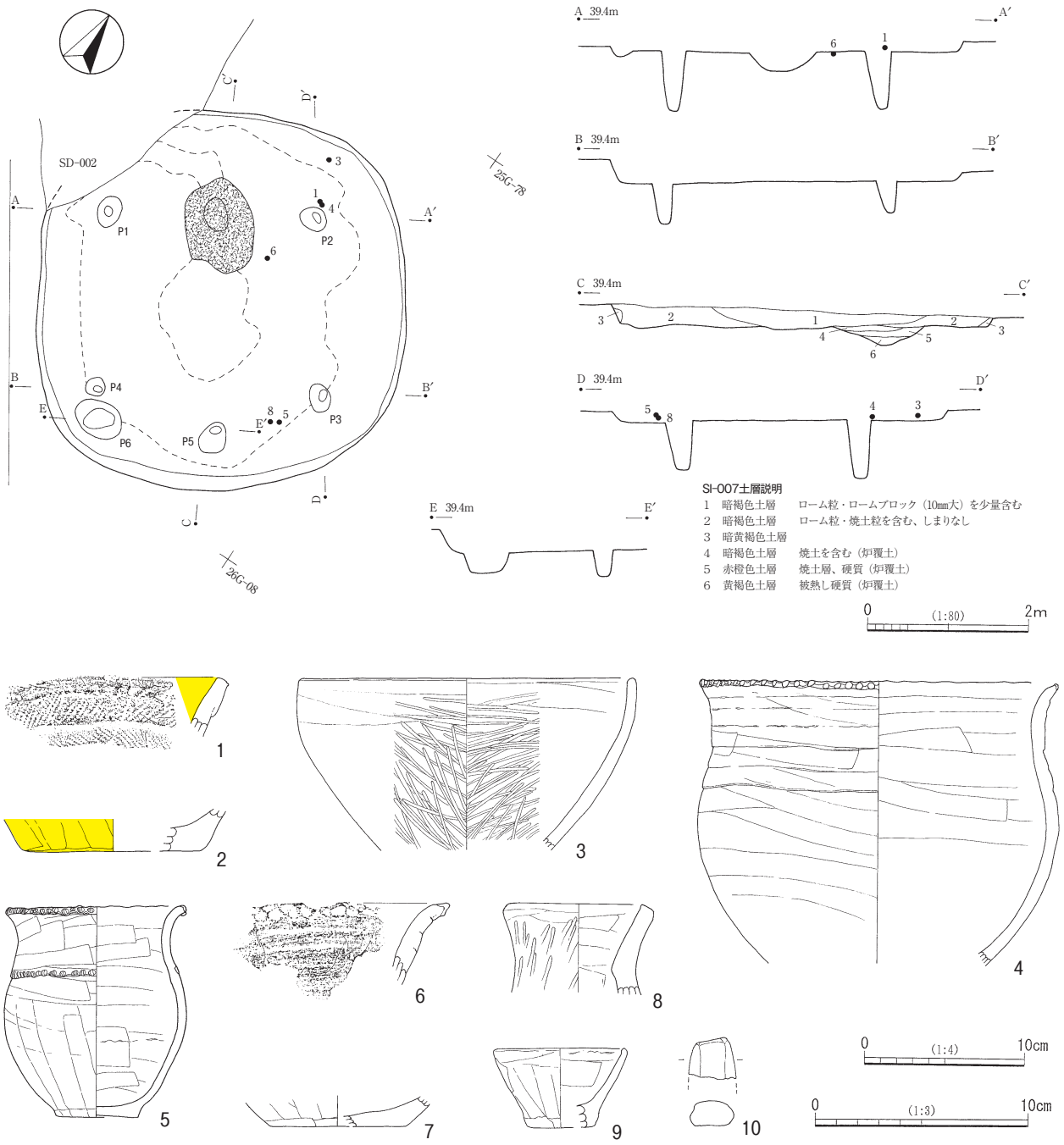
25G-34・35・43～45・53～55・64・65グリッドに所在する。東側及び南側を中・近世の溝状遺構SD-002･003にそれぞれ切られている。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-35°-Wである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは48cmである。壁溝は検出されていない。床は、炉の周辺などが部分的に硬化している。床面からは炉１基とピットが４か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸105cm、最大短軸78cmの不整形を呈する。断面は皿状で、床面からの深さは15cmである。検出されたピットは、主柱穴（P1～ P4）及び補助柱穴（P5）と考えられる。主柱穴の床面からの深さは、P1は68cm、P2が60cm、P4が76cmで、SD-002の壁面から検出されたP2は、床面のレベルから約50cmである。補助柱穴のP5は７cmと浅い。住居覆土は、ローム粒やロームブロックの量により４層に分層できる暗褐色土がレンズ状に堆積していた。

図示した遺物は少なく、図示できたのは覆土中から出土した１点のみである。１は壺の折返し口縁部破片である。口唇部には縄文が施され、布巻棒状工具による押捺列が巡る。

SI-007（第32図、図版６・22・31・44）

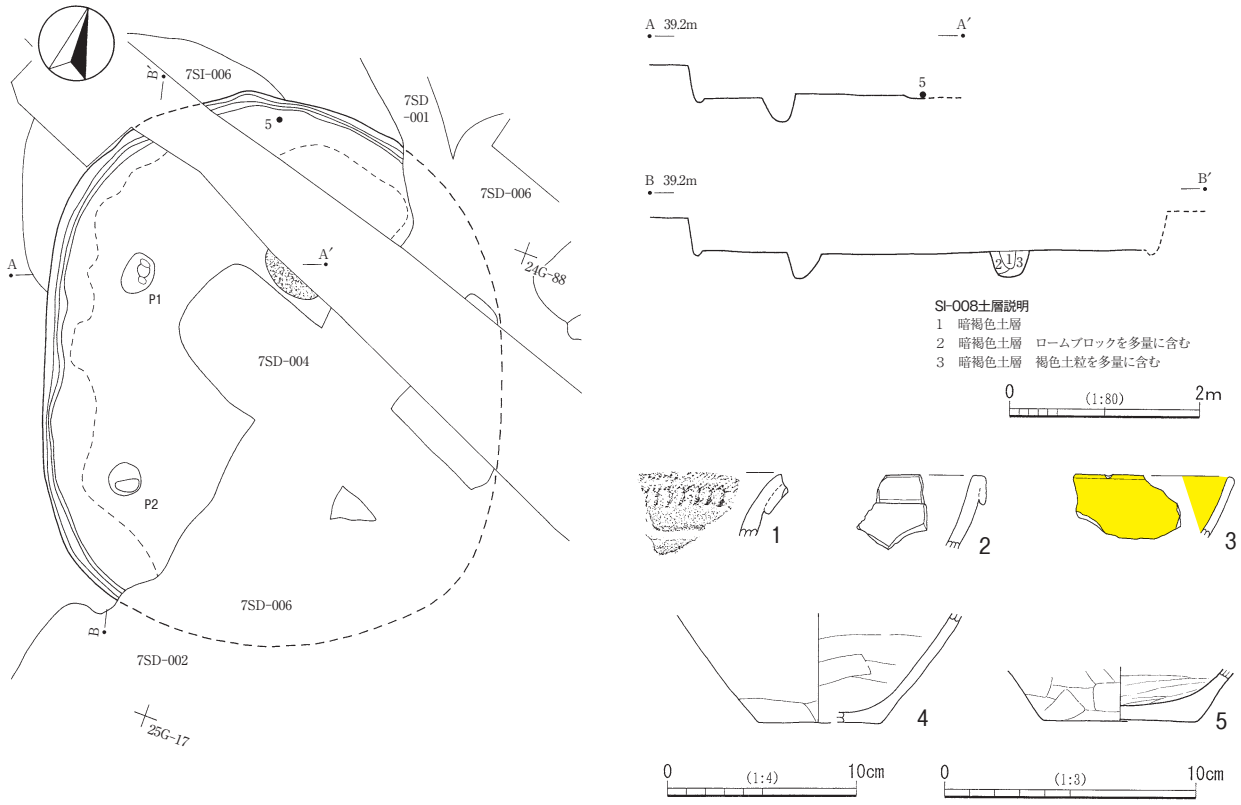
25G-76～78・85～88・95～98グリッドに所在する。西側コーナー部を中・近世の溝状遺構SD-002に切られている。平面形は丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-32°-Wである。規模は、長軸476cm、短軸456cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは31cmである。壁溝はない。床は、柱穴周辺を中心に硬化している。床面からは炉１基とピットが６か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、長軸120cm、短軸85cmの楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、底面は赤変し硬化している。床面からの深さは23cmである。炉床はよく焼けていた。ピットは、それぞれ主柱穴（P1～ P4）、入口ピット（P5）、貯蔵穴（P6）と考えられる。主柱穴の床面からの深さは、P1が74cm、P2が73cm、P3が61cm、P4が74cmである。また、入口ピットと考えられるP5は33cmと浅めである。貯蔵穴と考えられるP6は南側コーナー付近に位置し、長軸63cm、短軸45cmの楕円形で、断面は箱形、深さは27cmである。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は10点である。多くの遺物が床面近くから出土したが、破片で遺存率は低い。ほぼ完形で出土した５の甕は、床面より若干上の覆土から横位の状態で出土している。１・２は壺である。１は口縁部破片で、遺存部分は全面的に縄文が施されているが、口唇部は無文である。内面には赤彩が施されている。２は底部の20％程度の破片である。外面は赤彩されている。内面は著しく剥落している。３は鉢である。口縁部の70％程度が遺存している。内外面ともミガキにより仕上げられている。はっきりしないが内外面に赤彩が施されていた可能性もある。４～７は甕である。４は口縁部の40％程度が遺存している。復元口径は21.8cm、復元胴部最大径は22.5cmで、口径より胴部最大径のほうがやや大きくなる。口唇部には指頭による正面からの押捺列が巡り、頸部にはナデ消されているが輪積み痕が６段残されている。外面の最大径付近を中心にススが付着している。胴部内面下部が剥落している。５は小型のもので、ほぼ完形で

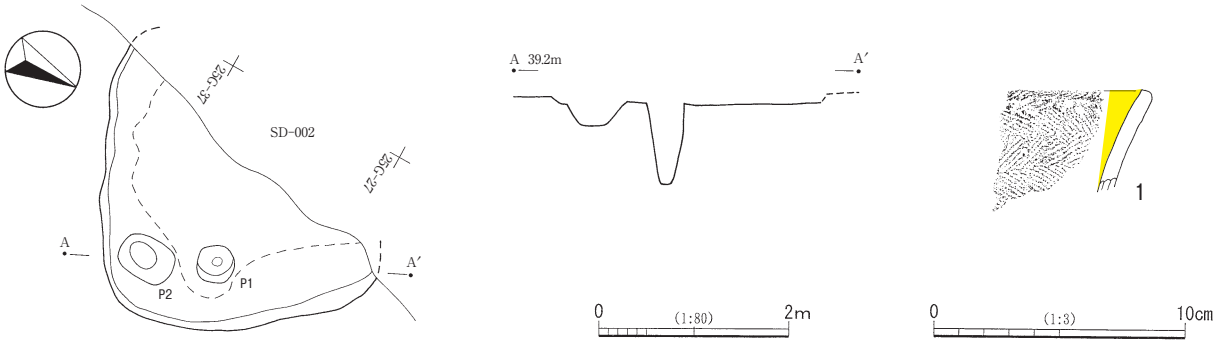


第32図　SI-007と出土遺物

ある。上から見た口縁部形は楕円形を呈しており、口径は最小で10.7㎝、最大で11.5㎝を測る。胴部最大径は11.2㎝である。肩部には輪積み痕が１段残され、輪積み痕端部及び口唇部には縄文原体端部による押捺列が巡る。胴部下半～底面までミガキが施され、底部は安定している。頸部から胴部上半にかけての外面にはススが付着している。６は口縁部破片で、４と同一個体の可能性がある。輪積み痕が４段見られる。７は底部で、30％程度遺存している。内面にはコゲが付着している。８は器台である。脚上部の粘土接合部分で破損している。外面にはミガキが施されている。９はミニチュアの鉢である。口縁部は25％程度遺存し、底部はごく僅かしか残っていない。体部の器厚は薄いが、底部は厚い。10は棒状の土製品である。手捏ねにより成形され、指頭により表面調整がなされている。下端を折損しており、用途や元の形状等は



第33図　SI-008と出土遺物



第34図　SI-009と出土遺物

不明である。胎土に赤色粒子と白色粒子を少量含む。色調は明褐色を呈し、焼成は良い。

SI-008（第33図、図版６・22・31）

24G-76・77・85～87・95～98、25G-06グリッドに所在する。南側は平成19年度に「SI-008」として調査を行い、北側は平成27年度「7SI-002」として調査を行った。報告に当たり、遺構名を「SI-008」に統合し、「7SI-002」は欠番とした。遺構東側は、複雑に重複する中・近世の溝状遺構SD-002・004、7SD-001・006に切られているほか撹乱も多く、床面と考えられる硬化面が点々と検出されたのみである。西側で竪穴住居跡7SI-006と重複するが、土層断面の観察から当遺構の方が新しいとみられる。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は、N-20°-Wである。規模は、長軸約590cm、短軸約490cmに復元できる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床面までの深さは38cmである。壁溝は全周するとみられる。床はほぼ全域

で硬化している。床面からは炉１基とピットが２か所検出された。炉は半分ほどが残っており、現状で長軸71cmの楕円形を呈する。床面からの深さは13cmで、炉床はよく焼けて硬化していた。ピットは柱穴と考えられ、床面からの深さは、P1が30cm、P2が56cmである。住居覆土は、主に下層にローム粒、炭化物、焼土粒などを含む暗褐色土が、上層にロームブロックを含む黒褐色土がレンズ状に堆積していた。ロームブロックの含有から、埋め戻しが行われた可能性がある。

遺物量は少なく、図示した遺物５点はすべて覆土中からの出土である。１は壺の口縁部破片である。口唇部には縄文が施され、布巻棒状工具による押捺列が巡る。２・３は鉢である。２は口縁部の破片である。折返し口縁をもち、外面の調整はナデだが下端部にミガキの痕跡がみられる。内面はミガキである。３も口縁部破片で、内外面ともミガキが施され、赤彩されている。４・５は甕である。４は底部の50％程度が遺存している。５は底部の30％程度が遺存している。内面にはミガキが施され、コゲが認められる。

SI-009（第34図、図版６・31）

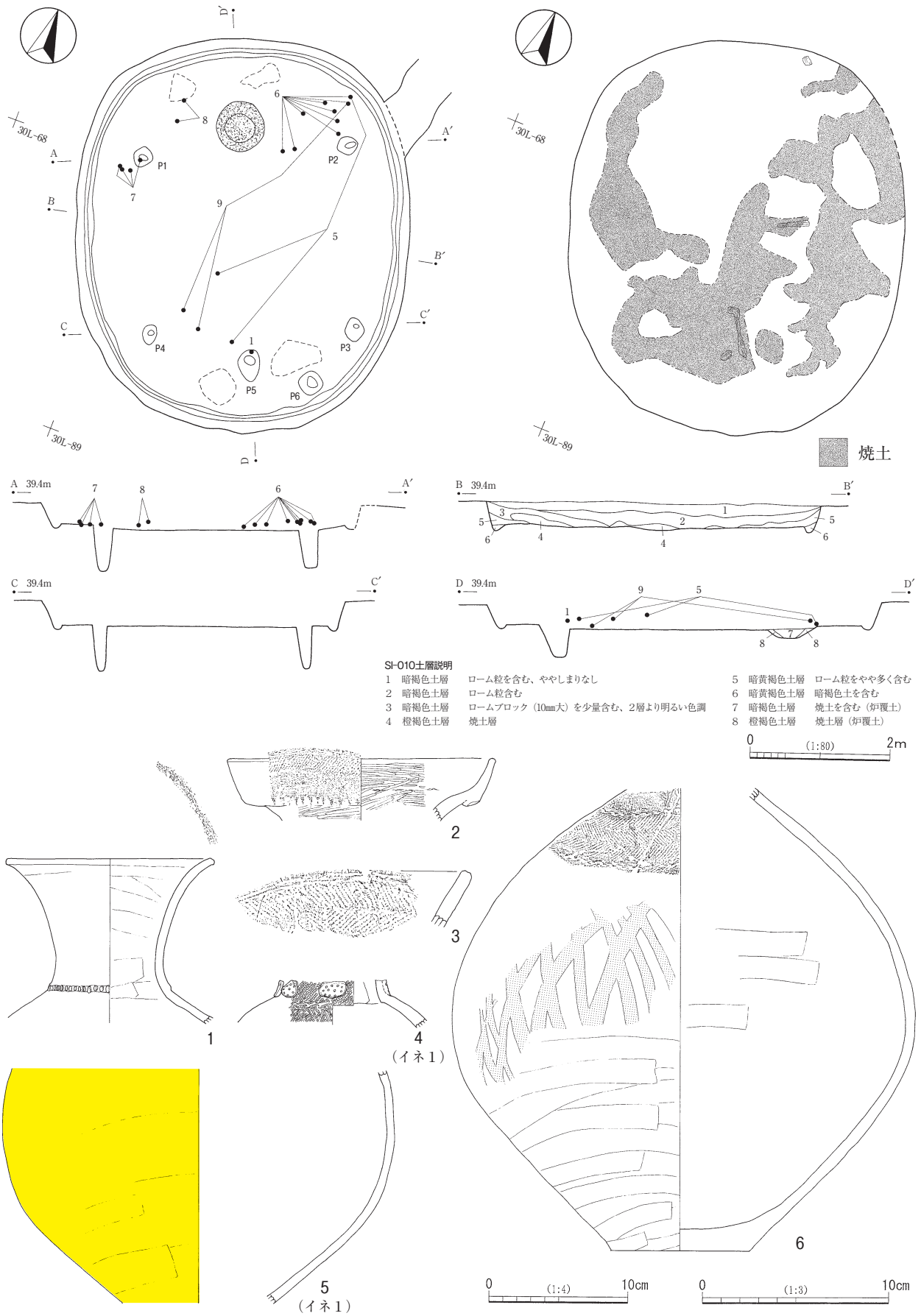
25G-17・27・28・37・38グリッドに所在する。西側を中・近世の溝状遺構SD-002に切られている。平面形はややいびつな隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは11cmである。壁溝は確認できない。床は、中央部分が硬化している。床面からはピットが２か所検出された。ピットはそれぞれ柱穴（P1）と貯蔵穴（P2）と考えられる。主柱穴と考えられるP1の床面からの深さは80cm、貯蔵穴と考えられるP2は、長軸30cm、短軸22cmの隅丸方形を呈し、断面形は逆台形で、深さは29cmである。炉は遺存部分からは検出されていない。

遺物量は少なく、図示できた遺物は１点のみで覆土中からの出土である。１は壺の口縁部破片で、外面は全面に縄文が施文されている。口唇部にも縄文が見られる。内面は磨かれ、赤彩されている。

SI-010（第35・36図、図版６・22・31）

30L-49・58・59・68・69・78・79、30H-40・50・60・61・70グリッドに所在する。北東部に一部撹乱が入る。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は、N-24°-Wである。規模は長軸566cm、短軸484cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは46cmである。壁溝は全周する。床面は部分的に硬化している。床面からは炉１基とピットが６か所検出された。炉は、遺構の北西寄りに位置し、長軸71cm、短軸67cmの円形を呈する。断面は皿状をなし、床面からの深さは18cmで焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。ピットは、主柱穴（P1～P4）と入口ピット（P5）及び貯蔵穴（P6）と考えられ、床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が65cm、P2が55cm、P3が62cm、P4が67cmで、入口ピットと考えられるP5が46cmである。貯蔵穴と考えられるP6は、長さ30cmの隅丸方形で断面は箱形をなし、床面からの深さは27cmを測る。床面には、焼土と炭化材が分布し、住居廃絶後、廃材の焼却が行われていたと考えられる。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は覆土下層から多く出土し、接合関係も広範囲にわたっていることから、住居廃絶後投棄されたものが多いと考えられる。また、二次的被熱を受けたものもみられることから、遺物の投棄とほぼ同時期に焼却作業が行われたと思われる。図示した遺物は10点である。１～６は壺である。１は口縁部20％、頸部60％程度の遺存度である。胴部外面が著しく摩耗している。口唇部には縄文が施文され、頸部下端には、施文具ははっきりしないが押捺列が巡っている。そのほかの部分はミガキで仕上げられており、赤彩の可



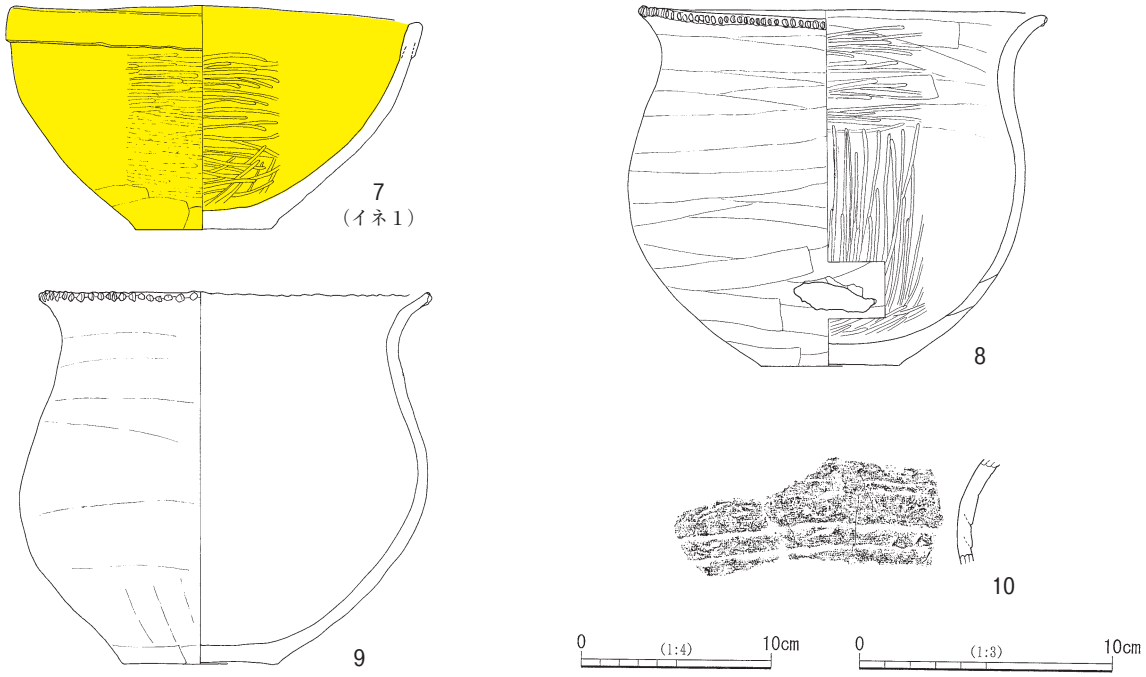
第35図　SI-010と出土遺物（1）

能性がある。５と同一個体の可能性がある。２は口縁部の15％程度の破片であるが、焼成も良く、丁寧なつくりである。口縁部には羽状縄文が施され、折返しの端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。口唇部にはＳ字状結節文が見られる。赤彩の可能性もあるが、はっきりしない。３は口縁部の破片である。外面は羽状縄文が施され、内面は軽くミガキが施される。口唇部には文様はない。４は頸部の50％程度が遺存している。全面に地文として縄文が施されており、肩部には２段のＳ字状結節文が巡る。下部には、縄文の上からヘラで鋸歯状の文様が施されている。頸部には、細く鋭い刺突が多数ある円形浮文が巡るように貼付されている。現状で４か所貼付されているが、全周では８か所になるとみられる。肩部破断面が摩滅しており、器台として二次利用されていた可能性が高い。肩部外面にイネ(種子)の圧痕が１点見つかった。５は胴部で、最大径の50％程度が遺存している。外面はミガキで仕上げられ、赤彩が施されている。内面は剥落が著しい。１と同一個体の可能性がある。胴部内面にイネ（籾）の圧痕が１点見つかった。６は肩部から下がほぼ完形である。上下がそれぞれ２段のＳ字状結節文によって区画されている羽状縄文が施文されている。赤彩されていた可能性が高いが、現状でははっきりしない。外面に薄くススが付着しており、最大径付近には籠目が一部観察される。７は鉢である。全体の80％程度遺存している。口縁部は折返しとなっており、やや角張る口唇部は内そぎ状である。内外面ともミガキで仕上げられ、赤彩が施されていたとみられる。接合した破片には二次的な被熱により、変色・器面の剥落が認められるものがあり、破損後火を受けた形跡が認められる。体部内面にイネ（籾）の圧痕が１点見つかった。８～10は甕である。８はほぼ完形である。口唇部には棒状工具による押捺列が巡る。外面は丁寧なナデ、内面はミガキで仕上げられている。口径は21.1㎝、胴部最大径は20.9㎝で、口径の方が若干大きい。胴部中央外面に薄くススが付着している。胴下部に焼成後穿孔が１か所認められる。９は全体の70％程度遺存するもので、口唇部には器面がやや乾いた段階で施されたと考えられる棒状工具による押捺列が巡る。調整や器形は８と同様で、復元口径20.0㎝、復元胴部最大径は21.5㎝である。胴下部外面に薄くススが付着している。破片により二次的に強く熱を受けた痕跡が認められる。10は口縁部の破片である。口唇部は欠失しており、破断面は摩滅している。外面には輪積み痕が５段明瞭に残されている。内面はミガキが施されている。

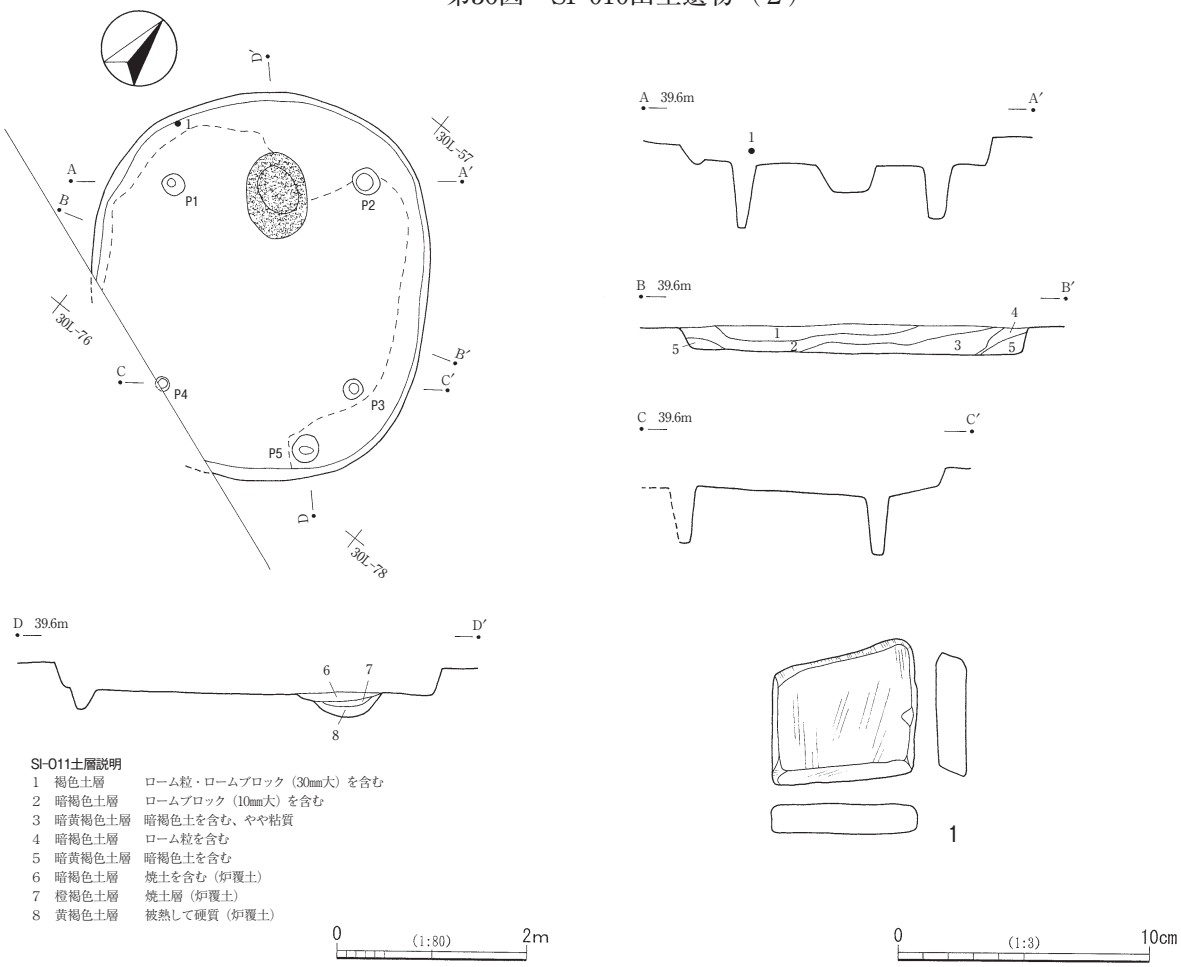
SI-011（第37図、図版７・41）

30L-55～57・65～67・76・77グリッドに所在する。南側の一部が調査区外となる。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は、N-36°-Wである。規模は、長軸414㎝、短軸360㎝である。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは31㎝である。壁溝はない。床は、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが５か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸93㎝、短軸64㎝の楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは23㎝である。覆土には焼土を多く含み、炉床はよく焼けていた。ピットは、４か所の主柱穴（P1～ P4）と、貯蔵穴（P5）と考えられる。床面からのピットの深さは、主柱穴と考えられるP1が67㎝、P2が58㎝、P3が66㎝、P4が56㎝である。そして、南東壁際にあるP5は径30㎝の円形で断面は漏斗状をなし、床からの深さは25㎝である。住居覆土はロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土がレンズ状に堆積し、埋め戻しを行った可能性を示す。

遺物の出土量は非常に少なく、数片の壺・甕の胴部片と図示した石器１点のみである。１は砂岩製の砥石である。扁平で、各面とも擦痕が見られ平滑である。



第36図　SI-010出土遺物（２）



SI-011土層説明

1	褐色土層	ローム粒・ロームブロック（30㎜大）を含む
2	暗褐色土層	ロームブロック（10㎜大）を含む
3	暗黄褐色土層	暗褐色土を含む、やや粘質
4	暗褐色土層	ローム粒を含む
5	暗黄褐色土層	暗褐色土を含む
6	暗褐色土層	焼土を含む（炉覆土）
7	橙褐色土層	焼土層（炉覆土）
8	黄褐色土層	被熱して硬質（炉覆土）

第37図　SI-011と出土遺物

SI-012（第38図、図版７・23・31）

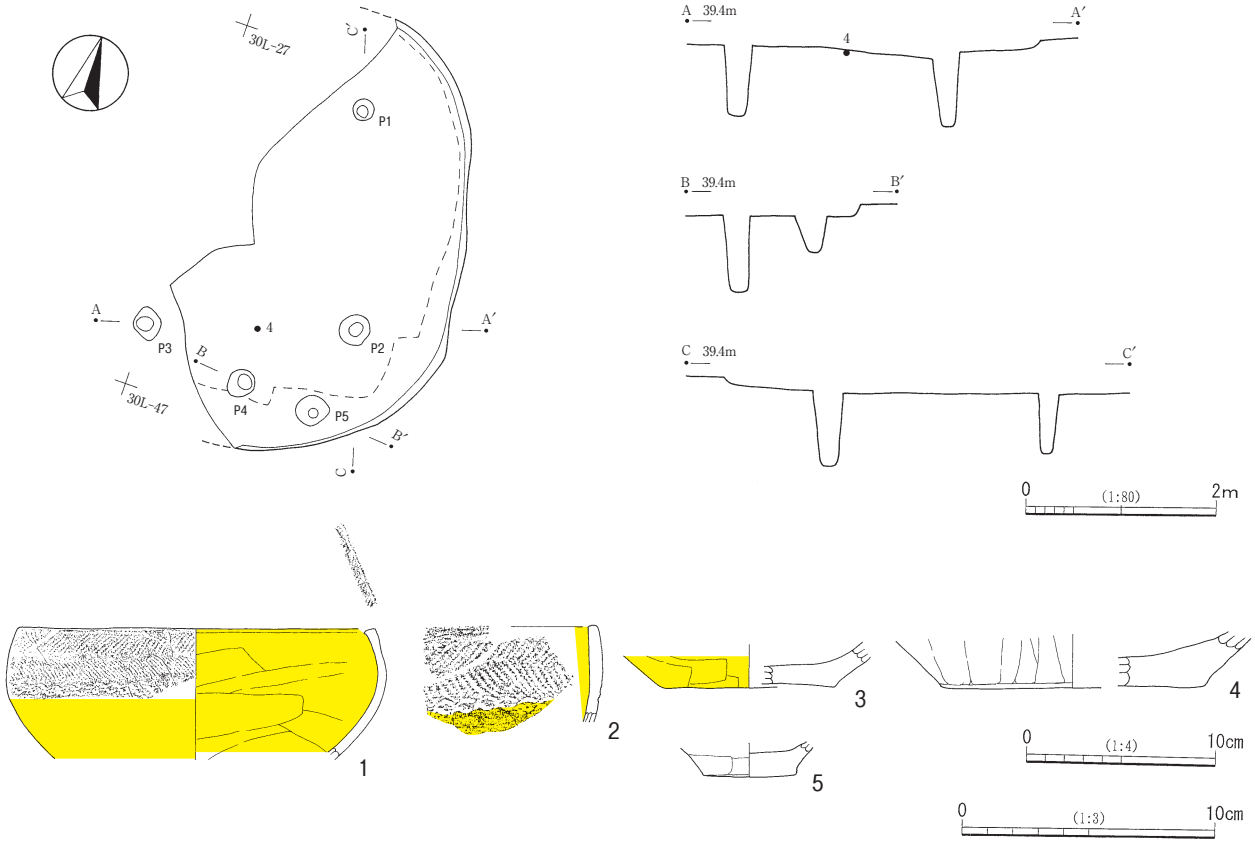
30L-17・18・27・28・37・38・47グリッドに所在する。西側は撹乱により遺存していない。平面形は楕円形を呈す。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは18cmである。壁溝はない。床は全体に硬化している。床面からはピットが５か所検出された。主柱穴（P1～P3）と入口ピット（P4）、貯蔵穴（P5）と考えられる。床面からの深さは、主柱穴P1が64cm、P2が80cm、P3が73cmで、入口ピットP4は78cmである。貯蔵穴P5は径35cmの円形で、断面は漏斗状をなし、床面からの深さは40cmを測る。炉は検出されていない。遺構の遺存状態が悪く、住居覆土の堆積状況などは不明である。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は５点のみであった。１・２は鉢である。１は口縁部の40％程度が遺存している。面取りされやや内傾する口唇部には縄文が施文される。口縁部には羽状縄文が施文され、下端は２段のＳ字状結節文で区画される。区画の下部及び内面はミガキと赤彩が施される。器厚が薄い。２は口縁部破片である。１と同様口縁部に羽状縄文が施され、２段のＳ字状結節文で区画されるが、口唇部は無文となっている。内面と外面の施文部以外が赤彩されている。３・４は壺の底部である。３は底部のほぼ全部が遺存している。外面にミガキと赤彩が施されている。４は底部の40％程度が遺存し、復元底径は14.0cm、厚手で大型の個体である。外面はミガキが施される。内面は器面の剥落が著しい。５は底部のみ完存しており、甕と考えられる。内面にはコゲが認められる。

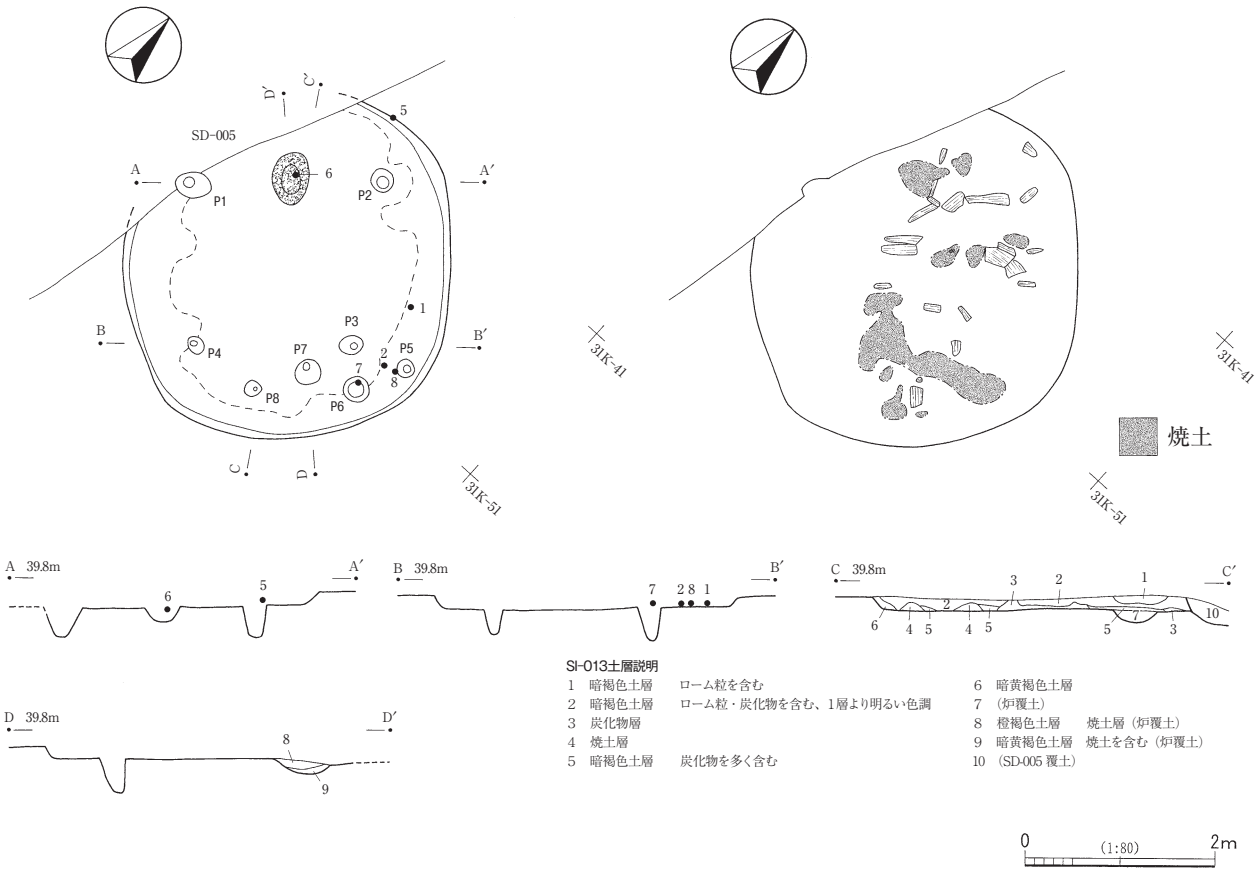
SI-013（第39・40図、図版７・23・31）

31J-39・48・49・58・59、31K-40・50グリッドに所在する。北側の一部が中・近世の溝状遺構SD-005に切られるが、平面形は丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-45°-Wである。規模は、短軸348cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは18cmである。壁溝はない。床は、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが８か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸55cm、短軸38cmの楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは15cmで焼土が堆積している。主柱穴と考えられるピットの床面からの深さは、P1が31cm、P2が34cm、P3が40cm、P4が27cmである。そして、そのほか東壁～南壁付近にあるピットは、P5が28cm、P6が17cm、P7が34cm、P8が６cmである。検出位置からP7は入口ピットの可能性がある。床面には、焼土と炭化材の分布が見られ、住居廃絶後廃材等の焼却が行われていたと考えられる。

遺物は床面東コーナー付近を中心に出土し、１・７のように遺存率の高いものも出土した。また、二次的な被熱を受けたものもあり、焼却時点に遺物が投棄されていた状況を示す。図示した遺物は８点である。１～４は壺である。１は口縁部～頸部はほぼ完存、胴部～底部は70％程度遺存している。折返しの口縁部には羽状縄文が施され、３本１単位の棒状浮文が４単位貼付されている。頸部には、径８mm前後の円形浮文が隙間のないように並べられている。肩部と胴部最大径付近には３段のＳ字状結節文が巡り、その間には、沈線で区画した内部を縄文で充填した菱形文が施されている。菱形文の間及び文様のない部分は底部までミガキが施され、底部を除いて赤彩が施されている。内面は、受け口状の部分にのみ赤彩が施されている。内面の胴部から底部にかけて、器面が剥落しており、口縁部には一部に二次的なススの付着が見られる。２は大型の壺胴部破片である。中央付近に３段のＳ字状結節文が巡り、その上部に沈線で区画された縄文が文様をなしている。破損後二次的な熱を受け、破片によっては、ススの付着が見られる。３は口縁部破片である。折返しの端部には、布巻棒状工具の押捺列が巡る。内面は磨かれ、赤彩が施されている。



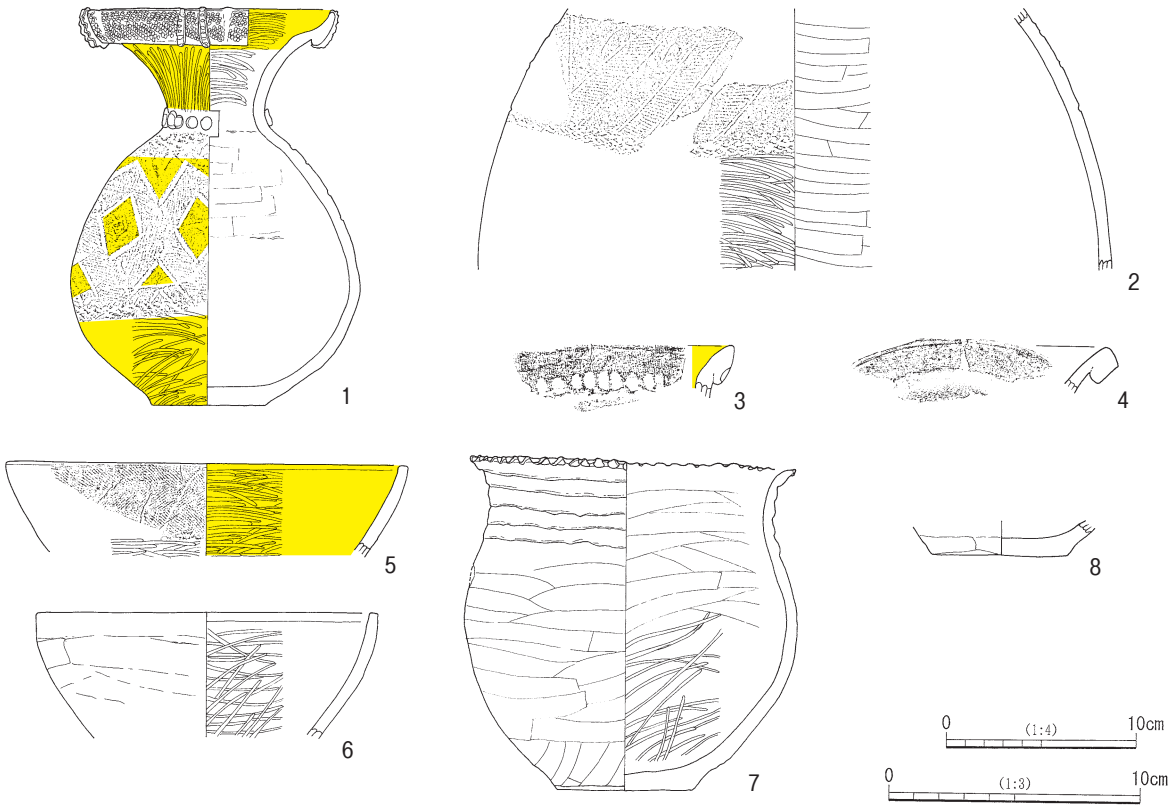
第38図　SI-012と出土遺物



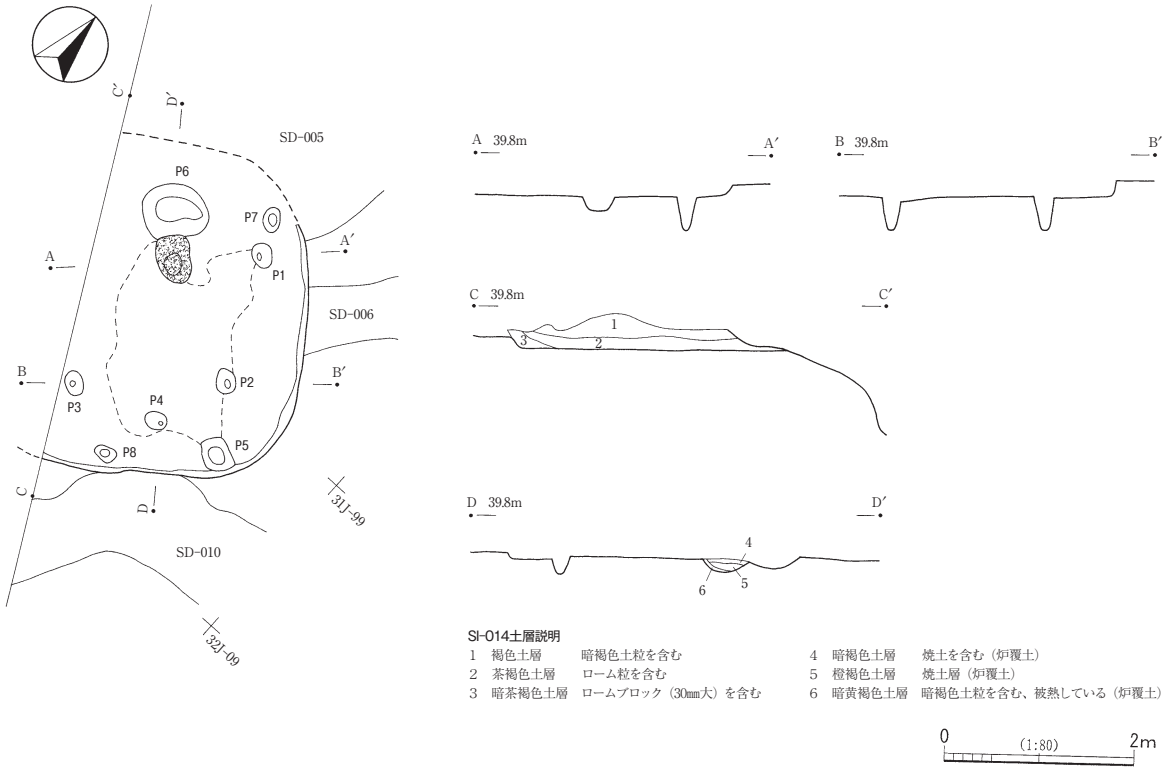
SI-013土層説明

1　暗褐色土層　ローム粒を含む
2　暗褐色土層　ローム粒・炭化物を含む、1層より明るい色調
3　炭化物層
4　焼土層
5　暗褐色土層　炭化物を多く含む
6　暗黄褐色土層
7　(炉覆土)
8　橙褐色土層　焼土層（炉覆土）
9　暗黄褐色土層　焼土を含む（炉覆土）
10　(SD-005 覆土)

第39図　SI-013



第40図　SI-013出土遺物



第41図　SI-014

４は壺口縁部片である。外面は折返し部に若干ミガキが入るようである。内面はナデ調整とみられる。５・６は鉢である。５は口縁部に羽状縄文が施文され、その下に２段のＳ字状結節文が巡る。内面は磨かれ赤彩されている。６は無文で、外面はやや雑だが内外面ともミガキで仕上げられている。７・８は甕である。７は80％程度の遺存度である。口唇部には棒状工具により上部と正面から交互に施された押捺列が巡る。頸部には輪積み痕が５段残され、粘土帯上には指頭圧痕も確認できる。胴部はナデ調整である。内面はミガキで仕上げられている。外面胴部上半と口縁部にススが付着している。８は底部のみ完存している。内面にはコゲが見られ、一部器面が剥落している。

SI-014（第41図、図版７）

31J-86～88・97・98グリッドに所在する。西側の一部が調査区外となり、また、北側を中・近世の溝状遺構SD-005に切られ、更に同じくSD-006・010とも重複している。平面形はやや丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-39°-Wである。長軸の復元値は350cmほどとなる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは22cmである。検出部分には壁溝はない。床は、炉の南側を中心に硬化している。床面からは炉１基とピットが８か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸50cm、短軸35cmの不整楕円形を呈する。断面は浅い皿状で、床面からの深さは15cmである。焼土が堆積して、炉床はよく焼けていた。主柱穴と考えられるP1からP3の床面からの深さは、P1が31cm、P2が28cm、P3が34cmといずれも浅く、主柱穴としては貧弱である。入口ピットP4は18cmである。貯蔵穴と考えられるP5は、長軸35cm、短軸30cmの不整円形を呈し、深さは16cmを測る。そのほかのピットの深さはP6が11cm、P7が16cm、P8が９cmである。住居覆土は、ローム粒を含む茶褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕の細片が数片出土したのみで、図示可能な遺物はなかった。

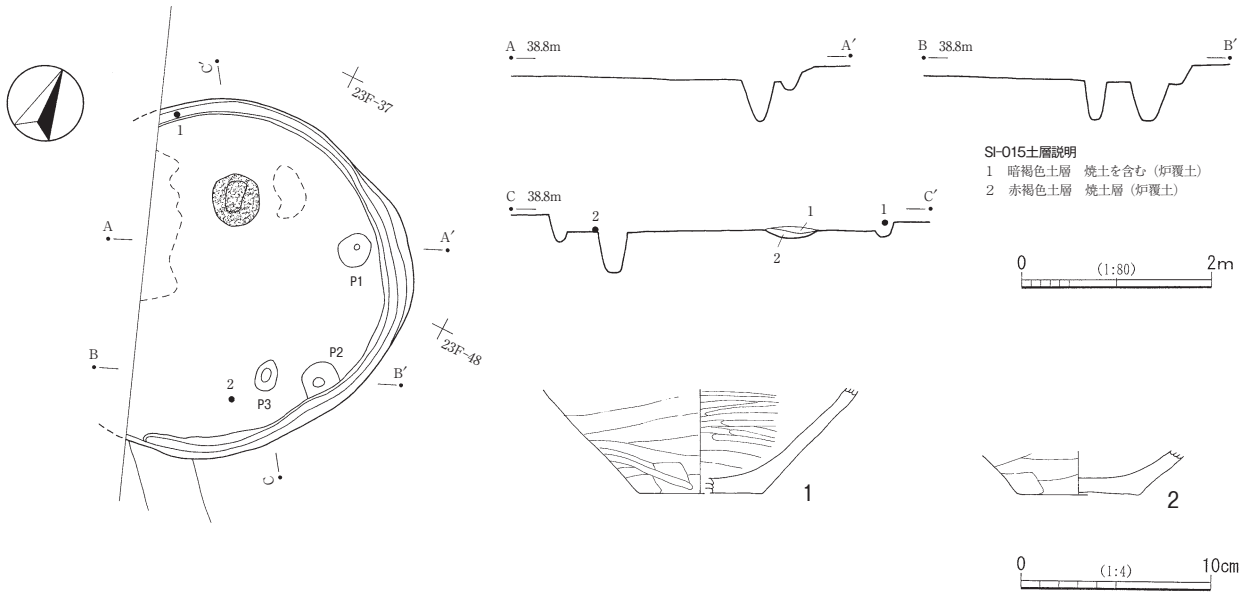
SI-015（第42図、図版７・23・31）

23F-36・37・46・47・56・57グリッドに所在する。西側が調査区外となる。平面形は直径380cmほどの円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは21cmである。壁溝がほぼ全周する。炉の東西両側に部分的な床面の硬化した場所が確認できた。床面からは炉１基とピットが３か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸55cm、短軸48cmの円形を呈する。断面は非常に浅い皿状を呈し、床面からの深さは10cmである。焼土を含む暗褐色土が堆積している。床面からのピットの深さは、P1が42cm、P2が41cm、P3が42cmである。住居覆土は、ローム粒を含む暗褐色土の単層であった。

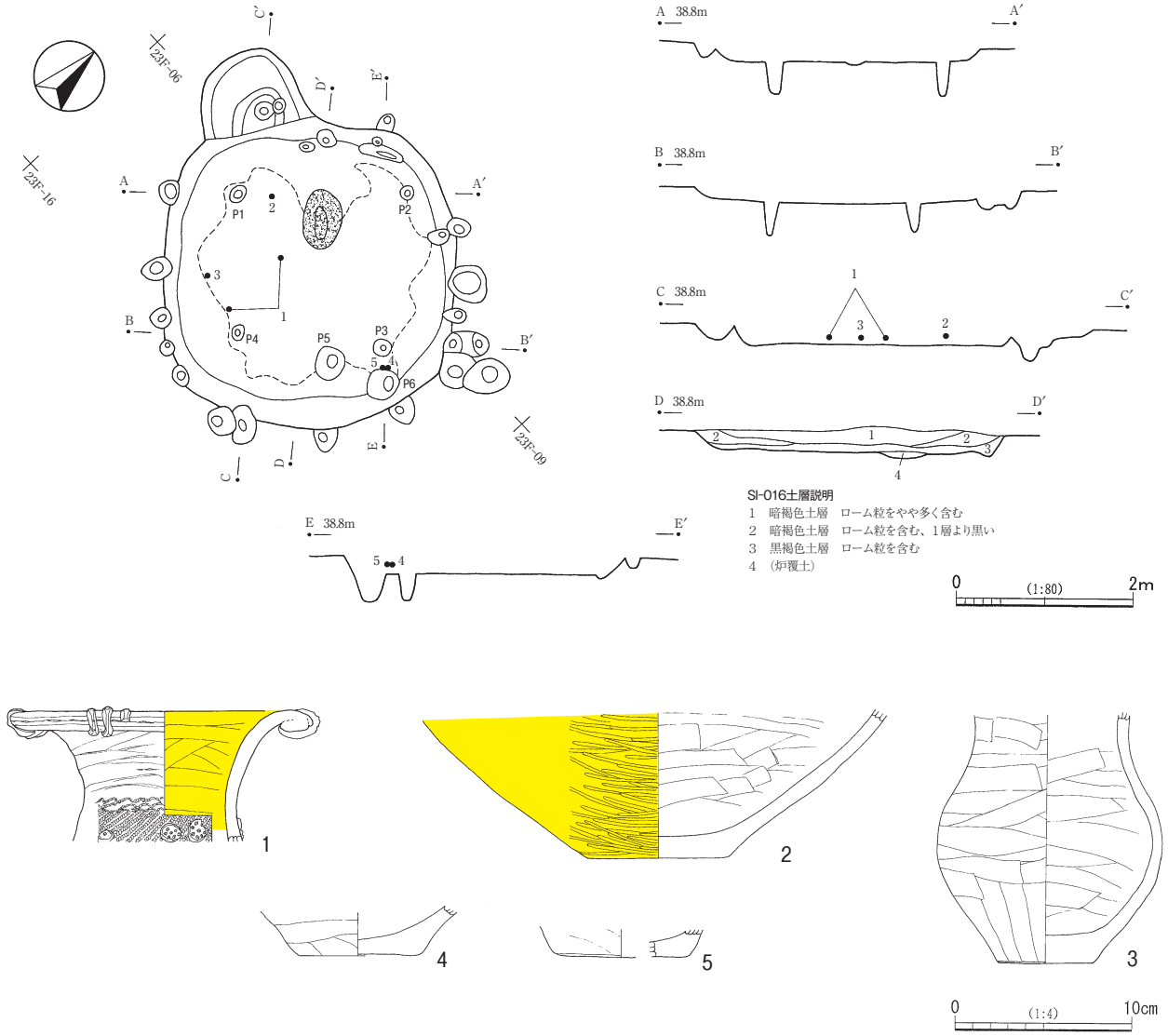
出土遺物は少なく、図示可能な遺物は２点のみである。１・２はともに壺の底部とみられる。１は底部の25％程度の遺存度である。２は底部のみ完存している。底部周縁部がやや摩滅している。

SI-016（第43図、図版７・23・31）

22F-96～98、23F-06～08・17・18グリッドに所在する。平面形は隅丸方形を呈しているが、北西壁に張り出す形で擂鉢状の落込みが見られる。落込みの中心部はピット状にくぼみ、深さは最も深い場所で検出面から37cmを測るが、住居に伴うものかどうかははっきりしない。住居の主軸方向は、N-49°-Wである。規模は長軸350cm、短軸334cmの丸味のある隅丸方形である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは27cmである。壁溝はないが、北コーナー部に僅かに溝状の落込みが見られ、部分的に壁溝



第42図　SI-015と出土遺物



第43図　SI-016と出土遺物

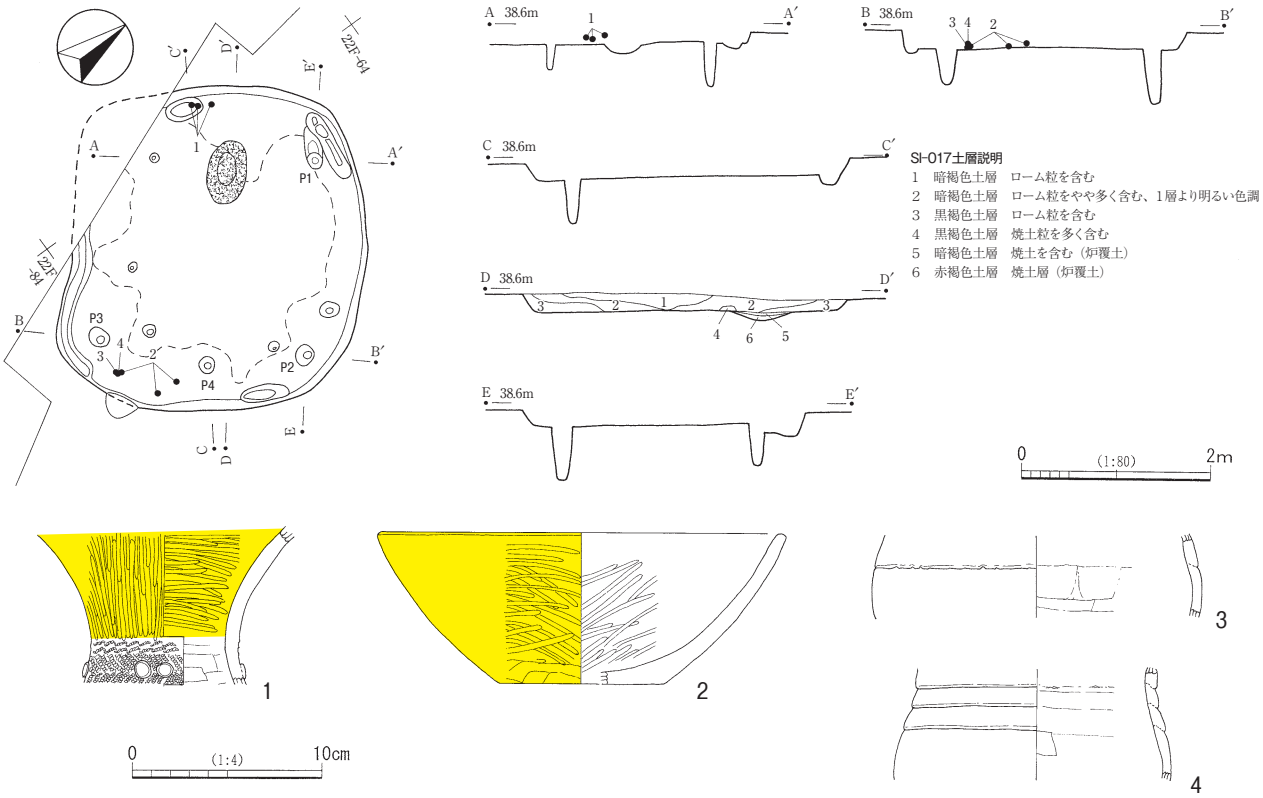
があった可能性もある。床は、炉の北側を除いて全体的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸67㎝、短軸45㎝の楕円形を呈する。断面は皿状で浅く、床面からの深さは７㎝である。ピットは、４か所の主柱穴（P1～ P4）と入口ピット（P5)、貯蔵穴（P6)、壁柱穴などと考えられる。ピットの床面からの深さは、主柱穴と考えられるものは、P1が32㎝、P2が39㎝、P3が37㎝、P4が48㎝で、入口ピットと考えられるP5は26㎝である。貯蔵穴と考えられるP6は、径35㎝の楕円形で断面は逆台形をなし、深さは床面から33㎝である。そのほかのものは壁溝状のものを含めて４㎝～10㎝であり、北東壁際のもののみ46㎝の深さがある。遺構の周囲にも、遺構に沿うようにピットが多数検出された。検出面からの深さはいずれも20㎝前後である。住居覆土は、ローム粒を含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

図示した遺物は５点で、すべて床面上より若干浮いた状態で出土した。１～３は壺である。１は口縁部から頸部がほぼ完存している。大きく開く折返しの口縁部には、剥落はあるが３本１単位の棒状浮文が４単位見られる。頸部には３段のS字状結節文が巡り、その下には縄文が施される。縄文部分には、細い竹管状工具の端部が刺突された２個１単位の円形浮文が５単位見られる。内面はミガキと赤彩が施されるが、外面には赤彩はないようである。２は底部が全部遺存している。外面は赤彩が施されている。底部周縁部がわずかに摩滅している。３は頸部から上を欠損する。底部が厚くどっしりとした壺であるが、全体に亀裂が入り、頸部の横断面形は楕円形状に歪んでいる。外面はミガキで仕上げられ、赤彩の可能性もあるが、器面が剥落してはっきりしない。胎土には黄褐色の粒子を多量に含んでいる。４・５は甕の底部である。４は底部の30％程度、５は40％程度の遺存度で、同一個体の可能性がある。

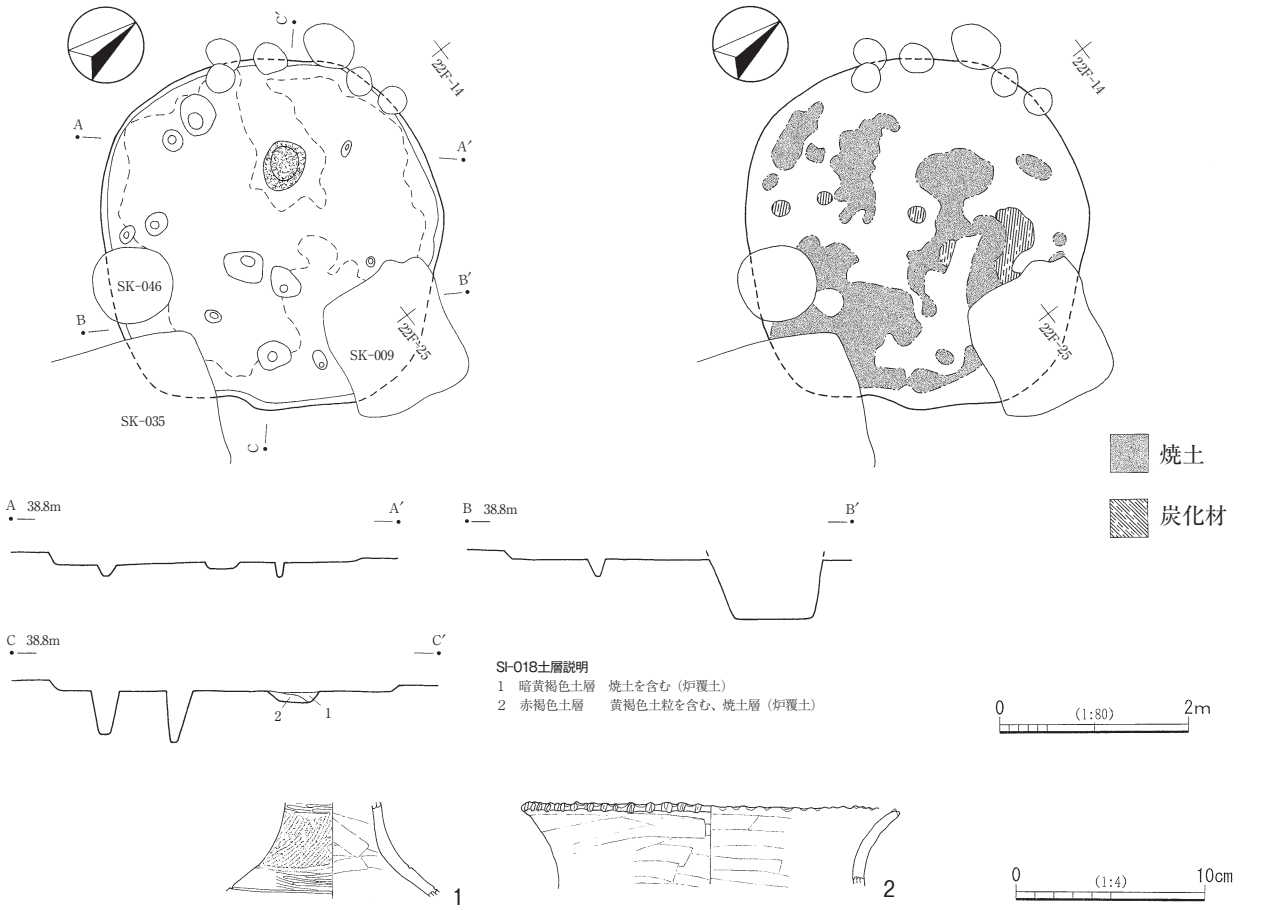
SI-017（第44図、図版７・23・31）

22F-63～65・73～75・84・85グリッドに所在する。西側の一部が調査区外となるが、平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-52°-Wである。規模は、長軸346㎝、短軸308㎝である。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは21㎝である。コーナー部分を中心に、一部に壁溝が認められる。床は、炉の北側を除き、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸60㎝、短軸43㎝の楕円形を呈する。断面は皿状で、床面からの深さは12㎝である。炉床はよく焼けている。主柱穴と思われるピットは３か所確認され、床面からの深さはP1が47㎝、P2が57㎝、P3が40㎝を測る。入口ピットと考えられるP4は46㎝である。その他のピットは、いずれも径の小さいものばかりで、35㎝～54㎝の深さがある。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物４点は、いずれも壁際から出土しており、１を除き床面直上からの出土である。１は壺の頸部で、70％程度遺存している。２段のS字状結節文の下部には縄文が施文され、３個１単位の円形浮文が４単位貼付されていたとみられる。内外面のミガキ部分には赤彩が施される。口縁部破断面が摩滅しており、器台等に転用されていた可能性もある。２は鉢で、全体の60％程度が遺存している。内外面ミガキで仕上げられており、外面は赤彩が施されているようであるが、内面は不明である。３・４は輪積み痕を残す甕で、３が径の30％、４は径の40％程度の遺存度である。いずれも最下段の輪積み痕のやや下あたりに胴部最大径がある器形で、復元した最大径はそれぞれ異なるが、胎土や焼成等の特徴から同一個体とも考えられる。４には３段の輪積み痕が残る。



第44図　SI-017と出土遺物



第45図　SI-018と出土遺物

SI-018（第45図、図版８・23）

22F-13～15・23～25・33・34グリッドに所在する。中・近世の遺構が集中する地点で検出された。中・近世の方形竪穴SK-009・035、土坑SK-046、ピット群などに切られている。平面形は丸味のある隅丸方形を呈するとみられ、主軸方向は、N-49°-Wである。規模は、長軸372cm、短軸364cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは13cmである。壁溝は認められない。床は、炉の西側を除き、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸52cm、短軸41cmの楕円形を呈する。床面からの深さは９cmである。ピットは、主柱穴と考えられる位置にあるものはいずれも20cmに満たない深さである。ほかに42cm～60cmの深さのものもあるが、中・近世のピットが群集する地点であり、また遺構の検出面からの深さが浅いことから、検出されたピットが全て住居に伴うものとは断定できない。住居覆土は遺構の遺存状態が悪いため、堆積状況等は不明であるが、床面直上には焼土が斑状に広がっていることから､住居廃絶後に廃材の焼却が行われていたと考えられる。

遺構の遺存状態が悪いことから出土遺物も少なく、図示可能な遺物は２点のみであった。１は壺頸部の40％程度の破片である。縄文が施文され、その下部は沈線で区画されている。沈線は遺存部分の下端にも１本見られ、施文部分以外はミガキが施されている。２は甕で、口縁部の50％程度の破片である。口唇部には上部と正面から押捺列が施されている。内面頸部下端には、白色物質の付着が認められる。

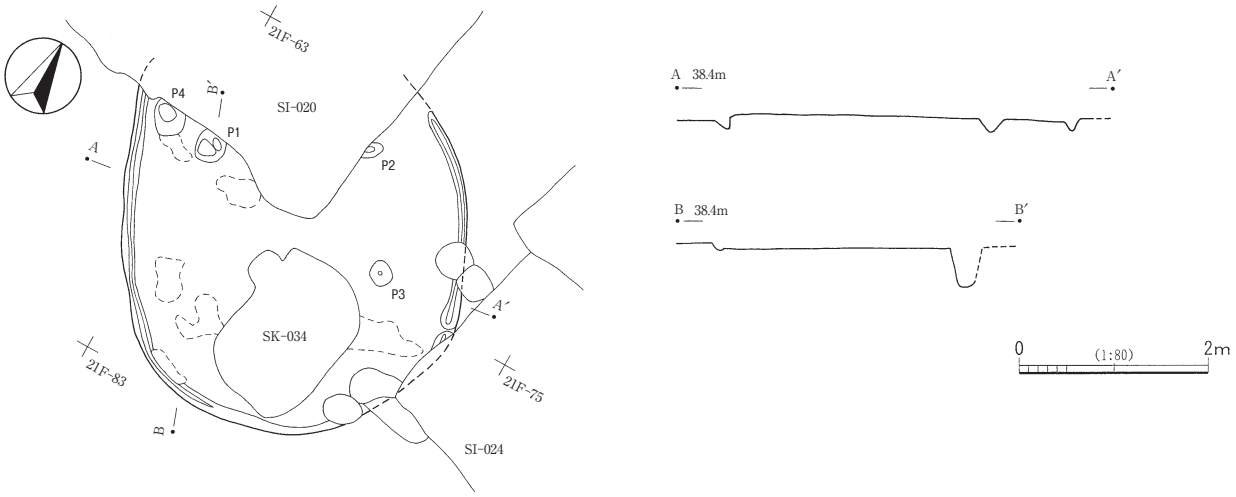
SI-021（第46図、図版８）

21F-62～64・72～74グリッドに所在する。中・近世の遺構が集中する地点で検出された。中・近世の方形竪穴SI-020・024及び土坑SK-034に切られる。平面形は楕円形状を呈し、規模は短軸368cmである。壁はほとんど遺存しておらず、検出面から床面までの深さは最大値で17cmを測るが、北側はほとんど深さがない。周溝は南東側を除き途切れながらもほぼ全周している。床は、部分的に硬化しており、床面からはピットが４か所検出された。主柱穴と考えられるピットの床面からの深さは、P1が40cm、P2が32cm、P3が16cmであるが、P3は非常に浅く主柱穴とするには貧弱である。そのほかP4は深さ41cmを測る。中・近世のピットが群集する地点であり、また遺構の遺存状態が悪いことから、検出されたピットが全て住居に伴うものとは断定できない。炉は、検出されていない。

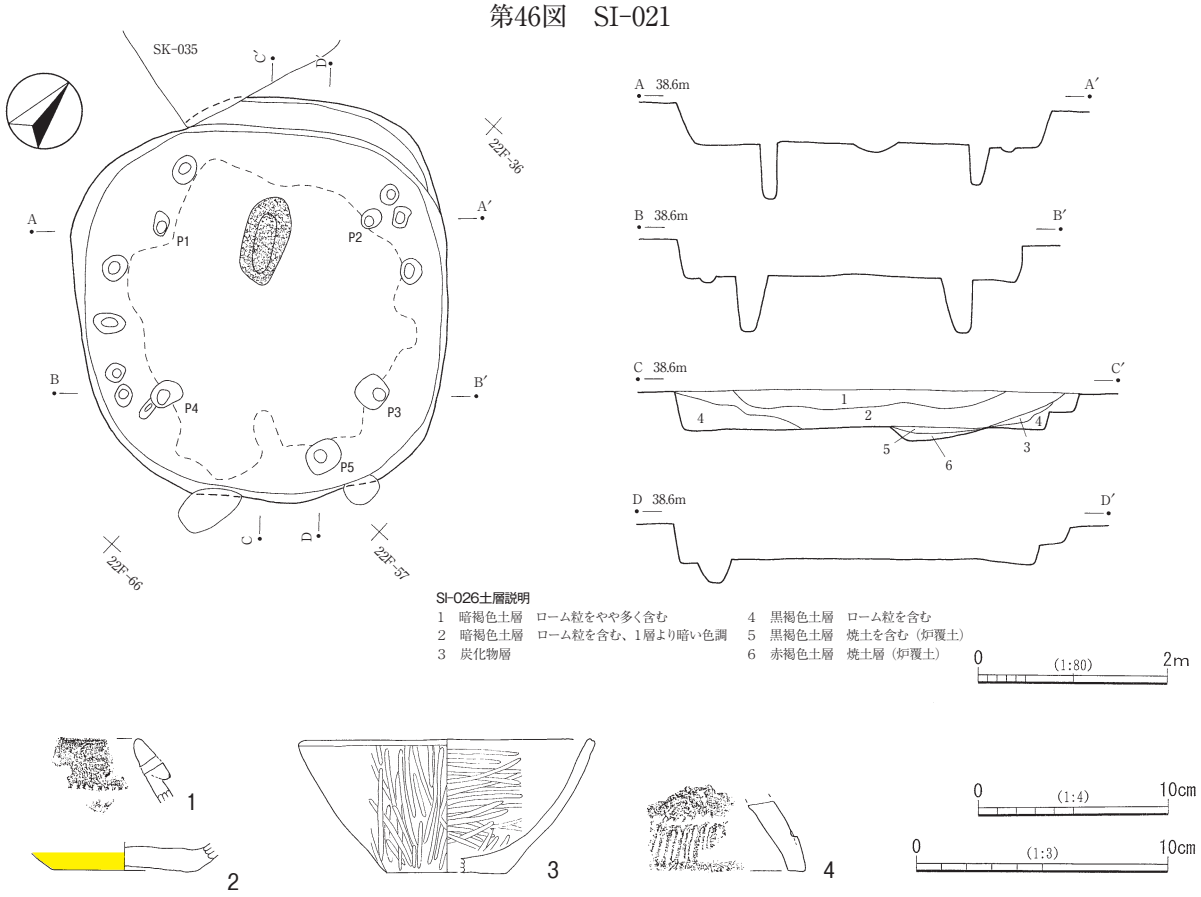
遺構の遺存状態が悪いため、出土遺物は少なく、弥生時代後期の壺・甕・高坏脚部等の細片が出土したのみである。図示した遺物はない。

SI-026（第47図、図版８・24・31）

22F-34～36・44～46・54～56グリッドに所在する。北西壁にテラス状に張り出す部分があるが、平面形は基本的にはやや丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-41°-Wである。規模は、張出し部分を含めると長軸435cmとなるが、含めなければ長軸400cm、短軸390cmである。張出し部分で中・近世の方形竪穴SK-035と重複している。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面まで深さは44cmである。壁溝はない。張出し部分は床面から約20cm上にあり、ほぼ平坦に35cmほど張り出している。断面の観察から、張出し部分は住居と一緒に埋没していることが明らかであり、別遺構ではないと考えられる。床面は全体的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸97cm、短軸47cmの楕円形を呈する。断面は皿状で、床面からの深さは13cmである。覆土は焼土



第46図　SI-021



第47図　SI-026と出土遺物

と焼土を含む黒褐色土が堆積している。ピットは、硬化面の外側に沿うように並ぶ。主柱穴と考えられるピットの床面からの深さは、P1が58cm、P2が44cm、P3が62cm、P4が58cmである。また、貯蔵穴と考えられるP5は、長軸38cm、短軸32cmの隅丸方形で、断面は逆台形をなし、深さは25cmである。そのほかのものは床面からの深さが10cm前後であり、補助柱穴などと考えられる。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなし、堆積状況はレンズ状をなす。

出土遺物は少なく、図示した４点はすべて覆土中からの出土である。１は無頸壺の口縁部破片である。折返しの端部に刻み列が巡る。焼成前穿孔が１か所認められる。２は大型の壺の底部と考えられ、70％程度の遺存度である。外面はミガキ調整で赤彩が施されている。底部周縁部が若干摩滅している。３は鉢である。全体の70％程度が遺存している。４は高坏の脚部と考えられる。折返し部には縄文が施され、端部はハケ状工具等による刻み列が巡る。円形の透し孔が認められる。

SI-027（第48図、図版８・24・31）

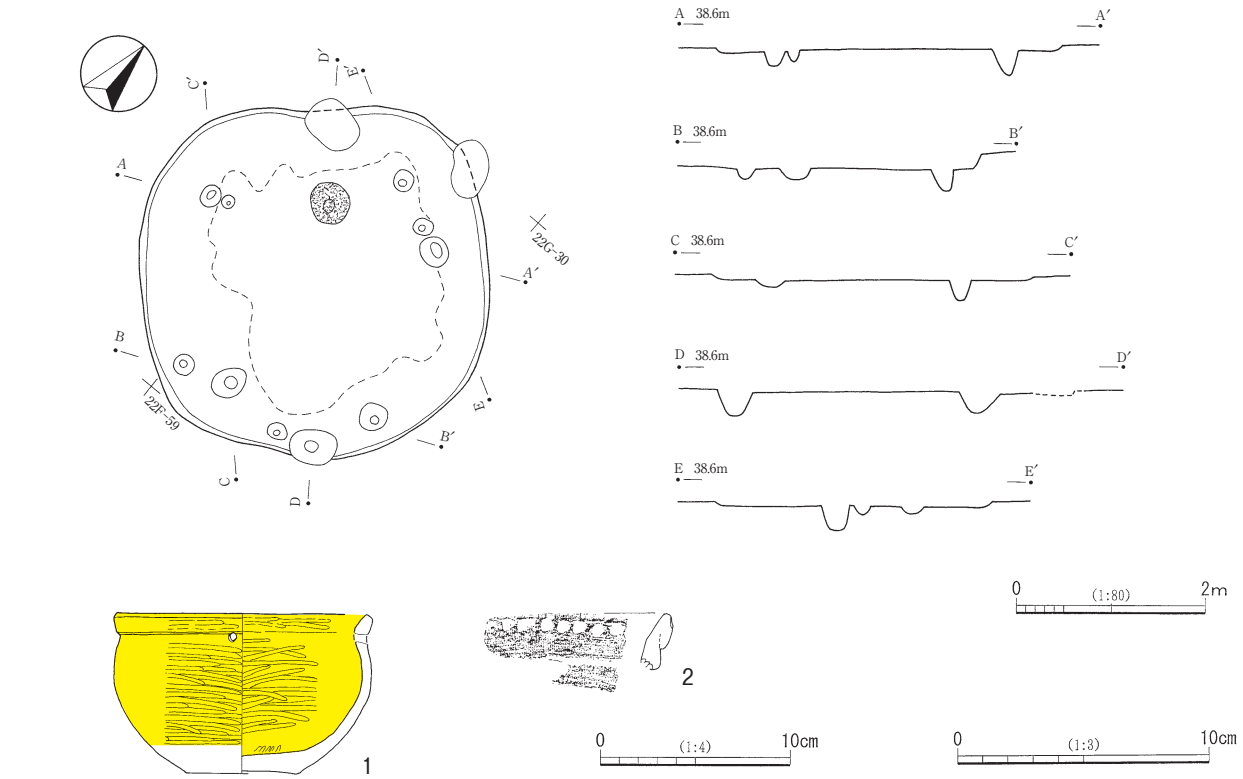
22F-38・39・48・49、22G-30・40グリッドに所在する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-39°-Wである。規模は長軸374cm、短軸368cmである。壁はほとんど残っておらず、検出面から床面までの深さは９cmである。壁溝はない。硬化面が床中央に広がる。床面からは炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸43cm、短軸38cmの円形に近い楕円形を呈する。断面は擂鉢状で、床面からの深さは20cmである。ピットは、断面図に示したものに床面からの深さが25cm前後のものがある以外は、いずれも10cm前後と浅く、主柱穴と判断できるものはない。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は２点で、覆土中からの出土である。１は鉢で、全体の30％程度が遺存しているが、底部は完存している。反り返る口縁部は折返しとなっており、折返し部直下に１か所、焼成前穿孔が認められる。内外面ともミガキで仕上げられ、赤彩が施される。底部周縁部が若干摩滅している。２は甕の口縁部破片である。輪積み痕が１段明瞭に残り、口唇部には押捺列が巡る。外面にはススが付着している。

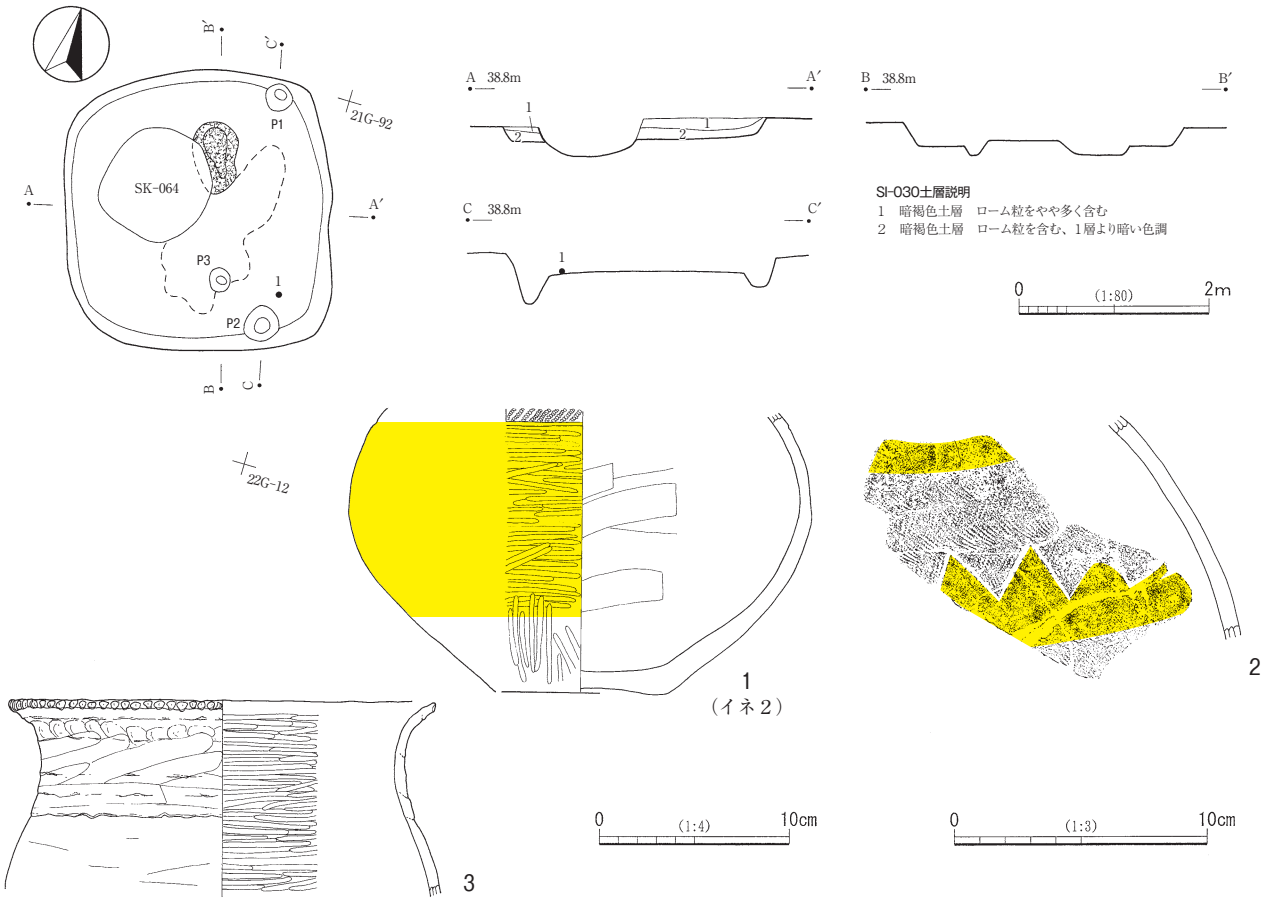
SI-030（第49図、図版８・24・32）

21G-90～92、22G-00～02グリッドに所在する。中央部を中・近世の土坑SK-064に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-18°-Wである。規模は長軸300cm、短軸280cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは28cmである。壁溝はない。炉の南側を中心に床面が硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが３か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、SK-064に切られているが、長軸75cm、短軸45cmほどの楕円形に復元される。断面は底面の広い逆台形で、床面からの深さは12cmである。ピットの床面からの深さは、P1が16cm、P2が26cm、P3が13cmである。P2は貯蔵穴、P3は入口ピットの可能性もあるが判然としない。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土で、レンズ状に堆積している。

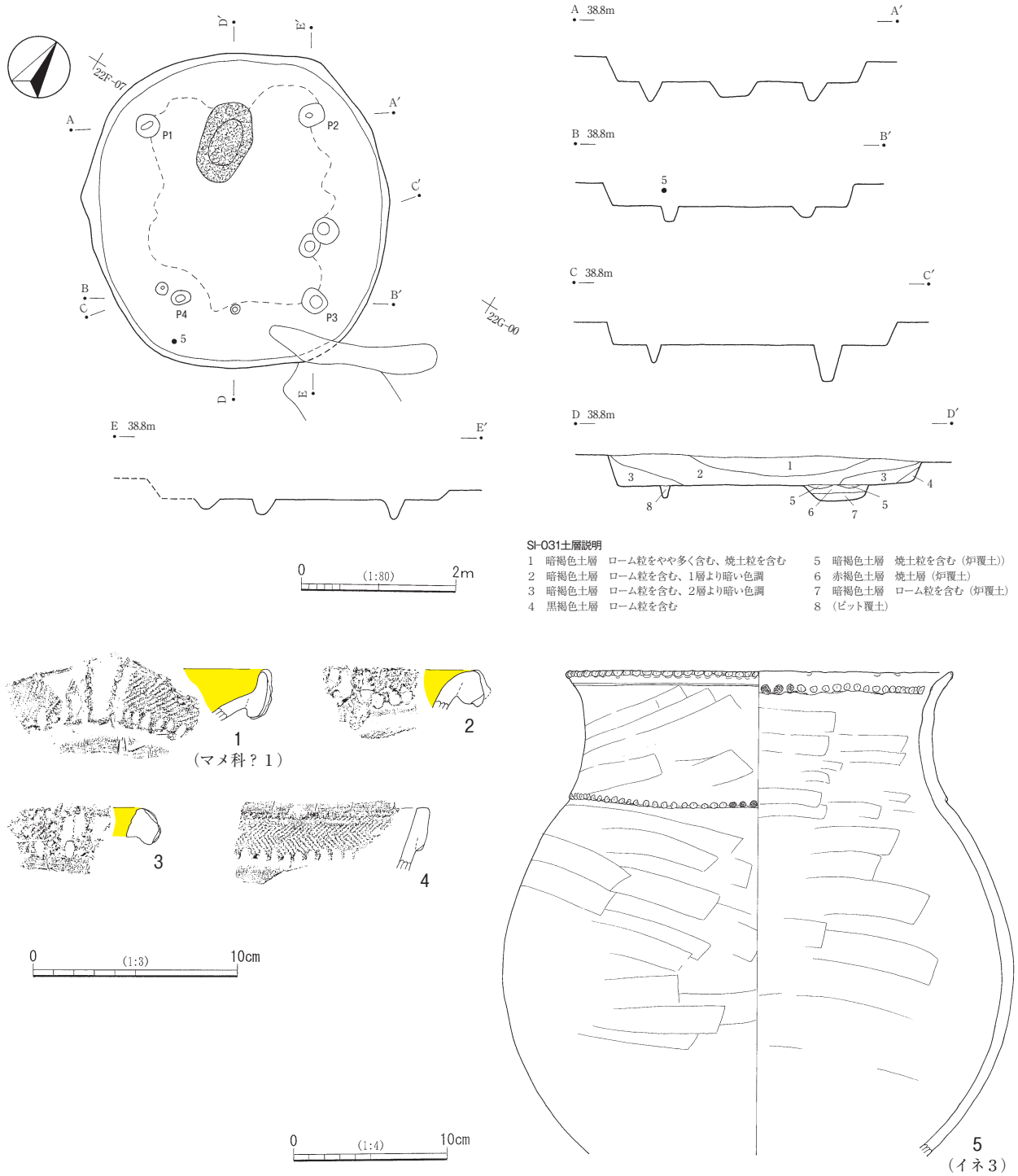
出土遺物は少なく、図示可能な遺物は３点のみである。このうち１は、P2の北側の床面直上から正位で出土している。１・２は壺である。１は胴部下半のみ完存しているが、圧力により大きく変形したとみられ、復元した器壁にずれが生じている。上端に沈線で区画された縄文帯が確認される。沈線の下はミガキで仕上げられ、胴部下端を除いて赤彩が施される。底部周縁部が摩滅している。底部内面に円形の剥落が認められる。胴部内面にイネ（種子）と底部外面にイネ（籾）の圧痕が計２点見つかった。２は肩部破片で、器面が摩耗しているが、縄文帯がＳ字状結節文や山形の沈線で区画され、区画の間が赤彩されている。３は甕で、口縁部の40％程度が遺存している。口唇部には指頭による押捺が巡り、頸部には一部ナデ消されているものの、輪積み痕が６段確認できる。内面は丁寧に磨かれている。口唇部を除く外面全体にススが付着している。



第48図　SI-027と出土遺物



第49図　SI-030と出土遺物



第50図　SI-031と出土遺物

SI-031（第50図、図版８・24・32）

21F-97～99、22F-07～09・17～19グリッドに所在する。東側に一部撹乱が入るが、平面形は丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-34°-Wである。規模は長軸412cm、短軸386cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは41cmである。壁溝はない。床面は炉の北側を除き全体的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが８か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸106cm、短軸62cmの楕円形を呈する。断面は逆台形をなし、床面からの深さは25cmとやや深めで

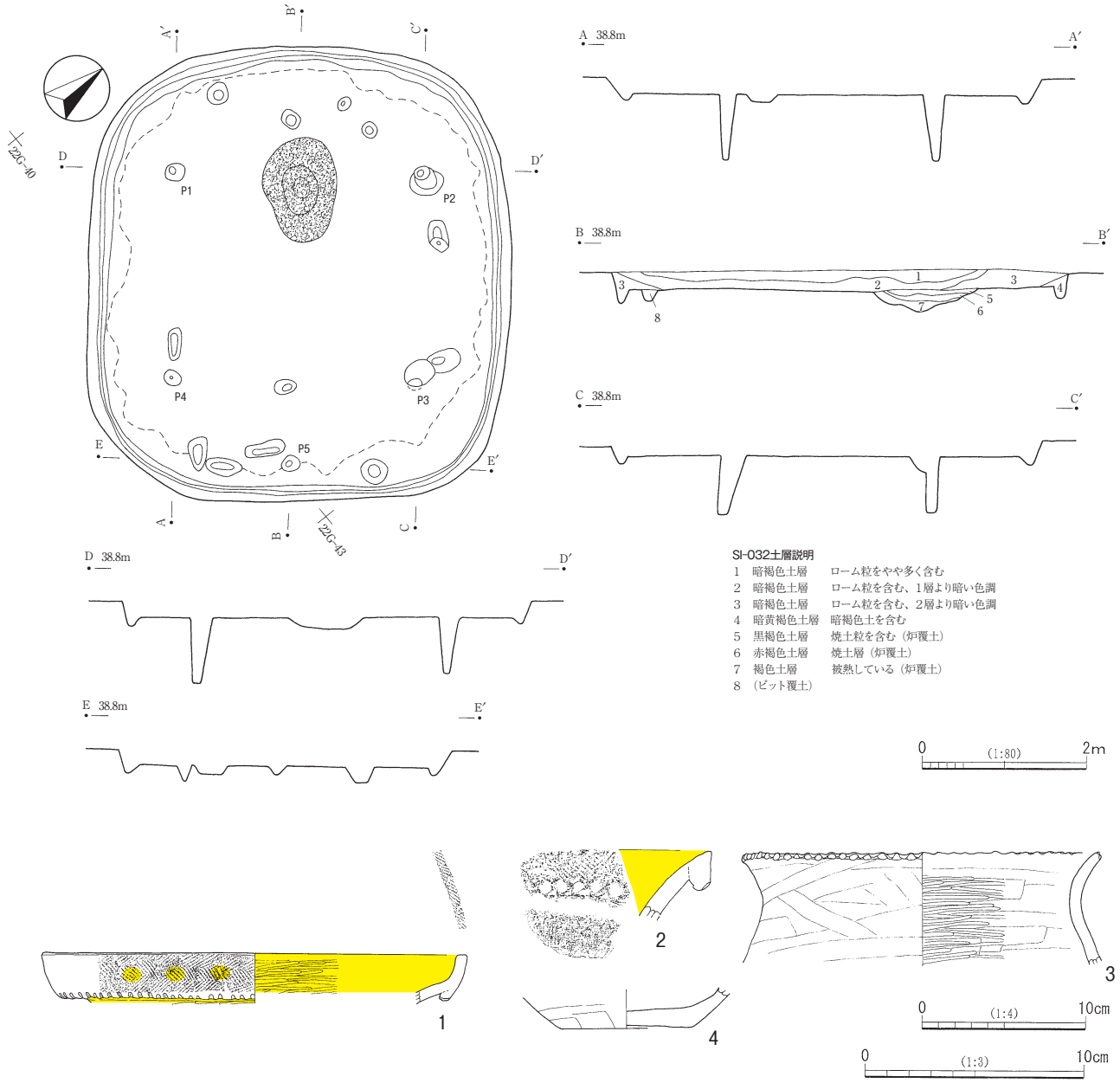
ある。焼土が10cm堆積している。ピットの床面からの深さは、P1が30cm、P2が34cm、P3が15cm、P4が17cmである。主柱穴が想定される位置から検出されたが、いずれも浅い。そのほかは20cm前後の深さである。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は５点である。このうち５は、住居が若干埋没した段階で南西壁際から投棄されたような状態で出土している。１～３は壺の口縁部破片である。１は折返し口縁上に縄文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。２本１単位の刻みのついた棒状浮文がある。受け口状となる内面は赤彩されている。口縁部内面にマメ科？の圧痕が１点見つかった。２・３は折返し口縁に縄文が施され、端部に棒状工具による押捺列が巡る。破損しているが棒状浮文が２本確認される。内面は著しく剥落しているが、赤彩が確認できる。２と３は同一個体の可能性がある。４は鉢の口縁部破片で、折返し口縁部には羽状縄文が施文され、端部に布巻棒状工具の押捺列が巡る。口唇部は面取りされて平坦である。５は大型の甕で、胴部最大径の30％程度が遺存している。復元口径は24.8cm、復元胴部最大径は33.4cmで、胴部最大径の方が口径より大きい器形である。口唇部には指頭による押捺列が巡り、その下には沈線が１本横走している。頸部には輪積み痕が１段残されており、輪積み痕の接合部分には布巻棒状工具による押捺列が施されている。内面は、口縁部が折返し状となっており端部に布巻棒状工具の押捺列が巡る。胴部内面にイネ（種子・籾殻）と胴部外面にイネ（種子）の圧痕が計３点見つかった。

SI-032（第51図、図版８・24・32）

22G-10～12・20～23・30～33・40～42グリッドに所在する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-50°-Wである。規模は長軸554cm、短軸520cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは31cmである。壁溝が全周する。床は全体的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸127cm、短軸88cmのややいびつな楕円形を呈する。断面は皿状で、床面からの深さは28cmである。焼土が10cm堆積している。ピットの床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が78cm、P2が64cm、P3が75cm、P4が80cmで、入口ピットと考えられるP5は15cmである。そのほかは20cm前後、溝状のものは10cm前後である。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、堆積状況はレンズ状を示す。

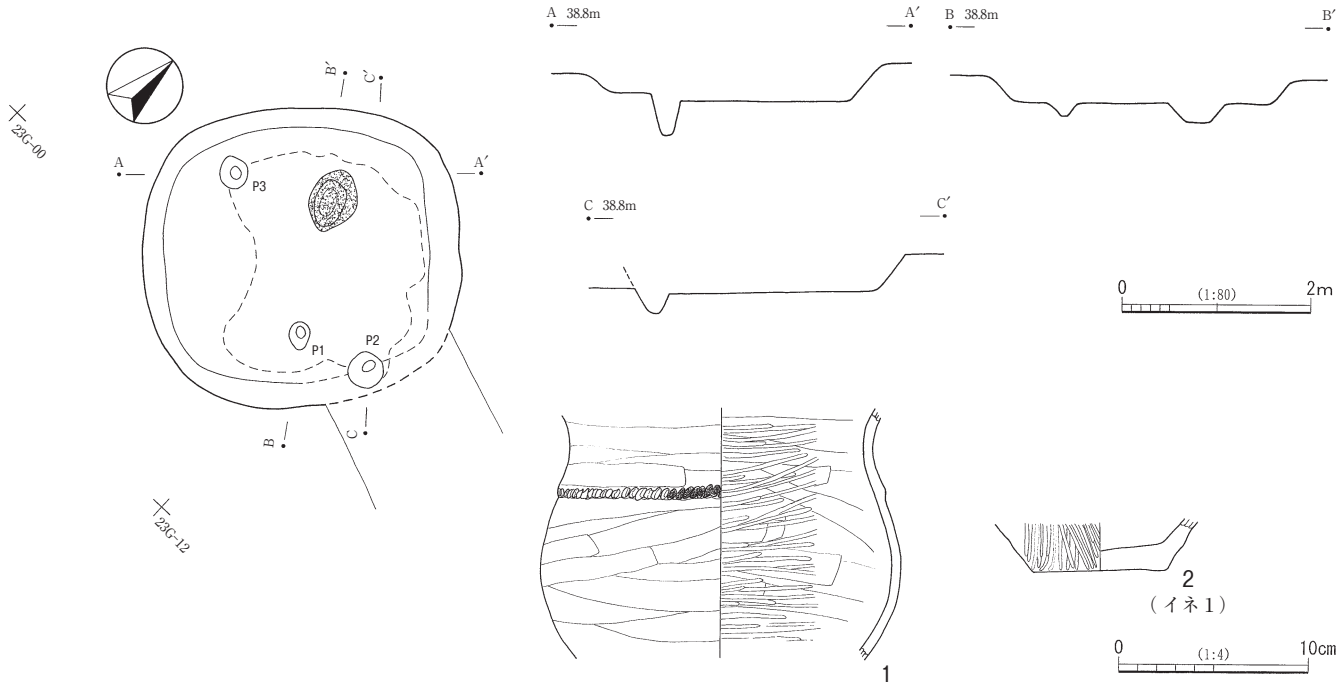
出土遺物は少なく、図示した遺物は４点である。このうち３がP3から出土したほかは、住居覆土中からの出土である。１・２は壺である。１は口縁部の20％程度が遺存している。折返し口縁部には羽状縄文が施文され、その上に径10mm程の円形彩文が一列、ほぼ等間隔に巡る。面取りされた口唇部にも縄文が施文される。折返し端部には棒状工具による押捺列が巡る。頸部と受け口状の内面はミガキが施され赤彩される。２は口縁部破片である。器面が摩耗しているが、折返し口縁部には縄文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。ミガキの施された頸部外面は、赤彩されている可能性もあるが、はっきりしない。内面は著しく剥落しているが、ミガキが施され、赤彩されている。３は甕で、口縁部の20％程度が遺存している。口唇部は上部と正面からの指頭押捺列が巡る。下端には輪積み痕が１段認められる。外面には全体的にススが付着している。４は底部で、甕と考えられる。内部にコゲが付着している。



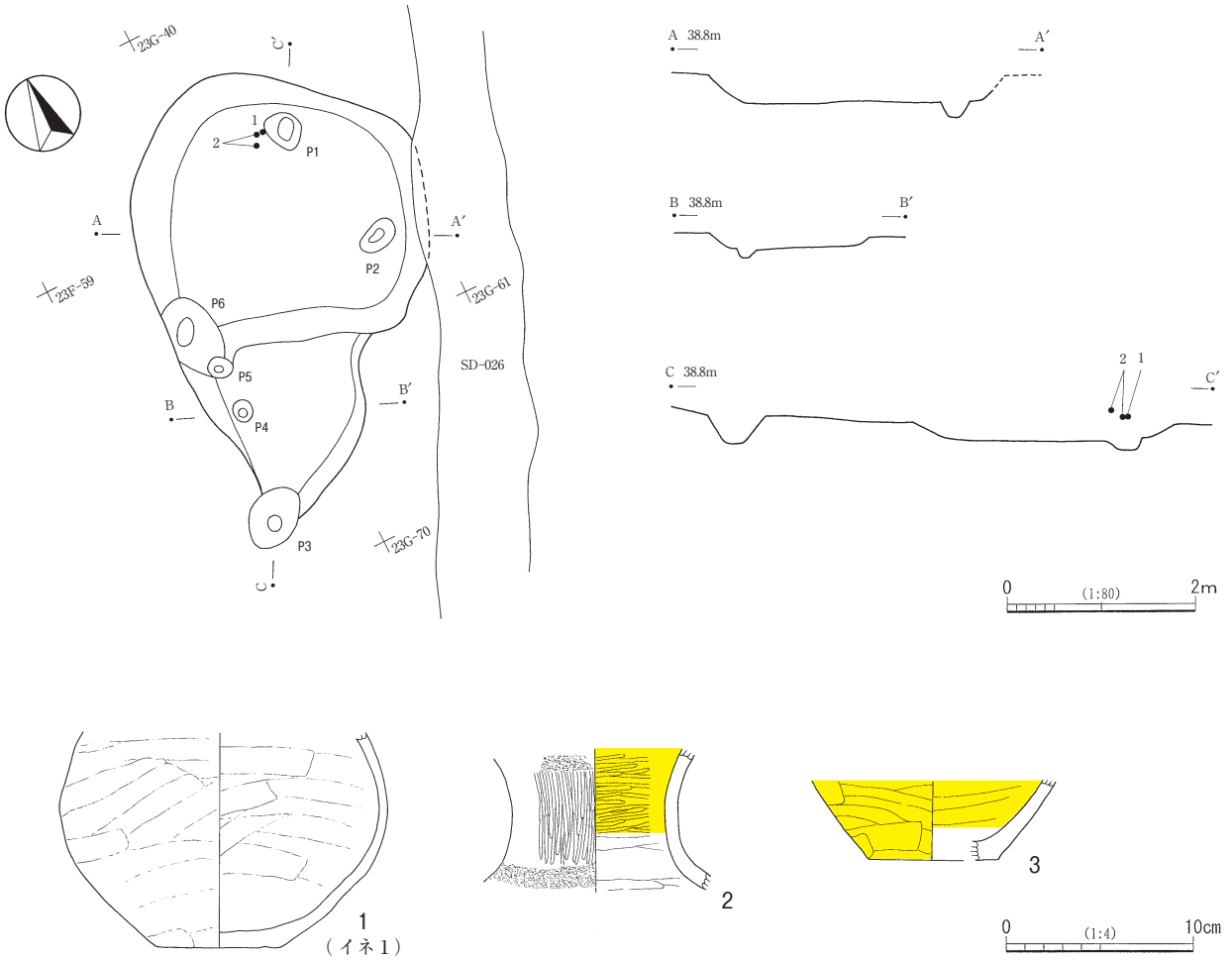
第51図　SI-032と出土遺物

SI-034（第52図、図版９・24・32）

22G-81・82・90～92、23G-00・02グリッドに所在する。西側は平成20年度に「SI-034」として調査を行い、東側は平成22年度-3で「SI-029」として調査を行った。報告に当たり、遺構名を「SI-034」に統合し、平成22年度-3の「SI-029」は欠番とした。東側に撹乱が入るが、平面形はやや丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-45°-Wである。主軸方向である北西-南東軸よりも南西-北東軸のほうがやや長く、規模は長軸340cm、短軸360cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは39cmである。壁溝はない。硬化面が床中央部に広がっている。床面からは炉１基とピットが３か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸68cm、短軸48cmほどの楕円形を呈する。断面はやや深めの皿状を呈し、床面からの深さは23cmである。覆土は焼土と黒褐色土が互層をなしている。P1は入口ピットと考えられ、床面からの深さは19cmである。P2は貯蔵穴と考えられ、平面は径35cmの円形で断面は逆台形をなし、深



第52図　SI-034と出土遺物



第53図　SI-035と出土遺物

さは28cmである。また、P3の深さは47cmである。覆土は、大きく上下２層に分けられ、下層に明褐色土を含む暗褐色土が、上層に黒褐色土が堆積していた。なお、図版９の完掘状況写真は、平成22年度-3調査時に撮影したものである。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は２点である。いずれも覆土中からの出土である。１・２は甕で、１は胴部最大径の30％程度が遺存している。輪積み痕が１段残され、接合部分には布巻棒状工具による押捺列が巡る。外面胴下部にはスス、内面胴下部にはコゲが見られる。口唇部破断面が摩滅している。２は底部の45％程度の破片である。底部外面にイネ（籾）の圧痕が１点見つかった。

SI-035（第53図、図版９・24・32）

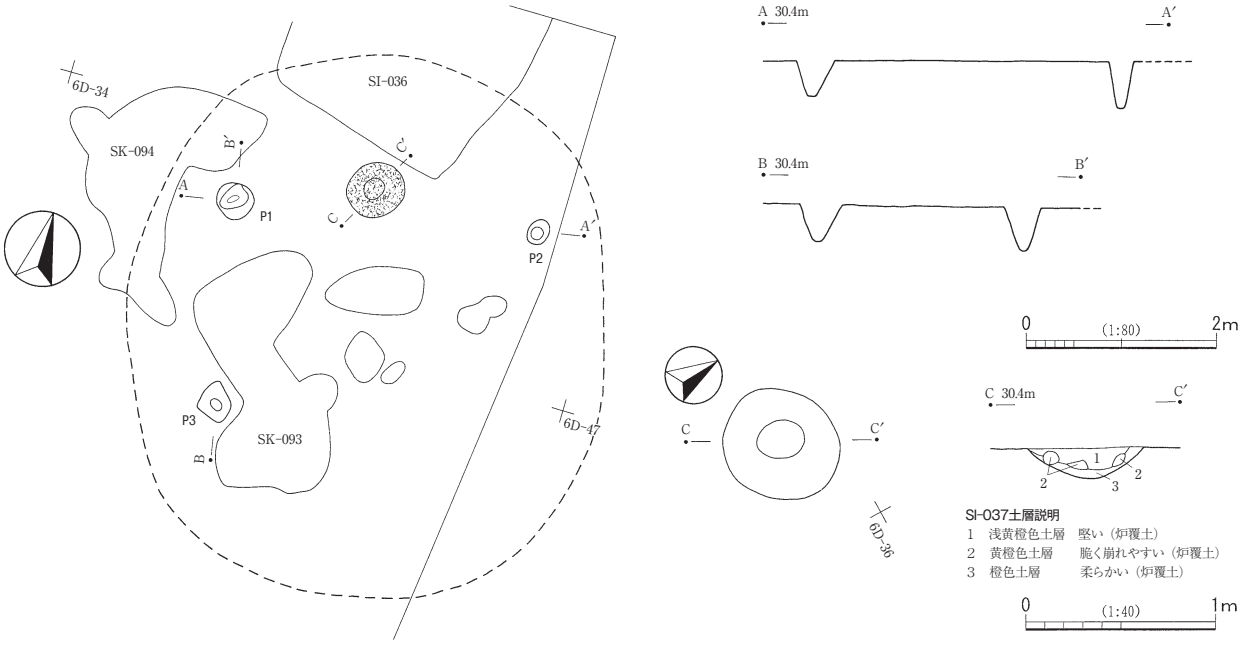
23F-49・59・69、23G-40・41・50・51・60グリッドに所在する。西側は平成20年度に「SI-035」として調査を行い、東側は平成22年度-3で「SI-030」として調査を行った。報告に当たり、遺構名を「SI-035」に統合し、平成22年度-3の「SI-030」は欠番とした。東側を中・近世の溝状遺構SD-026に切られている。平面形は不整形を呈し、北側と南側とで床面にも段差があることから、１軒の住居跡ではない可能性もある。規模は、長軸で500cmほどである。壁は緩く立ち上がり、床は北側の方がほぼ平坦で、検出面からの深さは40cmほどである。南側は北側に向かって緩やかに低くなっている。壁溝はない。いずれの床からも硬化部分は認められない。ピットは６か所検出され、深さはP1が10cm、P2が19cm、P3が29cm、P4が10cm、P5が23cm、P6が14cmである。ピットの機能等は不明である。炉は検出されなかった。覆土は褐色土が主体をなしている。なお、図版９の完掘状況写真は、平成22年度-3調査時に撮影したものである。

出土遺物は少なく、図示した遺物３点は、いずれも覆土中からの出土である。１・２は壺である。１は胴部から底部の70％程度が遺存しており、底部は完存する。外面の剥落が著しく、調整ははっきりしないがミガキで仕上げられているようである。底部周縁部が若干摩滅している。底部内面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。２は頸部の60％程度が遺存している。頸部の上端と下端には、Ｓ字状結節文で区画された縄文帯が巡る。内面には赤彩が見られる。３は鉢で、内外面ともミガキで仕上げられ、赤彩されている。

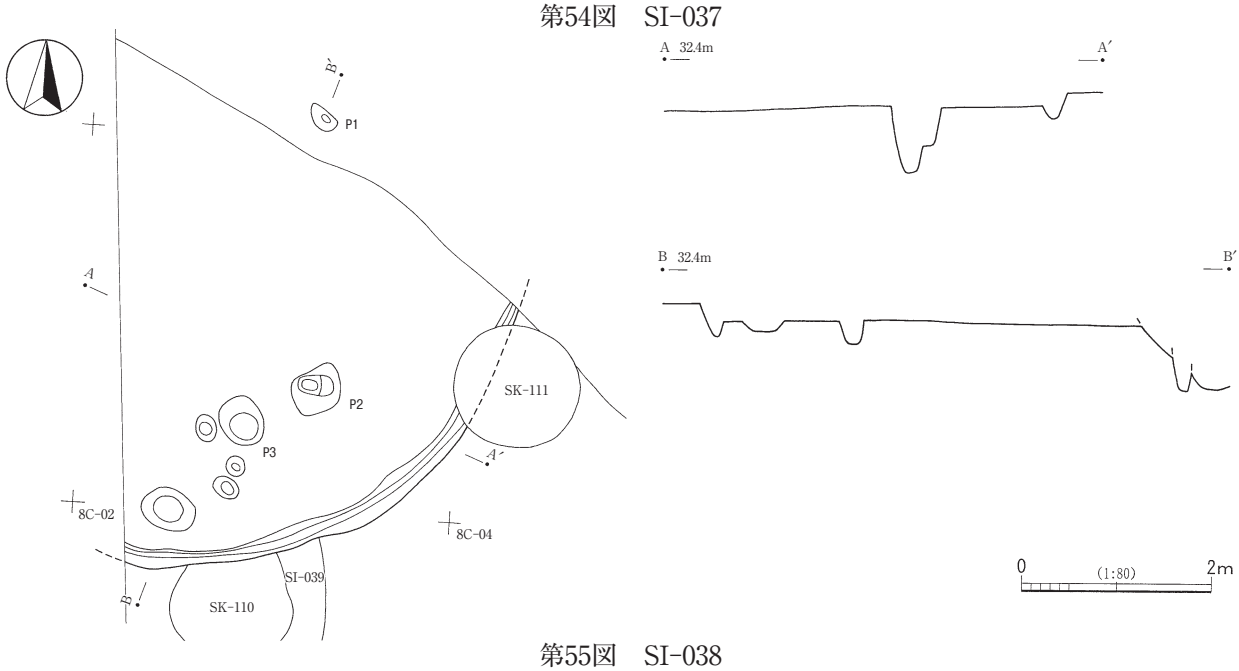
SI-037（第54図、図版９）

6D-24～26・34～37・44～47・55・56グリッドに所在する。古墳時代の竪穴住居跡SI-036や中・近世の土坑SK-093・094、複数のピットなどがある中、炉１基と柱穴と考えられるピットのみ検出された遺構である。松川を望む台地の北端に位置し、北側は斜面で本調査区外となっている。また、東側は調査区外となる。壁は遺存しておらず、また遺物も出土していないが、楕円形もしくは隅丸方形を呈する弥生時代の竪穴住居跡と考えられる。炉は長軸63cm、短軸58cmの円形に近い楕円形を呈する。断面は擂鉢状で床面からの深さは15cmである。ピットは、周辺から多数検出されたが、比較的深く掘り込まれたP1～P3がこの住居の主柱穴と考えられる。ピットの床面からの深さは、P1が44cm、P2が53cm、P3が39cmである。

遺物は出土していない。



第54図　SI-037

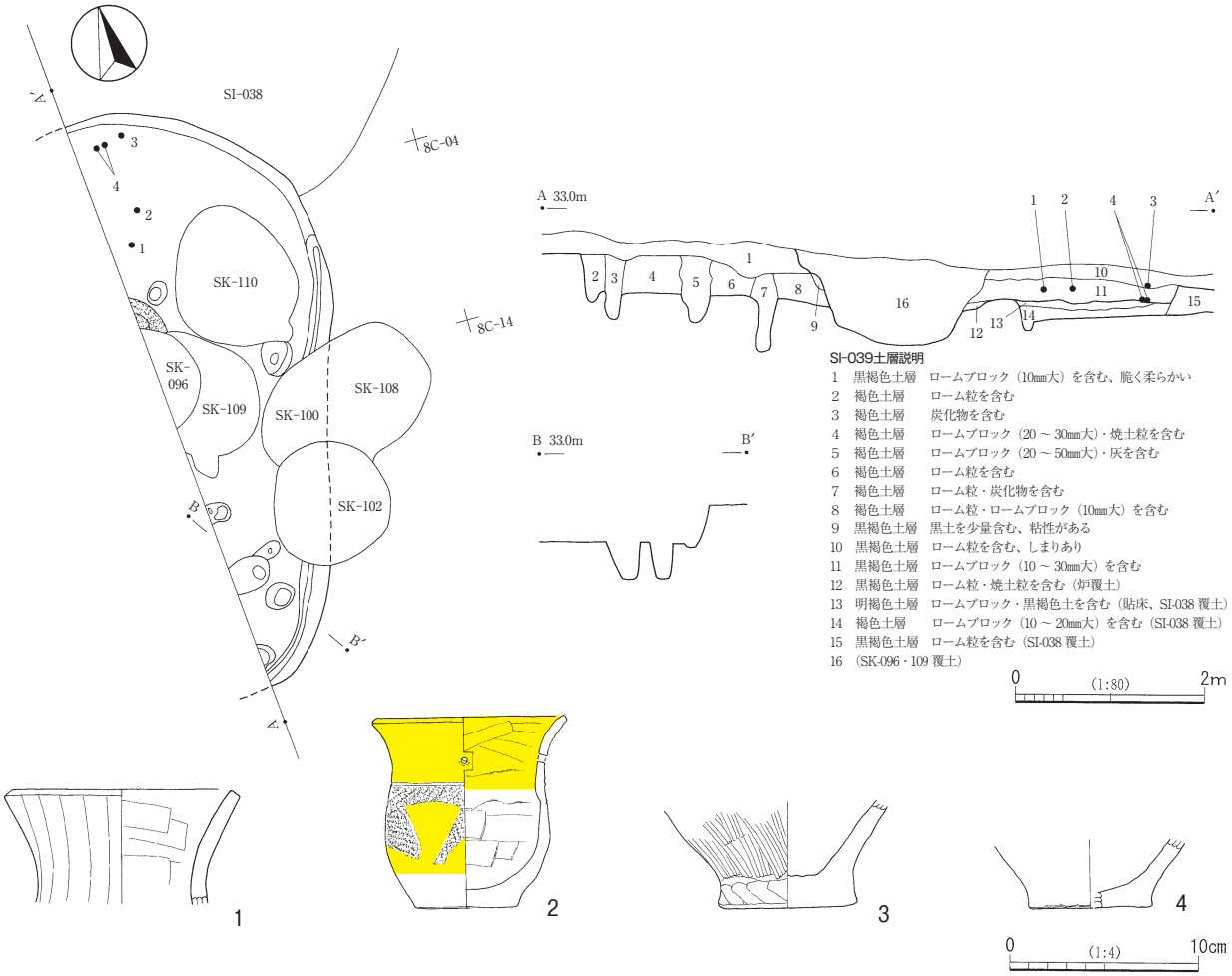


第55図　SI-038

SI-038（第55図、図版９）

7C-72・73・82～84・92～94、8C-02・03グリッドに所在する。北側は中・近世の溝状遺構SD-030に切られ、その更に北側は遺存していないようである。東側は中・近世の土坑SK-111と、南側は弥生時代の竪穴住居跡SI-039及び中・近世の土坑SK-110と重複する。西側は調査区外となる。限られた範囲ではあるが、壁溝を伴う壁といくつかのピットが検出され、円形か楕円形を呈する竪穴住居跡と考えられる。検出面から床面までの深さは20cmほどである。SI-039との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構の方が古いが、床面レベルがSI-039より低いため床面が遺存していた。ピットの床面からの深さは、P1が74cm、P2が69cm、P3が63cmと深いほかは、７cm～27cmである。P1からP3は柱穴の可能性がある。炉は検出されていない。

遺物は、弥生時代中期の壺・甕の小破片が僅かに出土したのみで、図示していない。



第56図　SI-039と出土遺物

SI-039（第56図、図版９・24・32）

7C-92・93、8C-02・03・12・13・22グリッドに所在する。中・近世の土坑群SK-096・100・102・108・109・110に切られ、北側で弥生時代の竪穴住居跡SI-038と重複し、西側が調査区外となるが、楕円形を呈する竪穴住居跡と考えられる。当遺構はSI-038に貼床して構築されており、新旧関係はSI-038より新しい。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは36cmである。東側から南側にかけて壁溝が認められる。炉は、中央部北西寄りからSK-096に切られ、調査区外にかかるように検出された。床面からの深さは18cmである。ピットの床面からの深さは、土層断面に表されたものは30cm～57cmと比較的深いが後世の撹乱の可能性がある。そのほかは10cm前後である。住居覆土には焼土や炭化物が含まれており、住居廃絶後、廃材の焼却が行われた可能性がある。

図示した遺物は４点である。１が床面直上からの出土であるほかは、覆土中からの出土である。１は壺口縁部である。外面はミガキで仕上げられ、比較的丁寧な作りである。２は小型の広口壺である。底部は完存するが、口縁部が20％程度遺存している。胴部には、縄文が沈線によって区画された結紐文が配置される。結紐文は、全てが遺存しているわけではなく不明な部分もあるが、全周で４単位認められ、そのうち１単位は「ハ」字状の右側の斜めの部分が２本あり、不規則である。外面は、胴下部と施文部分を除いて赤彩されている。赤彩は口唇部にも及んでおり、頸部内面まで施される。頸部に１か所焼成前穿孔が見られる。３・４は底部である。３は完存している。底部が厚く重く、非常に安定している。ハケ調整が施

され、底面はナデ調整となっている。底部内面が摩耗している。甕であろう。４は底部の40％程度が遺存している。内外面とも器面が著しく剥落し、調整痕はほとんど観察できない。器面の荒れた状態から甕と考えられる。

SI-044（第57図、図版９・24・32）

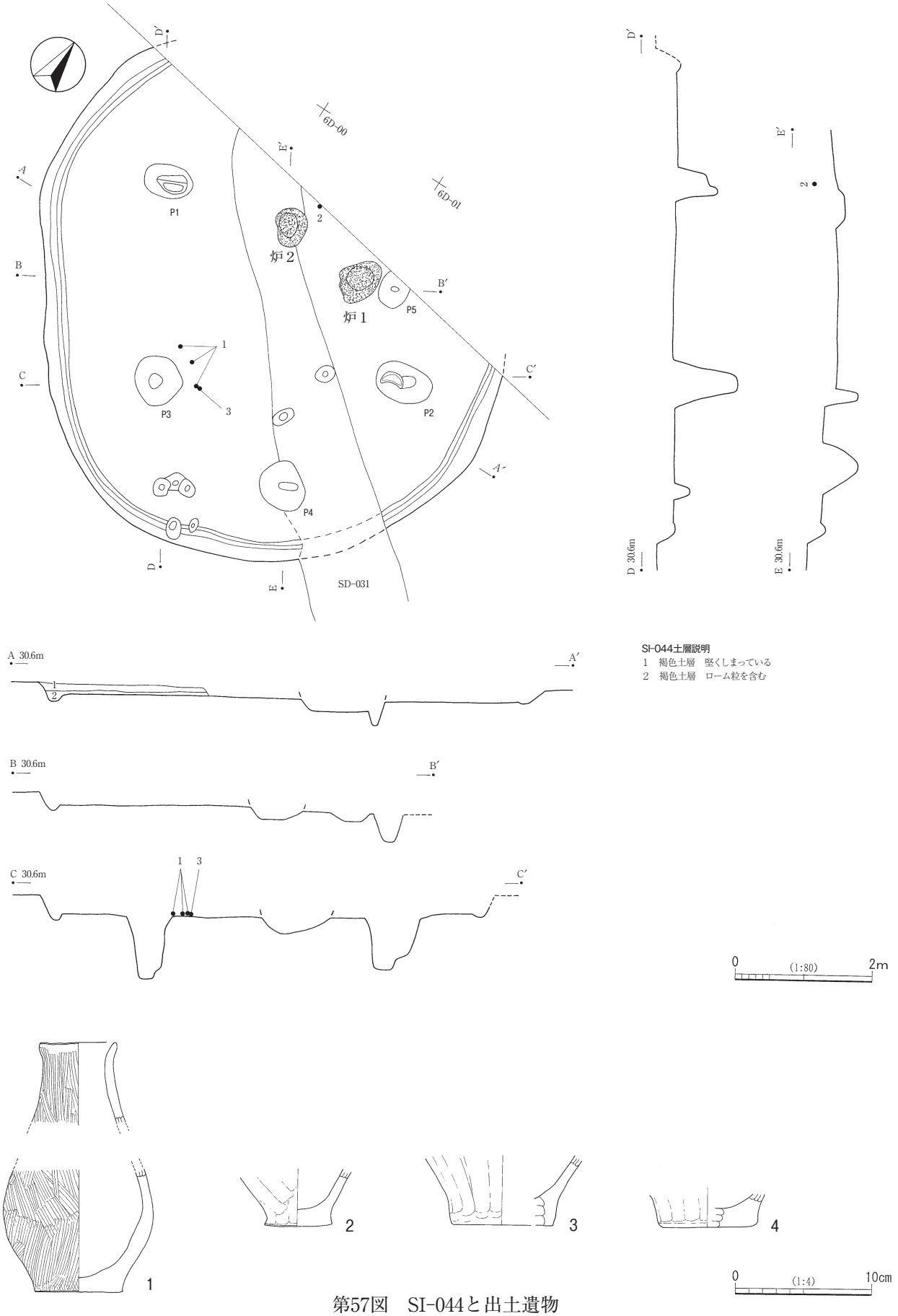
6C-08・09・18・19・28・29・39、6D-00～02・10～12・20～22・30・31グリッドに所在する。中・近世の土塁SA-001下で検出された。松川を望む台地の北端に位置し、北側は斜面で本調査区外となっている。中央を奈良・平安時代の溝状遺構SD-031に切られる。平面は楕円形を呈し、主軸方向は、N-34°-Wである。規模は長軸で800cmほど、短軸680cmほどに復元可能で、今回報告する弥生時代竪穴住居跡の中では最大規模である。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは45cmである。壁溝が全周している。床面からは炉２基とピットが複数検出された。２基の炉は、それぞれ中央部の北東寄り（炉１）と北寄り（炉２）に位置している。炉１は、長軸72cm、短軸57cmの不整楕円形を呈し、床面からの深さは11cmである。炉の北に寄った部分から、壺胴部片が立てられた状態で出土した。炉２は、長軸56cm、短軸43cmの不整楕円形を呈し、床面からの深さは19cmである。炉の中央東寄りから甕胴部片が立てられた状態で出土した。いずれの炉床もよく焼けて堅く締まっていた。主柱穴と考えられるピットの床面からの深さは、P1が66cm、P2が77cm、P3が94cmで、入口ピットと考えられるP4は50cmである。また、P5は深さ50cmで、貯蔵穴又は補助柱穴と考えられる。そのほか、径の小さいピットはいずれも27cm～38cmである。

図示した遺物は４点である。１・３は床面直上からの出土で、それ以外は覆土中からの出土である。１は壺で、同一個体と考えられる口縁部から頸部と胴部から底部を図上で復元したものである。遺存度はそれぞれ口縁部の70％、底部の90％である。口唇端部が摩滅している。外面はハケ調整である。底面はナデ調整とみられるが、木葉痕があるようにも見える。２は壺と考えられ、60％が遺存している。ハケ調整痕が残る。３・４は甕の底部と考えられる。３は20％、４は25％程度の依存度で、外面はヘラによるナデ調整で仕上げられている。３は内面にコゲが付着し、底部内面が摩耗している。４は外面にススの付着が認められる。

2SI-001（第58図、図版９・24・32）

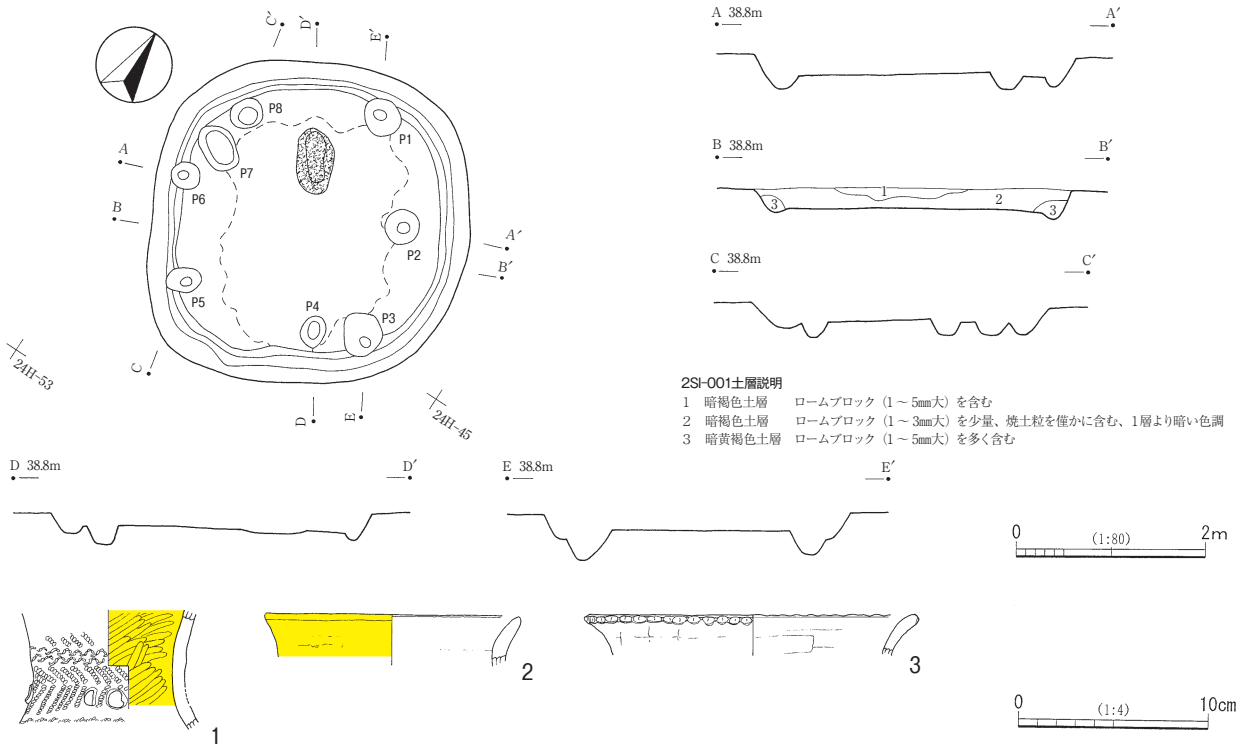
24H-23・24・33・34・43・44グリッドに所在する。平面形は一辺340cmの丸味のある隅丸正方形を呈し、主軸方向は、N-35°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは19cmである。壁溝は全周する。床は全面的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが８か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸59cm、短軸33cmの長楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは３cmである。覆土には焼土がブロック状に入り、炉床はよく熱を受けて赤化している。ピットの床面からの深さは、P1が20cm、P2が13cm、P3が30cm、P4が19cm、P5が13cm、P6が13cm、P7が16cm、P8が15cmである。検出位置からP4は入口ピットの可能性がある。南コーナー付近の床面には、径45cmほどの範囲に粘土が薄く堆積していた。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は３点である。いずれも覆土中からの出土である。１・２は壺である。１は頸部の60％程度が遺存している。２段のＳ字状結節文に縄文帯が区画され、２個１単位の円形浮文が

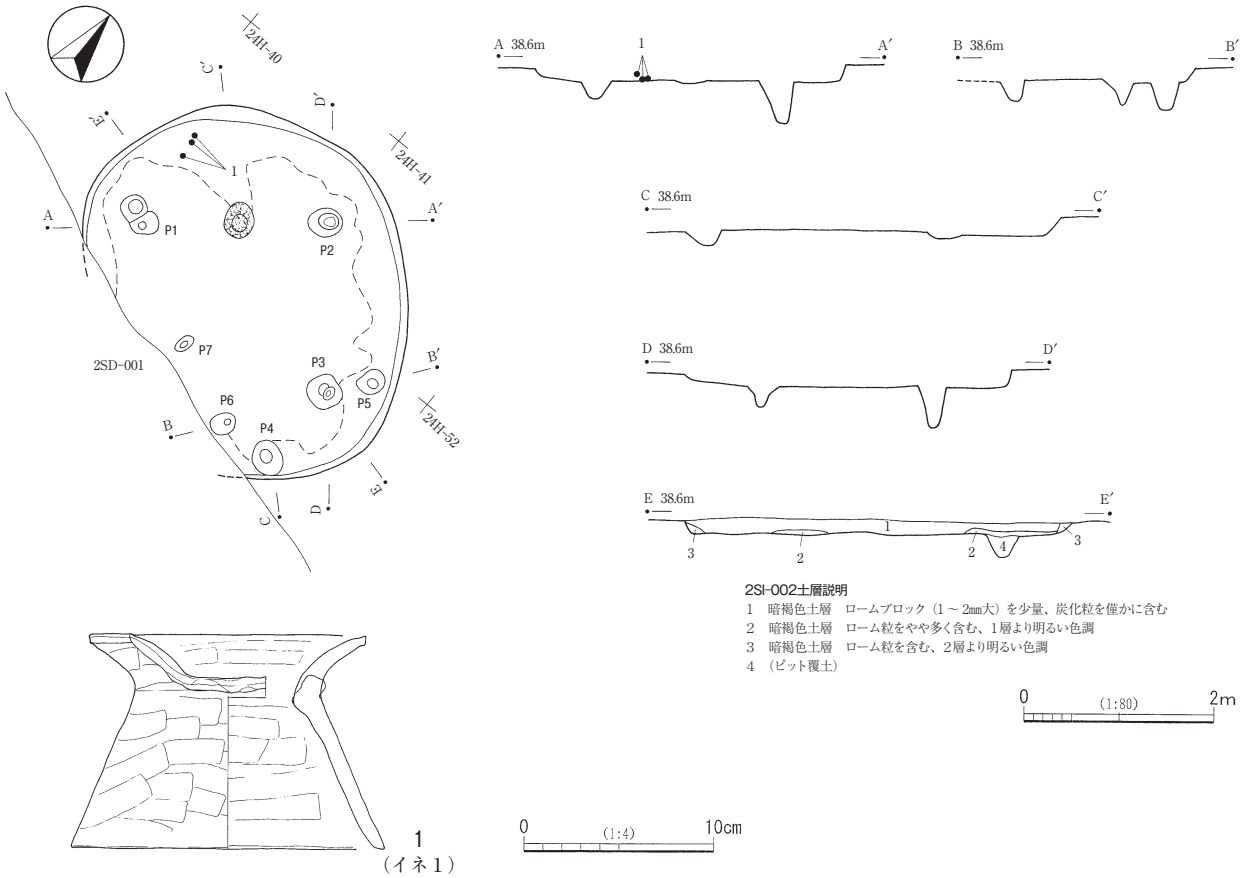


SI-044土層説明
1　褐色土層　堅くしまっている
2　褐色土層　ローム粒を含む

第57図　SI-044と出土遺物



第58図　2SI-001と出土遺物



第59図　2SI-002と出土遺物

見られる。円形浮文は全周で４単位貼付されていると考えられる。内面には赤彩が見られるが、外面の赤彩は不明である。下側の破断面が著しく摩滅しており、器台として転用されていた可能性が高い。２は口縁部の破片で、外面に赤彩が見られる。３は甕の口縁部片である。口唇部には指頭による押捺列が巡る。外面全体にススが付着している。

2SI-002（第59図、図版９・24）

24G-49・59、24H-40・41・50・51グリッドに所在する。南側が中・近世の溝状遺構2SD-001に切られる。平面形は丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-44°-Wである。規模は、長軸400cmである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは22cmである。検出部分に壁溝はない。床は、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが７か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸37cm、短軸31cmの楕円形を呈する。床面からの深さは６cmと浅い。ピットは、３か所の主柱穴（P1～P3）と入口ピット（P4）、補助柱穴などと考えられるが、P2以外はあまり深くない。床面からのピットの深さは、主柱穴と考えられるP1が22cm、P2が43cm、P3が26cm、入口ピットと考えられるP4が17cmで、そのほかP5が30cm、P6が22cm、P7が17cmである。住居覆土はロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土が主体で、炉の西側の床上には径20cmほどの範囲で焼土が分布している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は１点のみで、炉の北側の床面直上から出土した。１は器台である。器受部は60％程度、脚部は30％程度遺存している。器受部は大きく開口している。脚部内面にイネ（籾）の圧痕が１点見つかった。

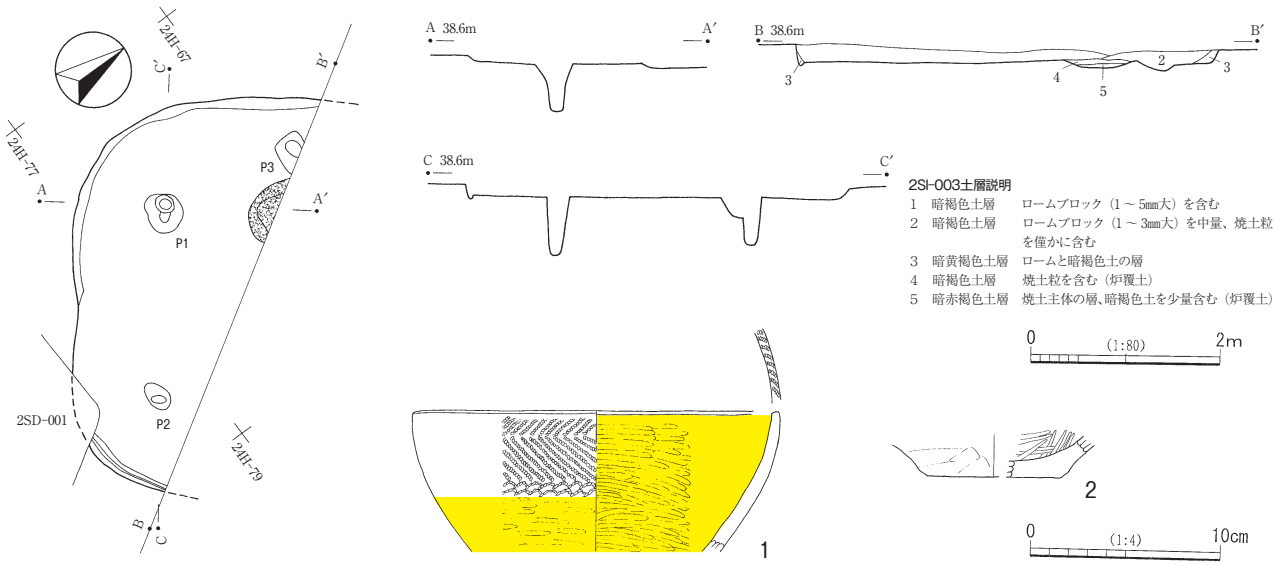
2SI-003（第60図、図版10・24・32）

24H-57・58・67・68・77・78グリッドに所在する。東側が調査区外となり、南側が中・近世の溝状遺構2SD-001に切られる。平面形は隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは17cmである。南側から壁溝が検出された。床は硬化していなかった。炉１基とピットが３か所検出された。炉は、中央部北西寄りで検出され、長軸70cmの楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは７cmである。焼土が５cm堆積している。ピットの床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が52cm、P2が62cmで、その他炉の北側にあるP3は９cmである。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなす。

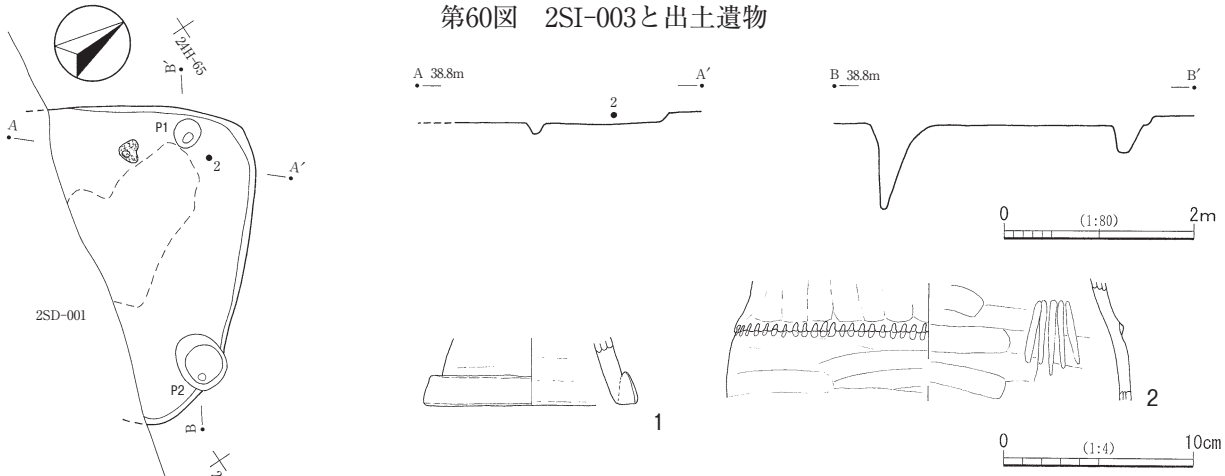
出土遺物は少なく、図示した遺物は２点で、いずれも覆土中からの出土である。１は鉢で、口縁部の30％程度が遺存している。口縁部には羽状縄文が施され、２段のＳ字状結節文で下部が区画されている。口唇部にも縄文が施文され、施文部分以外と内面はミガキで仕上げられ赤彩される。２は甕の破片で底部の40％程度が遺存している。外面はヘラケズリ調整、内面はミガキが施されている。

2SI-004（第61図、図版32）

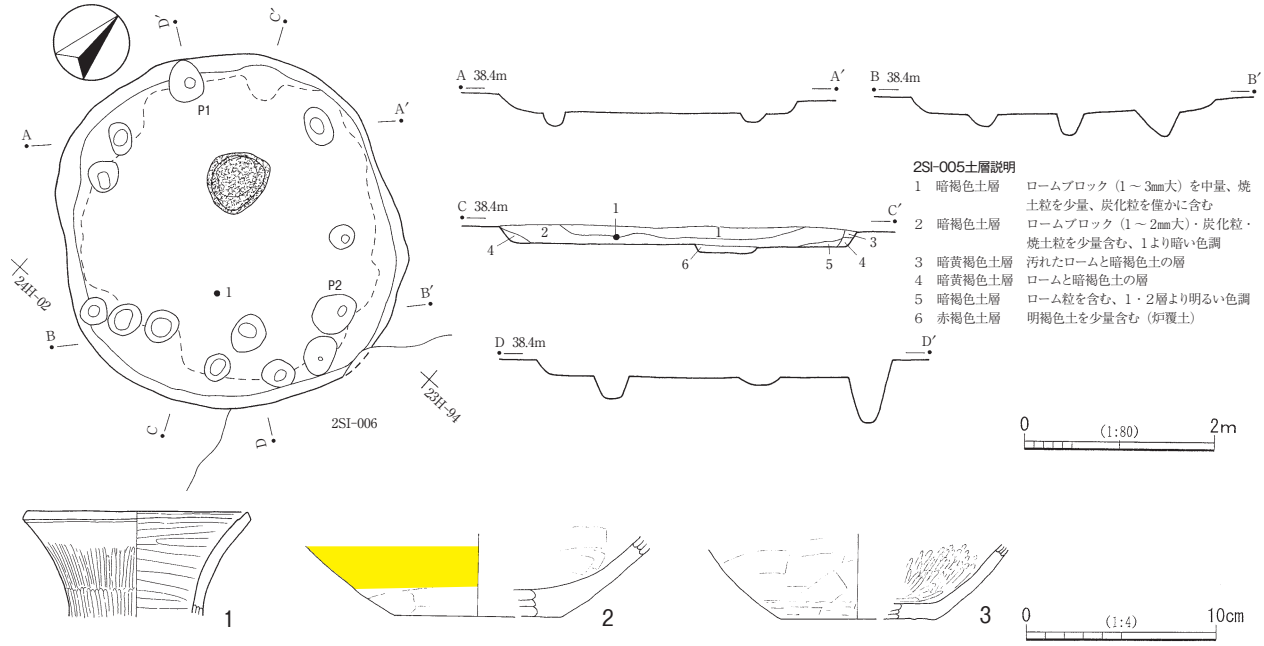
24H-64～66・75・76グリッドに所在する。南側は中・近世の溝状遺構2SD-001に切られる。平面形は隅丸方形を呈するようである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは11cmである。壁溝は見られない。床の中央部分が硬化している。床面の中央部北西寄りから焼土の堆積した長軸25cmほどの窪みが検出されたが、深さも５cm程度と浅く被熱痕跡も明瞭でないことから、炉とは断定できない。そのほか、ピットが２か所検出され、床面からの深さはP1が28cm、P2が91cmである。機能等は不明である。遺



第60図　2SI-003と出土遺物



第61図　2SI-004と出土遺物



第62図　2SI-005と出土遺物

存状態が悪いことから、住居覆土の堆積状況は不明である。

出土遺物は少なく、図示した遺物は２点で、いずれも覆土中からの出土である。１は高坏の脚部と考えられる。裾部は折返しとなっており、外面にはミガキが少し入っている。２は甕の胴上部の破片である。外面の器面にはハケ調整痕が残る。輪積み痕が１段あり、接合部分には棒状工具による押捺列が巡っている。

2SI-005（第62図、図版10・24・32）

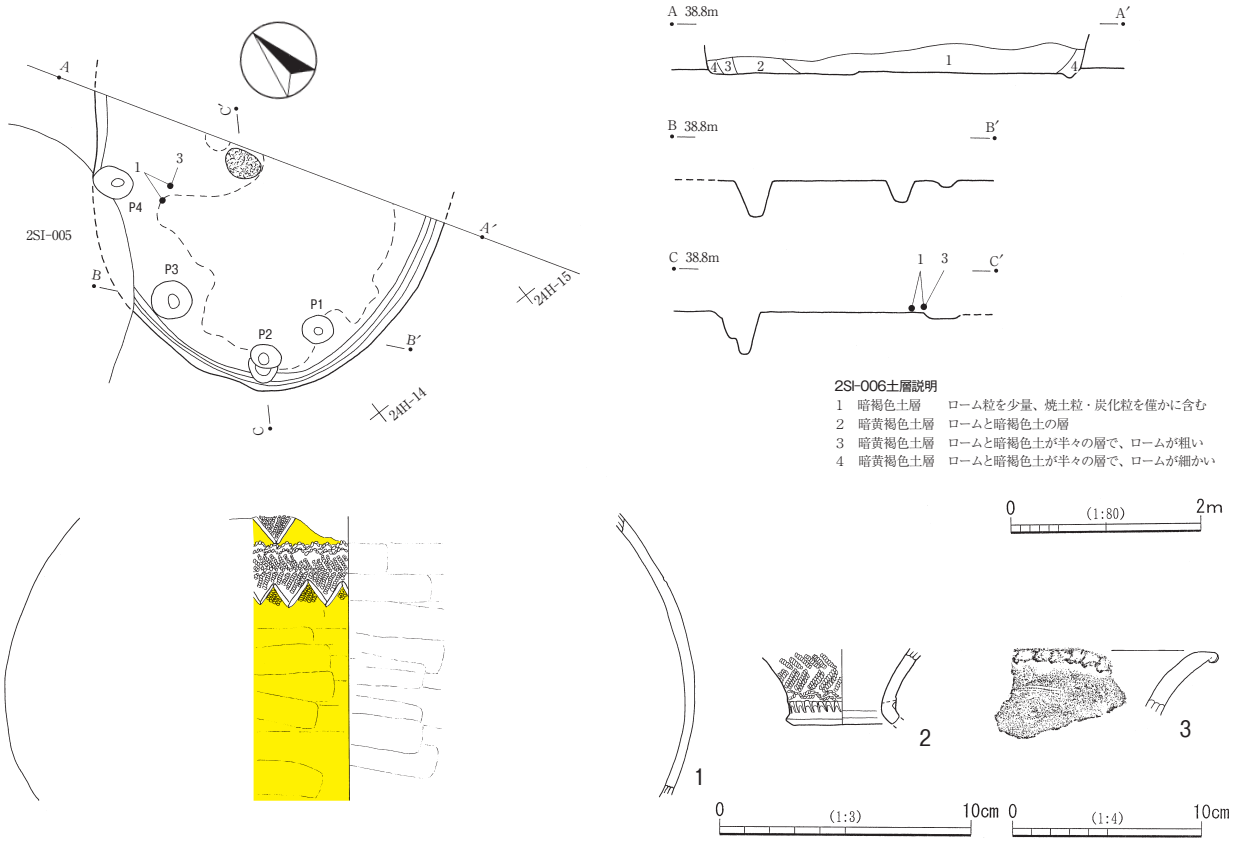
23H-81～83・91～93、24H-02グリッドに所在する。東側で重複する竪穴住居跡2SI-006とは、検出面での観察から当遺構の方が新しいとみられる。平面形は長軸372cm、短軸352cmの円形に近い隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-49°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは23cmである。壁溝はない。床は全面的に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部やや北西寄りに位置し、長軸67cm、短軸59cmの不整楕円形を呈する。断面は箱形をなし、床面からの深さは９cmである。炉床はかなり焼けて硬化していた。ピットの床面からの深さは、北西壁際にあるP1が46cmで、東コーナー付近のP2が35cmである以外は、９cm～28cmと浅い。機能等は不明である。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は３点で、いずれも覆土中からの出土である。１は壺の口縁部と考えられる。20％程度が遺存している。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキで仕上げられている。2SI-007-3と同一個体の可能性がある。２は壺の底部である。15％程度が遺存している。外面は赤彩されている。３は甕の底部と考えられる。30％程度が遺存している。

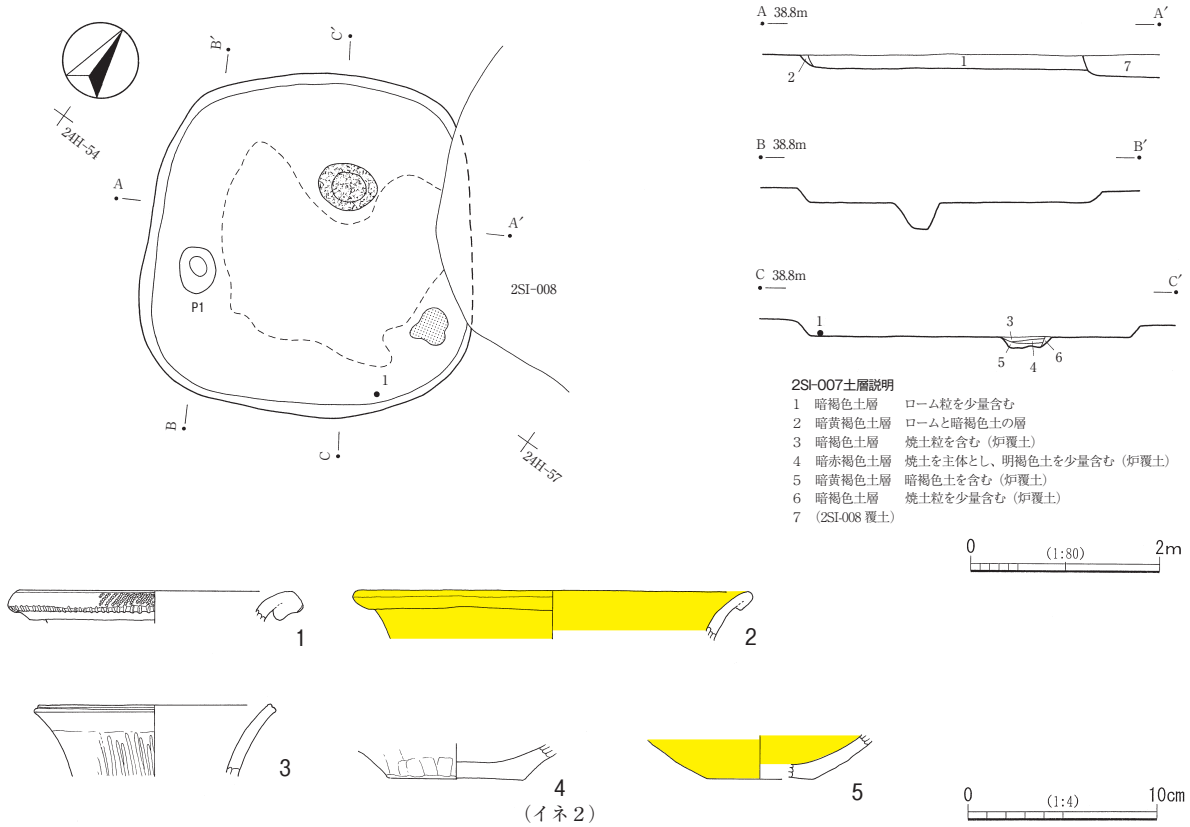
2SI-006（第63図、図版10・32）

23H-83・93・94、24H-03・04グリッドに所在する。東側は調査区外となり、西側で重複する竪穴住居跡2SI-005に切られている。平面形は楕円形を呈するとみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは10cm程度であるが、土層断面からⅡc層の下に23cmの壁の高さを観察できる。北側の一部を除き壁溝が巡っている。床面は炉の南側を中心に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが４か所検出された。炉は、長軸36cmの楕円形を呈する。掘込みはほとんどない。ピットの床面からの深さは、P1が24cm、P2が48cm、P3が36cm、P4が24cmである。ピットの機能等は不明である。覆土はローム粒・炭化粒・焼土粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は３点のみで、１・３はP4東側の床面直上からの出土である。１・２は壺である。１は胴部破片で、縄文はＳ字状結節文と沈線による山形文に区画されている。文様のない部分は磨かれ赤彩されている。２は頸部の破片である。Ｓ字状結節文と縄文が施文され、頸部と肩部との境にある輪積み痕端部には刺突列が巡る。下部破断面は研磨されており、器台として転用されている可能性が高い。３は甕の口縁部破片である。口唇部には指頭による押捺列が巡る。



第63図　2SI-006と出土遺物



（イネ２）

第64図　2SI-007と出土遺物

2SI-007（第64図、図版10・33）

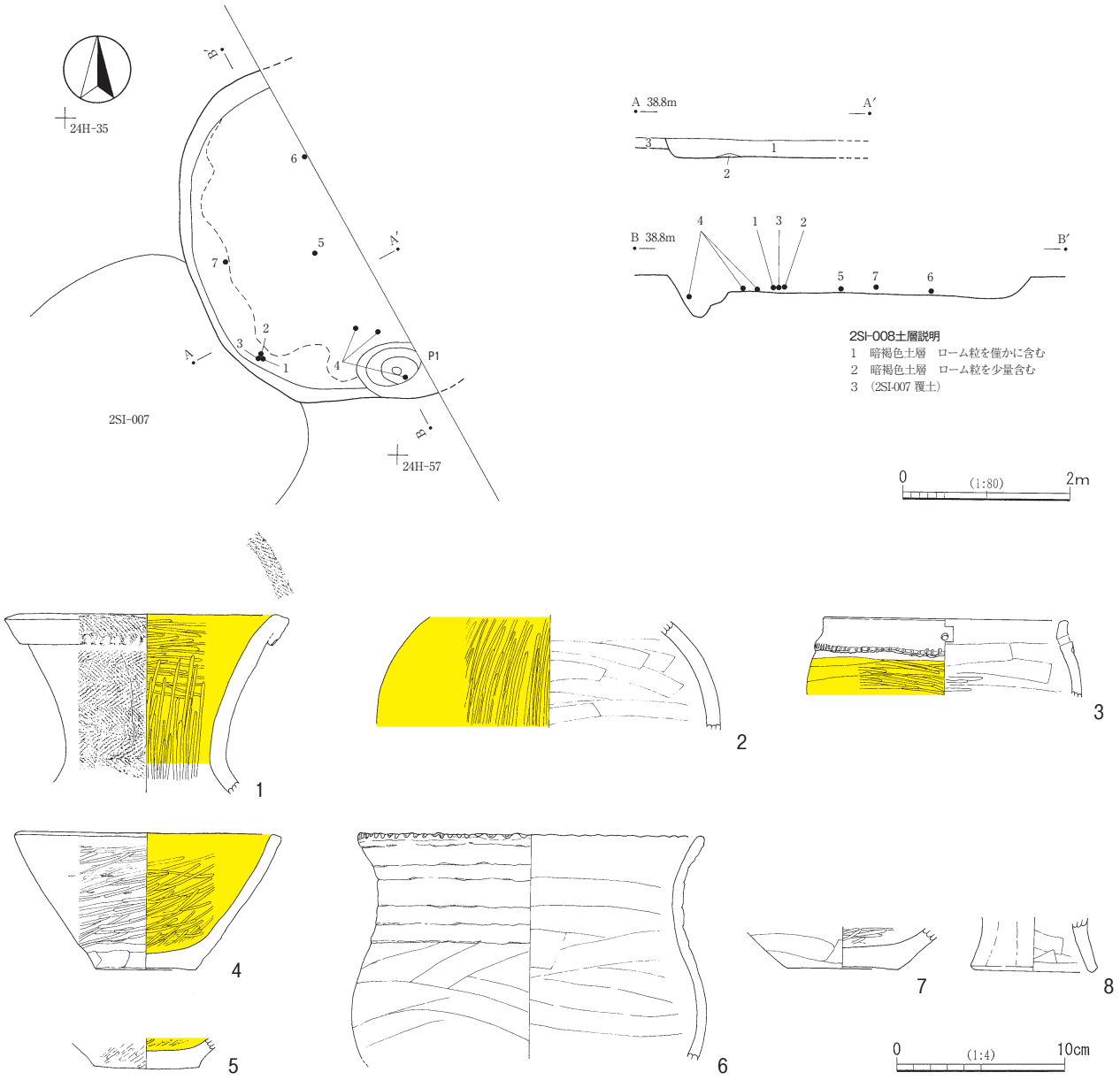
24H-35・44～46・54～56グリッドに所在する。北東側で重複する竪穴住居跡2SI-008とは、土層断面の観察から当遺構の方が古いと考えられる。平面形は長軸366cm、復元短軸約340cmの丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-31°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは18cmである。壁溝はない。床は炉の南側を中心に硬化している。床面からは炉１基のほか、ピットが１か所と粘土塊が検出された。炉は、中央部やや北寄りに位置し、長軸62cm、短軸49cmの楕円形を呈する。断面は箱形を呈し、床面からの深さは14cmである。焼土が５cm堆積していたが、炉床はあまり焼けていなかった。ピット（P1）の床面からの深さは29cmである。貼床を剥がしたところ、土坑2SK-007が検出された。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

図示した遺物は５点である。このうち１は床面直上から出土している。１～３は壺である。１は口縁部で15％程度遺存している。折返しの口縁部には縄文が施文され刻み列が巡る。内外面は二次的被熱により、著しく剥落しており、調整痕が観察できない。２も口縁部で折返しとなっている。20％程度の遺存度である。内外面とも赤彩されている。３も口縁部である。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキで仕上げられている。内面が赤彩されている可能性もあるが、はっきりしない。2SI-005-1と同一個体の可能性がある。４は底部で50％程度が遺存している。外面はミガキで仕上げられている。胴下部内面にコゲが付着し、摩耗している。甕であろうか。底部外面にイネ（籾・籾殻）の圧痕が計２か所見つかった。５は鉢である。底部の20％程度が遺存している。上げ底気味である。内外面とも、ミガキで仕上げられ赤彩される。

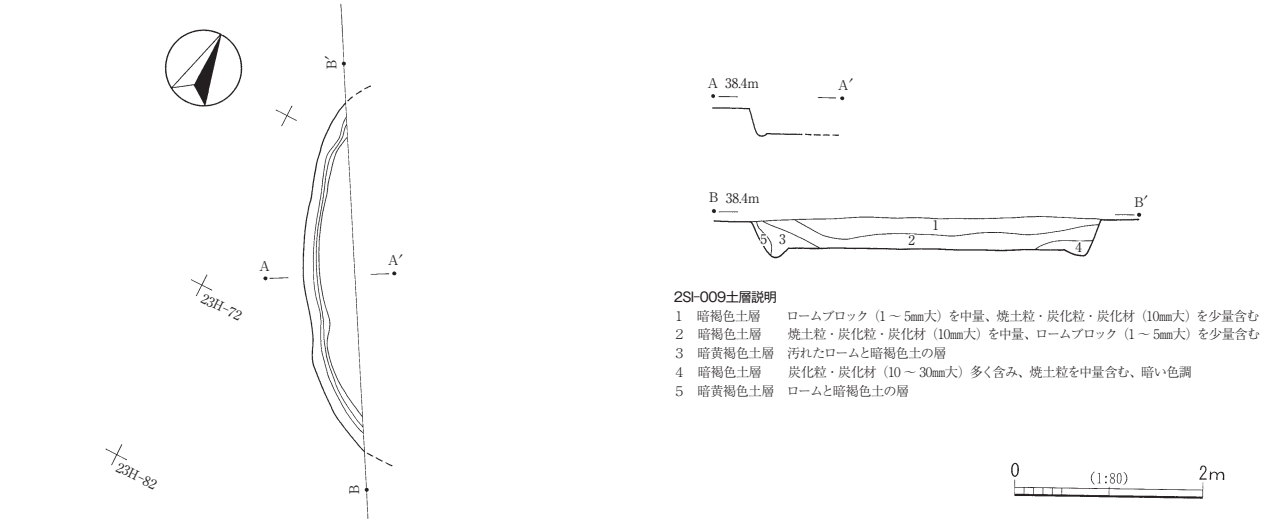
2SI-008（第65図、図版10・25・33）

24H-25・26・35・36・45～47グリッドに所在する。南西側で重複する竪穴住居跡2SI-007を切って構築されているのが、土層断面の観察から明らかである。東側は調査区外となる。平面形は丸味のある隅丸方形を呈するとみられる。壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは26cmである。壁溝は認められない。床は全体的に硬化している。床面で検出されたのは南壁際の土坑状のピット（P1）１か所のみで、炉も検出されていない。P1は短軸65cmの楕円形を呈し断面は漏斗状で、床面からの深さは34cmである。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、上部にはローム粒を多く含む層が見られる。

比較的大型の破片が床面近くから出土した。図示した遺物は８点である。１・２は壺である。１は頸部の破片で、口縁部の60％程度が遺存している。折返しの口縁部から頸部まで羽状縄文が施文されており、頸部下端には少なくとも３段のＳ字状結節文が見られ、折返しの端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。広く面取りされて平坦な口唇部にも縄文が施文されている。内面は丁寧に磨かれ赤彩されている。頸部下端の破断面が著しく摩耗していることから、器台として転用されていた可能性が高い。２は胴部破片である。丸味が強く、球胴形を呈するとみられる。外面は赤彩される。３は折返しの口縁部にややくびれがある器形の無頸壺である。口縁部の15％程度の破片である。焼成前穿孔が１か所見られ、折返し部分はヨコナデ調整、体部はミガキで仕上げられ赤彩されている。折返し端部には刻み列が巡る。内面はヘラナデされ、下部にはミガキが入る。一部に赤彩の痕跡が見られる。４・５は鉢である。４は、底部は完存するが口縁部は30％程度の遺存度である。内外面とも全体的にミガキで仕上げられ、内面は赤彩されている。５は底部で70％程度の遺存度である。外面は体部下端までミガキ調整となっており、底面はナデ調整であ



第65図　2SI-008と出土遺物



第66図　2SI-009

る。内面は磨かれ赤彩されている。６・７は甕である。６は口縁部の20％程度が遺存している。口唇部は摩耗しているものの押捺列が認められる。外面には、ややナデ消されてはいるが輪積み痕が６段残る。胴中央外面にススが付着している。７は底部で60％程度の遺存度である。内面はコゲにより黒色化している。８は器台の脚部と考えられる。

2SI-009（第66図、図版10）

23H-52・62・72グリッドに所在する。大半は調査区外となり、僅かに遺構の南西壁付近が検出されたものである。平面形は楕円形を呈するとみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは34cmである。壁溝が巡っている。検出部分での床は硬化しておらず、炉やピットも検出されていない。住居覆土はロームブロック・焼土粒・炭化粒を含む暗褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積している。炭化粒・炭化材を多く含んでいることから、住居廃絶後廃材の焼却が行われていた可能性がある。

遺物は出土していない。

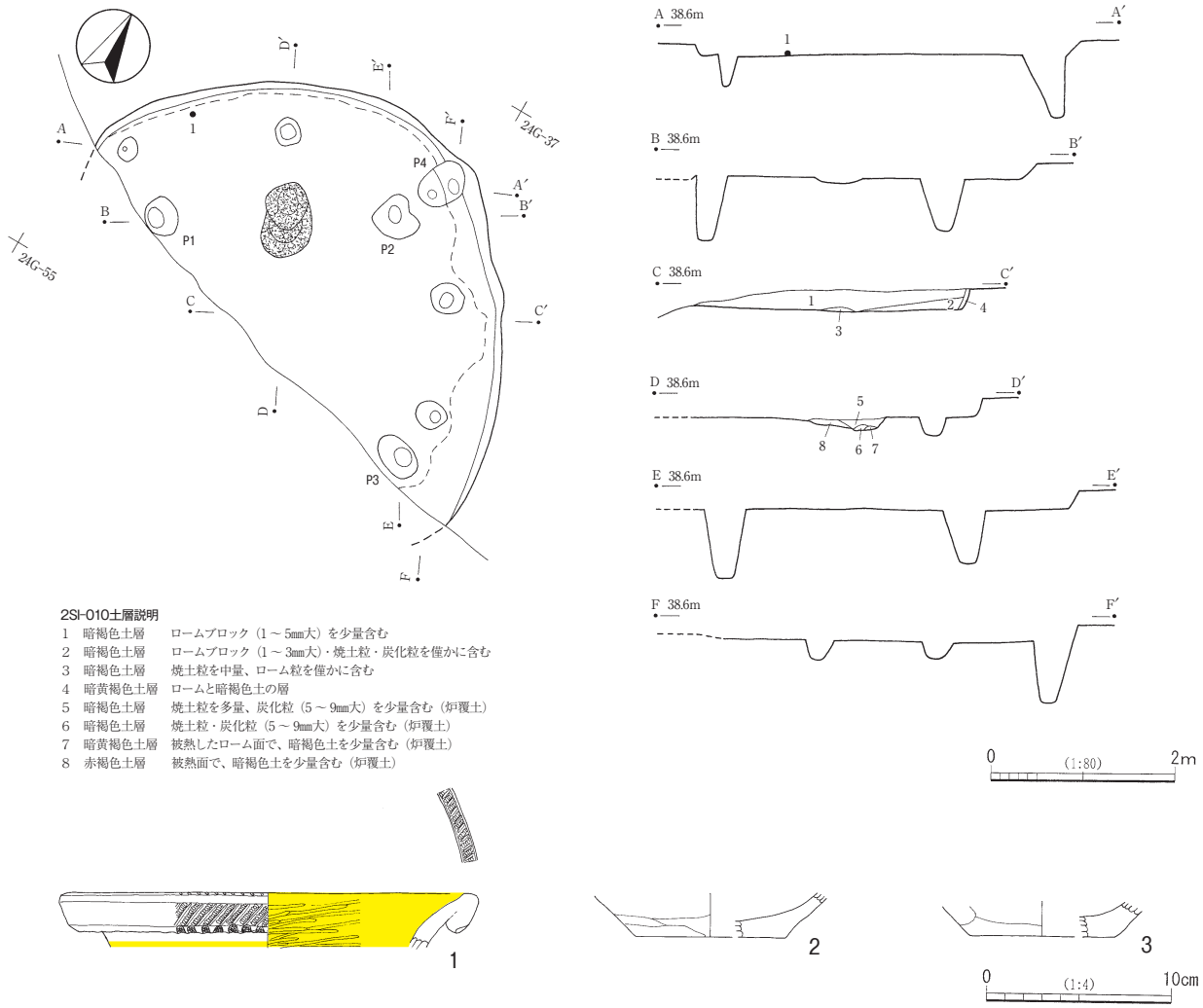
2SI-010（第67図、図版10・33）

24G-35～37・45～47・57グリッドに所在する。南側は中・近世の溝状遺構2SD-001に切られるが、平面形は丸味のある隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは25cmである。壁溝はない。床は、全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが８か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸85cm、短軸49cmの楕円形を呈している。土層断面を観察すると、楕円形の浅い炉を一旦埋めて円形の深い炉を掘り直しているようである。床面からの深さは13cmである。炉床はどちらもよく焼けていた。ピットは、中央寄りの３か所は主柱穴と考えられ、床面からの深さはP1が70cm、P2が55cm、P3が77cmである。そのほかのピットは、P4が67cmである以外は16cm～33cmの深さで、補助柱穴などと考えられる。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

出土遺物は少なく、図示した遺物は３点のみで、いずれも床面近くからの出土である。１は壺である。口縁部の15％程度が遺存している。折返し口縁部と面取りされた口唇部には附加条縄文が施文されており、折返しの端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。内外面に赤彩が見られる。２・３は甕の底部である。２は15％程度、３は25％程度の遺存度である。３の外面にはススの付着が見られる。

2SI-012（第68図、図版11）

24G-13・14・22～25・32～35・43・44グリッドに所在する。検出面での観察から、北側に重複する竪穴住居跡2SI-013を切って構築されていることが確認できた。南側は中･近世の溝状遺構2SD-001に切られ、床面まで失われている部分もあるが、南壁とその付近は、2SD-001が浅いため遺存していた。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-32°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは40cmである。壁溝はない。床は全体的に硬化している。床面からは炉１基とピットが11か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸49cm、短軸39cmの楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは７cmと浅く焼土が４cm堆積し、炉床はよく焼けていた。ピットは、非常に深いものが多い。主柱穴と考えられるピットの床面からの深さは、P1が61cm、P2が74cm、P3が80cm、P4が86cmである。またP5は入口ピットと考えられ、深さは32cmである。そのほかのピットは、P6が59cm、P7が72cm、P8が21cm、P9が



第67図　2SI-010と出土遺物

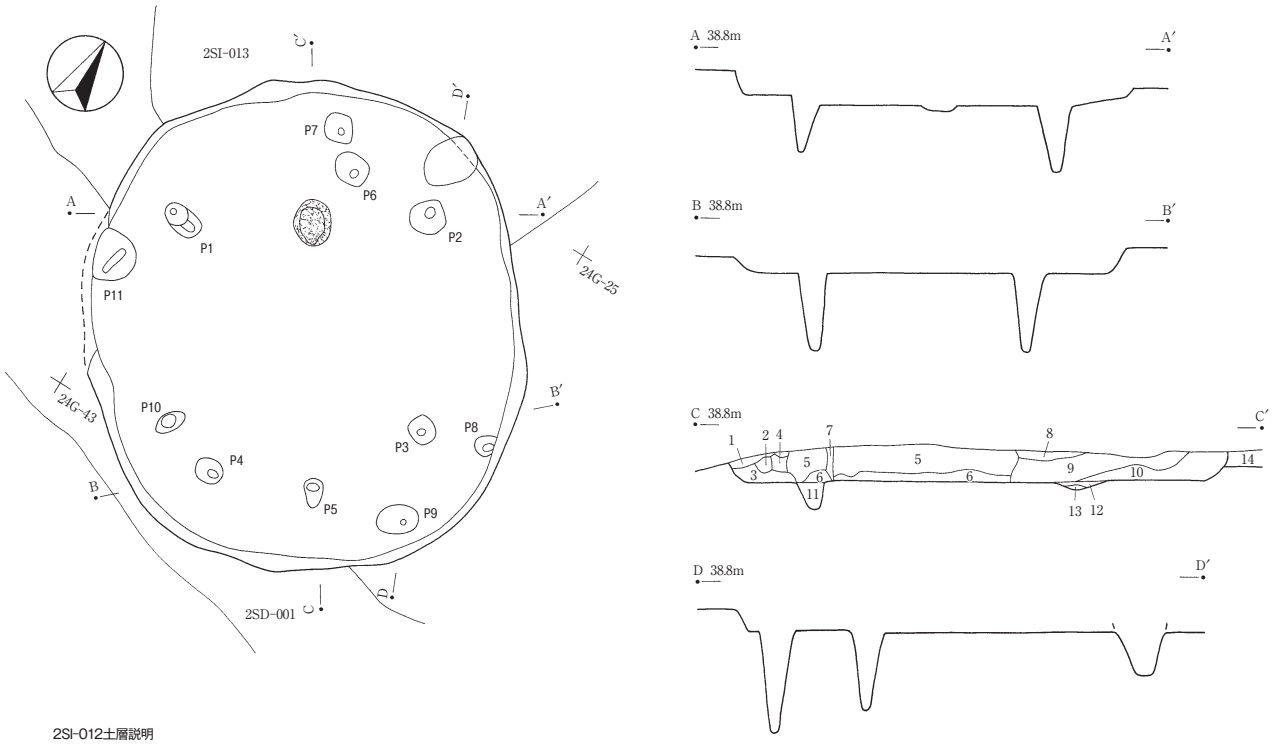
108cm、P10が11cm、P11が21cmである。住居覆土はローム粒を多く含む褐色土が主体で、埋め戻しが行われた可能性がある。

弥生時代後期の壺・甕の小破片が少数出土したのみで、図示可能な遺物はない。

2SI-013（第69図、図版11・33）

24G-02・03・12～14・22～24グリッドに所在する。北側に重複する竪穴住居跡2SI-011と、南側に重複する竪穴住居跡2SI-012、及び北東側で重複する土坑2SK-003に切られている。平面形は楕円形を呈するとみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは21cmである。壁溝は認められない。床は全体的に硬化している。床面からは、炉が１基とピットが５か所検出された。炉は長軸40cm、短軸31cmの楕円形を呈し、床面からの深さは３cmである。ピットの検出面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が41cm、P2が64cm、P3が65cm、P4が40cmで、そのほか壁際にあるP5が33cmである。住居覆土はローム粒を含む褐色土である。

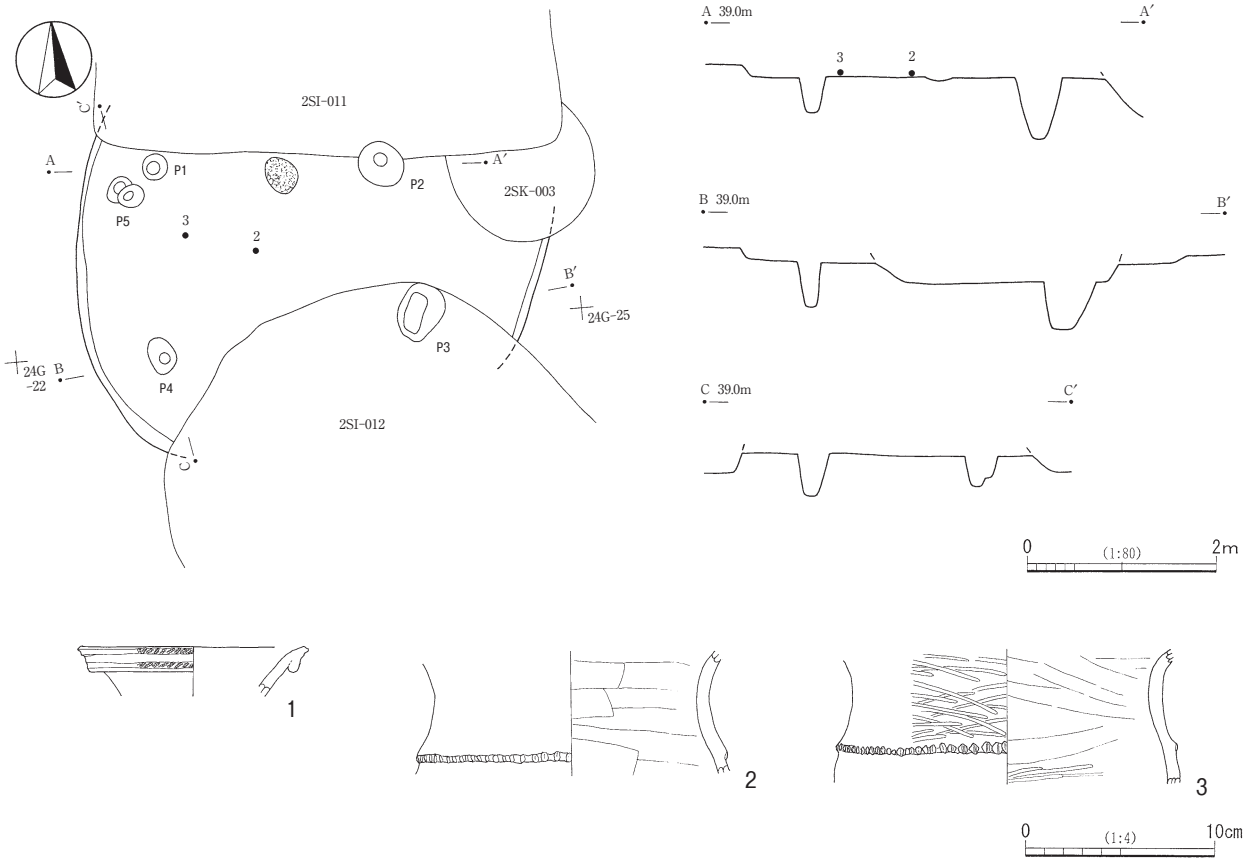
出土遺物は少なく、図示した遺物は３点で、いずれも床面近くからの出土である。１は重複する古墳時代の竪穴住居跡2SI-011の覆土から出土した壺の口縁部である。25％程度遺存している。復元口径は11.6



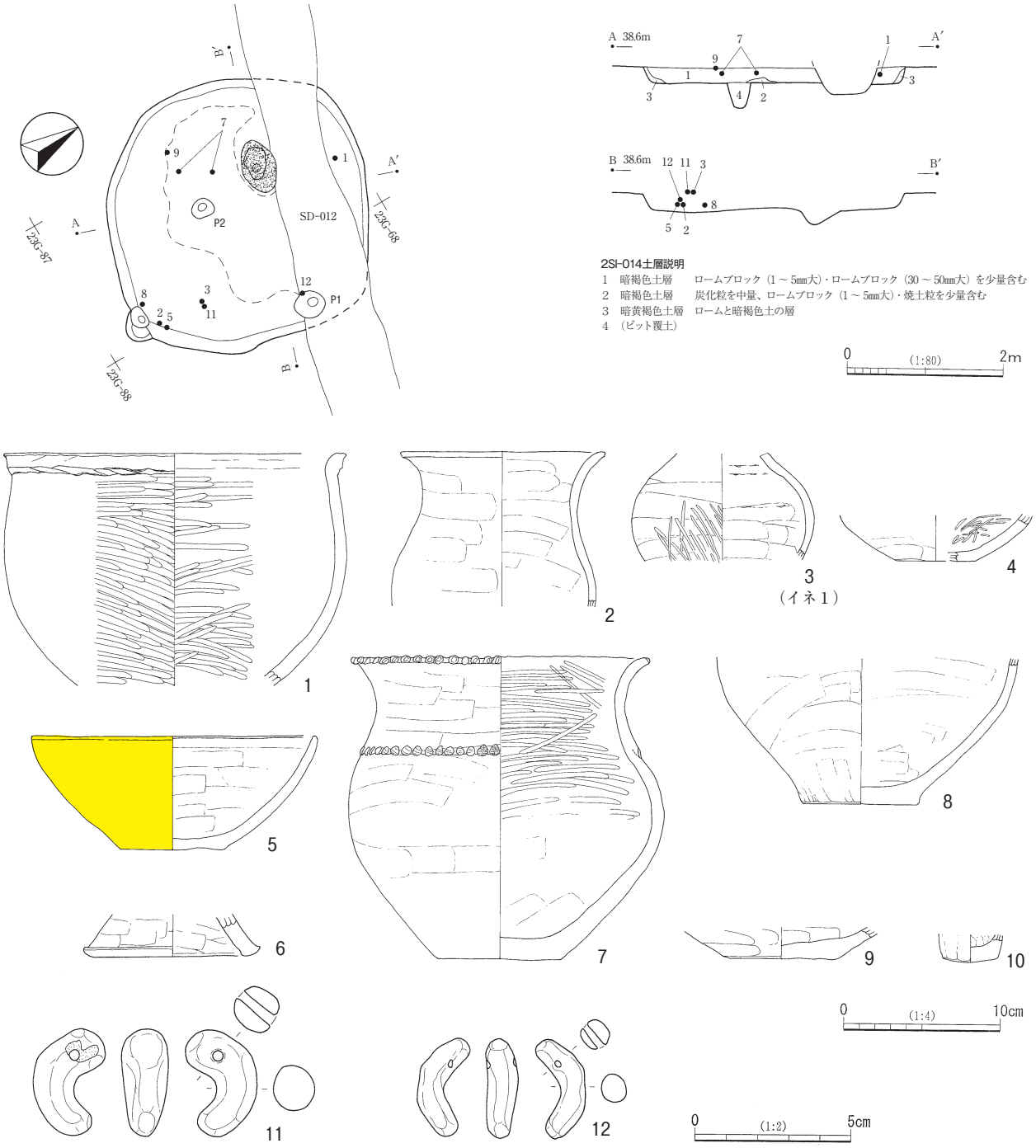
2SI-012土層説明

1　暗褐色土層　柔らかく、少し粘性がある
2　暗褐色土層　ローム粒を含み、堅い
3　暗褐色土層　1層より堅く、2層より柔らかい、ロームブロック（20 ～ 30㎜大）を含む
4　暗褐色土層　1層と同様の状態で、ローム粒を含む
5　褐色土層　ローム粒を多量に含み、堅くしまっている
6　褐色土層　堅くしまっている
7　褐色土層　非常に柔らかく脆い
8　暗褐色土層　1層と同じ色調で、堅くしまっている
9　褐色土層　ローム粒を含み、堅くしまっている
10　暗褐色土層　ロームブロック（10 ～ 20㎜大）を含み、堅くしまっている
11　（ピット覆土）
12　暗褐色土層　焼土ブロック（1 ～ 5㎜大）を含む（炉覆土）
13　赤褐色土層　焼土（炉覆土）
14　（2SI-013 覆土）

第68図　2SI-012



第69図　2SI-013と出土遺物



第70図　2SI-014と出土遺物

cmと小型である。折返しの口縁部には縄文が施文される。２・３は甕の頸部破片である。いずれも輪積み痕の接合部分に棒状工具による押捺列が巡る。口縁部の破断面が摩滅している。２・３は同一個体の可能性も考えられる。

2SI-014（第70図、図版11・25・33・44）

23G-57・66～68・76～78グリッドに所在する。中央を中・近世の溝状遺構SD-012に切られるが、平面形は丸味のある隅丸方形を呈する。主軸方向は、N-65°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは29cmである。壁溝は認められない。床は、中央部周辺で硬化している。床面からは炉１

基とピットが２か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸67㎝、短軸44㎝の楕円形を呈している。断面は漏斗状をなし、床面からの深さは19㎝である。焼土が14㎝堆積している。ピットの床面からの深さは、P1が25㎝、P2が33㎝である。遺構の周囲にもピットが幾つか確認されたが、当遺構に伴うものかどうか不明である。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

比較的大きな破片がまとまって出土した。２・５・８が南コーナーの床面直上から出土したほかは、覆土中層からの出土である。多くが住居埋没過程で投棄されたと考えられる。図示した遺物は12点である。１は広口壺で、口縁部の40％程度が遺存している。口縁部は折返しとなっており、端部にはヘラでナデつけたような痕跡が残る。胴部及び内面はミガキで仕上げられている。２・３は壺である。２は頸部は全周するが、口縁部は50％程度の遺存度である。二次的被熱により器面がやや荒れてはっきりしないが、内外面ともナデ調整で仕上げられているようである。また、内外面赤彩の可能性もある。３は小型の壺で、胴部の70％程度が遺存している。口縁部は輪積み部分で欠損している。外面は胴部下半を中心にミガキが入っている。胴部外面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。４は底部で30％程度の遺存度である。鉢であろうか。底部の器厚は薄い。外面の調整はヘラケズリ後ナデとみられ、内面は雑なミガキが施されている。外面は赤彩していた可能性もあるが、はっきりしない。５はほぼ完形の鉢である。器面が摩耗し調整痕等は不明瞭だが、口縁部外面はヨコナデ、体部はミガキ、底部はヘラケズリ後ナデ調整とみられ、全体が赤彩されていたとみられる。内面はヘラナデ後ミガキが施されている。赤彩の痕跡が残る。６は器台の脚部と考えられる。裾部の30％程度が遺存している。７～９は甕である。７は口縁部は僅かしか遺存していないが、頸部以下はほぼ完存している。復元口径は19.0㎝、胴部最大径は19.4㎝で、口径と胴部最大径がほぼ同じ器形をしている。口唇部と肩部の輪積み痕部に押捺列が巡るが、肩部は押捺の単位の中に複数の条線が明瞭に観察でき、ハケ状工具等を使用していることが推測され、僅かに残る口唇部の押捺は指頭によると考えられる。外面には胴部最大径付近から口縁部にかけてススが付着し、内面胴下部は器面が剥落し、底面付近はコゲにより黒色化している。８は胴部下半で、底部は完存している。外面は、胴部最大径付近を中心に器面が摩耗し、調整痕が明瞭ではないが、ミガキも入るようである。９は底部で30％程度の遺存度である。底部外面の周縁部が摩滅しており、壺の可能性もある。10は底部のみ完存している甕のミニチュアである。底径は3.5㎝で、内外面ともナデ調整である。

11・12は土製勾玉である。いずれも完形で、表面はナデで丁寧に仕上げられている。11は胎土に少量の白色粒子を含む。色調は明褐色を呈し、焼成は良い。12は胎土に少量の白色粒子と赤色粒子を含む。色調は暗褐色を呈し、焼成は良い。

2SI-016（第71図）

23G-88・89、23H-80・81・90・91、24G-09・19、24H-00・01・10グリッドに所在する。ピットが13か所検出されたのみで、壁も遺存しておらずプランも明確にならない。P8から弥生土器片が出土したことから、竪穴住居跡と判断した。検出されたピットは、竪穴住居に伴う柱穴等とみられる。検出面からの深さは、P1が45㎝、P2が54㎝、P3が36㎝、P4が33㎝、P5が45㎝、P6が55㎝、P7が25㎝である。そのほかのピットの深さは14㎝～19㎝である。

ごく少数の土器片が出土したのみで、図示可能な遺物はない。

2SI-018（第72図、図版11）

22G-98・99、23G-08・09グリッドに所在する。東側の大半は調査区外となり、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは13cmである。検出部分に壁溝はない。床面からは炉もピットも検出されなかった。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

弥生時代後期の壺・甕の胴部片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

2SI-019（第73図、図版11・33）

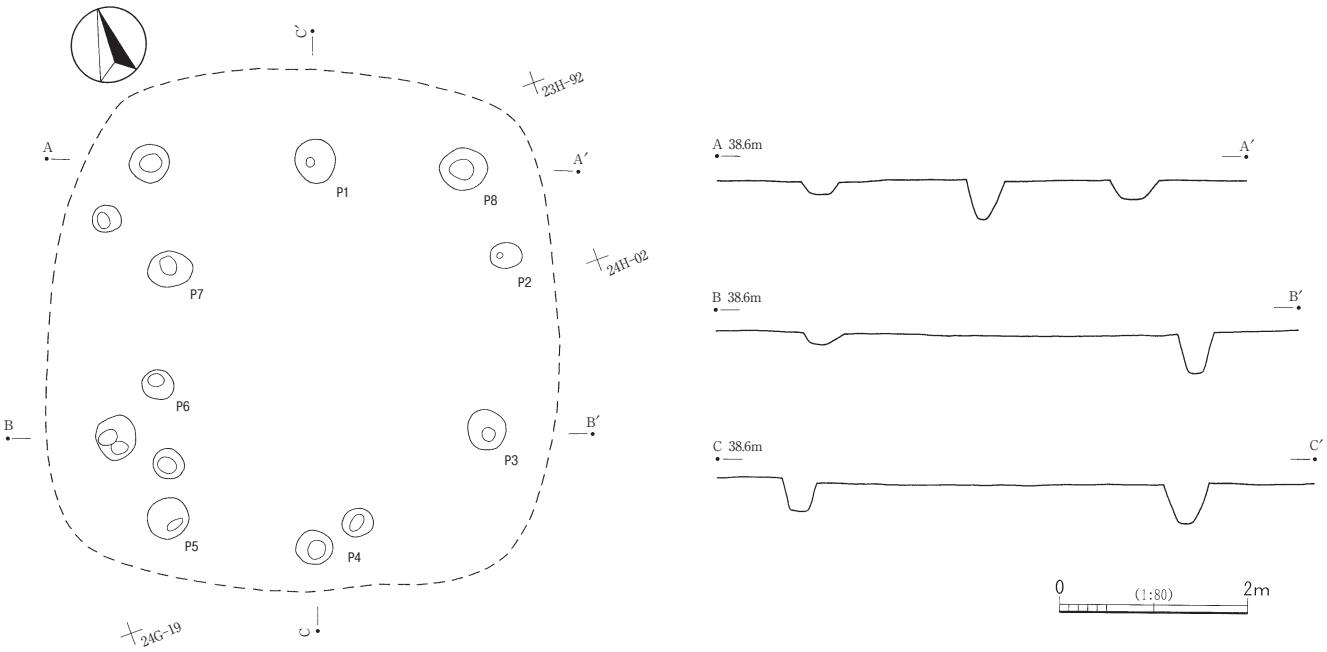
23G-26・27・35～37・46・47グリッドに所在する。東側で重複する竪穴住居跡2SI-020・023とは、土層断面の観察から、当遺構の方が新しいと判断される。平面形は一辺360cmほどの丸味のある隅丸正方形を呈し、主軸方向は、N-67°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは26cmである。壁溝はない。床面からは、炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸112cm、短軸55cmの不整楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、床面からの深さは18cmである。焼土が６cm堆積している。ピットは、中央寄りにある径の大きい４か所が主柱穴（P1～P4）、南寄りにある１か所が入口ピット（P5）の可能性が考えられ、その他多くの小ピットは壁柱穴などと思われる。床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が15cm、P2が８cm、P3が21cm、P4が26cmで、いずれも浅く貧弱である。入口ピットと考えられるP5は16cmで、その他のものは５cm～18cmである。住居の壁際及び炉の縁辺部と中央部から粘土ブロックが10か所で出土した。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

図示した遺物３点は、いずれも覆土中からの出土である。１は鉢である。底部の20％程度が遺存している。赤彩の可能性もあるが、不明である。２は台付甕の脚部である。裾部の20％程度が遺存している。３は器台である。器受部の30％程度が遺存している。

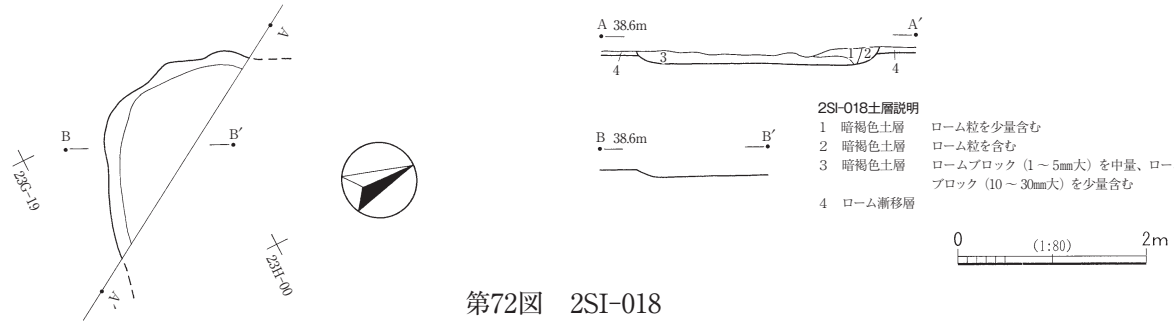
2SI-020（第74図、図版11・25・33・41）

23G-27～29・37～39・47・48グリッドに所在する。西側で竪穴住居跡2SI-019と、南側で竪穴住居跡2SI-023と重複するが、土層断面の観察から、2SI-023より新しく、2SI-019より古いと判断される。平面形は長軸368cm、復元短軸335cmほどの丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-18°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは36cmである。壁溝はない。床面からは、炉１基のほか、ピットが多数検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、長軸86cm、短軸40cmの不整楕円形を呈する。断面は西側が緩やかに、東側は斜めに立ち上がり、床面からの深さは17cmである。焼土に褐色土が混じった土が10cmほど堆積している。主柱穴と考えられるピットはない。2SI-019との境界付近に１か所径の大きなP1があるが、床面からの深さは９cmほどである。そのほかの径の小さいピットの多くは壁柱穴などと考えられ、深さは４cm～21cmである。住居覆土はローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

図示した遺物は10点である。土器はいずれも覆土中からの出土で、10の敲石のみ炉内からの出土である。１・２は壺である。１は口縁部の20％程度の破片である。２も折返しの口縁部破片である。折返し部に羽状縄文が施文され、刻みのついた棒状浮文が現状で１本遺存している。棒状浮文の両脇に沿って縦方向の沈線が見られるが、さらに右側にも沈線のみが確認できることから、少なくとも右隣にもう１本棒状浮文があったことが推定できる。折返し端部には棒状工具による刻み列が巡る。口唇部は面取りされている。受け口状になる内面はミガキの後、赤彩されている。３～６は鉢と考えられる。３は径の30％程度が遺存



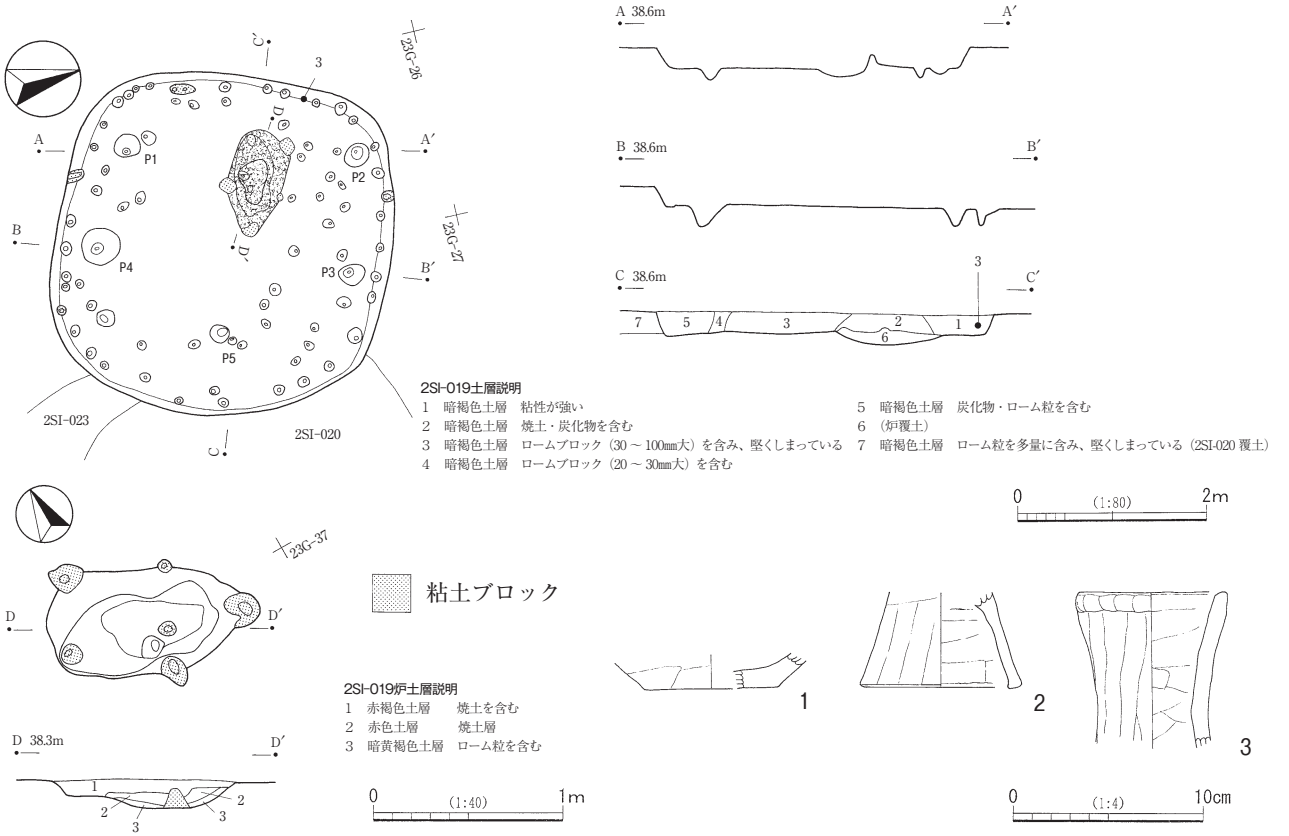
第71図　2SI-016



2SI-018土層説明

1　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
2　暗褐色土層　ローム粒を含む
3　暗褐色土層　ロームブロック（1～5㎜大）を中量、ロームブロック（10～30㎜大）を少量含む
4　ローム漸移層

第72図　2SI-018



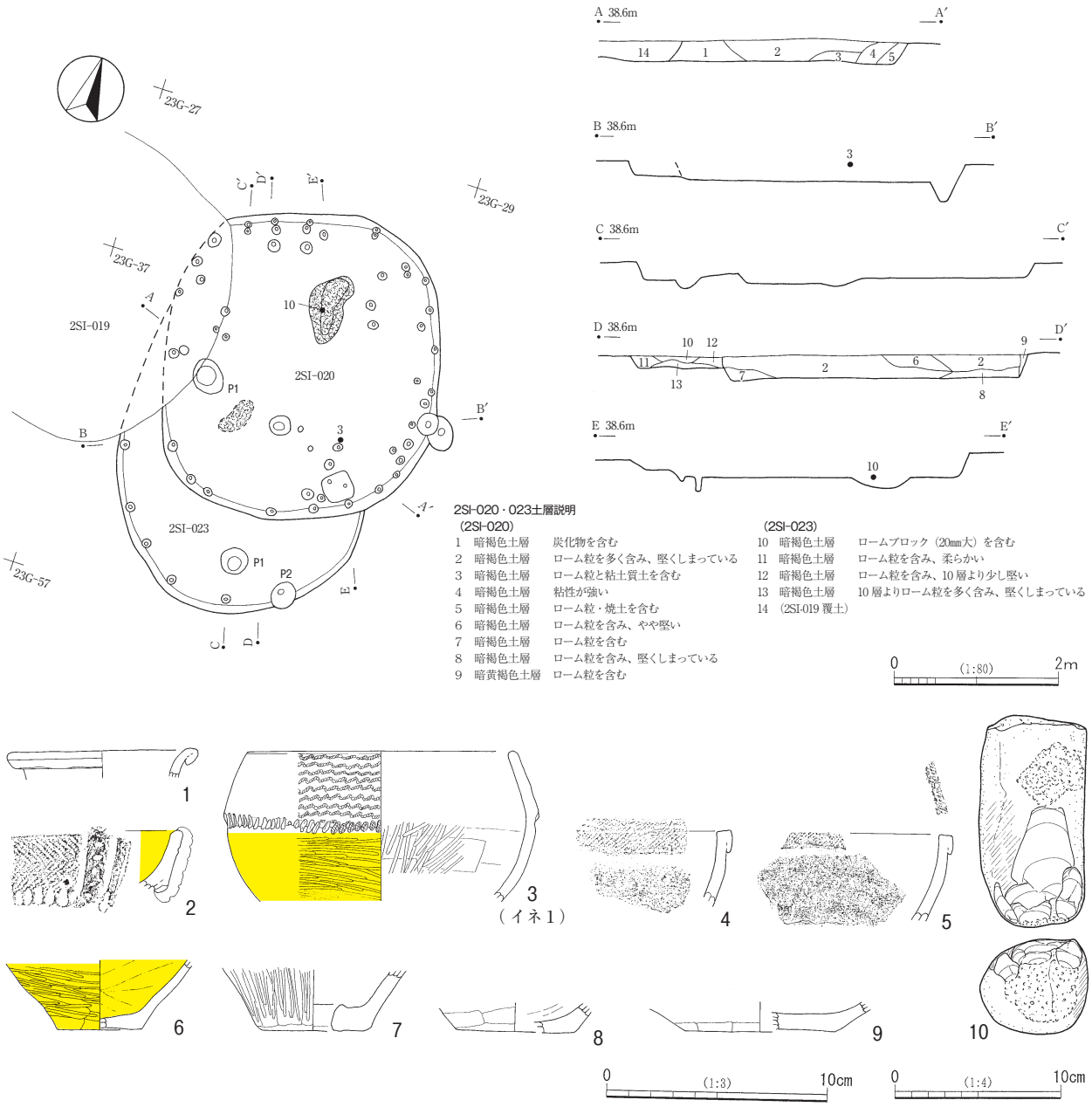
2SI-019土層説明

1　暗褐色土層　粘性が強い
2　暗褐色土層　焼土・炭化物を含む
3　暗褐色土層　ロームブロック（30～100㎜大）を含み、堅くしまっている
4　暗褐色土層　ロームブロック（20～30㎜大）を含む
5　暗褐色土層　炭化物・ローム粒を含む
6　（炉覆土）
7　暗褐色土層　ローム粒を多量に含み、堅くしまっている（2SI-020覆土）

2SI-019炉土層説明

1　赤褐色土層　焼土を含む
2　赤色土層　焼土層
3　暗黄褐色土層　ローム粒を含む

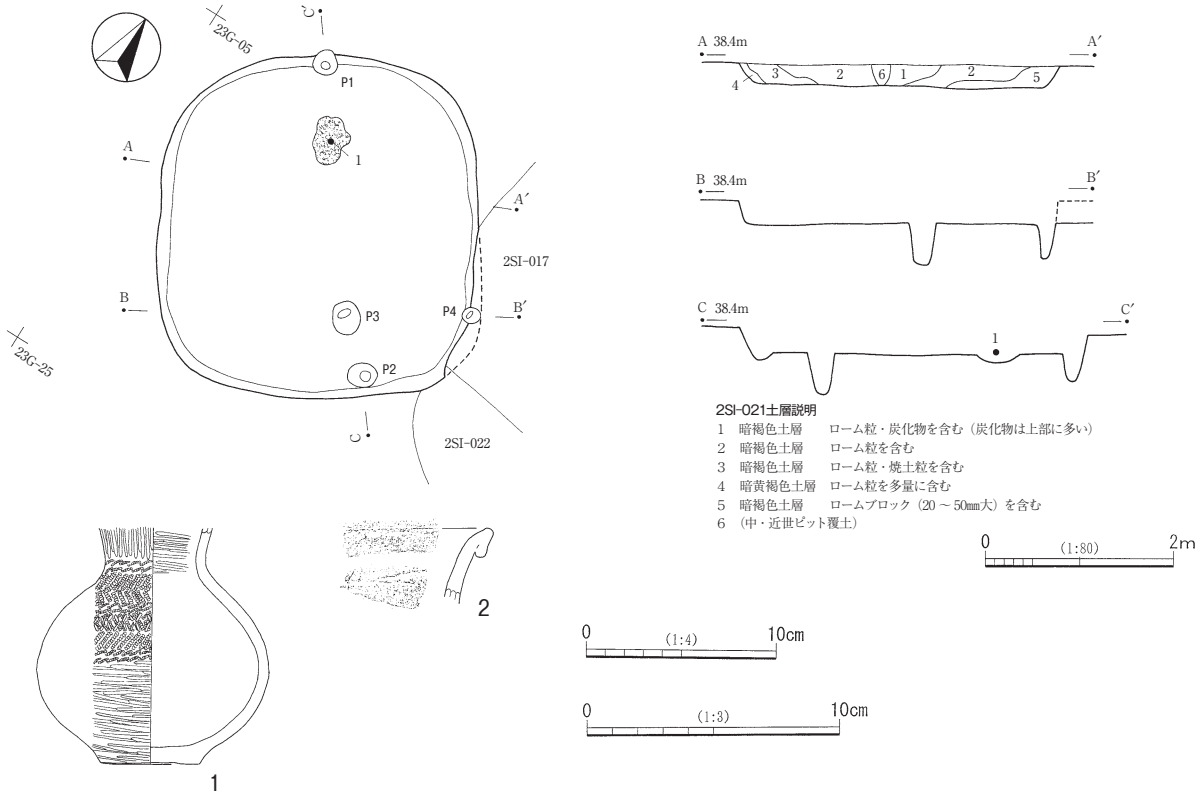
第73図　2SI-019と出土遺物



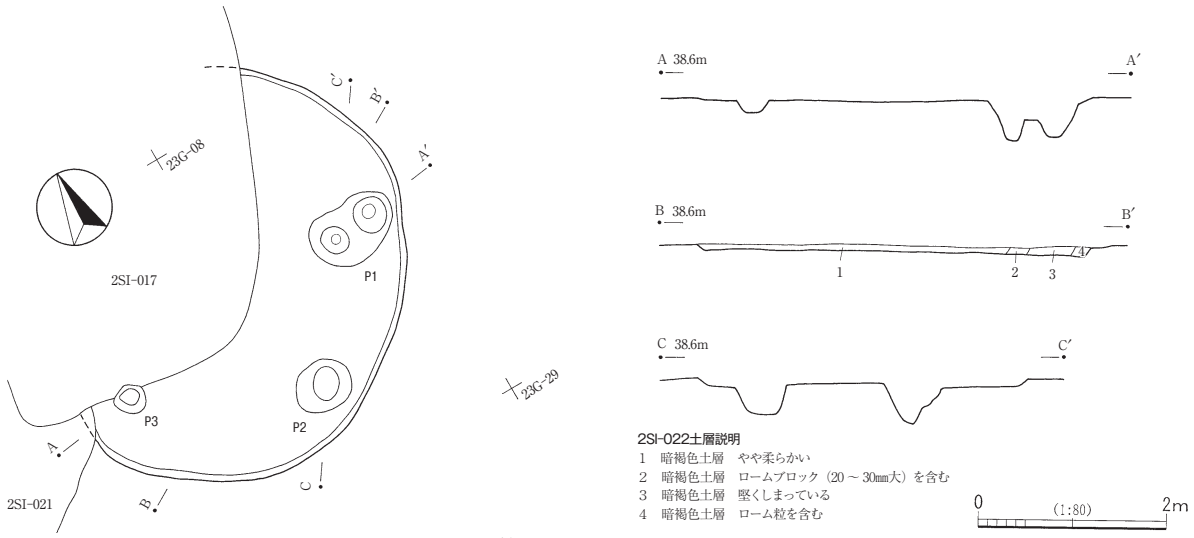
第74図　2SI-020・023と出土遺物

しているが、口唇部はごく僅かしか残っていない。折返しの口縁部はＳ字状結節文で充填されており、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。体部外面はミガキが施され、赤彩されている。内面は、最大径付近を除いて器面が著しく剥落している。体部外面にイネ（種子）の圧痕が１点見つかった。４・５は口縁部破片で、いずれも折返し部と面取りされた口唇部に縄文が施され、体部はナデ調整となっている。同一個体の可能性が高い。６は底部で、40％程度遺存している。内外面ともミガキの後、赤彩されている。７～９は甕の底部と考えられる。７は底部の20％程度が遺存している。底部中央には焼成前穿孔があり、当初より濾過器として作られたものと考えられる。８は底部の40％程度が遺存している。９は底部の25％程度が遺存している。

10は炉内から出土した、流紋岩製の敲石である。端部には敲打痕が見られ、正面には敲打に伴う剥落も



第75図　2SI-021と出土遺物



第76図　2SI-022

見られる。

2SI-021（第75図、図版11・25・34）

22G-95・96、23G-05～07・15～17グリッドに所在する。東側で竪穴住居跡2SI-022及び中・近世竪穴状遺構2SI-017と重複する。2SI-022との新旧関係は不明である。平面形は長軸366cm、短軸338cmの丸味のある隅丸方形を呈し、主軸方向は、N-34°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは32cmである。壁溝はない。床面からは、炉１基のほか、ピットが４か所検出された。炉は、中央部北西

寄りに位置し、長軸52cm、短軸37cmの不整楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、床面からの深さは７cmほどで、底面まで焼土が堆積している。ピットの床面からの深さは、P1が28cm、P2が17cm、P3が44cmで、北東壁際にあるP4が37cmである。検出位置からP2またはP3が入口ピットの可能性がある。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は２点である。このうち１は、炉検出面から横に倒れた状態で出土している。１・２はいずれも壺である。１は口縁部以外が完存する。頸部から胴部最大径付近までが文様帯となっている。文様は、頸部から肩部までは２段のＳ字状結節文で区画された羽状縄文である。その下はＬＲ・ＲＬ・ＬＲの羽状縄文となっており、上部のＬＲ・ＲＬの縄文上にヘラで菱形文が描かれている。文様帯の下端は２段のＳ字状結節文で区画される。施文部分以外はミガキで仕上げられているが、赤彩が施されていたかは不明である。頸部内面は著しく剥落しており、調整等はっきりしない。口縁部破断面は摩滅している。２は口縁部の破片である。折返しの口縁部で、口唇部は面取りされている。外面はやや摩耗しており、ナデ調整とみられるがミガキの可能性もある。内面はミガキが施されている。

2SI-022（第76図）

22G-98、23G-07～09・16～18グリッドに所在する。西側で竪穴住居跡2SI-021及び北側で中・近世の竪穴状遺構2SI-017と重複する。2SI-021との新旧関係は不明である。平面形は長軸440cmの楕円形もしくは丸味のある隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは10cmである。壁溝は見られない。床面からは、ピットが３か所検出された。床面からの深さは、P1が41cm、P2が33cm、P3が12cmである。掘り込みが浅いため主柱穴とは判断できず、用途等は不明である。炉と断定できるものは検出されなかったが、2SI-017の東コーナー近くに焼土混じりの土が堆積しており、壊された炉の可能性もある。住居覆土は暗褐色土が主体をなす。

出土遺物は少なく、弥生時代後期の壺・鉢・甕の細片が出土したのみで、図示可能な遺物はない。

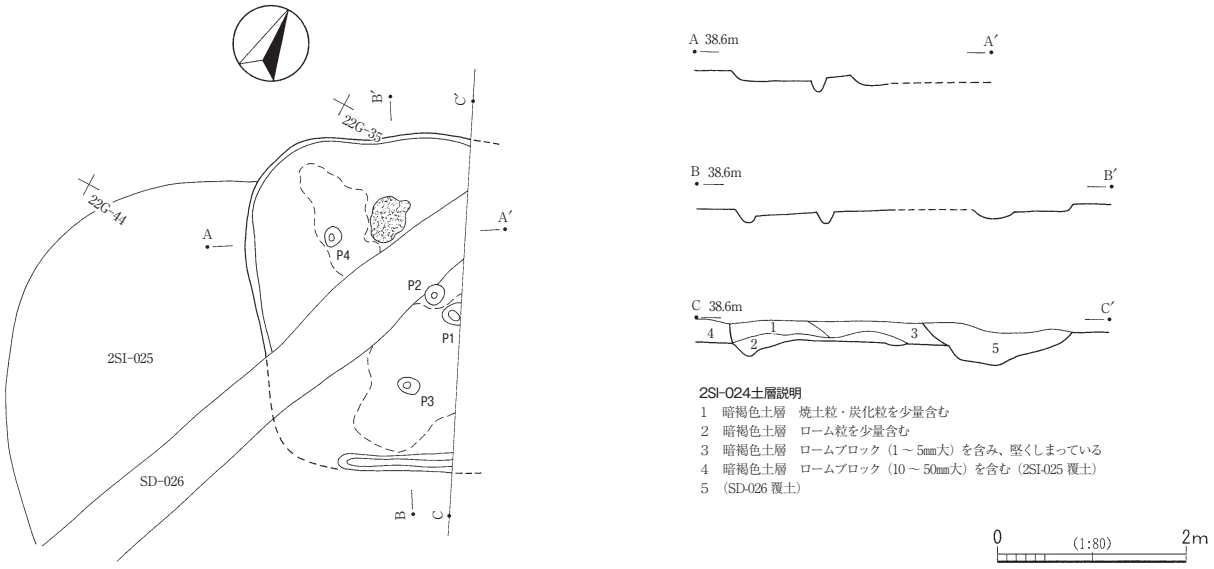
2SI-023（第74図、図版11）

23G-37・47・48グリッドに所在する。北側で竪穴住居跡2SI-019・020とそれぞれ重複するが、土層断面の観察から、いずれよりも古いと判断される。平面形は楕円形を呈すると考えられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは25cmである。壁溝は確認できない。床面からはピットが７か所検出された。中央寄りのP1は、床面からの深さは20cmで、入口ピットの可能性がある。壁際の６か所のうち、P2は深さ34cmでやや深いが、そのほかは８cm～14cmで壁柱穴と考えられる。また、2SI-020の床面から、ごく浅いが当遺構の炉と考えられる火床面が検出された。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなす。

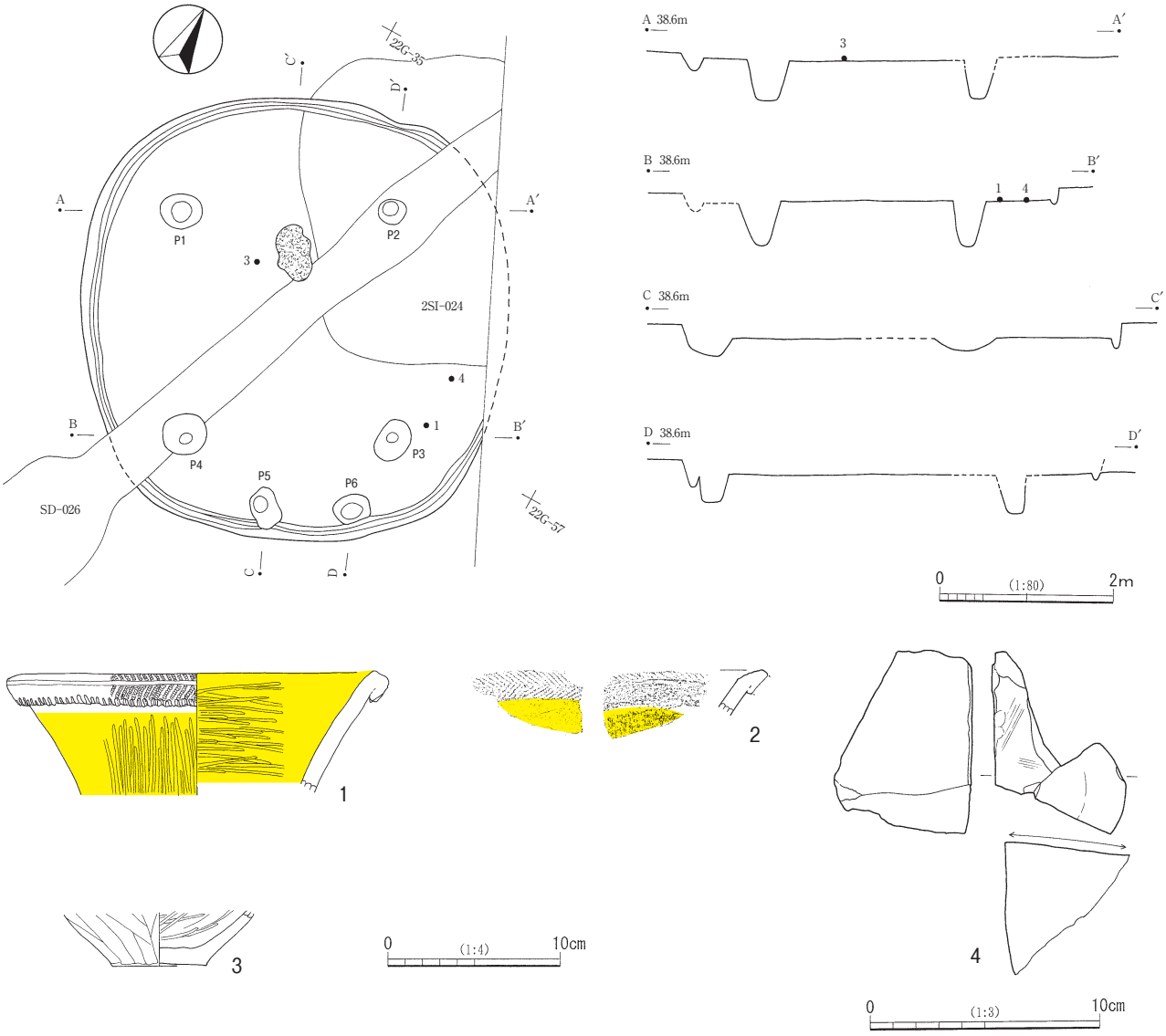
出土遺物は少なく、弥生時代後期の鉢・甕片が少量出土したのみで、図示可能な遺物はない。

2SI-024（第77図、図版11）

22G-25・34～36・44～46グリッドに所在する。東側は調査区外となり、南西側で竪穴住居跡2SI-025と重複し、更に中央部を中・近世の溝状遺構SD-026に切られている。平面形は長軸360cmほどの隅丸方形に復元可能である。主軸方向は、N-28°-Wである。2SI-025とは、土層断面の観察から当遺構の方が新しい



第77図　2SI-024



第78図　2SI-025と出土遺物

と考えられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは23cmである。南東側にのみ、壁溝が認められる。床は炉の西側から南側にかけて硬化している。床面からは、炉１基のほか、ピットが４か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、長軸53cm、短軸40cmの不整楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、床面からの深さは10cmである。炉の覆土は、焼土と暗褐色土の混土層である。ピットはいずれも径の小さなもので、床面からの深さもP1が22cm、P2が15cm、P3が13cm、P4が15cmと、いずれも浅い。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなす。

遺物は出土しなかった。

2SI-025（第78図、図版11・34・41）

22G-34～36・43～46・54～56・64・65グリッドに所在する。東側は調査区外となり、北東側で竪穴住居跡2SI-024と重複し、更に中央部を中・近世の溝状遺構SD-026に切られている。平面形は長軸514cm、短軸500cmほどの丸味のある隅丸方形である。主軸方向は、N-26°-Wである。2SI-024とは、土層断面の観察から当遺構の方が古いと考えられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは19cmである。壁溝が全周する。床面からは、炉１基のほか、ピットが６か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸63cm、短軸33cmの不整楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、床面からの深さは18cmである。焼土が６cm堆積しており、炉床は良く焼けて堅く締まっていた。ピットは、主柱穴４か所（P1～P4）と入口ピット(P5)、貯蔵穴(P6)と考えられる。床面からの深さは、主柱穴と考えられるものが比較的深く、P1が45cm、P2が33cm、P3が49cm、P4が50cmである。入口ピットと考えられるP5は22cmである。そして、貯蔵穴と考えられるP6は、長軸43cm、短軸33cmの楕円形をなし、断面は逆台形で深さは29cmである。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体をなしている。

出土遺物は少なく、図示した遺物は４点のみで、２がP6からの出土であるほかは、床面直上からの出土である。１・２は壺である。１は口縁部の15％程度が遺存している。折返し部分には縄文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。面取りされた口唇部にも縄文が施文される。そのほかの部分は内外面ともミガキで仕上げられ、赤彩されている。２も口縁部の破片である。外面の折返し部分はヨコナデ調整だが、折返し部分の粘土帯が剥がれた可能性もある。頸部はミガキで仕上げられ赤彩されている。内面は、口唇部から屈曲するように反り返る口縁部にかけて羽状縄文が施文され、その下の部分は磨かれ、赤彩されている。３は甕の底部で、70％程度遺存している。内面はコゲにより黒色化している。４は砂岩製の砥石の破片と考えられる。全体の形状ははっきりしないが、角があり、直方体をなしていた可能性がある。

3SI-026（第79図、図版12）

23F-99、23G-90、24F-09・19、24G-00グリッドに所在する。西側を中・近世の溝状遺構SD-026に切られている。平面形は長軸252cm、推定短軸230cmほどの隅丸方形である。主軸方向は、N-20°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは33cmである。壁溝は認められない。床面からは、炉１基のほか、ピットが３か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、径40cmほどの円形を呈する。断面は漏斗状をなし、床面からの深さは25cmである。焼土が６cm堆積している。ピットの床面からの深さは、P1が41cm、P2が32cm、P3が46cmである。検出位置からP2は入口ピットの可能性がある。

出土遺物は少なく、弥生時代後期の壺片が僅かに出土したのみで、図示した遺物はない。

3SI-027（第80図、図版12・34）

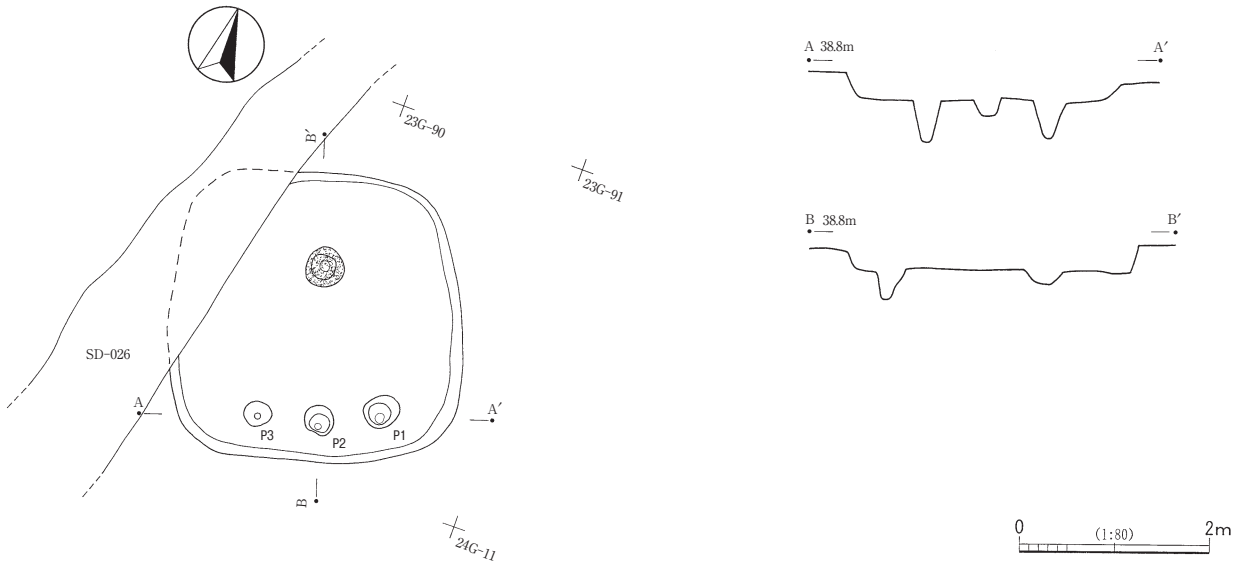
23G-32・41～43・51～53・61・62グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構SD-012・026に切られている。平面形は長軸444cm、短軸388cmの楕円形に近い隅丸方形を呈する。主軸方向は、N-11°-Wである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは35cmである。壁溝は認められない。床面からは、炉１基のほか、ピットが６か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、復元長軸66cm、短軸47cmほどの楕円形を呈する。断面は漏斗状をなし、床面からの深さは22cmである。焼土が２cm堆積しており、炉床は良く焼けていた。ピットは、主柱穴４か所（P1～P4）と入口ピット（P5）、補助柱穴等と考えられる。床面からの深さは、主柱穴とみられるP1が71cm、P2が49cm、P3が51cm、P4が57cmである。また、入口ピットと考えられるP5は32cm、補助柱穴と考えられるP6は17cmである。住居覆土はローム粒、ロームブロックを含む褐色土が主体をなす。

出土遺物は少なく、出土した遺物も小破片が多い。図示した遺物は６点である。１・２・６は床面直上から出土したほかは、覆土中からの出土である。１～３は壺である。１は口縁部の破片である。折返し部分には縄文が施文され、摩耗しているが端部には棒状工具による押捺列が巡る。頸部と内面は磨かれ赤彩されている。２は頸部の20％程度の破片である。復元径は11.6cmである。内外面とも磨かれ、赤彩されている。遺存部分の下端部にはＳ字状結節文が巡っている。頸部下端の破断面が研磨されており、器台として転用していたと考えられる。１と２は同一個体であろう。３も頸部の破片である。羽状縄文が施文された上に３か所ずつ刺突の施された３個の円形浮文が貼付されている。内面は、上部はミガキ、下部はヘラナデ調整で、赤彩の有無ははっきりしない。断面からイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。４は無頸壺である。口縁部の破片で、内外面とも折返し状となっており、ミガキで仕上げられているが、赤彩の有無は不明である。５は台付甕の脚部破片である。径の40％程度が遺存しており、復元径は5.6cmである。外面と甕部の内面にはミガキが施されており、外面にはススが付着している。脚部内面はヘラナデ調整である。６は底部の40％程度が遺存しており、甕と考えたが壺の可能性もある。

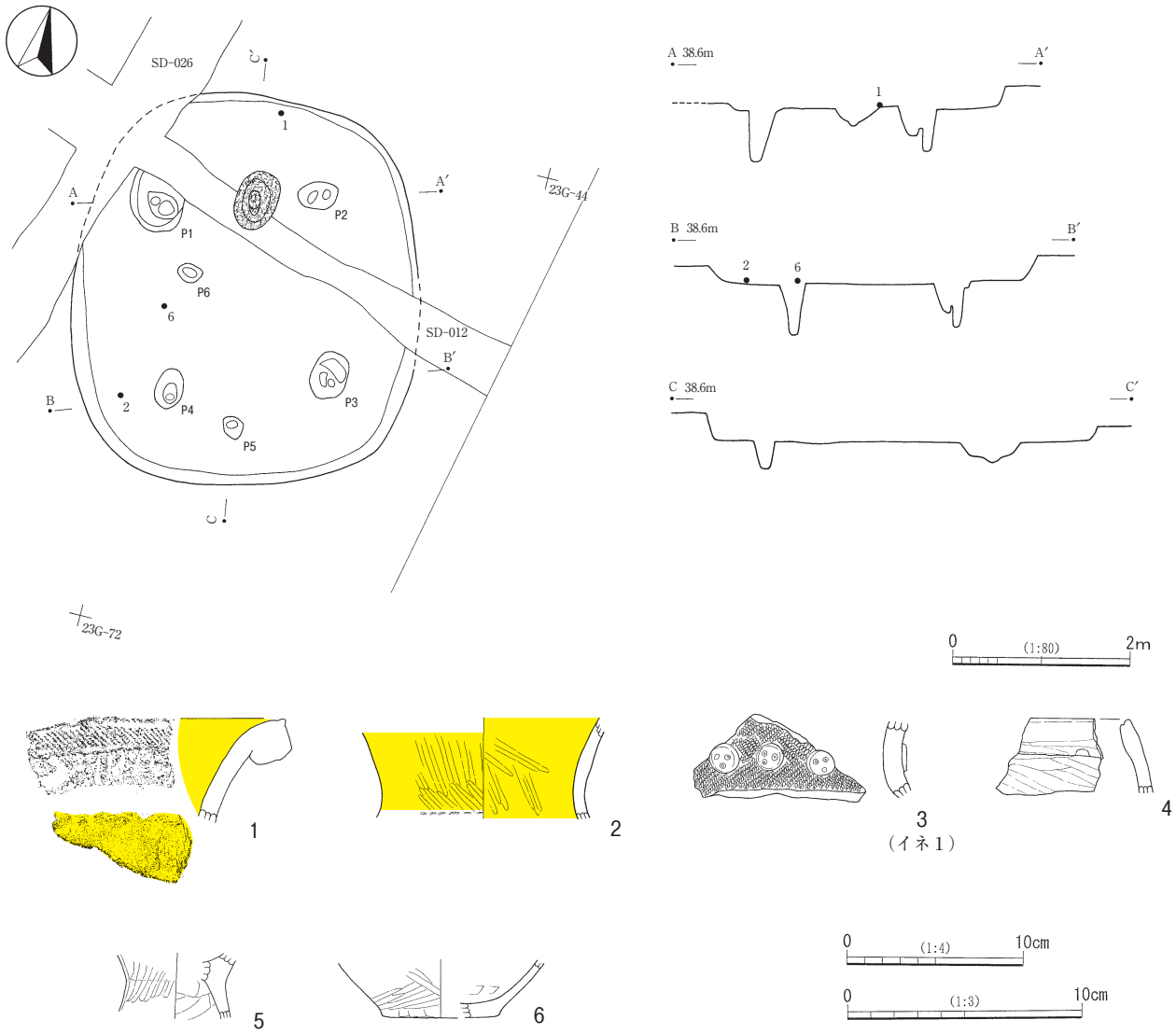
3SI-028（第81・82図、図版12・25・26・34）

23G-02・03・11～13・22・23グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構SD-026に切られている。平面形は一辺334cmほどの隅丸方形を呈する。主軸方向は、N-37°-Wである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは24cmである。壁溝は伴わない。床面からは、炉１基のほか、ピットが５か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、長軸56cm、短軸46cmの不整楕円形を呈する。断面は浅い皿状をなし、床面からの深さは７cmである。覆土には焼土ブロックが含まれている。ピットはいずれも径の小さなものである。床面からの深さは、P1が26cm、P2が25cm、P3が14cm、P4が17cm、P5が12cmである。住居覆土は暗黄褐色土が主体で、床面近くには焼土が堆積し、住居廃絶後廃材の焼却が行われていたと考えられる。

遺物は主に住居東側から、遺存度の高い遺物が多く出土した。遺物は焼土の上面から出土していることから、焼却行為とほぼ同時期に投棄されたものと思われる。図示した遺物は12点である。１～４は壺である。１は頸部がほぼ全周するが、口唇部は40％程欠損している。折返し部分には羽状縄文が施文され、３

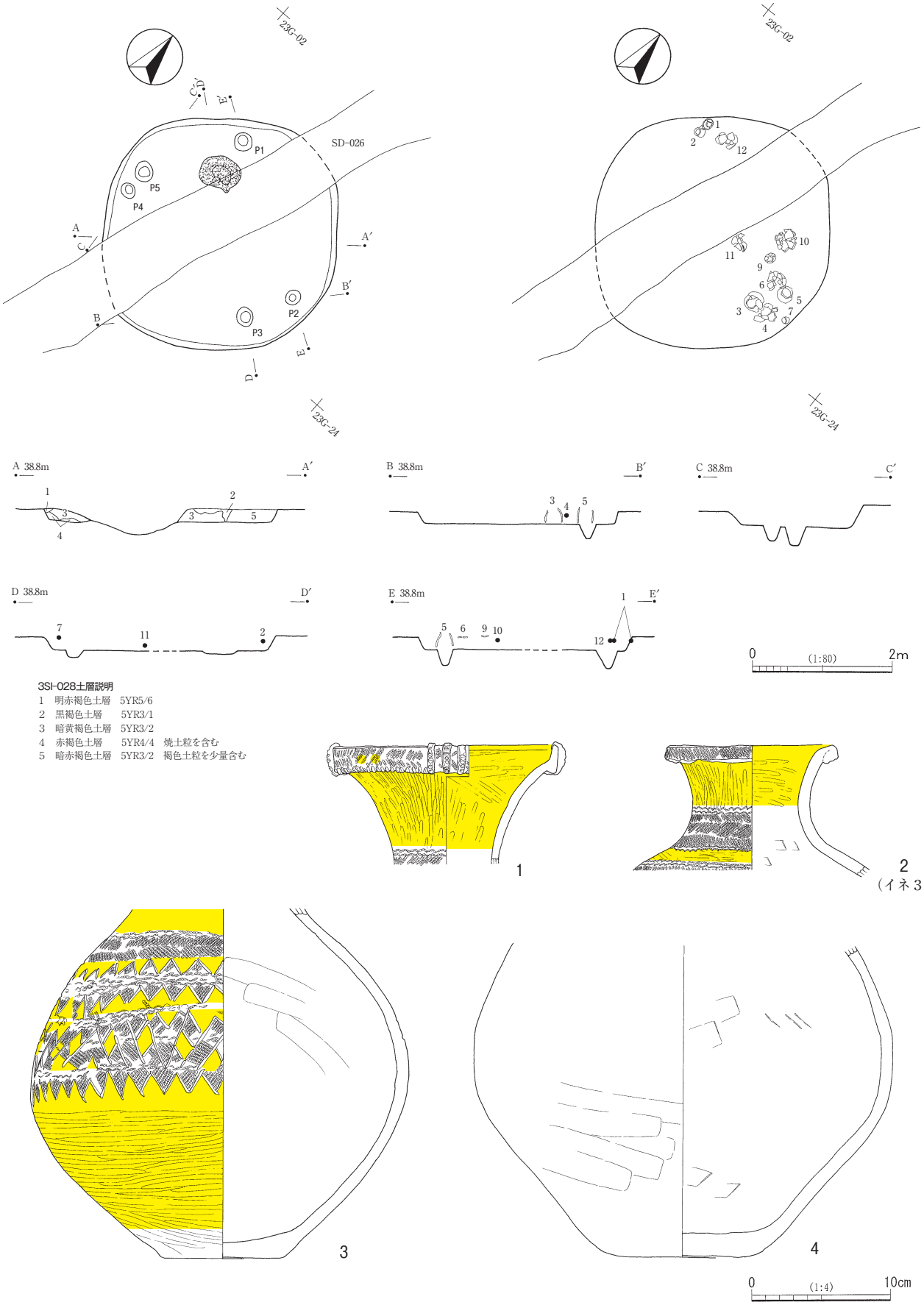


第79図　3SI-026

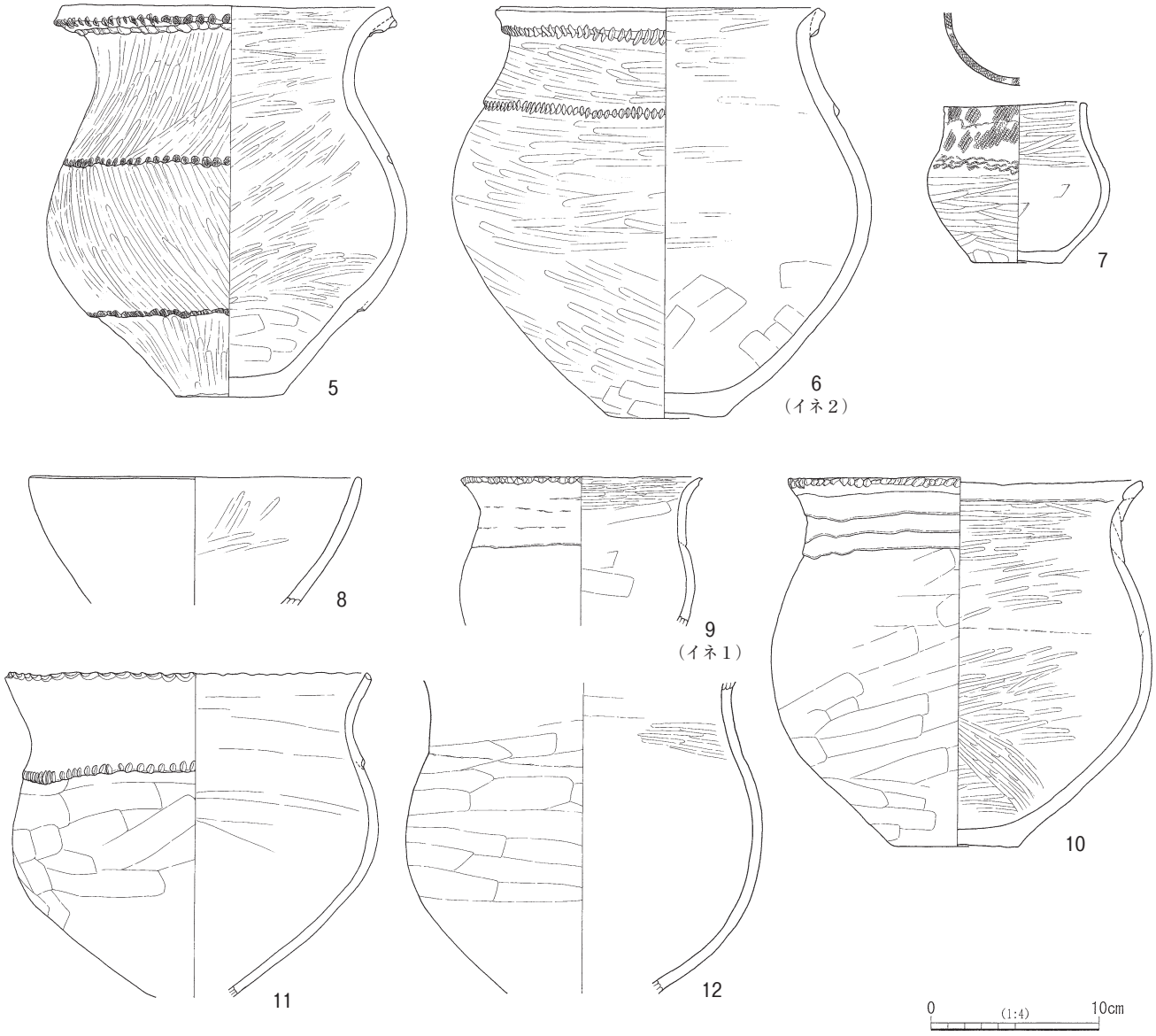


第80図　3SI-027と出土遺物

本１単位の棒状浮文が４単位あり、円形の赤彩文が２か所１単位で巡る。折返し端部には棒状工具による押捺列が施されている。頸部と内面はミガキで仕上げられ赤彩されている。一部二次的な被熱により、器面が荒れている。２は頸部が全周するが、口縁部は僅かしか遺存していない。折返しの口縁部には縄文が施文されている。頸部と肩部には２段のＳ字状結節文に区画された羽状縄文の文様帯が巡る。文様帯の間はミガキで仕上げられているが、赤彩の有無ははっきりしない。口縁部内面は磨かれ赤彩されている。口唇部および頸下端部の破断面が著しく摩滅しており、器台として転用されていたと考えられる。頸部外面にイネ（籾殻）、肩部内面にイネ（種子）、断面にイネ（籾殻）の圧痕が計３点見つかった。３は肩部から下の70％程度が遺存し、底部は完存している。肩部から胴部最大径付近にかけて、Ｓ字状結節文や縄文及び沈線により文様帯が構成されている。文様帯の上部と下部はミガキで仕上げられ、赤彩される。文様帯は、縄文及びＳ字状結節文を施文した後に沈線を施し、部分的に縄文を擦り消して赤彩することにより、鋸歯文・幾何学文などが描かれる。底部周縁部は摩滅している。また、内面にも剥落が見られる。４は胴部の30％程度が遺存し、底部は70％遺存している。外面は摩耗し調整痕がはっきりしないがミガキ調整とみられる。底面の周縁部が摩滅している。５・７は広口壺である。５は口縁部を70％程度欠くほかは完形である。折返し口縁の端部には、押捺列が２段巡る。上段の押捺は中に細かい粒が観察され、布巻棒状工具によるとみられる。下段の押捺列は、布巻棒状工具の端部を押しつけたような痕跡が残る。また、胴部の上部と下部には各１段の輪積み痕を残すが、その部分にも押捺列を巡らせている。これらは中に細かい粒が観察されるもので、布巻棒状工具によるとみられる。全体にミガキで丁寧に仕上げられている。底部は著しく摩滅している。６はほぼ完形である。口径19.0㎝、胴部最大径25.0㎝、底径6.9㎝である。５が胴部のやや低い位置に最大径をもつ器形であるのに対して、６はやや高い位置に最大径をもつ。肩部に輪積み痕を１段残し、折返し口縁の端部と輪積み痕の接合部分には、棒状工具による押捺列が巡る。口唇部は面取りされている。全体に丁寧にミガキが施されている。やや上げ底となる底部の周縁部が摩滅している。胴部外面にイネ（籾殻）、口縁部内面にイネ（種子）の圧痕が計２点見つかった。７は小型の広口壺で、口縁部の一部を僅かに欠くほかは完形である。面取りされた口唇部及び口縁部には縄文が施文され、肩部は３段のＳ字状結節文により区画されている。Ｓ字状結節文より下はミガキで仕上げられている。二次的な被熱により、ススが付着している。８は鉢の口縁部と考えられる破片で、口縁部の15％程度の遺存度である。内外面ともミガキで仕上げられている。９～12は甕である。９は小型の甕で、口縁部の75％程度が遺存している。口唇部には押捺列が巡る。頸部はナデ消されているものの、輪積み痕が4段確認できる。胴部内面にイネ（籾）の圧痕１点が見つかった。10はほぼ完形である。口径21.0㎝、胴部最大径22.7㎝で、胴部最大径のほうが口径より若干大きくなる。口唇部には棒状工具による押捺列が巡り、頸部には輪積み痕が４段明瞭に残される。口縁部内面にも折返し口縁状に輪積み痕が見られる。胴中位から口縁部にかけての外面にススが付着している。内面はコゲにより黒色化し、底面がやや摩耗している。11は口縁部の50％程度が遺存している。口唇部には上部から指頭による押捺が加えられ、小刻みな波状を呈している。肩部には輪積み痕が１段残され、棒状工具による押捺列が巡る。器面は摩耗しており、調整痕ははっきりしないが、ナデ調整とみられる。胴上部外面にススの付着が認められる。底径が小さくなることから、台付甕の可能性もある。12は口縁部と底部を欠損するが頸部は全周する。頸部径は17.9㎝、胴部最大径は21.2㎝である。ナデ消されているが肩部に輪積み痕が１段残る。胴下部外面にススが付着している。口縁部破断面が摩滅している。



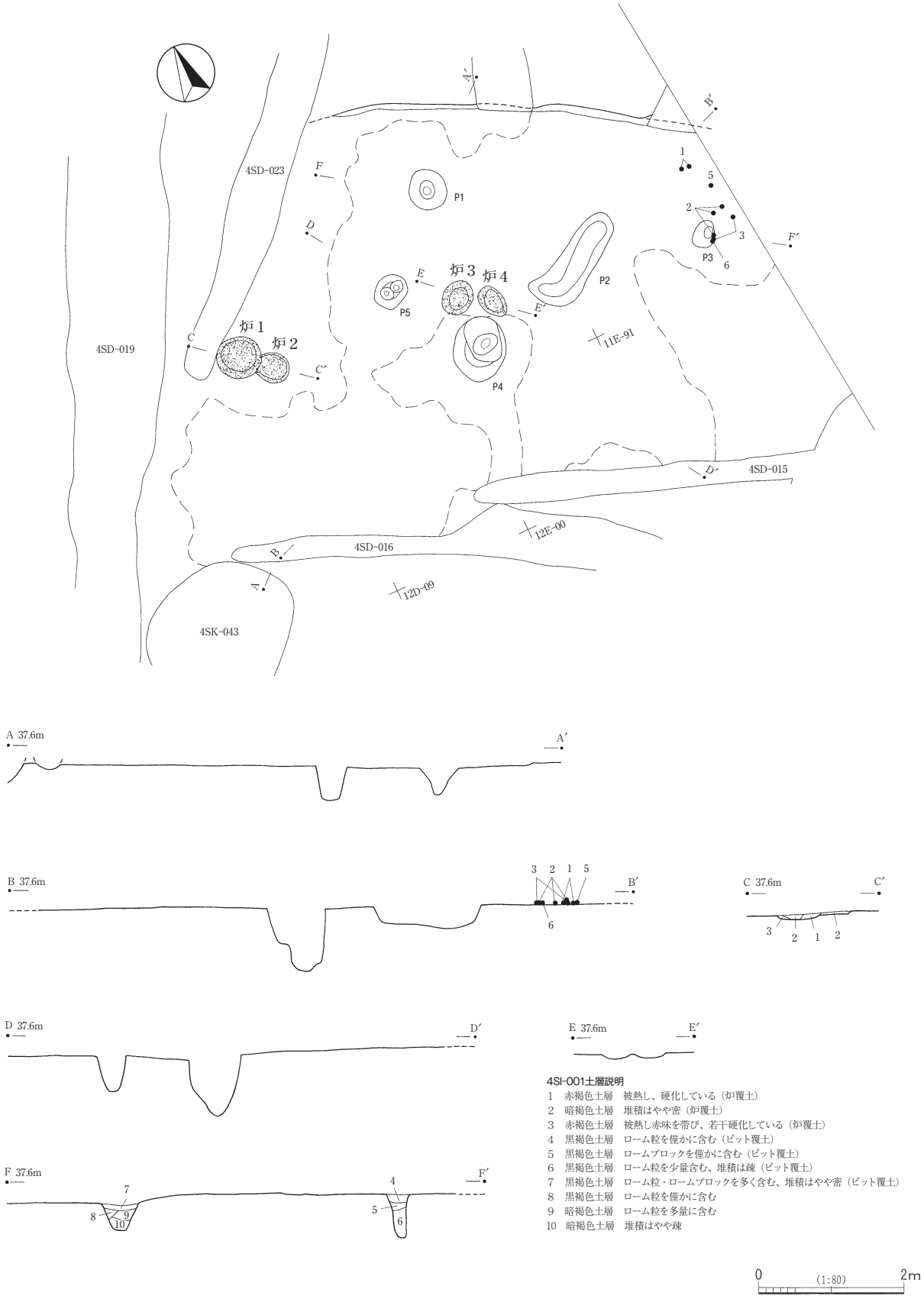
第81図　3SI-028と出土遺物（１）



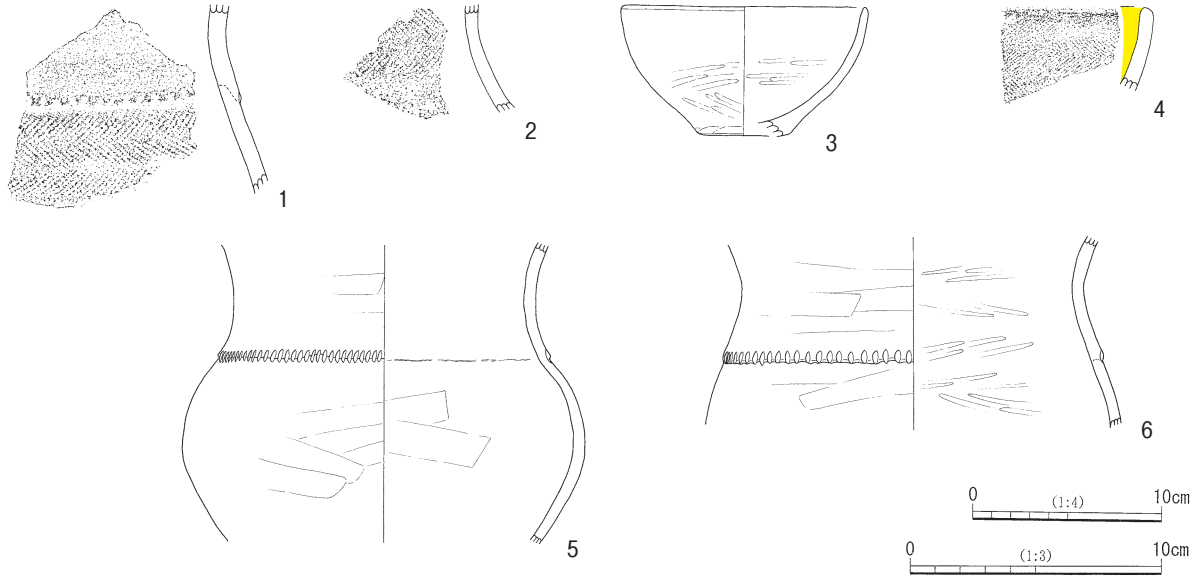
第82図　3SI-028出土遺物（２）

4SI-001（第83・84図、図版12・26・34）

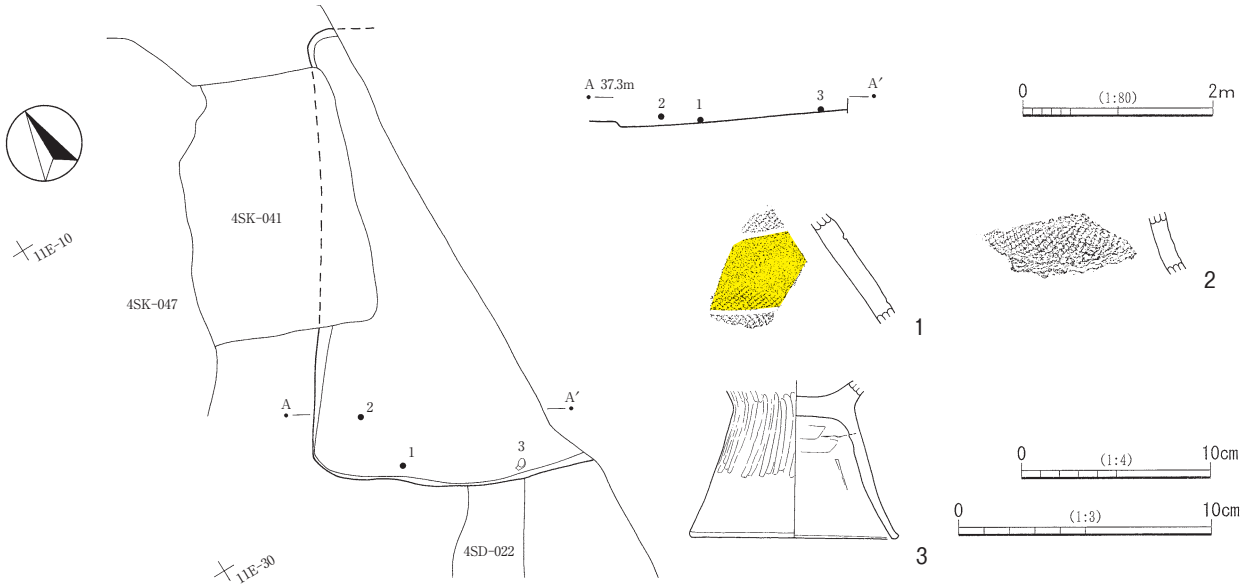
11D-78・79・87～89・97～99、11E-70～72・80～82・90～92、12E-00～02グリッドに所在する。東側が調査区外となり、中・近世の溝状遺構4SD-016・019・023等がある中、硬化面と僅かな壁及び４基の炉と５か所のピットが検出された竪穴住居跡である。明確な平面形は捉えることができず、複数の遺構が重複している可能性も考えられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは、最も深い所で12cmほどである。壁溝は見られない。炉は４基検出された。炉１は径60cmほどで円形を呈し、径45cmほどで円形を呈する炉２と重複している。土層断面の観察から炉１の方が炉２より新しいと考えられる。床面からの深さは、炉１は６cmで、炉２が１cmと浅い。炉３は、長軸49cm、短軸40cmの楕円形状を呈する。床面からの深さは９cmである。炉４は、長軸48cm、短軸32cmの楕円形を呈する。床面からの深さは８cmである。いずれの炉床も被熱し硬化していた。ピットの床面からの深さは、P1が53cm、P2が32cm、P3が62cm、P4が87cm、P5が36cmである。いずれも掘り込みはしっかりしているが、配置に規則性はなく、用途等は不明である。


4SD-023
4SD-019
4SD-015
4SD-016
4SK-043
炉1
炉2
炉3
炉4
P1
P2
P3
P4
P5
11E-91
12E-00
12D-09
A 37.6m
B 37.6m
C 37.6m
D 37.6m
E 37.6m
F 37.6m
4SI-001土層説明
1 赤褐色土層 被熱し、硬化している（炉覆土）
2 暗褐色土層 堆積はやや密（炉覆土）
3 赤褐色土層 被熱し赤味を帯び、若干硬化している（炉覆土）
4 黒褐色土層 ローム粒を僅かに含む（ピット覆土）
5 黒褐色土層 ロームブロックを僅かに含む（ピット覆土）
6 黒褐色土層 ローム粒を少量含む、堆積は疎（ピット覆土）
7 黒褐色土層 ローム粒・ロームブロックを多く含む、堆積はやや密（ピット覆土）
8 黒褐色土層 ローム粒を僅かに含む
9 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む
10 暗褐色土層 堆積はやや疎
0 (1:80) 2m

第83図　4SI-001



第84図　4SI-001出土遺物



第85図　4SI-002と出土遺物

遺物は住居東側の床面直上からまとまって出土し、図示した遺物は６点である。１は広口壺の肩部破片と考えられる。輪積み痕が１段明瞭に残され、接合端部には布巻棒状工具の押捺列が巡る。押捺列より下には羽状縄文が施文される。内外面赤彩の可能性があるが、はっきりしない。２は壺の頸部破片である。器面が摩耗しているが、３段のＳ字状結節文を区画として、上部には羽状縄文が施文され、下部は磨かれているようである。３・４は鉢である。３は全体の40％程度の遺存度である。器面は摩耗しているが、内外面ともミガキで仕上げられている。内外面赤彩の可能性もあるが、不明である。４は口縁部破片である。外面には羽状縄文が施文される。内面は磨かれ、赤彩されている。５・６は甕である。５は胴部最大径の40％程度が遺存している。復元頸径16.0cm、復元胴部最大径21.2cmで、胴部最大径の部分が丸く膨らむ。輪積み痕が１段残され、接合部には布巻棒状工具によるとみられる押捺列が巡る。胎土には砂粒を多く含んでいる。部分的に二次的な被熱を受け、器面が劣化している。６は頸部の40％程度の破片で、復元頸径

は18.0cmである。1段残る輪積み痕の接合部分には、布巻棒状工具による押捺列が巡る。口縁部破断面が摩滅している。

4SI-002（第85図、図版12・26・34）

11E-01・11・20・21・30・31グリッドに所在する。東側は調査区外となり、西側で中・近世の方形竪穴4SK-041、南側で中・近世の溝状遺構4SD-022に切られている。平面形は方形とみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは最大で９cmである。壁溝は確認できない。床面は北西側に向かい緩やかに傾斜している。炉やピットは検出されなかった。

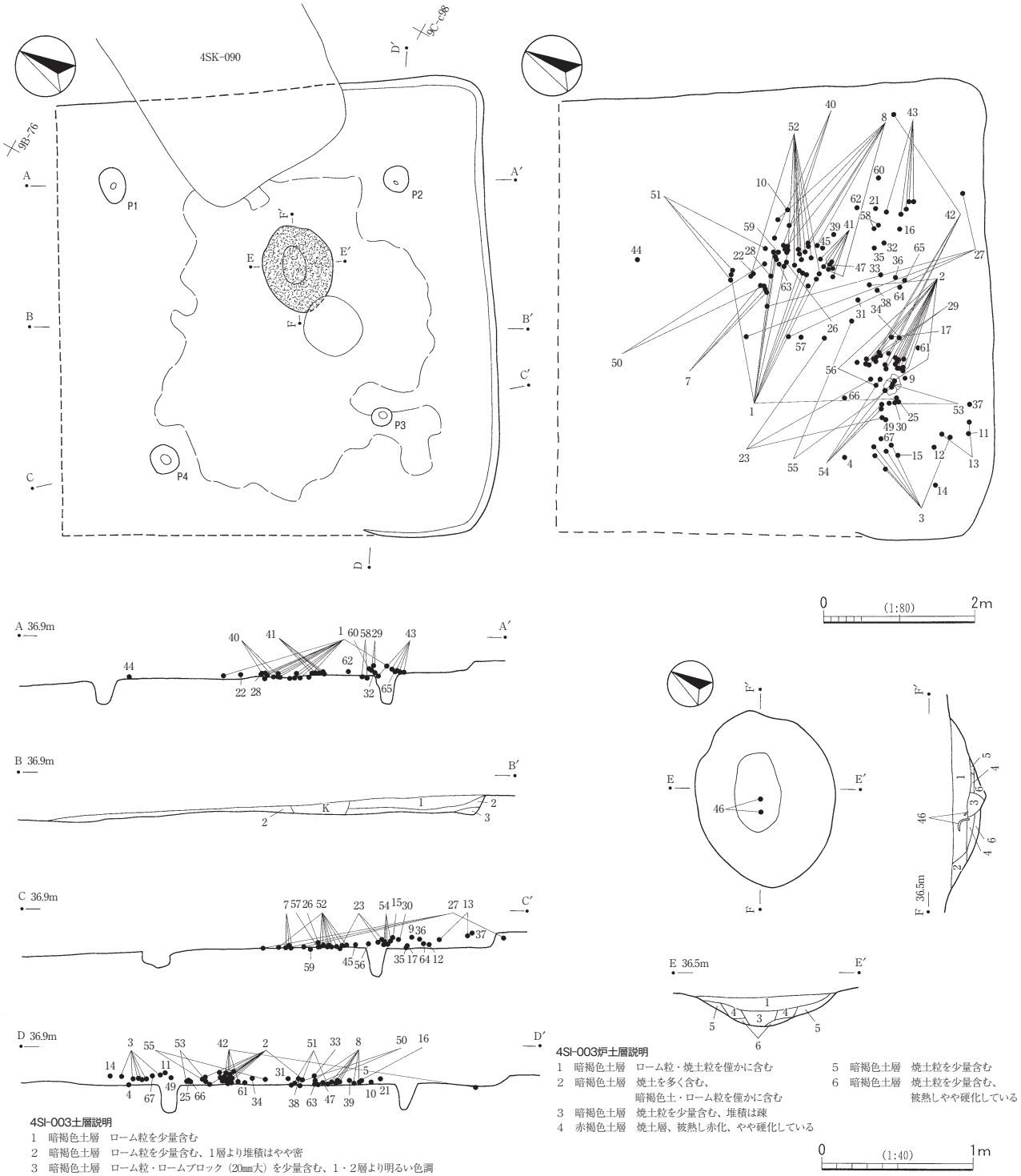
遺物の出土量は少なく、図示した遺物は３点のみで、いずれも床面直上からの出土で、３は南壁際から逆位の状態で出土している。１・２はともに壺の肩部破片である。１は羽状縄文を施文した上から沈線で区画し、間を磨いて赤彩している。２は縄文が施文され、下端には少なくとも３段のＳ字状結節文があり、これが区画になるとみられる。３は台付甕の脚部と考えられる。脚部の40％程度の遺存度で、接合部は完存している。外面と甕内面はミガキ調整である。底部内面がやや摩耗し、接合部の破断面が摩滅している。

4SI-003（第86・87・88図、図版12・26・27・34・35・36）

9C-75・76・84～87・94～97、10C-04～07グリッドに所在する。中・近世の方形竪穴4SK-090に切られ、また西側は削平されて壁は遺存していない。平面形は一辺600cmほどの正方形を呈すると考えられる。主軸方向は、N-58°-Eである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは最大で24cmである。壁溝は確認できない。床は炉を中心に硬化していた。床面からは、炉１基とピットが４か所検出された。炉は、中央部北東寄りに位置し、長軸118cm、短軸92cmの楕円形を呈する。断面は皿状をなし、床面からの深さは24cmである。炉床は焼けて硬化していた。検出されたピットは主柱穴と考えられ、床面からの深さは、P1が32cm、P2が36cm、P3が38cm、P4が20cmである。いずれも浅く、主柱穴としては貧弱である。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

東側床直上から多くの遺物が出土した。遺存率の低い破片も多く、住居廃絶後投棄された可能性が高い。46は炉内から出土している。

図示した遺物は67点である。１～38は壺である。１は多数の破片が接合し、全体として胴部～底部までの70％程度が遺存している。頸部から胴部上半には縄文が沈線に区画された舌状文が見られる。胴部下半にはハケ調整痕が残り、底部に近い部分には縦方向のミガキが施されている。ハケ調整痕は上部の舌状文の間にも見られることから、全体的にハケ調整を施した後に縄文を施文し、沈線で区画して文様帯をなしたと考えられる。外面は摩耗しており、赤彩の可能性もあるが、不明である。また、底部の周縁部分が著しく摩滅している。胴下半部内面の剥落が著しい。２は胴部の70％程度の遺存度で、底部は完存する。外面はミガキで仕上げられている。器面は摩耗している。底部は著しく摩滅し、丸味を帯びやや不安定である。断面に不明種実の圧痕が１点見つかった。３は胴部の破片である。外面はミガキ調整である。４は口縁部破片で、内外面にハケ調整が施され、口唇部には縄文が施文されている。５も口縁部破片で、外面はハケ調整、内面はナデで、面取りされた口唇部には縄文が施文されている。６は口縁部破片と考えられる。ハケ調整を施した後、沈線で重四角形文を描いている。上に刻みの施された棒状浮文には、横から焼成前穿孔が１か所施されている。赤彩が施されている可能性もあるが、はっきりしない。７は頸部の60％程度



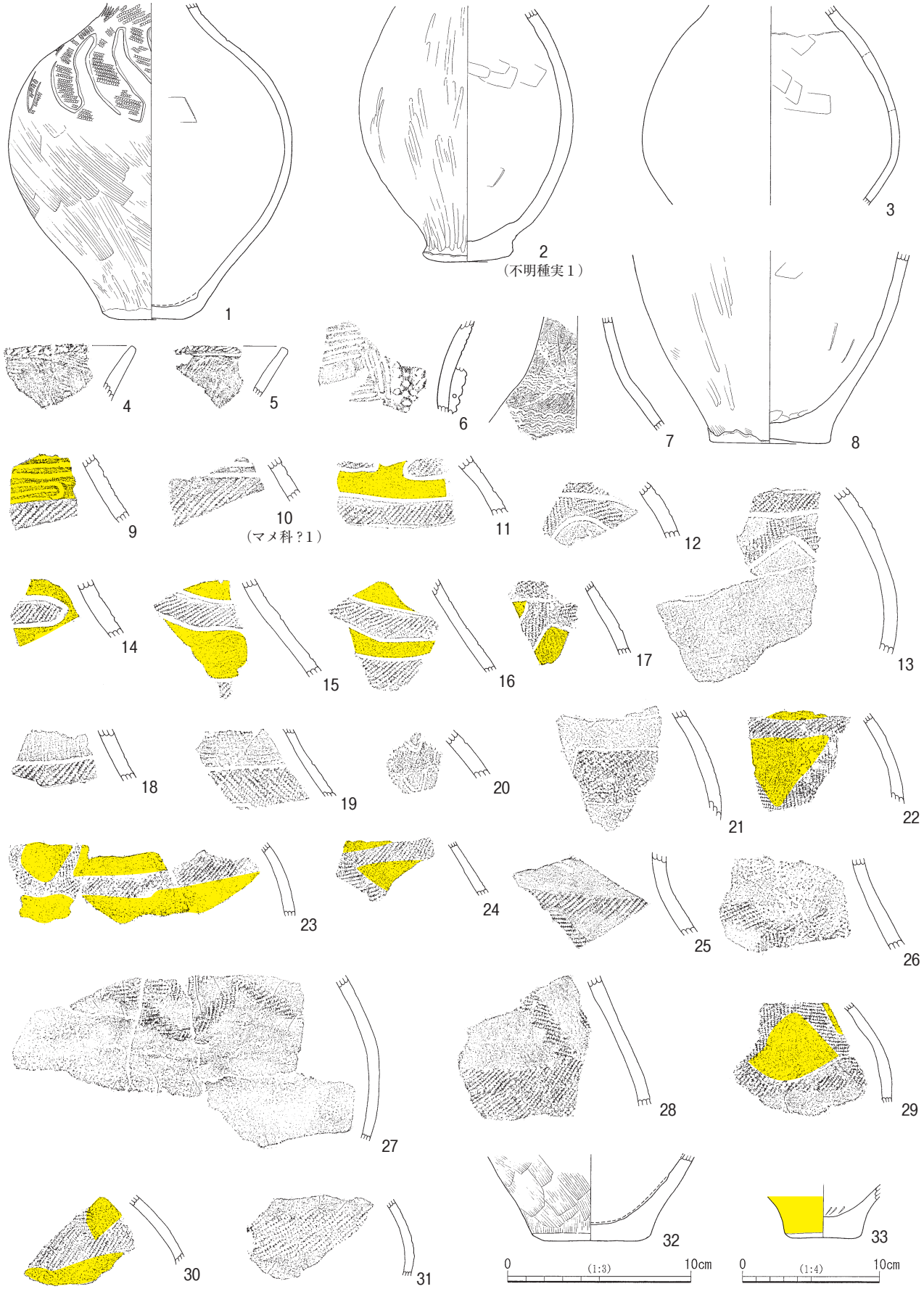
第86図　4SI-003

が遺存している。最も口縁部に近い部分はミガキが施され、その下から肩部にかけては文様帯となっている。文様帯は、斜縄文と３段程度の櫛描波状文が交互に施されている。内面は剥落が著しい。８は底部は完存するが、胴部下半は30％程度の遺存度である。外面はミガキ調整であるが、底部付近にハケ調整痕が残る。底部は厚く、ヘラケズリにより底面にはやや凹凸がある。９は沈線による楕円文が見られる。下端は斜縄文である。縄文施文部以外は赤彩されている。10は斜縄文上に２本の沈線が横走する。沈線の内部には赤彩の痕跡が観察されるが、赤彩の範囲ははっきりしない。断面にマメ科？の圧痕が１点見つかった。

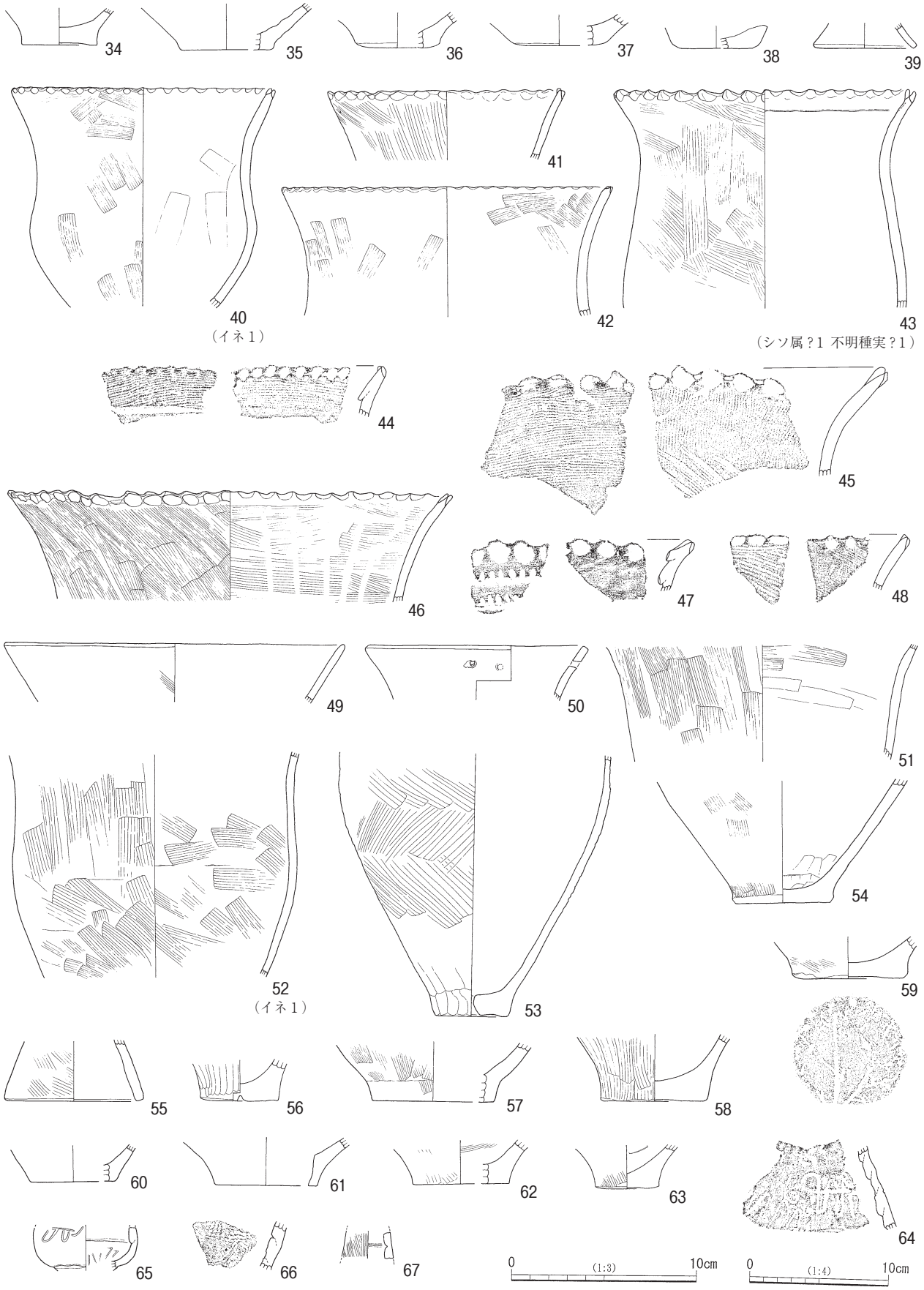
11～21は、縄文が沈線で区画され、文様をなすものである。また、11～16は同一個体とみられる。11は斜縄文が沈線で区画され、磨り消された部分が王字状文をなしていると考えられる。磨消し部分は赤彩されている。12・13は結紐文をなすとみられ、同一個体の可能性もある。いずれも、部分的に赤彩されている可能性もあるが、はっきりしない。14～16は斜縄文を沈線で区画し、施文部分以外はミガキの後、赤彩している。同一個体であろう。18は斜縄文を沈線で区画し、施文部分以外はミガキが施されている。19は沈線で区画された縄文帯が見られるが、上部の沈線上に刺突列が施されている。赤彩の有無は不明である。20は細い撚糸状の縄文を波形の沈線で区画している。部分的に赤彩されている可能性もあるが、はっきりしない。22～31は縄文が沈線区画を持たずに結紐文などの文様をなすものである。22～24は同一個体とみられる。26・27は器面の摩耗が著しく、赤彩は不明である。28～30は同一個体とみられる。32～38は壺の底部である。32は器壁が厚く、重量のある底部である。底部周縁部は著しく摩滅し、内面は剥落している。33は底部のみ完存する。外面は赤彩されている。底部の周縁部は著しく摩滅している。34は底部の60％程度が遺存している。やや上げ底気味である。内面が剥落している。35は30％程度の遺存度である。内面が剥落している。36は20％程度の遺存度である。内外面とも器面が摩耗し、調整痕等は観察できない。底部周縁部が摩滅している。37は底部の20％程度が遺存している。外面は全体的に摩耗しているが、底部の周縁部は特に摩滅している。38は底部の25％程度の破片である。底面の周縁部が著しく摩滅している。また、内面も器面が剥落している。

39は高坏の脚部で、裾径の15％程度の破片である。比較的丁寧な作りで、外面は縦方向のミガキが施されている。

40～63は甕である。40は口縁部の30％程度が遺存している。口唇部は正面と上部からの指頭押捺列となっている。外面胴下部にはススが付着し、内面胴下部は摩耗している。胴部内面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。41は口縁部の25％程度が遺存している。口唇部は指頭による正面からの押捺列が巡る。外面にはススの付着が認められる。42は口縁部の20％程度が遺存している。口唇部は上部からの指頭押捺列が巡る。外面はハケ調整後、軽くミガキが入っているようである。外面はススが付着し、内面胴部は若干摩耗している。43は口縁部の30％程度が遺存している。口唇部には指頭による正面からの押捺列が巡り、口縁部内面は折返し状となり、輪積み痕を残している。外面には若干のススが付着している。断面にシソ属？と不明種実の圧痕が２点見つかった。44の口唇部は上部からのハケ状工具による押捺列が施されている。45の口唇部は外面から指頭による押捺が施される。外面下端には、ハケ調整痕の上に櫛歯状工具による斜線が施されている。外面にはススの付着が見られる。46は口縁部の30％程度が遺存している。大型で復元口径は32.0cmである。口唇部は、外面・内面とも、ハケ調整を施した後に指頭による押捺列が巡る。47の口唇部も外面・内面から指頭による押捺が施される。内面には２段の輪積み痕があり、それぞれの端部には棒状工具による押捺列が巡る。48の口唇部も外面・内面から指頭による押捺が施され、外面には爪痕と思われるものも観察される。49は口縁部の僅かな破片である。鉢とも考えられるが、外面にハケ調整痕やススが観察されることから、甕と考えた。50は口縁部の僅かな破片である。焼成前穿孔が２か所確認できる。51は頸部のみほぼ全周している。外面上半部にはススが付着し、下半部は著しく剥落している。52は胴部最大径の50％程度が遺存し、復元胴部最大径は20.6cmである。胴部内面にイネ（種子）の圧痕が１点見つかった。53は胴部下半～底部の約50％が遺存している。同一個体と考えられる口唇端部には、指頭による押捺列が認められる。外面には、櫛歯状のやや鋭いハケによる羽状の調整痕が見られ、胴下部は



第87図　4SI-003出土遺物（１）



第88図　4SI-003出土遺物（２）

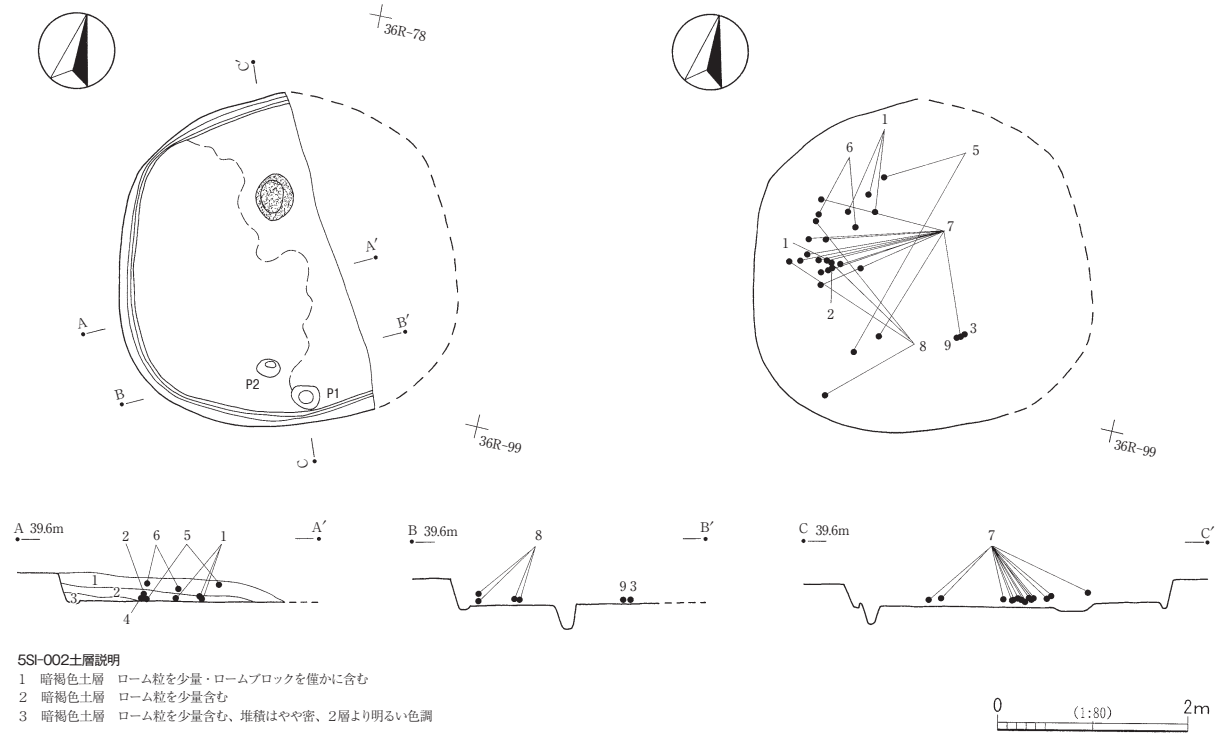
剥落して明瞭ではないが、ヘラケズリ後ミガキとみられる。やや上げ底となる底部の中央には、焼成後穿孔があり、濾過器として転用されていたと考えられる。外面胴上部にはススが付着し、胴下部は被熱により赤変している。内面胴下部から底面にかけて摩耗している。54は底部が完存する。底部内面がやや摩耗している。55は外面にハケ調整痕が見られ、台付甕の脚部と考えられる。裾部の50％程度が遺存している。56は底部の70％程度が遺存している。底部外面中央部には、未貫通の焼成後穿孔痕が観察される。穿孔痕は円錐形を呈している。57は底部の20％程度が遺存している。底面の器厚が非常に厚い。58は底部のみ完存する。外面にハケ調整痕が明瞭に見られるが、底部内面が摩耗している。59は底部のみ完存する。底面に木葉痕がある。60は30％程度の遺存度である。内外面ともナデ調整とみられる。61も底部の20％程度が遺存している。外面の調整は器面が柔らかい段階でのナデとみられ、器面に凹凸がある。破断面が一部平滑になっており、二次的に使用された可能性がある。内面はコゲにより、黒色化している。62も30％程度の遺存度である。63は20％程度の遺存度である。

64～67はミニチュア土器である。64と65は同一個体と考えられ、器形はやや下膨れとなる壺であろう。64は肩部から胴部にかけての破片である。外面には細い沈線による波状及び直線状の文様が見られる。また、内面には輪積み痕が明瞭に残され、上下端とも接合部分で破損している。65は最大径の20％程度の破片で、最大径は7.6cmである。外面上部には細い沈線による波状と直線状の文様が見られる。下端には深い沈線がある。内面上部には輪積み痕が明瞭に残され、接合部分で破損している。底部は欠失しているが、円盤状の粘土を貼り付けていたと考えられる。64・65はいずれも胎土に特徴的な黒色粒子を含む。66は壺胴下部の破片である。外面には、撚糸状の縄文が観察される。内面には輪積み痕が残る。67も壺頸部の破片である。外面はハケ調整である。内面は輪積み痕が明瞭に残されており、破片の上下端も接合部分で破損している。

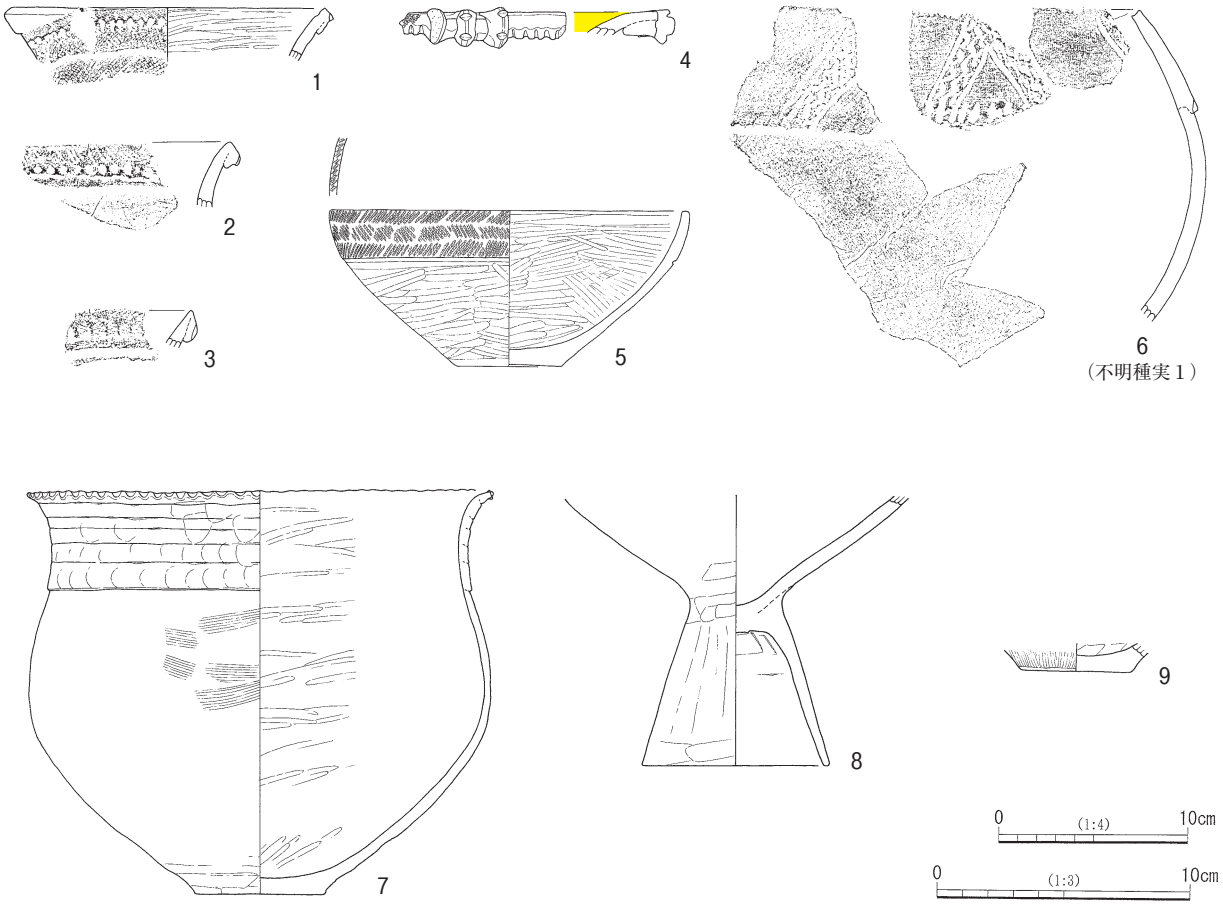
5SI-002（第89図、図版13・27・28・36）

36R-77・86～88・97・98グリッドに所在する。東側は撹乱により失われている。平面形は長軸348cmの円形に近い隅丸方形を呈する。主軸方向は、N-22°-Wである。北西側で土坑5SK-003と重複するが、検出状況等から当遺構の方が新しいとみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは37cmである。壁溝は全周している。床は遺構西側を中心に硬化している。床面からは、炉１基のほかピットが２か所検出された。炉は、中央部北寄りに位置し、長軸48cm、短軸40cmの楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、床面からの深さは10cmである。焼土が３cm堆積し、炉床はよく焼けて硬化していた。ピットの床面からの深さは、P1が18cm、P2が28cmである。検出位置からP1は入口ピットの可能性がある。住居覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

覆土からは比較的多くの遺物が出土した。図示した遺物は９点で、３・４・５・８・９が床面直上からの出土で、それ以外は住居埋没過程で投棄されたものと考えられる。１～４は壺である。１は口縁部の50％程度が遺存している。頸部と折返し口縁、面取りされた口唇部に縄文が施文され、折返し端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。内面はミガキで仕上げられている。２～４は口縁部の破片である。２は折返し部分に縄文が施文され端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。３も折返し部分に縄文が施文され端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。内面が赤彩されていた可能性もあるが、はっきりしない。４は口縁部が大きく開く器形である。明確ではないが、折返し口縁部には基本的に縄文が施文されるよう



5SI-002土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を少量・ロームブロックを僅かに含む
2　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
3　暗褐色土層　ローム粒を少量含む、堆積はやや密、2層より明るい色調



第89図　5SI-002と出土遺物

で、３本１単位の棒状浮文も貼付されている。端部には棒状工具による押捺列が巡る。内面は赤彩されている。５は鉢である。口縁部はほとんど遺存していないが底部は完存し、全体としては60％程度の遺存度である。沈線で区画された口縁部には羽状縄文が施文される。面取りされた口唇部にも縄文が施文される。施文部以外は内外面ともミガキで仕上げられている。赤彩の有無ははっきりしない。６は鉢の破片である。折返しの口縁部には、沈線で区画されたＳ字状結節文が見られ、山形文をなすようである。折返しの端部には布巻棒状工具の押捺列が巡る。口唇部にもＳ字状結節文が施文される。施文部分以外の部分はミガキで仕上げられているが、赤彩の有無ははっきりしない。断面に不明種実の圧痕が１点見つかった。７は甕である。胴部最大径の30％程度が遺存しているが、底部は完存し口縁部は僅かしか遺存していない。復元口径24.4cm、復元胴部最大径24.2cmと、口径と胴部最大径がほとんど同規模となる器形である。口唇部には指頭による押捺列が巡り、頸部には６段の輪積み痕と指頭圧痕が観察される。胴部の調整はハケ調整後ナデとみられる。外面胴部最大径付近と口縁部にススが付着している。８は台付甕で、脚部が完存している。外面胴下部にはススが付着しており、内面にはコゲが認められ、胴中位部にむかって器面が摩耗している。９は底部の30％程度の遺存度で甕と考えられる。外面にハケ調整痕が残る。

5SI-003（第90図、図版13・28）

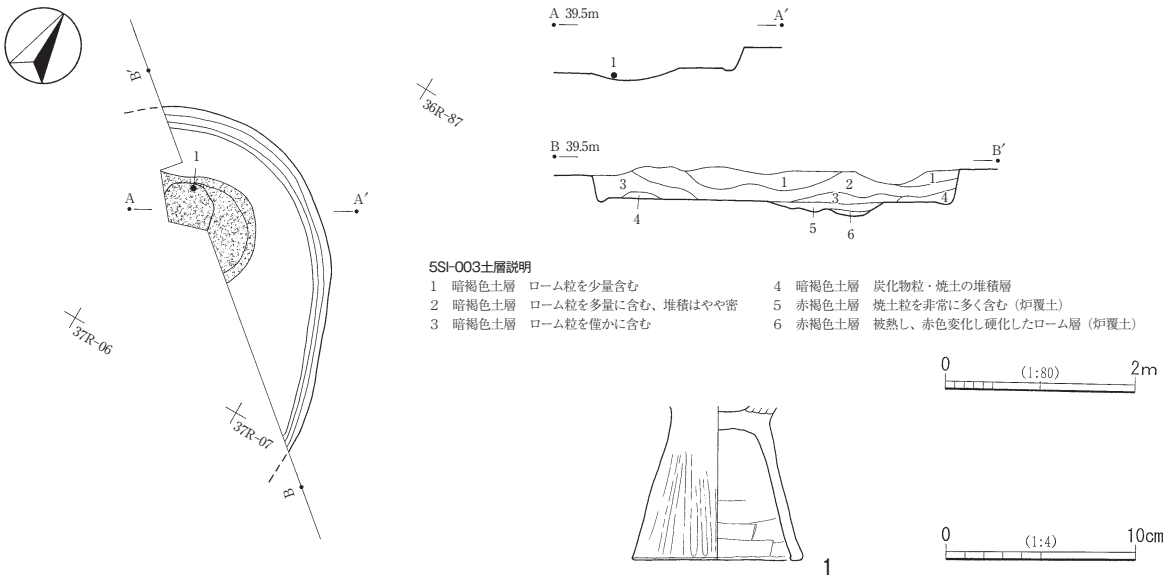
36R-85・86・96・97、37R-07グリッドに所在する。西側は調査区外となるが、平面形は楕円形を呈するとみられる。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは35cmである。壁溝が全周している。床は壁に沿うように硬化している。床面からは、炉１基が検出された。炉は楕円形を呈し、断面は浅い皿状を呈し、床面からの深さは９cmである。焼土が６cm堆積している。ピットは検出されていない。床上には、焼土と炭化物が部分的に堆積しており、住居覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土が主体的に堆積している。このことから、住居廃絶後廃材の焼却が行われて、そののち埋め戻しが行われたと考えられる。

図示した遺物は１点のみで、炉から出土している。１は台付甕で脚部のみ完存している。器面は摩耗しており調整痕等は明瞭ではないが、ミガキが施されているようである。脚上部がかなり被熱し、赤変している。

5SI-004（第91図、図版13・28・36）

36R-40～42・50～53・62・63グリッドに所在する。西側は調査区外となる。平面形は長軸496cmの楕円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは42cmである。壁溝が全周している。床は炉周辺を中心に硬化している。床面からは、炉１基とピットが４か所検出された。炉は、中央部北西寄りに位置し、長軸94cm、短軸64cmの楕円形を呈する。床面からの深さは10cmである。炉床はよく焼けて硬化していた。検出されたピットのうち、P1は主柱穴、P2は貯蔵穴と考えられる。ピットの床面からの深さは、P1が81cm、P3が17cm、P4が21cmである。なお、P2は長軸75cm、短軸58cmの楕円形を呈し、断面は箱形で、深さは35cmである。住居覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

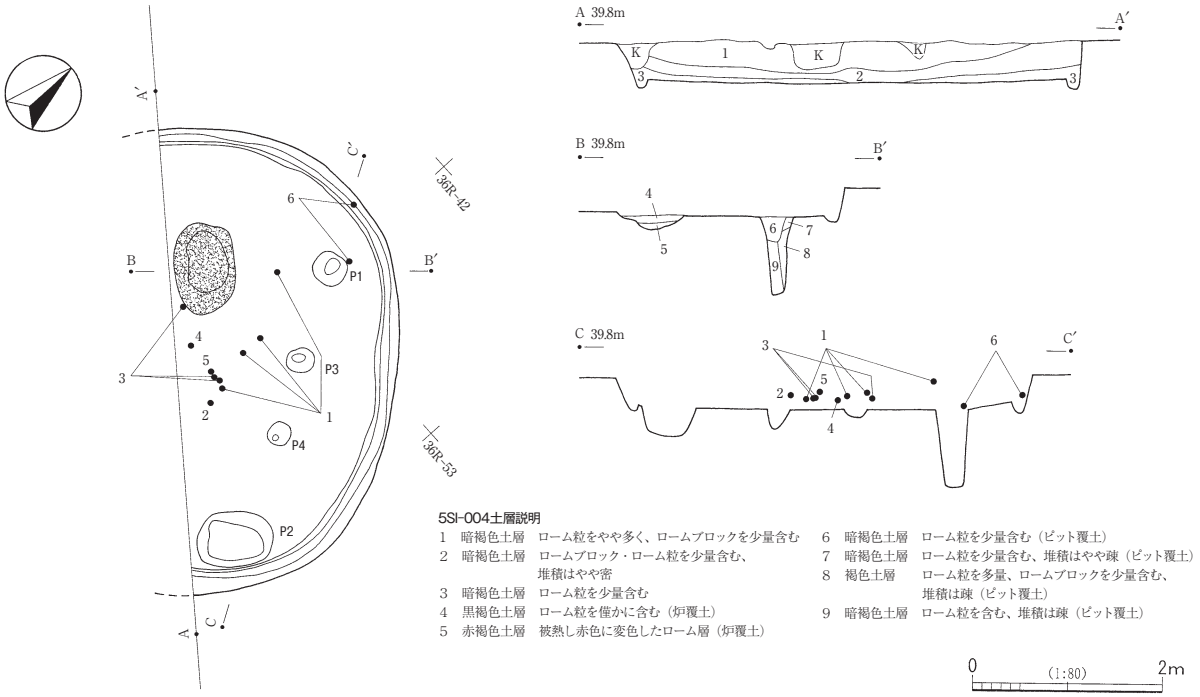
出土した遺物は、小破片が多い。図示した遺物は６点である。６が床面直上からの出土であるほかは覆土中からの出土で、住居埋没過程で投棄されたものと考えられる。１は壺で、肩部の40％程度が遺存して



5SI-003土層説明

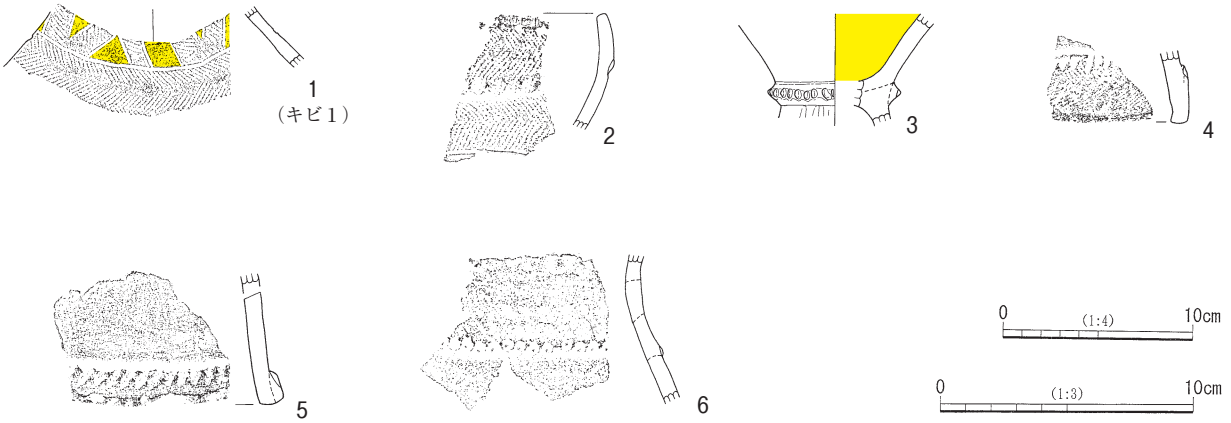
1　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
2　暗褐色土層　ローム粒を多量に含む、堆積はやや密
3　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む
4　暗褐色土層　炭化物粒・焼土の堆積層
5　赤褐色土層　焼土粒を非常に多く含む（炉覆土）
6　赤褐色土層　被熱し、赤色変化し硬化したローム層（炉覆土）

第90図　5SI-003と出土遺物



5SI-004土層説明

1　暗褐色土層　ローム粒をやや多く、ロームブロックを少量含む
2　暗褐色土層　ロームブロック・ローム粒を少量含む、堆積はやや密
3　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
4　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む（炉覆土）
5　赤褐色土層　被熱し赤色に変色したローム層（炉覆土）
6　暗褐色土層　ローム粒を少量含む（ピット覆土）
7　暗褐色土層　ローム粒を少量含む、堆積はやや疎（ピット覆土）
8　褐色土層　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む、堆積は疎（ピット覆土）
9　暗褐色土層　ローム粒を含む、堆積は疎（ピット覆土）



第91図　5SI-004と出土遺物

いる。羽状縄文を施文した後に沈線で区画し、擦り消し部分を磨いて赤彩し、鋸歯状の文様を表出している。断面にキビの圧痕が１点見つかった。２は鉢の口縁部破片と考えられる。口縁は折返しとなり、羽状縄文が施文され、折返しの端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。口唇部は面取りされている。口縁部下にも羽状縄文が施文され下部には沈線が巡る。内面はミガキで仕上げられているが、赤彩の有無ははっきりしない。３～５は高坏である。３は脚接合部の50％程度が遺存している。坏部と脚部の接合部分には、指頭による押捺列の施された隆帯が巡っている。器面は摩耗して調整痕ははっきりしないが、ミガキで仕上げられているようであり、坏部内面は赤彩されている。外面も赤彩の可能性があるが、明確ではない。４は高坏の脚部破片で、折返し部には羽状縄文が施され端部に棒状工具による押捺列が巡る。５は脚部の破片と考えられる。逆三角形とみられる透孔が認められる。裾部は折返しとなり、端部には布巻棒状工具の押捺列が巡る。６は甕である。輪積み痕が１段見られ、縄文原体の端部による押捺列が巡る。口唇部破断面が摩耗している。

7SI-003（第92図、図版13・28）

24H-96～98、25H-07～09・17・18グリッドに所在する。北側～東側は調査範囲外となり、北西側は中・近世の溝状遺構7SD-009に切られている。南東側で方形周溝墓SS-003と重複するが、新旧関係ははっきりしない。平面形は隅丸方形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは44㎝である。壁溝は全周している。床は全面的に硬化している。床面からはピットが２か所検出された。ピットは主柱穴と考えられ、床面からの深さは、P1が56㎝、P2が61㎝である。炉は検出されていない。住居覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物の出土は少なく、図示した遺物は１点のみで、床面直上からの出土である。１は底部のみ完存しているもので、大型の壺と考えられる。外面はミガキで仕上げられている。赤彩の可能性もあるが、明確ではない。

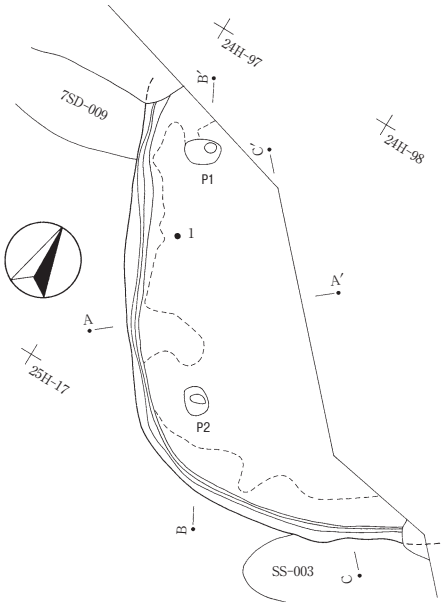
7SI-004（第93図、図版13・36）

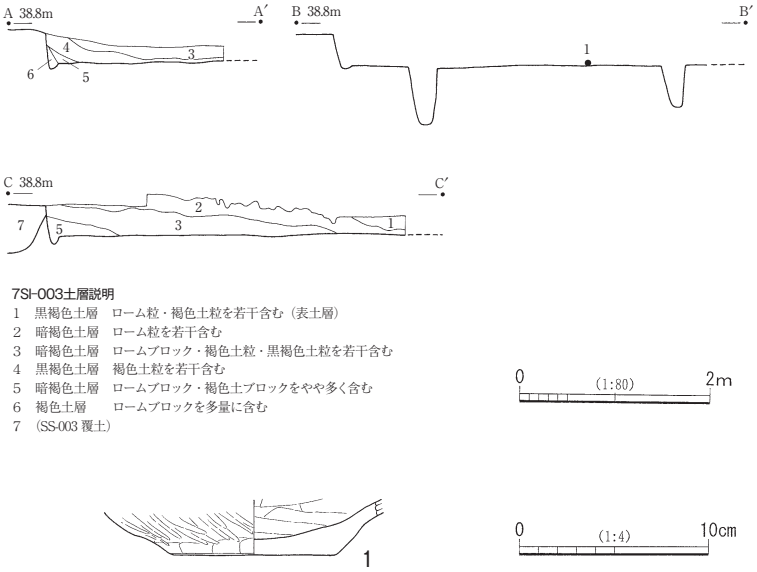
24G-78・88・89グリッドに所在する。南側を中・近世の溝状遺構7SD-001に切られ、撹乱により僅かに壁と炉の一部が検出されたのみである。平面形は、方形であろうか。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは23㎝である。壁溝が巡っている。検出された炉は楕円形をなし、断面は皿状で床面からの深さは15㎝である。炉床はよく焼けて硬化していた。ピットは検出されていない。住居覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

出土遺物は少なく、図示した遺物は２点で、いずれも覆土中からの出土である。１は鉢の口縁部破片である。口唇部にのみ縄文が施文され、ほかは内外面とも磨かれている。２は甕と考えられる。底部の20％程度が遺存している。

7SI-005（第94図、図版13・28）

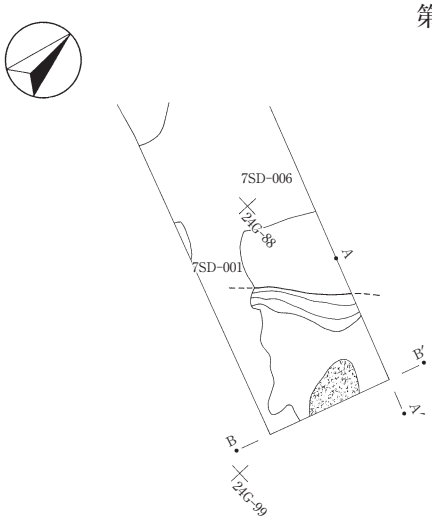
24G-66・67・76・77グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構7SD-002・003に切られ、撹乱により壁と床の一部が検出されたのみである。平面形は、丸味のある方形とみられる。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは17㎝である。壁溝が認められる。床には硬化部分が認められたが、炉やピット

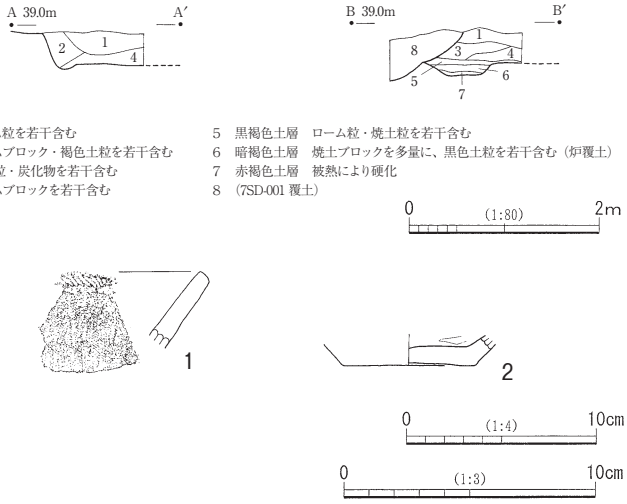




7SI-003土層説明
1　黒褐色土層　ローム粒・褐色土粒を若干含む（表土層）
2　暗褐色土層　ローム粒を若干含む
3　暗褐色土層　ロームブロック・褐色土粒・黒褐色土粒を若干含む
4　黒褐色土層　褐色土粒を若干含む
5　暗褐色土層　ロームブロック・褐色土ブロックをやや多く含む
6　褐色土層　　ロームブロックを多量に含む
7　（SS-003 覆土）

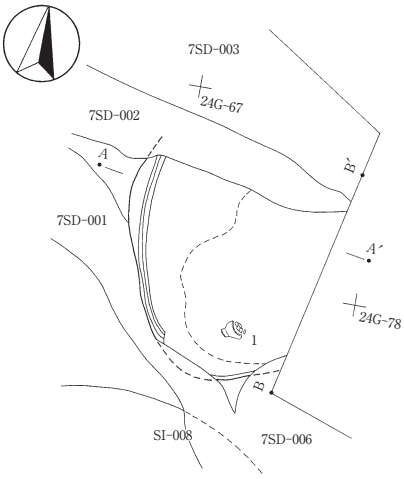
第92図　7SI-003と出土遺物

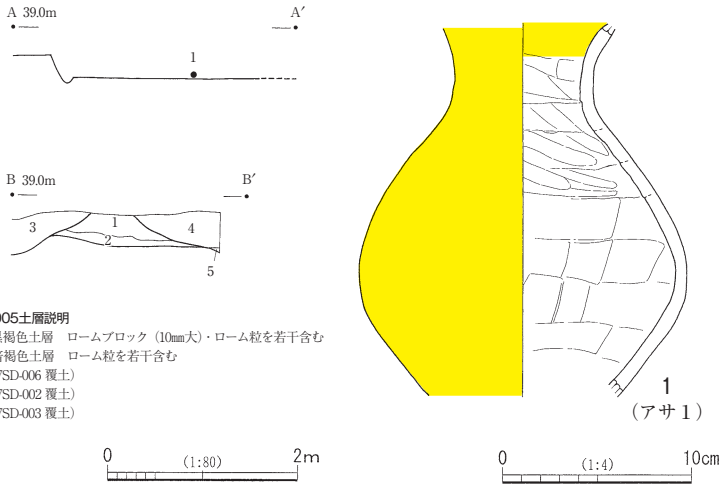




7SI-004土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を若干含む
2　暗褐色土層　ロームブロック・褐色土粒を若干含む
3　暗褐色土層　焼土粒・炭化物を若干含む
4　暗褐色土層　ロームブロックを若干含む
5　黒褐色土層　ローム粒・焼土粒を若干含む
6　暗褐色土層　焼土ブロックを多量に、黒色土粒を若干含む（炉覆土）
7　赤褐色土層　被熱により硬化
8　（7SD-001 覆土）

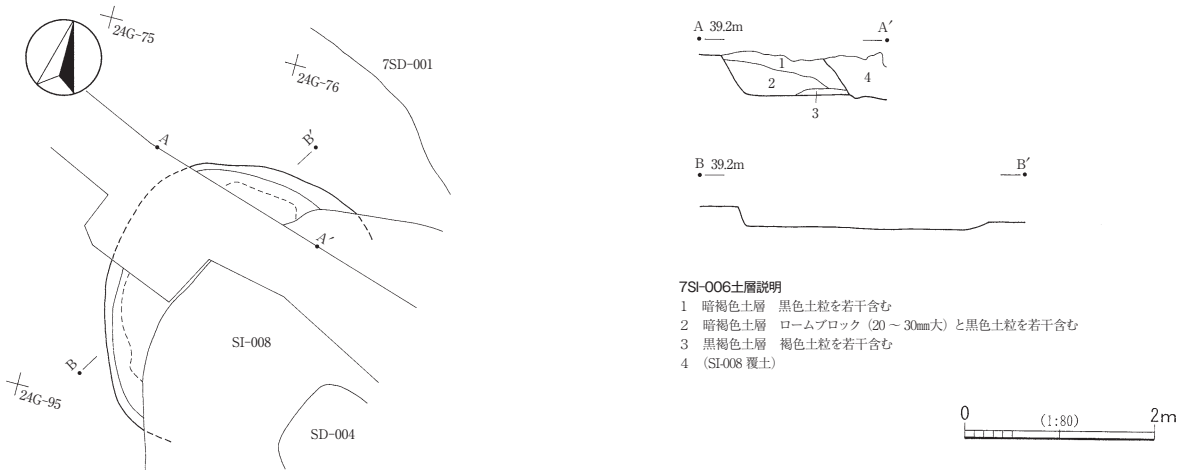
第93図　7SI-004と出土遺物





7SI-005土層説明
1　黒褐色土層　ロームブロック（10㎜大）・ローム粒を若干含む
2　暗褐色土層　ローム粒を若干含む
3　（7SD-006 覆土）
4　（7SD-002 覆土）
5　（7SD-003 覆土）

第94図　7SI-005と出土遺物



第95図　7SI-006

は検出されていない。住居覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体をなす。

出土遺物は少なく、図示した遺物は１点のみで、床面直上から倒れた状態で出土している。１は壺である。中・近世の溝状遺構7SD-001から出土した破片と接合している。口縁部と底部を欠損するが、そのほかはほぼ完存している。頸径は7.3cm、最大径は17.2cmである。外面の摩耗が著しいが、全面的にミガキで仕上げられ、赤彩されているとみられる。内面も頸部に赤彩が見られる。口唇部破断面が摩滅している。胴部外面にアサの圧痕が１点見つかった。

7SI-006（第95図、図版13）

24G-75・76・85・86・95グリッドに所在する。中央は撹乱を受け、東側は竪穴住居跡SI-008に切られている。平面形は丸味のある隅丸方形と推測される。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは26cmであるが、土層断面では42cmほどの掘込みの深さが確認できる。壁溝は確認できない。床面からは炉もピットも検出されなかったが、硬化面が検出され、竪穴住居跡と判断される。住居覆土は暗褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積していたと思われる。

遺物は出土しなかった。

２　方形周溝墓

検出された方形周溝墓は、周溝の一部のみのものや主体部とみられる土坑が検出されたものを含め、15基を数える。そのうち、SS-006、SS-008、SD-029、4SD-030・031、4SD-033、4SD-038の６基は弥生時代中期の、SS-001、SS-002、SS-003、SS-004、SS-005、4SD-029、4SD-032の７基は弥生時代後期の所産と考えられる。また、遺物は出土していないものの、周辺の状況からSS-007も弥生時代中期の可能性が高い。

方形周溝墓の遺構種別記号は、「SS」を用いているものと「SD」を用いているものとがある。「SS」については、基本的に隅が切れている場合でも一連の周溝と考えて番号を付しており、別遺構と判断した場合には異なる番号が付されている。一方「SD」については、基本的に周溝ごとにそれぞれ番号を付しており、別番号でも調査時に一連のものである可能性が指摘されているものがある。

報告に当たっては、「SS」は、各年度において少数しか検出されず、また、調査時に別遺構と考えて別の番号を付したものの整理作業時に同遺構と判断したものがあり、ほかの遺構のように遺構種別記号の前に数字を付しただけでは遺構名が煩雑になる恐れがあることから、遺構番号の振替を行うこととした。「SD」については、他の遺構と同様、遺構種別記号の前に調査次数の数字を入れて区別することとした。

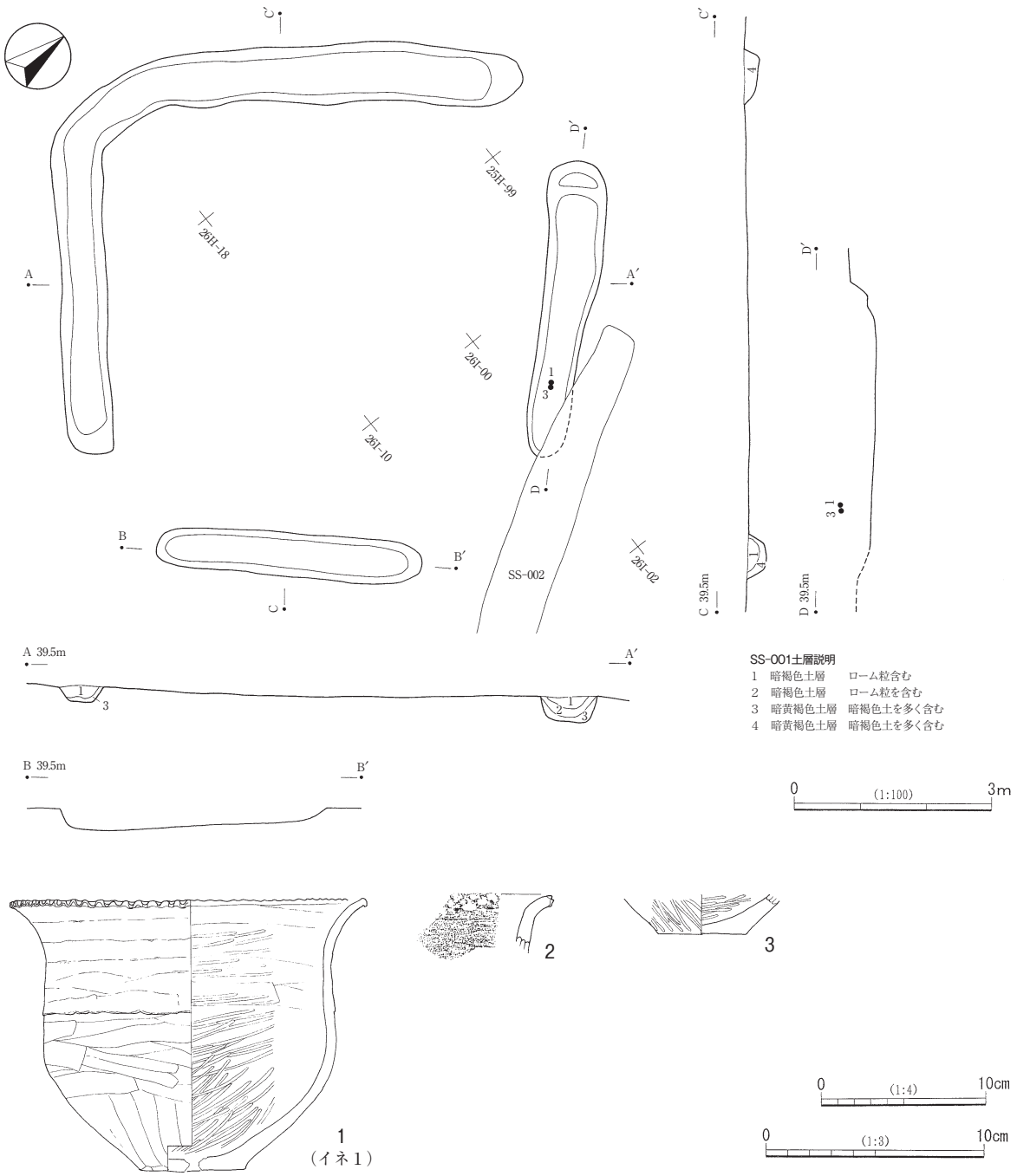
なお、いずれの方形周溝墓も、主体部と考えられる土坑には別途「SK」の番号が付されている。報告に当たっては、「SK」の番号を生かしたまま、他の遺構と同様に調査次数の数字を入れて区別した上で、周溝と一緒に掲載することとした。調査時の遺構名と報告時遺構名の対照は、第１表を参照されたい。ここでは、「SS」を先に、「SD」を後として、それぞれ第１表の順に掲載する。

SS-001（第96図、図版14・28・36）

25H-88・89・97～99、25I-80・90、26H-06～09・16～19・27～29、26I-00・01・10・11・20グリッドに所在する。北東溝がSS-002と重複しているが、新旧関係は当遺構の方が古いとみられる。南西溝と北西溝は連結しているが、北東溝と南東溝は独立している。検出された長さは、北東溝が復元値で約4.6m、南東溝が約4.1m、南西溝が約5.5m、北西溝が約6.6mである。幅は、北東溝が85㎝、南東溝が65㎝、南西溝が68㎝、北西溝が90㎝である。横断面はいずれもU字形～箱形を呈し底面はほぼ平坦である。縦断面は北東溝を除き舟形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは南東溝が33㎝、南西溝が27㎝、北西溝が32㎝である。また、北東溝の北端底面には段が認められる。北東溝の検出面から溝底面までの深さは44㎝である。溝覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状をなす。周溝と周溝の内側上端間の距離は約6.6mである。

主体部と考えられる土坑は検出されなかった。

図示した３点の遺物はすべて北東溝からの出土で、１・３は覆土上層から出土している。器種はいずれも甕である。１はSS-002から出土した破片と接合したもので、口縁部は僅かしか遺存していないが底部は完存し、全体としては50％程度の遺存度である。口唇部には上方からの指頭押捺列が巡る。頸部にはナデ消されているものの輪積み痕が５段観察できる。内面は丁寧にミガキが施される。外面胴下部にススが付着し、内面底部周辺にコゲによる黒色化が認められる。底部中央には焼成後穿孔が認められ、濾過器として転用されていたと考えられる。胴部内面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。２は口縁部の破片である。口唇部には正面と上方からの交互の押捺列が巡る。外面にはススが付着している。３は底部で、

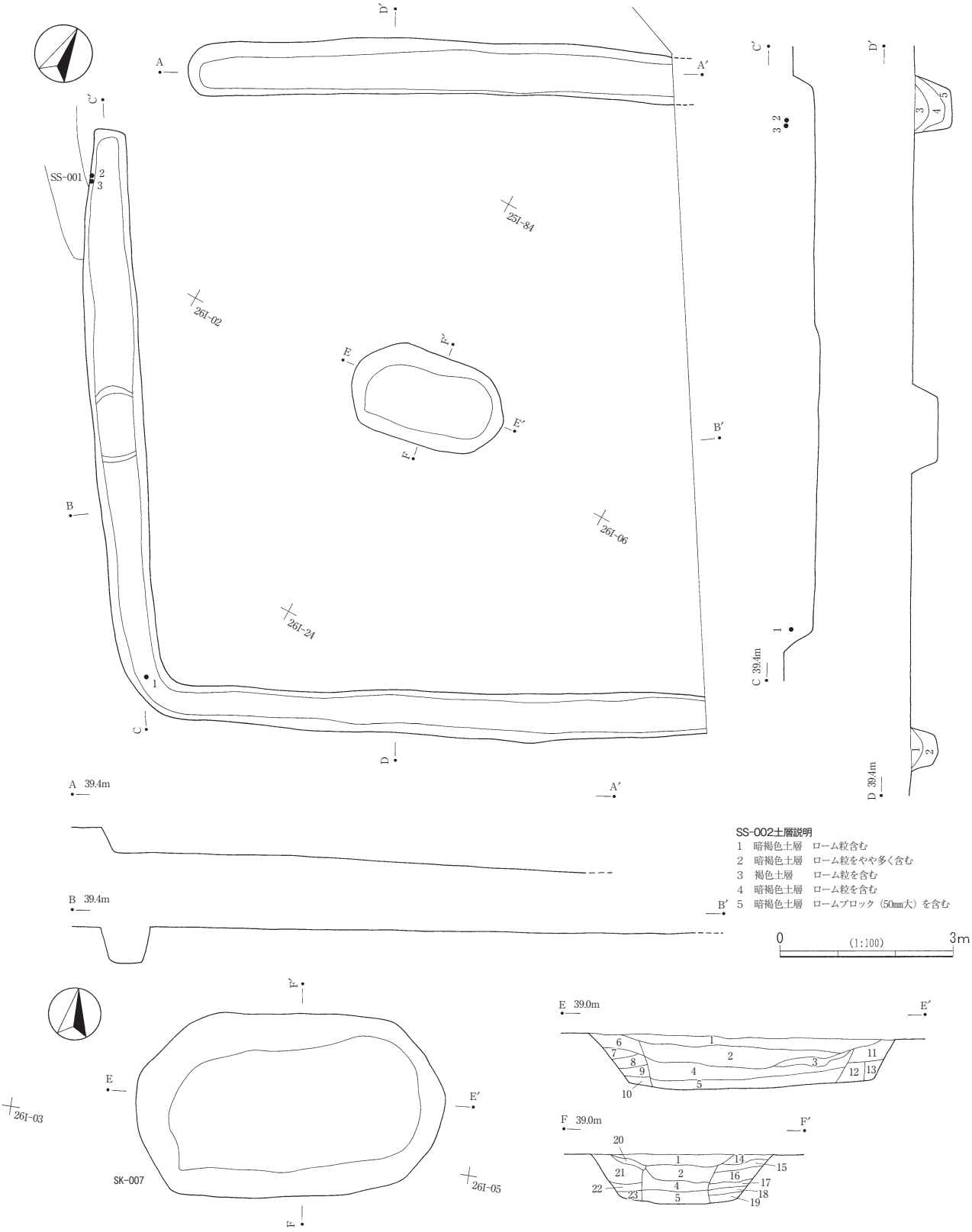


第96図　SS-001と出土遺物

20％程度の遺存度である。内外面ともミガキで仕上げられている。内面にはコゲが付着している。

SS-002、SK-007（第97・98図、図版14・28・36・41）

SS-002は25I-62～64・71～75・81～85・90～96、26I-00～07・11～17・22～26・32～34グリッドに、主体部と考えられるSK-007は25I-93・94、26I-03・04グリッドに所在する。東側は調査範囲外となる。南西溝がSS-001と重複するが、新旧関係は、当遺構の方が新しいとみられる。南東溝と南西溝は連結し、北西溝との間に陸橋部がある。検出された溝の長さは、南東溝が現存値で約9.6m、南西溝が約10.0m、北西溝が現存値で約7.7mである。幅は、南東溝が77cm、南西溝が90cm、北西溝が94cmである。横断面はい



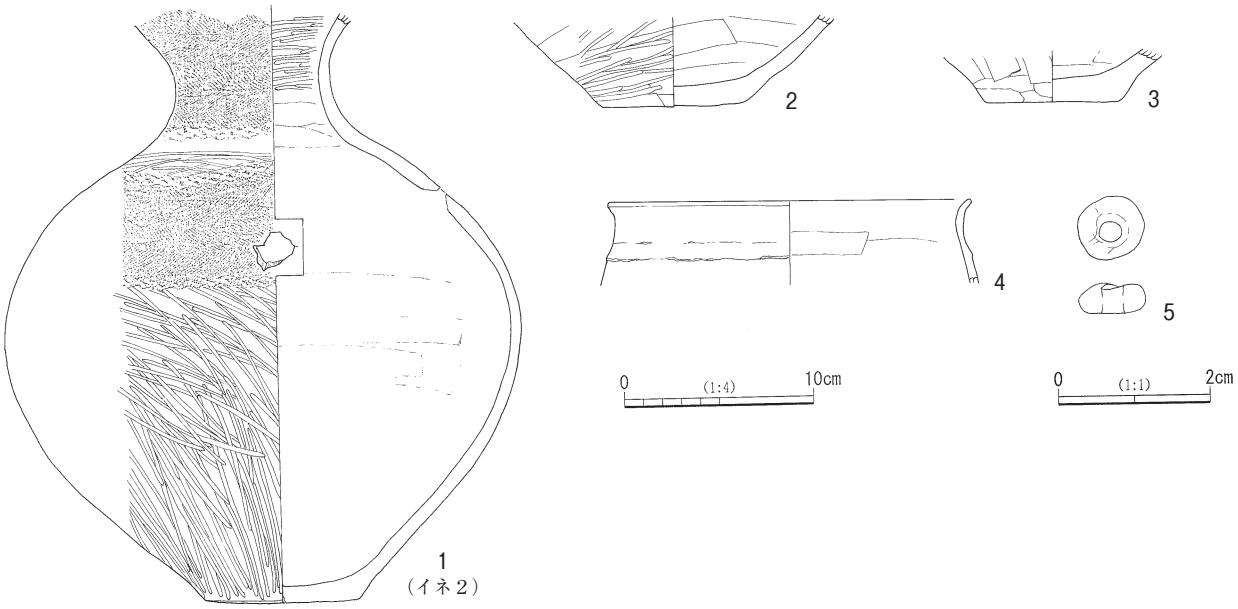
SS-002土層説明

1　暗褐色土層　ローム粒含む
2　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む
3　褐色土層　ローム粒を含む
4　暗褐色土層　ローム粒を含む
5　暗褐色土層　ロームブロック（50㎜大）を含む

SK-007（SS-002主体部）土層説明

1　暗褐色土層　ローム粒・ロームブロック（80㎜大）を少量含む
2　暗褐色土層　ローム粒・ロームブロック（40㎜大）を少量含む、1層より黒い
3　暗黄褐色土層　暗褐色土・ローム粒を含む
4　暗黄褐色土層　ローム粒をやや多く含む、色調は1層に近い
5　暗黄褐色土層　ローム粒を含む、4層よりやや明るい色調
6　暗黄褐色土層　ローム粒を含む、ややしまりあり
7　暗黄褐色土層　暗褐色土を含む
8　暗褐色土層　ローム粒を含む
9　暗褐色土層　ローム粒を少量含む、8層より暗い色調
10　暗褐色土層　ローム粒を含む、8・9層より明るい色調
11　暗褐色土層　ローム粒を含む、ややしまりあり
12　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む、11層より明るい色調、堅くしまっている
13　暗黄褐色土層　暗褐色土を少量含む、しまりあり
14　暗黄褐色土層　ロームブロック（30㎜大）を含む、堅くしまっている
15　暗黄褐色土層　ローム粒をやや多く含む、14層より明るい色調
16　暗黄褐色土層　暗褐色土を含む、しまりあり
17　黒褐色土層　ローム粒を含む、堅くしまっている
18　暗黄褐色土層　黒褐色土を含む
19　黒褐色土層　ローム粒を含む
20　黒褐色土層　ローム粒を含む、堅くしまっている
21　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む、黒褐色土を含む、堅くしまっている
22　黒灰色土層　ローム粒を含む、しまりあり
23　暗褐色土層　ローム粒を含む

第97図　SS-002、SK-007



第98図　SS-002、SK-007出土遺物

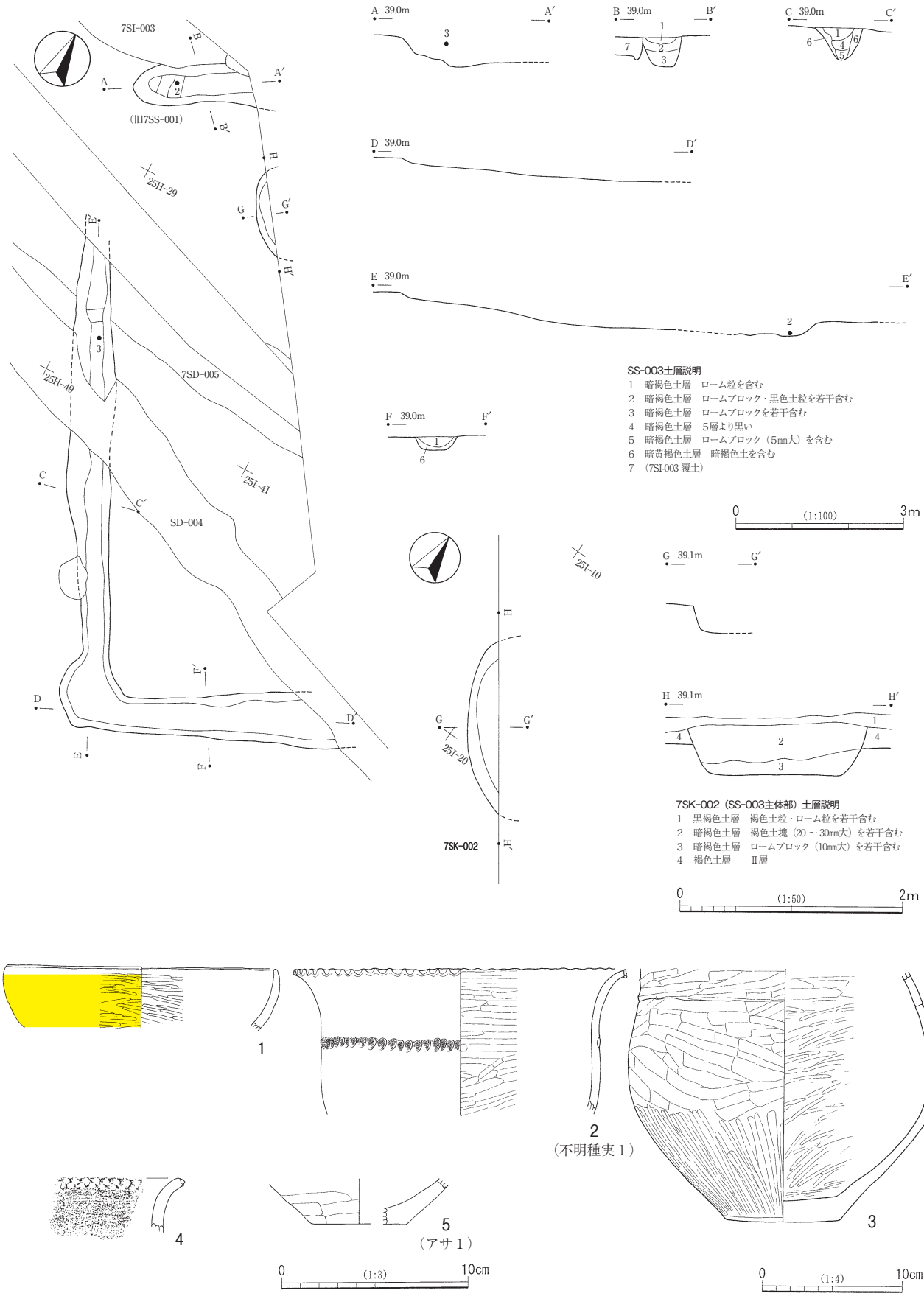
ずれも箱形を呈し底面はほぼ平坦であるが、南西溝の中央部はややくぼんでいる。また、縦断面も箱形をなす。検出面からの深さは、南東溝が52cm、南西溝が63cm、北西溝が88cmである。溝覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体的で、レンズ状に堆積している。南東溝と北西溝の内側上端間の距離は約10.3mである。

SK-007は、周溝に囲まれた区画内のほぼ中央に位置する土坑である。掘り方の平面形は長軸268cm、短軸155cmの長楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面からの深さは51cmである。土層断面から、木棺痕跡及び埋土と考えられる土層が観察できる（第97図）。２層～５層は木棺内堆積土と考えられる層で、それ以外は裏込め土と考えられ、このうち12層・13層・14層・17層・20層・22層は堅く突き固められていた。復元される木棺の規模は、長軸185cmほど、短軸60cmほどである。

図示した遺物は５点で、１は南西溝南コーナー付近、２・３は南西溝北コーナー付近のいずれも覆土上層から出土している。１は横に倒れた状態での出土で、５のガラス玉はSK-007木棺内堆積土中から出土している。１は壺で、口縁部を欠損するが、そのほかの部分は80％程度遺存している。頸部と肩部にそれぞれ２段のＳ字状結節文で区画された羽状縄文の文様帯がある。施文部分以外はミガキで仕上げられている。胴部に焼成後穿孔が２か所見られる。底部周縁部がやや摩滅している。胴部外面にイネ（種子）の圧痕が計２点見つかった。２・３は大型の壺の底部と考えられ、２は80％程度、３は40％程度の遺存度である。４は口縁部の15％程度の破片である。甕と考えたが、鉢のような器形になる可能性もある。外面はナデ調整、内面はミガキ調整で、外面には輪積み痕が１段見られる。器壁が非常に薄い。５はSK-007の覆土中から出土したガラス小玉である。色はコバルトブルーを呈する。扁平でややいびつな形状である。

SS-003、7SK-002（第99図、図版14・28・36）

SS-003は25H-09・18・19・28・29・38・39・49・59、25I-20・30・31・40・41・50・51・60～62グリッドに、主体部と考えられる7SK-002は25H-19、25I-10・20グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構SD-004より南側は平成19年度に「SS-003」として調査を行い、北側は平成27年度に「7SS-001」として調査



第99図　SS-003、7SK-002と出土遺物

を行った。報告に当たり遺構名を「SS-003」に統合し、「7SS-001」は欠番とした。なお、土坑7SK-002も平成27年度に調査を行った。北側で竪穴住居跡7SI-003と重複するが、新旧関係ははっきりしない。

当遺構は、東側が調査範囲外となり、また、中・近世の溝状遺構や撹乱により切られている。連結する南東溝と南西溝、及び独立する北西溝が検出された。溝の長さは、南東溝が約4.8m、南西溝が約8.8m、北西溝が約2.1mである。幅は、南東溝が90cm、南西溝が80cm、北西溝が70cmである。横断面はU字形～箱形を呈し底面はほぼ平坦であるが、縦断面では、壁が緩やかに立ち上がり舟形を呈し、溝の中央部に向かって深くなるようである。北西溝と南西溝の底面には、段も一部認められる。検出面からの深さは、南東溝は19cm、南西溝は71cm、北西溝は58cmである。溝覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。南東溝と北西溝の内側上端間の距離は約10.5mである。

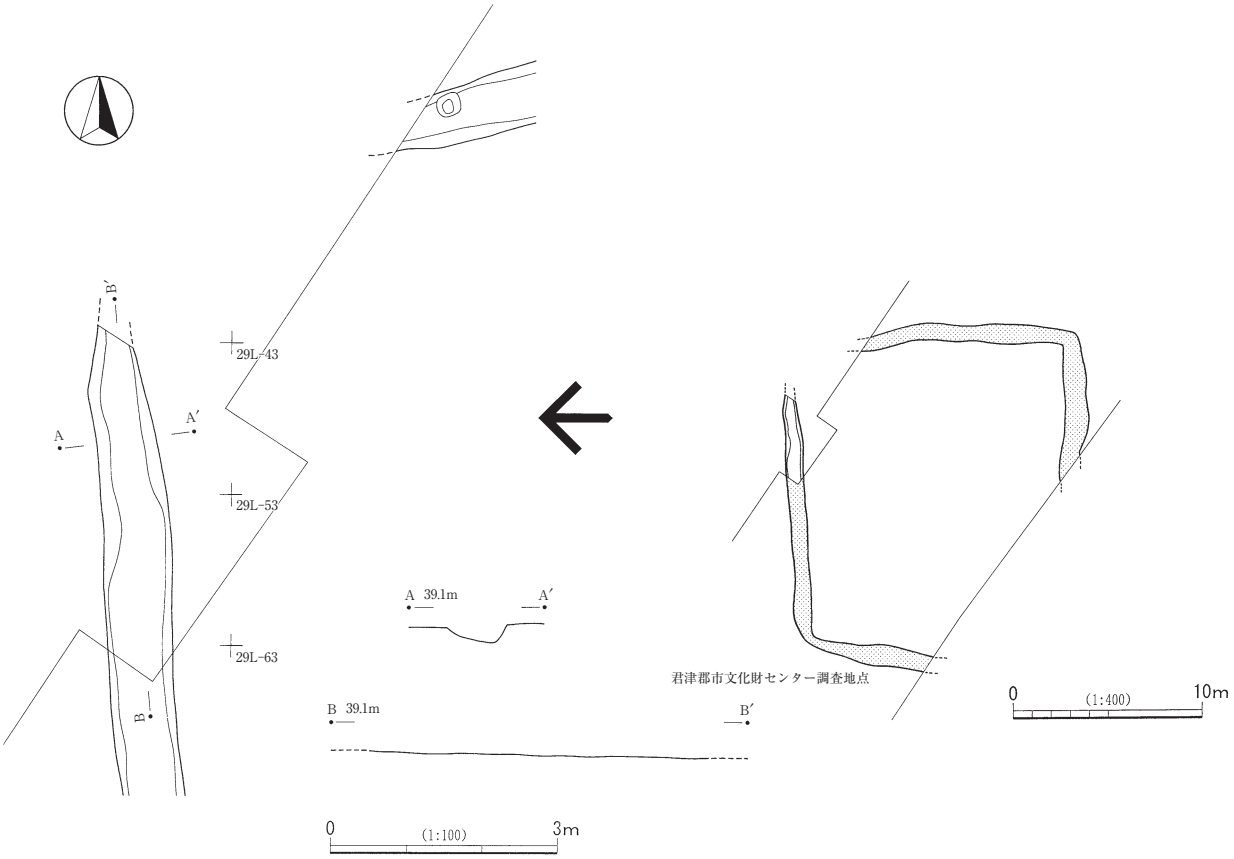
7SK-002は、周溝に囲まれた区画内の中央より、かなり北寄りに位置する土坑である。覆土が周溝と類似しており壁も底面もしっかりしていることから、周溝に伴う主体部と判断した。東側のほとんどが調査区外となり、平面形は明確ではないが、楕円形を呈する可能性がある。規模は現状で長軸153cmである。検出面からの深さは28cmであるが、土層断面の観察によるとⅡ層上面から45cmの掘り込みが確認できる。土坑覆土は暗褐色土が主体でレンズ状に堆積し、木棺の痕跡は確認できない。

図示した遺物は５点である。２は南西溝北コーナー付近の床面直上から、３は北西溝南コーナー付近の覆土上層からの出土である。また、１・４・５は南東溝及び南西溝の南側から出土している。7SK-002からは遺物は出土していない。１は口縁部の10％程度の破片で、鉢と考えられる。内外面ともミガキ調整で仕上げられ、外面は赤彩されている。２～５は甕と考えられる。２は頸部の30％程度が遺存している。口唇部は上部からの指頭による押捺列が巡る。頸部には輪積み痕が１段あり、接合部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。外面にはススが付着している。断面に不明種実の圧痕が１点見つかった。３は口縁部を除いて完存しているが、亀裂が入って縦に裂け、器形が歪んでいる。外面頸部には輪積み痕が２段見られる。器面はヘラケズリ後ナデ調整で、胴部下半はミガキ調整である。胎土には、粗い砂粒や２㎜～３㎜の小石を多量に含んでいる。外面胴下部にはススが付着している。４は口縁部の破片で、口唇部には上部からの指頭押捺列が細かく施される。外面にはススが付着している。５は底部で､20％程度の遺存度である。外面はヘラケズリ後粗くミガキ調整が施される。内面はミガキ調整である。底部内面にアサの圧痕が１点見つかった。

SS-004（第100図、図版14）

29L-32・42・52・62グリッドに所在する。溝状の遺構が１条検出されたのみであるが、位置や形状、規模等から、財団法人君津郡市文化財センターによる昭和62年度～平成元年度の調査において検出された「３号方形周溝墓」の西側周溝の一部と推定される。当遺構の北溝と東溝、及び南溝と西溝は連結しているが、西溝の北端及び北溝の西端は調査不能で、連結するか途切れるかは不明である。また、東溝と南溝の交点も、調査区外で不明である。今回の調査によって検出された部分の長さは約4.8m、幅は87cmである。横断面はU字形だが底面はやや平坦で、検出面からの深さは37cmである。

弥生時代後期の壺片が若干出土したが、図示可能な遺物はない。なお、財団法人君津郡市文化財センター調査部分からは、東溝中央北寄りの覆土上層より壺が１個体まとまって出土したほか、鉢や甕などの破片が出土している。



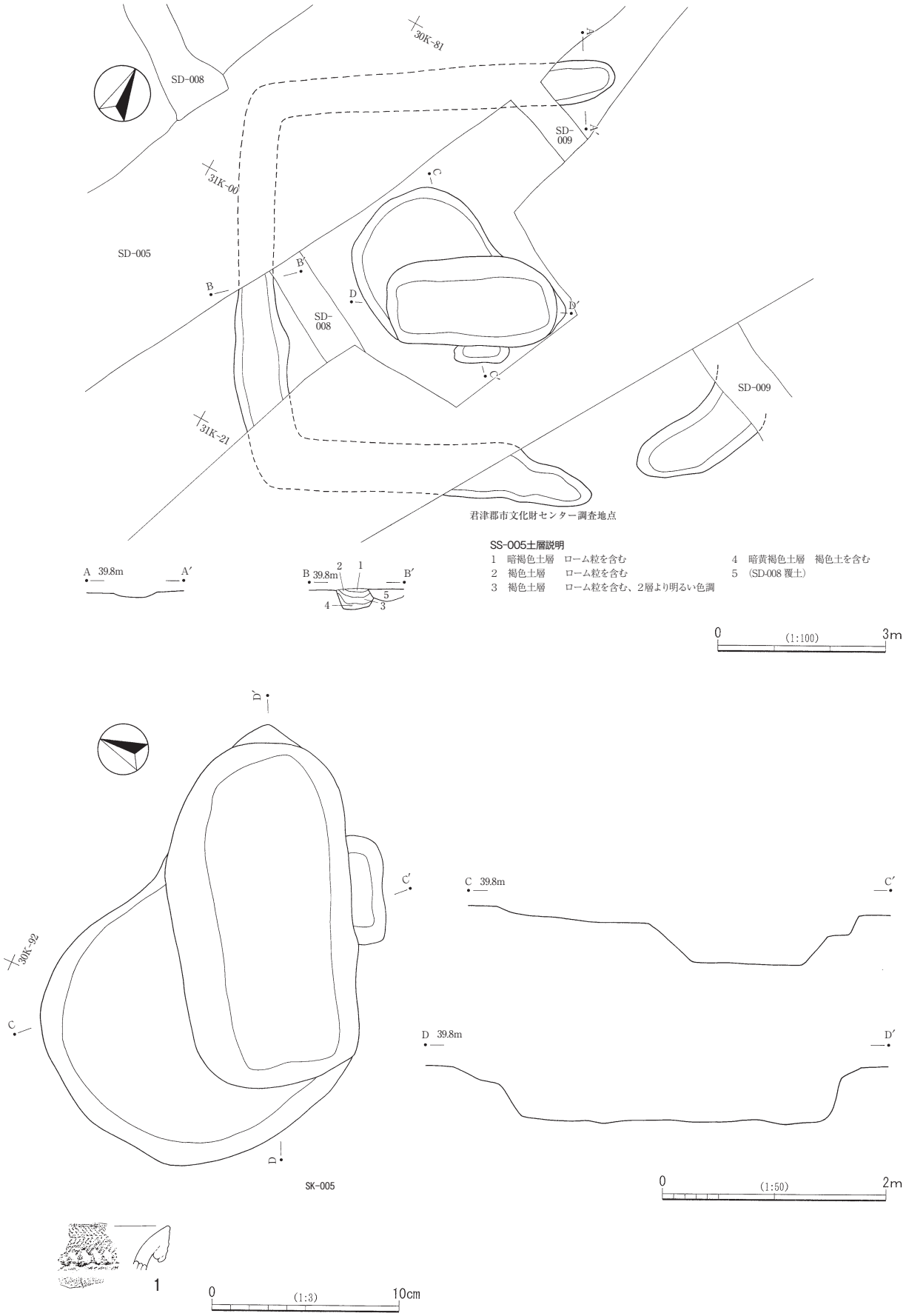
第100図　SS-004

SS-005、SK-005（第101図、図版14・36）

SS-005は30K-71～72・80～82・90～93、31K-00～03・10～13・21・22グリッドに、主体部と考えられるSK-005は30K-91～93、31K-01～03グリッドに所在する。中・近世の溝状遺構が集中する場所で、わずかな周溝と主体部とみられる土坑が検出されたのみであるが、財団法人君津郡市文化財センター調査区で検出された「４号方形周溝墓」の一部と考えられる。北コーナー部分及び東コーナー部分は途切れ、陸橋部となっている。溝の長さは南西溝が約2.7m、北西溝が約1.3mで、幅は南西溝が100㎝、北西溝が70㎝である。横断面は箱形をなし底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは南西溝が42㎝、北西溝が10㎝である。南東溝と北西溝の内側上端間の距離は推定値で約6.0mである。

SK-005は、周溝に囲まれた区画内のほぼ中央部に位置する土坑である。平面形は隅丸長方形で、両側に張出し部分がある。別々の遺構であった可能性もある。隅丸長方形部分の規模は、長軸304㎝、短軸160㎝、検出面からの深さは38㎝である。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。張出し部分とは段差がある。SK-005については、調査時にはSS-005とは別の弥生時代の土坑と考えたが、検出位置や状態等からSS-005の主体部と判断した。

周溝から遺物は出土していない。図示した遺物は１点のみで、SK-005の覆土中から出土している。なお、財団法人君津郡市文化財センター調査部分からは、南東溝覆土上層からほぼ完形の壺が１点出土している。１は壺の口縁部破片である。折返し口縁には羽状縄文が施文され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。内面はミガキ調整である。



第101図 SS-005、SK-005と出土遺物

SS-006、SK-097・098・101（第102・103・104図、図版14・15・28・29・36・41）

SS-006は6C-01～03・10～16・20～26・30～37・40～48・50～58・60～68・70～78・80～88・90～97、7C-01～05・11～13グリッドに位置する。主体部と考えられるSK-097は6C-50・51グリッドに、SK-098は6C-40・41・50グリッドに、SK-101は6C-70・71・80・81グリッドに所在する。松川を望む台地の北端部で、当遺構より北は斜面により本調査区外となり、西側は調査対象外となる。それぞれ独立する北東溝・南東溝・北西溝、及び主体部の可能性のある３基の土坑が検出された。南東溝と北西溝、及び３基の土坑は平成21年度-1調査において検出され、北東溝は平成21年度-2調査において中・近世の土塁SA-001下から検出された。これらは調査時には別の遺構とみなされ、北西溝は「SS-001」、南東溝は「SS-002」、北東溝は方形周溝墓の周溝と土坑の重複としてそれぞれ「SS-004」「SK-121」の遺構番号が付されていたが、位置関係や形状、出土遺物等の検討から、四隅が切れる形状の１基の方形周溝墓であると判断し、遺構番号を「SS-006」に統合してほかの番号を欠番とした。

また、SK-097・098・101の土坑３基については、形態から墓坑と判断され、当遺構に伴うものとして掲載したが、いずれもSS-006の中心部分から大きく西に寄った位置から検出されているため、SS-006に伴う主体部ではなく、別の墓坑であった可能性も残る。なお、土坑の遺構番号は調査時のままとした。

北東溝の北端部と南東溝の東端部は、中・近世の堀SD-027に切られている。北東溝は古墳時代の竪穴住居跡SI-043にも切られている。また、北西溝と３基の土坑は方形周溝墓SD-029と重複しているが、新旧関係は、検出状況等から当遺構の方が古いと考えられる。溝の長さは、北東溝が約8.1m、南東溝が約7.8m、北西溝が約6.8mである。幅は、北東溝が180cm、南東溝が150cm、北西溝が165cmである。横断面はいずれも逆台形を呈し、底面は基本的にほぼ平坦であるが、いずれも段が見られる。検出面からの深さは、最も深いところで北東溝が93cm、南東溝が74cm、北西溝が52cmである。南東溝と北西溝の内側上端間の距離は約16.8mである。南東溝の覆土は、ローム粒を含む黒褐色土が主体をなす。

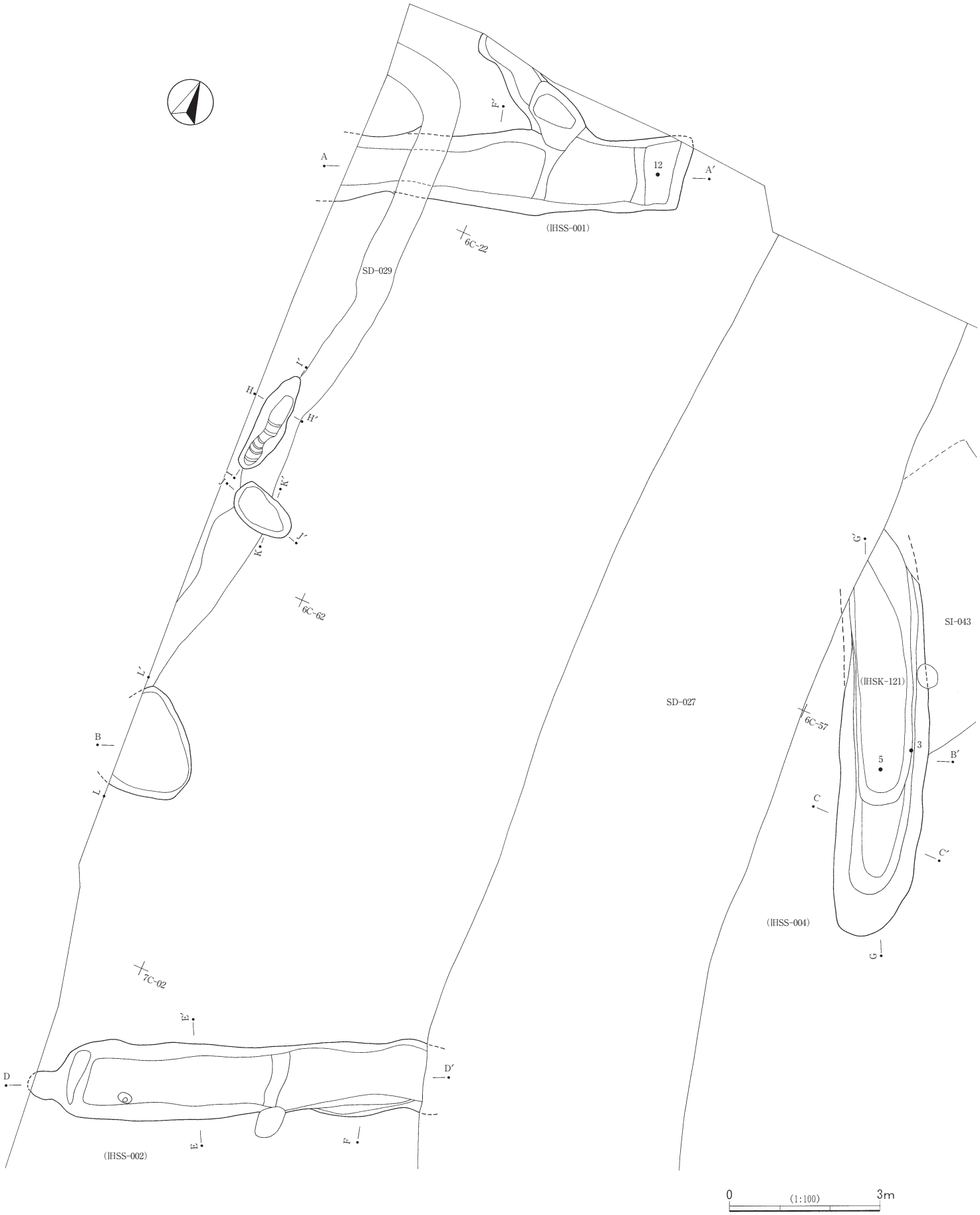
SK-097は、周溝に囲まれた区画内の中央部北西寄りに位置する土坑である。平面形は長軸80cm、短軸72cmの楕円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは86cmである。覆土は黒色土が主体で、下層にはロームブロックを含む。

SK-098は、SK-097の北に隣接している土坑である。平面形は長軸212cm、短軸59cmの長楕円形状を呈する。壁は、短軸方向は垂直に近い角度で立ち上がるが、長軸方向は南から北へ向かって階段状に掘り下げられ、北側の壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは86cmである。覆土はSK-097と同様の黒色土が堆積しており、調査時の所見ではSK-097とともに墓坑の可能性が高いとされている。

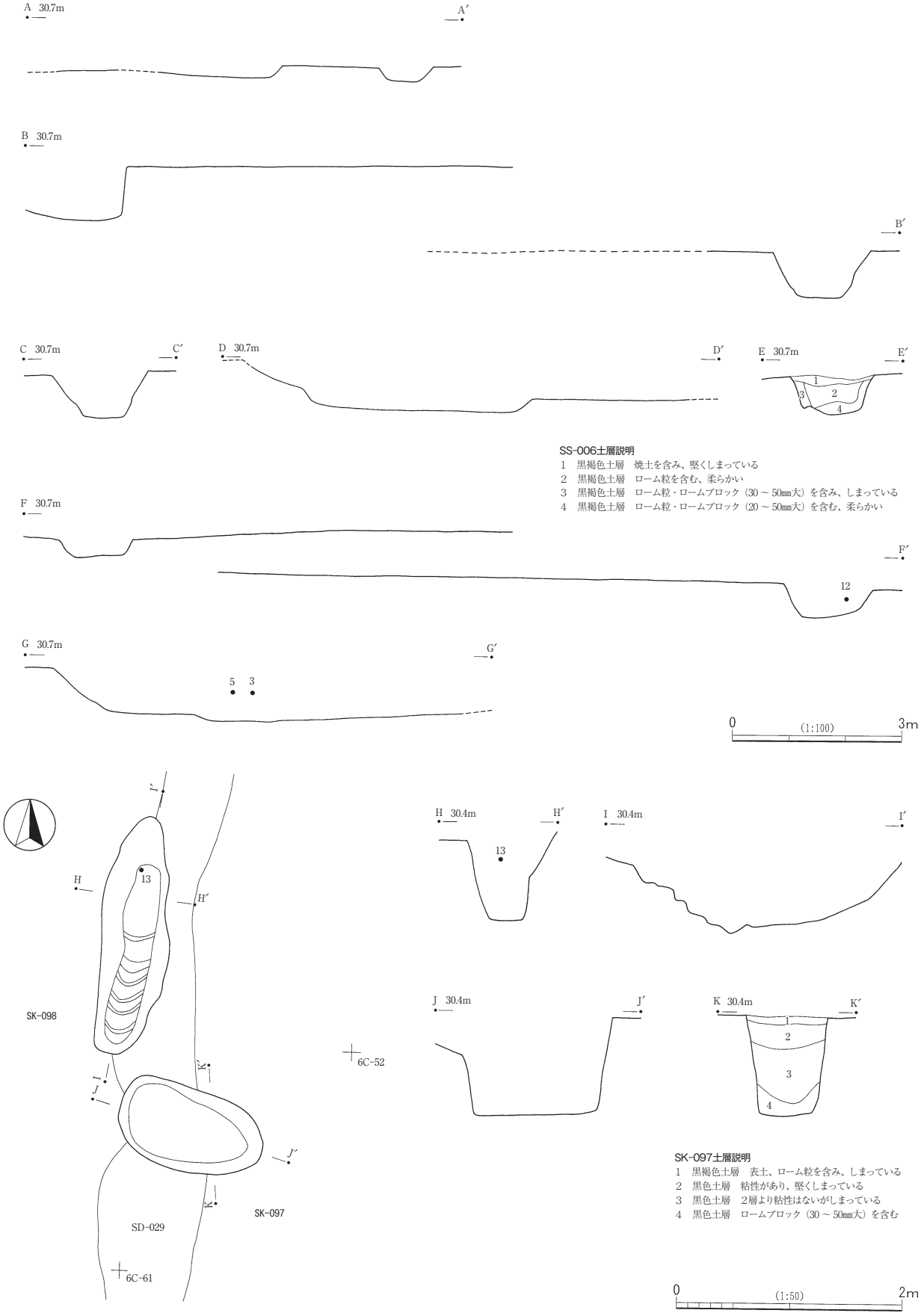
SK-101は、中央部南西寄りに位置する。西側は調査区外となるが、長軸218cmの不整形を呈している。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは93cmであるが、土層断面の観察では少なくとも145cmの深さがあったとみられる。覆土は、木棺内覆土と思われる黒褐色土を主体とする層と、裏込めと思われるロームブロックを含む褐色土を主体とする層に分かれる。

図示した遺物は22点である。北東溝から出土したものは２～８・11・16・17・19、南東溝から出土したものは９・15・18・21・22、北西溝から出土したものは12である。また、SK-101から出土したものは１・10・14・20、SK-098から出土したものは13である。SK-097から遺物は出土しなかった。

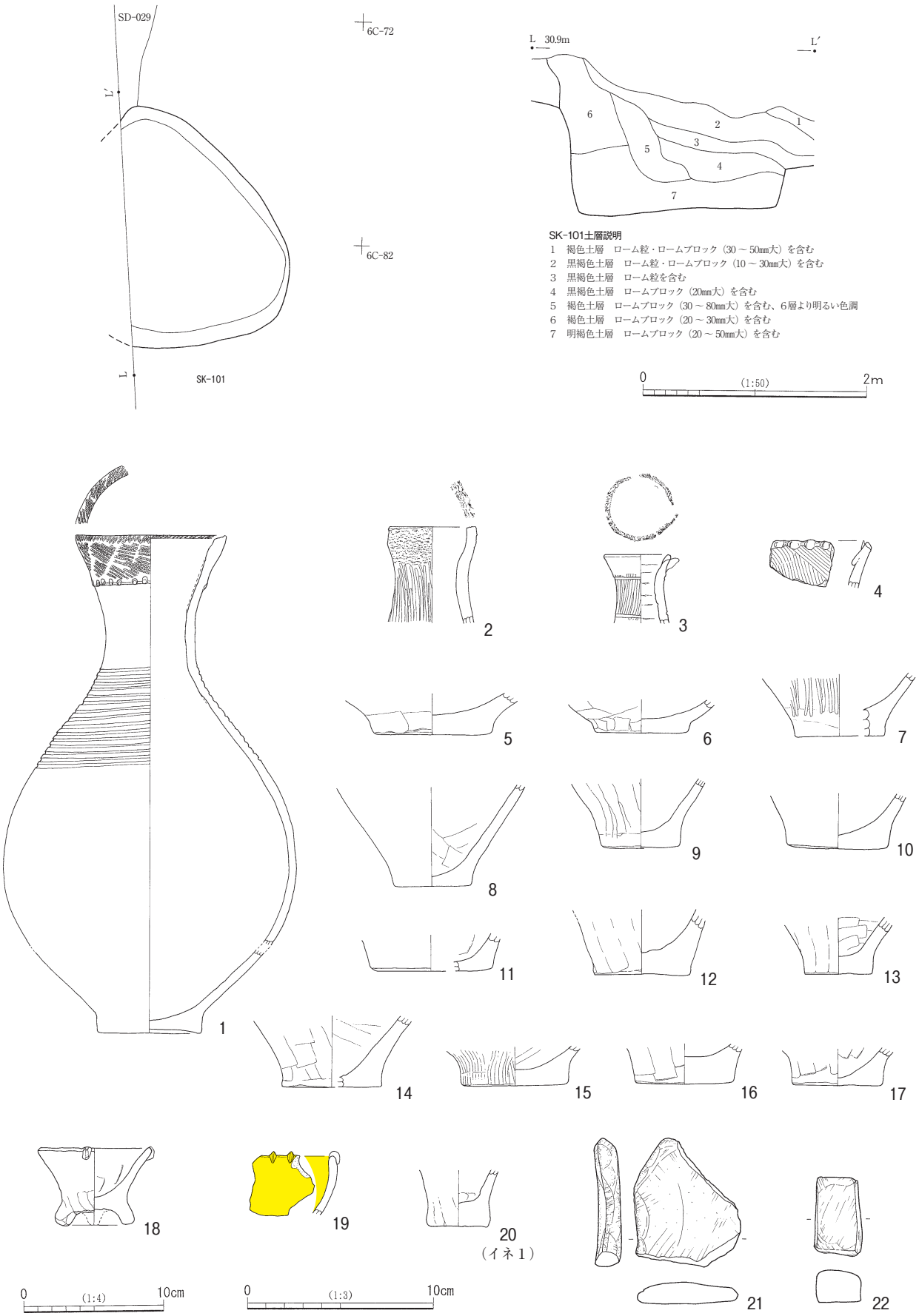
１～３は壺である。１は互いに接合しない口縁部と胴部及び底部から全体を推定復元したもので、口縁部と底部は完存しているが、胴部は30％程度の遺存度である。口径10.6cm、頸径6.4cm、復元胴部最大径



第102図　SS-006、SK-097・098・101（1）



第103図 SS-006、SK-097・098・101（2）



第104図　SS-006、SK-097・098・101（3）と出土遺物

21.0㎝、底径7.4㎝、復元器高35.4㎝である。幅広の折返しとなる口縁部には羽状縄文が施文され、端部には指頭による押捺列が巡る。内そぎ状に面取りされた口唇部にも縄文が施文されている。肩部には、推定で15条の沈線が水平に巡らされる。そのほかの部分はミガキで仕上げられている。底部は上げ底ぎみで、底部外面までミガキが施されている。内面は、口縁部と頸部の一部を除き、著しく剥落している。２は口縁部の80％程度が遺存している。やや内湾する口縁部と面取りされた口唇部には、複数段のＳ字状結節文が施文され、頸部はミガキ調整となっている。３は口縁部～頸部のみ完存しているもので、小型の壺と考えられる。口径は4.9㎝であるが、片口状に作り出されている部分が１か所あり、その部分は5.3㎝である。口唇部は面取りされ、縄文が施文されている。頸部は、櫛歯状工具によってほぼ同じ長さで縦方向に施文した後、上下を粗く沈線で区画している。沈線は水平でなく、沈線からはみ出た部分も擦り消されていない。内面は基本的にナデ調整で、頸部に数段の輪積み痕が残されている。全体的にやや粗雑な作りである。

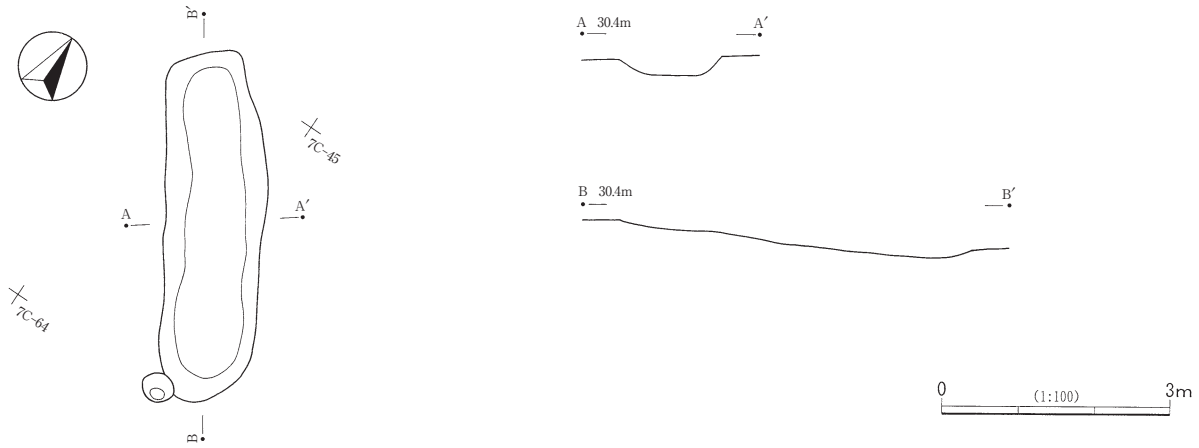
４は甕の口縁部破片である。口縁部は内面側に折返しとなっており、口唇部は正面からの指頭押捺列により小刻みの波状を呈している。外面はハケ調整である。５～17は底部で、５～13は壺、14～17は甕と考えられる。５は底部の50％程度が遺存している。内外面とも摩耗が著しく、調整痕が明瞭ではない。６は底部の25％程度が遺存している。７は底部の20％程度が遺存している。内外面ともミガキ調整で仕上げられている。底面の器厚が厚い。８は底部の50％程度が遺存している。９は底部のみ完存している。内外面ミガキで仕上げられている。10も底部のみ完存している。器面が摩耗しているが、外面はナデ調整とみられる。内面が剥落している。11は底部の40％程度が遺存している。底面周縁部が摩滅している。12は底部のみ完存している。外面はハケ調整痕が残る。内面は摩耗している。13も底部のみ完存しており、外面にはハケ調整痕が残る。底部外面の中央部が剥落している。14は底部の20％程度が遺存し、外面はミガキ調整で僅かにハケ調整痕が残る。15は底部の60％程度が遺存している。外面はハケ調整である。16は底部の70％程度が遺存している。外面はハケ調整である。底面の器厚が厚い。17は底部の30％程度が遺存している。底面中央付近の器厚が薄くなっている。

18～20はミニチュアと考えられる。18は鉢で、全体の30％程度が遺存している。高台状の底部を削って作り出された脚が、全周で８本あったものと推定される。口縁部には棒状浮文が１本貼付されている。外面に赤彩が施されている可能性もあるが、明瞭ではない。19は、口縁部に18と同様の棒状浮文を２本もつ。内外面ともに赤彩されている。18が比較的直線的に開く器形であるのに対して、19は丸味を帯びた器形とみられる。鉢であろうか。20は底部のみ完存し、甕と考えられる。器面の剥落が著しく、調整痕等はっきりしない。底面の器厚が厚い。断面にイネ（種子）の圧痕が１点見つかった。

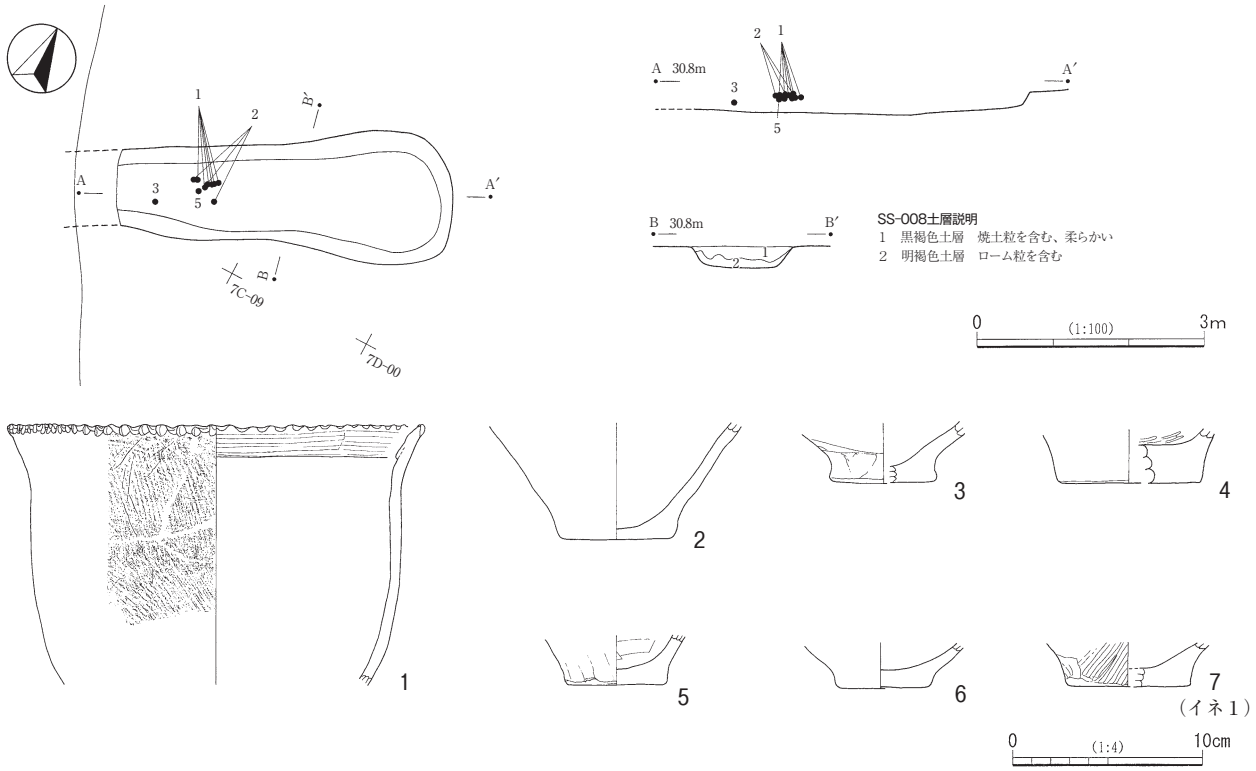
21・22は石器で、いずれも砂岩製の砥石である。21は扁平な形状で、図の左側面付近にやや強い擦痕と正面に及ぶ剥離痕が観察される。中央部分に比べ左側面の厚さは薄く、やや刃部状を呈している。22は小型で、直方体をなしている。図上面を除き基本的には面的に使用されているが、正面の上下部分など、角を丸めるように使用されている部分も認められる。

SS-007（第105図）

7C-34・44・45・54・55・65グリッドに位置する。溝状の遺構が１条検出されたのみであるが、位置や形状、規模等から、方形周溝墓の周溝と考えられる。ほかの周溝としてはSS-008を考えることもできるが、相応の場所にそのほかの周溝が検出されていないため、ここでは別遺構と判断した。検出された長さは約



第105図　SS-007



第106図　SS-008と出土遺物

4.6m、幅は135cmである。壁は緩く立ち上がり、底面は北側ほど低くなる。検出面からの深さは48cmである。

弥生時代中期の甕片が若干出土したが、図示した遺物はない。

SS-008（第106図、図版15・29・37）

6C-89・97～99、6D-80・90、7C-07・08グリッドに位置する。中・近世の土塁SA-001下で検出された1条の溝状の遺構で、位置や形状、規模等から、方形周溝墓の周溝と考えられる。ほかの周溝としては

SS-007を考えることもできるが、相応の場所にそのほかの周溝が検出されていないため、ここでは別遺構と判断した。当遺構のほかの周溝等は、堀や土塁等、中･近世の遺構によって削平されたと考えられる。検出された長さは約4.4m、幅は100㎝～175㎝である。壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは33㎝である。覆土はローム粒を含む黒褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

覆土中から比較的まとまって遺物が出土した。図示した遺物は７点である。１は甕である。胴部最大径の40％程度が遺存している。口縁部は内面側が折返され、口唇部には外面と内面からの指頭押捺列が巡る。外面と内面の折返し部分はハケ調整が施される。外面胴部最大径付近を中心にススが付着している。２～７は底部で、２～４が壺、５～７が甕と考えられる。２は底部の40％程度が遺存している。内外面とも摩耗が著しく調整痕がはっきりしないが、外面はハケ調整かもしれない。底部周縁部が摩滅している。３は底部の40％程度が遺存している。４は底部の25％程度が遺存している。底面の器厚がかなり厚い。５は底部のみ完存している。６は底部のみ完存しているが、特に外面の摩耗が著しく、調整痕等観察できない。７は底部の30％程度が遺存している。外面はハケ調整である。底部外面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。

SD-029（第107図、図版37）

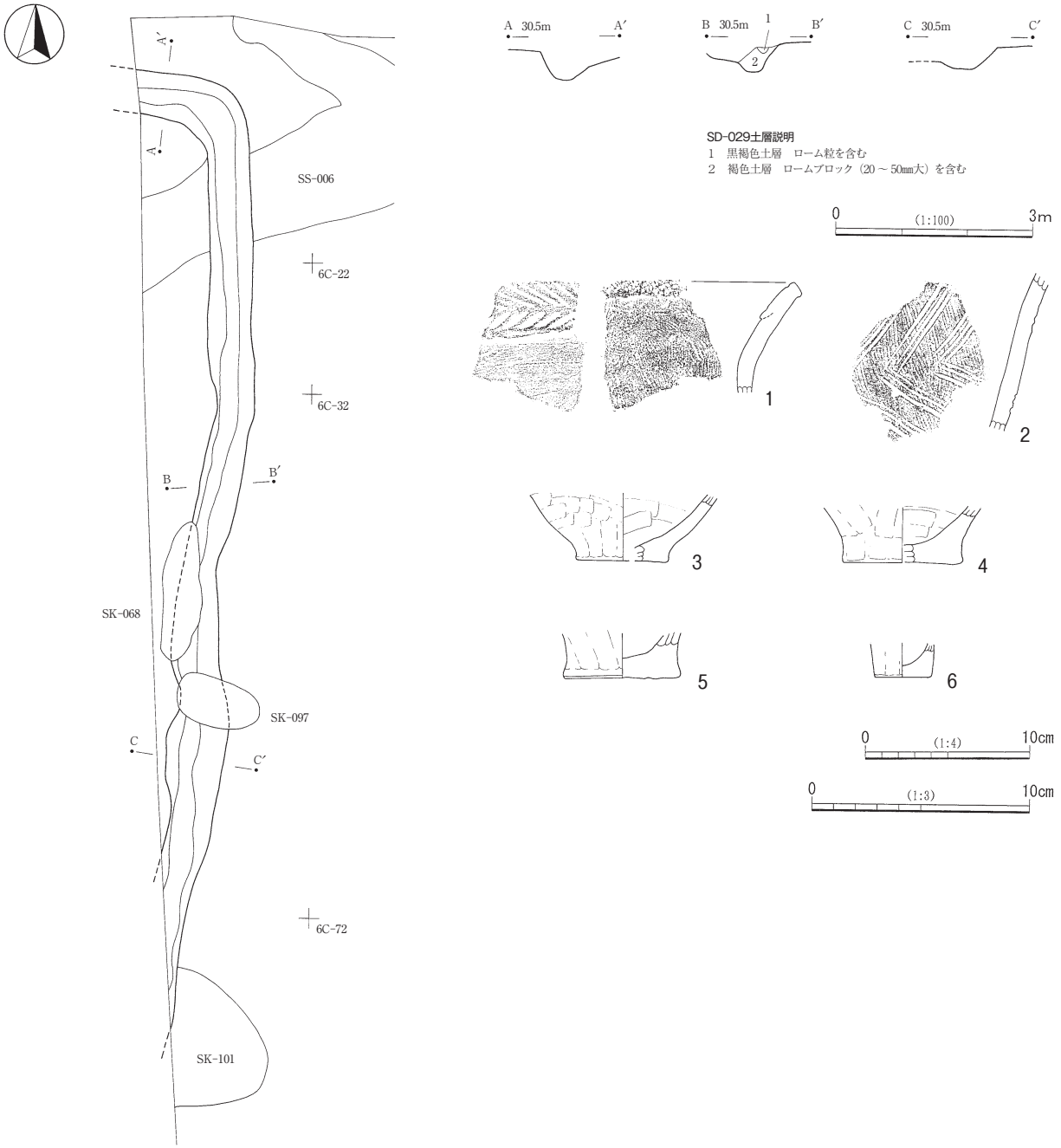
6C-00・01・10・11・20・21・30・31・40・41・50・51・60・61・70・71・80グリッドに所在する。西側の大半は調査区外となり、周溝のうち東溝の一部と連結する北溝のごく一部が検出されたのみである。SS-006の北西溝及び主体部と考えられる土坑と重複しているが、検出状況等から当遺構の方が新しいとみられる。検出された溝の長さは、北溝が約1.7m、東溝が約14.5mである。幅は、北溝が68㎝、東溝の最も広いところが93㎝である。断面形はU字形で、検出面からの深さは、北溝は54㎝、東溝は39㎝である。覆土はロームブロックを含む褐色土が主体となる。

図示した遺物は６点で、覆土中からの出土である。１は壺の口縁部破片と考えられる。内面側に折返しの口縁部となっており、折返し部分には羽状に短沈線が施文されている。外面はハケ調整後ナデで、口唇部には縄文が施文される。２は甕の胴部破片である。ハケ調整後、櫛歯状工具により羽状文が施される。３～６は底部で、３が壺、４・５が甕と考えられる。３は底部の40％程度が遺存している。外面はハケ調整痕が残る。４・５はともに底部の25％程度が遺存し、外面はハケ調整痕が残る。６も底部であるが底径3.4㎝と小型であるため、ミニチュアの甕と考えられる。底部のみ完存している。内面はコゲにより黒色化している。

4SD-029（第108図、図版15・29・37）

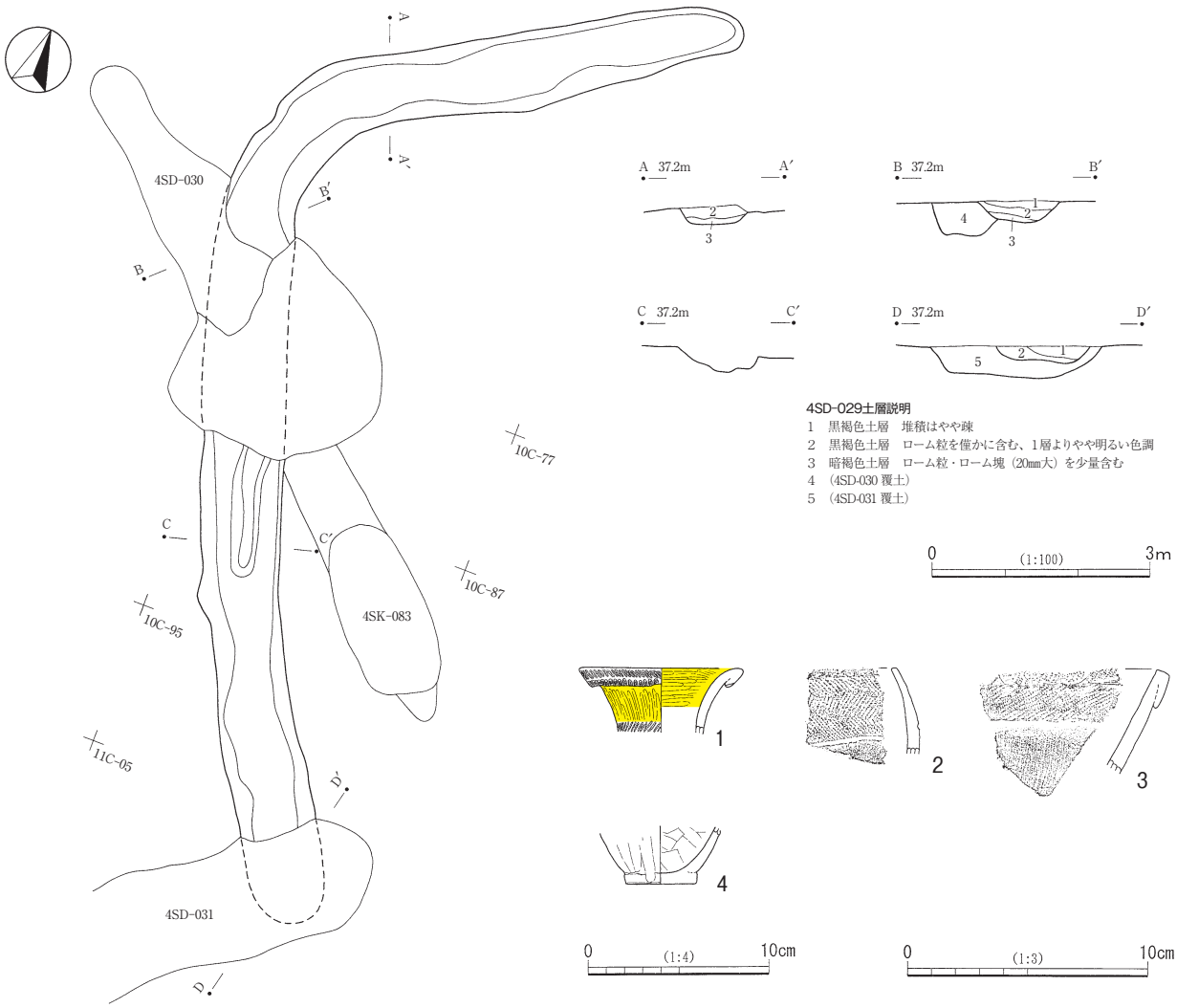
10C-36・37・45～47・54・55・64・65・74・75・85・95・96、11C-06グリッドに所在する。連結する北西溝と南西溝が検出されたのみである。方形周溝墓4SD-030・031と重複するが、土層断面の観察から、いずれよりも新しいとみられる。検出された溝の長さは、北西溝が約6.5m、南西溝が復元値で約11.5mである。幅は、北西溝が106㎝、南西溝が最も広いところで110㎝である。横断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは、北西溝は31㎝、南西溝は38㎝である。覆土はローム粒を僅かに含む黒褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は僅かに出土した。図示した遺物は４点で、１が北西溝床面から出土したほかは、覆土中からの出



第107図　SD-029と出土遺物

土である。１は小型の壺である。口縁部の70％程度が遺存している。折返しの口縁部には縄文が施文され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。頸部には縄文が僅かに観察でき、折返し端部と縄文までの間は縦方向のミガキが丁寧に施され、赤彩されている。内面は、口縁部のみ磨かれ赤彩される。２は鉢の口縁部である。器厚が薄く、小型のものと考えられる。口縁部に羽状縄文が施文され、沈線で区画される。３は口縁部破片で、鉢と考えられる。折返しの口縁部には縄文が施文され、面取りされた口唇部にも縄文が施文されている。４はミニチュアの甕である。全体の20％程度が遺存している。底部と体部の境に輪積み痕が観察される。



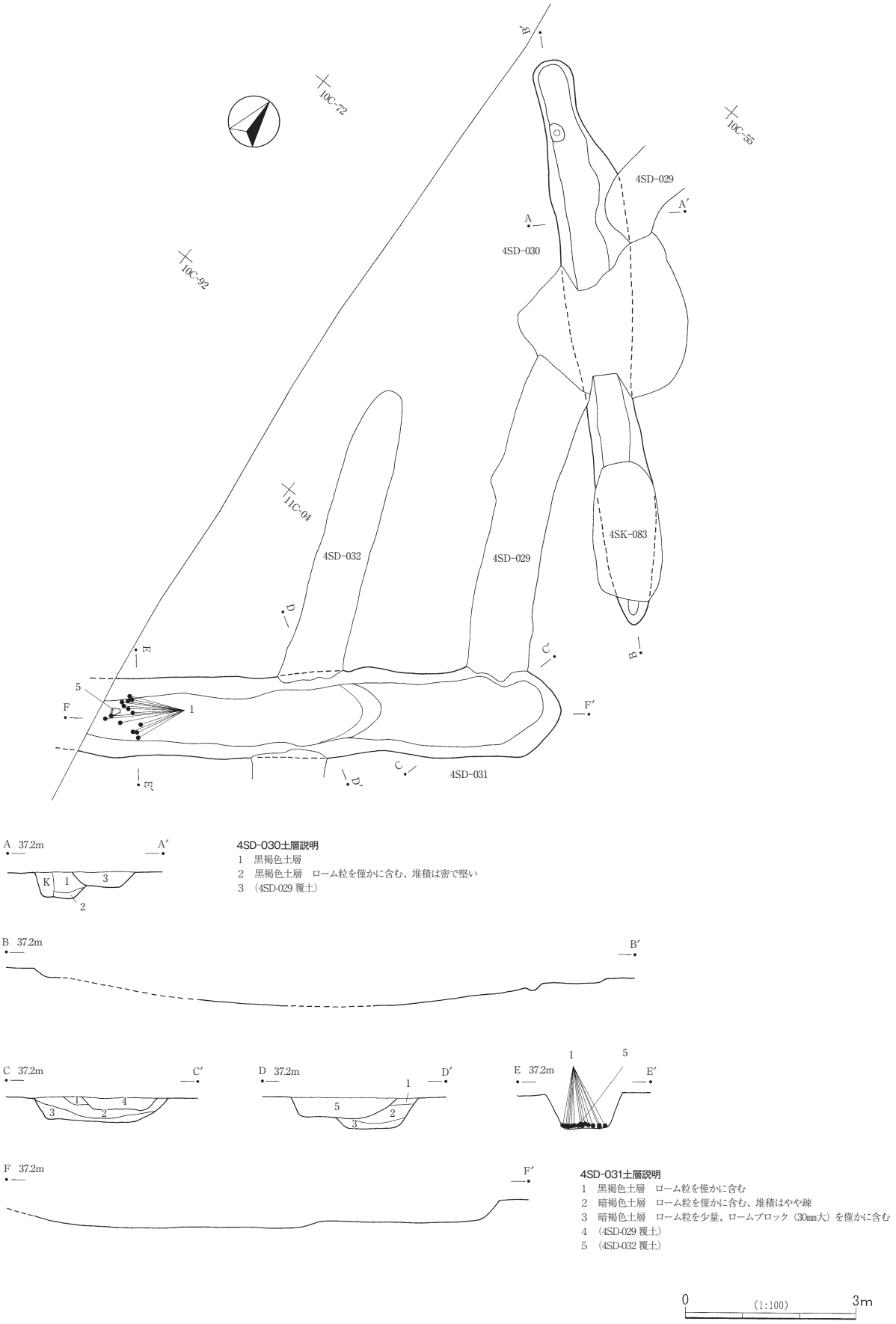
第108図　4SD-029と出土遺物

4SD-030・031（第109・110図、図版15・29・37）

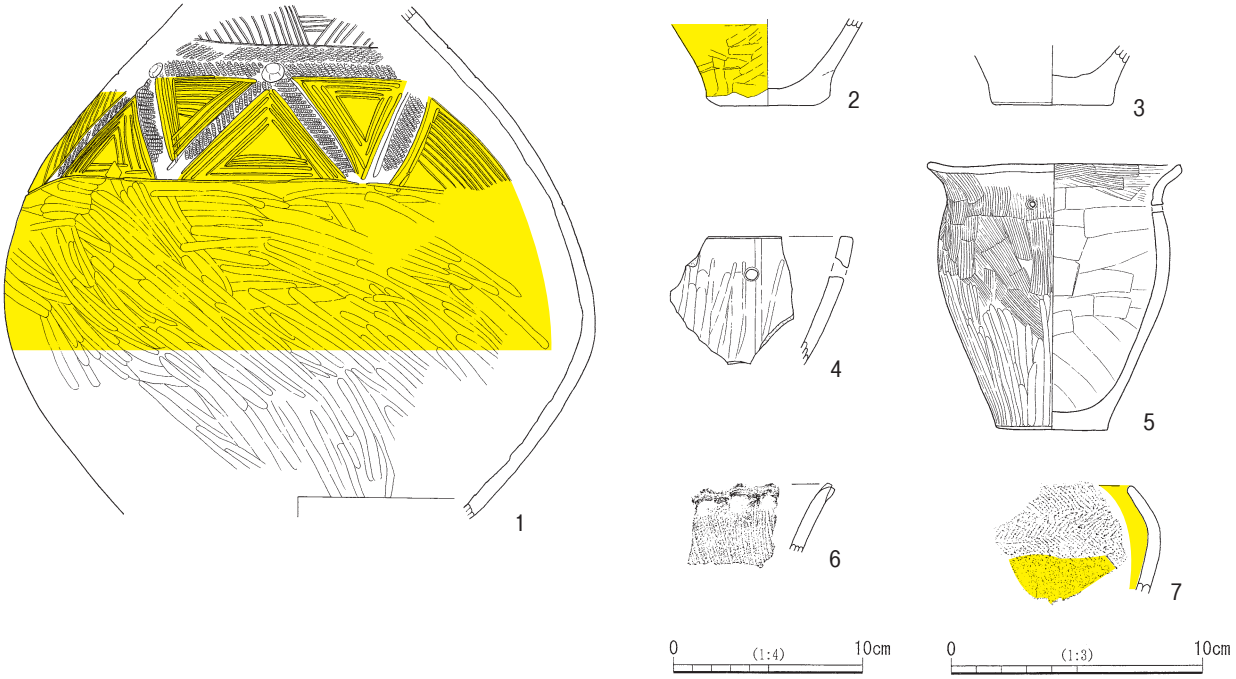
10C-53・54・63～65・74～76・85～87・96・97、11C-06・07・14～16・23～25グリッドに所在する。北西－南東方向の周溝（北構）と北東－南西方向の周溝（南溝）が検出された。これらは調査時には別の遺構とみなされ、北溝は「4SD-030」、南溝は「4SD-031」とされていたが、周溝の位置関係、平面・断面形態・覆土の類似、他遺構との新旧関係、出土遺物の内容から、四隅が切れる形状の１基の方形周溝墓であると判断した。

方形周溝墓4SD-029･032と重複しているが、土層断面の観察から、当遺構の方が古いとみられる。また、北構の南東端には縄文時代の陥穴4SK-083が同軸方向で重複している。北溝の長さは10.0mで、幅は118cmを測り、南溝の長さは8.3mで、幅は150cmを測る。ともに横断面は逆台形で、縦断面は舟形をなし、検出面からの深さは、最も深い部分で北構が62cm、南溝が72cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は７点である。１・５が南溝南西側の底面からまとまって出土したほかは、覆土中からの出土である。１は大型の壺で、胴部の60％程度が遺存している。胴部最大径は31.0cmである。胴部上半は、沈線で区画された縄文による結紐文と集合沈線による三角形の文様が配されている。結紐部には瘤状の円



第109図 4SD-030・031



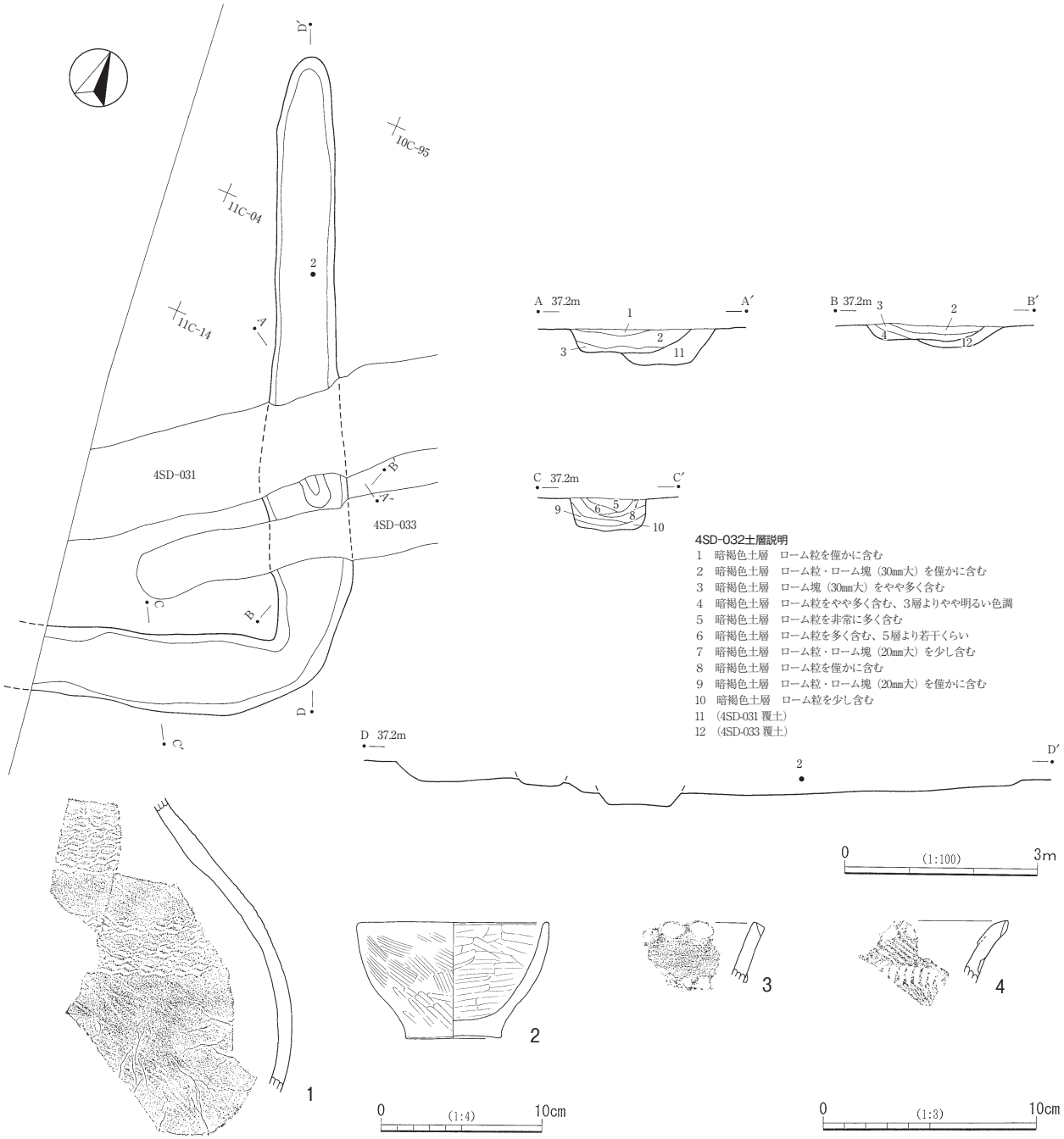
第110図　4SD-030・031出土遺物

形浮文が貼付されている。円形浮文は、確認できるのは３単位だが、全周で８単位に復元可能である。縄文施文部分を除いて、赤彩が胴部下半まで施されている。内面は全体的に著しく剥落しており、調整痕等を観察することができない。２・３は壺の底部である。２は底部の25％程度が遺存している。外面は赤彩され、底部の周縁部が著しく摩滅している。３は底部の50％程度が遺存している。内面が剥落している。４は鉢と考えられる口縁部の破片で、内外面ともミガキで仕上げられている。焼成後穿孔が認められる。口唇部は面取りされているものの凹凸が著しく、破断面を研磨し、再調整した可能性も考えられる。５は小型の甕である。全体の60％程度が遺存し、口縁部は20％程度しか遺存していないが、底部は完存している。口縁は外反し、口唇部は面取りされている。外面の調整はハケ調整で、下半にはミガキが加えられている。頸部に１か所、焼成前穿孔がある。外面は胴部中段から口縁部にかけてススが付着している。６は甕の口縁部破片で、口唇部には指頭による正面からの押捺列が巡る。外面の調整はハケ調整である。外面にススの付着が見られる。７は鉢と考えられる口縁部の破片である。外面口縁部には羽状縄文が施文され、体部と内面は磨かれ赤彩されている。

4SD-032（第111図、図版15・29・37）

10C-84・94・95、11C-04・05・14・15・25・26・34～36・44グリッドに所在する。連結する北東溝と南東溝が検出されたのみである。北東溝の北端は途切れるが、南東溝の南端は調査区外となる。方形周溝墓4SD-031・033と重複するが、土層断面の観察から、4SD-031・033より新しい。検出された溝の長さは、北東溝が約9.6m、南東溝が約4.3mである。幅は、北東溝が130cm、南東溝が120cmである。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは、北東溝は45cm、南東溝は53cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積している。

遺物は僅かに出土した。図示した遺物は４点で、２が北東溝覆土上層から出土したほかは、覆土中からの出土である。出土した遺物の大半は弥生時代中期のものであったが、ごく少量の弥生時代後期の壺・甕



第111図　4SD-032と出土遺物

片も出土している。１は壺の頸部から胴部にかけての破片である。多段のＳ字状結節文帯が２段見られる。２は鉢である。全体の60％程度が遺存し、口縁部は20％程度しか遺存していないが、底部は完存する。外面はハケ調整後ミガキ、内面はミガキで仕上げられている。内面の底部付近が剥落している。３・４は甕の口縁部破片である。３の口唇部は指頭による押捺列が巡る。頸部にも押捺列が巡るようである。４もごく僅かに遺存する口縁部で、口唇部には押捺列が巡る。また、頸部にはヘラ状工具による刻み列が巡る。口縁部内面は折返し状となっている。器面調整は内外面ともハケ調整である。

4SD-033（第112図、図版15・37）

11C-07・16・17・24～26・34グリッドに所在する。北東－南西方向の周溝が１条検出されたのみである。方形周溝墓4SD-032と重複しており、土層断面の観察から当遺構の方が古いと判断される。検出された溝の長さは約7.5mである。幅は96cmである。横断面はU字形で、底面に段が見られる。縦断面は壁が緩やかに立ち上がり、舟形を呈している。検出面からの深さは最も深い部分で49cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、レンズ状に堆積している。

遺物は若干出土した。図示した遺物は５点で、覆土中からの出土である。１は壺の胴部破片と考えられる。縄文が４本の沈線によって区画されている。沈線は櫛歯状の工具によって施されている可能性もある。２・３は甕の口縁部破片である。２の口唇部は、指頭による外面と内面からの押捺列が巡る。調整は内外面ともナデである。３の口唇部も指頭による押捺が巡り、その下にはヘラ状工具による刻み列が見られる。４・５は底部で、４が壺、５が甕と考えられる。４は底部の50％程度が遺存している。外面はハケ調整で、底部周縁部が著しく摩滅している。内面は著しく剥落しており、調整痕等が観察できない。５は底部の40％程度が遺存している。外面は剥落した部分もあるがナデ調整とみられる。内面はコゲにより黒色化している。

4SD-038（第113図、図版15・37）

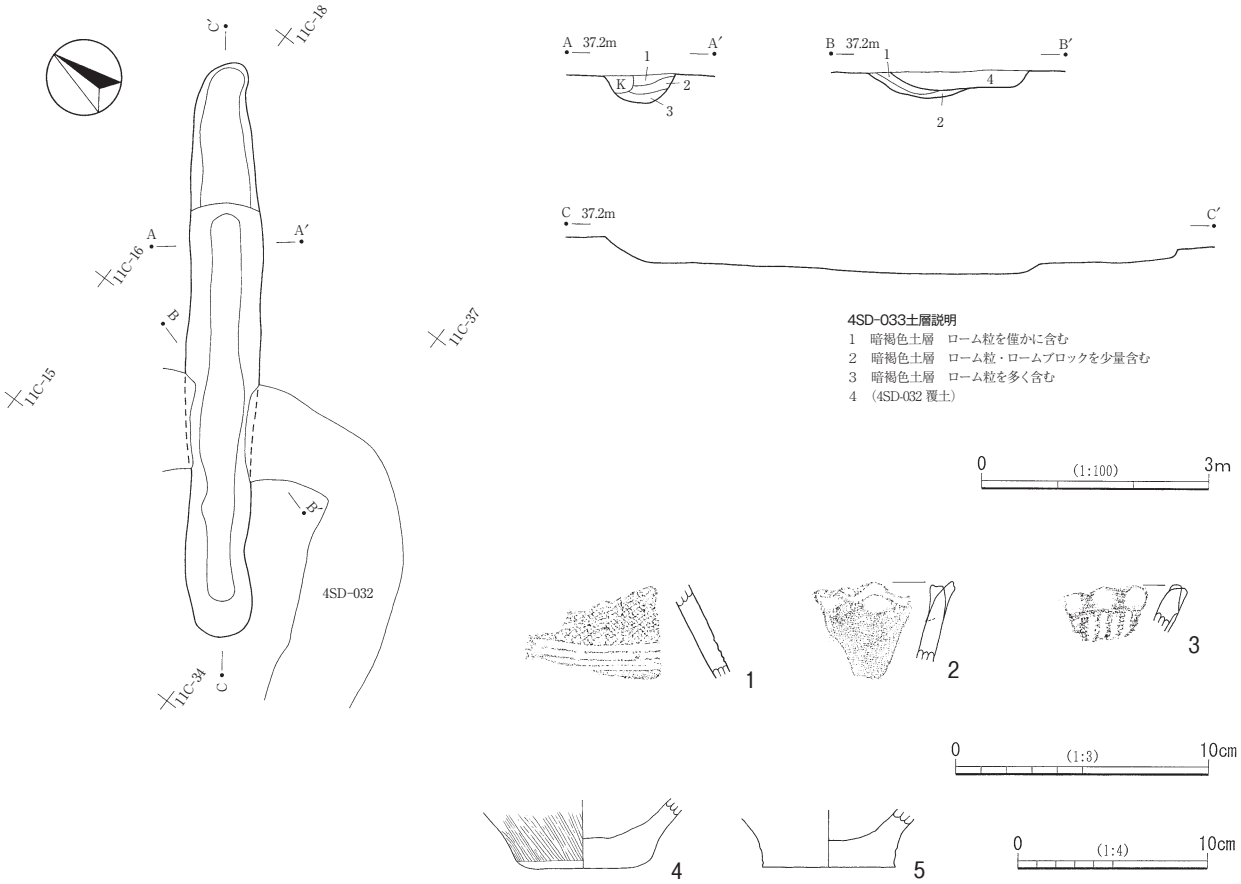
11C-44・54・55・65グリッドに所在する。北東溝と北西溝の連結する部分のみが検出された。中世の溝状遺構4SD-034に切られている。検出された溝の長さは、北東溝が約3.1m、北西溝が約1.1mである。幅は北東溝が88cm、北西溝が80cmである。断面形は緩いU字形である。検出面からの深さは27cmである。覆土はローム粒を含む黒褐色土である。

出土遺物は少なく、図示した遺物は１点のみで、覆土中からの出土である。１は甕の底部と考えられる。底部の25％程度が遺存している。外面にはハケ調整痕が見られる。

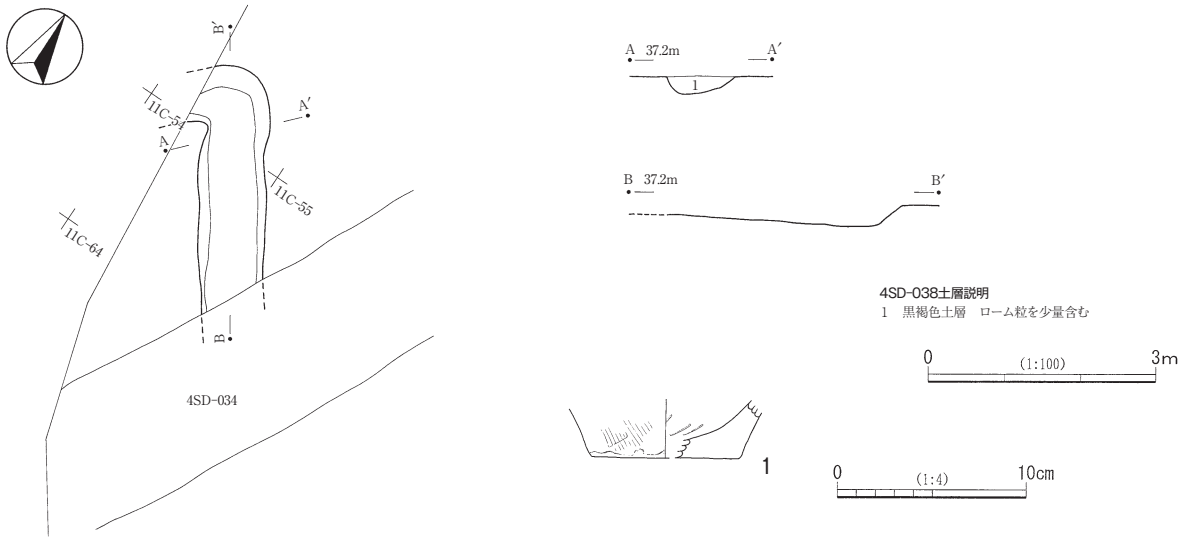
5SD-002・003（第114図、図版15・29・37）

5SD-002は36R-98、37R-07・08グリッドに、5SD-003は36R-55・56・64～66・74～76・84グリッドに所在する。西側は調査区外、東側は撹乱により失われている。それぞれ別の溝状遺構として調査を行ったが、形状や覆土の様子が同様であることから、同一遺構であると判断した。遺構番号は「5SD-002・003」のままとした。5SD-002（南東溝）は弥生時代の土坑5SK-001と重複するが、土層断面の観察から当遺構の方が新しい。5SD-003（北西溝）も弥生時代の土坑5SK-004・005と重複するが、5SK-004とは土層断面の観察から当遺構の方が新しい。5SK-005との新旧関係は明らかでない。検出された溝の長さは、5SD-002が約5.7m、5SD-003が約2.7mである。幅は、5SD-002は107cm、5SD-003は160cmである。横断面はどちらも箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは、5SD-002は61cm、5SD-003は58cmである。5SD-002･003の内側上端間の距離は約7.3mである。覆土はローム粒を含む黒褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積している。また、底面にはロームブロックが敷き詰められている。

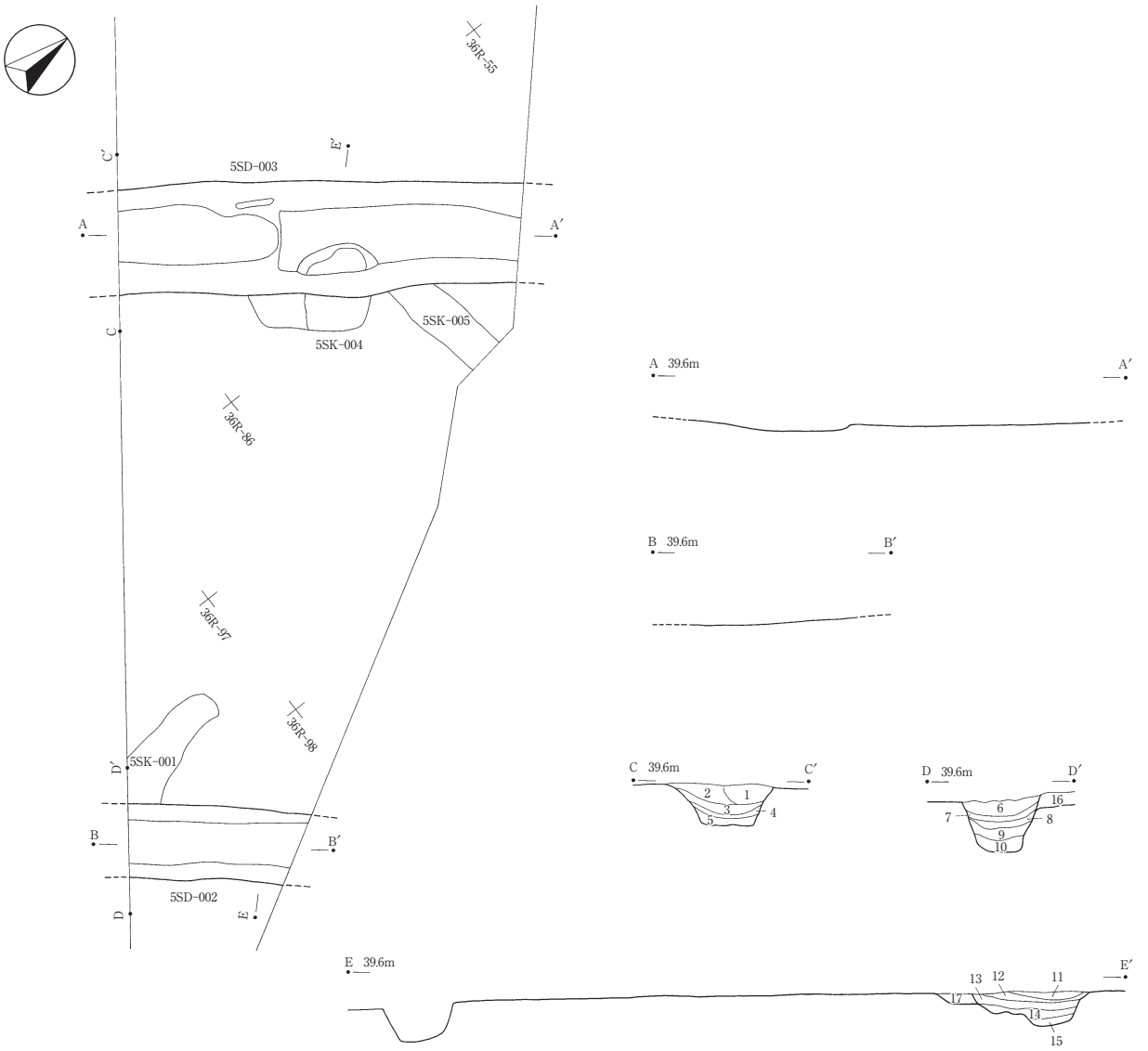
本遺構は2本の溝が並行していること、遺物の主体が弥生土器であることから本節に掲載したが、5SD-003の覆土中からは９世紀代の須恵器坏片が１点出土しており、覆土の状態、遺構の形態から平安時代以降の溝状遺構であった可能性も否定できない。



第112図　4SD-033と出土遺物



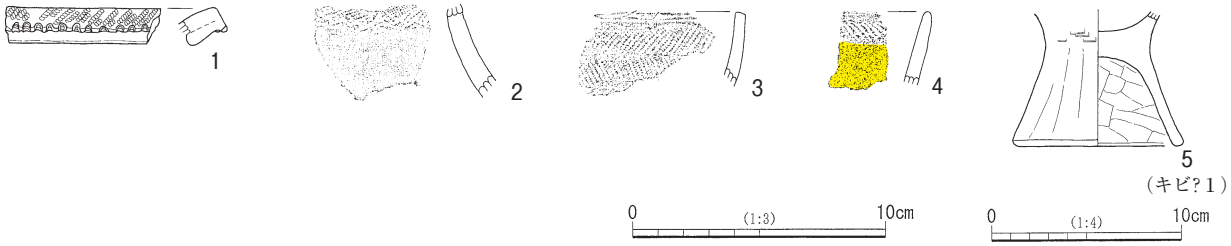
第113図　4SD-038と出土遺物



5SD-002・003土層説明

1　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
2　暗褐色土層　ローム粒を僅かに、褐色土を少量含む
3　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
4　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
5　黄褐色土層　ロームブロックを非常に多く含む、堆積は疎
6　黒褐色土層　ローム粒を少量、焼土粒を僅かに含む
7　黒褐色土層　ローム粒をやや多く含む、堆積はやや密
8　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む、7層より堆積は疎
9　黒褐色土層　ローム粒を少量含む、堆積は疎
10　黄褐色土層　ロームブロックを非常に多く含む
11　黒褐色土層　ローム粒を多量に含む
12　黒褐色土層　ローム粒をやや多く、ロームブロックを少量含む、13層より黒い
13　黒褐色土層　ローム粒を少量含む
14　暗褐色土層　ロームブロックを非常に多く、黒色土を少量含む、堆積はやや疎
15　暗褐色土層　ロームブロックを含む
16　(5SK-001 覆土)
17　(5SK-004 覆土)

0　(1:100)　3m



第114図　5SD-002・003と出土遺物

図示した遺物は５点で、いずれも覆土中からの出土である。全て5SD-003から出土したもので、5SD-002からは弥生土器の小破片が少量出土したのみである。１・２は壺の破片である。１の口縁部には縄文が施文され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。２は頸部と考えられる。Ｓ字状結節文で縄文が区画され、その下部にはミガキが施される。３・４は鉢である。３は外面に羽状縄文が施文されている。口唇部は面取りされ、内面はミガキである。４は口縁部に縄文とＳ字状結節文が施文され、その下はナデ調整で、赤彩されている。内面は磨かれ、赤彩の可能性もあるが不明である。５は台付甕の脚部である。接合部分は完存するが、脚部は25％程度の遺存度である。脚部外面にキビ？の圧痕が１点見つかった。

３　土坑

土坑は、単独で検出されたものが10基あるほか、方形周溝墓の主体部と考えられるものがある。いずれも「SK」の遺構種別記号が付されているが、ここでは単独で検出された土坑について、調査順に掲載することとする。なお、方形周溝墓の主体部と考えられる土坑については、方形周溝墓として掲載した。

SK-002・003（第115図、図版16）

SK-002は27J-44・54・55・64グリッドに、SK-003は27J-34・44グリッドに所在する。あたかも長軸70cm、短軸100cmほどの長楕円形を呈する１基の土坑のように見えるが、同軸方向で重複する２基の土坑であり、新旧関係は、調査所見によるとSK-002 の方がSK-003より新しい。底面はいずれもほぼ平坦であるが、SK-002の南端にピットがある。断面形はどちらの土坑も逆台形を呈し、検出面からの深さはともに40cmで、SK-002のピットは58cmである。覆土はSK-002・003ともにローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は出土しておらず、土坑の機能等は不明である。

5SK-001（第116図、図版16）

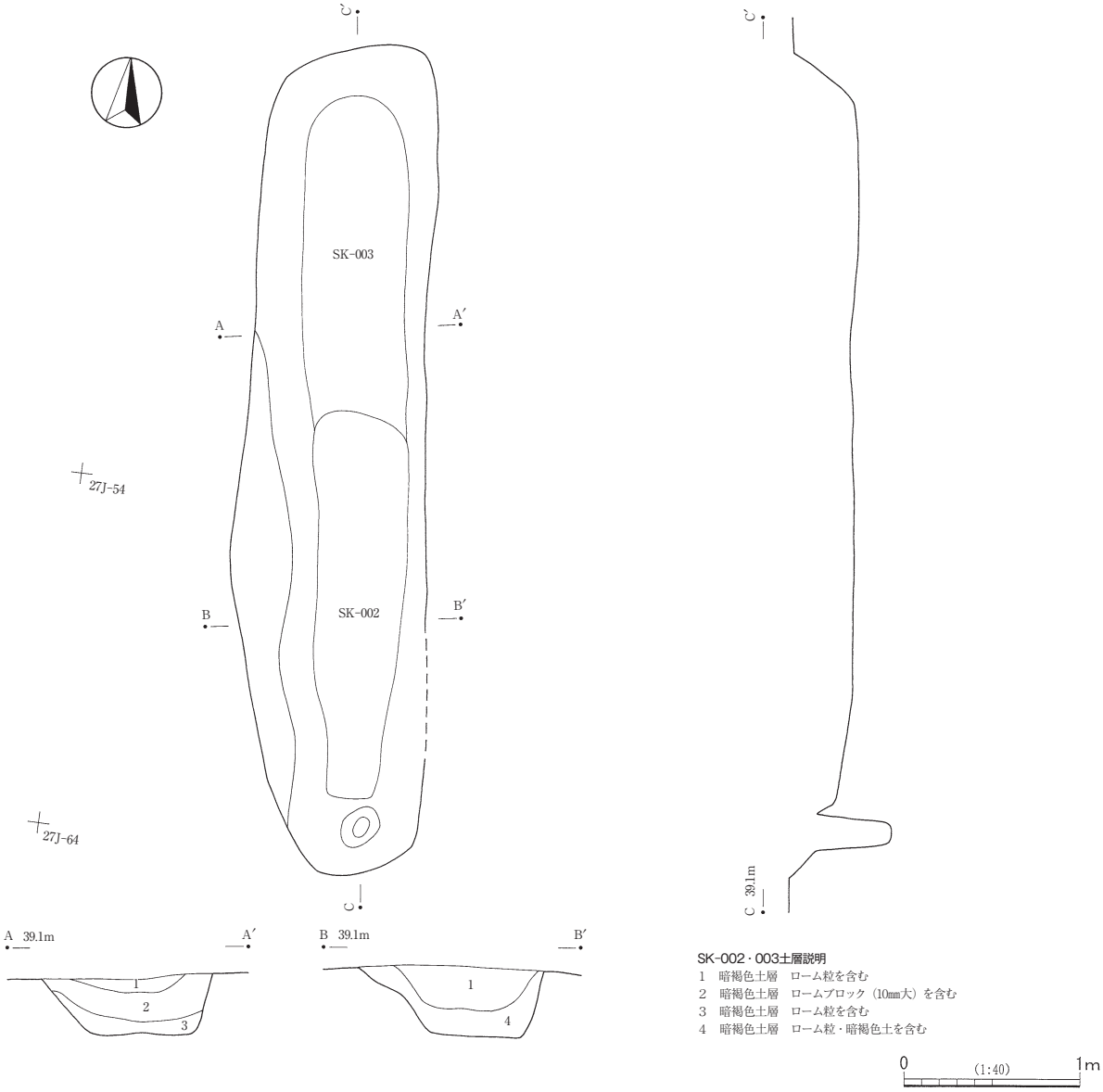
36R-97、37R-07グリッドに所在する。南端は方形周溝墓5SD-002と重複するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構の方が古いとみられる。平面形は長軸190cm、短軸60cmの不整長方形を呈する。断面は箱形をなし、底面はほぼ平坦であるが、南に向かって次第に深くなっている。検出面からの深さは最も深いところで35cmである。

遺物は出土しておらず、時期等詳細は明らかではないが、形状から方形周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

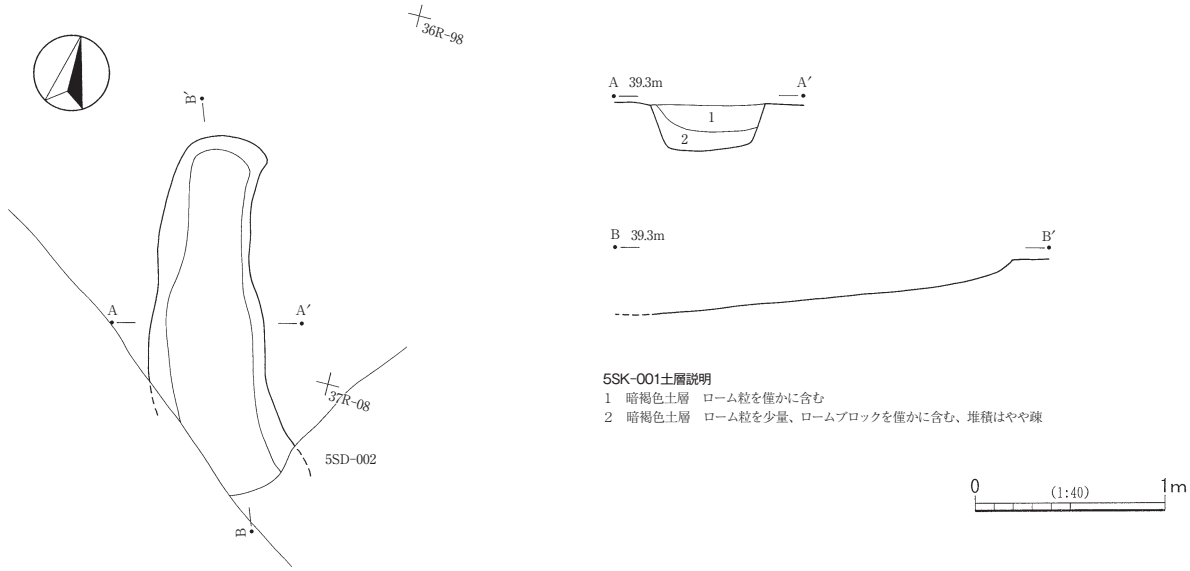
5SK-002（第117図、図版16）

36R-75・76・85・86グリッドに所在する。平面形は、長軸126cm、短軸116cmの円形に近い楕円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、ほぼ平坦な底面の中央には径35cmのピットがある。検出面からの深さは74cm、ピットの深さは底面から30cmである。

遺物は弥生土器の小破片が少量出土したのみで、図示した遺物はない。



第115図　SK-002・003



第116図　5SK-001

5SK-003（第118図、図版16）

36R-76・77・86・87グリッドに所在する。東側で竪穴住居跡5SI-002と重複するが、検出状況から当遺構の方が古いとみられる。平面形は、長軸130cm、短軸60cmの不整長方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは20cmである。形状から方形周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

遺物は弥生土器の小破片が少量出土したのみで、図示した遺物はない。

5SK-004（第119図、図版16）

36R-65・66・75・76グリッドに所在する。西側で方形周溝墓5SD-003と重複するが、土層断面の観察から当遺構の方が古いとみられる。平面形は、復元値で長軸115cmほど、短軸90cmほどの楕円形を呈するとみられる。壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは17cmである。

遺物は出土していない。

5SK-005（第120図、図版16・37）

36R-66グリッドに所在する。東側は撹乱により失われている。西側で方形周溝墓の周溝5SD-003と重複するが、検出状況から当遺構の方が古いとみられる。平面形は、現存値で長軸162cm、短軸60cmの溝状を呈する。断面形はU字形であり、検出面からの深さは33cmである。形状から方形周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

図示した遺物は１点である。１は壺の口縁部破片である。折返しの口縁部と面取りされた口唇部には縄文が施文され、口唇部端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。頸部にも縄文が認められる。

5SK-006（第121図、図版16）

36R-34・44グリッドに所在する。平面形は、長軸210cm、短軸58cmの長楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは26cmである。形状から方形周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

遺物は弥生土器の小破片が少量出土したのみで、図示した遺物はない。

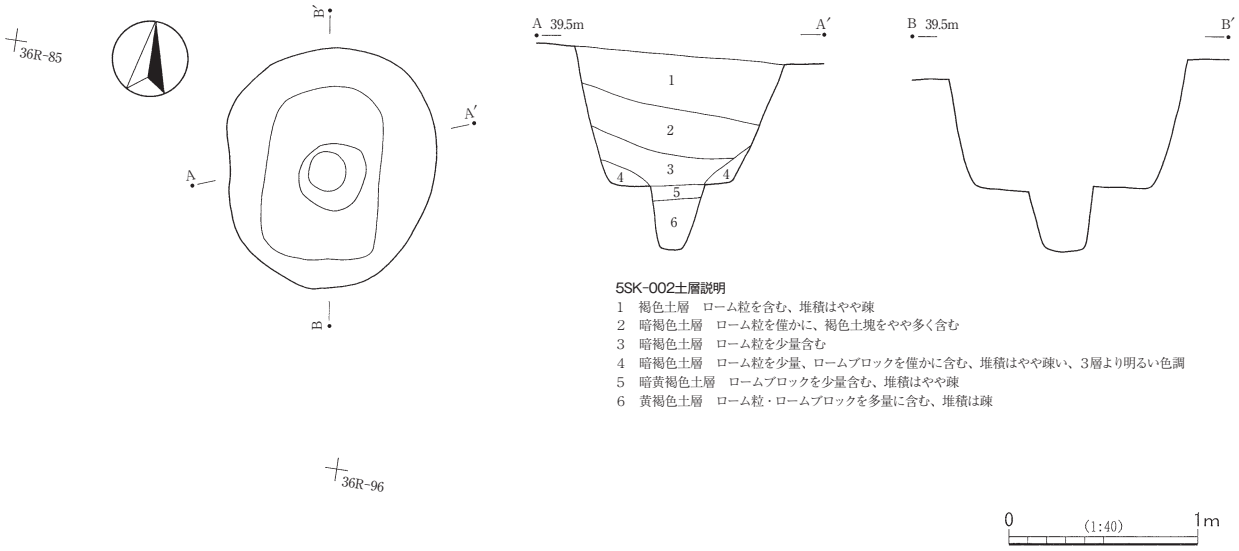
5SK-007（第122図、図版16）

36R-53・63・64グリッドに所在する。平面形は、長軸163cm、短軸74cmの長楕円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは32cmである。

遺物は弥生土器の小破片が少量出土したのみで、図示した遺物はない。

5SK-008（第123図、図版17）

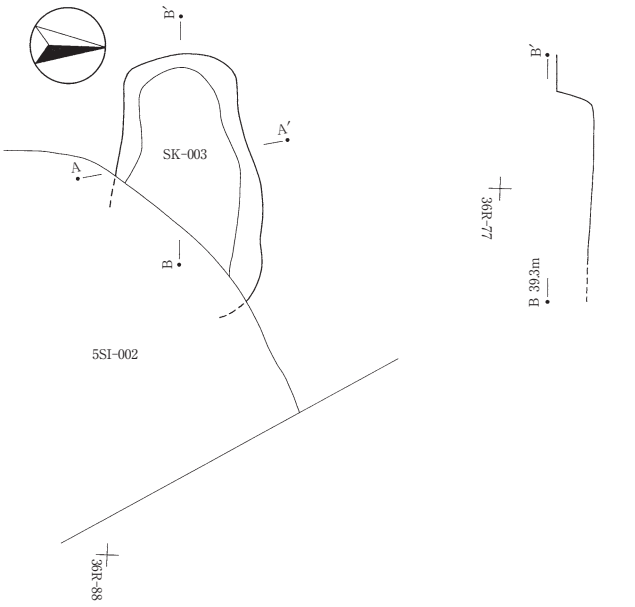
36R-21・31・32グリッドに所在する。北側で溝状遺構5SD-004と重複するが、土層断面の観察から当遺構の方が古いとみられる。平面形は、楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは13cmである。遺物は出土しておらず、時期等明確でないが、状況からここに掲載した。

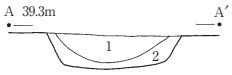


5SK-002土層説明
1　褐色土層　ローム粒を含む、堆積はやや疎
2　暗褐色土層　ローム粒を僅かに、褐色土塊をやや多く含む
3　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
4　暗褐色土層　ローム粒を少量、ロームブロックを僅かに含む、堆積はやや疎い、3層より明るい色調
5　暗黄褐色土層　ロームブロックを少量含む、堆積はやや疎
6　黄褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多量に含む、堆積は疎

0 (1:40) 1m

第117図　5SK-002

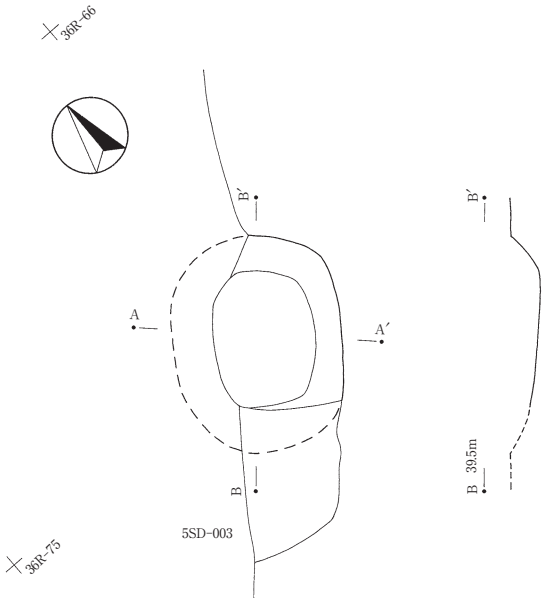


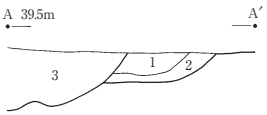


5SK-003土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
2　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む、堆積はやや疎、1層より明るい色調

0 (1:40) 1m

第118図　5SK-003

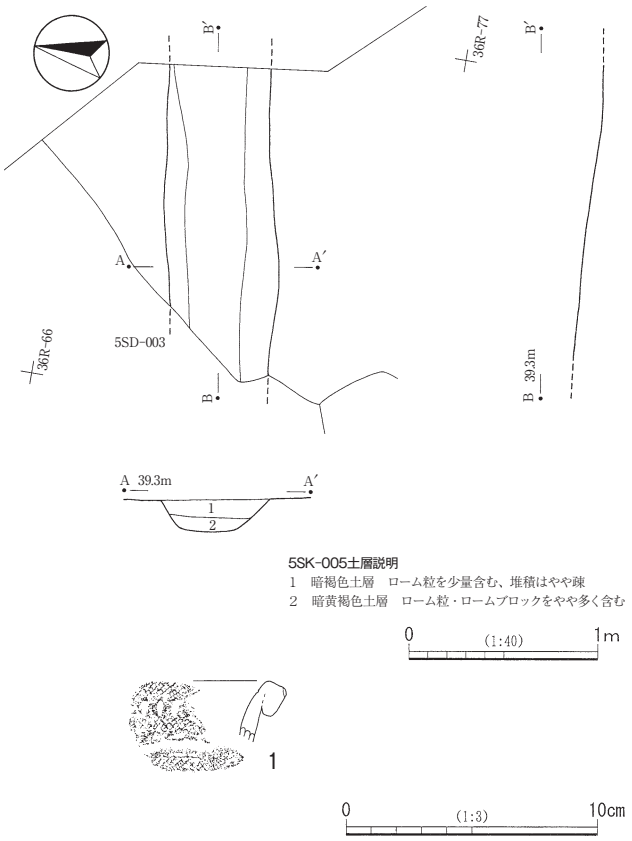




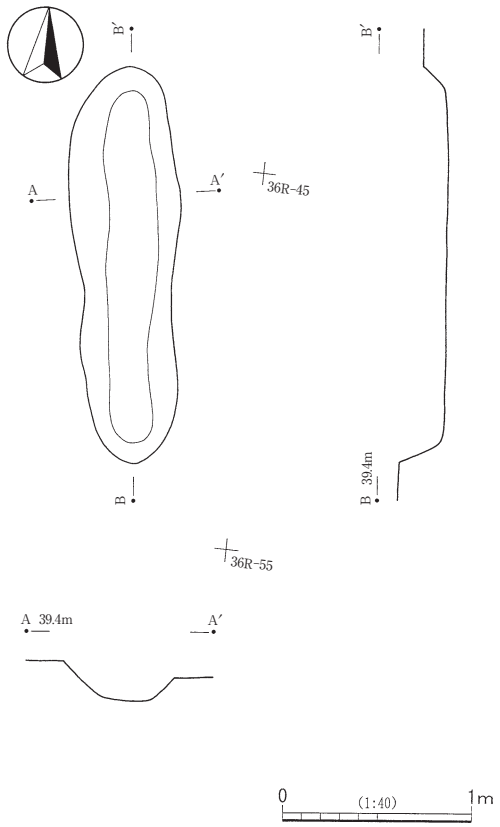
5SK-004土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
2　暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックをやや多く含む、1層より明るい色調
3　(5SD-003 覆土)

0 (1:40) 1m

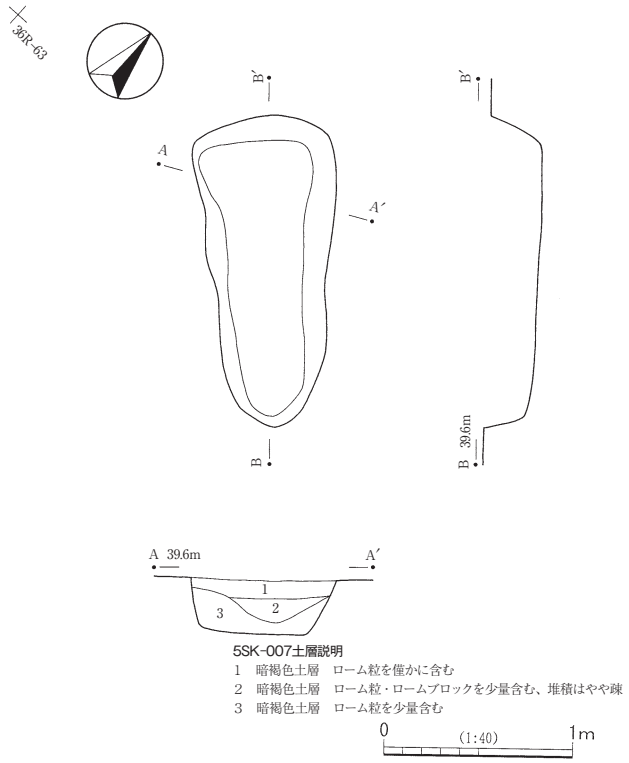
第119図　5SK-004



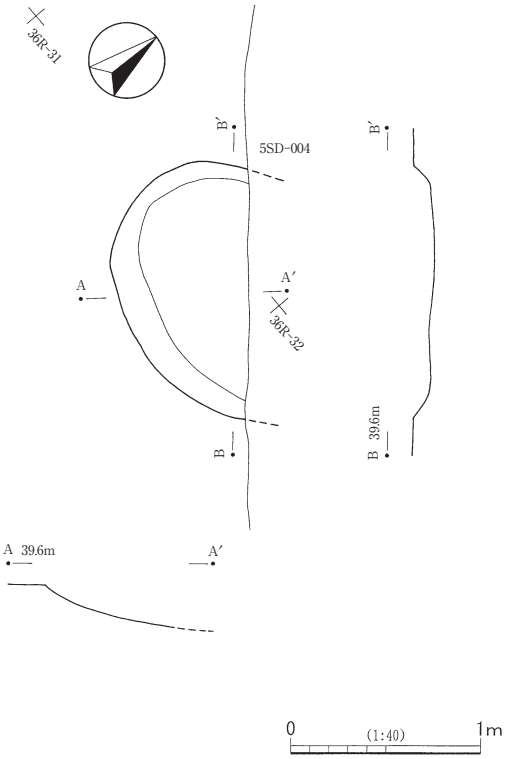
第120図　5SK-005と出土遺物



第121図　5SK-006



第122図　5SK-007



第123図　5SK-008

４　遺構外出土遺物（第124・125図、図版38・39・40・41・44）

ここでは、該期の遺構ではない場所から出土した弥生時代の遺物について掲載する。それぞれの出土場所は第５表に示した。

図示した遺物は91点である。第124図１～51は弥生時代中期、第125図52～88は弥生時代後期にそれぞれ比定される土器で、89は土製品、90・91は石器・石製品である。

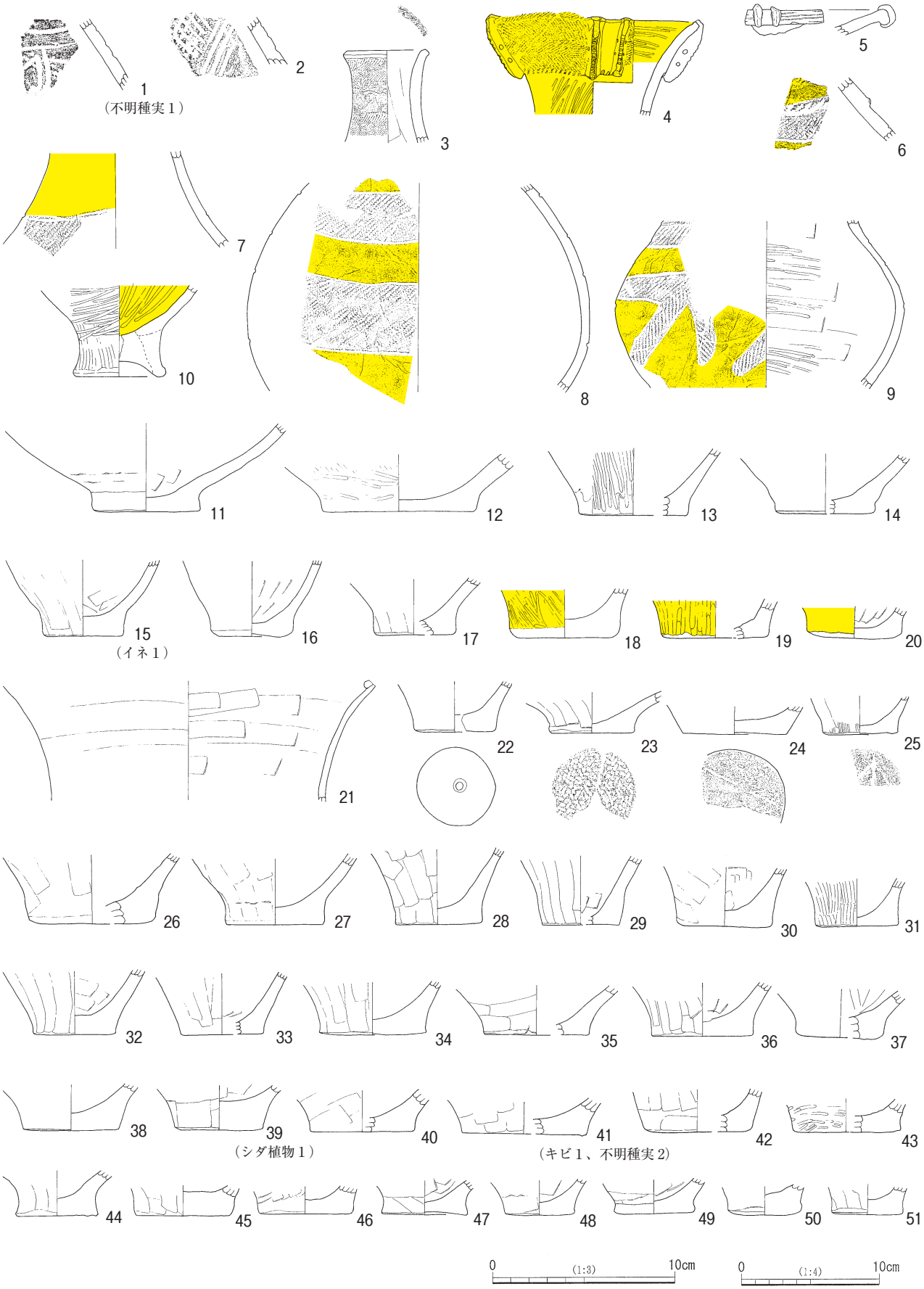
１～９は壺である。１は沈線で文様が描かれている。胴部外面に不明種実の圧痕が１点見つかった。２の沈線文様は条痕文とみられる。３は口唇部が僅かしか遺存していないものの、頸部は全周している。口縁部から頸部にかけて、細かな縄文が施されているが、中間部は擦り消されている。擦り消された部分に赤彩されていた可能性もあるが、はっきりしない。縄文は面取りされた口唇部にも施文されている。４は口縁部の30％程度が遺存している。折返しの口縁部には羽状縄文が施文され、刻みの付いた棒状浮文が２本貼付される。棒状浮文には、それぞれ横からの焼成前穿孔が２個ずつある。折返し端部にはヘラ状工具による押捺列が巡る。面取りされた口唇部にも縄文が施文されている。外面は全体に赤彩されており、内面も口縁部が磨かれ、赤彩されている。５は小型壺の口縁部破片である。折返し口縁部には横走する筋状の沈線が観察されるが、沈線というよりハケ調整状又はヨコナデ状であり、文様を意識したものではない可能性もある。また、２本の棒状浮文が貼付されている。６は肩部の破片と考えられる。上部に段があり、段の部分にはヘラ状工具による押捺列が施される。この押捺列の下に縄文が施文され、下部は沈線で区画される。施文部以外は磨かれ、赤彩されている。７・８は同一個体の可能性がある破片で、７は頸部の20％程度、８は胴部の20％程度が遺存している。沈線で区画された縄文帯が見られ、施文部以外は丁寧にナデが施され、赤彩されている。９は胴部最大径の30％程度の破片である。沈線で区画された縄文帯で結紐文が描かれている。縄文帯以外の部分は赤彩されている。二次的被熱により、接合破片の一部にススが付着している。

10は高坏である。脚部の50％程度が遺存している。外面はハケ調整後ミガキが施されている。坏内面も磨かれ、赤彩されている。脚部内面はナデ調整となっている。

11～20は壺の底部である。11は底部のみ完存する。12は底部の25％程度の破片である。器面が摩耗しているが、外面はハケ調整後にミガキが施されている。13は底部の20％程度が遺存している。14は底部の50％程度が遺存している。外面は摩耗しているが、ミガキで仕上げられている。底部周縁部が摩滅している。15は底部のみ完存する。外面は、摩耗しているが、ミガキが施されている。底部外面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。16は底部のみ完存する。外面はやや摩耗しているが、ミガキで仕上げられている。底部は上げ底気味である。17は底部の50％程度が遺存している。外面はミガキで仕上げられ、赤彩の可能性もあるが、はっきりしない。内面は剥落している。18は底部の25％程度の破片である。外面はミガキで仕上げられ、赤彩されている。底部周縁部が著しく摩滅し、内面は剥落している。19は底部の30％程度が遺存している。外面には丁寧にミガキが施され、赤彩されている。内面は著しく剥落している。20は底部の25％程度の破片である。胴部外面は赤彩されている。底面は周縁部を中心に著しく摩滅している。

21は甕で、接合しない２片となっているが、口縁の60％程度が遺存している。口唇部は欠損しているが、内面に折返し状となる部分が僅かに残っている。外面に薄くススが付着しており、内面にはコゲが見られる。外面はほとんど全体的に剥落しており、調整痕の観察は極めて困難である。

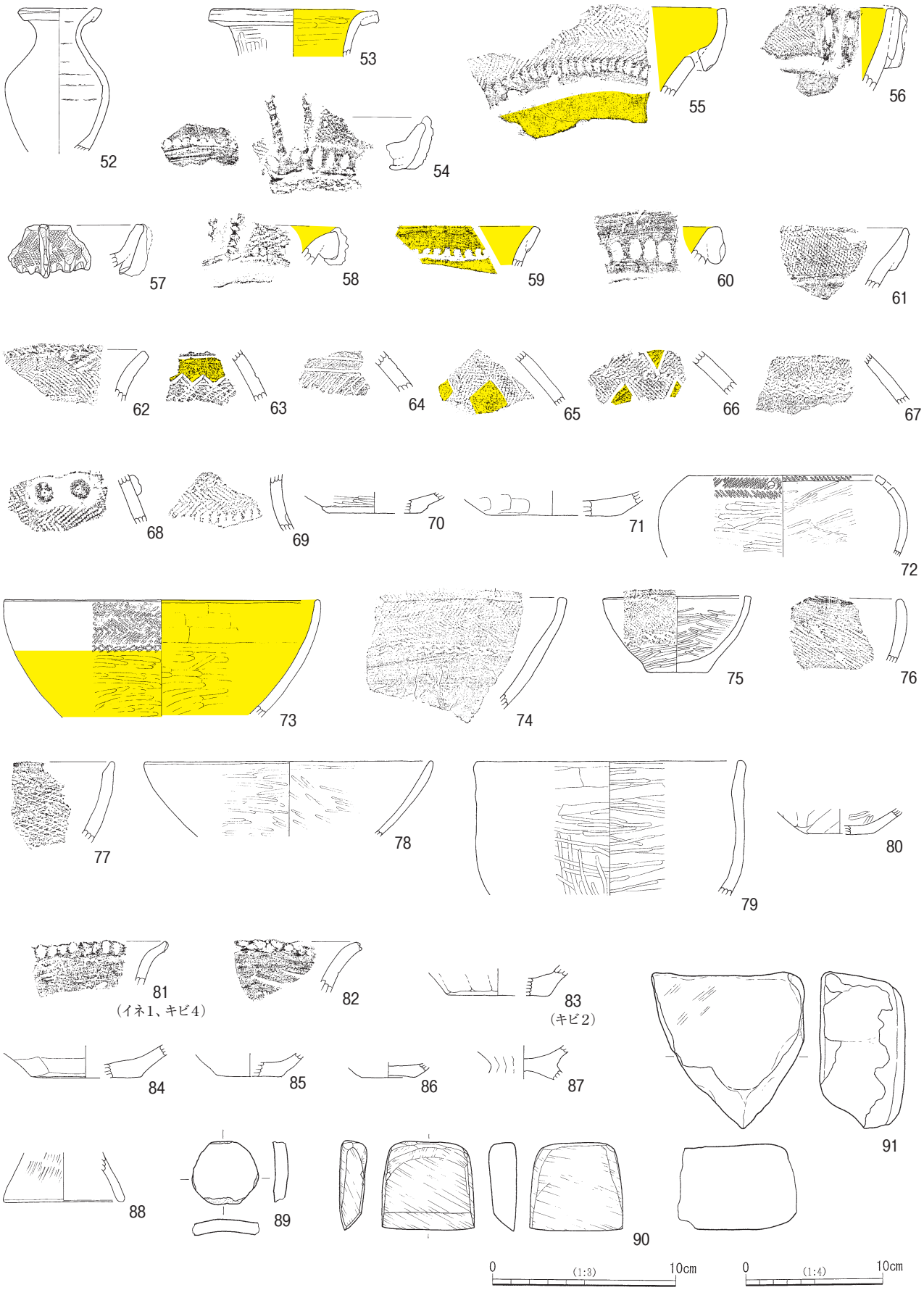
22～51は甕の底部である。22は底部のみ完存する。底部中央に焼成後穿孔が１か所認められ、濾過器と



第124図　遺構外出土弥生時代遺物（１）

して転用されている。内面は剥落している。23は底部の80％程度が遺存している。外面にはハケ調整痕が観察され、底部には網代痕が残される。24は底部の60％程度が遺存している。底部外面には木葉痕と思われる痕跡が見られる。内面には円形剥落が見られる。25は底部の25％程度が遺存している。底部外面に木葉痕が見られる。26は底部の20％程度が遺存している。底部の周縁部が少し摩滅している。内面は剥落している。27は底部の50％程度が遺存している。外面にハケ調整痕が少し観察される。28は底部の80％程度が遺存している。外面にはハケ調整痕が残る。内面は摩耗している。29は底部の25％程度の遺存度である。外面に浅いハケ調整痕が観察される。30は底部の40％程度が遺存している。31は底部の20％程度が遺存している。外面にはハケ調整痕が明瞭に残る。32は底部の70％程度が遺存している。外面はナデられているが、浅いハケ調整痕が観察される。33は底部の40％程度の破片である。外面調整はヘラケズリ後ナデとみられるが、僅かにハケ調整の痕跡が観察される。34は底部の25％程度が遺存している。外面にハケ調整痕が少し観察される。底部には木葉痕とみられる痕跡がある。35は底部の20％程度が遺存している。36は底部の40％程度が遺存している。ハケ調整後、ミガキが施されている。37は底部の30％程度が遺存している。内外面とも摩耗しており、特に外面は調整痕が観察できない。38は底部のみ完存する。39は底部の40％程度が遺存している。底面の器壁が非常に厚い。外面底部にシダ植物の圧痕が１点見つかった。40は底部の25％程度が遺存している。41は底部の25％程度が遺存している。外面にはハケ調整痕が僅かに観察される。底部外面にキビの圧痕が１点、不明種実の圧痕が２点見つかった。42は底部の25％程度が遺存している。外面にハケ調整痕が少し観察できる。43は底部の20%程度が遺存している。内面が剥落している。44は底部の40％程度が遺存している。外面は摩耗が著しく、調整痕が観察できない。45は底部の60％程度が遺存している。外面にハケ調整痕が残る。46は底部の70％程度が遺存している。破断面が摩滅している。47は底部の70％程度が遺存している。やや上げ底となっている。48は底部のみ完存している。49は底部の25％程度が遺存している。50は底部のみ完存する。内面にハケ調整痕が少し観察される。51は底部のみ完存する。外面にはハケ調整痕が観察される。

52～71は壺と考えられる。52は底部は欠損するが、全体の70％程度が遺存する小型の壺である。口縁部は折返しとなっている。口縁部から頸部はナデ調整であるが、頸部から下はミガキで仕上げられている。口唇部は面取りされ、内面は口縁部のみミガキが施され、頸部から下は輪積み痕が明瞭に残っている。53は口縁部の30％程度が遺存している。折返しの口縁部はほぼ水平に開く器形で、内面のみ赤彩されている。54は折返しの口縁部と面取りされた口唇部に縄文が施文され、端部に縄文原体による押捺列が巡る。刻みの施された棒状浮文が２本貼付される。内面は屈曲部分に縄文端部の押捺列が巡っている。55は大型壺の口縁部破片で、折返し口縁部には羽状縄文が施文され、端部に布巻棒状工具による押捺列が巡る。摩耗してはっきりしないが、口唇部にも縄文が巡ると思われる。頸部と内面は磨かれ、赤彩される。内面の屈曲部には内側から外側に向かって開けられた焼成前穿孔が２か所ある。56は折返し口縁部に羽状縄文が施文され、棒状浮文が貼付される。口唇部から内面にかけて器面が著しく剥落しているが、僅かに遺存している部分から内面の赤彩が確認できる。57は折返し口縁部に羽状縄文が施文され、刻みのある棒状浮文が、２本貼付されているのが確認できる。折返し端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。58は折返し口縁部に縄文が施文され、刻みの付いた棒状浮文が１本見られる。内面は剥落しているが、赤彩が確認できる。59は口縁部破片で、内外面ともミガキで仕上げられ、赤彩されている。折返し口縁端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。60は折返し口縁で、端部には押捺列が巡る。内面は赤彩されている。61・62の口唇



第125図　遺構外出土弥生時代遺物（２）

部には縄文が施文されている。63は山形の沈線の下部に細かい格子目状の条線が見られる。網目状撚糸文の可能性もあるが、明確ではない。64は地文である斜行する条線と横走する２本の沈線が見られる。内面が剥落している。65は縄文帯が沈線で区画され、菱形文が構成されるようである。施文部分以外は赤彩されている。66は沈線で区画された縄文による山形文が施されている。縄文の間には２段のＳ字状結節文が見られる。区画の外は磨かれた後、赤彩されている。67は３段のＳ字状結節文に区画された縄文が見られる。内面が剥落している。68は瘤状で高さのある円形浮文が２個１単位で貼付され、貼付後に周囲に羽状縄文が施文されている。円形浮文上には、竹管状工具の端部による押捺が加えられている。内面が剥落している。69は頸部破片で、羽状縄文が施文され、その上部には２段のＳ字状結節文、下部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。下部の破断面が摩滅しており、器台として転用された可能性が高い。70は底部の20％程度が遺存している。71は底部の25％程度が遺存している。胴部は大きく開くと思われ、大型壺の底部と考えられる。外面はミガキで仕上げられている。

72～80は鉢である。72は口縁部分の30％程度が遺存している。内傾する口縁部には羽状縄文が施文され、面取りされた口唇部にも縄文が施文されている。焼成前穿孔が１か所あるが、同一個体と考えられる接合しない破片にも１か所あり、少なくとも２か所の穿孔があったものと考えられる。73は口縁部の40％程度が遺存している。口縁部に羽状縄文が施文され、下部を２段のＳ字状結節文で区画している。無文部分と内面は磨かれ、赤彩されている。口縁部付近の内外面にススが付着している。74は口縁部破片である。口縁部には２段のＳ字状結節文で区画された羽状縄文が施文されている。面取りされた口唇部にも縄文が施文される。無文部分と内面はミガキで仕上げられている。赤彩の可能性もあるが、はっきりしない。75は小型の鉢で、全体の70％程度が遺存している。口縁部には２段のＳ字状結節文で区画された羽状縄文が巡り、面取りされた口唇部にも縄文が施文される。76は口縁部破片である。外面と面取りされた口唇部にハケ調整痕が見られる。下端の破断面が平滑になっており、砥石等に転用された可能性が考えられる。77は外側にやや屈曲して開く口縁部の破片で、外面の屈曲部にはＳ字状結節文、その下には網目状撚糸文がみられる。78は口縁部の20％程度が遺存している。内外面ともミガキで仕上げられている。79は口縁部の10％程度の破片である。内外面ともミガキで仕上げられている。80は底部の50％程度が遺存している。内外面とも丁寧に磨かれ、鉢の底部と考えられる。内面は赤彩の可能性もあるが、明確ではない。

81～86は甕である。81は口縁部の破片で、口唇部には正面から棒状工具による押捺列が巡る。口縁部外面にイネ（籾）、キビ、口縁部内面２か所にキビ、断面にキビの圧痕が計５点見つかった。82は口縁部の破片で、口唇部には上部からの指頭押捺列が巡る。83は底部の30％程度が遺存している。内面は剥落して調整痕は観察できない。底部外面にキビの圧痕が計２点見つかった。84は底部の30％程度が遺存している。85は底部の20％程度が遺存している。86は底部のみ完存する。上げ底気味である。内面には小刻みなハケ調整痕が観察される。87・88は台付甕と考えられる。87は接合部の破片で、全周遺存している。外面にはハケ調整痕がみられる。内面は底部･脚部ともにヘラナデである。88は脚部で、20％程度の遺存度である。外面にはやや鋭いハケ調整痕が見られ、裾部と内面はヨコナデである。

89は土器片の周囲を細かく打ち欠いて円板状に整えた土製品である。内外面とも器面に粗いミガキ調整痕が見られ、甕の胴部片を利用したものと考えられる。胎土に多量の白色針状物質と少量の砂粒を含む。色調は、外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈し、焼成は良い。90は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。基部には成形時の敲打痕が見られる。91は砂岩製の砥石である。やや赤化しており、被熱している可能性がある。

第４節　古墳時代

検出された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡３軒、土坑１基である。

１　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、全ての調査年次を通して遺構種別記号に「SI」が用いられている。ここでは第１表に基づき、調査順に掲載する。

SI-036B（第126図、図版17）

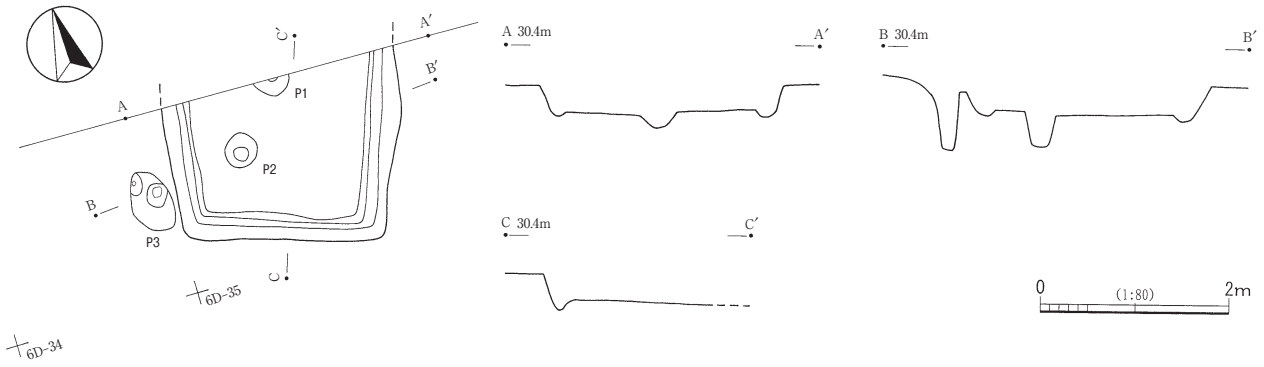
6D-25･26グリッドに所在する。松川を望む台地の北端に位置し、北側は斜面で本調査区外となっている。当遺構は平成21年度に「SI-036」として調査した竪穴住居跡であるが、平成20年度においても「SI-036」として調査した別の遺構（中・近世方形竪穴）が存在している。報告に当たって、当遺構を「SI-036B」、方形竪穴を「SI-036A」として区別することとしたが、両遺構は直接重複関係にあるわけではない（「SI-036A」は中・近世編に所収済み）。平面形は方形を呈し、規模は東西軸で254cmである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは40cmである。壁溝は全周している。床面からはピットが２か所検出された。床面からのピットの深さは、P1が21cm、P2が34cmである。このほか南西コーナー付近の遺構検出面からP3が検出され、深さは68cmであった。炉やカマドは検出されなかった。住居覆土は、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土の単層で、埋め戻しを行ったものと思われる。なお、当遺構は住居跡としては規模が小さいことから、住居以外を目的として使用されたもの又は、中・近世の方形竪穴である可能性も残る。

遺物は混入品とみられる土師器や弥生土器の小破片が少量出土したが、図示した遺物はない。

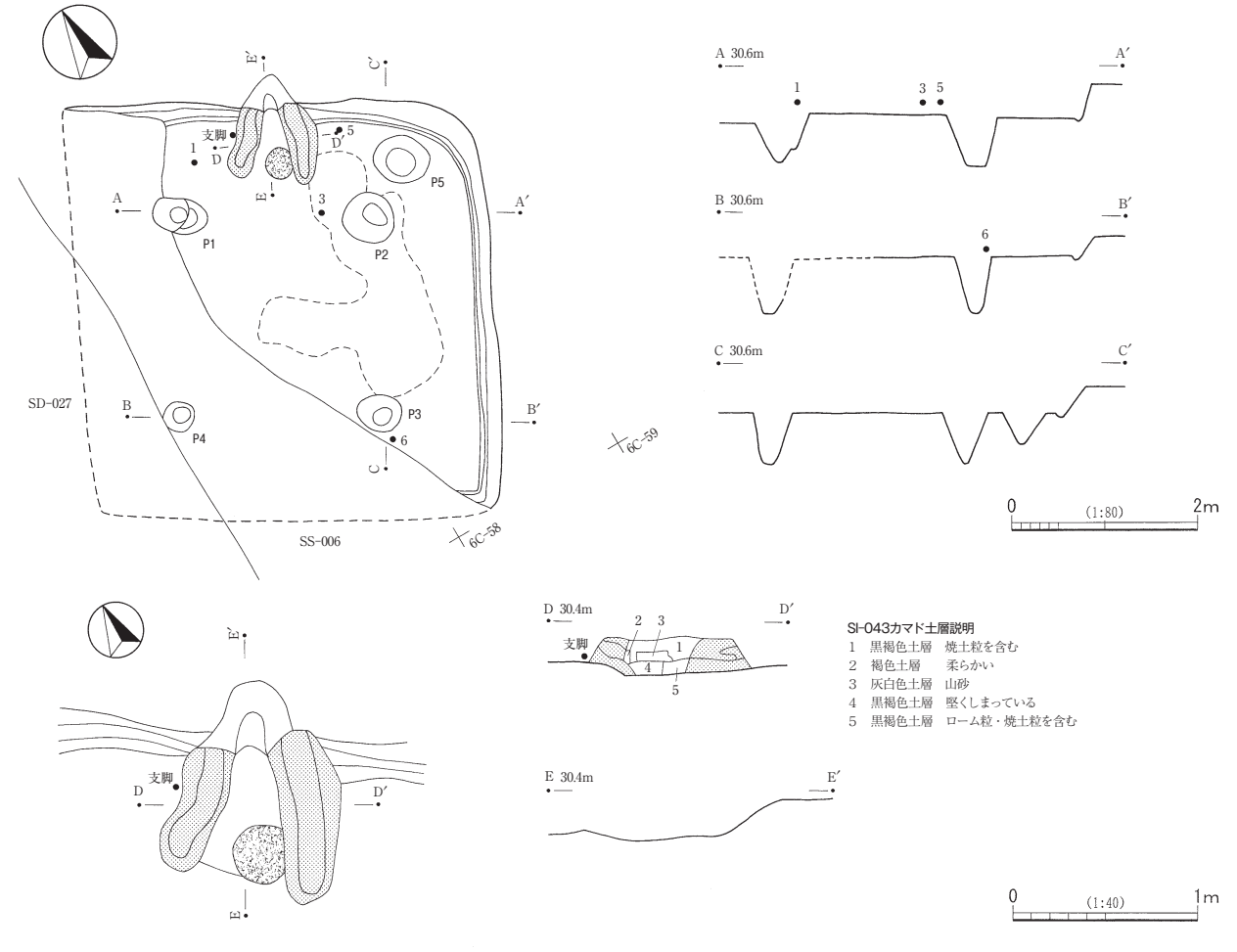
SI-043（第127図、図版17・42・43）

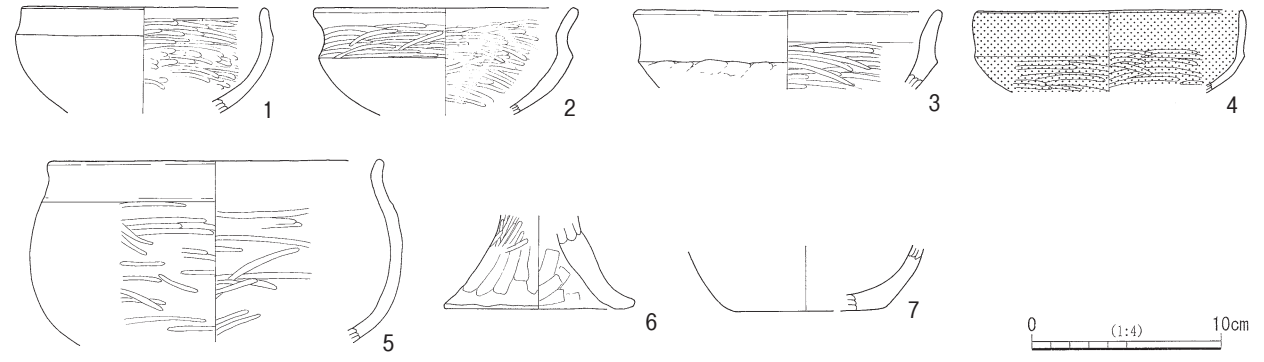
6C-27～29･36～39･46～48グリッドに所在する。中･近世の土塁SA-001下から検出された。西側は中･近世の堀SD-027に切られ、南側で方形周溝墓SS-006の北東溝を切っている。平面形は、一辺460cmほどの正方形に復元可能で、北東辺からカマドが１基検出された。主軸方向は、N-30°-Eである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは33cmである。壁溝が全周している。床面は部分的に硬化している。ピットは、主柱穴と考えられるものが４か所（P1～P4）と、貯蔵穴と考えられるものが東コーナー付近に１か所（P5）検出された。ピットの深さは、主柱穴と考えられるP1が52cm、P2が59cm、P3が60cm、P4が63cmである。貯蔵穴と考えられるP5は、長軸60cm、短軸50cmの楕円形をなし、断面は漏斗状で深さは38cmである。カマドは灰白色の山砂で構築され、袖が少し遺存していた。ほぼ平坦な火床部には、焼土が少し堆積していた。住居覆土は、ローム粒、焼土を含む黒色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は７点である。すべて床面から若干浮いた位置から出土している。このほか崩壊して図示できなかったが、カマド横の床面からは、柱状の支脚が出土した。１～４は坏である。１は口縁部の30％程度が遺存している。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ後ナデとみられる。内面は粗いミガキである。２は口縁部の15％程度が遺存している。外面の調整は、口縁部がミガキであるが、体部は摩耗しており明確でない。内面はミガキである。３は口縁部の25％程度が遺存している。外面の調整は、口縁部がミガキで、体部がヘラケズリ後ナデとみられる。内面はミガキである。器厚が厚い。４は口縁部



第126図　SI-036B





第127図　SI-043と出土遺物

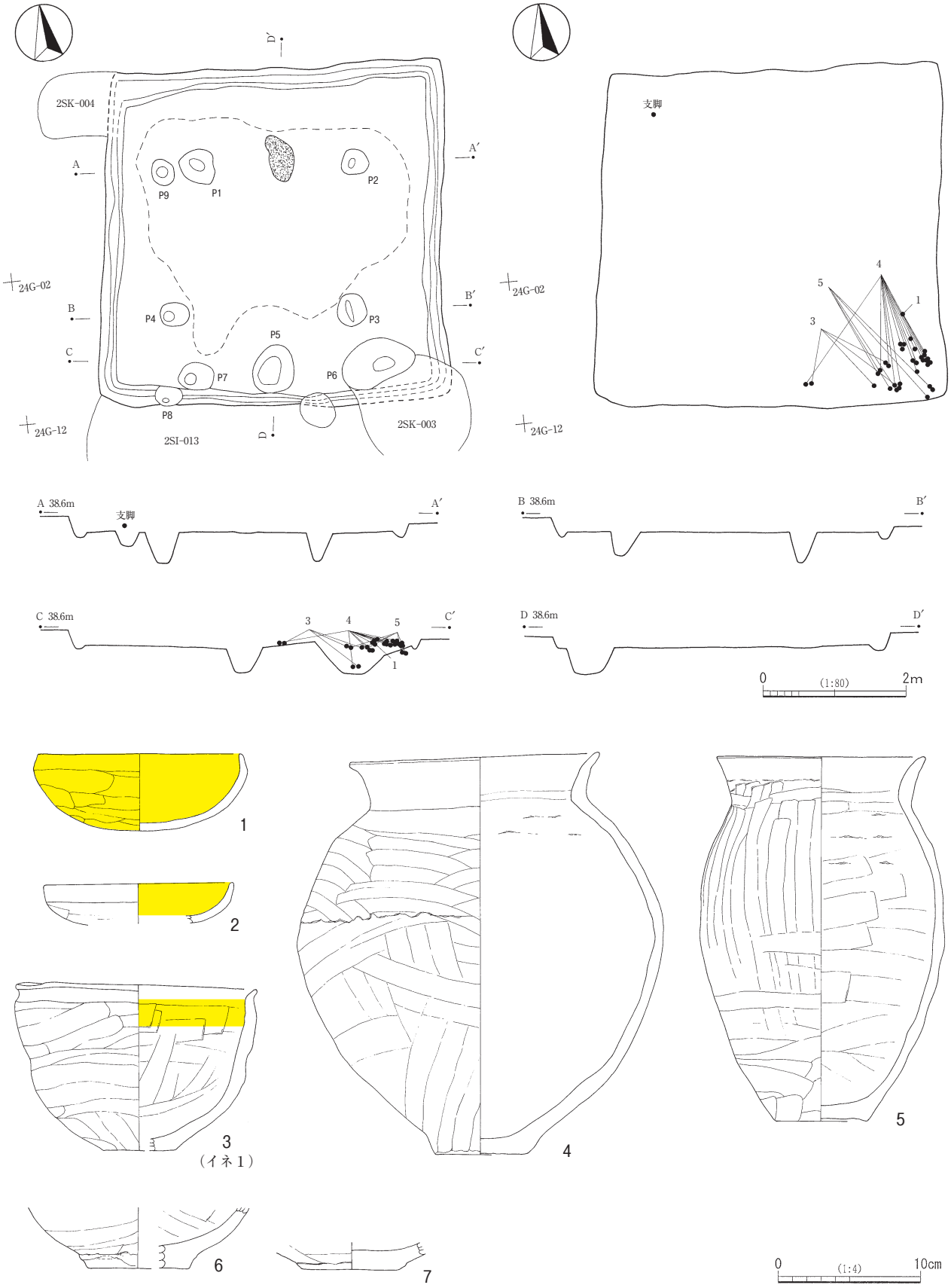
の10％程度が遺存している。外面の調整は、口縁部がヨコナデ後ミガキ、体部がヘラケズリ後ミガキである。内面はミガキで、内外面とも黒色処理が施されている。器厚が薄いつくりである。５は体部がやや膨らむ鉢で、接合しない２破片をあわせて口縁部の60％程度が遺存している。外面の調整は、口縁部がヨコナデ後ミガキ、体部がヘラケズリ後ミガキである。内面は、口縁部がヨコナデ後ミガキ、体部がヘラナデ後ミガキである。６は高坏の脚部である。外面はミガキで仕上げられているが、器面に凹凸があり器厚も厚い。７は甕の底部と考えられる。外面は摩耗しているが、ヘラケズリ調整が施されているとみられる。外面にはススが付着している。

2SI-011（第128図、図版17・42・43）

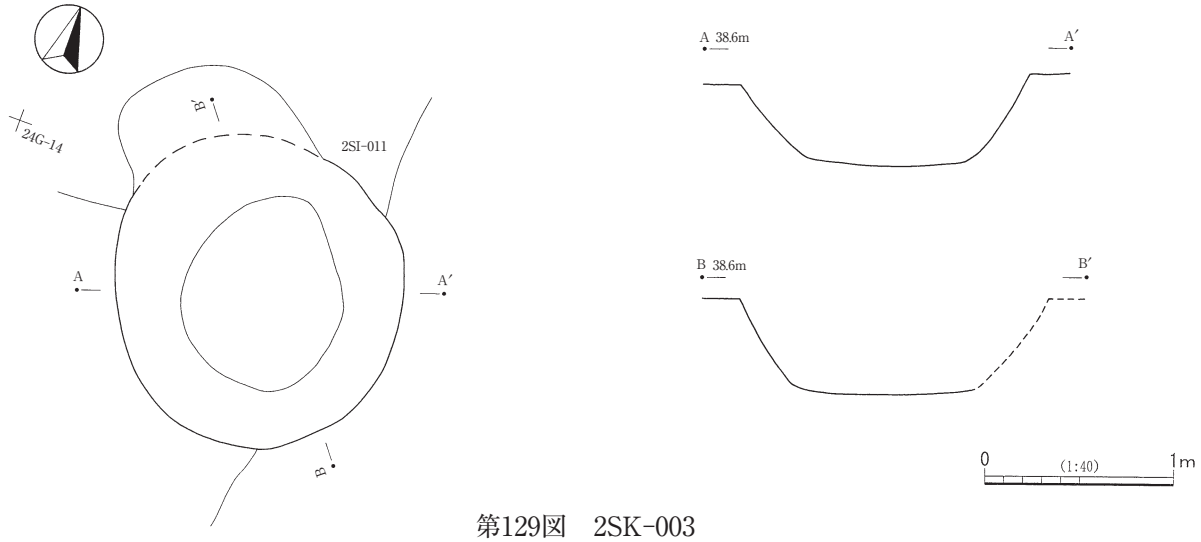
23G-82～85・92～95、24G-02～05・13・14グリッドに所在する。南側に重複する竪穴住居跡2SI-013と南東コーナー付近の土坑2SK-003を切って構築されている。北西コーナー付近は中世の土坑2SK-004に切られている。平面形は、一辺480cmほどの正方形で、主軸方向は、N－５°－Eである。壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは26cmである。壁溝は全周している。床は中央部分を中心に広い範囲で硬化しているが、硬化の度合いはやや低い。床面からは、炉１基とピットが９か所検出された。炉は中央北寄りに位置し、長軸68cm、短軸34cmの不整楕円形を呈するが、深さはほとんどなく、焼土が非常に薄く堆積していた。ピットの床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が44cm、P2が39cm、P3が45cm、P4が34cmで、入口ピットと考えられるP5は39cmである。また、貯蔵穴と考えられるP6は、長軸100cm、短軸62cmの楕円形を呈し、断面は逆台形で深さは42cmである。そのほかのピットの深さは、P7が36cm、P8が31cm、P9が20cmである。住居覆土はローム粒を含む黒褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は、南東コーナー付近から集中して出土した。また、北西コーナー付近の覆土中からは、崩壊して図示できなかったが、枕状の支脚も出土している。

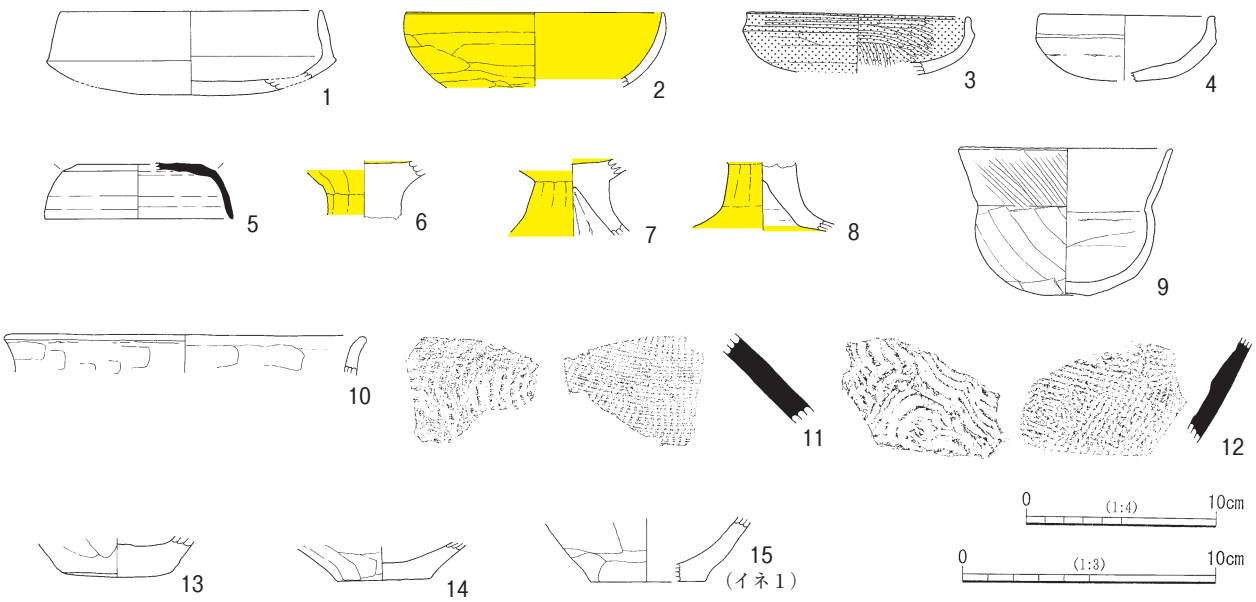
図示した遺物は７点である。１・２は坏である。１はほぼ完形で、内面がやや大きく剥落している。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ後ナデで、内面はナデである。内外面とも赤彩されている。２は口縁部の破片である。調整は１と同様であるが、器面が摩耗しており、赤彩の有無については、内面は確認できるが外面は不明である。３は鉢で、全体の80％程度が遺存している。全体的にややいびつな形状である。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ後粗くミガキが施されている。口縁部の内面は、屈曲部のやや下までがヨコナデ、体部がヘラナデ調整である。内面上部に赤彩が帯状に巡っている。体部内面にイネ（籾殻）の圧痕が１点見つかった。４～７は甕である。４はほぼ完形で、胴部が丸く張る器形である。外面の調整は、口縁部がヨコナデで、胴部がヘラナデである。胴部最大径よりやや上に輪積み痕が残り、胴上部には荒いハケメが見られる。胴部下半にはススも付着している。外面肩部に金属を研いだような擦痕が見られる。５は口縁部～胴部下半及び胴部下半～底部の接合しない２片から復元実測したもので、長胴形の器形である。口縁部は80％程度遺存しているが、底部は30％程度しか遺存していない。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリである。胴中央部から下部にかけて、ススが付着している。６・７は底部で、６は底部の25％程度が遺存している。外面にススが付着している。７は底部の30％程度が遺存している。



第128図　2SI-011と出土遺物



第129図　2SK-003



第130図　遺構外出土古墳時代遺物

２　土坑

2SK-003（第129図、図版17）

24G-04・05・14・15グリッドに所在する。検出状況から、重複する弥生時代の竪穴住居跡2SI-013より新しく、古墳時代の竪穴住居跡2SI-011より古いことが明らかである。北西部を2SI-011の貯蔵穴とみられるピットに切られている。平面形は径150cmほどの円形に復元できる。壁は斜めに立ち上がり、断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは52cmである。覆土は黒褐色土が堆積していた。遺物は出土しておらず時期ははっきりしないが、弥生時代の竪穴住居跡2SI-013と古墳時代の竪穴住居跡2SI-011との切り合い関係から、古墳時代の土坑と推測される。

３　遺構外出土遺物（第130図、図版42・43）

ここでは、該期の遺構ではない場所から出土した古墳時代の遺物について掲載する。それぞれの出土場所は、第５表に示した。

図示した遺物は15点である。１～４は土師器の坏である。１は同一個体と考えられる口縁部の20％程度の破片と底部の50％程度の破片から復元したものである。器面は内外面とも摩耗が著しく、調整痕の観察は困難である。２は口縁部の20％程度が遺存している。器面は摩耗しているが、内外面とも赤彩されている。３も口縁部の20％程度が遺存している。器面は摩耗しているが、内外面とも黒色処理で仕上げられている。４は口縁部の20％程度が遺存し、口唇部はごく僅かしか遺存していない。外面に輪積み痕が見られる。内外面とも器面が摩耗している。

５は須恵器の蓋で、口縁部の15％程度が遺存している。外面天井部には回転ヘラケズリが施される。器面は内外面とも暗灰色、断面は暗赤褐色を呈する。

６～８は土師器の高坏で、いずれも坏部と脚部の接合部のみ完存している。６・７は外面と坏部内面、８は外面と裾部内面が赤彩されている。

９は小型の壺で接合しない破片はあるが、全体の70％程度が遺存している。器面調整は最終的には内外面ともミガキが施されているが、口縁部には内外面ともハケ調整痕が残り、体部～底部はヘラケズリ痕が残る。底部は上げ底気味となっている。

10は土師器甕の口縁部である。接合しない２破片であるが、口縁部の40％程度が遺存している。

11・12は須恵器甕である。11は肩部の破片と考えられる。外面にはカキ目が見られるが、格子状のタタキ目痕も観察される。内面は同心円状の当て具痕が明瞭に残る。12は胴部の破片と考えられる。外面には格子状のタタキ目、内面には同心円状の当て具痕が残る。いずれも器面は灰色～暗灰色を呈し、断面は暗赤褐色を呈している。

13～15は土師器甕の底部と考えられる。13は底部のみ完存する。14は底部の50％程度が遺存している。15は底部の30％程度が遺存している。断面にイネ（籾）の圧痕が１点見つかった。

第５節　奈良・平安時代

検出された奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡１軒、溝状遺構３条である。溝状遺構は全ての調査年次を通して遺構種別記号に「SD」が用いられており、ここでは第１表に基づき、調査順に掲載する。

１　竪穴住居跡

5SI-001（第131図、図版17・44）

36S-32・40～43・51～53・61～63グリッドに所在する。東側は奈良・平安時代の溝状遺構5SD-001に切られている。斜面部のため、東側は削平を受けている。平面形は一辺450cmほどの正方形で、北西辺にはカマドが１基構築されている。主軸方向は、N-23°-Wである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは24cmである。壁溝は全周している可能性が高い。床面は東側の約半分が失われているが、主柱穴と考えられるものが４か所（P1～P4)、入口ピット（P5）や補助柱穴と考えられるピットが３か所検出された。ピットの床面からの深さは、主柱穴と考えられるP1が65cm、P2が63cm、P3が63cm、P4が46cmで、入口ピットと考えられるP5は20cmである。なお、P4のみ他のピットより浅く、主柱穴としては南に寄っている。また、P6は41cm、P7は46cmである。そのほか、壁際には壁柱穴と考えられる径の小さなピットが並んで検出されている。カマドは、山砂で構築された袖の基礎部分と火床部が残存しているのみである。遺構の覆土は、ローム粒を含む暗褐色土の単層であった。

図示した遺物は４点で、床面近くからの出土である。１・２はロクロ成形の土師器坏である。１は口縁部の20％程度の破片である。２は底部の20％程度の破片である。底部は回転糸切り痕の後、回転ヘラケズリが施される。３・４は須恵器甕の胴部破片である。いずれも外面にはタタキ目が見られ、内面はナデとなっているが、胎土の色調が異なり、同一個体ではないと考えられる。

２　溝状遺構

SD-031（第132図）

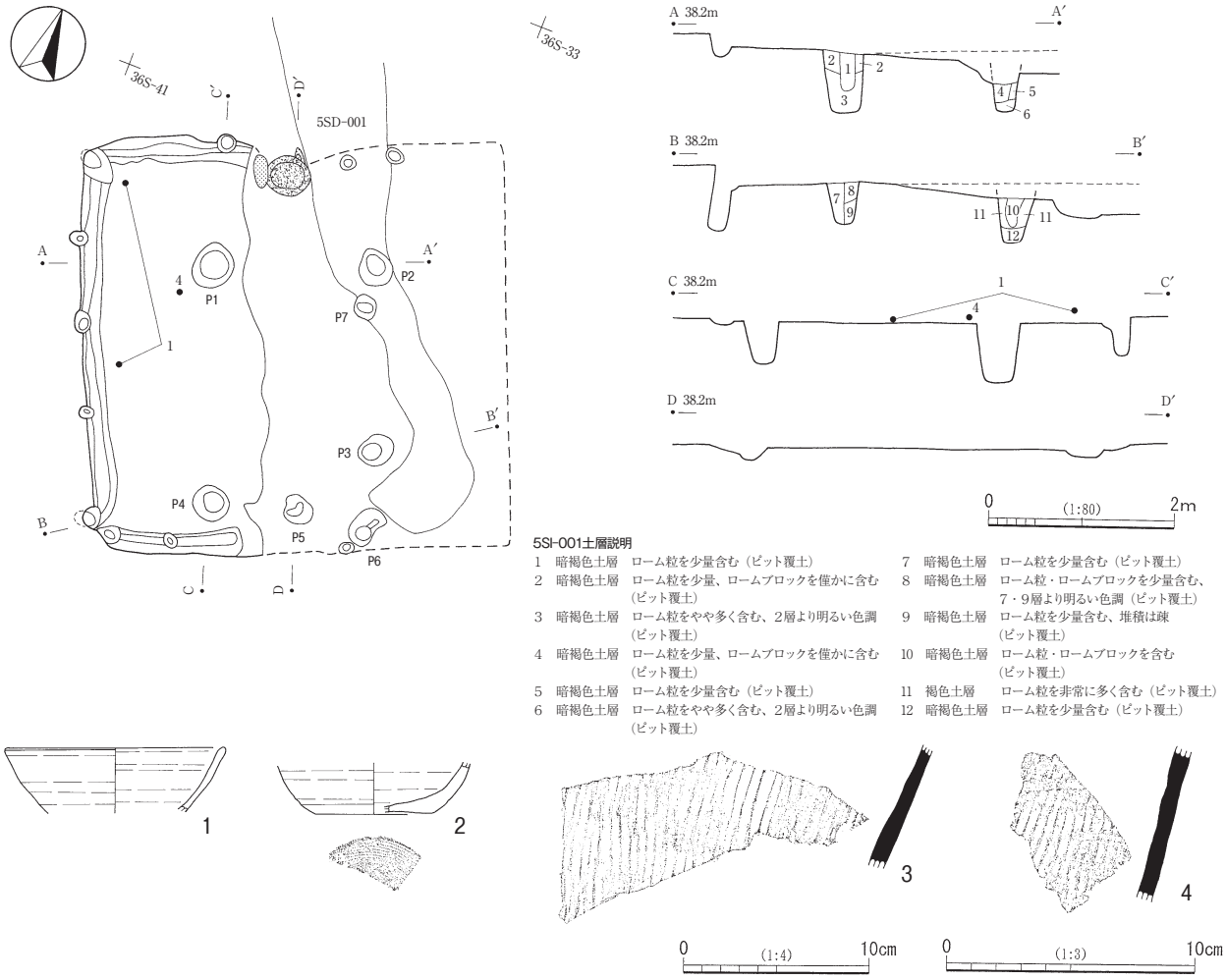
6C-09・19、6D-00・10・11・20・21・31～33グリッドに所在する。弥生時代の竪穴住居跡SI-044を切って構築され、北西－南東方向に延びる。松川を望む台地の北端に位置し、北側は斜面で本調査区外となっている。中・近世の土塁SA-001下から検出された。南東端は削平されており、長さは約9.5ｍで、幅は最大で140cmある。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは最も深い部分で54cmである。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみで、遺構の時期決定は困難であるが、検出状況から奈良・平安時代の所産と判断した。

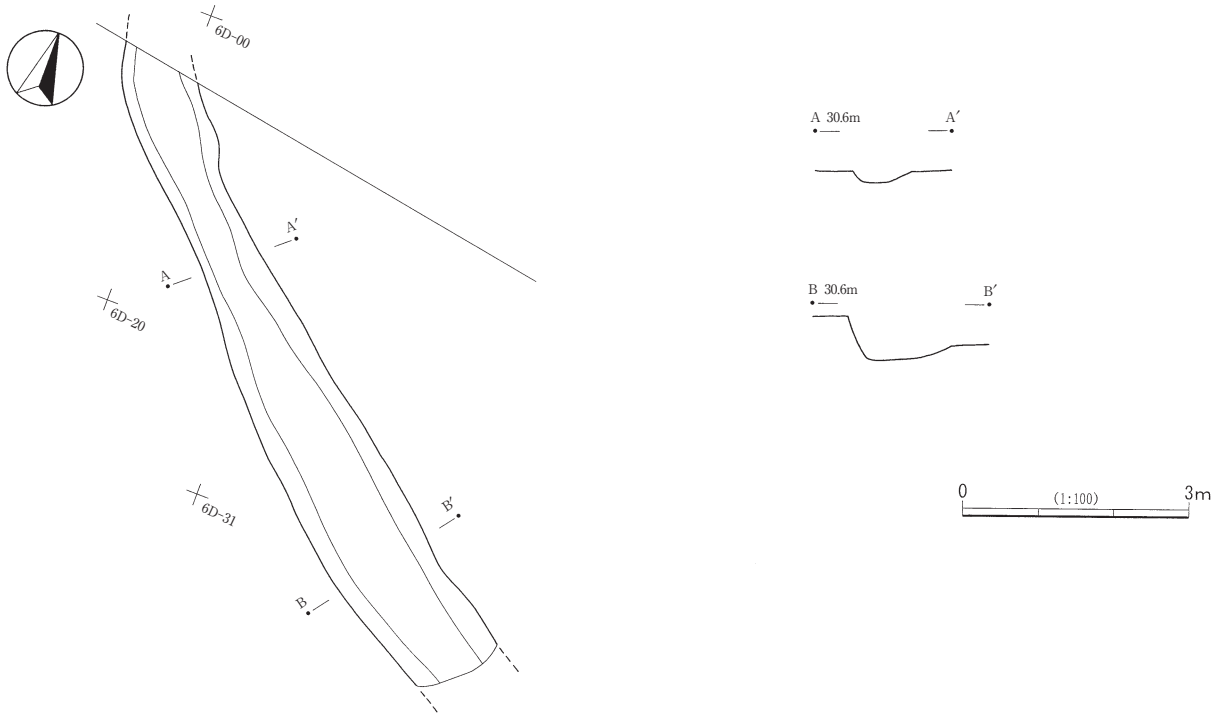
5SD-001（第133図、図版17・43・44）

36S-20・21・31・32・42・52・53グリッドに所在する。斜面に沿うように南北方向に延び、奈良・平安時代の竪穴住居跡5SI-001を切っている。検出された長さは約９ｍで、幅は最も広い部分で74cmである。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは20cm前後である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土の単層である。

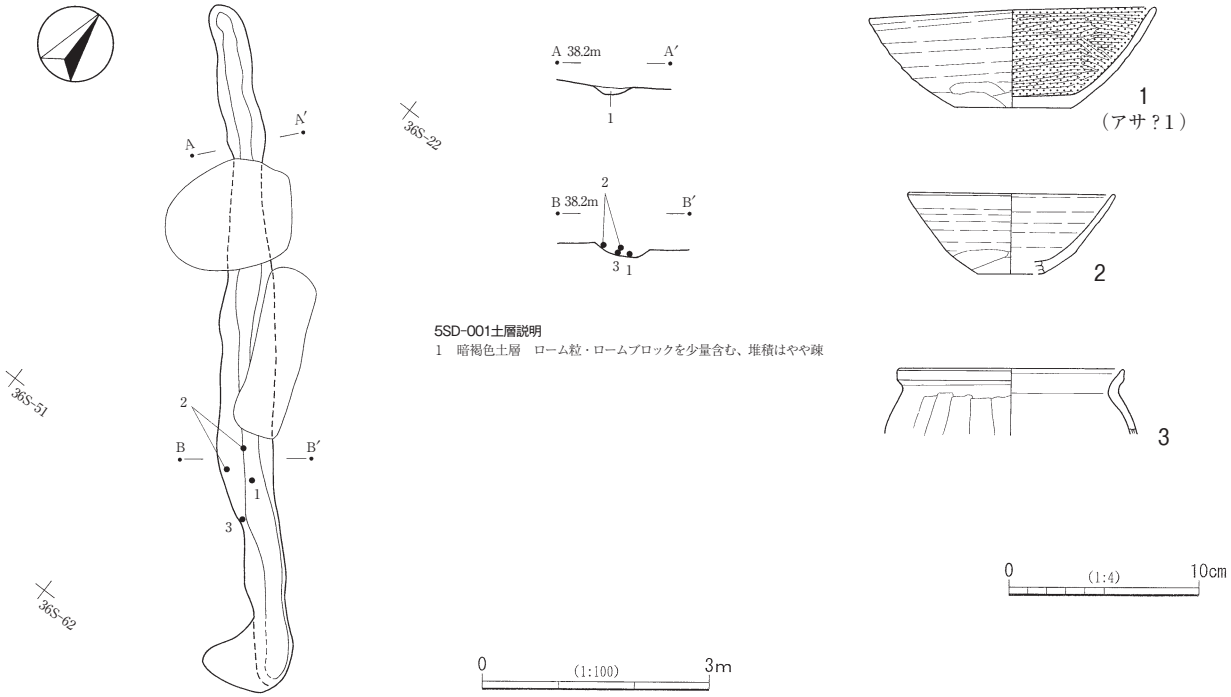
図示した遺物は３点で、いずれも遺構底面からの出土である。１はほぼ完形の坏である。口縁部の一部を僅かに欠損する。ロクロ調整後、外面下端部と底部に手持ちヘラケズリを施し、内面は磨いて黒色処理



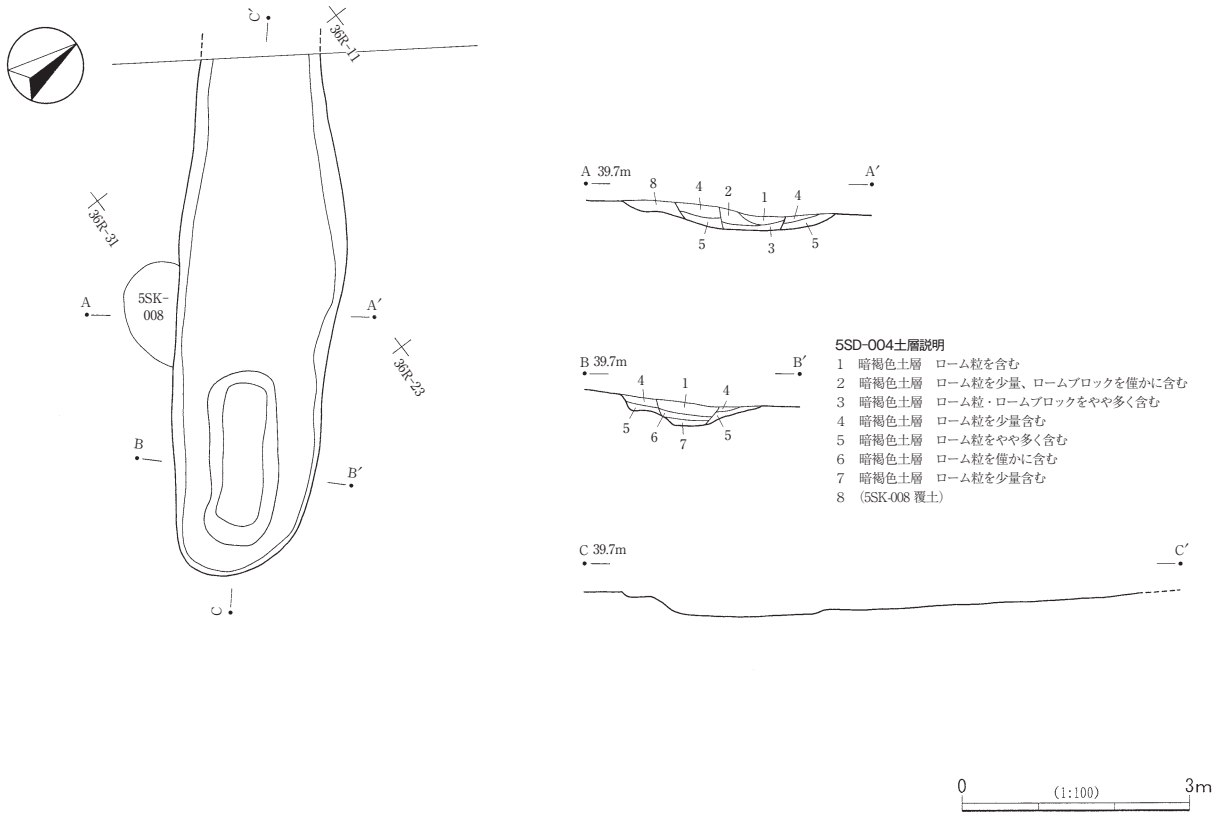
第131図　5SI-001と出土遺物



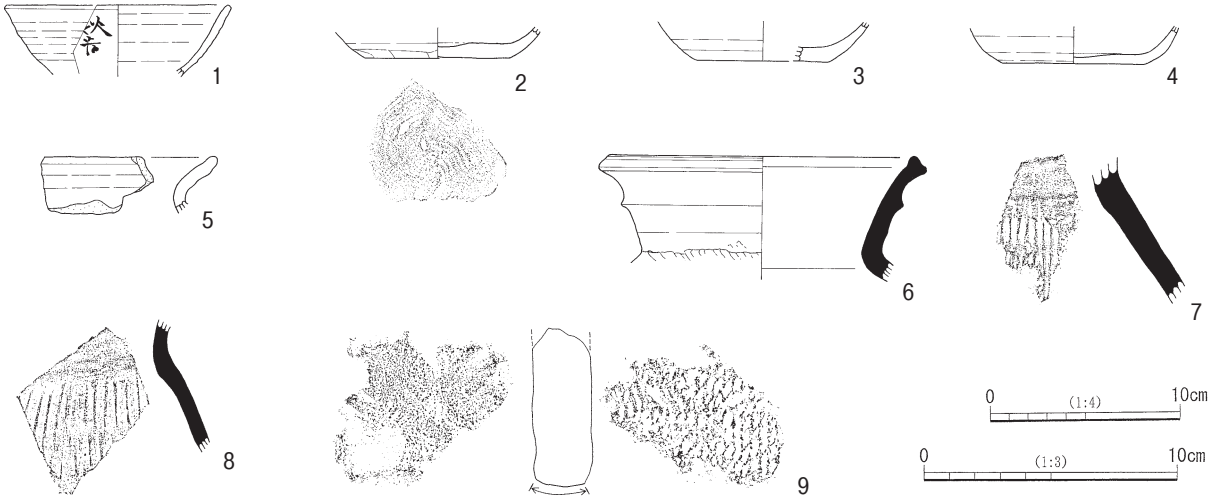
第132図　SD-031



第133図　5SD-001と出土遺物



第134図　5SD-004



第135図　遺構外出土奈良・平安時代遺物

を施している。体部外面にアサ？の圧痕が１点見つかった。２は口縁部の25％程度が遺存している。体部下端部には手持ちヘラケズリが施される。３は甕である。口縁部の15％程度が遺存している。口縁部には稜が見られる。胴部の調整は縦方向のヘラケズリである。

5SD-004（第134図、図版17）

36R-10～12・20～23・31～33グリッドに所在する。西側は調査範囲外となっており、南側で土坑5SK-008と重複する。5SK-008との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しいと判断される。また、東側で土坑状のくぼみが検出されたが、土層断面の観察から当遺構を切って構築されたものと考えられる。溝の長さは約6.9m、幅は220cmである。断面形は緩いU字形である。検出面からの深さは、38cmである。土層断面を観察すると何回か掘り返されている様子も窺えるが、機能は明らかでない。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体をなしている。

遺物は混入品と思われる弥生土器の小破片が少量出土したのみで、時期も明確ではないが、遺構の状況等から奈良・平安時代の遺構と判断した。

３　遺構外出土遺物（第135図、図版43・44）

ここでは、該期の遺構ではない場所から出土した奈良・平安時代の遺物について掲載する。それぞれの出土場所は、第５表に示した。

図示した遺物は９点である。１～４はロクロ成形の土師器坏である。１は口縁部の15％程度が遺存している。外面に比較的明瞭に墨書が認められる。文字は偏の部分が欠損していて判然としないが、「秋首」であろうか。２は底部の50％程度が遺存している。体部下端に手持ちヘラケズリが施される。底部外面は回転糸切りの後、縁辺部にヘラケズリが施される。３は底部の30％程度が遺存している。体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切りとみられる。内面が摩耗している。４は底部の25％程度が遺存している。底部は回転ヘラ切りである。

５は土師器甕の口縁部破片である。調整は内外面ともヨコナデであるが、外面にロクロ目状の弱い稜が

ある。

６～８は須恵器甕である。６は口縁部の破片で、中世の竪穴状遺構の覆土中から出土した。遺存度は僅かである。外面にはヨコナデによって鋭い稜が作り出されている。頸部にはタタキ目かハケ目とみられるものが観察される。７・８は胴上部の破片で、ともに外面にタタキ目が見られる。７は内外面が黒褐色、断面が褐色を呈し、８は内外面、断面ともに褐色を呈している。

９は平瓦の破片である。布目痕と縄叩きが見られる。胎土に白色粒子を少量含む。色調は明褐色を呈し、焼成は不良である。破断面が平滑になっており、砥石として転用されていたと考えられる。

注１　森嶋秀一　2009「栃木県向山遺跡における縄文時代のチャート採掘活動について（予察）－タガネあるいはクサビの機能を持つと思われる石器の分析を中心に－」『野州考古学論攷－中村紀男先生追悼論集－』中村紀男先生追悼論集刊行会

森嶋秀一　2009「栃木県向山遺跡出土のタガネ状石器について」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』第26号　栃木県立博物館

第２表　　石器集中地点（28K-62グリッドほか）出土石器一覧表

挿図番号	調査年度	出土グリッド	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
第 11 図 1	H19	28K-73	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	29	28	5	4.2	38.202	
第 11 図 2	H19	28K-62	剥片	硬質頁岩	47	37	8	20.3	38.398	
第 11 図 3	H19	28K-62	剥片	ガラス質黒色安山岩	32	43	5	10.5	38.216	
第 11 図 4	H19	28K-72	剥片	ガラス質黒色安山岩	32	36	8	6.8	38.270	
第 11 図 5	H19	28K-62	剥片	硬質頁岩	25	25	9	3.9	38.221	
第 11 図 6	H19	28K-53	剥片	硬質頁岩	27	26	9	6.3	38.415	
第 11 図 7	H19	28K-63	剥片	緑色凝灰岩	18	37	7	4.3	38.359	
第 11 図 8	H19	28K-63	剥片	硬質頁岩	20	19	5	1.9	38.259	
第 11 図 9	H19	28K-52	剥片	硬質頁岩	16	26	24	7.7	38.517	
第 11 図 10	H19	28K-62	剥片	硬質頁岩	12	24	4	0.9	38.314	
第 11 図 11	H19	28K-63	剥片	硬質頁岩	15	14	3	0.5	38.190	
第 11 図 12	H19	28K-62	剥片	硬質頁岩	18	15	4	0.8	38.268	
第 11 図 13	H19	28K-62	剥片	硬質頁岩	9	13	2	0.1	38.365	

第３表　　単独出土石器一覧表

挿図番号	調査年度	出土グリッド・遺構	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
第 12 図 1	H21	不明	小型尖頭器	珪質頁岩	36	16	5	2.8		
第 12 図 2	H19	25H-79	台形様石器	ガラス質黒色安山岩	48	32	9	11.8		Ⅸ層出土（一括）
第 12 図 3	H22(4)	4SK-036	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	30	40	6	8.8		
第 12 図 4	H21-3	2SI-011	剥片	黒曜石	18	7	2	0.2		
第 12 図 5	H21-1	6D-21	剥片	流紋岩	32	17	4	2.1		
第 12 図 6	H19	25G-24	剥片	ガラス質黒色安山岩	30	18	4	2.2	38.320	Ⅶ層出土
第 12 図 7	H19	26H-13	剥片	チャート	37	17	5	2.9		
第 12 図 8	H22(4)	4SD-017	剥片	チャート	72	47	11	42.9		
第 12 図 9	H21-1	4トレンチ	打製石斧	ホルンフェルス	93	56	24	139.7		6C-78グリッド付近

第４表　　掲載石器・石製品（旧石器以外）一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第 22 図 1	H21-3	2SH-002（24H-10）	SH-002	有舌尖頭器	ガラス質黒色安山岩	37	13	3	1.8	
第 22 図 2	H21-1	6D-21	6D-21	尖頭器	チャート	22	19	7.0	2.2	
第 22 図 3	H20	SI-027（22F-48付近）	SI-027	石鏃	黒曜石	19	17	4	0.8	
第 22 図 4	H20	SD-012（23F・23G・23Hグリッド付近）	SD-012	石鏃	黒曜石	15	21	5	1.1	
第 22 図 5	H20	SI-018（22F-24グリッド付近）	SI-018	石錐	黒曜石	16	10	4	0.4	
第 22 図 6	H22(4)	4SK-055(10D-54付近)	SK-055	剥片	チャート	43	34	15	18.5	
第 22 図 7	H21-1	6C-40～51	6C-40～51	二次加工のある剥片	チャート	53	47	15	47.3	
第 22 図 8	H19	SI-006（25G-43付近）	SI-006	剥片	ホルンフェルス	67	50	23	104.7	
第 22 図 9	H19	SI-002（24F-99付近）	SI-002	剥片	黒曜石	17	26	14	5.4	
第 22 図 10	H19	SI-012（30L-27付近）	SI-012	石核	チャート	48	63	24	102.2	
第 22 図 11	H21-1	SI-036B（6D-25付近）	SI-036	石核	チャート	36	53	21	41.9	
第 22 図 12	H22(4)	4SK-042(12D-06付近)	SK-042	敲石	流紋岩	89	37	37	151.6	
第 22 図 13	H22(4)	4SK-069(10D-57付近)	SK-069	磨石類	石英斑岩	133	61	51	631.6	
第 22 図 14	H20	SI-016（22F-98付近）	SI-016	磨石類	安山岩	42	82	39	178.6	
第 22 図 15	H27	7SD-006（24G）	7SD-006	磨石類	砂岩	89	60	46	357.5	
第 22 図 16	H22(4)	4SK-103（14D-65）	SK-103	磨石類	安山岩	105	101	64	776.7	
第 22 図 17	H20	20E-27	20E-27	磨石類	石英斑岩	95	65	40	348.2	
第 22 図 18	H19	SI-008（24G-85付近）	SI-008	二次加工のある礫	流紋岩	59	20	10	18.8	
第 22 図 19	H24(6)	4SD-009（12E・13E・14D付近）	SD-009	楔形石器	流紋岩	120	74	42	405.0	大型で「タガネ状石器」に類似
第 23 図 20	H20	SK-073（20E-08付近）	SK-073	台石	砂岩	104	95	50	820.4	
第 23 図 21	H21-1	2トレンチ（6D）	2トレンチ	台石	石英斑岩	214	127	100	4120.0	
第 23 図 22	H19	SD-003（25G）	SD-003	台石	石英閃緑岩	181	118	111	3690.0	
第 37 図 1	H19	SI-011	SI-011	砥石	砂岩	57	57	12	56.7	
第 74 図 10	H21-3	2SI-020	SI-020	敲石	流紋岩	127	65	57	178.5	炉内出土
第 78 図 4	H21-3	2SI-025	SI-025	砥石	砂岩	79	59	58	142.6	
第 104 図 21	H21-1	SS-006	SS-002	砥石	砂岩	69	57	14	59.1	
第 104 図 22	H21-1	SS-006	SS-002	砥石	砂岩	42	25	17	28.9	
第 125 図 90	H21-1	SD-027	SD-027	扁平片刃石斧	蛇紋岩	48	50	15	72.3	中・近世堀一括
第 125 図 91	H20	20E-25	20E-25	砥石	砂岩	86	84	47	427.0	

第５表　掲載土器観察表

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量：cm　（）復元・現存値			色調		胎土	焼成	調整		赤彩	種実圧痕			備考
							口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		位置		種実種類	
第 21 図 1	H22 (4)	4SK-036 (13D-09 付近)	SK-036	縄文土器	深鉢	縄文早期			(3.3)	淡褐色	淡褐色	砂粒（多）	○	撚糸文	ナデ					内外面摩耗
第 21 図 2	H22 (4)	4SK-036 (13D-09 付近)	SK-036	縄文土器	深鉢	縄文早期			(2.1)	褐色	褐色	白色粒子	○	撚糸文	ナデ					
第 21 図 3	H22 (4)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	縄文土器	深鉢	縄文早期			(3.5)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）、砂粒（少）	○	撚糸文	ナデ					
第 21 図 4	H22 (3)	3SI-027	SI-027	縄文土器	深鉢	縄文早期			(4.1)	明褐色	暗褐色	白色粒子、砂粒（多）	○	撚糸文	ナデ		断面		不明	
第 21 図 5	H24 (6)	6SK-128 (14E-01 付近)	SK-128	縄文土器	深鉢	縄文早期			(1.6)	黒褐色	暗褐色	白色粒子	○	撚糸文	ナデ					外面スス付着
第 21 図 6	H24 (6)	6SK-126 (14E-15 付近)	SK-126	縄文土器	深鉢	縄文早期			(2.8)	にぶい橙色	暗褐色	白色粒子、砂粒（多）	○	撚糸文	ナデ					
第 21 図 7	H22 (4)	4SD-023 (11D・11E)	SD-023	縄文土器	深鉢	縄文早期			(3.7)	褐色	明褐色	白色粒子（多）、砂粒	◎	沈線文	ミガキ					
第 21 図 8	H22 (4)	4SD-023 (11D・11E)	SD-023	縄文土器	深鉢	縄文早期			(2.8)	褐色	褐色	砂粒	○	沈線文	ミガキ					
第 21 図 9	H21 1	SD-027	SD-027	縄文土器	深鉢	縄文前期			(3.0)	暗褐色	暗褐色	繊維	○	縄文	ナデ					
第 21 図 10	H21 1	SD-027	SD-027	縄文土器	深鉢	縄文前期			(6.0)	暗褐色	暗褐色	砂粒、繊維	○	縄文	ナデ					
第 21 図 11	H21 1	SD-029 (6C-20 付近)	SD-029	縄文土器	深鉢	縄文前期			(2.7)	赤褐色	黒褐色	繊維、砂粒（少）	○	縄文	ミガキ					
第 21 図 12	H21 1	SD-029 (6C-20 付近)	SD-029	縄文土器	深鉢	縄文前期			(4.8)	暗褐色	褐色	繊維、白色粒子	○	縄文	ナデ					
第 21 図 13	H21 1	1トレンチ	T1-1	縄文土器	深鉢	縄文前期			(3.8)	暗褐色	暗褐色	繊維	○	刻み、縄文	ナデ					
第 21 図 14	H21 1	SD-029 (6C-20 付近)	SD-029	縄文土器	深鉢	縄文前期		(7.4)	(3.6)	暗褐色	黒褐色	繊維（多）	○	ナデ	ナデ					
第 21 図 15	H22 (4)	13C-08 (4SK-110)	SK-110	縄文土器	深鉢	縄文前期			(2.7)	赤褐色	黒褐色	白色粒子（少）	○	貝殻腹縁文	ナデ					
第 21 図 16	H21 1	6C-60 ～ 71	6C-60～71	縄文土器	深鉢	縄文前期			(2.0)	黒褐色	黒褐色	繊維、砂粒（少）	○	刻み、沈線	ナデ					
第 21 図 17	H22 (3)	2SD-001 (24G・24H)	SD-001	縄文土器	深鉢	縄文後期			(4.1)	明褐色	黒褐色	砂粒	○	隆帯、沈線	ミガキ					
第 21 図 18	H22 (3)	3SI-026 (23F-90)	SI-026	縄文土器	深鉢	縄文後期			(3.6)	明褐色	黒褐色	砂粒	○	隆帯、縄文、沈線	ミガキ					
第 21 図 19	H20	1トレンチ	T1	縄文土器	深鉢	縄文後期			(3.5)	褐色	褐色	砂粒（多）	○	縄文、沈線、ナデ	ナデ					
第 21 図 20	H19	SD-005 (29J ～ 31J)	SD-005	縄文土器	深鉢	縄文後期			(8.8)	明褐色	明褐色	白色粒子（多）、砂粒	◎	ミガキ	ミガキ、沈線					
第 21 図 21	H24 (6)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	縄文土器	深鉢	縄文後期			(3.9)	褐色	暗褐色	砂粒、白色粒子	○	隆帯、縄文、沈線	ミガキ					
第 21 図 22	H24 (6)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	縄文土器	深鉢	縄文後期			(4.5)	褐色	暗褐色	砂粒（少）	○	縄文、沈線	ミガキ					
第 21 図 23	H22 (4)	4SD-038	SD-038	縄文土器	深鉢	縄文晩期			(3.9)	褐色	暗褐色	砂粒	○	縄文、ミガキ	ミガキ					
第 21 図 24	H22 (4)	4SD-017	SD-017	縄文土器	深鉢	縄文晩期			(4.9)	褐色	褐色	砂粒、白色粒子（多）	○	沈線、ミガキ	ミガキ					
第 24 図 1	H19	SI-001	SI-001	弥生土器	鉢	弥生後期	(18.0)		(6.7)	橙色	橙色	赤色粒子（多）	○	ミガキ	ヘラナデ後ミガキ		胴部	内面	ニブトコ?	
第 24 図 2	H19	SI-001	SI-001	弥生土器	甕	弥生後期			(2.3)	暗褐色	暗褐色	赤色粒子	○	押捺、ナデ	ナデ					外面スス付着
第 24 図 3	H19	SI-001	SI-001	弥生土器	甕	弥生後期			(2.5)	黒褐色	黒褐色	白色粒子	○	押捺、ハケ調整	ハケ調整					外面スス付着
第 25 図 1	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期	(22.0)		(6.6)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子（多）	○	縄文、棒状浮文、刻み、ミガキ	ミガキ					二次被熱
第 25 図 2	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(3.5)	淡褐色	淡褐色	赤色粒子（多）、白色粒子（多）	○	縄文、棒状浮文、刻み	ミガキ					
第 25 図 3	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期	8.5	5.2	12.9	橙色	橙色	赤色粒子、白色針状物質、白色粒子（少）	◎	ヨコナデ、ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ、ヘラナデ		口縁部	内面	イネ	
第 25 図 4	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期	(17.3)	6.8	8.8	橙色	橙色	赤色粒子（少）、白色粒子（少）	○	ミガキ、ヘラケズリ	ヘラナデ後雑なミガキ		体部 底部 底部	外面 外面 外面	アサ 種実ではない 種実ではない	
第 25 図 5	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期	(18.7)		(6.0)	明赤褐色	明赤褐色	赤色粒子（少）、白色粒子（少）、白色針状物質（少）	◎	ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					
第 25 図 6	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期		(5.6)	(2.5)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子（少）	○	ミガキ	ナデ					外面スス付着、内面剥落
第 25 図 7	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期			(3.6)	淡褐色	淡褐色	砂粒（多）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 25 図 8	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期			(2.3)	明褐色	明褐色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	ナデ	ヨコナデ					外面スス付着
第 25 図 9	H19	SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期	(20.9)	8.0	18.1	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子（多）、砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	押捺、ヘラケズリ後ミガキ	ヘラナデ、ミガキ		頸部付近	外面	種実ではない	
第 26 図 1	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	壺	弥生後期	18.0		(12.1)	赤褐色	赤褐色	白色粒子（多）、赤色粒子（多）	○	縄文、刻み、ミガキ、S字状結節文	ミガキ、ヘラナデ	内外面				内外面スス付着、器台転用
第 26 図 2	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	壺	弥生後期	15.8		(9.9)	淡褐色	明褐色	砂粒（多）	△	縄文、刻み	ミガキ、ヘラナデ					器面摩耗、器台転用
第 26 図 3	H19	SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生後期			(8.2)	赤 褐 色 ～ 黒褐色	褐色	赤色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ、S字状結節文、縄文	ナデ	外面				
第 26 図 4	H19	SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生後期			(12.8)	明赤褐色	橙色	白色粒子（多）、赤色粒子（多）	○	羽状縄文、ミガキ、S字状結節文	ヘラナデ	外面				
第 26 図 5	H19	SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生後期			(2.6)	暗褐色	暗赤褐色	砂粒（多）、赤色粒子	○	縄文、刻み	ミガキ	内面				
第 26 図 6	H19	SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生後期			(1.7)	暗赤褐色	明赤褐色	砂粒（多）	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 27 図 7	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.5)	赤褐色	赤褐色	白色粒子、赤色粒子	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 27 図 8	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	鉢	弥生後期		(7.0)	(1.9)	淡褐色	赤褐色	赤色粒子（少）	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 27 図 9	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	甕	弥生後期	(22.5)	7.0	19.7	褐色～黒褐色	暗褐色	赤色粒子（多）	○	押捺、ナデ、ミガキ	ミガキ		胴部	外面	アサ	胴部に焼成後穿孔
第 27 図 10	H19	SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生後期		(8.5)	(2.2)	黒色	にぶい黄橙色	赤色粒子（多）、白色針状物質	○	ヘラケズリ	ミガキ					
第 27 図 11	H27 (7)	SI-003	7SI-001	弥生土器	台付甕	弥生後期		(9.0)	(3.0)	黒褐色	明褐色	赤色粒子（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 29 図 1	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期	(21.7)		(1.7)	明褐色	赤褐色	白色粒子（多）	○	ナデ、棒状浮文、刻み	ミガキ	内面	口縁部	外面	アワ	
第 29 図 2	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期			(8.2)	橙色	橙色	砂粒（多）	○	ミガキ、円形浮文、縄文、S字状結節文	ミガキ、ナデ	内外面				
第 29 図 3	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期			(5.4)	暗赤褐色	褐色	白色粒子（多）、赤色粒子	○	縄文、円形浮文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	外面				外面摩耗
第 29 図 4	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期			(3.0)	褐色	暗褐色	白色粒子	○	ナデ、ミガキ	ミガキ					
第 29 図 5	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期		7.8	(2.8)	橙色	橙色	白色粒子（少）	○	ミガキ	ナデ	外面				底部外面・周縁部摩耗
第 29 図 6	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期		(10.5)	(2.2)	赤褐色	赤褐色	白色粒子（多）	○	ミガキ	ナデ					
第 29 図 7	H19	SI-004	SI-004	弥生土器	無頸壺	弥生後期	(16.5)		(4.0)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白色粒子（少）	○	ミガキ	ヘラナデ、ミガキ					

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 29 図 8	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(6.0)	にぶい赤褐色	黒褐色	白色粒子（多）	○	ミガキ、押捺	杯部ミガキ、脚部ナデ	内外面				脚破断面摩滅
第 29 図 9	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(3.3)	明褐色	明褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ミガキ	ナデ	外面				
第 29 図 10	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(3.6)	褐色	明褐色	砂粒（多）、白色粒子（多）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					
第 29 図 11	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	鉢	弥生後期	(18.1)		(6.4)	橙色	橙色	白色粒子（多）、赤色粒子（少）	○	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 29 図 12	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	甕	弥生後期	(20.8)		(8.9)	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子（多）、白色針状物質	○	押捺、ヘラナデ	ミガキ					外面スス付着
第 29 図 13	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	甕	弥生後期			(4.5)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色針状物質、白色粒子（少）	○	ナデ	ヘラナデ後ミガキ					
第 29 図 14	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	ミニチュア（鉢）	弥生後期	8.2	4.3	5.0	にぶい褐色	にぶい褐色	赤色粒子（多）、白色粒子（多）	○	ミガキ	ミガキ		体部	外面	イネ	
第 29 図 15	H19		SI-004	SI-004	弥生土器	ミニチュア（壺）	弥生後期		2.0	(3.3)	褐色	褐色	白色粒子（多）	○	ナデ、ヘラ描文	ナデ					外面ヘラ描文
第 30 図 1	H19		SI-005	SI-005	弥生土器	壺	弥生後期			(5.1)	橙色	橙色	白色粒子（少）	○	縄文、棒状浮文、ミガキ	ミガキ	内外面				内面摩耗
第 30 図 2	H19		SI-005	SI-005	弥生土器	壺	弥生後期	(6.8)		(3.1)	にぶい褐色	にぶい褐色	赤色粒子、白色針状物質	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 30 図 3	H19		SI-005	SI-005	弥生土器	鉢	弥生後期	(16.8)	5.5	7.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	赤色粒子（多）、白色粒子（少）	○	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ後ミガキ					
第 30 図 4	H19		SI-005	SI-005	弥生土器	蓋	弥生後期			(3.6)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	透明砂粒、白色粒子（多）	○	ナデ、S字状結節文、縄文、ミガキ	ナデ	外面				
第 30 図 5	H19		SI-005	SI-005	弥生土器	甕	弥生後期		(7.0)	(2.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質	○	ヘラケズリ	ミガキ					
第 31 図 1	H19		SI-006	SI-006	弥生土器	壺	弥生後期			(1.4)	暗褐色	暗褐色	赤色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	縄文、刻み	ミガキ					
第 32 図 1	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	壺	弥生後期			(2.7)	明褐色	明褐色	白色粒子、白色針状物質	○	縄文	ミガキ	内面				
第 32 図 2	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	壺	弥生後期		(11.1)	(2.0)	橙色	橙色	白色・黒色粒子（多）	△	ヘラナデ後ミガキ	不明（剥落）	外面				内面剥落
第 32 図 3	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	鉢	弥生後期	20.5		(10.7)	橙色	橙色	赤色・白色粒子（多）	○	ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ					
第 32 図 4	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	甕	弥生後期	(21.8)		(17.6)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色・黒色粒子（多）	○	押捺、ヘラナデ	ヘラナデ					外面スス付着、内面剥落
第 32 図 5	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	甕	弥生後期	10.7	5.1	13.2	黒褐色	黒褐色	砂粒（少）	○	押捺、ナデ、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					外面スス付着
第 32 図 6	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	甕	弥生後期			(3.8)	明褐色	にぶい黄褐色	白色・黒色粒子（多）	○	押捺、ナデ	ヘラナデ					
第 32 図 7	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	甕	弥生後期			(8.4)	にぶい褐色	黒褐色	白色粒子（少）	○	ヘラケズリ	ナデ					内面コゲ付着
第 32 図 8	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	器台	弥生後期	9.4		(5.6)	にぶい褐色	にぶい褐色	黄褐色赤色粒子(多)	○	ヘラケズリ後ミガキ	ナデ					
第 32 図 9	H19		SI-007	SI-007	弥生土器	ミニチュア（鉢）	弥生後期	(7.8)	(4.2)	3.9	明赤褐色	明赤褐色	白色粒子（少）	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					
第 33 図 1	H27	(7)	SI-008	7SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(2.5)	明褐色	明褐色	白色粒子	○	縄文、押捺、ナデ	ミガキ					
第 33 図 2	H27	(7)	SI-008	7SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期			(2.9)	褐色～黒褐色	暗褐色	赤色粒子（少）、白色粒子（少）	○	ナデ、ミガキ	ミガキ					
第 33 図 3	H27	(7)	SI-008	7SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期			(2.5)	赤褐色	赤褐色	白色粒子（少）	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 33 図 4	H19		SI-008	SI-008	弥生土器	甕	弥生後期		(6.4)	(5.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ヘラケズリ後ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					
第 33 図 5	H27	(7)	SI-008	7SI-002	弥生土器	甕	弥生後期		(9.0)	(2.9)	暗褐色	暗褐色	砂粒	○	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					内面コゲ付着
第 34 図 1	H19		SI-009	SI-009	弥生土器	壺	弥生後期			(4.0)	明褐色	赤褐色	白色粒子（少）	○	縄文	ミガキ	内面				
第 35 図 1	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期	(14.1)		(11.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（多）、赤色粒子（多）	○	縄文、刺突、ミガキ	ミガキ、ナデ					器面摩耗
第 35 図 2	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期	(18.5)		(4.4)	橙色	橙色	白色粒子（少）、白色針状物質（少）	◎	S字状結節文、縄文、押捺、ミガキ	ミガキ					
第 35 図 3	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期			(3.0)	明褐色	明褐色	砂粒	○	縄文	ヨコナデ後ミガキ					
第 35 図 4	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期			(3.5)	橙色	橙色	白色粒子（少）	○	縄文、S字状結節文、ヘラ描文、円形浮文	ナデ、ヘラナデ		肩部	外面	イネ	器台転用
第 35 図 5	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期			(16.8)	褐色	褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（多）、赤色粒子（多）	○	ミガキ	ヘラナデ	外面	胴部	内面	イネ	内面剥落
第 35 図 6	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期		10.0	(33.1)	にぶい橙色	明赤褐色	赤色粒子（多）、白色粒子	○	縄文、S字状結節文、ヘラナデ後ミガキ	ナデ					胴部外面に籠目、外面スス付着
第 36 図 7	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	鉢	弥生後期	21.8	7.2	11.8	赤褐色	赤褐色	赤色粒子（少）	○	ミガキ	ミガキ	内外面	体部	内面	イネ	二次被熱、器面剥落
第 36 図 8	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	甕	弥生後期	21.1	7.4	19.0	橙色	橙色	白色粒子（少）	○	押捺、ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ後ミガキ					胴下部焼成後穿孔、外面スス付着
第 36 図 9	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	甕	弥生後期	(20.0)	(8.0)	20.2	橙色	橙色	赤色粒子（少）、白色粒子（少）	○	刻み、ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ後ミガキ					二次被熱、外面スス付着
第 36 図 10	H19		SI-010	SI-010	弥生土器	甕	弥生後期			(4.3)	明褐色	褐色	砂粒、白色針状物質	○	ナデ	ミガキ					口縁部破断面摩滅
第 38 図 1	H19		SI-012	SI-012	弥生土器	鉢	弥生後期	(18.8)		(6.9)	暗赤褐色	暗赤褐色	赤色粒子	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ	内外面				
第 38 図 2	H19		SI-012	SI-012	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.8)	明褐色	明褐色	白色粒子、赤色粒子	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 38 図 3	H19		SI-012	SI-012	弥生土器	壺	弥生後期		9.0	(1.6)	暗赤褐色	赤褐色	白色粒子、赤色粒子	○	ヘラナデ後ミガキ	ナデ	外面				
第 38 図 4	H19		SI-012	SI-012	弥生土器	壺	弥生後期		(14.0)	(2.4)	にぶい褐色	にぶい褐色	赤色・白色・黒色粒子	○	ヘラナデ後ミガキ	ナデ? (コゲ)					内面コゲ付着
第 38 図 5	H19		SI-012	SI-012	弥生土器	甕	弥生後期		5.0	(1.7)	明赤褐色	明赤褐色	白色・黒色粒子	○	ヘラケズリ	ナデ					
第 40 図 1	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	壺	弥生後期	130.0	5.8	20.9	にぶい橙色	にぶい赤褐色	白色粒子、赤色粒子、白色針状物質	○	縄文、棒状浮文、円形浮文、菱形文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	内外面				二次被熱、外面スス付着、内面剥落
第 40 図 2	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	壺	弥生後期			(13.7)	黒褐色	暗赤褐色	白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ、縄文、S字状結節文	ヘラナデ					二次被熱、外面スス付着
第 40 図 3	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	壺	弥生後期			(2.0)	暗褐色	暗赤褐色	赤色粒子（少）、白色針状物質（多）	○	ナデ、押捺	ミガキ	内面				
第 40 図 4	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	壺	弥生後期			(2.2)	褐色	褐色	白色粒子（多）	○	ナデ、ミガキ	ヘラナデ					
第 40 図 5	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	鉢	弥生後期	(21.1)		(4.8)	橙色	赤色	赤色粒子、白色粒子	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ	内面				
第 40 図 6	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	鉢	弥生後期	(18.0)		(6.1)	にぶい赤褐色	暗赤褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ナデ後ミガキ	ミガキ					

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値			色調		胎土	焼成	調整		赤彩	種実圧痕			備考
								口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		位置		種実種類	
第 40 図 7	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	甕	弥生後期	17.1	7.0	16.9	灰黄	にぶい赤褐色	赤色粒子、白色粒子	○	押捺、ナデ	ヘラナデ後ミガキ					外面スス付着
第 40 図 8	H19		SI-013	SI-013	弥生土器	甕	弥生後期		7.2	(1.5)	にぶい赤褐色	黒色	白色粒子	○	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					内面コゲ
第 42 図 1	H20		SI-015	SI-015	弥生土器	壺	弥生後期		(6.6)	(5.5)	橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子（少）、小礫	○	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 42 図 2	H20		SI-015	SI-015	弥生土器	壺	弥生後期		6.6	(2.3)	橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子（少）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					底部周縁部摩滅
第 43 図 1	H20		SI-016	SI-016	弥生土器	壺	弥生後期	17.5		(7.5)	明赤褐色	明赤褐色	赤色粒子、白色粒子、砂粒（多）	○	ナデ、棒状浮文、円形浮文、縄文、S字状結節文	雑なミガキ、ヘラナデ	内面				
第 43 図 2	H20		SI-016	SI-016	弥生土器	壺	弥生後期		8.0	(8.2)	赤褐色	赤褐色	白色粒子（少）	○	ミガキ	ヘラナデ	外面				底部周縁部摩滅
第 43 図 3	H20		SI-016	SI-016	弥生土器	壺	弥生後期		5.6	(14.1)	にぶい褐色	にぶい褐色	黄褐色粒子（多）	○	ミガキ	ヘラナデ					外面剥落
第 43 図 4	H20		SI-016	SI-016	弥生土器	甕	弥生後期		(6.8)	(2.5)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	赤色粒子（多）	△	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 43 図 5	H20		SI-016	SI-016	弥生土器	甕	弥生後期		(7.6)	(1.6)	にぶい褐色	褐灰色	赤色粒子（多）	△	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 44 図 1	H20		SI-017	SI-017	弥生土器	壺	弥生後期			(7.8)	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子	○	ミガキ、S字状結節文、縄文、円形浮文	ミガキ、ヘラナデ	内外面				口縁部破断面摩滅
第 44 図 2	H20		SI-017	SI-017	弥生土器	鉢	弥生後期	(21.5)	(8.6)	8.0	赤褐色	にぶい赤褐色	黒色粒子（多）、白色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ	外面				
第 44 図 3	H20		SI-017	SI-017	弥生土器	甕	弥生後期			(4.4)	にぶい橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	△	ナデ	ヘラナデ					
第 44 図 4	H20		SI-017	SI-017	弥生土器	甕	弥生後期			(5.8)	明赤褐色	橙色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	△	ナデ	ヘラナデ					
第 45 図 1	H20		SI-018	SI-018	弥生土器	壺	弥生後期			(5.0)	にぶい黄褐色	黒褐色	白色粒子（少）	○	ミガキ、縄文、沈線	ヘラナデ					
第 45 図 2	H20		SI-018	SI-018	弥生土器	甕	弥生後期	(19.6)		(4.1)	明赤褐色	明赤褐色	黒色粒子、赤色粒子（多）、白色針状物質	○	押捺、ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					内面白色物質付着
第 47 図 1	H20		SI-026	SI-026	弥生土器	無頸壺	弥生後期			(2.5)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（少）	○	刻み、ミガキ	ミガキ					焼成前穿孔
第 47 図 2	H20		SI-026	SI-026	弥生土器	壺	弥生後期		(7.6)	(1.5)	暗赤色	暗赤色	黄褐色粒子（多）	○	ミガキ	ヘラナデ	外面				底部周縁部摩滅
第 47 図 3	H20		SI-026	SI-026	弥生土器	鉢	弥生後期	(15.6)	(6.4)	7.0	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ	ミガキ					
第 47 図 4	H20		SI-026	SI-026	弥生土器	高坏	弥生後期			(2.8)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（少）、赤色粒子（少）	○	刻み、ナデ	ヘラナデ					円形透し孔
第 48 図 1	H20		SI-027	SI-027	弥生土器	鉢	弥生後期	(13.6)	5.9	8.4	赤褐色	にぶい赤褐色	砂粒	○	ミガキ	ミガキ	内外面				焼成前穿孔、底部周縁部摩滅
第 48 図 2	H20		SI-027	SI-027	弥生土器	甕	弥生後期			(2.2)	黒褐色	黒褐色	白色針状物質（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ					外面スス付着
第 49 図 1	H20		SI-030	SI-030	弥生土器	壺	弥生後期		9.0	14.9	暗赤褐色	にぶい橙色	白色粒子（多）、赤色粒子	○	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面	胴部 底部	内面 外面	イネ イネ	底部周縁部摩滅、内面円形剥落
第 49 図 2	H20		SI-030	SI-030	弥生土器	壺	弥生後期			(8.9)	明褐色～赤褐色	明褐色	砂粒（多）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ヘラナデ	外面				
第 49 図 3	H20		SI-030	SI-030	弥生土器	甕	弥生後期	(11.2)		(10.3)	黒色	にぶい褐色	赤色粒子	○	押捺、ナデ	ミガキ					外面スス付着
第 50 図 1	H20		SI-031	SI-031	弥生土器	壺	弥生後期			(2.5)	明褐色	赤褐色	白色粒子（多）	○	縄文、押捺、棒状浮文、ミガキ	ミガキ	内面	口縁部 口縁部	内面 内面	不明木材 マメ科?	
第 50 図 2	H20		SI-031	SI-031	弥生土器	壺	弥生後期			(1.9)	褐色	赤褐色	白色粒子（多）	○	縄文、押捺、棒状浮文	ミガキ?（剥落）	内面				内面剥落
第 50 図 3	H20		SI-031	SI-031	弥生土器	壺	弥生後期			(1.8)	褐色	暗赤褐色	白色粒子（多）	○	縄文、押捺、棒状浮文	ミガキ?（剥落）	内面				内面剥落
第 50 図 4	H20		SI-031	SI-031	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.0)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ					
第 50 図 5	H20		SI-031	SI-031	弥生土器	甕	弥生後期	(24.8)		(31.3)	暗褐色	明赤褐色	白色粒子、赤色粒子	○	押捺、沈線、ヘラナデ	ヘラナデ、押捺		胴部 胴部 胴部	内面 内面 内面	イネ イネ イネ	
第 51 図 1	H20		SI-032	SI-032	弥生土器	壺	弥生後期	(25.7)		(3.0)	にぶい黄褐色	暗赤褐色	白色針状物質、白色粒子	○	縄文、刺突、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 51 図 2	H20		SI-032	SI-032	弥生土器	壺	弥生後期			(3.3)	暗褐色	赤褐色	白色粒子（多）	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ?（剥落）	内面				内面剥落
第 51 図 3	H20		SI-032	SI-032	弥生土器	甕	弥生後期	(21.3)		(6.9)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、白色粒子	○	押捺、ヘラナデ	ヘラナデ後ミガキ					外面スス付着
第 51 図 4	H20		SI-032	SI-032	弥生土器	甕	弥生後期		8.0	(2.4)	暗赤褐色	黒褐色	白色粒子（少）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					内面コゲ付着
第 52 図 1	H20		SI-034	SI-034	弥生土器	甕	弥生後期			(13.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色針状物質	○	押捺、ヘラナデ	ヘラナデ後ミガキ					外面スス、内面コゲ付着、口縁部破断面摩滅
第 52 図 2	H20		SI-034	SI-034	弥生土器	甕	弥生後期		7.0	2.6	黒褐色	暗赤色	白色粒子	○	ミガキ	ヘラナデ		底部	外面	イネ	
第 53 図 1	H20		SI-035	SI-035	弥生土器	壺	弥生後期		6.6	(11.5)	黒褐色	明赤褐色	白色粒子	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ		底部	内面	イネ	外面剥落、底部周縁部摩滅
第 53 図 2	H20		SI-035	SI-035	弥生土器	壺	弥生後期			(7.4)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	赤色粒子（多）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	内面				
第 53 図 3	H20		SI-035	SI-035	弥生土器	鉢	弥生後期		(7.0)	(4.1)	橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子（多）、砂粒	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ後ミガキ	内外面				
第 56 図 1	H21	1	SI-039	SI-039	弥生土器	壺	弥生中期		(12.5)	(6.0)	橙色	橙色	赤色粒子、白色針状物質、白色粒子（多）	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ					
第 56 図 2	H21	1	SI-039	SI-038、SI-039	弥生土器	広口壺	弥生中期	(9.9)	5.4	10.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	白色粒子、白色針状物質	○	縄文、沈線、ナデ	ヘラナデ	内外面				焼成前穿孔
第 56 図 3	H21	1	SI-039	SI-039	弥生土器	甕	弥生中期		7.3	(5.7)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	白色粒子、砂粒（多）	○	ハケ調整、ナデ	ヘラナデ					内面摩耗
第 56 図 4	H21	1	SI-039	SI-039	弥生土器	甕	弥生中期		(6.4)	(3.6)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白色粒子（多）	○	不明（摩滅）	不明（剥落）		底部	内面	種実ではない	器面剥落
第 57 図 1	H21	2	SI-044	SI-044	弥生土器	壺	弥生中期	(5.6)	6.8	(18.2)	にぶい橙色	橙色	白色粒子、白色針状物質	○	ハケ調整、底部ナデ?	ナデ					口唇部摩滅
第 57 図 2	H21	2	SI-044	SI-044	弥生土器	壺	弥生中期		5.0	(4.2)	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	黒色粒子、白色粒子、白色針状物質	○	ハケ調整後ナデ	ナデ					
第 57 図 3	H21	2	SI-044	SI-044	弥生土器	甕	弥生中期		(7.4)	(5.1)	明褐色	黒色	白色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ヘラナデ?（摩耗）					内面摩耗・コゲ付着
第 57 図 4	H21	2	SI-044	SI-044	弥生土器	甕	弥生中期		(6.4)	(2.9)	にぶい褐色	にぶい黄橙色	砂粒、赤色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ナデ					外面スス付着
第 58 図 1	H21	3	2SI-001	SI-001	弥生土器	壺	弥生後期			(6.6)	褐色	赤色	白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ、S字状結節文、縄文、円形浮文	ミガキ	内面				器台転用
第 58 図 2	H21	3	2SI-001	SI-001	弥生土器	壺	弥生後期	(13.4)		(2.4)	赤褐色	にぶい褐色	砂粒（少）	○	ミガキ	ミガキ	外面				

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 58 図 3	H21	3	2SI-001	SI-001	弥生土器	甕	弥生後期	(17.6)		(2.1)	黒色	明黄褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ヘラナデ	ミガキ					外面スス付着
第 59 図 1	H21	3	2SI-002	SI-002	弥生土器	器台	弥生後期	(14.6)	(16.4)	(11.3)	にぶい赤褐色	黒褐色	白色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ		脚部	内面	イネ	
第 60 図 1	H21	3	2SI-003	SI-003	弥生土器	鉢	弥生後期	(19.4)		(7.4)	暗赤褐色	暗赤褐色	赤色粒子（少）、白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 60 図 2	H21	3	2SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生後期		(7.0)	(2.2)	灰褐色	にぶい赤褐色	白色粒子（少）	○	ヘラケズリ	ミガキ					
第 61 図 1	H21	3	2SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期		(11.2)	(3.5)	にぶい赤褐色	にぶい橙色	赤色粒子、白色針状物質（多）	◎	ミガキ	ヘラナデ					
第 61 図 2	H21	3	2SI-004	SI-004	弥生土器	甕	弥生後期			(6.1)	褐色	にぶい褐色	赤色粒子（少）、白色粒子、白色針状物質	◎	ハケ調整後ナデ、刻み	ヘラナデ後ミガキ					
第 62 図 1	H21	3	2SI-005	SI-005	弥生土器	壺	弥生後期	(12.8)		(5.8)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	赤色粒子（少）	○	ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					
第 62 図 2	H21	3	2SI-005	SI-005	弥生土器	壺	弥生後期		(8.8)	(4.5)	明赤褐色	橙色	赤色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ミガキ、ヘラケズリ	ナデ	外面				
第 62 図 3	H21	3	2SI-005	SI-005	弥生土器	甕	弥生後期		(8.2)	(4.1)	黒褐色	黒褐色	赤色粒子（多）、白色粒子（多）	○	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 63 図 1	H21	3	2SI-006	SI-006	弥生土器	壺	弥生後期			(15.0)	褐色	褐色	赤色粒子、白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面				
第 63 図 2	H21	3	2SI-006	SI-006	弥生土器	壺	弥生後期			(4.3)	明褐色	にぶい褐色	白色粒子（多）	○	刺突、S字状結節文、縄文	ヘラナデ					器台転用
第 63 図 3	H21	3	2SI-006	SI-006	弥生土器	甕	弥生後期	(14.4)		(3.5)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（多）	○	押捺、ナデ	ヘラナデ後ミガキ					
第 64 図 1	H21	3	2SI-007	SI-007	弥生土器	壺	弥生後期	(14.5)		(1.7)	橙色	黒褐色	白色粒子（多）、砂粒（多）	○	縄文、刻み、ヨコナデ	不明（剥落）					内外面剥落、二次被熱
第 64 図 2	H21	3	2SI-007	SI-007	弥生土器	壺	弥生後期	(20.5)		(2.5)	橙色	橙色	白色粒子、白色針状物質	○	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 64 図 3	H21	3	2SI-007	SI-007	弥生土器	壺	弥生後期	(12.2)		(3.8)	橙色	橙色	赤色粒子（少）	○	ミガキ	ミガキ					
第 64 図 4	H21	3	2SI-007	SI-007	弥生土器	甕	弥生後期		(7.3)	(1.8)	橙色	暗褐色	白色・赤色粒子（多）、白色針状物質	○	ミガキ、ナデ	ナデ		底部 底部	外面 外面	イネ イネ	内面コゲ付着・摩耗
第 64 図 5	H21	3	2SI-007	SI-007	弥生土器	鉢	弥生後期		(5.6)	(2.3)	赤褐色	赤褐色	白色・赤色粒子	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 65 図 1	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	壺	弥生後期	(15.4)		(10.6)	にぶい赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、S字状結節文	ミガキ	内面				器台転用
第 65 図 2	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	壺	弥生後期			(6.4)	橙色	橙色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質	◎	ミガキ	ヘラナデ	外面				
第 65 図 3	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	無頸壺	弥生後期	(13.7)		(4.6)	橙色	橙色	赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ヨコナデ、刻み、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ	外面				焼成前穿孔
第 65 図 4	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	鉢	弥生後期	(15.1)	6.0	8.1	にぶい橙色	橙色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質	○	ミガキ	ミガキ	内面				
第 65 図 5	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	鉢	弥生後期		(6.3)	(1.8)	にぶい橙色	橙色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ、ナデ	ミガキ	内面				
第 65 図 6	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	甕	弥生後期	(20.5)		(13.3)	にぶい橙色	橙色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	押捺、ヘラナデ	ヘラナデ後ミガキ					外面スス付着
第 65 図 7	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	甕	弥生後期		(6.6)	(2.5)	にぶい黄褐色	黒色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ後ミガキ	ミガキ					内面コゲ付着
第 65 図 8	H21	3	2SI-008	SI-008	弥生土器	器台	弥生後期		(7.6)	(3.1)	にぶい黄橙色	にぶい褐色	赤色粒子	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 67 図 1	H21	3	2SI-010	SI-010	弥生土器	壺	弥生後期	(21.2)		(3.0)	橙色	橙色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質	○	附加条縄文、押捺、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 67 図 2	H21	3	2SI-010	SI-010	弥生土器	甕	弥生後期		(8.2)	(2.5)	にぶい黄橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					
第 67 図 3	H21	3	2SI-010	SI-010	弥生土器	甕	弥生後期		(8.0)	(1.9)	黒褐色	にぶい橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ					外面スス付着
第 69 図 1	H21	3	2SI-013	SI-011	弥生土器	壺	弥生後期	(11.6)		(2.7)	にぶい赤褐色	橙色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ヘラナデ					
第 69 図 2	H21	3	2SI-013	SI-013	弥生土器	甕	弥生後期			(6.5)	橙色	橙色	白色粒子、砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ、押捺	ヘラナデ					口縁部破断面摩滅
第 69 図 3	H21	3	2SI-013	SI-013	弥生土器	甕	弥生後期			(7.2)	明赤褐色	橙色	白色粒子、砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ後ミガキ、押捺	ヘラナデ					口縁部破断面摩滅
第 70 図 1	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	広口壺	弥生後期	(21.8)		(14.8)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ					
第 70 図 2	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	壺	弥生後期	(13.0)		(9.9)	橙色	明赤褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（多）、赤色粒子、砂粒	○	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ					二次被熱
第 70 図 3	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	壺	弥生後期			(6.8)	にぶい黄色	にぶい黄色	砂粒、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ後ナデ、ミガキ	ヘラナデ		胴部	外面	イネ	
第 70 図 4	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	鉢	弥生後期		(5.0)	(2.8)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	◎	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 70 図 5	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	鉢	弥生後期	18.3	13.0	7.2	橙色	明赤褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（多）、赤色粒子	○	ヨコナデ、ミガキ、ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ後ミガキ	外面				
第 70 図 6	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	器台	弥生後期		(11.2)	(2.7)	にぶい褐色	明赤褐色	砂粒（多）、赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（多）	◎	ヘラナデ	ヘラナデ					外面スス付着
第 70 図 7	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	甕	弥生後期	(19.0)	7.8	19.3	黒褐色	にぶい赤褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質	○	押捺、ヘラナデ	ミガキ					内面剥落、コゲ付着
第 70 図 8	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	甕	弥生後期		7.4	(11.3)	にぶい橙色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ後ナデ、ミガキ	ヘラナデ					外面摩耗
第 70 図 9	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	甕	弥生後期		(7.4)	(2.0)	にぶい赤褐色	赤褐色	白色粒子（多）、黄褐色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					底部周縁部摩滅
第 70 図 10	H21	3	2SI-014	SI-014	弥生土器	ミニチュア（甕）	弥生後期		3.5	(1.9)	にぶい赤褐色	赤褐色	白色粒子（多）、黄褐色粒子（多）	○	ナデ	ナデ					

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 73 図 1	H21 3	2SI-019	SI-019	弥生土器	鉢	弥生後期		(7.1)	(1.9)	明赤褐色	明赤褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質	○	ミガキ、ナデ	ミガキ					
第 73 図 2	H21 3	2SI-019	SI-019	弥生土器	台付甕	弥生後期		(7.9)	(5.1)	にぶい橙色	にぶい黄橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、砂粒、白色針状物質	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 73 図 3	H21 3	2SI-019	SI-019	弥生土器	器台	弥生後期	(7.8)		(8.3)	橙色	橙色	白色粒子（多）、白色針状物質	○	ナデ	ナデ					
第 74 図 1	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	壺	弥生後期	(10.0)		(1.6)	橙色	橙色	赤色粒子（少）、白色粒子、白色針状物質	○	ヨコナデ、ナデ	ナデ					
第 74 図 2	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	壺	弥生後期			(2.8)	褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	縄文、刻み、棒状浮文	ミガキ	内面				
第 74 図 3	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	鉢	弥生後期	(5.3)		(9.1)	明赤褐色	橙色	黄褐色赤色粒子(多)、砂粒	○	S字状結節文、押捺、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ	外面	体部	外面	イネ	内面剥落
第 74 図 4	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.4)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ヘラナデ					
第 74 図 5	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.9)	にぶい褐色	にぶい橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ヘラナデ					
第 74 図 6	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	鉢	弥生後期		(5.0)	(4.2)	赤褐色	赤褐色	赤色粒子（多）、白色粒子、砂粒	○	ミガキ	ミガキ	内外面				
第 74 図 7	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	甕	弥生後期		(6.7)	(3.7)	にぶい赤褐色	明赤褐色	黄褐色粒子、白色粒子、赤色粒子	○	ミガキ	ヘラナデ					底部に焼成前穿孔
第 74 図 8	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	甕	弥生後期		(7.4)	(1.8)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					
第 74 図 9	H21 3	2SI-020	SI-020	弥生土器	甕	弥生後期		(9.0)	(1.8)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					
第 75 図 1	H21 3	2SI-021	SI-021	弥生土器	壺	弥生後期		5.2	12.5	橙色	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子、砂粒	○	S字状結節文、縄文、沈線、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ					内面剥落、口縁部破断面摩滅
第 75 図 2	H21 3	2SI-021	SI-021	弥生土器	壺	弥生後期			(3.0)	橙色	橙色	白色粒子（少）	○	ナデ	ミガキ					
第 78 図 1	H21 3	2SI-025	SI-025	弥生土器	壺	弥生後期	19.9		(7.0)	赤褐色	赤褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 78 図 2	H21 3	2SI-025	SI-025	弥生土器	壺	弥生後期			(1.6)	橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ナデ、ミガキ	縄文、ミガキ	内外面				
第 78 図 3	H21 3	2SI-025	SI-025	弥生土器	甕	弥生後期		(5.5)	(3.1)	橙色	黒色	白色粒子（少）	○	ヘラナデ	ミガキ					内面コゲ付着
第 80 図 1	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	壺	弥生後期			(4.4)	暗赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質、砂粒	○	縄文、刻み、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 80 図 2	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	壺	弥生後期			(5.7)	暗赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質、砂粒	○	ミガキ、S字状結節文	ミガキ	内外面				器台転用
第 80 図 3	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	壺	弥生後期			(3.3)	明褐色	明褐色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、円形浮文	ミガキ、ヘラナデ		断面		イネ	
第 80 図 4	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	無頸壺	弥生後期			(2.2)	赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					
第 80 図 5	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	台付甕	弥生後期			(3.2)	暗褐色	暗褐色	赤色粒子（多）、砂粒（少）	○	ミガキ	ミガキ、ヘラナデ					外面スス付着
第 80 図 6	H22 (3)	3SI-027	SI-027	弥生土器	甕	弥生後期		(6.4)	(3.3)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（少）、白色針状物質（少）	◎	ミガキ	ヘラナデ					
第 81 図 1	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	壺	弥生後期	(15.4)		(8.7)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、刻み、棒状浮文、ミガキ	ミガキ	内外面				二次被熱
第 81 図 2	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	壺	弥生後期	(11.6)		(8.9)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	内外面	頸部 肩部 断面	外面 内面	イネ イネ イネ	器台転用
第 81 図 3	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	壺	弥生後期		8.8	(25.0)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質（少）	○	S字状結節文、縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面				底部周縁部摩滅、内面剥落
第 81 図 4	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	壺	弥生後期		(11.4)	(22.3)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ?（摩耗）	ヘラナデ					外面摩耗、底部周縁部摩滅
第 82 図 5	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	広口壺	弥生後期	(19.4)	5.3	19.4	赤褐色～暗褐色	赤褐色	黄褐色粒子（多）、砂、白色粒子、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	押捺、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ					外面底部摩滅
第 82 図 6	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	広口壺	弥生後期	19.0	6.9	24.4	暗褐色～赤褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質	○	刻み、ミガキ、ヘラナデ	ミガキ、ヘラナデ		胴部 胴部 口縁部	外面 外面 内面	種実ではない イネ イネ	底部周縁部摩滅
第 82 図 7	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	広口壺	弥生後期	8.5	5.2	9.4	褐色	黒褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ					二次被熱
第 82 図 8	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	鉢	弥生後期	(19.8)		(7.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					
第 82 図 9	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	甕	弥生後期	14.3		(8.8)	褐色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ、ヘラナデ		胴部	内面	イネ	
第 82 図 10	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	甕	弥生後期	21.0	7.4	22.0	褐色～黒褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（多）、砂粒	○	押捺、ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					外面スス付着、内面コゲ・摩耗
第 82 図 11	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	甕	弥生後期	(22.2)		(19.3)	明褐色	明褐色	黄褐色粒子（多）、砂、白色針状物質（少）	△	押捺、ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					外面スス付着
第 82 図 12	H22 (3)	3SI-028	SI-028	弥生土器	甕	弥生後期			(18.0)	明褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（多）	○	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					外面スス付着、口縁部破断面摩滅
第 84 図 1	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	広口壺	弥生後期			(7.5)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ、押捺、縄文	ミガキ					
第 84 図 2	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	壺	弥生後期			(4.2)	赤褐色	明褐色	白色粒子（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ					外面摩耗
第 84 図 3	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	鉢	弥生後期	(13.0)	(4.6)	6.8	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（少）	○	ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ					
第 84 図 4	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.2)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文	ミガキ	内面				
第 84 図 5	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	甕	弥生後期			(15.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（多）	△	ヘラナデ、押捺	ヘラナデ					二次被熱
第 84 図 6	H22 (4)	4SI-001	SI-001	弥生土器	甕	弥生後期			(10.1)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ、押捺	ミガキ					口縁部破断面摩滅
第 85 図 1	H22 (4)	4SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(4.3)	にぶい橙色	黒褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面				

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 85 図 2	H22	(4)	4SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(2.4)	にぶい橙色	暗褐色	赤色粒子（多）、白色粒子（少）	○	縄文、S字状結節文	ヘラナデ					
第 85 図 3	H22	(4)	4SI-002	SI-002	弥生土器	台付甕	弥生後期		(11.0)	(8.3)	明褐色	明褐色	黄褐色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					脚接合部破断面摩滅
第 87 図 1	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		7.0	22.9	明褐色	明褐色	白色粒子、砂粒（多）、白色針状物質	△	縄文、沈線、ハケ調整、ミガキ	ヘラナデ					底部周縁部摩耗、内面剥落
第 87 図 2	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		6.4	18.5	暗黄褐色	暗黄褐色	白色粒子、白色針状物質、砂粒	△	ミガキ	ヘラナデ		断面		不明	底部外面摩滅
第 87 図 3	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(10.8)	暗褐色	淡褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 87 図 4	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.0)	褐色	褐色	白色粒子	○	縄文、ハケ調整	ハケ調整					
第 87 図 5	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(2.7)	暗褐色	暗褐色	砂粒（少）	○	縄文、ハケ調整	ナデ					
第 87 図 6	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(5.0)	赤褐色	明褐色～黒色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	棒状浮文、ハケ調整後沈線	ナデ、ハケ調整					
第 87 図 7	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(8.3)	明褐色	明褐色	黄褐色粒子（多）、砂粒	△	ミガキ、縄文、櫛描き	ヘラナデ?（剥落）					内面剥落
第 87 図 8	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		8.8	(14.0)	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子、砂粒（多）	○	ハケ調整後ミガキ、ヘラケズリ	ヘラナデ					
第 87 図 9	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.6)	赤褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	沈線、縄文	ヘラナデ	外面				
第 87 図 10	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(2.3)	赤褐色	暗褐色	砂粒	○	沈線、縄文	ナデ		断面		マメ科?	
第 87 図 11	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.2)	黒褐色	明褐色	砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 12	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.0)	黒褐色	褐色	砂粒	○	縄文、沈線、ナデ	ナデ?（摩耗）					内面摩耗
第 87 図 13	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.9)	暗赤褐色	褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質（少）	○	沈線、縄文、ミガキ	ナデ					
第 87 図 14	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.1)	暗赤褐色	褐色	砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 15	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(5.4)	暗赤褐色	褐色	黄褐色粒子、砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 16	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(5.0)	暗褐色	明褐色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 17	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(4.0)	明褐色	明褐色	砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 18	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(2.8)	淡褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ、沈線、縄文	ヘラナデ					
第 87 図 19	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.6)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ、刺突、沈線、縄文	ハケ調整、ナデ					
第 87 図 20	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(2.6)	赤褐色	褐色	白色粒子、砂粒（少）	○	縄文、沈線、ナデ	ミガキ					
第 87 図 21	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(5.9)	暗赤褐色	褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ナデ					内外面摩耗
第 87 図 22	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(4.8)	暗褐色	褐色	赤色・白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、ミガキ	ナデ	外面				外面摩耗
第 87 図 23	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(9.0)	黒褐色	明褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	○	縄文、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 24	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(2.8)	褐色	褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	○	縄文、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 25	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(4.6)	明褐色	褐色	砂粒、白色粒子（少）	○	縄文、ナデ	ナデ					
第 87 図 26	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(4.9)	明褐色	明褐色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、ミガキ	ナデ					内外面摩耗
第 87 図 27	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(8.9)	暗褐色	暗褐色	白色粒子、赤色粒子、白色針状物質（少）	△	縄文、ナデ?（摩滅）	ナデ?（剥落）					外面摩耗、内面剥落
第 87 図 28	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(7.0)	赤褐色	褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	縄文、ミガキ	ナデ					
第 87 図 29	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(5.4)	褐色	明褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 30	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(3.7)	赤褐色	褐色	赤色粒子、白色粒子（少）	○	縄文、ミガキ	ナデ	外面				
第 87 図 31	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期			(4.1)	黒褐色	明褐色	赤色粒子、白色粒子	○	縄文、ミガキ	ヘラナデ					
第 87 図 32	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(8.6)	(6.3)	暗褐色	褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、砂粒、白色針状物質	△	ハケ調整、ナデ	ナデ?（剥落）					底部周縁部摩滅、内面剥落
第 87 図 33	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		5.4	(3.9)	暗赤褐色	明褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ヘラナデ	外面				底部周縁部摩滅
第 88 図 34	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(5.4)	(2.7)	明褐色	暗褐色	砂粒	○	ミガキ	不明（剥落）					内面剥落
第 88 図 35	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(6.8)	(3.3)	明褐色	褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、砂粒（少）	△	ナデ	不明（剥落）					内面剥落
第 88 図 36	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(6.2)	(2.5)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）、砂粒	△	ナデ?（摩耗）	不明（摩耗）					内外面摩耗、底部周縁部摩滅
第 88 図 37	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(6.6)	(2.2)	暗褐色	明褐色	赤色・白色粒子（少）	○	ナデ	ナデ					底部周縁部摩滅
第 88 図 38	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	壺	弥生中期		(3.1)	(1.6)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）	△	ナデ	不明（剥落）					底部周縁部摩滅、内面剥落
第 88 図 39	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	高坏	弥生中期		(7.0)	(1.8)	明褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ナデ	ヨコナデ					
第 88 図 40	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(19.0)		(15.5)	暗褐色	褐色	砂粒、白色針状物質	○	押捺、ハケ調整後ナデ	ヘラナデ		胴部	内面	イネ	外面スス付着、内面摩耗
第 88 図 41	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(17.0)		(5.0)	黒褐色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	ハケ調整		断面		種実ではない	外面スス付着
第 88 図 42	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(23.8)		(9.2)	褐色	明褐色	赤色粒子、白色針状物質	○	押捺、ハケ調整後ミガキ	ハケ調整後ナデ					外面スス付着、内面摩耗
第 88 図 43	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(20.8)		(15.6)	暗褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	ヘラナデ		断面 断面		シソ属? 不明	外面スス付着
第 88 図 44	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(2.7)	黒褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	ハケ調整					
第 88 図 45	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(5.9)	黒褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整、櫛描き	ハケ調整					外面スス付着
第 88 図 46	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(32.0)		(7.8)	橙色	にぶい橙色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	押捺、ハケ調整		断面		植物ではない	
第 88 図 47	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(2.7)	暗褐色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ナデ	押捺、刻み、ナデ					
第 88 図 48	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(3.0)	赤橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	押捺、ハケ調整					

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm （）復元・現存値			色調		胎土	焼成	調整		赤彩	種実圧痕			備考
								口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		位置		種実種類	
第 88 図 49	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(24.6)		(4.2)	暗褐色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ハケ調整後ナデ	ナデ					外面スス付着
第 88 図 50	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期	(16.0)		(3.9)	暗褐色	黒褐色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	ナデ	ナデ					焼成前穿孔2か所
第 88 図 51	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(8.4)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	ハケ調整	ハケ調整、ヘラナデ					外面剥落・スス付着
第 88 図 52	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期			(16.0)	明褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ハケ調整	ハケ調整		胴部	内面	イネ	
第 88 図 53	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(5.2)	(19.0)	暗黄褐色	褐色	赤色粒子、砂粒	△	ハケ調整、ヘラケズリ後ミガキ	ヘラナデ					底部に焼成前穿孔、外面スス付着・剥落、内面摩耗
第 88 図 54	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		6.8	(8.8)	暗褐色	褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	ハケ調整後ミガキ	ヘラナデ					底部内面摩耗
第 88 図 55	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	台付甕	弥生中期		10.0	(4.3)	褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	△	ハケ調整	ヘラナデ					
第 88 図 56	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		5.5	(3.0)	明褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					焼成後未貫通穿孔
第 88 図 57	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(8.8)	(4.3)	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ハケ調整	ナデ					
第 88 図 58	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		7.4	(4.8)	明褐色	褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質砂粒	△	ハケ調整	ミガキ?（摩耗）					底部内面摩耗
第 88 図 59	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		8.0	(3.0)	橙色	橙色	砂粒、白色粒子（多）	○	ハケ調整後ナデ、底部木葉痕	ナデ					
第 88 図 60	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(6.2)	(2.6)	褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ナデ	ナデ					
第 88 図 61	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(7.4)	(3.5)	暗褐色	黒褐色	砂粒、白色粒子（多）	○	ナデ	ナデ					内面コゲ付着、断面平滑
第 88 図 62	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(6.8)	(3.2)	黒褐色	黒褐色	白色粒子（多）、砂粒（少）	○	ハケ調整後ナデ	ハケ調整					
第 88 図 63	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	甕	弥生中期		(4.6)	(3.1)	暗赤褐色	暗褐色	砂粒	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ					
第 88 図 64	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	ミニチュア（壺）	弥生中期			(4.5)	明褐色	暗褐色	黒色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	沈線、ナデ	ナデ					
第 88 図 65	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	ミニチュア（壺）	弥生中期			(3.6)	褐色	暗褐色	黒色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	沈線・ナデ	ヘラナデ					
第 88 図 66	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	ミニチュア（壺）	弥生中期			(2.4)	明褐色	明褐色	白色粒子、砂粒（少）	○	沈線、縄文、ナデ	ナデ					
第 88 図 67	H22	(4)	4SI-003	SI-003	弥生土器	ミニチュア（壺）	弥生中期			(1.9)	明褐色	褐色	白色粒子（少）	○	ハケ調整	ナデ					
第 89 図 1	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期	(17.4)		(2.7)	褐色	明褐色	白色粒子	○	縄文、押捺	ミガキ					
第 89 図 2	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(2.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ					
第 89 図 3	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(1.5)	赤褐色	赤褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺	ミガキ					
第 89 図 4	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	壺	弥生後期			(1.6)	明褐色	赤褐色	白色粒子（少）、白色針状物質（少）	○	縄文、刻み、棒状浮文、ナデ	ミガキ	内面				
第 89 図 5	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期	(16.8)	5.4	8.2	赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、沈線、ミガキ	ミガキ					
第 89 図 6	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	鉢	弥生後期			(12.2)	赤褐色	明褐色	白色針状物質（少）	○	S字状結節文、沈線、押捺、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ		断面		不明	
第 89 図 7	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期	(24.4)	21.3	6.8	黒褐色	淡褐色	砂粒、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整後ナデ	ミガキ		断面		種実ではない	外面スス付着
第 89 図 8	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	台付甕	弥生後期		9.9	(14.2)	明褐色	（甕部）黒褐色、（脚部）赤褐色	砂粒、白色粒子	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					外面スス付着、内面コゲ、胴中位部摩耗
第 89 図 9	H23	(5)	5SI-002	SI-002	弥生土器	甕	弥生後期		(5.6)	(1.5)	褐色	黒褐色	砂粒	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ					
第 90 図 1	H23	(5)	5SI-003	SI-003	弥生土器	台付甕	弥生後期		9.0	(8.1)	橙色	にぶい橙色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 91 図 1	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	壺	弥生後期			(3.2)	赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質	◎	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面	断面		キビ	
第 91 図 2	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	鉢	弥生後期			(4.5)	赤褐色	赤褐色	赤色粒子、白色針状物質	◎	縄文、押捺、沈線、ミガキ	ミガキ		断面		植物ではない	
第 91 図 3	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(5.9)	暗褐色	にぶい橙色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ、押捺	（坏部）ミガキ、（脚部）ナデ	内面				
第 91 図 4	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(2.7)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、赤色粒子（少）	○	縄文、刻み、ミガキ	ヘラナデ					
第 91 図 5	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	高坏	弥生後期			(5.0)	暗褐色	橙色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ、ヨコナデ、押捺	ヘラナデ、ヨコナデ					三角形透孔
第 91 図 6	H23	(5)	5SI-004	SI-004	弥生土器	甕	弥生後期			(5.8)	明褐色	明褐色	黄褐色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ナデ、押捺	ミガキ					口唇部破断面摩耗
第 92 図 1	H27	(7)	7SI-003	7SI-003	弥生土器	壺	弥生後期		8.4	(2.9)	暗赤褐色	暗赤褐色	黄褐色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質（少）	◎	ヘラケズリ後ミガキ	ナデ		断面		植物ではない	
第 93 図 1	H27	(7)	7SI-004	7SI-004	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.1)	褐色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、ミガキ	ミガキ					
第 93 図 2	H27	(7)	7SI-004	7SI-004	弥生土器	甕	弥生後期		(7.0)	(1.6)	暗褐色	褐色	赤色粒子（少）、白色粒子（少）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 94 図 1	H27	(7)	7SI-005	7SI-005、7SD-001	弥生土器	壺	弥生後期			(19.7)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（多）、白色粒子（多）	△	ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	内外面	胴部	外面	アサ	外面摩耗
第 96 図 1	H19		SS-001	SS-001	弥生土器	甕	弥生後期	(21.1)	6.2	16.5	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白色粒子（多）、砂粒（多）	○	押捺、ヘラナデ	ミガキ		胴部 胴部	内面 内面	不明木材 イネ	底部に焼成後穿孔、外面スス、内面コゲ付着
第 96 図 2	H19		SS-001	SS-001	弥生土器	甕	弥生後期			(2.6)	黒褐色	暗褐色	白色粒子（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ					外面スス付着
第 96 図 3	H19		SS-001	SS-001	弥生土器	甕	弥生後期		(5.4)	(2.4)	にぶい褐色	黒色	砂粒（少）、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					内面コゲ付着
第 98 図 1	H19		SS-002	SS-002	弥生土器	壺	弥生後期		8.2	(31.1)	橙色	橙色	赤色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ		胴部 胴部 胴部 底部	外面 外面 外面 外面	種実ではない イネ イネ 植物ではない	胴部に焼成後穿孔2か所、底部周縁部摩滅
第 98 図 2	H19		SS-002	SS-002	弥生土器	壺	弥生後期		7.5	(4.8)	橙色	橙色	黄褐色粒子（多）、赤色粒子、砂粒	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 98 図 3	H19		SS-002	SS-002	弥生土器	壺	弥生後期		(7.2)	(2.8)	赤褐色	赤褐色	黄褐色粒子（多）、赤色粒子、砂粒	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 98 図 4	H19		SS-002	SS-002	弥生土器	甕	弥生後期	(19.0)		(4.5)	橙色	橙色	赤色粒子（少）	○	ナデ	ミガキ					

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 99 図 1	H19		SS-003	SS-003	弥生土器	鉢	弥生後期	(19.0)		(4.4)	褐色	にぶい褐色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	外面				
第 99 図 2	H27	(7)	SS-003	7SS-001	弥生土器	甕	弥生後期	(23.6)		(10.5)	暗褐色	褐色	赤色粒子（多）、砂粒（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ		断面		不明	外面スス付着
第 99 図 3	H27	(7)	SS-003	7SS-001	弥生土器	甕	弥生後期		(8.0)	(18.0)	褐色	褐色	砂粒、赤色粒子(多)	○	ヘラケズリ後ナデ、ミガキ	ミガキ					外面スス付着
第 99 図 4	H19		SS-003	SS-003	弥生土器	甕	弥生後期			(2.9)	黒褐色	褐色	白色粒子（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ					
第 99 図 5	H19		SS-003	SS-003	弥生土器	甕	弥生後期		(7.0)	(3.4)	にぶい褐色	黒色	赤色粒子、白色粒子（少）	○	ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ		底部	内面	アサ	
第 101 図 1	H19		SK-005 (SS-005)	SK-005	弥生土器	壺	弥生後期			(2.4)	明褐色	明褐色	白色粒子（多）	○	縄文、押捺、ナデ	ミガキ					
第 104 図 1	H21	1	SK-101 (SS-006)	SK-101	弥生土器	壺	弥生中期	10.6	7.4	(35.4)	橙色	橙色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	△	縄文、押捺、沈線、ミガキ	ミガキ?（剥落）					内面剥落
第 104 図 2	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	壺	弥生中期	6.2		(7.9)	にぶい橙色	にぶい黄褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質	△	S字状結節文、ミガキ	ナデ					
第 104 図 3	H21	2	SS-006	SK-121	弥生土器	壺	弥生中期	(4.9)		4.9	暗褐色	暗褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	△	縄文、櫛歯状工具による調整、沈線、ヘラナデ	ナデ					片口状
第 104 図 4	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	甕	弥生中期			(3.2)	暗褐色	暗褐色	砂粒	○	押捺、ハケ調整	ナデ					
第 104 図 5	H21	2	SS-006	SK-121	弥生土器	壺	弥生中期		(8.4)	(3.0)	にぶい黄褐色	橙色	白色粒子、白色針状物質（多）	△	ヘラケズリ後ナデ?（摩耗）	ヘラナデ?（摩耗）					内外面摩耗
第 104 図 6	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	壺	弥生中期		(6.6)	(2.4)	にぶい褐色	褐灰色	白色粒子（多）、砂粒、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 104 図 7	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	壺	弥生中期		(6.3)	(4.5)	赤褐色	にぶい橙色	白色粒子（少）	○	ヘラナデ後ミガキ	ミガキ					
第 104 図 8	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	壺	弥生中期		(5.6)	(7.2)	褐色	明褐色	白色粒子、白色針状物質（多）、砂粒（少）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 104 図 9	H21	1	SS-006	SS-002	弥生土器	壺	弥生中期		5.6	(4.9)	明赤褐色	にぶい褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ナデ後ミガキ	ミガキ					
第 104 図 10	H21	1	SK-101 (SS-006)	SK-101	弥生土器	壺	弥生中期		7.0	4.0	にぶい橙色	橙色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	△	ナデ	ヘラナデ					外面摩耗、内面剥落
第 104 図 11	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	壺	弥生中期		(8.2)	(2.7)	にぶい黄橙色	褐灰色	白色粒子（多）、砂粒、白色針状物質	△	ナデ	ヘラナデ					底部周縁部摩滅
第 104 図 12	H21	1	SS-006	SD-029	弥生土器	壺	弥生中期		(6.8)	(4.6)	明褐色	橙色	砂粒、白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質（少）	△	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ?（摩耗）					内面摩耗
第 104 図 13	H21	1	SK-098 (SS-006)	SD-029	弥生土器	壺	弥生中期		4.9	(4.1)	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子、白色針状物質、赤色粒子（少）	△	ヘラナデ（ハケ状）、底部ナデ	ヘラナデ		断面		種実ではない	底部外面剥落
第 104 図 14	H21	1	SK-101 (SS-006)	SK-101	弥生土器	甕	弥生中期		(7.1)	(5.2)	暗赤褐色	暗赤褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	ハケ調整後ミガキ	ヘラナデ					
第 104 図 15	H21	1	SS-006	SS-002	弥生土器	甕	弥生中期		7.5	(2.8)	黒褐色	暗褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	△	ハケ調整	ヘラナデ					
第 104 図 16	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(2.9)	にぶい橙色	暗褐色	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状物質	△	ハケ調整	ヘラナデ					
第 104 図 17	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	甕	弥生中期		(6.4)	(2.7)	黒褐色	暗褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 104 図 18	H21	1	SS-006	SS-002	弥生土器	ミニチュア（鉢）	弥生中期	(7.8)	(5.6)	(5.5)	橙色	灰褐色	赤色粒子、白色針状物質（少）	○	棒状浮文、ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ					
第 104 図 19	H21	2	SS-006	SS-004	弥生土器	ミニチュア（鉢）	弥生中期			(4.6)	赤褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	棒状浮文、ナデ	ナデ	内外面				
第 104 図 20	H21	1	SK-101 (SS-006)	SK-101	弥生土器	ミニチュア（甕）	弥生中期		4.2	(4.0)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子	△	ミガキ?（剥落）	ナデ		断面		イネ	外面剥落
第 106 図 1	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	甕	弥生中期	(21.8)		(13.6)	橙色	橙色	赤色粒子、砂粒、白色針状物質（多）	△	押捺、ハケ調整	ハケ調整、ヘラナデ					外面スス付着
第 106 図 2	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	壺	弥生中期		(6.0)	(6.2)	橙色	にぶい黄色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	△	ハケ調整?（摩耗）	ヘラナデ?（摩耗）					底部周縁部摩滅
第 106 図 3	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	壺	弥生中期		(5.8)	(3.2)	にぶい赤褐色	暗黄褐色	白色粒子、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 106 図 4	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	壺	弥生中期		(7.6)	(2.8)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒、白色針状物質（少）	△	ナデ	ミガキ					
第 106 図 5	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	甕	弥生中期		(5.3)	(3.7)	にぶい赤褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 106 図 6	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	甕	弥生中期		5.0	(2.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	△	ヘラナデ?（摩耗）	ヘラナデ					外面摩耗
第 106 図 7	H21	2	SS-008	SS-003	弥生土器	甕	弥生中期		(6.7)	(2.3)	暗黄褐色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質	○	ハケ調整	ナデ		底部	外面	イネ	
第 107 図 1	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	壺	弥生中期			(5.1)	褐色	暗褐色	砂粒（少）、白色針状物質（多）	○	ハケ調整後ナデ	沈線、ハケ調整					
第 107 図 2	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	甕	弥生中期			(7.1)	明褐色	黒褐色	白色粒子（少）	○	ハケ調整後櫛描き	ミガキ					
第 107 図 3	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	壺	弥生中期		(5.6)	(4.1)	褐色	暗褐色	白色粒子、白色針状物質	○	ハケ調整後ナデ	ハケ調整後ナデ					
第 107 図 4	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	甕	弥生中期		(7.2)	(3.3)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	白色粒子、白色針状物質（少）	△	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ		胴部	外面	種実ではない	
第 107 図 5	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(2.7)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	白色粒子、砂粒	△	ハケ調整後ナデ、底部木葉痕?	ナデ					
第 107 図 6	H21	1	SD-029	SD-029	弥生土器	ミニチュア（甕）	弥生中期		3.4	(2.1)	にぶい褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ナデ	ナデ					内面摩滅
第 108 図 1	H22	(4)	4SD-029	SD-029	弥生土器	壺	弥生後期	9.0		(3.5)	明褐色	赤褐色	赤色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	内外面				
第 108 図 2	H22	(4)	4SD-029	SD-029	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.5)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子（少）	○	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ					
第 108 図 3	H22	(4)	4SD-029	SD-029	弥生土器	鉢	弥生後期			(4.3)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ナデ					
第 108 図 4	H22	(4)	4SD-029	SD-029	弥生土器	ミニチュア（甕）	弥生後期	(6.6)	(3.8)	3.2	にぶい褐色	にぶい褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 110 図 1	H22	(4)	4SD-030・031	SD-031	弥生土器	壺	弥生中期			(27.0)	暗赤褐色	にぶい橙色	砂粒（多）、白色針状物質（少）	○	沈線、縄文、円形浮文、ミガキ	不明（剥落）	外面				内面剥落
第 110 図 2	H22	(4)	4SD-030・031	SD-030	弥生土器	壺	弥生中期		(5.0)	(4.5)	暗赤褐色	にぶい橙色	赤色粒子、白色粒子	○	ミガキ	ミガキ	外面				底部周縁部摩滅
第 110 図 3	H22	(4)	4SD-030・031	SD-030	弥生土器	壺	弥生中期		(8.4)	(3.1)	暗褐色	暗褐色	白色粒子、砂粒	○	ナデ	ナデ?（剥落）					内面剥落
第 110 図 4	H22	(4)	4SD-030・031	SD-030	弥生土器	鉢	弥生中期			(5.0)	黒褐色	黒褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					焼成後穿孔

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 110 図 5	H22	(4)	4SD-030・031	SD-031	弥生土器	甕	弥生中期	(13.4)	5.8	14.0	褐色	赤褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	ハケ調整後ミガキ	ハケ調整、ヘラナデ		底部	外面	種実ではない	焼成前穿孔、外面スス付着
第 110 図 6	H22	(4)	4SD-030・031	SD-031	弥生土器	甕	弥生中期			(2.7)	黒褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ハケ調整	ナデ					外面スス付着
第 110 図 7	H22	(4)	4SD-030・031	SD-030	弥生土器	鉢	弥生後期			(4.2)	にぶい橙色	赤褐色	赤色粒子（多）	○	縄文、ミガキ	ミガキ	内外面				
第 111 図 1	H22	(4)	4SD-032	SD-032	弥生土器	壺	弥生中期			(13.7)	にぶい橙色	暗褐色	砂粒、白色針状物質（多）	○	S字状結節文、ハケ調整後ミガキ	ナデ、ヘラナデ		断面		種実ではない	
第 111 図 2	H22	(4)	4SD-032	SD-032	弥生土器	鉢	弥生中期	(12.0)	6.0	7.2	黒褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（多）、砂粒	○	ハケ調整後ミガキ	ミガキ					底部内面剥落
第 111 図 3	H22	(4)	4SD-032	SD-032	弥生土器	甕	弥生中期			(2.9)	黒褐色	黒褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	押捺、ナデ	ナデ					
第 111 図 4	H22	(4)	4SD-032	SD-032	弥生土器	甕	弥生中期			(2.9)	黒褐色	暗褐色	砂粒	○	押捺、刻み、ハケ調整	ハケ調整					
第 112 図 1	H22	(4)	4SD-033	SD-033	弥生土器	壺	弥生中期			(3.7)	暗赤褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	沈線、縄文	ナデ					
第 112 図 2	H22	(4)	4SD-033	SD-033	弥生土器	甕	弥生中期			(3.1)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	押捺、ナデ	押捺、ナデ					
第 112 図 3	H22	(4)	4SD-033	SD-033	弥生土器	甕	弥生中期			(1.8)	黒褐色	暗褐色	白色粒子	○	押捺、刻み	押捺、ナデ					
第 112 図 4	H22	(4)	4SD-033	SD-033	弥生土器	壺	弥生中期		(7.0)	(3.6)	褐色	暗褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質	△	ハケ調整	不明（剥落）					底部周縁部摩滅、内面剥落
第 112 図 5	H22	(4)	4SD-033	SD-033	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(3.0)	褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	△	ナデ	ナデ					内面コゲ付着
第 113 図 1	H22	(4)	4SD-038	SD-038	弥生土器	甕	弥生中期		(7.6)	(3.1)	褐色	淡褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ		断面		種実ではない	
第 114 図 1	H23	(5)	5SD-003	SD-003	弥生土器	壺	弥生後期			(1.1)	明褐色	明褐色	白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ナデ	ミガキ					
第 114 図 2	H23	(5)	5SD-003	SD-003	弥生土器	壺	弥生後期			(3.8)	褐色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ナデ、ミガキ					
第 114 図 3	H23	(5)	5SD-003	SD-003	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.0)	明褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文	ミガキ					
第 114 図 4	H23	(5)	5SD-003	SD-003	弥生土器	鉢	弥生後期			(2.8)	赤褐色	明褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ミガキ	外面				
第 114 図 5	H23	(5)	5SD-003	SD-003	弥生土器	台付甕	弥生後期		(9.0)	(7.2)	明褐色	明褐色	赤色粒子、白色粒子、砂粒（多）、白色針状物質	○	ヘラナデ	甕部ミガキ、脚部ヘラナデ		脚部	外面	キビ?	
第 120 図 1	H23	(5)	5SK-005	SK-005	弥生土器	壺	弥生後期			(2.4)	暗褐色	赤褐色	白色粒子（多）、白色針状物質	○	縄文、押捺	ミガキ					
第 124 図 1	H22	(4)	4SK-005（16E-14 付近）	SK-005	弥生土器	壺	弥生中期			(3.8)	淡褐色	淡褐色	砂粒（少）	○	沈線、縄文	ミガキ		胴部	外面	不明	
第 124 図 2	H22	(4)	4SK-005（16E-14 付近）	SK-005	弥生土器	壺	弥生中期			(2.5)	暗褐色	褐色	砂粒（少）	○	条痕	ヘラナデ					
第 124 図 3	H21	2	SA-001（6C ～ 8D）	SA-001	弥生土器	壺	弥生中期	(5.7)		(6.8)	褐色	暗褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、砂粒	○	縄文、ナデ	ナデ					
第 124 図 4	H21	1	4Hレンチ	T4-1	弥生土器	壺	弥生中期	(15.0)		(7.1)	赤褐色	赤褐色	砂粒	○	縄文、棒状浮文、刻み、ミガキ	ミガキ、ナデ	内外面				棒状浮文に焼成前穿孔
第 124 図 5	H22	(4)	4SK-028（12D-94 付近）	SK-028	弥生土器	壺	弥生中期			(1.6)	褐色	暗褐色	白色針状物質（少）	○	棒状浮文、ハケ調整、ナデ	ミガキ					
第 124 図 6	H22	(4)	4SK-082（9C-64 付近）	SK-082	弥生土器	壺	弥生中期			(3.4)	黒褐色～赤褐色	暗黄褐色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ、刻み、縄文、沈線	ナデ	外面				
第 124 図 7	H21	1	6D-21	6D-21	弥生土器	壺	弥生中期			(23.8)	赤褐色	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ナデ、沈線、縄文	ヘラナデ	外面				
第 124 図 8	H21	1	6D-21	6D-21	弥生土器	壺	弥生中期			(23.8)	赤褐色	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ナデ、沈線、縄文	ヘラナデ	外面				
第 124 図 9	H21	2	SA-001（6C ～ 8D）	SA-001	弥生土器	壺	弥生中期			(11.6)	褐色～暗赤褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ後ミガキ	外面				二次被熱
第 124 図 10	H21	1	6C-41	6C-41	弥生土器	高坏	弥生中期		(6.3)	(6.7)	にぶい黄橙色	暗黄褐色	白色粒子（多）、砂粒、白色針状物質（少）	○	ハケ調整後ミガキ	ミガキ、ナデ	内面				
第 124 図 11	H21	1	6C-61	6C-61	弥生土器	壺	弥生中期		7.7	(6.5)	明褐色	明褐色	白色粒子（多）、白色針状物質	○	ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 12	H22	(4)	1Hレンチ	1T	弥生土器	壺	弥生中期		(11.1)	(4.2)	にぶい橙色	暗褐色	白色粒子（多）	○	ハケ調整後ミガキ	ヘラナデ					外面摩耗
第 124 図 13	H21	2	7D-10	7D-10	弥生土器	壺	弥生中期		(7.9)	(4.8)	明褐色	にぶい黄橙色	砂粒（少）、白色針状物質	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 124 図 14	H21	1	6D-20 ～ 31	6D-20～31	弥生土器	壺	弥生中期		(7.2)	(4.3)	橙色	暗褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ?（摩耗）	ナデ					外面摩耗、底部周縁部摩滅
第 124 図 15	H22	(4)	9C-94	9C-94	弥生土器	壺	弥生中期		5.7	(5.5)	橙色	にぶい橙色	白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ		底部	外面	イネ	外面摩耗
第 124 図 16	H22	(4)	11C-58	11C-58	弥生土器	壺	弥生中期		5.6	(5.5)	黒褐色	黒褐色	砂粒、白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ	ヘラナデ後ミガキ					外面摩耗
第 124 図 17	H21	2	6C-98	6C-98	弥生土器	壺	弥生中期		(6.0)	(4.1)	明褐色	にぶい黄褐色	赤色粒子（多）、砂粒	○	ミガキ	ナデ?（剥落）					内面剥落
第 124 図 18	H22	(4)	4SH-006（14E-71・72）	SH-006	弥生土器	壺	弥生中期		(8.0)	(3.5)	黒褐色	暗褐色	砂粒、白色粒子（多）	○	ミガキ	不明（剥落）	外面				底部周縁部摩滅、内面剥落
第 124 図 19	H21	2	SI-043（6C-39 付近）	SI-043	弥生土器	壺	弥生中期		(7.8)	(10.7)	暗赤褐色	赤褐色	白色粒子、砂粒	○	ミガキ	不明（剥落）	外面				内面剥落
第 124 図 20	H21	2	6C-58	6C-58	弥生土器	壺	弥生中期		(6.8)	(2.3)	赤褐色	暗褐色	砂粒（多）	○	ナデ	ヘラナデ	外面				底部周縁部摩滅
第 124 図 21	H21	2	SA-001（6C ～ 8D）	SA-001	弥生土器	甕	弥生中期			(8.8)	暗褐色	暗褐色	白色粒子、砂粒	△	不明（剥落）	ヘラナデ					外面スス付着・剥落、内面コゲ付着
第 124 図 22	H21	2	6C-79	6C-79	弥生土器	甕	弥生中期		6.0	(3.7)	褐色	暗褐色	白色粒子、砂粒（多）、白色針状物質（少）	△	ナデ	ヘラナデ?（剥落）					底部に焼成後穿孔、内面剥落
第 124 図 23	H21	1	4Hレンチ	T4-1	弥生土器	甕	弥生中期		6.2	(3.1)	にぶい赤褐色	暗褐色	白色粒子、砂粒	○	ハケ調整、ヘラナデ、底部ナデ、底部網代圧痕	ナデ		断面		種実ではない	
第 124 図 24	H21	2	6C-99	6C-99	弥生土器	甕	弥生中期		(7.6)	(2.0)	暗褐色	淡褐色	砂粒	○	ナデ、底部木葉痕	ナデ					内面円形剥落
第 124 図 25	H21	2	6D-20	6D-20	弥生土器	甕	弥生中期		(5.4)	(2.7)	黒褐色	淡褐色	砂粒（少）	○	ハケ調整後ナデ、底部木葉痕	ヘラナデ					
第 124 図 26	H21	1	SK-114（8C-63・64 付近）	SK-114	弥生土器	甕	弥生中期		(9.0)	(5.0)	褐色	褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	不明（剥落）					底部周縁部摩滅、内面剥落
第 124 図 27	H21	1	SK-116（8D-90 付近）	SK-116	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(4.0)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子（多）、白色針状物質	○	ハケ調整後ナデ	ナデ					

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値 口径	底径	器高	色調 外面	内面	胎土	焼成	調整 外面	内面	赤彩	種実圧痕 位置		種実種類	備考
第 124 図 28	H21	2	SI-043 (6C-39 付近)	SI-043	弥生土器	甕	弥生中期		(6.4)	(5.5)	明褐色	にぶい黄色	砂粒	○	ハケ調整	ヘラナデ					内面摩耗
第 124 図 29	H21	1	6C-58	6C-58	弥生土器	甕	弥生中期		(5.6)	(5.0)	褐色	赤褐色	砂粒（少）	○	ハケ調整	ヘラナデ					
第 124 図 30	H21	1	SK-116 (8D-90 付近)	SK-116	弥生土器	甕	弥生中期		(6.8)	(4.4)	褐色	暗褐色	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 124 図 31	H21	2	SA-001 (6C ～ 8D)	SA-001	弥生土器	甕	弥生中期		(6.0)	(3.5)	暗褐色	赤褐色	砂粒	○	ハケ調整	ヘラナデ					
第 124 図 32	H21	1	1Hレンチ	T1-2	弥生土器	甕	弥生中期		(6.0)	4.7	黒褐色	暗褐色	砂粒	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 33	H22	(4)	4SD-035 (10D)	SD-035	弥生土器	甕	弥生中期		(6.0)	(4.5)	暗褐色	暗褐色	白色粒子	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 34	H21	1	1Hレンチ	T1-3	弥生土器	甕	弥生中期		(7.8)	(3.9)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ハケ調整後ナデ、底部木葉痕	ナデ					
第 124 図 35	H21	2	6C-98	6C-98	弥生土器	甕	弥生中期		(7.7)	(3.6)	黒色	淡褐色	砂粒	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 124 図 36	H21	1	4Hレンチ	T4-2	弥生土器	甕	弥生中期		(7.4)	(3.9)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒	○	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ		断面		種実ではない	
第 124 図 37	H21	1	SK-116 (8D-90 付近)	SK-116	弥生土器	甕	弥生中期		(6.2)	(3.5)	褐色	黒褐色	白色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	不明（摩滅）	ヘラナデ					内外面摩耗
第 124 図 38	H21	1	6C-52	6C-52	弥生土器	甕	弥生中期		6.9	(3.4)	にぶい黄橙色	黒褐色	白色粒子、白色針状物質（多）	○	ナデ	ミガキ					
第 124 図 39	H21	2	SA-001 (6C ～ 8D)	SA-001	弥生土器	甕	弥生中期		(6.4)	(3.2)	にぶい橙色	暗褐色	砂粒	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ		底部	外面	シダ植物	
第 124 図 40	H21	2	SI-043 (6C-39 付近)	SI-043	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(15.0)	褐色	褐色	砂粒	○	ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 41	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	弥生土器	甕	弥生中期		(9.0)	(2.3)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、砂粒、赤色粒子（少）	○	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ		底部 底部 底部	外面 外面 外面	不明 キビ 不明	
第 124 図 42	H21	1	SI-036B (6D-25 付近)	SI-036	弥生土器	甕	弥生中期		(7.7)	(3.1)	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子（多）、赤色粒子、砂粒	△	ハケ調整後ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 43	H21	2	SI-043 (6C-39 付近)	SI-043	弥生土器	甕	弥生中期		(7.0)	(10.4)	黒色	暗褐色	砂粒（少）	○	ミガキ	ヘラナデ					内面剥落
第 124 図 44	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	甕	弥生中期			(3.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色粒子（少）	○	不明（摩滅）	ナデ					外面摩耗
第 124 図 45	H21	2	SI-043 (6C-39 付近)	SI-043	弥生土器	甕	弥生中期		(6.8)	(10.2)	明褐色	暗褐色	赤色、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ハケ調整	ナデ					
第 124 図 46	H21	1	4Hレンチ	T4-1	弥生土器	甕	弥生中期		6.7	(2.0)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒	○	ヘラナデ	ヘラナデ					破断面摩滅
第 124 図 47	H21	2	6D-10	6D-10	弥生土器	甕	弥生中期		(6.3)	(2.5)	褐色	褐色	砂粒	○	ヘラナデ	ヘラナデ					
第 124 図 48	H21	1	4Hレンチ	T4-1	弥生土器	甕	弥生中期		5.0	(2.6)	褐色	褐色	砂粒（多）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 49	H21	1	2Hレンチ	T2-2	弥生土器	甕	弥生中期		(5.8)	(2.5)	暗褐色	暗赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 50	H21	1	7C-45	7C-45	弥生土器	甕	弥生中期		5.3	(2.2)	褐色	褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	ナデ	ヘラナデ					
第 124 図 51	H21	1	6C-40 ～ 51	6C-40～51	弥生土器	甕	弥生中期		(5.1)	(2.0)	暗褐色	にぶい橙色	砂粒、白色粒子	○	ハケ調整	ヘラナデ					
第 125 図 52	H21	2	SA-001 (6C ～ 8D)	SA-001	弥生土器	壺	弥生後期	5.1		(10.7)	明褐色	明褐色	赤色粒子、砂粒(少)	○	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ		肩部	外面	種実ではない	
第 125 図 53	H24	(6)	4SD-009 (12E ～ 14D)	SD-009	弥生土器	壺	弥生後期	(12.0)		(3.4)	明褐色	暗赤褐色	白色粒子（少）	○	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	内面				
第 125 図 54	H19		25H-53	25H-53	弥生土器	壺	弥生後期			(3.0)	暗赤褐色	暗赤褐色	砂粒（少）	○	縄文、押捺、棒状浮文	ナデ、押捺					
第 125 図 55	H24	(6)	6SK-126 (14E-15 付近)	SK-126	弥生土器	壺	弥生後期			(4.8)	赤褐色	赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、押捺、ミガキ	ミガキ	内外面				焼成前穿孔
第 125 図 56	H24	(6)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	弥生土器	壺	弥生後期			(4.5)	赤褐色	赤褐色	砂粒（少）	○	縄文、棒状浮文、ナデ	ミガキ	内面				内面剥落
第 125 図 57	H21	3	2SI-017 (22G-98 付近)	SI-017	弥生土器	壺	弥生後期			(2.8)	褐色	褐色	砂粒	○	棒状浮文、縄文、押捺	ヨコナデ					
第 125 図 58	H20		SI-025 (21F-79 付近)	SI-025	弥生土器	壺	弥生後期			(2.0)	褐色	赤褐色	砂粒	○	縄文、棒状浮文	ミガキ	内面				内面剥落
第 125 図 59	H20		19E-51	19E-51	弥生土器	壺	弥生後期			(2.3)	暗赤褐色	暗赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ミガキ、押捺	ミガキ	内外面				
第 125 図 60	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	壺	弥生後期			(2.1)	暗赤褐色	暗赤褐色	砂粒（少）	○	ヨコナデ、押捺	ナデ	内面				
第 125 図 61	H19		SD-001 (24G･25G)	SD-001	弥生土器	壺	弥生後期			(3.2)	褐色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、ナデ	ミガキ					
第 125 図 62	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-003	弥生土器	壺	弥生後期			(2.8)	明褐色	明褐色	白色粒子（少）	○	縄文	ミガキ					
第 125 図 63	H22	(4)	4SD-037 (14C ～ 14D)	SD-037	弥生土器	壺	弥生後期			(2.7)	褐色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	沈線、ミガキ	ミガキ	外面				
第 125 図 64	H22	(4)	4SK-103 (14D-65)	SK-103	弥生土器	壺	弥生後期			(2.2)	暗褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質	○	沈線	ナデ					内面剥落
第 125 図 65	H22	(4)	4SK-028 (12D-94 付近)	SK-028	弥生土器	壺	弥生後期			(2.9)	暗褐色	明褐色	砂粒	○	縄文、沈線、ミガキ	ヘラナデ	外面				
第 125 図 66	H22	(4)	3Hレンチ	3T	弥生土器	壺	弥生後期			(2.3)	淡 褐 色 ～ 黄褐色	淡褐色	赤色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	沈線、縄文、S字状結節文、ミガキ	ナデ	外面				
第 125 図 67	H22	(4)	4SK-103 (14D-65)	SK-103	弥生土器	壺	弥生後期			(2.7)	明褐色	明褐色	黄褐色粒子（多）、砂粒	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	不明（剥落）					内面剥落
第 125 図 68	H24	(6)	6SK-126 (14E-15 付近)	SK-126	弥生土器	壺	弥生後期			(2.7)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒	○	縄文、円形浮文	ナデ?（剥落）					内面剥落
第 125 図 69	H24	(6)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	弥生土器	壺	弥生後期			(3.1)	黒褐色	黒褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	S字状結節文、縄文、押捺						破断面摩滅、器台転用
第 125 図 70	H19		SD-003 (25G)	SD-003	弥生土器	壺	弥生後期		(6.8)	(1.5)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	白色粒子（少）	○	ミガキ	ミガキ					
第 125 図 71	H21	3	SD-012	SD-002	弥生土器	壺	弥生後期		(5.0)	(1.8)	明褐色	暗褐色	砂粒（少）	○	ミガキ	ナデ					
第 125 図 72	H22	(4)	4SK-084 (12C-46 付近)	SK-084	弥生土器	鉢	弥生後期	(13.8)		(5.9)	褐色	暗褐色	砂粒、白色針状物質	○	縄文、ミガキ	ミガキ					焼成前穿孔
第 125 図 73	H21	3	SD-026 (22G ～ 24F)	SD-003	弥生土器	鉢	弥生後期	(23.0)		(8.5)	暗褐色	赤褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	内外面				内外面スス付着
第 125 図 74	H22	(4)	4SK-041 (10E-10 付近)	SK-041	弥生土器	鉢	弥生後期			(6.0)	赤褐色	明褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ					
第 125 図 75	H21	1	6C-58	6C-58	弥生土器	鉢	弥生後期	(9.9)	4.5	5.2	褐色	褐色	砂粒、赤色粒子	○	縄文、S字状結節文、ミガキ	ミガキ					
第 125 図 76	H24	(6)	4SD-005 (13E ～ 15D)	SD-005	弥生土器	鉢	弥生後期			(3.5)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、白色針状物質（少）	◎	ハケ調整	ヘラナデ					破断面摩滅

挿図番号	調査年度		遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量・cm（）復元・現存値			色調		胎土	焼成	調整		赤彩	種実圧痕			備考
								口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		位置		種実種類	
第 125 図 77	H22	(4)	4SK-047 (10D-29 付近)	SK-047	弥生土器	鉢	弥生後期			(4.4)	褐色	褐色	白色粒子（少）	○	S字状結節文、網目状撚糸文	ミガキ					
第 125 図 78	H22	(4)	6T、13D-06	6T、13D-06	弥生土器	鉢	弥生後期	(11.0)		(5.4)	明褐色	明褐色	赤色粒子（多）、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					
第 125 図 79	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	鉢	弥生後期	(19.4)		(9.8)	明褐色	明褐色	赤色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ヘラナデ、雑なミガキ	ヘラナデ、雑なミガキ					
第 125 図 80	H21	3	2SD-001 (24G・24H)	SD-001	弥生土器	鉢	弥生後期		(1.8)	(5.0)	明褐色	にぶい橙色	砂粒、赤色粒子(少)	○	ミガキ	ミガキ					
第 125 図 81	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	甕	弥生後期			(2.3)	暗褐色	暗褐色	赤色粒子（少）	○	押捺、ナデ	ミガキ		口縁部 口縁部 口縁部 口縁部 口縁部 断面	外面 外面 内面 内面 内面	キビ イネ 種実ではない キビ キビ キビ	
第 125 図 82	H19		SD-001 (24G・25G)	SD-001	弥生土器	甕	弥生後期			(2.7)	褐色	褐色	白色針状物質（少）	○	押捺、ナデ	ヘラナデ					
第 125 図 83	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	甕	弥生後期		(7.6)	(2.0)	明褐色	明褐色	赤色粒子、白色粒子（多）	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ		底部 底部	外面 外面	キビ キビ	内面剥落
第 125 図 84	H19		SD-002 (24G ～ 25G)	SD-002	弥生土器	甕	弥生後期		(8.0)	(2.4)	明赤褐色	明褐色	白色粒子、赤色粒子（多）	○	ナデ	ヘラナデ					
第 125 図 85	H21	3	SD-026 (22G ～ 24F)	SD-003	弥生土器	甕	弥生後期		(4.7)	(1.8)	暗褐色	暗褐色	砂粒、赤色粒子(少)	○	ヘラケズリ後ミガキ	ヘラナデ					
第 125 図 86	H24	(6)	6SK-126 (14E-15 付近)	SK-126	弥生土器	甕	弥生後期		3.8	(1.0)	黒褐色	暗褐色	赤色粒子（多）、砂粒、白色針状物質（少）	○	ナデ	ハケ調整					
第 125 図 87	H19		SD-005 (29J ～ 31J)	SD-005	弥生土器	台付甕	弥生後期			(2.5)	橙色	橙色	白色粒子、赤色粒子（多）	○	ヘラケズリ	ヘラナデ					
第 125 図 88	H22	(4)	4SD-015 (12E)	SD-015	弥生土器	台付甕	弥生後期		(8.8)	(3.6)	にぶい橙色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ハケ調整、ヨコナデ	ヨコナデ					
第 127 図 1	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	坏	古墳後期	(13.0)		(5.6)	にぶい褐色	黒褐色	白色粒子、砂粒、白色針状物質	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 127 図 2	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	坏	古墳後期	(14.0)		(5.7)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ	ミガキ					外面摩耗
第 127 図 3	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	坏	古墳後期	(16.4)		(4.2)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（多）	◎	ミガキ、ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 127 図 4	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	坏	古墳後期	(14.2)		(4.3)	黒色	黒褐色	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質（少）	○	ミガキ	ミガキ					内外面黒色処理
第 127 図 5	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	鉢	古墳後期	(17.8)		(9.7)	明褐色	明褐色	白色粒子、白色針状物質（多）、砂粒	○	ヨコナデ後ミガキ、ヘラケズリ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ、ヘラナデ後ミガキ		口唇部 口縁部 体部	外面 内面 内面	種実ではない 種実ではない 種実ではない	
第 127 図 6	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	高坏	古墳後期		(10.0)	(5.0)	暗褐色	暗褐色	白色粒子、白色針状物質	○	ミガキ	ヘラナデ					
第 127 図 7	H21	2	SI-043	SI-043	土師器	甕	古墳後期		(8.4)	(15.4)	にぶい黄褐色	暗褐色	白色粒子	○	ヘラケズリ	ヘラナデ					外面摩耗・スス付着
第 128 図 1	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	坏	古墳中期	14.2		5.4	暗赤褐色	赤褐色	赤色粒子（多）、白色粒子（少）	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ナデ	内外面				内面剥落
第 128 図 2	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	坏	古墳中期	(13.2)		(2.7)	橙色	赤褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ナデ	内面				内外面摩耗
第 128 図 3	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	鉢	古墳中期	16.2	(5.0)	11.7	にぶい橙色	黄橙色	白色粒子、赤色粒子、白色針状物質（少）	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	内面	体部	内面	イネ	
第 128 図 4	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	甕	古墳中期	17.2	6.4	28.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	白色粒子、砂粒	○	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ					外面スス付着・擦痕
第 128 図 5	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	甕	古墳中期	14.5	(6.5)	(25.5)	橙色	橙色	白色粒子（多）、砂粒、白色針状物質	○	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ					外面スス付着
第 128 図 6	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	甕	古墳中期		(7.0)	4.3	暗褐色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子、砂粒	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ					外面スス付着
第 128 図 7	H21	3	2SI-011	SI-011	土師器	甕	古墳中期		(6.8)	(1.9)	明褐色	にぶい黄橙色	砂粒	◎	ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					
第 130 図 1	H22	(4)	4SD-011 (12D・12E)	SD-011	土師器	坏	古墳中期	(13.8)		(4.4)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ヨコナデ、ナデ?（摩耗）	ヨコナデ、ナデ?（摩耗）					内外面摩耗
第 130 図 2	H21	1	6D-21	6D-21	土師器	坏	古墳中期	(13.8)		3.0	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子（少）	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	内外面				内外面摩耗
第 130 図 3	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	土師器	坏	古墳後期	(11.8)		(3.1)	にぶい黄橙色	暗褐色	赤色粒子（少）	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					内外面黒色処理・摩耗
第 130 図 4	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	土師器	坏	古墳後期		(7.0)	(3.7)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子（少）	○	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	ミガキ					内外面摩耗
第 130 図 5	H22	(4)	4SK-068 (10D-66 付近)	SK-068	須恵器	坏蓋	古墳後期	9.8		2.9	暗灰色	暗灰色	緻密	◎	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整					
第 130 図 6	H21	3	2SI-017 (22G-98 付近)	SI-017	土師器	高坏	古墳中期			(2.0)	橙色	橙色	赤色粒子、砂粒(少)	○	ナデ	ナデ	内外面				
第 130 図 7	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	土師器	高坏	古墳中期			(3.9)	赤褐色	赤褐色	赤色粒子（少）	○	ナデ	ナデ	内外面				
第 130 図 8	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	土師器	高坏	古墳中期			(3.6)	赤褐色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子	○	ナデ	ナデ	内外面				
第 130 図 9	H21	2	6D-10	6D-10	土師器	壺	古墳中期	(11.1)	2.4	7.8	にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒子、砂粒（多）	○	ハケ調整後ミガキ、ヘラケズリ後ミガキ	ハケ調整後ミガキ、ヘラナデ後ミガキ					
第 130 図 10	H21	3	H21-3 一括	SH-001	土師器	甕	古墳後期	(17.6)		(7.5)	淡褐色	淡褐色	赤色砂粒	○	ヨコナデ	ヘラナデ					
第 130 図 11	H22	(4)	4SK-038 (12D-00 付近)	SK-038	須恵器	甕	古墳後期			(3.5)	灰色	暗灰色	白色粒子（少）	○	タタキ目、カキ目	当て具痕					
第 130 図 12	H22	(4)	4SK-047 (10D-19 付近)	SK-047	須恵器	甕	古墳後期			(4.1)	暗灰色	灰色	砂粒（少）	○	タタキ目	当て具痕					
第 130 図 13	H21	2	6D-11	6D-11	土師器	甕	古墳中期		5.8	(2.1)	褐色	褐色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ナデ	ヘラケズリ後ナデ					
第 130 図 14	H21	1	SD-027 (6C ～ 8E)	SD-027	土師器	甕	古墳中期		(5.0)	(1.7)	暗褐色	明褐色	砂粒（少）	○	ヘラケズリ	ヘラナデ					
第 130 図 15	H21	3	2SI-017 (22G-98 付近)	SI-017	土師器	甕	古墳中期		(6.0)	(3.4)	褐色	赤褐色	砂粒	○	ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ		断面		イネ	
第 131 図 1	H23	(5)	5SI-001	SI-001	土師器	坏	奈良・平安	(12.0)		(3.5)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（多）	○	ロクロ調整	ロクロ調整					
第 131 図 2	H23	(5)	5SI-001	SI-001	土師器	坏	奈良・平安		(6.4)	(2.8)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、白色針状物質（少）	○	ロクロ調整、回転ヘラケズリ、底部回転糸切り	ロクロ調整					
第 131 図 3	H23	(5)	5SI-001	SI-001	須恵器	甕	奈良・平安			(4.9)	黒褐色	黒褐色	白色粒子（多）、砂粒、白色針状物質	○	タタキ目	ナデ					

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	種類	器種	時期等	法量:cm （）復元・現存値			色調		胎土	焼成	調整		赤彩	種実圧痕			備考
							口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		位置		種実種類	
第 131 図 4	H23 (5)	5SI-001	SI-001	須恵器	甕	奈良・平安			(6.2)	褐色	褐色	白色粒子、白色針状物質（少）	○	タタキ目	ナデ					
第 133 図 1	H23 (5)	5SD-001	SD-001	土師器	坏	奈良・平安	15.2	6.2	5.3	黒色～明褐色	黒色～明褐色	白色粒子、白色針状物質、砂粒	○	ロクロ調整、手持ちヘラケズリ	ミガキ		体部	外面	アサ?	内面黒色処理
第 133 図 2	H23 (5)	5SD-001	SD-001	土師器	坏	奈良・平安	(11.0)	(3.6)	4.2	明褐色	暗褐色	赤色粒子、白色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	◎	ロクロ調整、手持ちヘラケズリ	ロクロ調整					
第 133 図 3	H23 (5)	5SD-001	SD-001	土師器	甕	奈良・平安	(12.0)		(3.5)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（多）	◎	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ					
第 135 図 1	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	土師器	坏	奈良・平安	(12.0)		(3.7)	淡褐色	淡褐色	砂粒、白色針状物質（少）	◎	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整					外面に墨書
第 135 図 2	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	土師器	坏	奈良・平安		(7.6)	(1.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒、白色針状物質（少）	○	ロクロ調整、手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ	ロクロ調整					
第 135 図 3	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	土師器	坏	奈良・平安		(7.0)	(2.1)	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒（少）	○	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整					内面摩耗
第 135 図 4	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	土師器	坏	奈良・平安		(7.0)	(2.0)	橙色	橙色	砂粒（多）、赤色粒子	◎	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整					
第 135 図 5	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	土師器	甕	奈良・平安			(2.3)	にぶい橙色	橙色	砂粒（多）	◎	ヨコナデ	ヨコナデ					
第 135 図 6	H20	SK-069 (20F-30 付近)	SK-069	須恵器	甕	奈良・平安	(17.4)		(6.5)	灰色	灰色	白色粒子、赤色粒子（少）	○	ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、ナデ					
第 135 図 7	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	須恵器	甕	奈良・平安			(6.3)	黒褐色	暗灰褐色	白色粒子（多）、砂粒	○	ヨコナデ、タタキ	ヘラナデ					
第 135 図 8	H23 (5)	4トレンチ	トレンチ4	須恵器	甕	奈良・平安			(5.4)	暗褐色	暗褐色	砂粒（多）	○	ヨコナデ、タタキ	ナデ					

第６表　掲載土製品一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	遺物名	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備考
第 25 図 10	H19	SI-002	SI-002	紡錘車	(41)	67	13	37.7	半分欠損
第 29 図 16	H19	SI-004	SI-004	棒状土製品	79	28	18	49.0	
第 32 図 10	H19	SI-007	SI-007	棒状土製品	19	22	12	4.8	
第 70 図 11	H21-3	2SI-014	SI-014	勾玉	34	24	15	8.8	孔径3mm
第 70 図 12	H21-3	2SI-014	SI-014	勾玉	32	17	11	3.1	孔径2mm
第 125 図 89	H21-1	7C-04	7C-04	土器片利用円板	36	34	65	10.5	
第 135 図 9	H23	5トレンチ	トレンチ5	瓦	63	84	23	134.6	砥石転用
非掲載	H21-2	SI-043	SI-043	支脚					崩壊（柱状）
非掲載	H21-3	2SI-011	SI-011	支脚					崩壊（枕状）

第７表　掲載ガラス製品一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号（報告時）	遺構番号（調査時）	遺物名	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備考
第 98 図 5	H19	SK-007（SS-002）	SK-007	小玉	9	9	4	0.3	コバルトブルー

第３章　自然科学分析

第１節　レプリカ法による土器種実圧痕の同定

佐々木由香・米田恭子・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

１　はじめに

千葉県袖ケ浦市に所在する文脇遺跡は、弥生時代中期から後期を中心とした集落跡である。出土した縄文時代早期、弥生時代中期・後期、古墳時代中期・後期、平安時代の土器の表面もしくは断面に種実の圧痕と思われる痕跡が確認された。ここでは、レプリカ法によって採取された種実圧痕のレプリカの同定を行った。

２　試料と方法

試料は、104個体の土器に確認された種実圧痕と推定される圧痕175点である。縄文時代早期と平安時代の土器が各1個体のほかは、すべて弥生時代もしくは古墳時代の土器である。

抽出した圧痕について、千葉県教育庁教育振興部文化財課森宮分室において実体顕微鏡で観察を行い、この時点で明らかに種実圧痕ではない試料は分析の対象から除外した。また、観察中に見つかった種実圧痕の可能性がある圧痕も分析対象に加えた。種実圧痕もしくは何らかの同定ができる可能性のある圧痕について、丑野・田川（1991）等を参考に、以下の手順で圧痕のレプリカを作製した。まず、圧痕内を水で洗い、付着物を除去した。次に、土器の保護のため、パラロイドB72の９％アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、印象剤に用いるシリコン樹脂（JMシリコン レギュラータイプ）を注射器に入れて圧痕部分に充填し、レプリカを作製した。その後、アセトンを用いて圧痕内および周辺の離型剤を除去した。

次に、種実圧痕もしくは何らかの同定ができる可能性のある圧痕レプリカ89点（土器63個体）について、実体顕微鏡で再度同定を行った後、特徴的な圧痕について走査型電子顕微鏡（超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510）で観察および写真撮影を行った。また、圧痕レプリカの大きさをデジタルノギスで小数第2位まで計測した。土器および圧痕レプリカは、千葉県教育庁教育振興部文化財課に保管されている。

３　結果

圧痕レプリカ89点のうち65点が、何らかの圧痕と同定できた。木本植物ではニワトコ？核のみ1分類群、草本植物ではイネ籾・籾殻・種子（頴果）とキビ（？を含む）有ふ果、アワ有ふ果、マメ科？種子、アサ（？を含む）核、シソ属？果実の６分類群、シダ植物裂片１分類群の、計８分類群が同定された。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかったが何らかの種実圧痕である一群を不明種実、種実圧痕かどうか不明な一群を不明種実？とした。種実の他には不明の木材が得られたが、同定の対象外とした。残る26点は、種実の圧痕ではなかった（表１、付表１）。

不明種実もしくは不明種実？を除く種実圧痕の産出数は、イネが35点で最も多く、キビ（？を含む）が９点、アサ（？を含む）が５点、マメ科？が２点、ニワトコとアワ、シソ属？、シダ植物が各１点であった。

以下では、種実の圧痕について分類群ごとに記載を行い、同定の根拠とする。

（1）ニワトコ？　*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana*（Miq.）H.Hara var. *sieboldiana* Miq.？　核　レンプクソウ科

圧痕全体が採取されていないが、上面観は扁平、側面観は楕円形で基部がやや尖ると推定される。本来は基部に小さな着点があるが、レプリカでは観察できない。縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走るが、レプリカではやや不明瞭である。

第８表　文脇遺跡の圧痕レプリカの同定結果

分類群	部位	縄文早期	弥生中期	弥生後期	古墳中期	古墳後期	平安	合計
ニワトコ？	核			1				1
イネ	籾			8	1			9
	籾殻		3	11	1			15
	種子		2	9				11
キビ	有ふ果		1	7				8
キビ？	有ふ果			1				1
アワ	有ふ果			1				1
マメ科？	種子		1	1				2
アサ	核			4				4
アサ？	核						1	1
シソ属？	果実		1					1
シダ植物	裂片		1					1
不明	種実		3	2				5
	種実？	1	2					3
	木材			2				2
合計		1	14	47	2	0	1	65

（2）イネ　*Oryza sativa* L.　籾・籾殻・種子（頴果）　イネ科

籾は上面観が楕円形で、側面観が長楕円形。２条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。試料No.26には、先端に芒が残り、果柄側は残存していない。籾殻とした試料No.16bは、扁平な形態と隆起が顕著な点から判断して、しいなの可能性もある。試料No.２は籾殻の内面側である。種子（頴果）は上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が脱落した窪みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。試料No.10は２本の縦溝が明瞭でない。縦方向の浅い溝が不明瞭な個体は、水分で膨張したか、炊飯された状態の可能性がある。

（3）キビ/キビ？　*Panicum miliaceum* L. / *P. miliaceum* L.？　有ふ果　イネ科

内外頴が観察でき、球形。先端はやや尖り、内頴が膨らむ。表面は平滑。表面の長細胞は確認できていない。やや小型で内外頴が不明瞭な個体はキビ？とした。

（4）アワ　*Setaria italica* P.Beauv.　有ふ果　イネ科

内外頴が観察でき、紡錘形。内頴と外頴に独立した微細な乳頭突起がある。アワの場合、外頴の乳頭突起は直径8-15μmで小さく、その基部が畝状に盛り上がることはない。一方、エノコログサ属の場合は乳頭突起の直径が15-20μmで大きい場合が多く、その基部は畝状に盛り上がる。

（5）マメ科？　Fabaceae sp.？　種子　マメ科

やや変形しているが、上面観・側面観ともに楕円形、表面は平滑。臍は観察できないが、臍側と思われる側面は直線的になるため、マメ科？とした。

（6）アサ／アサ？　*Cannabis sativa* L. / C. sativa L.？　核　アサ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の皺がある。試料No.173は核が割れ、内部の胚が見えている状態と推定されるため、アサ？とした。

（7）シソ属？　*Perilla* sp.？　果実　シソ科

いびつな球形。完形ならば端部はくちばし状にやや突出し、円形の着点があるが、レプリカでは観察できない。表面には、不規則で多角形の低い網目状隆線がある。臍は観察できず、全体形も不明であるため、

シソ属？とした。

（８）シダ植物　Fern　裂片

長楕円形。鈍頭で全縁。葉脈は２～３叉状分岐し、平行に並ぶ。裏面は観察できないが、裂片の縁が巻き込んでいるように観察されるため、ワラビの可能性がある。

４　考察

土器に見られた圧痕のレプリカを同定したところ、レプリカを採取した89点のうち65点は何らかの圧痕と同定され、65点のうち55点は科以上の同定が可能であった。木本植物ではニワトコ？核のみ１分類群、草本植物ではイネ籾・籾殻・種子（頴果）とキビ（？を含む）有ふ果、アワ有ふ果、マメ科？種子、アサ（？を含む）核、シソ属？果実の６分類群、シダ植物裂片１分類群の、計８分類群が同定された。シダ植物以外は、いずれも食用として利用可能な種実であった。シダ植物裂片の圧痕は、その形態から成熟したワラビの裂片の圧痕の可能性がある。シダ植物は枯死すると全体が収縮するため、自然の営力では裂片の状態にならない。したがって、裂片の状態にして土器内に混ぜた可能性や、何かの作業中にちぎれた裂片が粘土に混ざり込んだ可能性が考えられる。

同定された圧痕がついていた土器の時期ごとの種実圧痕は、縄文時代早期で不明種実？が１点、弥生時代中期でイネが５点、キビとマメ科？、シソ属？、シダ植物が各１点、弥生時代後期でイネが28点、キビ（？を含む）が８点、アサが４点、ニワトコとアワ、マメ科？が各１点、古墳時代中期でイネが２点、平安時代でアサ？が１点であった。古墳時代後期の土器からは種実圧痕が見つからなかった。また、圧痕が特定の部位や位置に偏在する傾向は見られなかった。

文脇遺跡では弥生時代の土器にイネの圧痕が多く確認される傾向があった。１個体に複数のイネの圧痕が確認される場合もあり、文脇遺跡では弥生時代後期の甕や壺、合計６個体に複数のイネの圧痕が確認された。同様に、キビの圧痕も弥生時代後期の甕２個体に複数の圧痕が確認された。種実圧痕が複数確認された土器は、土器胎土内にも種実圧痕が残っている可能性がある。また、確認された種実圧痕のうち、弥生時代後期の４点のアサの圧痕は、他地域の弥生時代の遺跡ではあまり確認されていないため、文脇遺跡ないしこの地域の特色を示している可能性がある。

引用文献
丑野　毅・田川裕美　1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』第24号　日本文化財科学会

第９表　文脇遺跡出土の土器圧痕の同定結果（単位:mm、括弧内は残存値を表す）

分析No.	試料No.	遺構番号	図版番号	時期	器種	圧痕位置		同定結果		SEM	分析図版No.	法量			備考
								分類群	部位			長さ/長軸	幅/短軸	厚さ	
1	1	SI-001	第 24 図 1	弥生後期	鉢	胴部	内面	ニワトコ？	核	●	1	(2.38)	1.61		
2	2		第 25 図 3	弥生後期	壺	口縁部	内面	イネ	籾殻	●	3	(4.94)	2.14		籾殻の裏側の部分
3	3		第 25 図 9	弥生後期	甕	頸部付近	外面	種実ではない	－	－	－				
4	5a	SI-002				体部	外面	アサ	核	－	－	3.20	2.90	2.38	
5	5b		第 25 図 4	弥生後期	鉢	底部	外面	種実ではない	－	－	－				
6	5c					底部	外面	種実ではない	－	－	－				
7	6	SI-003	第 27 図 9	弥生後期	甕	胴部	外面	アサ	核	－	－	3.62	3.12	2.54	
8	7	SI-004	第 29 図 1	弥生後期	壺	口縁部	外面	アワ	有ふ果	●	12	2.14	1.52		
9	8		第 29 図14	弥生後期	ミニチュア（鉢）	体部	外面	イネ	籾殻	－	－				
10	9		第 35 図 5	弥生後期	壺	胴部	内面	イネ	籾	－	－	6.70	2.80	2.42	
11	10	SI-010	第 35 図 4	弥生後期	壺	肩部	外面	イネ	種子	●	6	(5.00)	3.22		
12	11		第 36 図 7	弥生後期	鉢	体部	内面	イネ	籾	－	－	8.92	3.88		
13	14a	SI-030	第 49 図 1	弥生後期	壺	胴部	内面	イネ	種子	●	7	6.64	3.36		
14	14b					底部	外面	イネ	籾	－	－	(3.72)	2.84		
15	15	SI-034	第 52 図 2	弥生後期	甕	底部	外面	イネ	籾	－	－	(5.75)	2.80		
16	16a					胴部	内面	イネ	種子	－	－	(3.88)	2.92		
17	16b		第 50 図 5	弥生後期	甕	胴部	内面	イネ	籾殻	●	4	5.40	3.21		秕？
18	17	SI-031				胴部	外面	イネ	種子	－	－	5.75	3.48		
19	18a		第 50 図 1	弥生後期	壺	口縁部	内面	不明	木材	－	－				
20	18b					口縁部	内面	マメ科？	種子	●	13	4.55	2.56		
21	19	SI-035	第 53 図 1	弥生後期	壺	底部	内面	イネ	籾殻	－	－	3.86	2.77		
22	24	SI-039	第 56 図 4	弥生中期	甕	底部	内面	種実ではない	－	－	－				
23	25	2SI-002	第 59 図 1	弥生後期	器台	脚部	内面	イネ	籾	－	－	6.94	3.62		
24	26	2SI-007	第 64 図 4	弥生後期	甕	底部	外面	イネ	籾	●	2	6.34	2.56		芒残存
25	27					底部	外面	イネ	籾殻	－	－	(4.01)	(1.14)		
26	28	2SI-014	第 70 図 3	弥生後期	壺	胴部	外面	イネ	籾殻	●	5	(5.01)	(2.26)		
27	29	2SI-020	第 74 図 3	弥生後期	鉢	体部	外面	イネ	種子	－	－	(1.87)	2.51		
28	30	3SI-027	第 80 図 3	弥生後期	壺		断面	イネ	籾殻	－	－	(3.78)	(1.35)		
29	31					胴部	外面	種実ではない	－	－	－				
30	32		第 82 図 6	弥生後期	広口壺	胴部	外面	イネ	籾殻	－	－	(3.48)	(2.07)		
31	34					口縁部	内面	イネ	種子	－	－	5.24	3.28		
32	38	3SI-028	第 82 図 9	弥生後期	甕	胴部	内面	イネ	籾	－	－	5.12	3.18		
33	40					頸部	外面	イネ	籾殻	－	－	(4.45)	(2.16)		
34	41		第 81 図 2	弥生後期	壺	肩部	内面	イネ	種子	－	－	5.49	2.82		
35	42						断面	イネ	籾殻	－	－	(4.62)	(2.31)		
36	45		第 87 図 2	弥生中期	壺		断面	不明	種実	●	19	(3.12)	(3.98)		
37	46		第 88 図 52	弥生中期	甕	胴部	内面	イネ	種子	－	－	3.92	2.90		
38	49		第 88 図 46	弥生中期	甕		断面	植物ではない	－	●		(2.11)	2.38		
39	52		第 88 図 40	弥生中期	甕	胴部	内面	イネ	籾殻	－	－	(2.36)	(1.30)		
40	60	4SI-003	第 88 図 43	弥生中期	甕		断面	シソ属？	果実	●	17	(1.78)	(1.76)		接合しない同一個体
41	62						断面	不明	種実？	●	24	3.61	2.74		
42	71		第 88 図 41	弥生中期	甕		断面	種実ではない	－	－	－				
43	74		第 87 図 10	弥生中期	壺		断面	マメ科？	種子	●	14	(5.54)	4.58		臍は見えない
44	75a	5SI-002	第 89 図 7	弥生後期	甕		断面	種実ではない	－	－	－				接合しない同一個体
45	76		第 89 図 6	弥生後期	鉢		断面	不明	種実	●	20	(2.61)	2.61		
46	77	5SI-004	第 91 図 1	弥生後期	壺		断面	キビ	有ふ果	●	9	2.66	1.96		接合しない同一個体
47	79		第 91 図 2	弥生後期	鉢		断面	種実ではない	－	●		2.63	(2.09)		
48	80	7SI-003	第 92 図 1	弥生後期	壺		断面	種実ではない	－	●		1.84	1.66		
49	81	7SI-005	第 94 図 1	弥生後期	壺	胴部	外面	アサ	核	－	－	(2.84)	2.82	2.38	
50	82	SS-001	第 96 図 1	弥生後期	甕	胴部	内面	不明	木材	－	－				
51	83					胴部	内面	イネ	籾殻	－	－	(2.81)	(1.40)		

分析No.	試料No.	遺構番号	図版番号	時期	器種	圧痕位置		同定結果		SEM	分析図版No.	法量			備考
								分類群	部位			長さ/長軸	幅/短軸	厚さ	
52	84	SS-002	第 98 図 1	弥生後期	壺	胴部	外面	種実ではない	―	―	―				
53	85					胴部	外面	イネ	種子	―	―	(2.70)	2.27		
54	86					胴部	外面	イネ	種子	●	8	3.38	1.84		
55	87					底部	外面	種実ではない	―	●		2.46	1.35		
56	89	SS-003	第 99 図 2	弥生後期	甕		断面	不明	種実	●	21	1.90	1.56		
57	90		第 99 図 5	弥生後期	甕	底部	内面	アサ	核	●	15	3.27	(2.40)	(2.04)	
58	92	SS-006	第 104 図 20	弥生中期	ミニチュア(甕)		断面	イネ	種子	―	―	3.90	2.22		
59	101	SS-008	第 106 図 7	弥生中期	甕	底部	外面	イネ	籾殻	―	―	(4.88)	(2.48)		
60	103	SK-098	第 104 図 13	弥生中期	壺		断面	種実ではない	―	―	―				
61	106	SD-029	第 107 図 4	弥生中期	甕	胴部	外面	種実ではない	―	―	―				
62	108	4SD-031	第 110 図 5	弥生中期	甕	底部	外面	種実ではない	―	―	―				
63	111	4SD-032	第 111 図 1	弥生中期	壺		断面	種実ではない	―	―	―				
64	114	4SD-038	第 113 図1	弥生中期	甕		断面	種実ではない	―	―	―				
65	116	5SD-003	第 114 図5	弥生後期	台付甕	脚部	外面	キビ？	有ふ果	●	11	3.24	2.30		
66	119	4SK-005	第 124 図1	弥生中期	壺	胴部	外面	不明	種実	●	23	3.13	(1.86)		
67	122	SD-002	第 125 図83	弥生後期	甕	底部	外面	キビ	有ふ果	―	―	2.61	2.00		
68	123					底部	外面	キビ	有ふ果	―	―	(2.48)	2.08		
69	125		第 125 図81	弥生後期	甕	口縁部	外面	キビ	有ふ果	―	―	(2.38)	(1.81)		
70	126					口縁部	外面	イネ	籾	―	―	5.91	3.26		
71	127					口縁部	内面	種実ではない	―	―	―				
72	128					口縁部	内面	キビ	有ふ果	●	10	2.66	2.20		
73	129					口縁部	内面	キビ	有ふ果	―	―	2.45	2.11		
74	130						断面	キビ	有ふ果	―	―	(2.00)	2.10		
75	132	SD-027	第 124 図41	弥生中期	甕	底部	外面	不明	種実？	●	25	2.37	2.46		
76	133					底部	外面	キビ	有ふ果	―	―	(2.15)	2.15		
77	134					底部	外面	不明	種実	●	23	(2.15)	2.14		
78	135	SA-001	第 124 図39	弥生中期	甕	底部	外面	シダ植物	裂片	●	18	(9.95)	4.08		
79	136		第 125 図52	弥生後期	壺	肩部	外面	種実ではない	―	―	―				
80	138	H21 4トレンチ	第 124 図36	弥生中期	甕		断面	種実ではない	―	―	―				
81	141		第 124 図23	弥生中期	甕		断面	種実ではない	―	―	―				
82	148	9C-94	第 124 図15	弥生中期	壺	底部	外面	イネ	籾殻	―	―	6.64	2.70		
83	151	SI-043	第 127 図5	古墳後期	鉢	口唇部	外面	種実ではない	―	―	―				
84	153					口縁部	内面	種実ではない	―	―	―				
85	155					体部	内面	種実ではない	―	―	―				
86	165	2SI-011	第 128 図3	古墳中期	鉢	体部	内面	イネ	籾殻	―	―	2.38	1.59		
87	169	2SI-017	第 130 図15	古墳中期	甕		断面	イネ	籾	―	―	(4.88)	3.16		
88	173	5SD-001	第 133 図1	平安	坏	体部	外面	アサ？	核	●	16	3.60	3.14		アサ核の裏側
89	175	3SI-027	第 21 図4	縄文早期	深鉢		断面	不明	種実？	●	26	1.98	1.81		撚糸文

第４章　まとめ

第１節　旧石器時代

今回の調査では、３地点から旧石器が出土した。このうち２地点で、Ⅶ層から剥片とⅨ層から台形様石器が単独で出土している。比較的まとまって石器が出土した地点は１地点のみで、Ⅴ層～Ⅶ層の範囲から13点が出土しており、ブロックとしては小規模である。また出土した石器は、１点に二次加工が認められるほかは、全て剥片であった。石材としては13点中９点が頁岩で、頁岩の比率が高い。

これまでの文脇遺跡における旧石器時代の調査成果を概観すると、昭和63年度の県財団調査区においては、単独出土１地点を含む４地点から小規模な石器集中地点が確認された。このうち石器集中地点Ⅱからは、石錐や石核を含む石器63点がⅨa～Ⅸc層から出土し、石器集中地点Ⅲからは、台形様石器、石錐、石斧など57点が、同じくⅨa～Ⅸc層から出土している。

また、君津郡市文化財センターの調査区でも、ごく少量だが４地点から旧石器が出土し、６地点から炭化物が検出された。石器は、Ⅴ層～Ⅶ層からナイフ形石器、Ⅶ層からスクレイパー等が出土したほか、上層遺構覆土中等から27点の旧石器が出土し、Ⅲ層に帰属する遺物と考えられている。

このほか上泉遺跡として調査が行われた地点からも、小規模であるが単独出土地点を含め５地点から石器が出土している。このうち第１ブロックからは黒曜石を主体として、25点の剥片等が出土している。

このように文脇遺跡の所在する台地上には、大規模な石器集中地点は見られないものの、広範囲に旧石器時代遺物集中地点が展開するものと考えられる。また、出土遺物層位もⅢ層からⅨ層にいたるまで各層で検出されていることから、この台地が長期にわたり利用され続けていたことを示している。

第２節　縄文時代

上泉遺跡・上ノ山遺跡として調査が行われた地点を含めた文脇遺跡全体で、これまでに検出された縄文時代の遺構は、陥穴23基、土坑３基、竪穴住居跡４軒であった。陥穴23基の内訳は、平面形が細長くて幅の狭いTピットと称される形態のものが19基、平面形は楕円で底面にピットを伴うもの１基、その他平面形は様々であるが、深く掘り込まれていることから陥穴と判断したもの３基となる。遺構の分布状況は１か所に集中する状態ではなく、広範囲にわたって散在している。出土遺物が伴わないことから時期を決定することはできないが、これまでの調査成果から概ね早期の範疇と考えられる。早期の遺物としては、撚糸文期、沈線文期、条痕文期の土器が若干出土しているが、竪穴住居跡や炉穴は未検出であり、当遺跡周辺が生活域としてよりも狩猟の場として利用されていたものと想定される。

君津郡市文化財センターの調査区で検出された竪穴住居跡４軒は全て前期に帰属すると考えられ、１軒は関山式期、３軒は諸磯式期に比定されている。これらの竪穴住居跡は近接した位置から検出され、関山式期とされる円形土坑１基も竪穴住居跡に近接している。これら前期の遺構が集中している地点は、千葉・鴨川線現道部分に近い台地中央部分であり、該期の小集落が展開していたと考えられる。

これまでの調査でも、上ノ山遺跡から中期加曽利EⅡ式土器が１点出土している以外は、中期の遺構・遺物は全く検出されていない。第１章第２節「遺跡の歴史的環境」の項でも述べたように、文脇遺跡の周辺遺跡においても中期の遺構・遺物が欠落する傾向が指摘できる。後期では堀之内式、加曽利B式、晩期

では安行３a・３c式、前浦式の土器が出土しているが、加曽利B式以降の遺物は松川に近い台地北端に分布の中心が想定される。

第３節　弥生時代

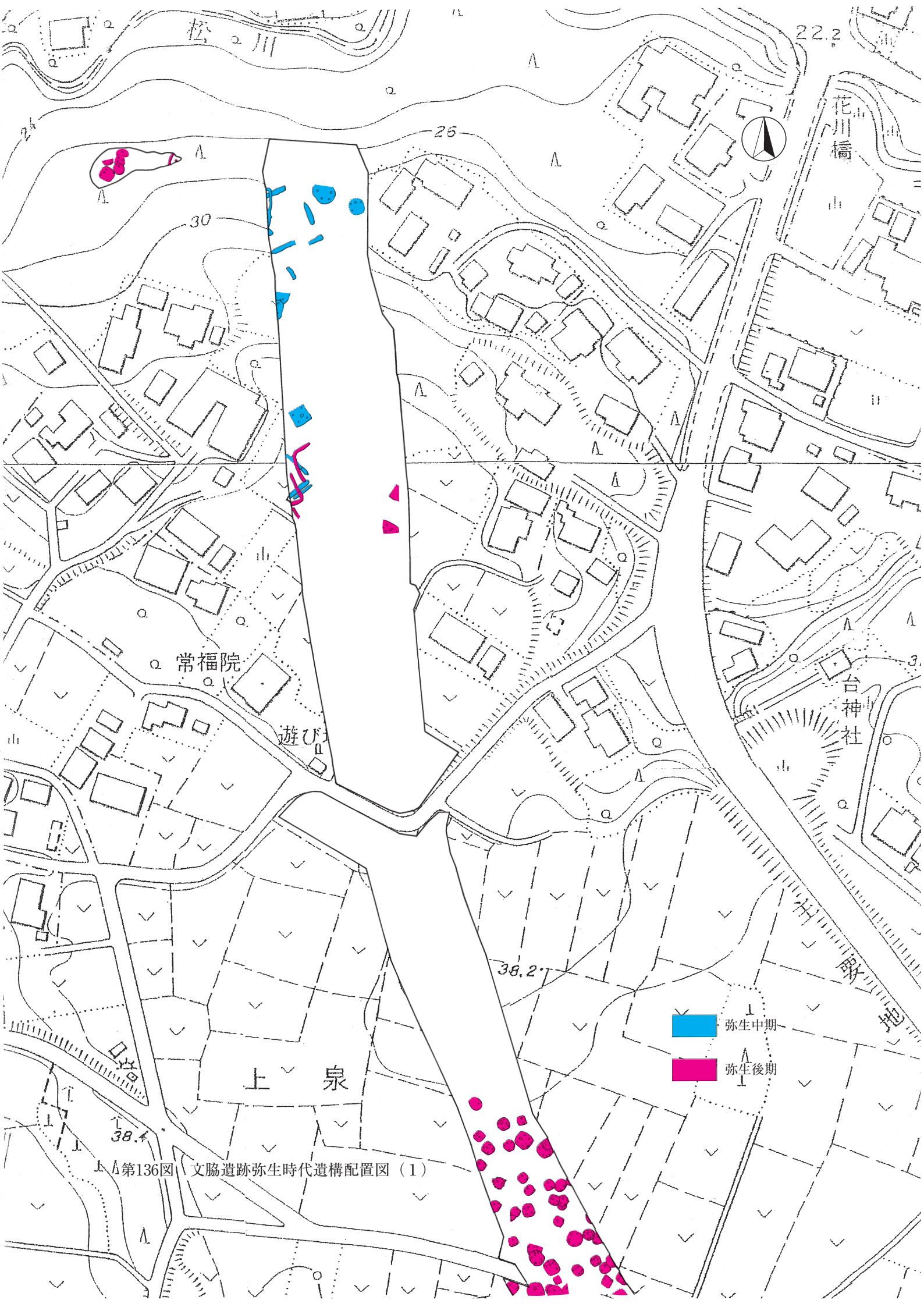
弥生時代の遺構として、中期の竪穴住居跡５軒、方形周溝墓７基、後期の竪穴住居跡60軒、方形周溝墓７基、土坑10基が検出された。これまで調査が行われた上泉遺跡、上ノ山遺跡を含めた文脇遺跡全体での遺構検出数は、中期が竪穴住居跡６軒、方形周溝墓16基、後期が竪穴住居跡438軒、方形周溝墓13基（重複部分除く）、土坑11基、溝８条となる。

はじめに、各時期の集落域と墓域の展開、水田可耕地との関係について整理することとする。

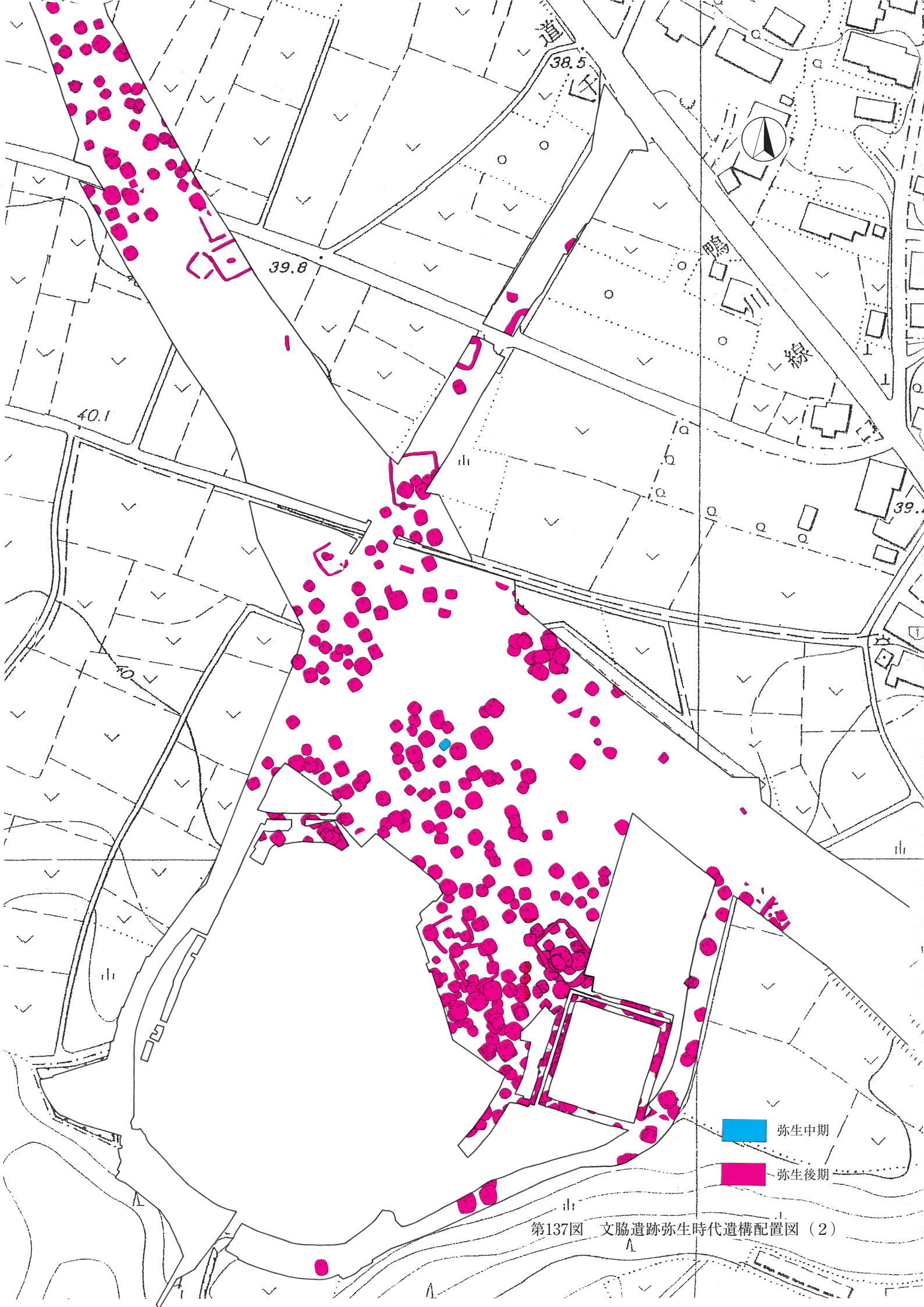
中期の遺構は台地北端部に集中しており、台地下を流れる松川流域の沖積平野を水田可耕地として想定することができる。今回検出された竪穴住居跡５軒、方形周溝墓７基は、浅い谷を隔てて大きく南北２つのグループに分けることができ、北側は竪穴住居跡SI-037、038、039、044、方形周溝墓SS-006、007、008、SD-029、南側は竪穴住居跡4SI-003、方形周溝墓4SD-030・031、033、038となる。いずれも竪穴住居跡と方形周溝墓とが近接している。現在の松川に沿った台地西端部にも、上ノ山遺跡調査分として該期の方形周溝墓が９基検出されている。この調査区に隣接する低位段丘上には、二重環濠を伴う集落が想定される西原遺跡が所在しており、上ノ山遺跡調査分と西原遺跡は、墓域と集落域との関係を示している。今回の調査部分も含め、松川によって開析された沖積低地が、弥生時代中期の初期水田可耕地として重要な位置を占めていたことが窺われる。

後期の遺構のうち、今回検出された竪穴住居跡60軒について見てみると、概ね後期後半代の範疇で捉えることができるが、SI-030、2SI-008は若干古相を示し、2SI-004、007、014は新相を呈している。また、これまで調査が行われた地点で検出された竪穴住居跡についても、後期後半代前葉から古墳時代初頭に至る時期に比定することができる。これらのことから、文脇遺跡の台地上では中期後葉段階で集落が営まれ、一時期集落の断絶があった後、後期後半代前葉から再び集落が営まれるようになり、巨大集落化する傾向が見て取れる。また、集落は方形周溝墓を伴ういくつかのグループに分けることが可能であるが、その分布は台地全体にわたって広域に展開している。後期前半代における集落断絶の原因は判然としないが、後期後半代の集落の爆発的増加は、これまでの松川流域の狭い沖積低地のみならず、小櫃川右岸に広がる広大な沖積低地の開発が本格化したことを示していると思われる。

次に今回検出された竪穴住居跡と方形周溝墓について若干まとめることとする。住居跡の平面形態は、中期では台地北側の４軒が楕円形を呈し、南側の4SI-003は正方形となっており違いが表れている。また、後期の住居跡では、隅丸方形のプランを基本としながらも、楕円形や方形など様々なバリエーションが見られる。いわゆる「焼失住居」と呼ばれる竪穴住居跡は、中期でSI-039の１軒、後期でSI-003、004、010、013、018、2SI-009、3SI-028、5SI-003の８軒となる。全体における「焼失住居」の割合は、中期で20％、後期で13％となり一定の比率を示している。また、図上で完形に復元できる土器が１点以上出土した竪穴住居跡は、中期でSI-039の１軒、後期でSI-002、003、004、007、010、013、027、2SI-002、008、014、3SI-028、5SI-002の12軒であった。このうち中期のSI-039、後期のSI-003、004、010、013、3SI-028は、いわゆる「焼失住居」に伴うもので、完形率の高い遺物の出土と「焼失住居」は密接な関係を示している。ただし、完形率が高い遺物が多いとはいえ、そのほとんどが日常使用するには不都合な欠損品



第136図　文脇遺跡弥生時代遺構配置図（1）



第137図　文脇遺跡弥生時代遺構配置図（２）

であることを考えると、「焼失住居」は火災によって生じたものと考えるよりも、何らかの理由により焼き払いを行う必要が生じた住居と考えたほうが自然であろう。方形周溝墓の平面形態は、中期ではSD-029と4SD-038以外は周溝の四隅が切れるタイプが想定でき、後期では四隅が切れるタイプは認められず、１か所以上が連結するタイプで占められている。

遺物としては、この時期特に土器の転用品が目に付く。壺の頸部破断面を研磨して器台に転用している例として、いずれも後期の26図１、２、35図４、58図１、63図２、65図１、80図２、81図２、125図69をあげることができる。文脇遺跡の南東1.5kmに位置する下向山遺跡18号、33号、51号、53号、74号住居址からは、器台転用の壺が３個体ずつまとまって炉の周辺から出土している[注1)]。いわゆる「炉器台」も３個体がまとまって炉周辺から出土するケースがしばしば見られることから、調理具の一種として使用されていたものと想定されるが、具体的な使用法は判然としない。このほか甕底部に焼成後小さな穴を開けたものがある。中期では88図53、後期では96図１、124図22がそれで、穴の径が小さいことから、液体などを濾す濾過器として転用されていたものと考えられ、今回は検出されていないが、内面に白色の物質が付着するものが見られる。また、74図７は焼成前段階で穿孔されており、当初より濾過器としての使用を目的に製作されたものと見ることができる。

第４節　古墳時代

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、文脇遺跡での検出遺構数はピークを迎える。明らかに古墳時代前期の範疇で捉えられる遺構は、これまでの調査例すべてを加えても竪穴住居跡35軒、方墳１基のみとなり、調査範囲内ではあるが、明らかな減少傾向が指摘できる。また、周辺地域を見ても山王辺田２号墳や山谷古墳のような初期の前方後方墳や前方後円墳は存在するものの、現在までのところ地域の中核を示すような前期段階の大規模集落や大型前方後円墳は発見されていない。

中期の検出遺構は、竪穴住居跡８軒と円墳３基である。これまで検出された８軒の竪穴住居跡の内訳は、君津郡市文化財センター調査区で５軒、上泉遺跡として調査された地区で２軒、今回検出された１軒となる。君津郡市文化財センター調査区で検出された５軒も近接しており、少なくとも３つのグループで集落を営んでいたと考えられる。円墳３基のうち２基は、君津郡市文化財センター調査区において竪穴住居跡に隣接して検出されている。残りの１基は上泉古墳群上之山古墳として調査が行われた台地北端部から検出されており、周辺には未調査分、消滅分含めて12基の古墳が存在していたとされる。台地下の西原遺跡からは、該期の遺構は検出されていないため、台地上の古墳群に近接して集落が存在していた可能性も考えられる。これまでの調査成果を踏まえると、該期の集落は小規模なものであったと想定されよう。

古墳時代後期になると更に検出遺構数は減少し、これまでの成果を踏まえても今回調査された１軒のみであり、集落の様相など不明な点が多々ある。このような集落規模の縮小化から、弥生時代から古墳時代初頭にかけて形成されてきた生産体制に、何らかの変化が求められるようになったことが想像される。

第５節　奈良・平安時代

今回検出された奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡１軒と溝３条であった。これまでの調査で検出された遺構を合わせると、文脇遺跡全体で竪穴住居跡54軒、土坑４基、集石１基、溝３条となり、古墳時代中期以降減少傾向にあった集落が、再び増加に転じたと言える。竪穴住居跡について時期別に見てみると、

８世紀代が21軒、９世紀～10世紀前半が29軒、詳細時期不明が４軒となる。検出位置からすると、いずれの時期も、遺跡範囲の南東側にまとまる傾向が認められるものの、重複する遺構は少なく、数軒程度の竪穴住居跡が散在して分布していた様相が見られる。周辺遺跡の傾向でも、８世紀代に入ると遺跡数が増加する傾向が見られ、新たな開発に伴う入植により集落が増加したものと想定される。

出土遺物では、グリッド等からの出土ではあるが、「秋首」と判読できる墨書土器が１点出土している。これまでの調査でも墨書土器・線刻土器は38点出土している。内容的には「○」や「＋」などの記号のほか、「春」、「徳」、「大」のような一文字の墨書が多い。今回出土した「秋首」が人名であるとするならば、過去に出土した「今継」とともに、本遺跡では２例目の発見となる。

第６節　土器に付着した種実圧痕について

今回報告書の作成に当たり、すべての掲載土器に対して種実圧痕の有無を確認した。なお、対象となった土器の時期別点数は、縄文土器24点（早期８点、前期８点、後期６点、晩期２点）、弥生土器461点（中期175点、後期286点）、古墳時代土器29点（中期16点、後期13点）、奈良・平安時代土器15点の合計529点である（第10表）。

種実同定調査は、まず肉眼とルーペにより種実に該当しそうな土器のくぼみをピックアップし、その後実体顕微鏡を用いて更に詳しく観察し、種実等の圧痕と思われるくぼみを抽出した。くぼみにシリコン樹脂を流し込んでレプリカを作成し、そのレプリカを走査型電子顕微鏡で観察して同定を行った。

その結果、縄文土器１点（早期）、弥生土器42点（中期10点、後期32点）、古墳時代土器２点（中期２点）、奈良・平安時代土器１点の合計46点、延べ62か所で種実圧痕が見つかった。掲載土器数に対する種実圧痕検出土器数をパーセンテージで表してみると、縄文土器4.2％（早期土器８点の中では12.5％）、弥生土器9.1％（中期5.7％、後期11.1％）、古墳時代土器6.9％（中期12.5％、後期０％）、奈良・平安時代土器6.7％となる。掲載土器全体に対しての種実圧痕検出土器のパーセンテージは8.7％であった。

次に土器に圧痕が付着する要因について、掲載土器点数・種実圧痕検出土器数ともに多数を占める弥生土器を対象に検討することとしたい。第11表は弥生時代中期と後期の土器について、器種別に種実圧痕の付着率を示したものである。なお、点数のカウント方法は、種実が付着した土器の点数を示しており、付着した種実の点数ではない。また、便宜的に壺・広口壺・無頸壺・鉢・高坏を「貯蔵用」とし、甕・台付甕・器台（炉器台）を「調理用」、ミニチュアを「祭祀用」とした。第11表の結果を見ると、貯蔵用・調理用・祭祀用いずれを取っても、突出して多くの種実圧痕が付着する器種は認められないことがわかる。ある器種に限定して、故意に種実を付着させるといった行為は想定できない。

種実圧痕が土器のどの部分に付着していたのかを示したものが第12表である。内面・外面・断面に分けて表示したが、内面・外面は土器製作時にケズリやミガキなどの調整によって圧痕が消されてしまう可能性がある。また、断面は土器破損部分に現れた圧痕であり、総じて表面積は小さいと言える。内面・外面は粘土中に種実が含まれていたか、製作途中に外部から種実が付着した可能性があるのに対して、断面は明らかに粘土中に種実が含まれていた状況を示している。表によると、弥生時代中期・後期ともに外面の付着率が最も高い結果となった。また、底部外面の付着率は中期で全体の38.5％、後期で13.3％となり、土器底部の表面積を考えると比較的高い比率と言える。断面からも一定程度の種実圧痕が認められる。このような内容から考えると、土器成形以前の粘土の状態ですでに種実が含まれていたものがあり、製作段

第10表　レプリカ法実施土器点数一覧

	縄文時代				弥生時代		古墳時代		奈良・平安時代	合　計
	早期	前期	後期	晩期	中期	後期	中期	後期		
対象土器点数	8	8	6	2	175	286	16	13	15	529
レプリカ法対象点数	1	0	0	0	21	37	2	1	1	63
種実圧痕付着土器点数	1	0	0	0	10	32	2	0	1	46
種実圧痕付着率	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	5.7%	11.2%	12.5%	0.0%	6.7%	8.7%

※種実以外のシダ植物、木材、「種実ではない」と判断されたものは除く。

第11表　器種別種実付着率

	器　種	対象点数	付着土器	付着率		器　種	対象点数	付着土器	付着率
弥生時代中期	貯蔵用	88	4	4.5%	弥生時代後期	貯蔵用	187	19	10.2%
	調理用	79	5	6.3%		調理用	93	12	12.9%
	祭祀用	8	1	12.5%		祭祀用	6	1	16.7%
	合　計	175	10	5.7%		合　計	286	32	11.2%

※仮に「貯蔵用」→壺・広口壺・無頸壺・鉢・高坏、「調理用」→甕・台付甕・器台（炉器台）、「祭祀用」→ミニチュア

第12表　種実圧痕付着部位

	内　面		外　面		断　面		合 計	底部外面	
弥生時代中期	2	15.4%	6	46.1%	5	38.5%	13	5	38.5%
弥生時代後期	17	37.8%	22	48.9%	6	13.3%	45	6	13.3%
合　計	19	32.7%	28	48.3%	11	19.0%	58	11	19.0%

第13表　複数の種実が付着する土器

籾と種子が付着	1	種子のみ複数付着	1		
籾殻と種子が付着	3	籾とキビが付着	1	合　計	8
籾と籾殻が付着	1	キビのみ複数付着	1	※全て弥生時代後期	

第14表　イネの部位別検出状況

	部　位	検出点数	完形	欠損		部　位	検出点数	完形	欠損
弥生時代中期	籾殻	3	-	-	弥生時代後期	籾殻	11	-	-
	籾	0	0	0		籾	8	6	2
	種子	2	2	0		種子	9	5	4
	合　計	5	2	0		合　計	28	11	6

階においても種実が付着する機会が多々あったものと推定できる。また、底部外面に比較的高い比率で種実が付着するのは、土器製作・乾燥段階で地表面等に接する機会が多いことによるものと考えられる。

第13表は、１点の土器に複数の種実が確認できたもの８点について、その種実の組合せを示したものである。なお、イネについては籾殻・籾・種子に細別した。第13表を見ると、偏った傾向を指摘することはできず、様々なパターンが認められることから、ある種実（イネについては籾殻・籾・種子）を選別して粘土に混入させたとは考えにくい。

今回の種実圧痕同定で最も多く検出されたのがイネである。そこでイネについて籾殻・籾・種子に分類し、さらに籾・種子は完形・欠損に細分したものが第14表である。籾殻はイネの外皮で非可食、籾は外皮が付いた状態であり、このままでは非可食である。また、欠損したもの（割れたコメ）は食用としては有用ではない。このような点を踏まえて第14表を見ると、籾殻・籾・種子の圧痕点数に大きな偏りは認められないこと、食用となる完形の種子のイネ全体に対する比率が低いことが指摘できる。

以上、第11表から第14表を用いて検討した内容をまとめると次のようになる。

①貯蔵用・調理用・祭祀用のいずれの器種も圧痕付着比率に偏りは認められない。

→　器種を限定して種実を故意に混入させたとは考えられない。

②断面からも種実圧痕が検出される。

→　土器製作に当たって、粘土調整の段階で種実が混入している。

③土器の部位ごとの表面積を考慮すると、外面、特に底部から種実圧痕が多く検出される。

→　底部外面は粘土調整の段階に加えて、製作段階・乾燥段階においても地表面等に接する機会が多く、他の部位に比べて種実が付着する確率が高くなる。

④複数の種実の組合せは、特に決まったパターンを示していない。

→　特定の種実を故意に混入させたとは考えられない。

⑤イネについては、籾殻・籾・種子の圧痕付着比率に偏りは認められない。

→　イネの特定部位を選定して混入させたとは考えられない。

⑥イネ全体に占める籾殻・籾・欠損した種子の比率が高い。

→　非可食の部分が多い。

このような結果から見ると、土器に圧痕が付着する要因としては、人為的に何らかの意図をもって種実を混入させたと考えることはできず、意図せず偶然粘土に混入または付着した種実によって圧痕が形成されたものと言えよう[注2)]。では偶然に種実が粘土に混入または付着する状況とは、どのようなことが想定されるのであろうか。イネの部位別検出状況を見ると籾殻・籾・種子の圧痕付着比率に偏りはなく、欠損したものも多く認められる。弥生時代のイネの収穫方法は穂首刈りによって行われ、刈り取ったイネは穂の状態のまま束ねて保存し、必要な時に穂の状態のまま臼と杵を用いて脱穀と精米を同時に行ったと考えられている。また、臼に残った籾殻とコメ（種子）は箕を使って風選していたと思われる。このため集落域内の地表面には、風選によって飛散した籾殻・籾・種子が散乱していた場所があったと想像できる。イネの部位別検出状況は、このような集落環境を反映したもので、土器表面に付着した圧痕の要因とも言えよう。また、断面から検出された圧痕の要因としては、推論ではあるが粘土の混和材として集落周辺（イネの脱穀・精米作業が行われた周辺）の表土が混ぜられていたためではないだろうか。

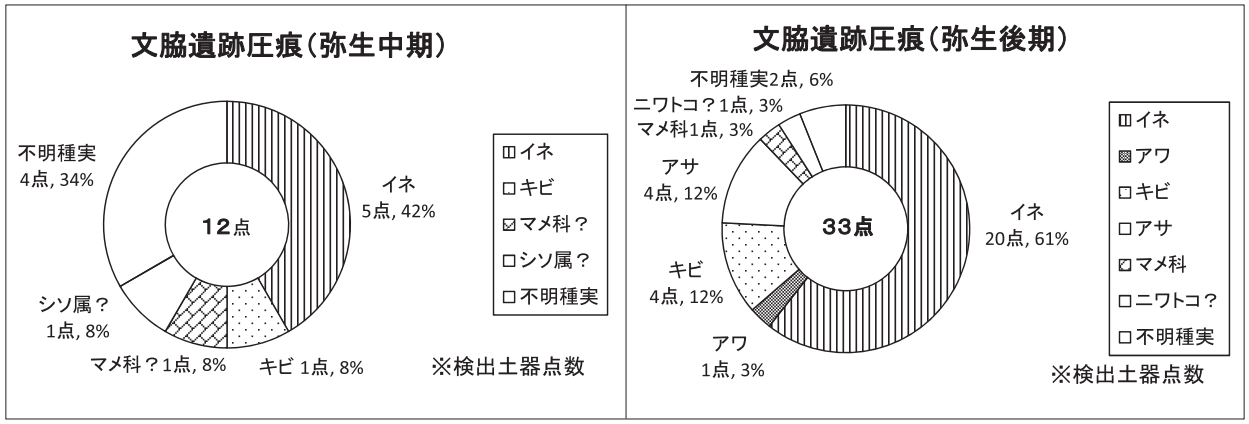
さて、再び第10表に戻って時代ごとの種実圧痕付着率に目を向けると、古墳時代後期以降付着率が大幅

に減少する様子が見て取れる。同様の傾向はほかの遺跡でも確認することができる。市原市草刈遺跡C区・保存区では、奈良・平安時代になってほとんど圧痕の付着が認められない状況である[注3)]。このような結果は先の推論に従って考えてみると、粘土の調整段階で粘土・混和材ともに厳選されたものを使用するようになったためとも考えられよう。

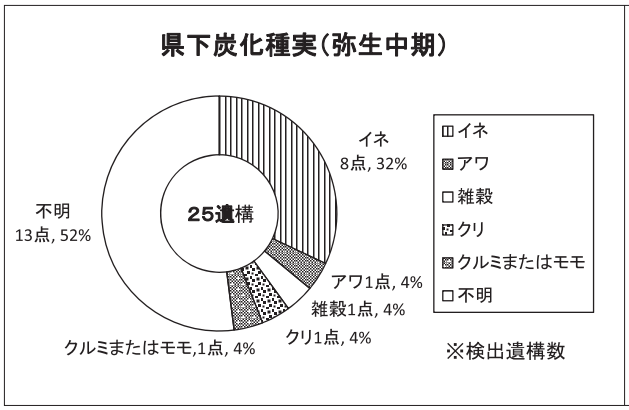
では次に今回行った種実圧痕の同定結果について、概観することとしたい。第15表は弥生時代中期と弥生時代後期の種実別圧痕検出土器数をグラフにしたものである。表中の点数は土器の個体数を指標としており、例えば１個体の土器からイネが１点検出された場合は１とカウントし、イネが５点検出された場合でも１とカウントしている。また、イネとキビが同時に検出された場合は、それぞれ１ずつカウントしている。集計結果を見ると、弥生時代中期と後期のいずれの時期においてもイネが卓越していることがわかる。また、雑穀の比率は低く中期でキビ１点、後期でアワ１点、キビ４点のみであり、ムギ類やヒエは未検出である。近年圧痕レプリカ法による種実同定が行われた君津市常代遺跡や神奈川県逗子市池子遺跡などの調査事例においてもイネが卓越し、アワ、キビが僅かに検出されるという結果が得られており、今回の同定結果と整合性が見られる[注4)]。

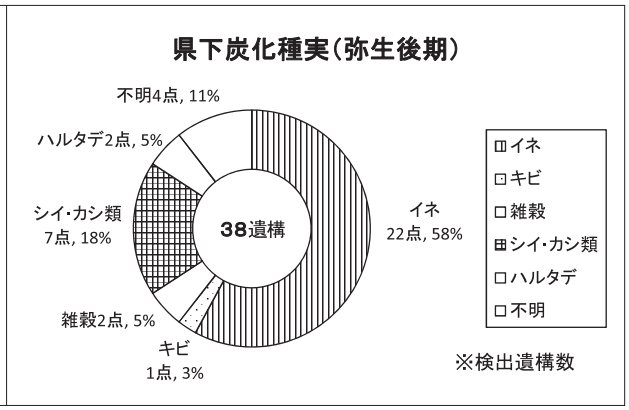
県内の出土炭化種実については、平成13年度段階で集成が行われている。このうち竪穴住居跡出土の炭化種実を集成したものが、第16表である。この表は住居軒数を指標として、第15表と同様なカウント方法を用いて集計している[注5)]。この結果と今回の同定結果とを比較しても、イネと雑穀の比率は似た傾向を示している。また、弥生時代中期でクリ・モモが検出され、弥生時代後期でシイ・カシ類が検出されている。これらは大型の種実で、圧痕レプリカ法では検出しづらいものであるといえる。ただし、シイ・カシ類は袖ケ浦市下向山遺跡で小型壺から出土している事例もあることから、食用としていたと考えられる。第17表は市原市草刈遺跡の炭化種実同定結果のうち、弥生時代後期の竪穴住居跡において、炉または焼土層の土壌、または貝層サンプルを対象に、ウォーターセパレーション法を用いて種実の抽出を行ったデータを集計したものである[注6)]。この結果を見るとイネの優位性は変わらないものの、オオムギ・コムギなどのムギ類の多さが目を引く。これらムギ類（合計20点）を検出した12遺構のうち10遺構が貝層サンプルから抽出されたものであった。同様に市原市山田橋大山台遺跡で検出されたムギ類も、貝層サンプルからの抽出である[注7)]。現段階で弥生時代にムギ類が栽培されていたと判断するには、抽出サンプルの再検討や炭化種実の放射性炭素年代測定の実施など、注意を払う必要があろう。

第15表　文脇遺跡種実圧痕集成

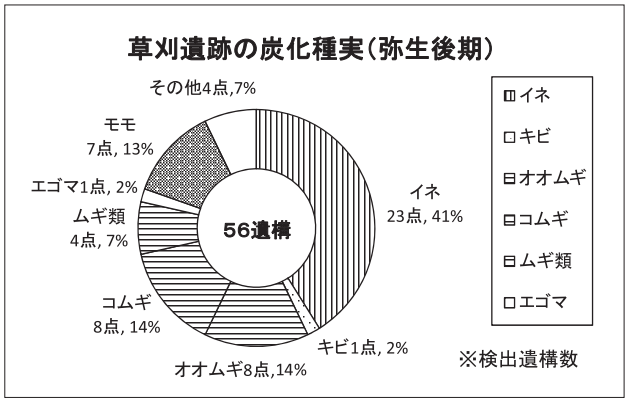


第16表　千葉県下出土炭化種実集成





第17表　市原市草刈遺跡出土炭化種実集成



注１　黒澤 聡　1994　『下向山遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
２　遠藤英子　2014　「種実由来土器圧痕の解釈について」『考古学研究』第60巻第４号　考古学研究会
３　大谷弘幸　2004　『千原台ニュータウンＸＩ―市原市草刈遺跡（C区･保存区）―』　財団法人千葉県文化財センター
４　轟 直行　2018　「千葉県君津市常代遺跡における種子圧痕調査（途中経過）」『SEEDS　CONTACT』第５号　東京大学大学院人文社会系研究科文学部考古学研究室
轟 直行　2016　「千葉県域における弥生時代の栽培植物利用をめぐる問題と種子圧痕調査について」『SEEDS CONTACT』第３号　東京大学大学院人文社会系研究科文学部考古学研究室
轟 直行　2018　「千葉県北西部における弥生時代人の生業」『千葉県北西部地区文化財発表会』　千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
遠藤英子　2018　「第５章　池子遺跡出土弥生土器の種子圧痕分析」『弥生時代食の多角的研究』六一書房
５　大谷弘幸　2002　「炭化種子から見た農耕生産物の推定」『千葉県文化財センター研究紀要23』　財団法人千葉県文化財センター
６　小高春雄・山口典子ほか　2013　『千原台ニュータウンＸＸＸ―市原市草刈遺跡（F区）―』　公益財団法人千葉県教育振興財団
７　大村 直　2004　『市原市山田橋大山台遺跡』　財団法人市原市文化財センター

【文脇遺跡発掘調査報告書一覧】（上泉遺跡・上ノ山遺跡を含む）
・加藤正信　1991　『袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
・山本哲也　1992　『文脇遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
・四柳 隆・加藤正信　1993　『袖ケ浦市上泉遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
・加藤正信・大谷弘幸　1995　『袖ケ浦市文脇遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
・中能 隆　1998　『上泉遺跡群上ノ山遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター
・渡邉昭宏　1999　『袖ケ浦市上泉遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
・光江 章・竹内順一　2005　『文脇遺跡第２地点』　財団法人君津郡市文化財センター
・土屋治雄　2008　『袖ケ浦市花和岱塚・文脇遺跡』　財団法人千葉県教育振興財団
・高梨友子ほか　2017　『袖ケ浦市文脇遺跡（中・近世編）』　千葉県教育委員会

写　真　図　版

図版1

H20 調査区調査前
（北西から）

H19 調査区
（25G 付近、南東から）

H20 調査区
（22F・22G・23F、東から）

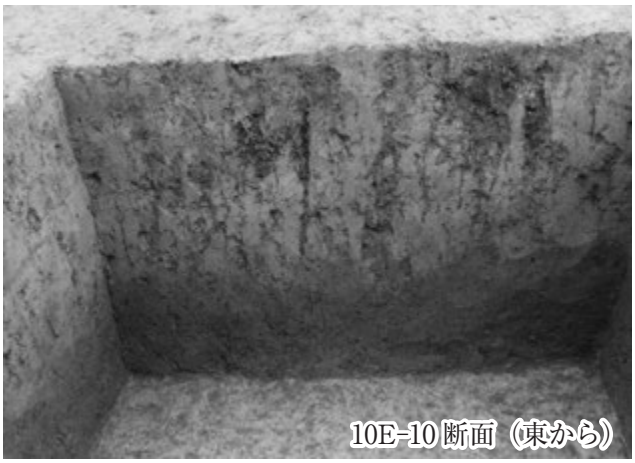
図版2

H21-3 調査区（東から）

H22 調査区
（9C・9D・10C・10D・11C、西から）

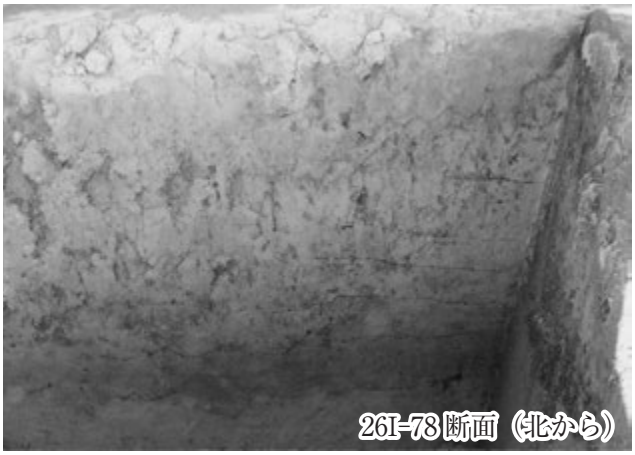
H23 調査区（北西から）

8D-82 断面（西から）

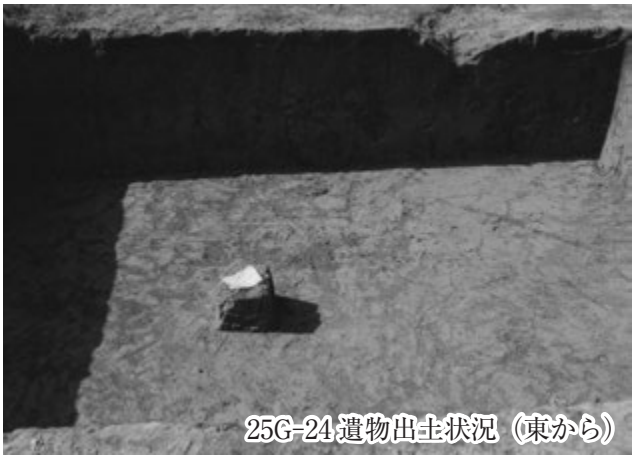

10E-10 断面（東から）

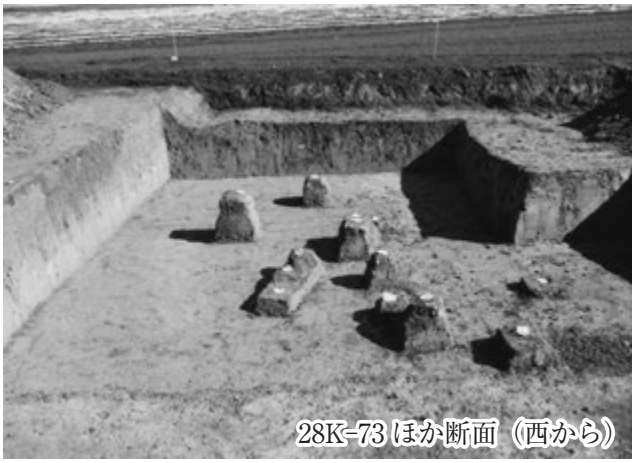
12D-59 断面（南から）

18E-20・30 断面（東から）

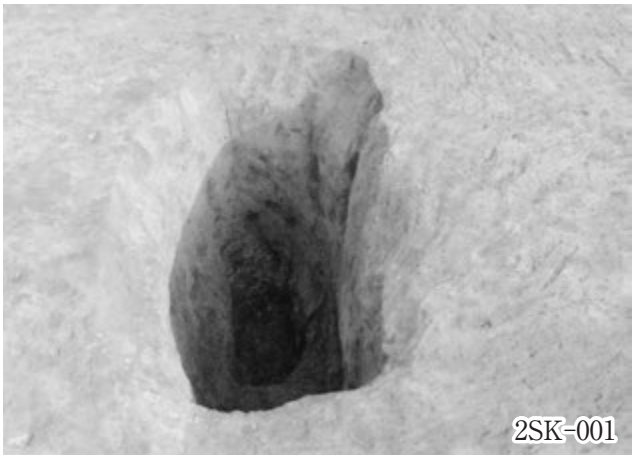

26I-78 断面（北から）

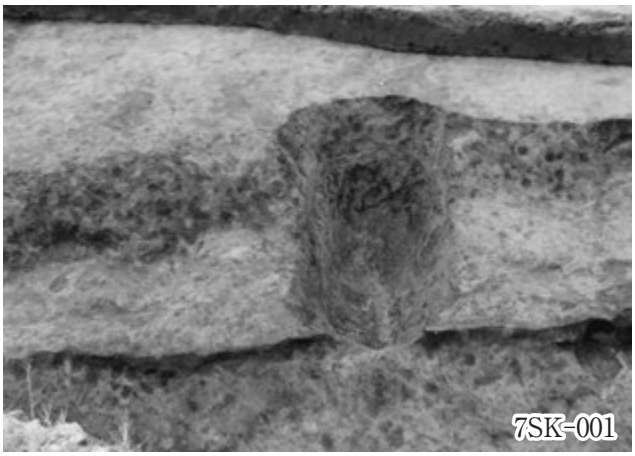
36S-93 断面（南から）


25G-24 遺物出土状況（東から）

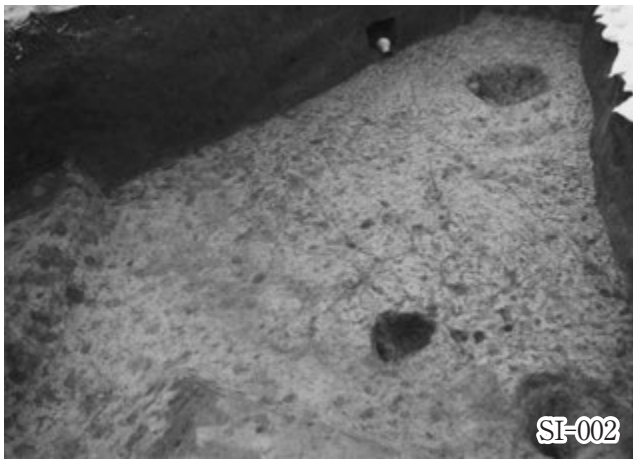

28K-73 ほか断面（西から）

図版4





SI-001

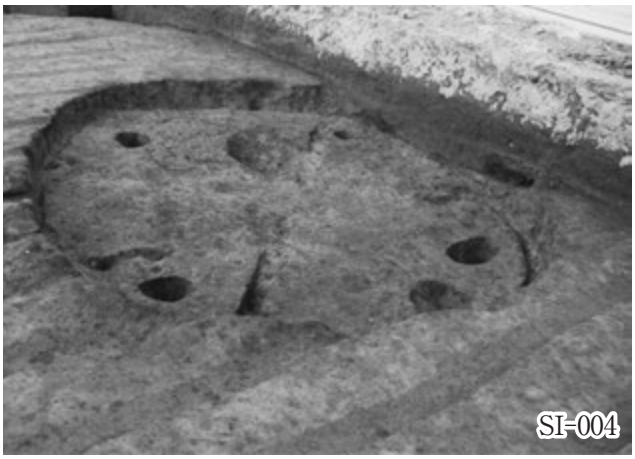

SI-002

SI-002 遺物出土状況

SI-003（H19 調査分）

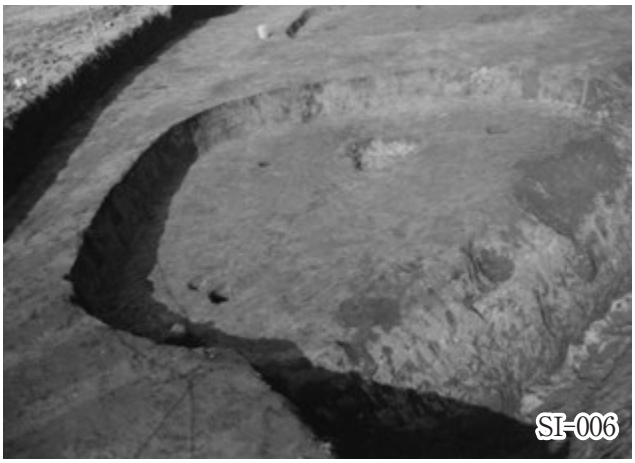
SI-003（H27 調査分）

SI-003 遺物出土状況


SI-004

SI-004 遺物出土状況

SI-005


SI-006

SI-007

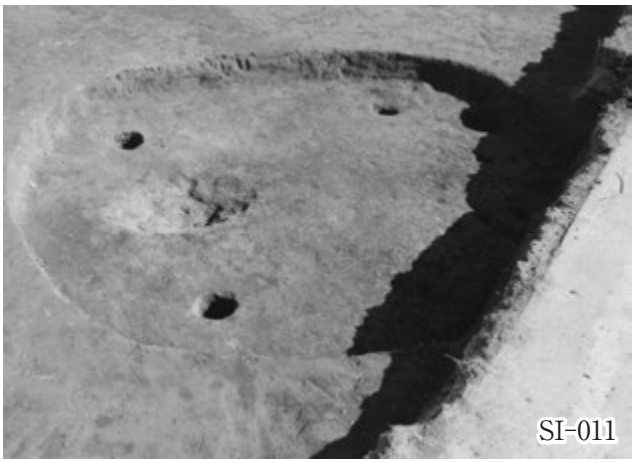
SI-007 遺物出土状況

SI-008（H19 調査分）

SI-008（H27 調査分）

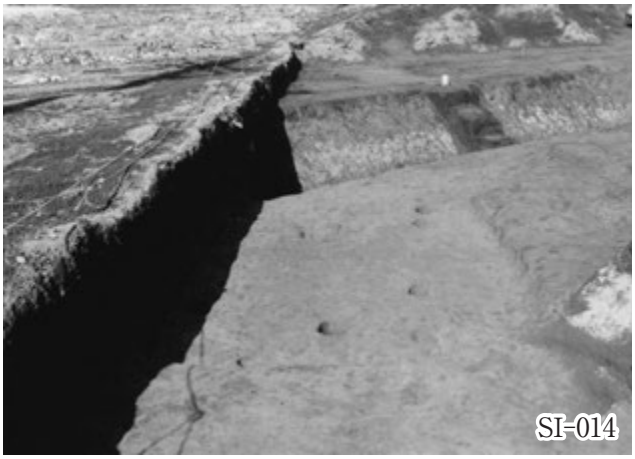
SI-009

SI-010

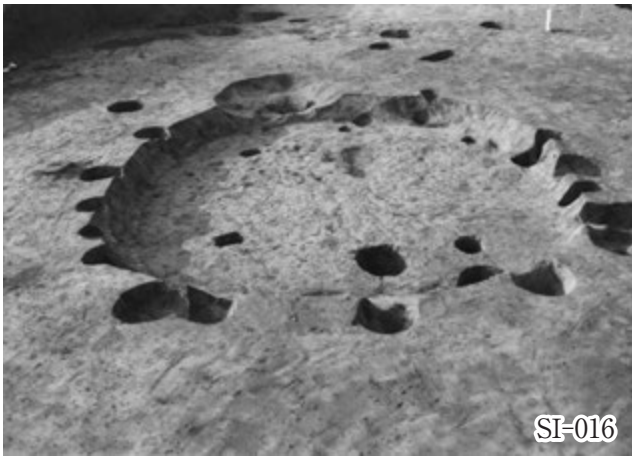

SI-011

SI-012

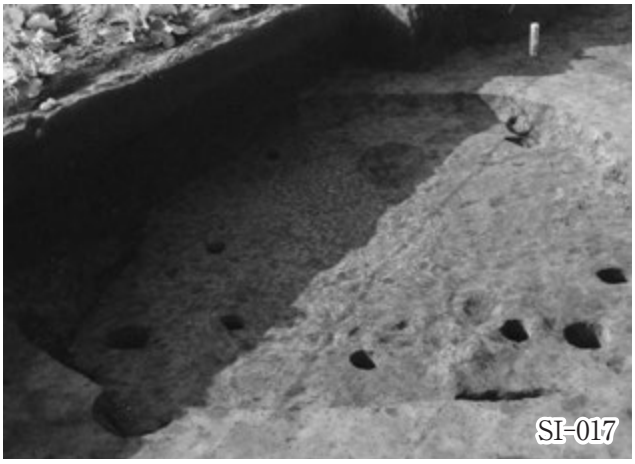
SI-013


SI-014

SI-015

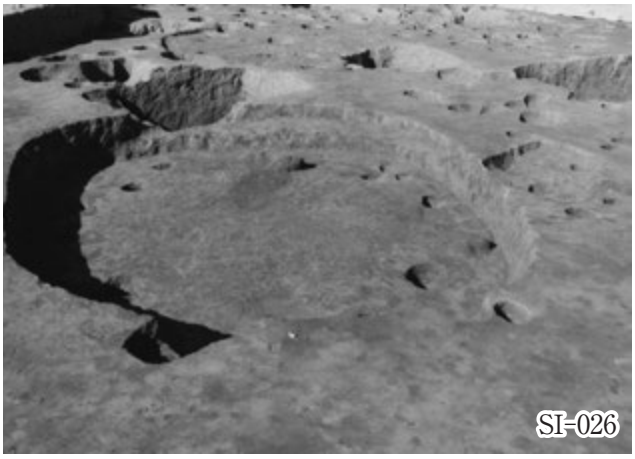

SI-016

SI-016 遺物出土状況


SI-017

SI-018

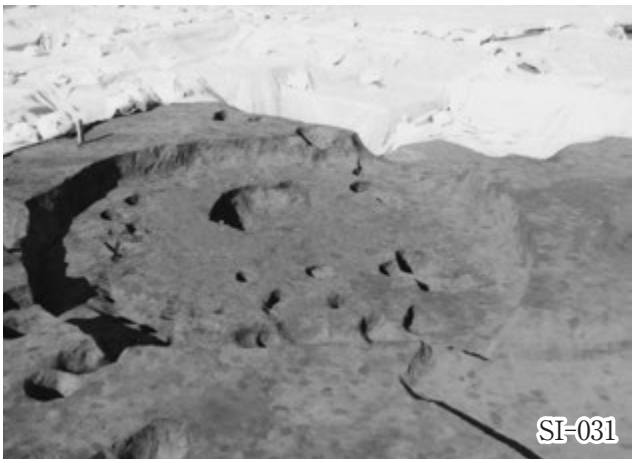
SI-021


SI-026

SI-027

SI-030

SI-030 遺物出土状況


SI-031

SI-032

SI-034

SI-035

SI-037

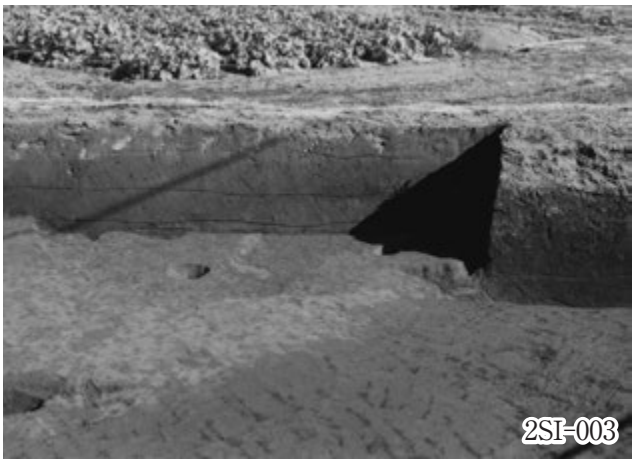
SI-038

SI-039

SI-044

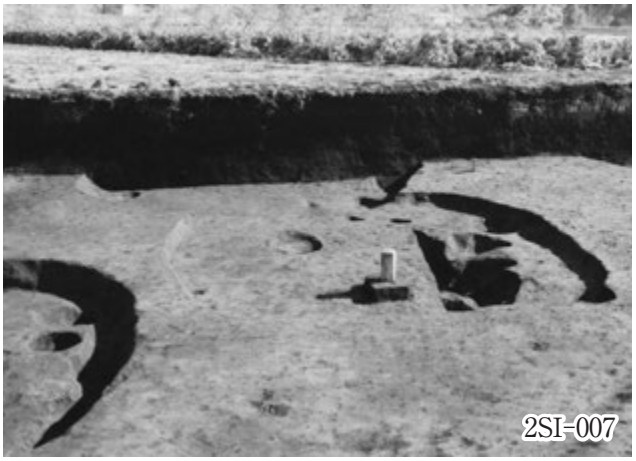
2SI-001

2SI-002


2SI-003

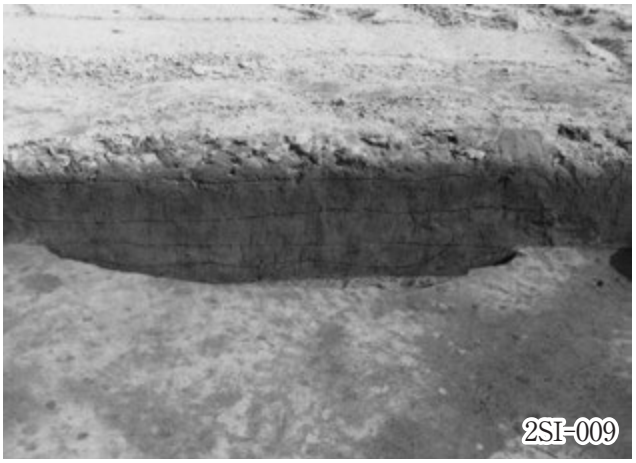
2SI-005

2SI-006


2SI-007

2SI-008

2SI-008 遺物出土状況

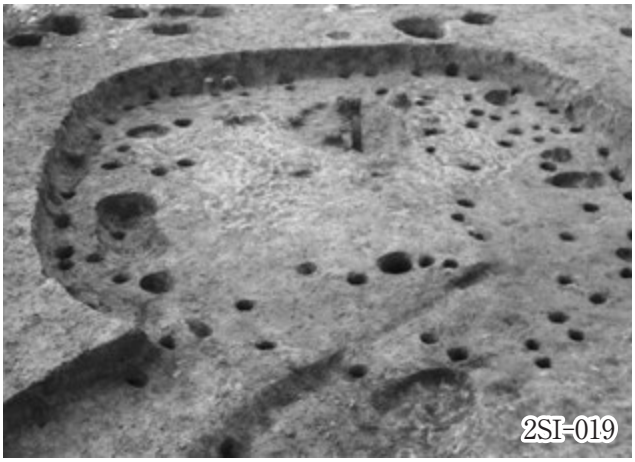

2SI-009

2SI-010

2SI-012・013

2SI-014

2SI-018


2SI-019

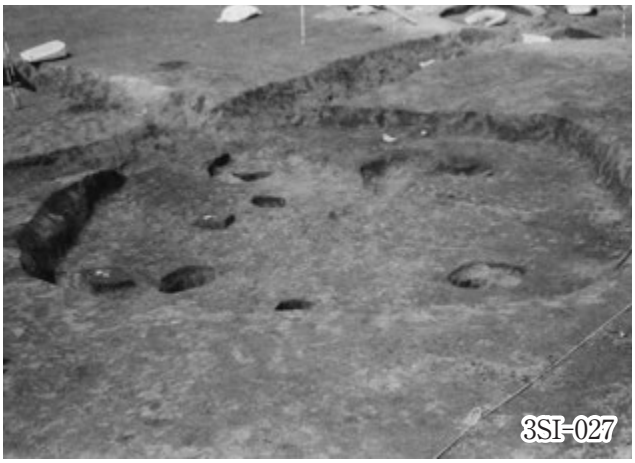
2SI-020・023

2SI-021

2SI-024

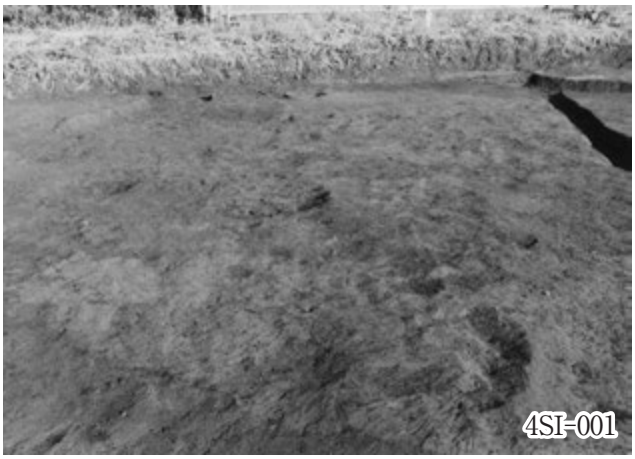
2SI-025

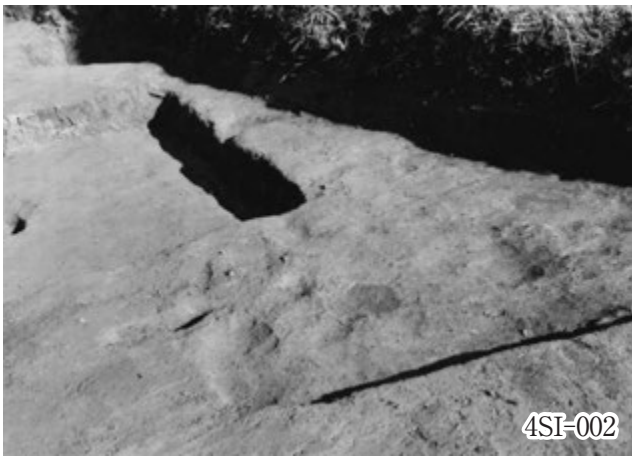
3SI-026

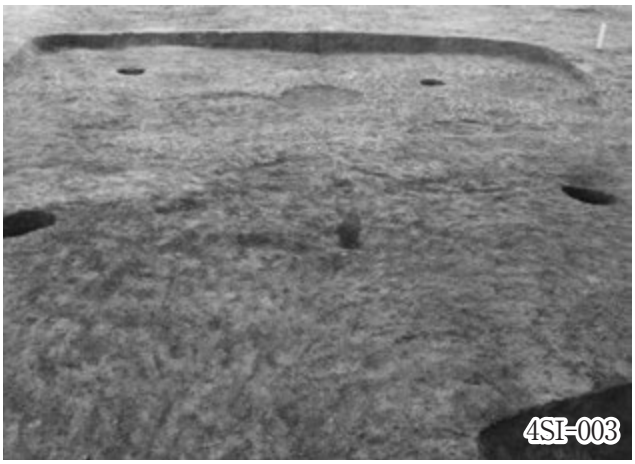

3SI-027

3SI-028

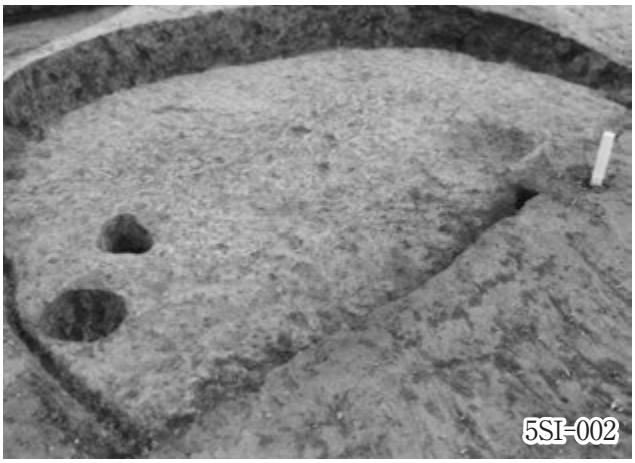
3SI-028 遺物出土状況

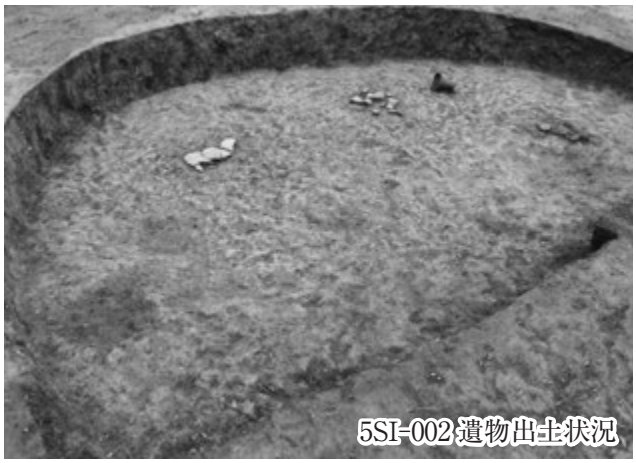

4SI-001

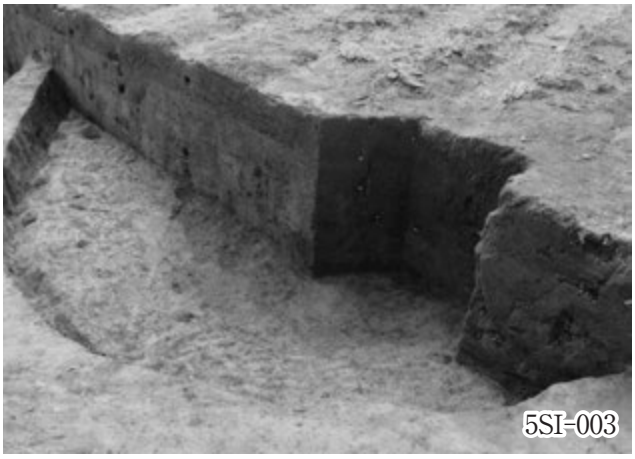

4SI-002


4SI-003

4SI-003 遺物出土状況


5SI-002


5SI-002 遺物出土状況


5SI-003

5SI-004

7SI-003

7SI-004

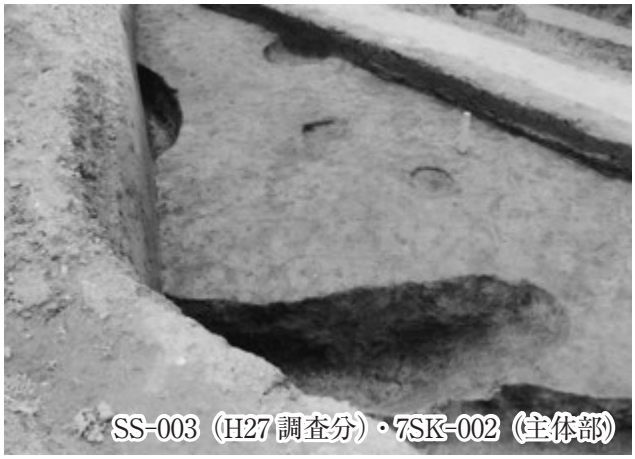
7SI-005

7SI-006

SS-001

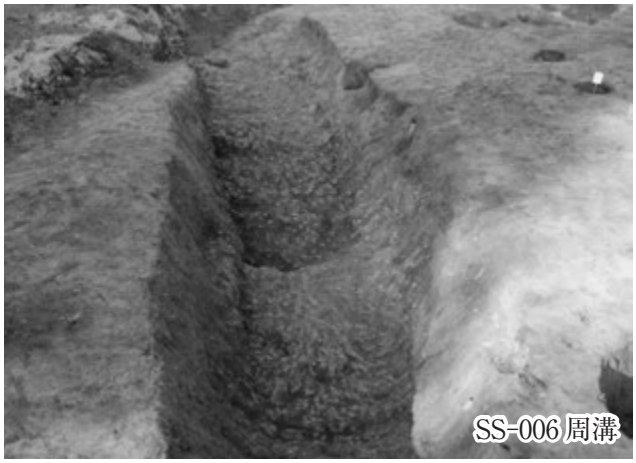
SS-002

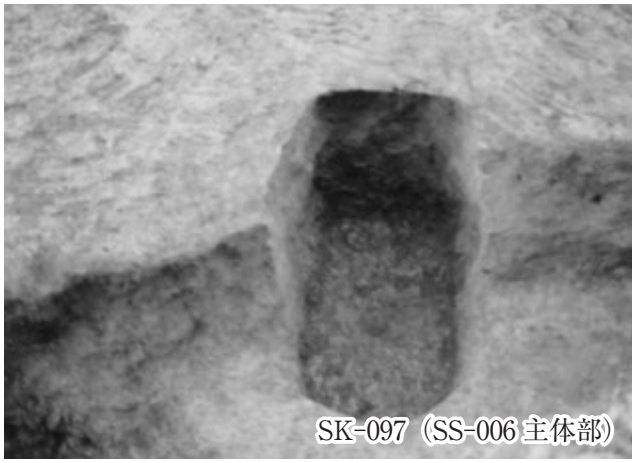
SS-003（H19 調査分）


SS-003（H27 調査分）・7SK-002（主体部）

SS-004

SK-005（SS-005 主体部）


SS-006 周溝


SK-097（SS-006 主体部）

SK-098（SS-006主体部）

SS-008

4SD-029～033

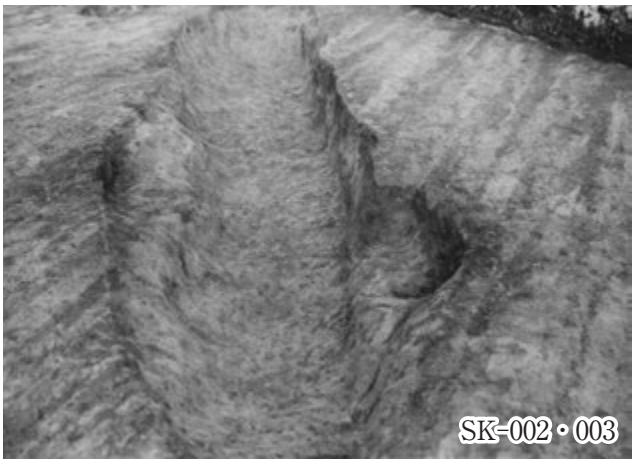
4SD-030

4SD-031・033

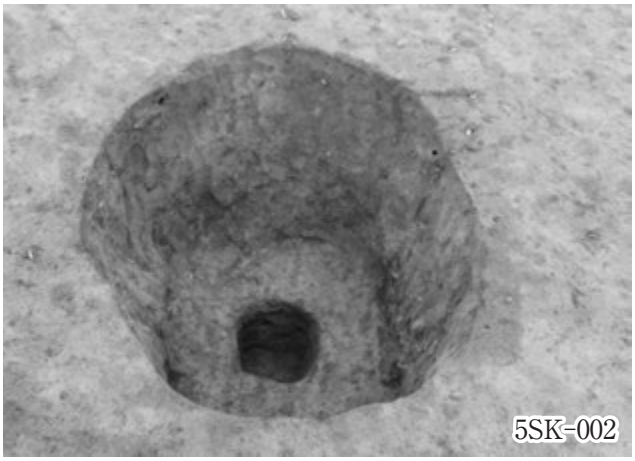
4SD-038

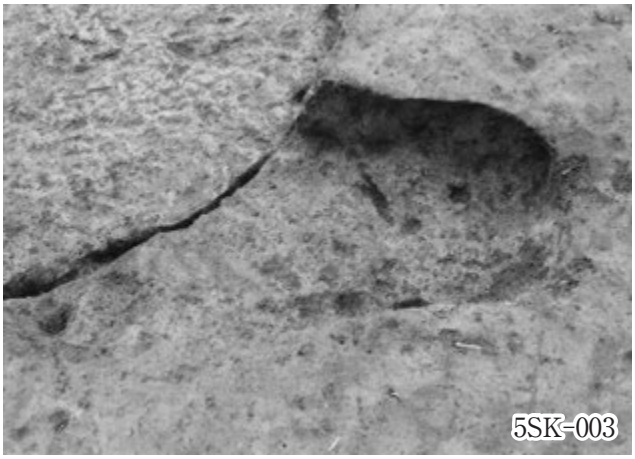
5SD-002

5SD-003


SK-002・003

5SK-001

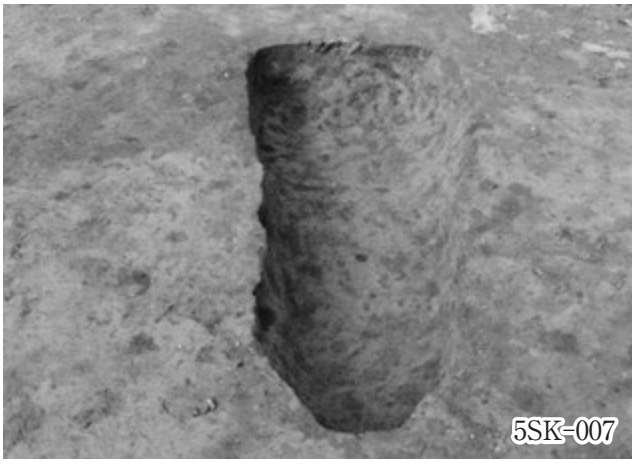

5SK-002

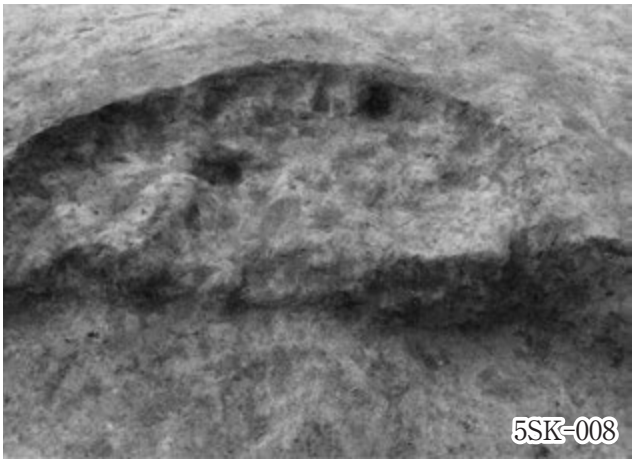

5SK-003

5SK-004

5SK-005

5SK-006


5SK-007


5SK-008

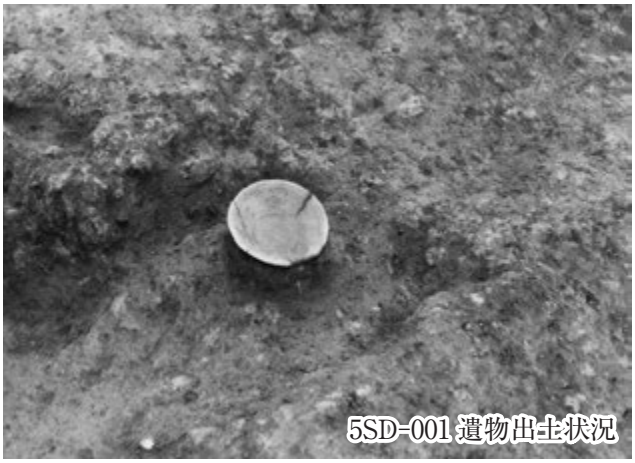
SI-036B

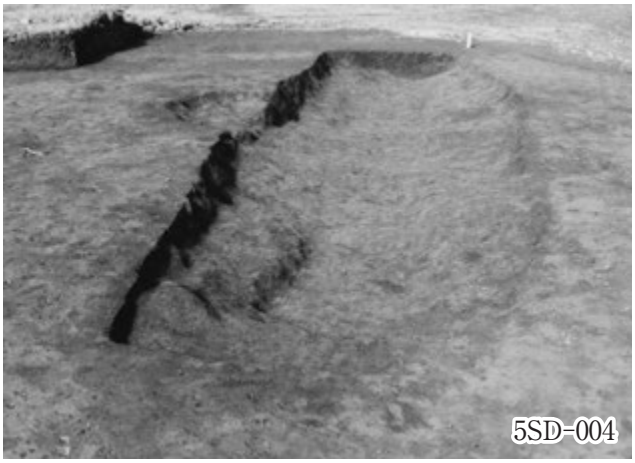
SI-043

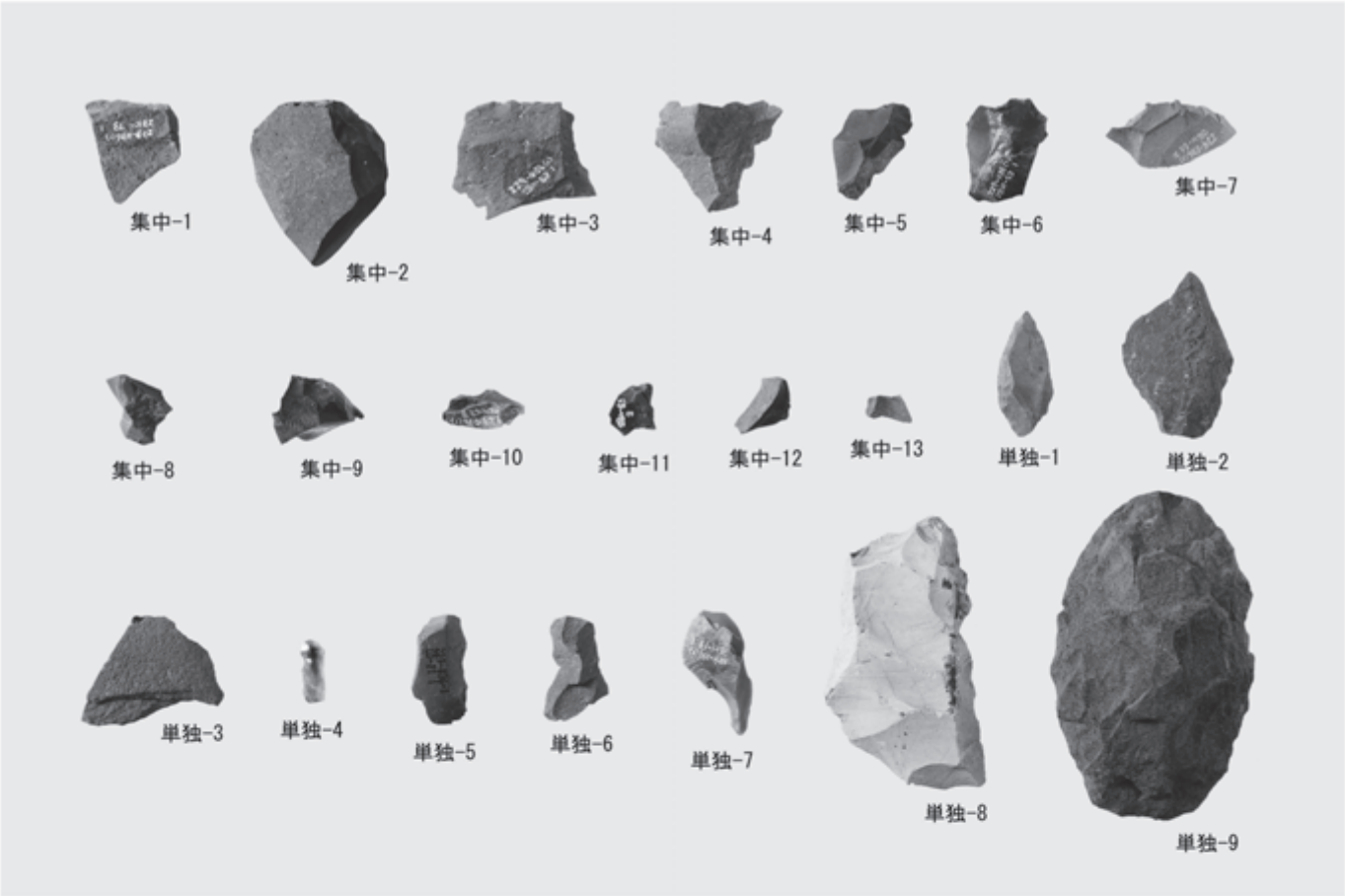
SI-043 カマド

2SI-011・2SK-003

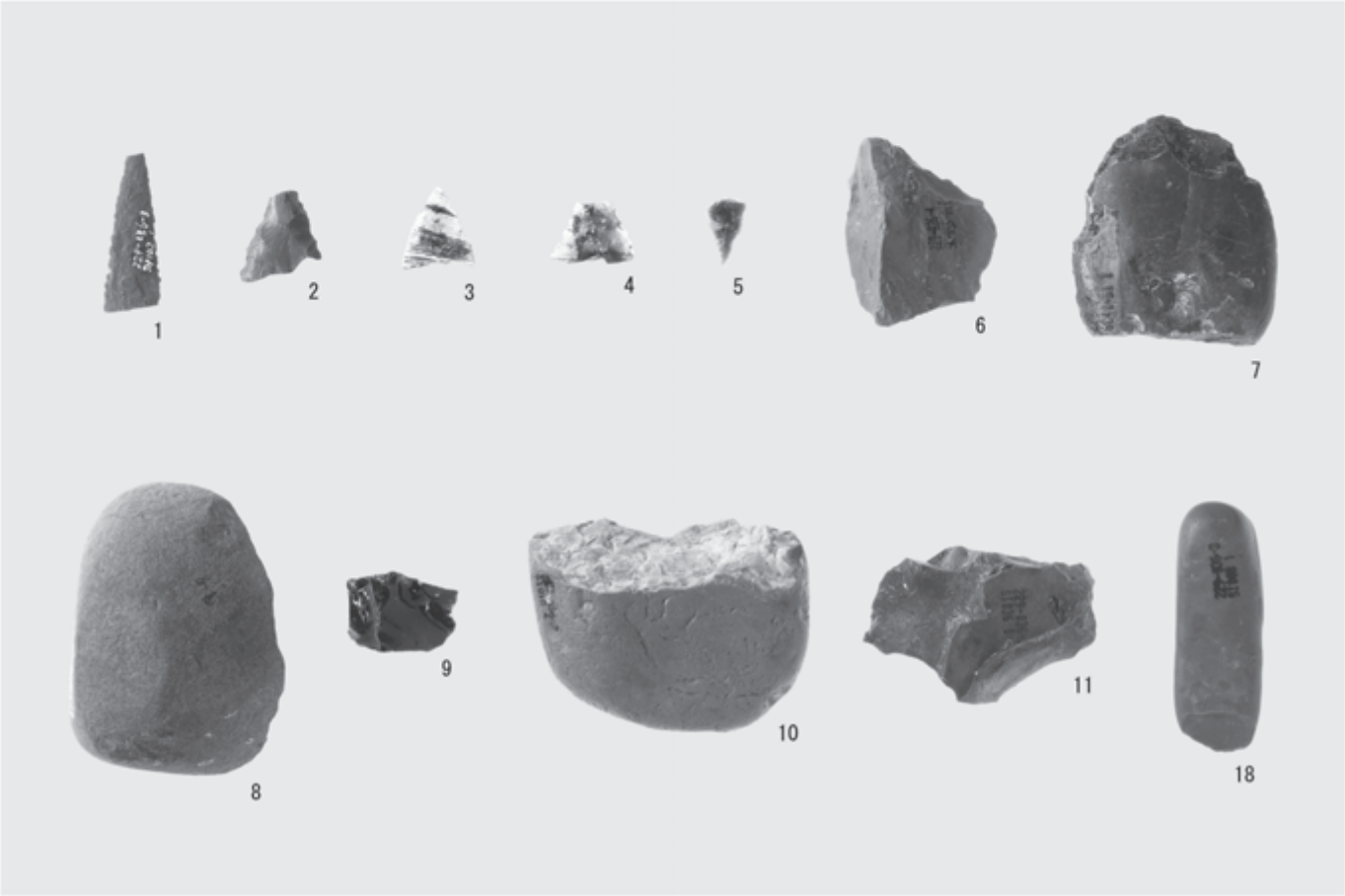
5SI-001・5SD-001


5SD-001 遺物出土状況


5SD-004

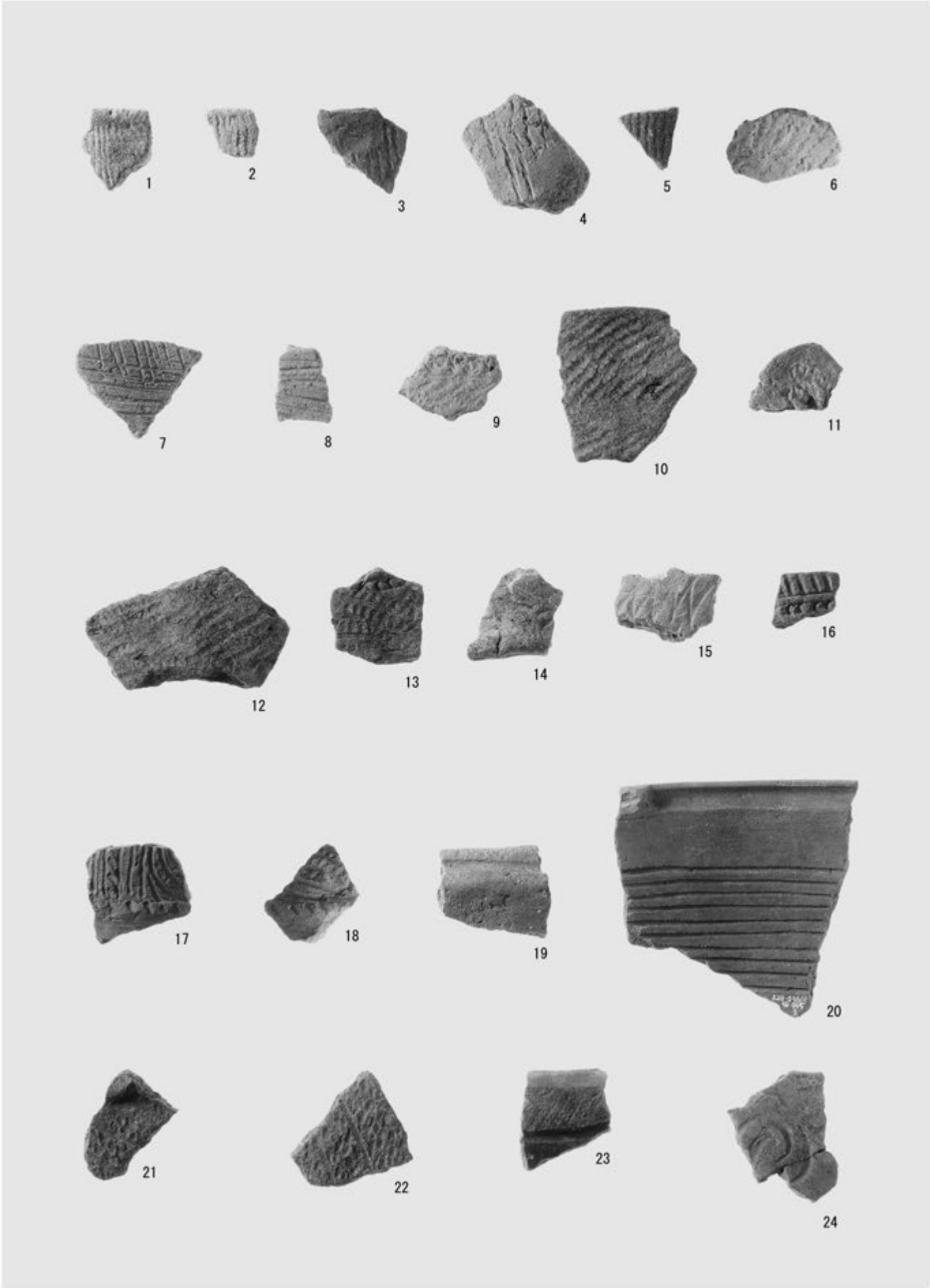


旧石器時代石器



縄文時代石器（1）

縄文時代石器（2）



縄文時代土器

SI002-3

SI002-4

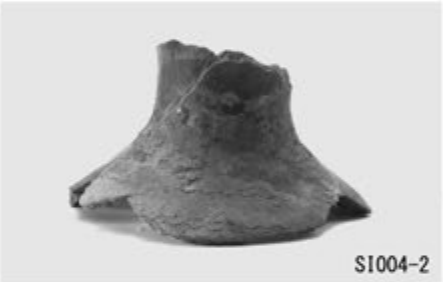
SI002-9

SI003-1

SI003-2

SI003-4

SI003-9

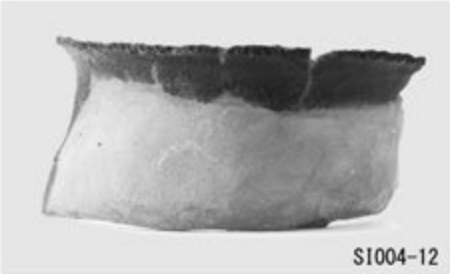

SI004-2

SI004-5

SI004-7

SI004-8

SI004-11


SI004-12

SI004-13

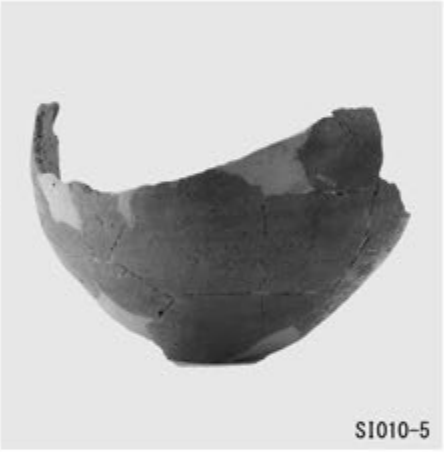
SI004-14

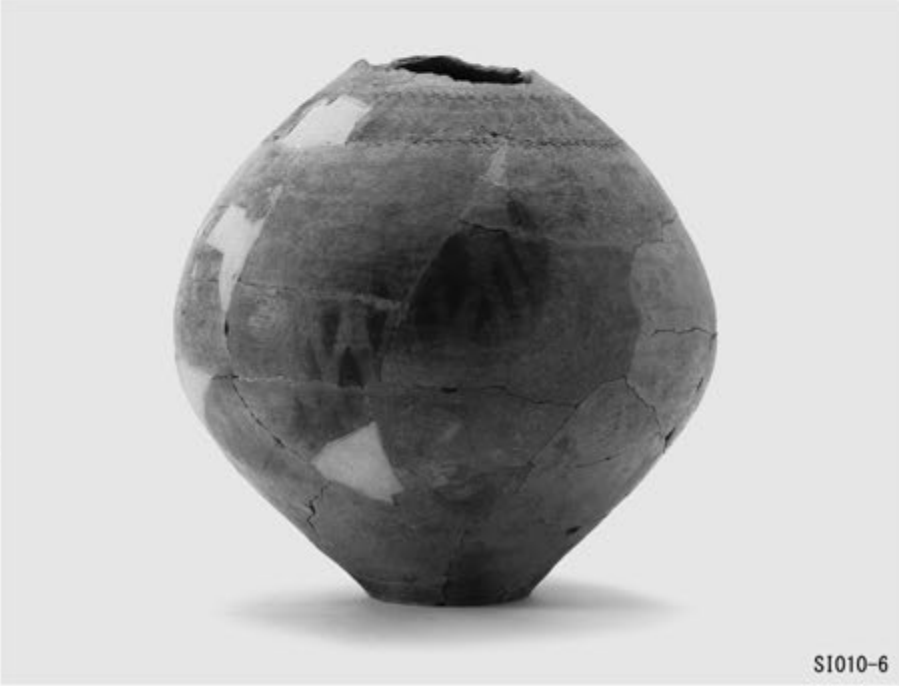
SI004-15

SI005-3

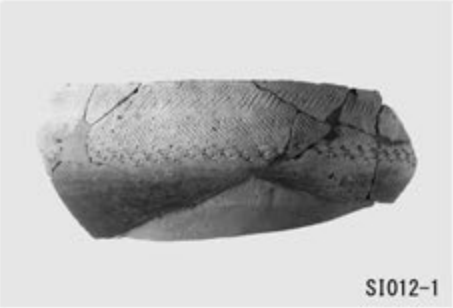
SI005-4

弥生時代土器（1）～遺構出土～





弥生時代土器（２）～遺構出土～


SI012-1

SI012-3

SI012-4

SI013-1

SI013-2

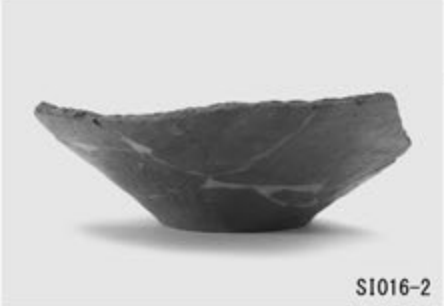
SI013-5

SI013-6

SI013-7

SI015-2

SI016-1

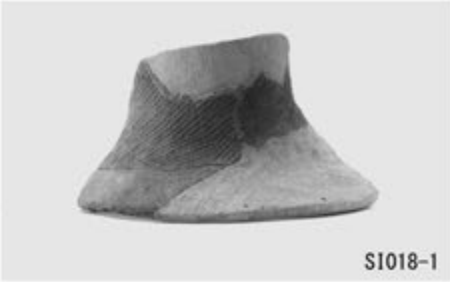

SI016-2

SI016-3

SI017-1

SI017-2

SI017-4


SI018-1

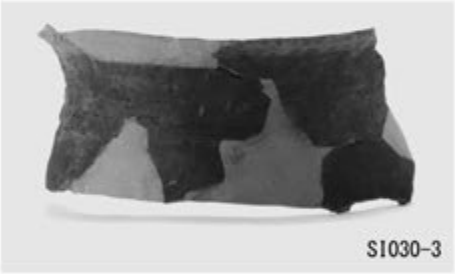
SI018-2

弥生時代土器（３）～遺構出土～

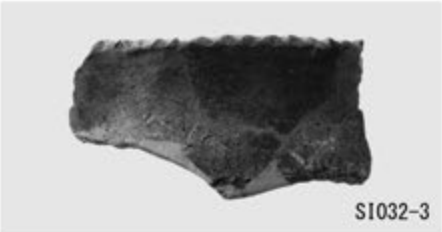
SI026-3

SI027-1

SI030-1

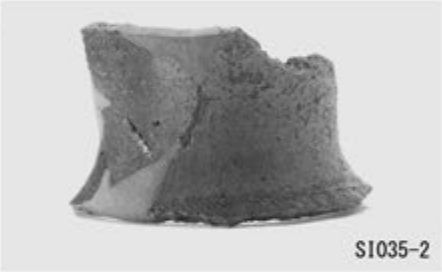

SI030-3

SI031-5


SI032-3

SI034-1

SI035-1


SI035-2

SI039-1

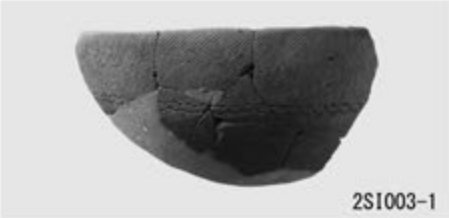
SI039-2

SI039-3

SI044-1

2SI001-1

2SI002-1


2SI003-1

2SI005-3

弥生時代土器（4）～遺構出土～

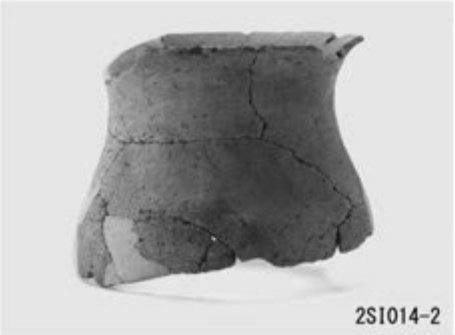
2SI008-1

2SI008-2

2SI008-4

2SI008-6

2SI014-1


2SI014-2

2SI014-3

2SI014-5

2SI014-6

2SI014-7

2SI014-8

2SI020-3

2SI021-1

3SI028-1

3SI028-2

3SI028-3

3SI028-4

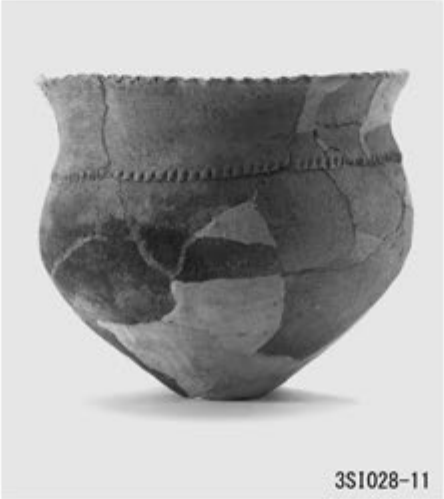
弥生時代土器（５）～遺構出土～

3SI028-5

3SI028-10

4SI001-5

3SI028-6


3SI028-11

4SI001-6

3SI028-7

3SI028-12

4SI002-3

3SI028-9

4SI001-3

4SI003-1

弥生時代土器（6）～遺構出土～

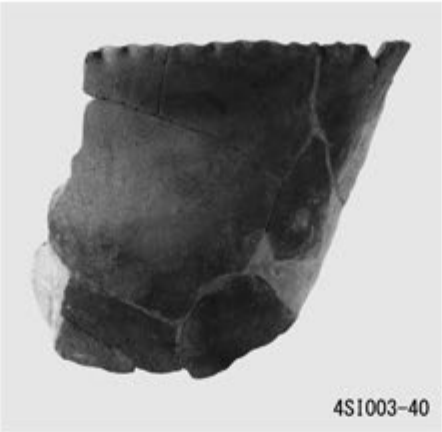
4SI003-2

4SI003-3

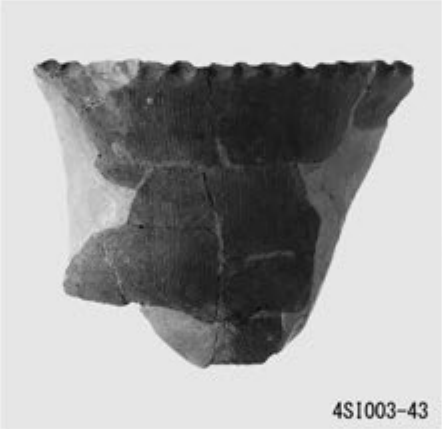
4SI003-7

4SI003-8

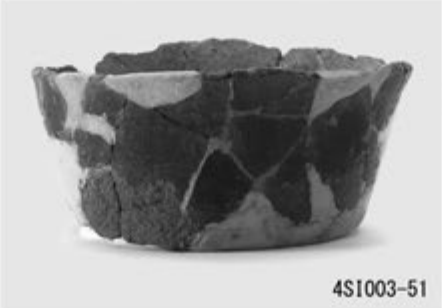
4SI003-32


4SI003-40

4SI003-42


4SI003-43

4SI003-46


4SI003-51

4SI003-52

4SI003-53

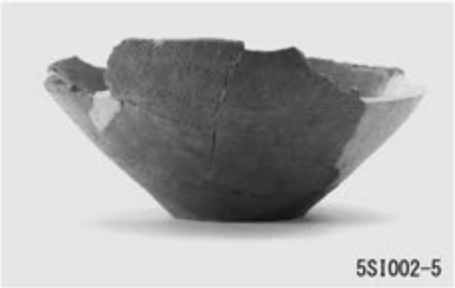
4SI003-54

4SI003-55

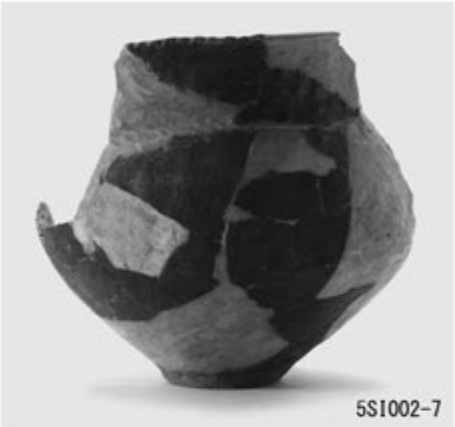
4SI003-58

5SI002-1

弥生時代土器（７）～遺構出土～


5SI002-5

5SI002-6


5SI002-7

5SI002-8

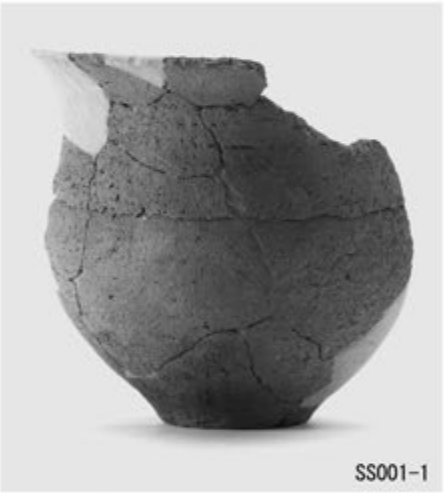
5SI003-1

5SI004-1

5SI004-3

7SI003-1

7SI005-1


SS001-1

SS002-1

SS002-2

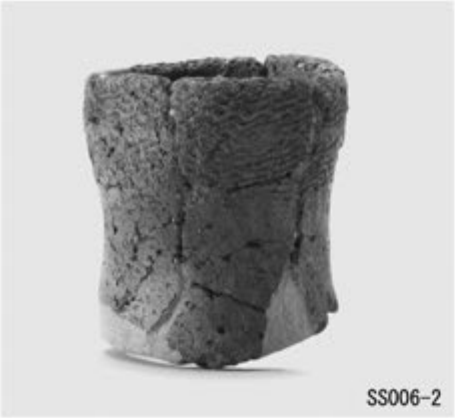
SS002-3

SS003-2

SS003-3

SS006-1

弥生時代土器（８）～遺構出土～


SS006-2

SS006-3

SS006-8

SS006-9

SS006-10

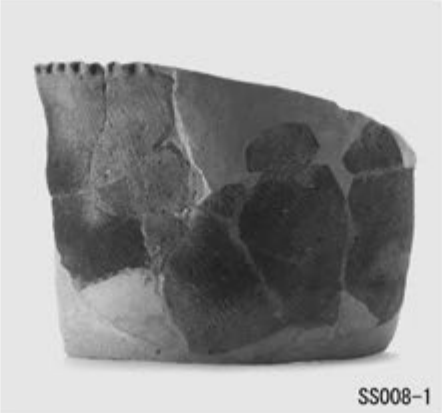
SS006-12

SS006-13

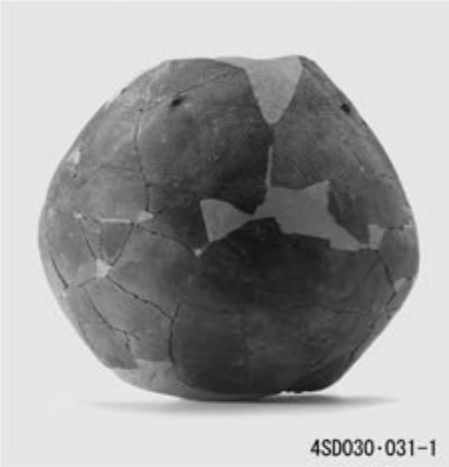
SS006-15

SS006-16

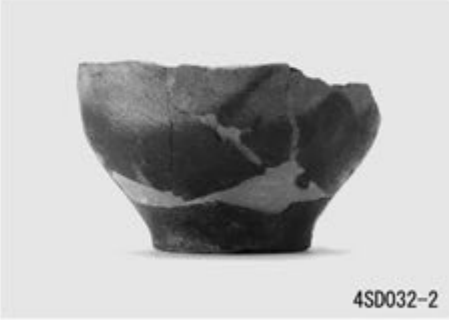
SS006-20


SS008-1

4SD029-1

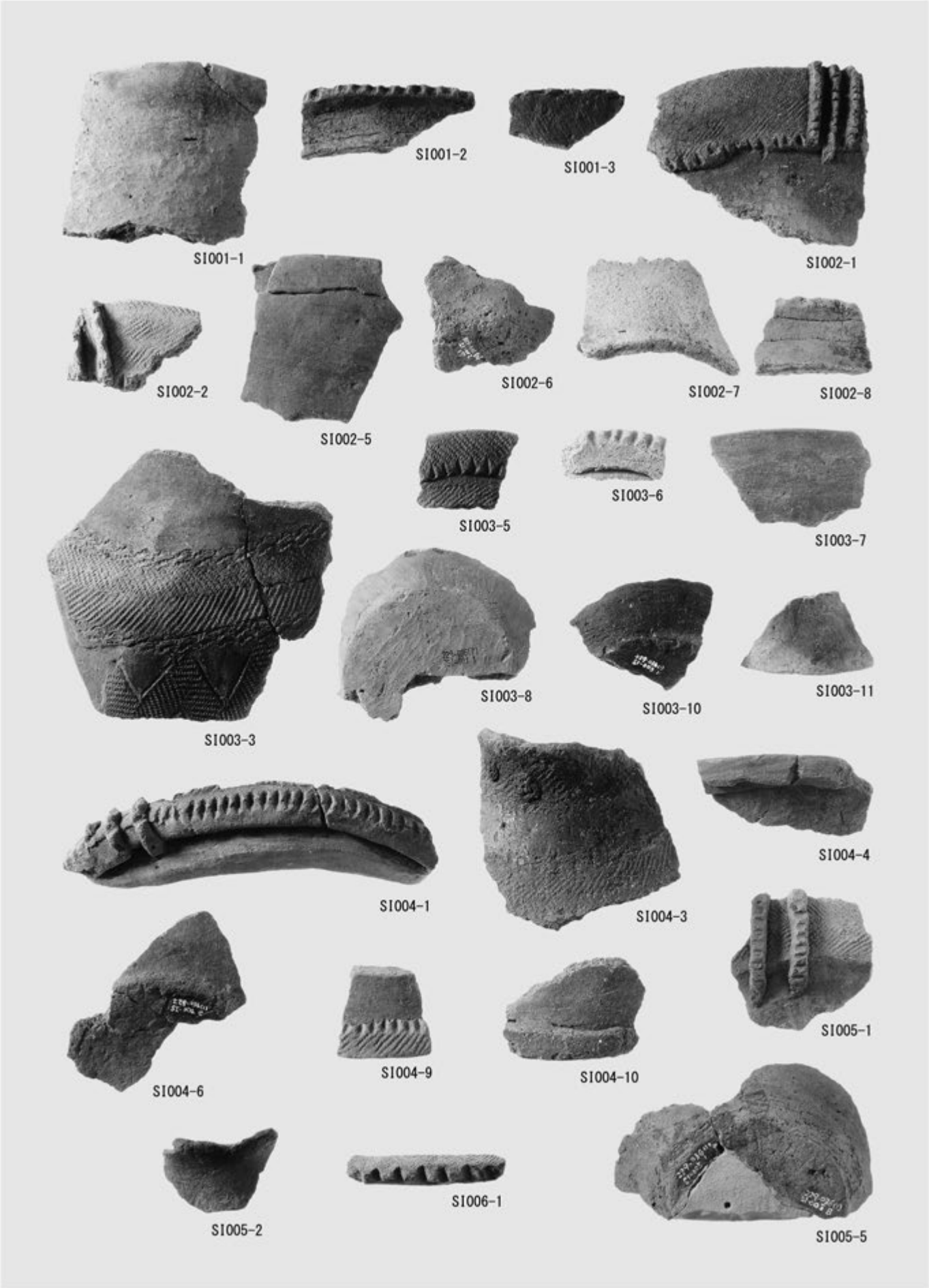

4SD030・031-1

4SD030・031-5

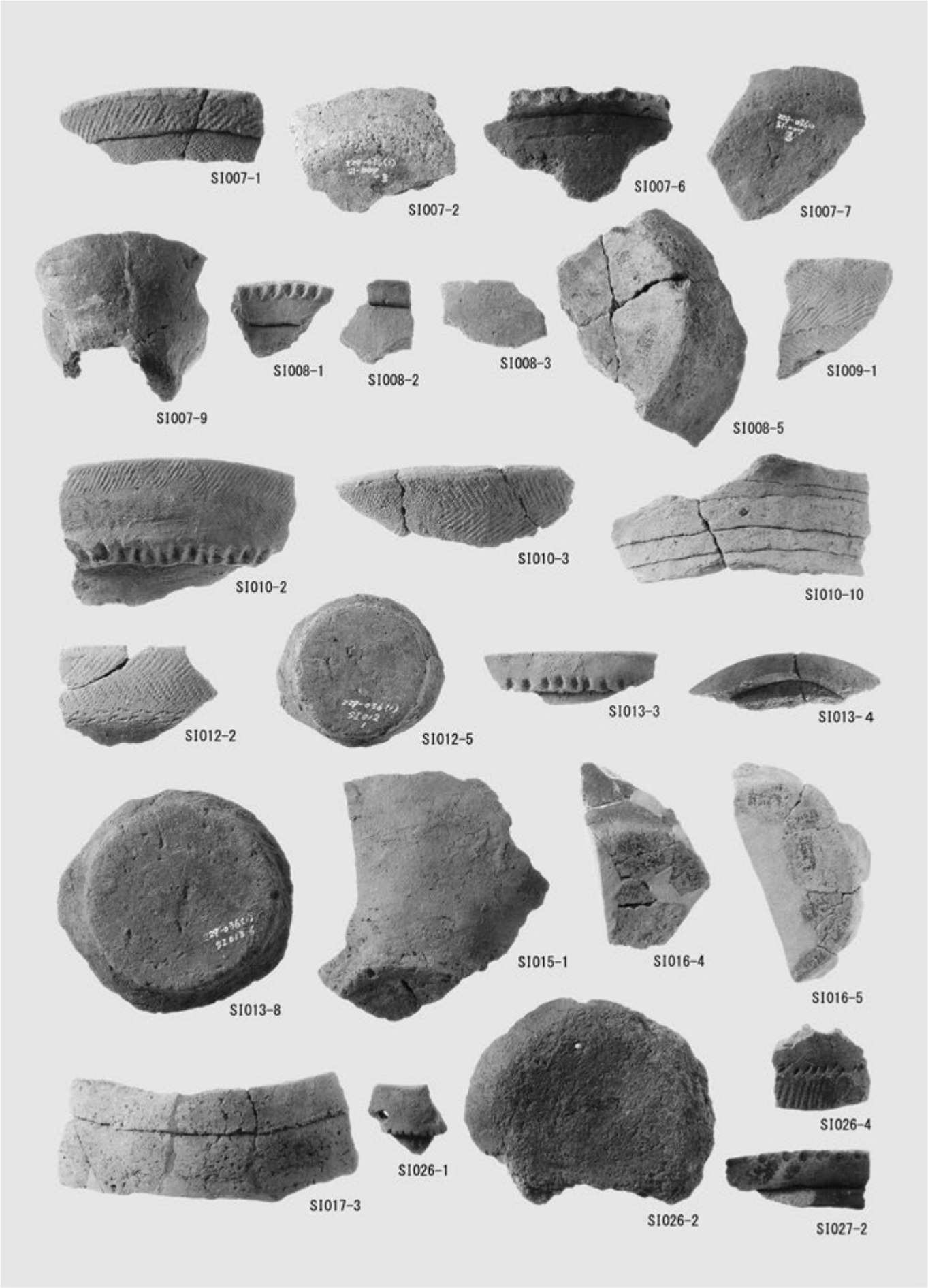

4SD032-2

5SD003-5

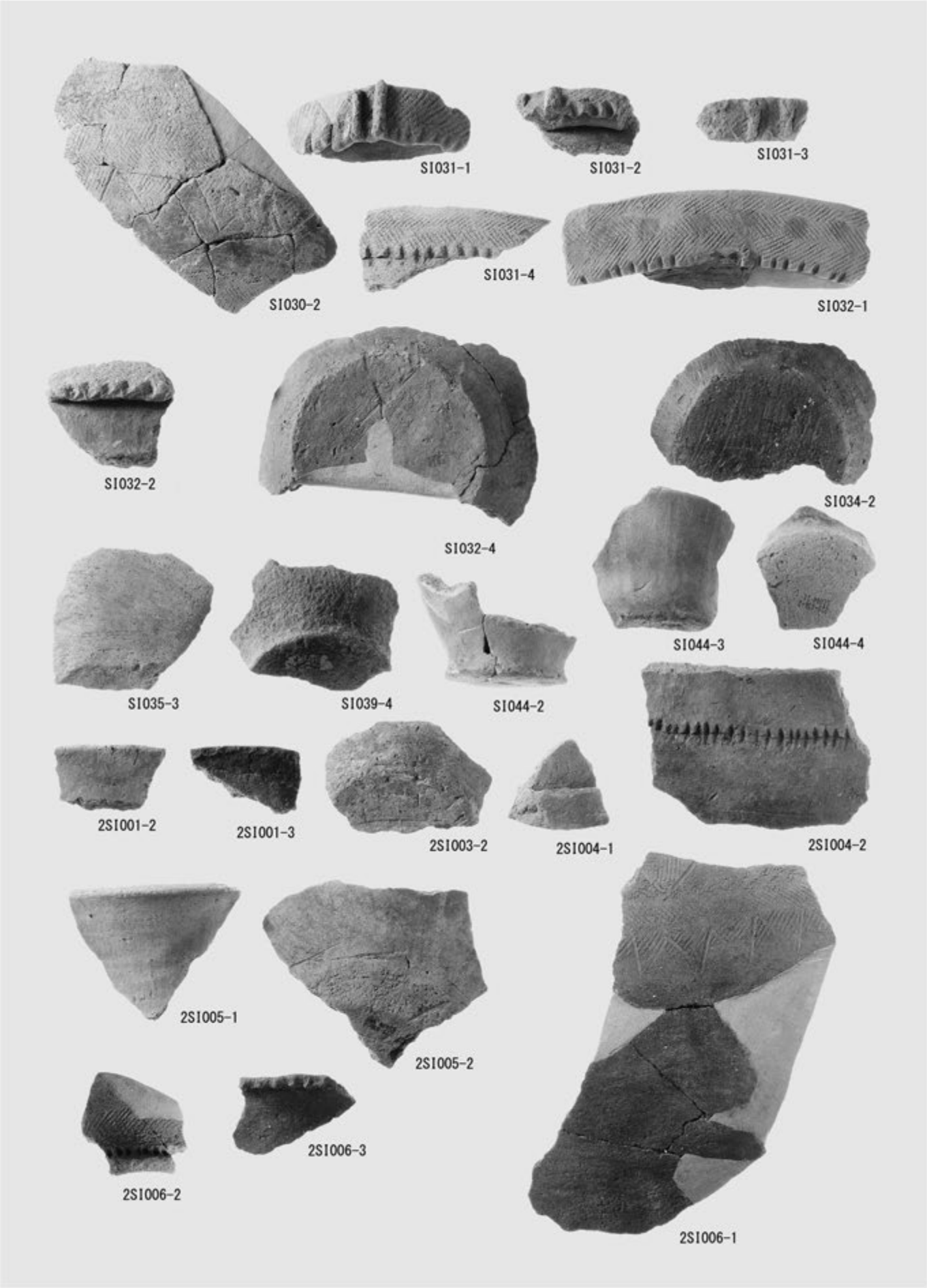
弥生時代土器（９）～遺構出土～



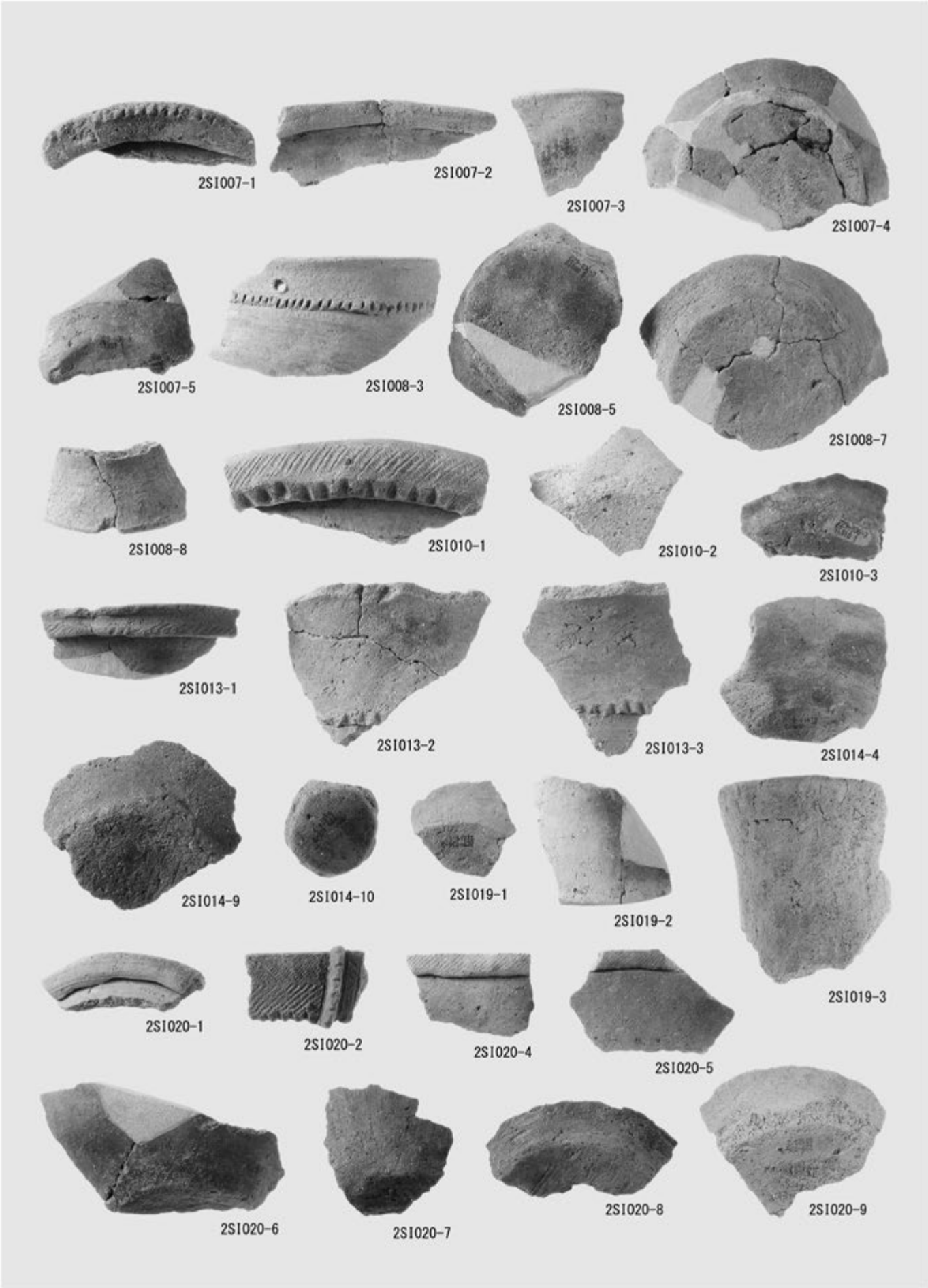
弥生時代土器（10）～遺構出土～



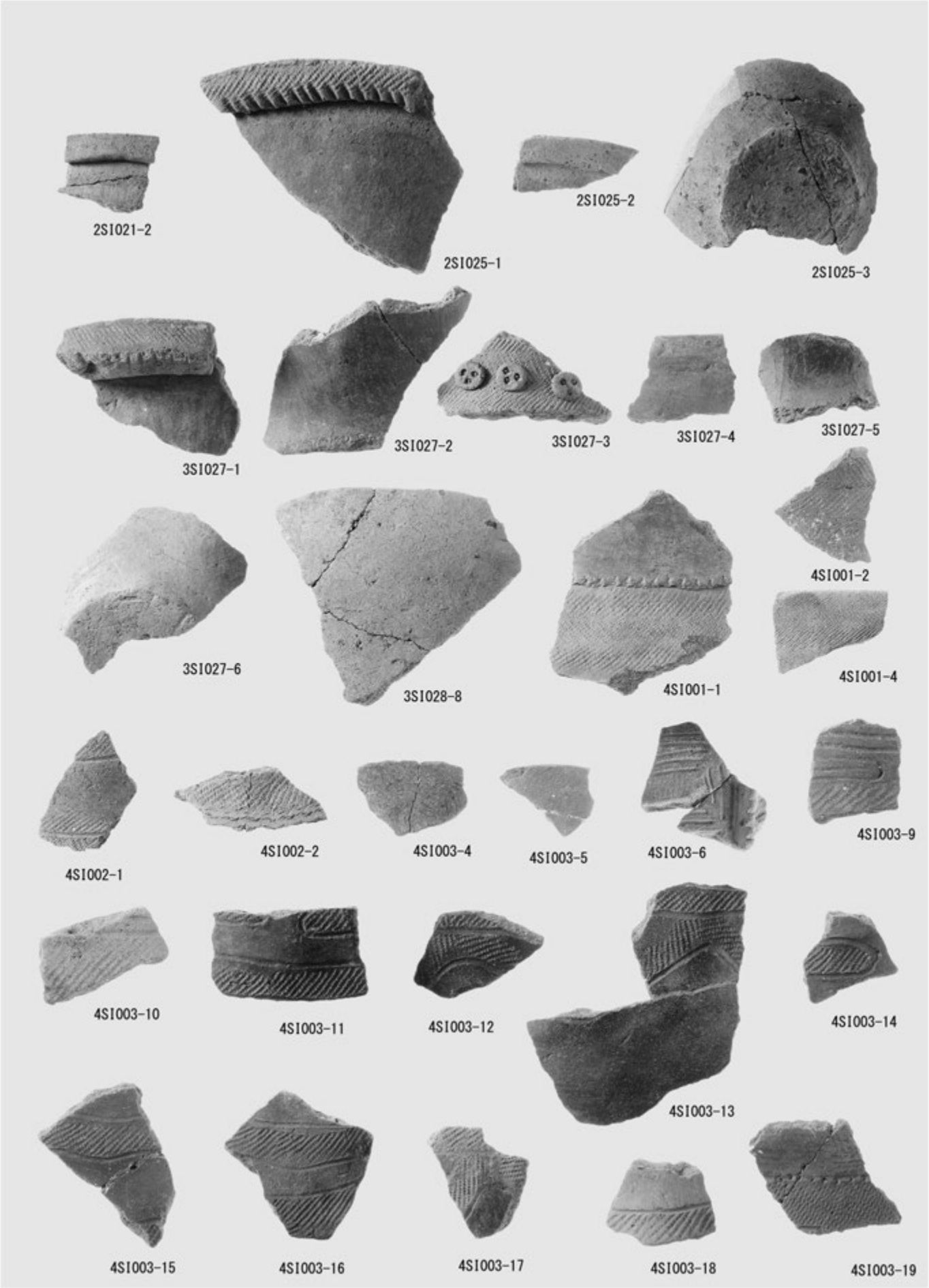
弥生時代土器（11）～遺構出土～



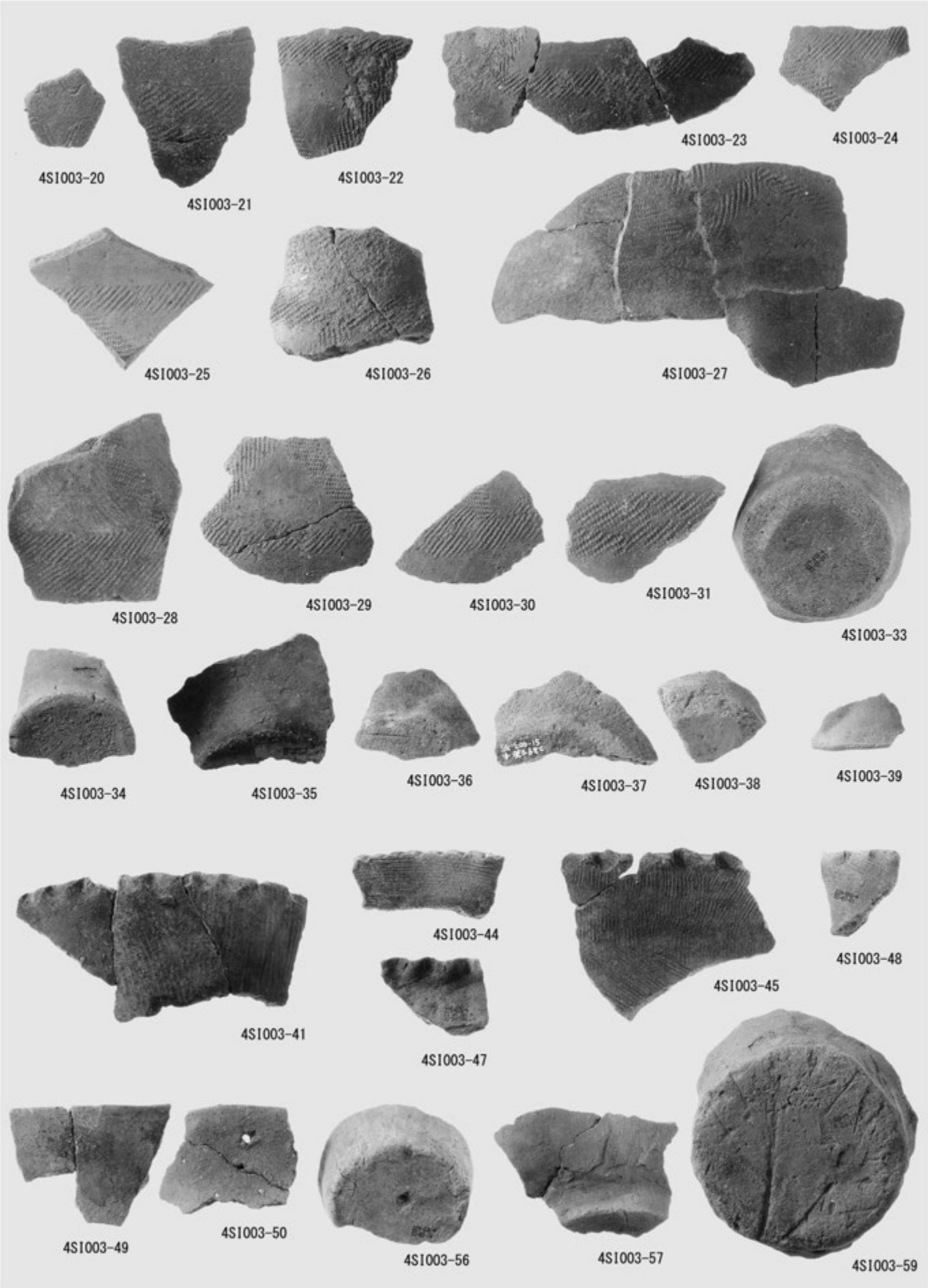
弥生時代土器（12）～遺構出土～



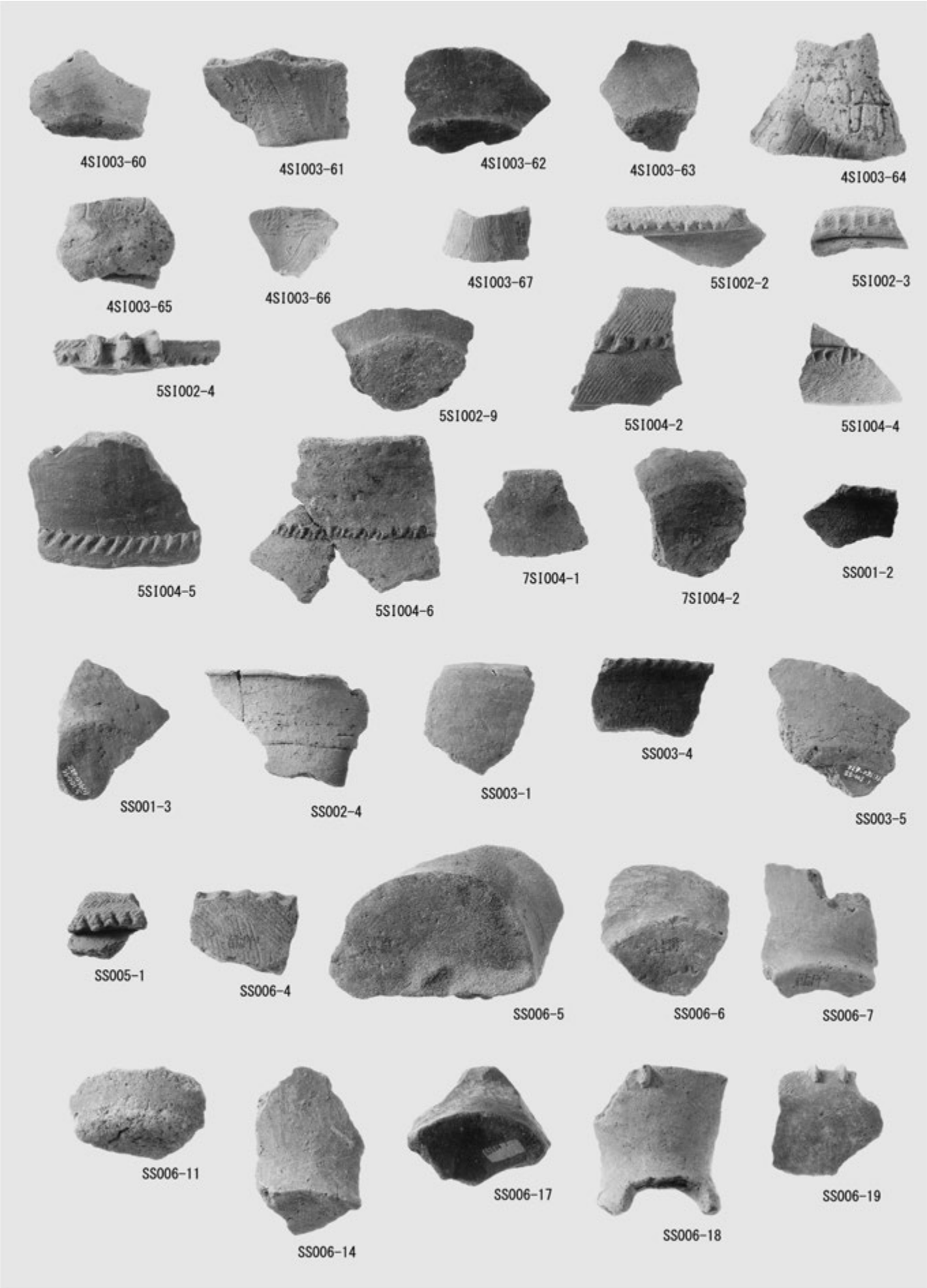
弥生時代土器（13）～遺構出土～



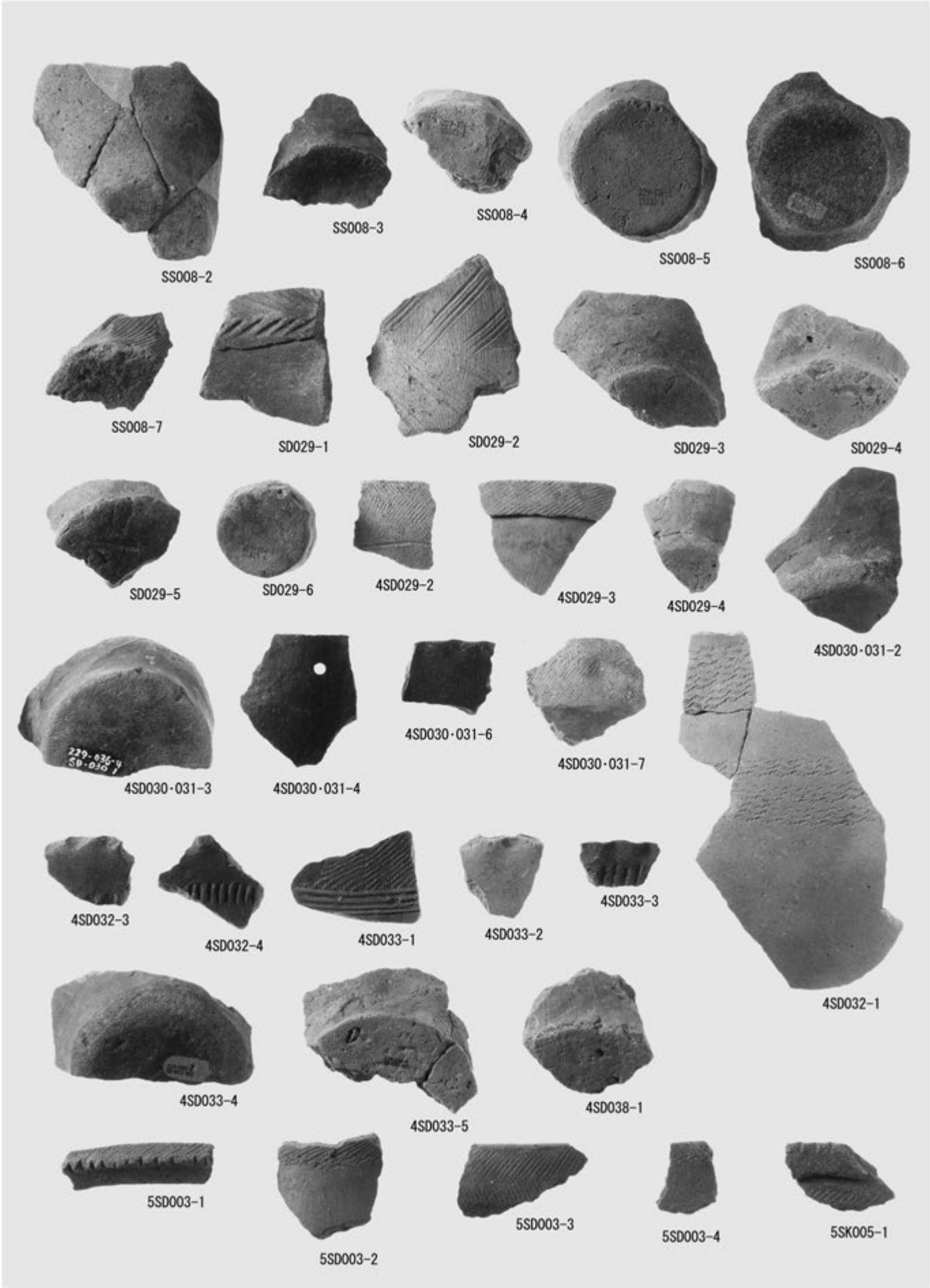
弥生時代土器（14）～遺構出土～



弥生時代土器（15）～遺構出土～



弥生時代土器（16）～遺構出土～



弥生時代土器（17）～遺構出土～

3

4

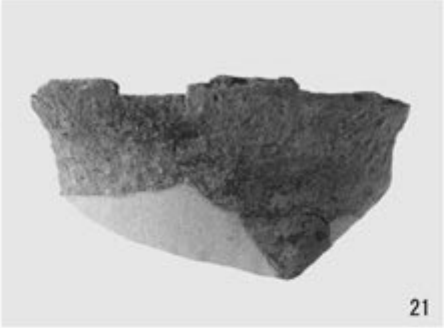
9

10

11

15

16


21

27

28

32

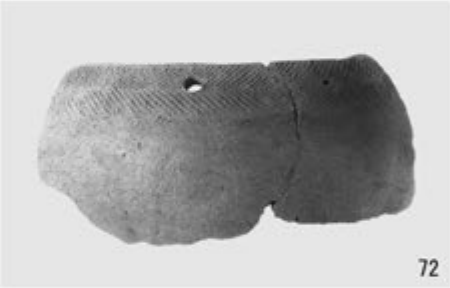
36

38

48

52

53

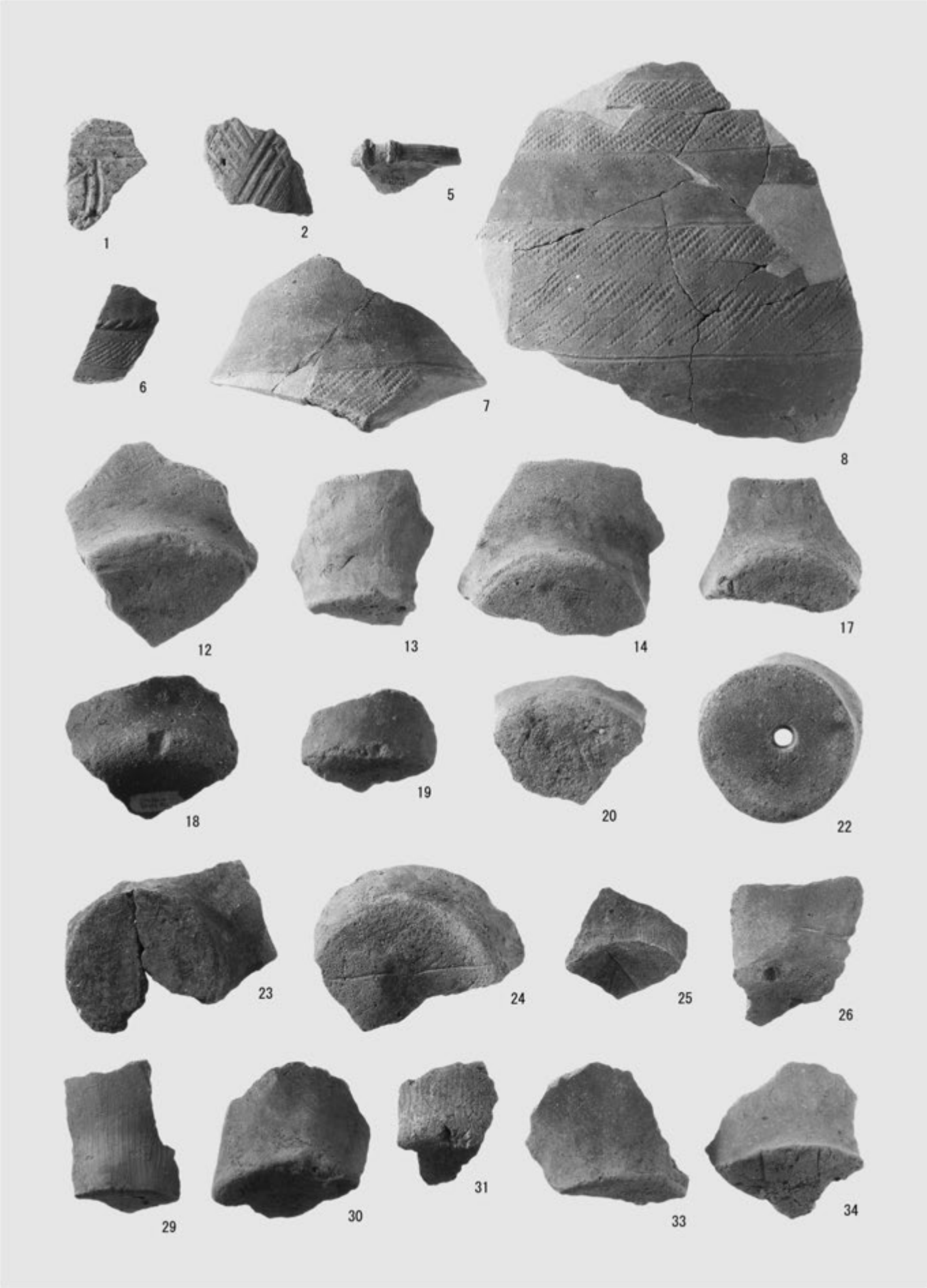

72

73

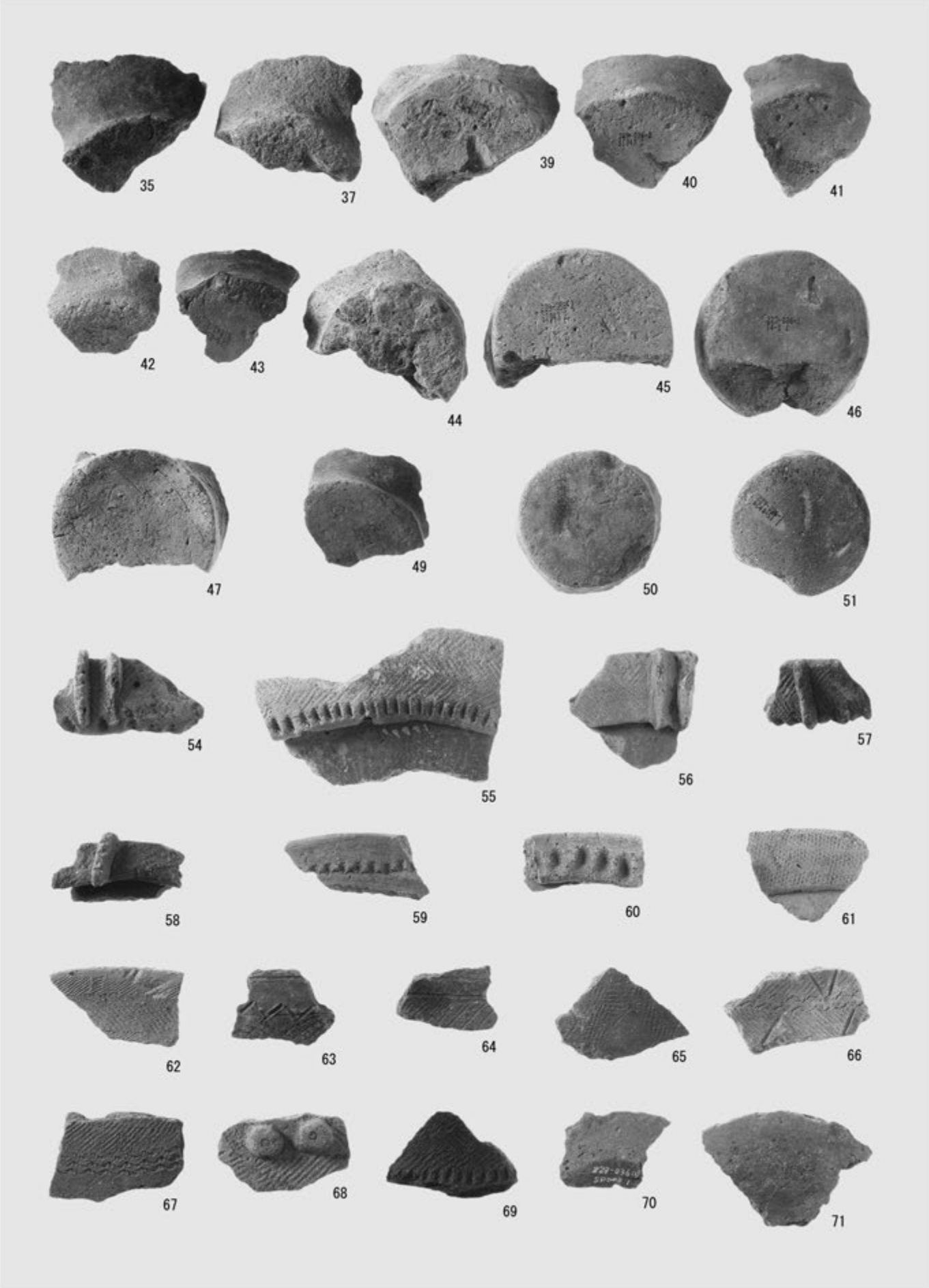
75

87

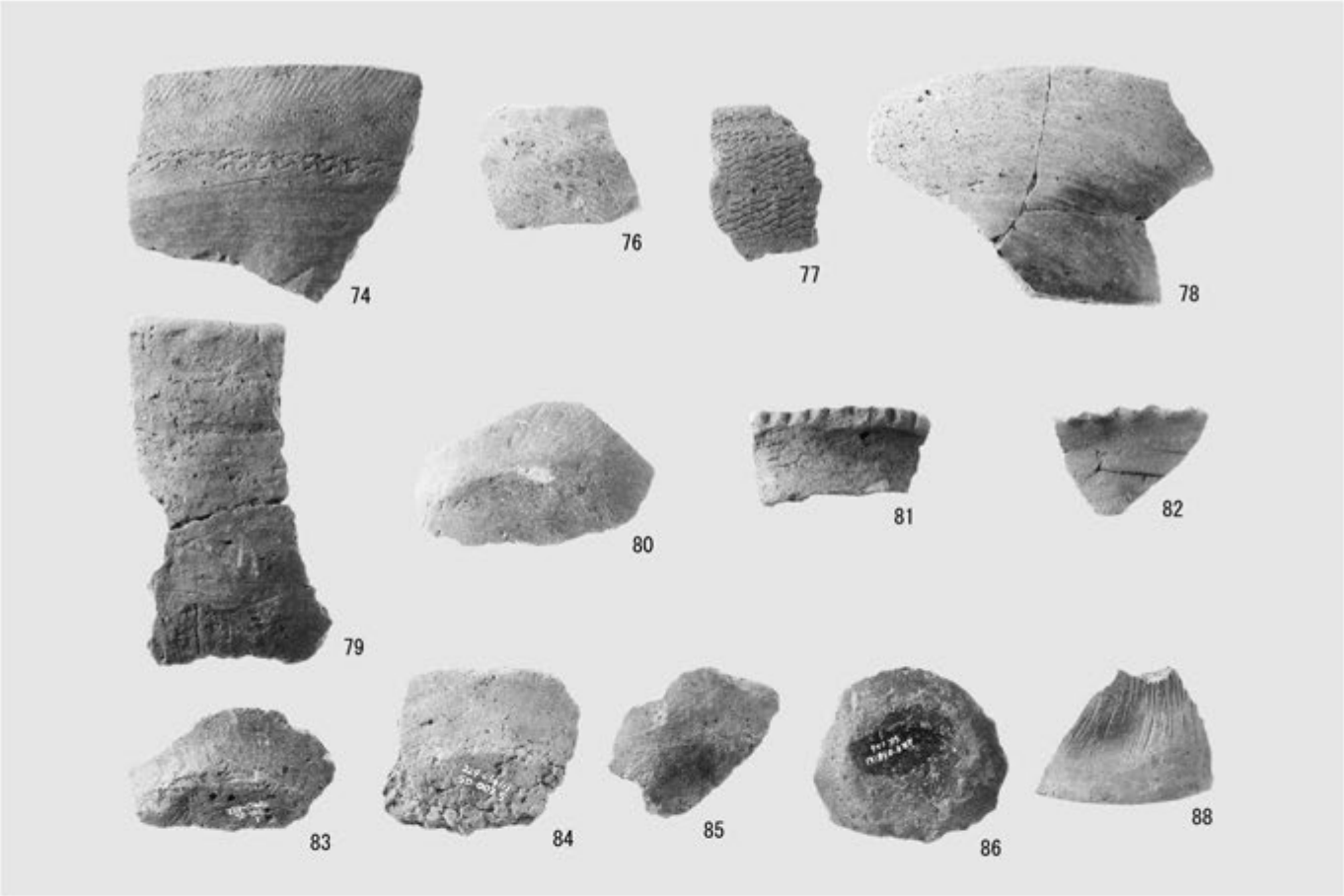
弥生時代土器（18）～遺構外出土～



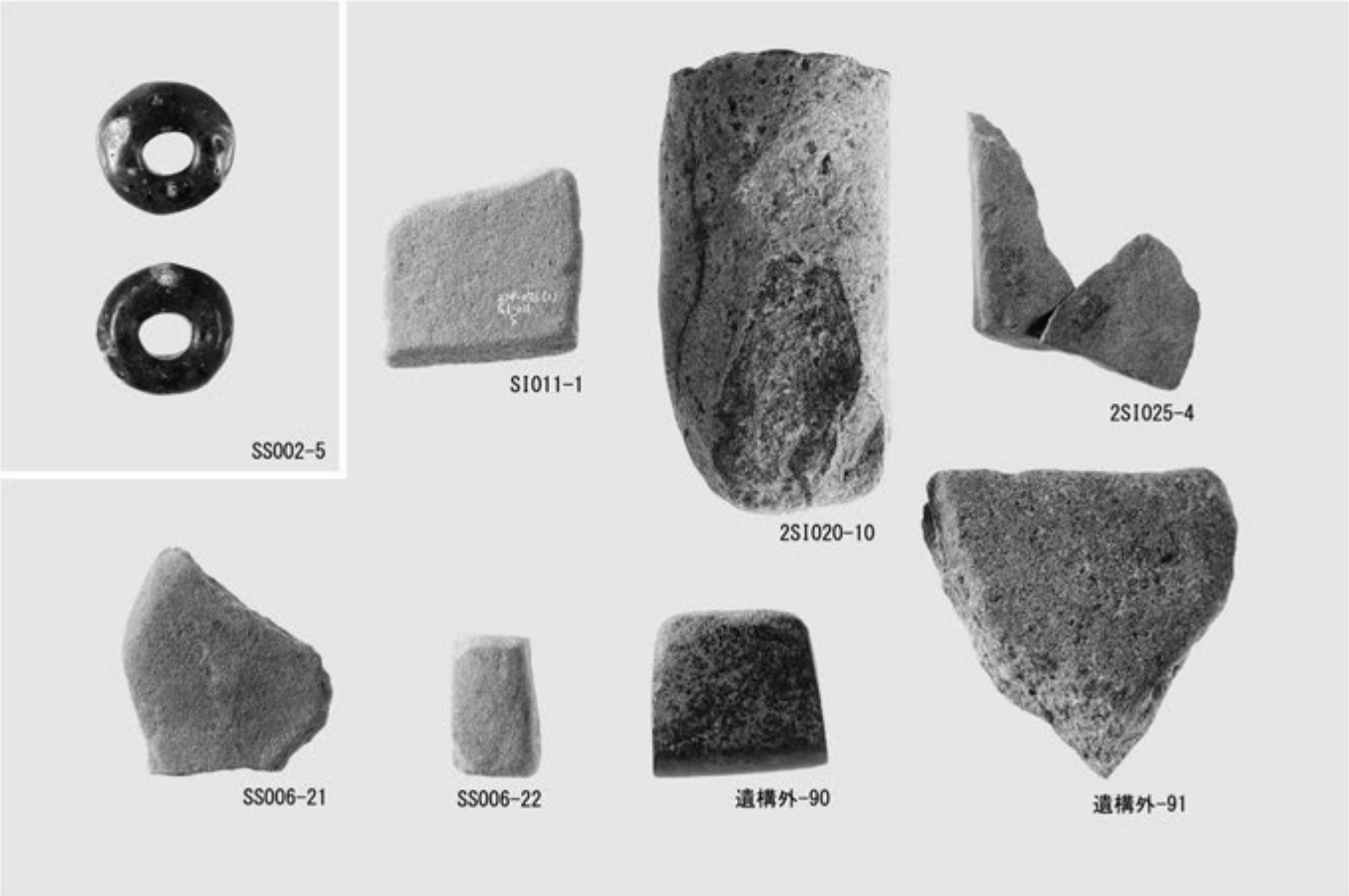
弥生時代土器（19）～遺構外出土～



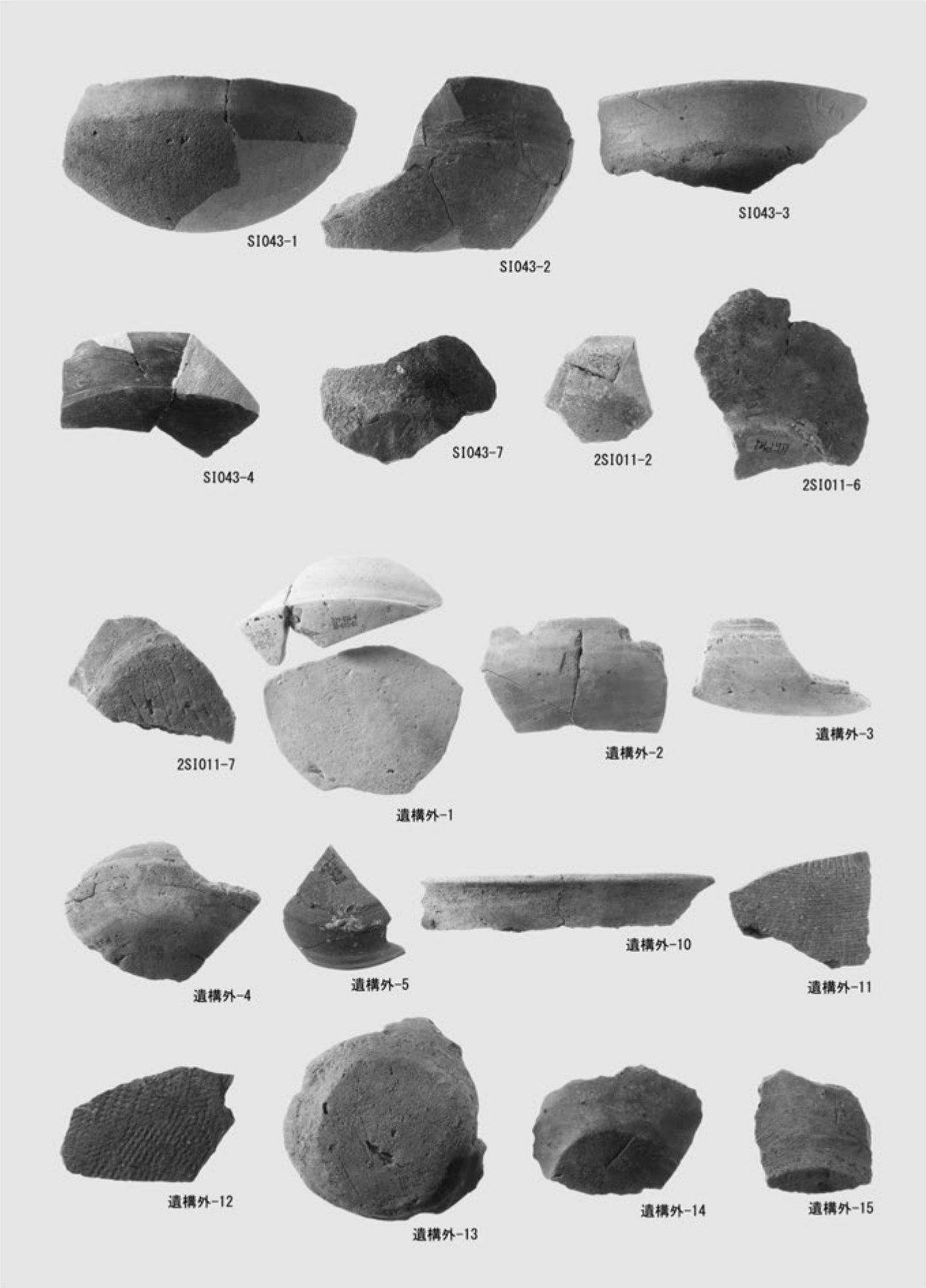
弥生時代土器（20）～遺構外出土～



弥生時代土器（21）～遺構外出土～



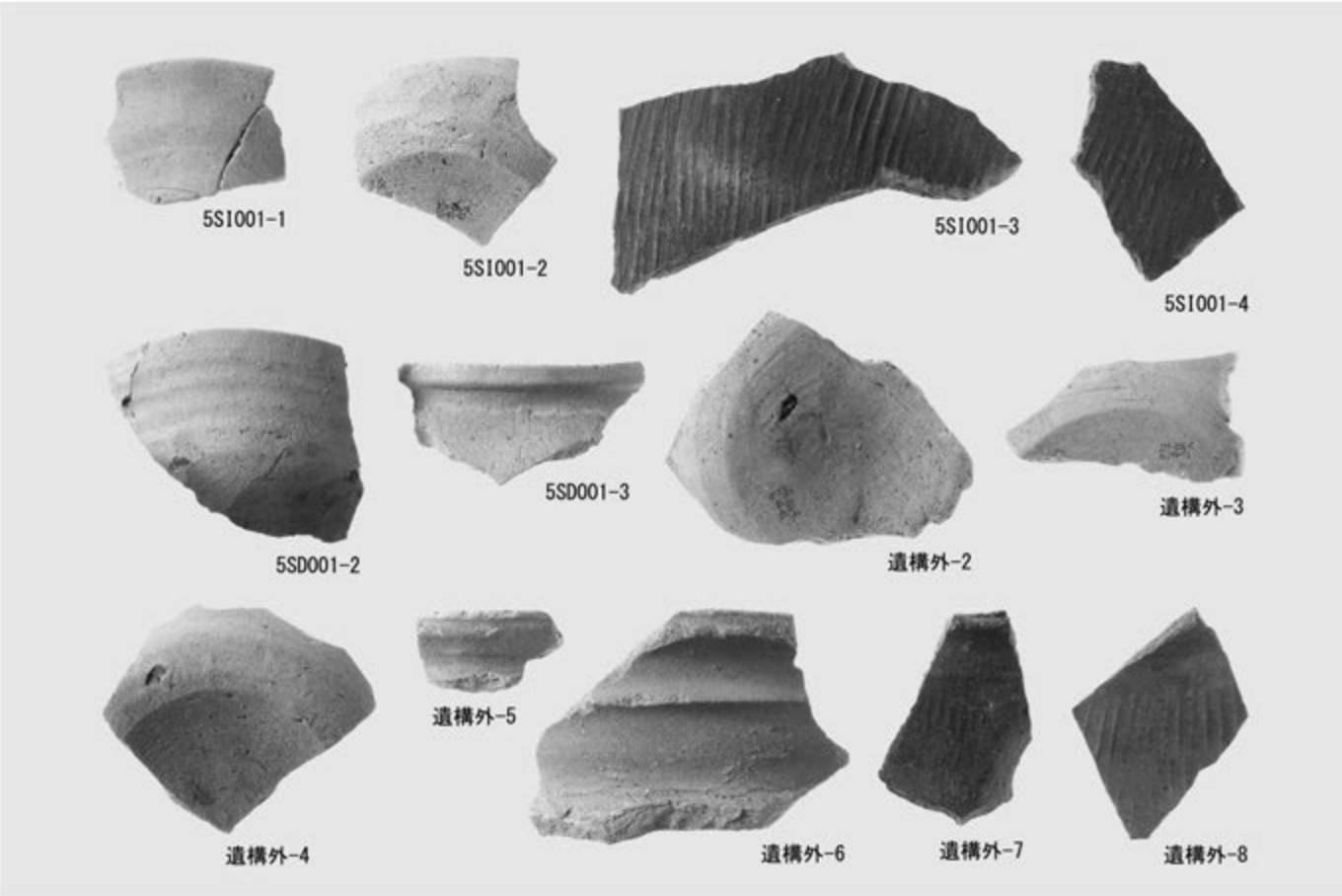
ガラス玉、弥生時代石器・石製品


SI043-1
SI043-2
SI043-3
SI043-4
SI043-7
2SI011-2
2SI011-6
2SI011-7
遺構外-1
遺構外-2
遺構外-3
遺構外-4
遺構外-5
遺構外-10
遺構外-11
遺構外-12
遺構外-13
遺構外-14
遺構外-15

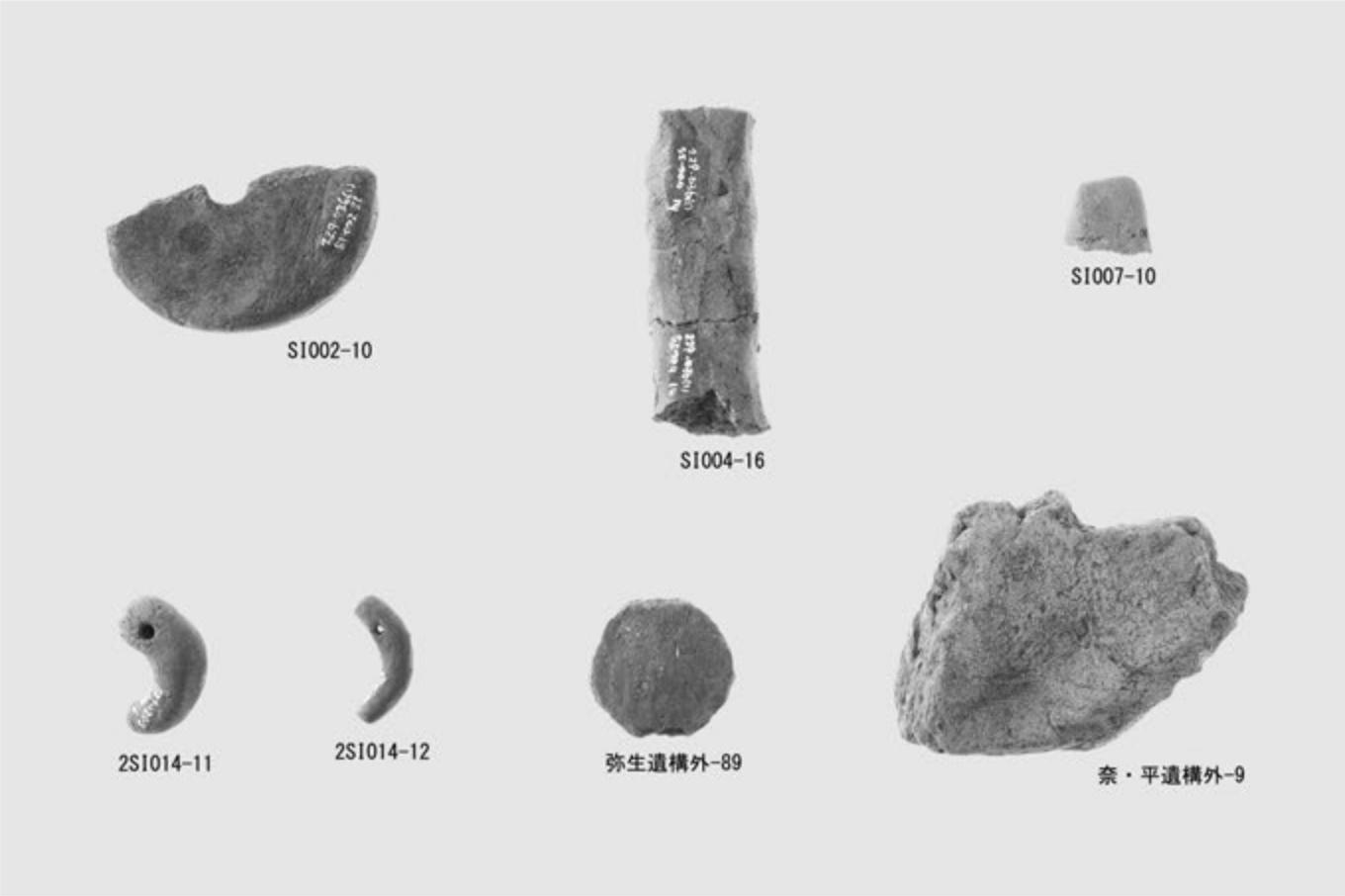
古墳時代土器（1）

古墳時代土器（2）

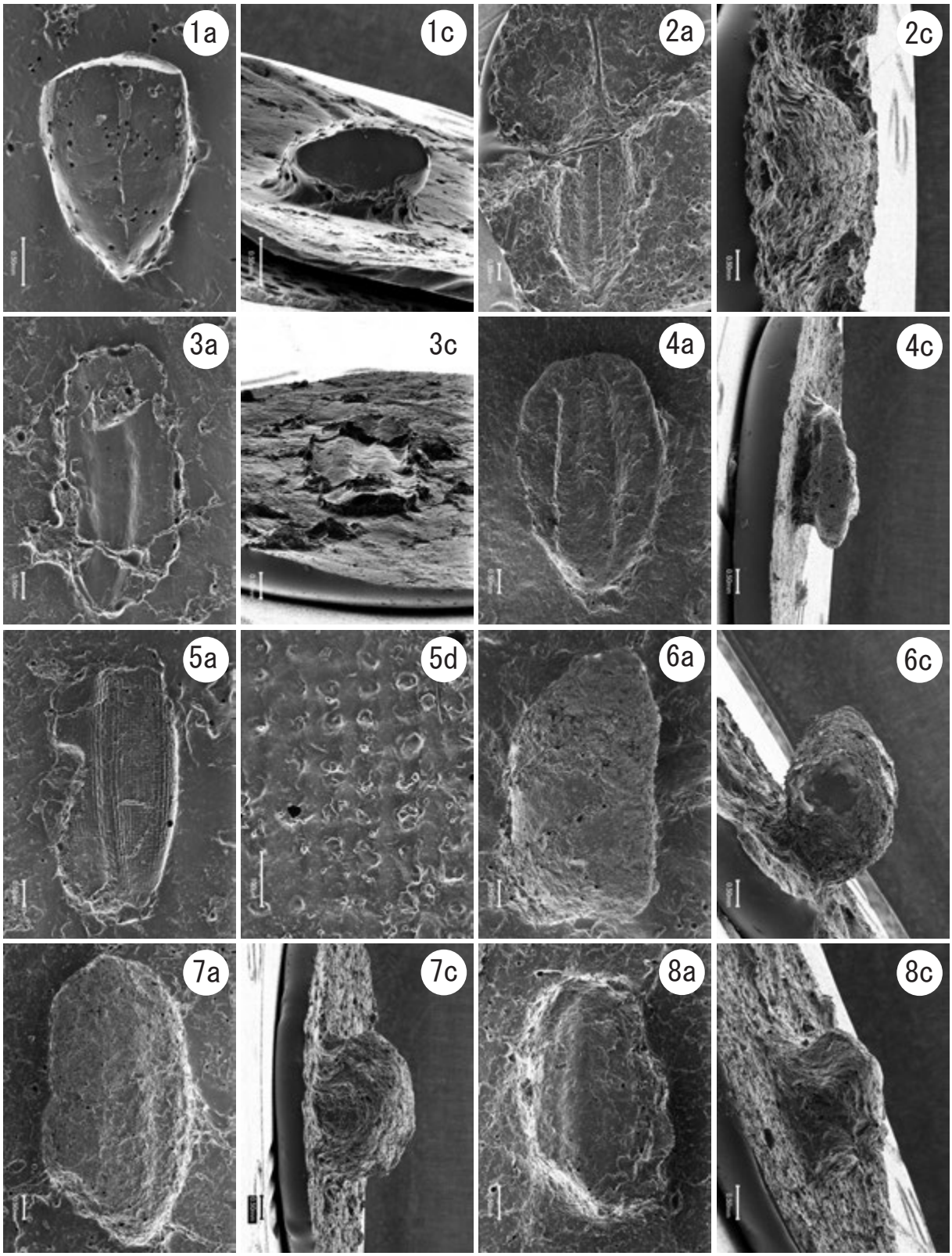
奈良・平安時代土器（1）



奈良・平安時代土器（2）

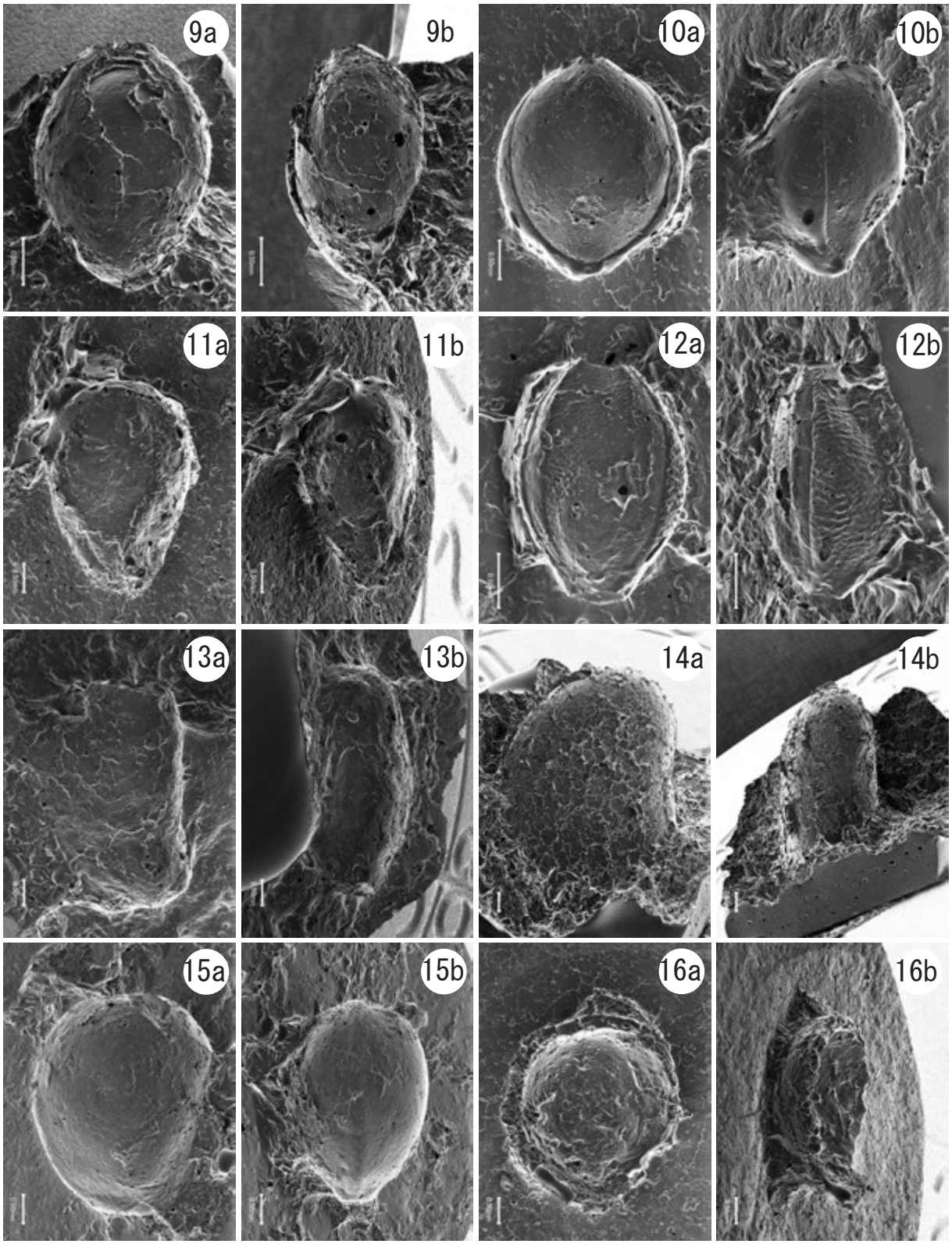


弥生時代～奈良・平安時代土製品



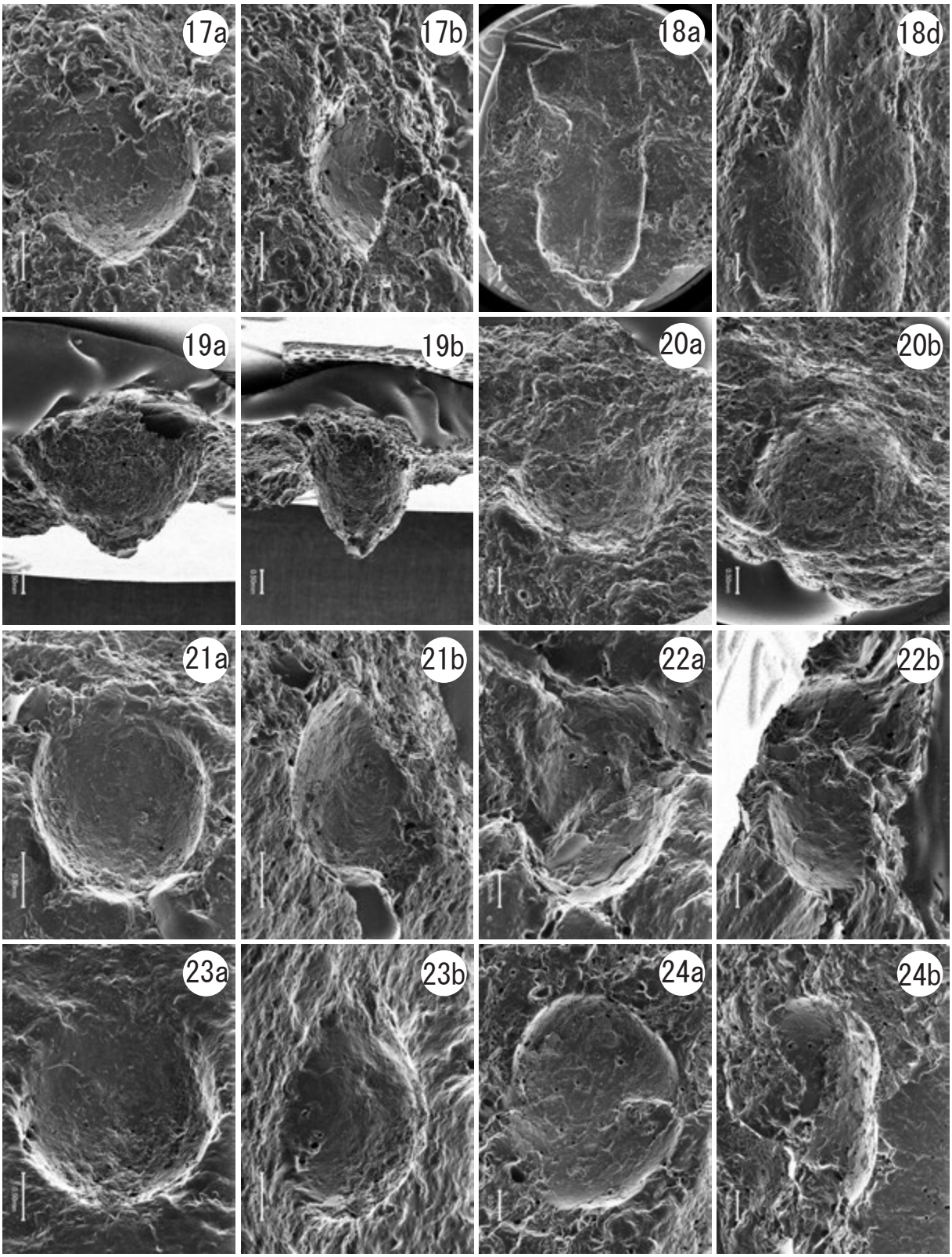
１．ニワトコ？（試料№１）、イネ籾（芒残存）（試料№26）、３．イネ籾殻（試料№２）、４．イネ籾殻（試料№16b）、５．イネ籾殻（試料№28）、６．イネ種子（試料№10）、７．イネ種子（試料№14a）、８．イネ種子（試料№86）、
ａ：側面観、ｂ：内頴側または腹面側、ｃ：上面観、ｄ：顆粒状突起の拡大

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）



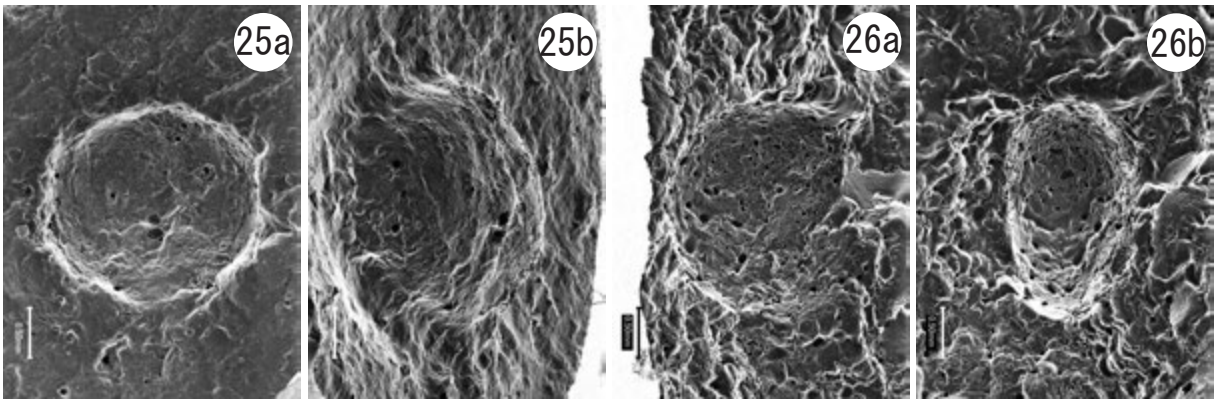
9. キビ有ふ果（試料 No.77）、10. キビ有ふ果（試料 No.128）、11. キビ？有ふ果（試料 No.116）、12. アワ有ふ果（試料 No.7）、13. マメ科？種子（試料 No.18b）、14. マメ科？種子（試料 No.74）、15. アサ核（試料 No.90）、16. アサ？核（試料 No.173）
a：側面観、b：内頴側または腹面側

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（2）



17. シソ属？果実（試料 No.60）、18. シダ植物裂片（試料 No.135）、19. 不明種実（試料 No.45）、20. 不明種実（試料 No.76）、21. 不明種実（試料 No.89）、22. 不明種実（試料 No.119）、23. 不明種実（試料 No.134）、24. 不明種実？（試料 No.62）
a：側面観、b：腹面側、d：部分拡大写真

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（3）



25. 不明種実？（試料 No.132）、26. 不明種実？（試料 No.175）
a：側面観、b：腹面側

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（4）

写　真　図　版

図版1

H20 調査区調査前
（北西から）

H19 調査区
（25G 付近、南東から）

H20 調査区
（22F・22G・23F、東から）

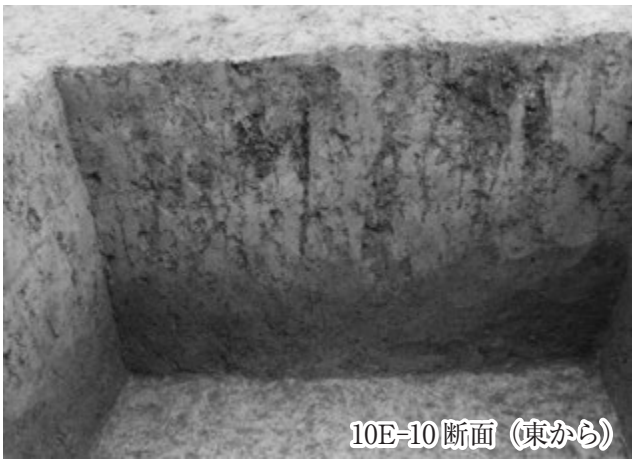
図版2

H21-3 調査区（東から）

H22 調査区
（9C・9D・10C・10D・11C、西から）

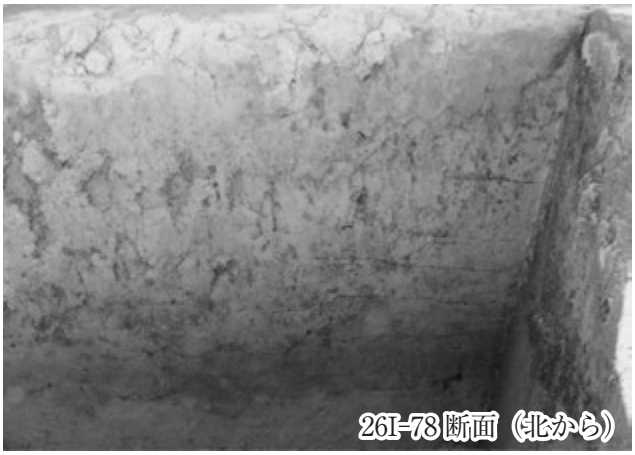
H23 調査区（北西から）

8D-82 断面（西から）

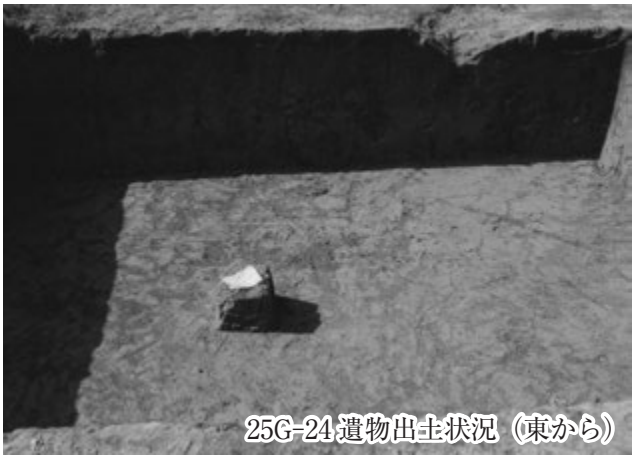

10E-10 断面（東から）

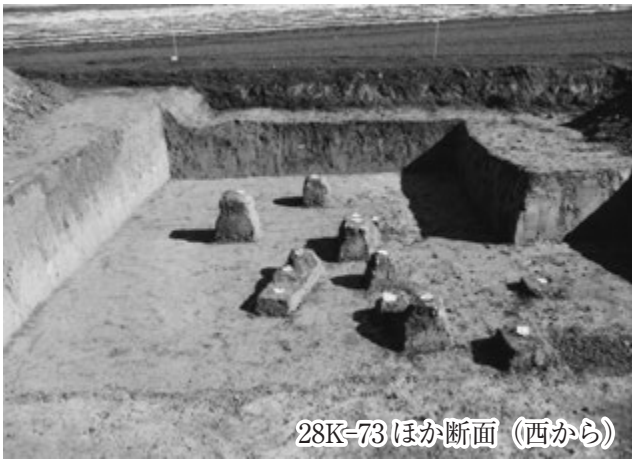
12D-59 断面（南から）

18E-20・30 断面（東から）

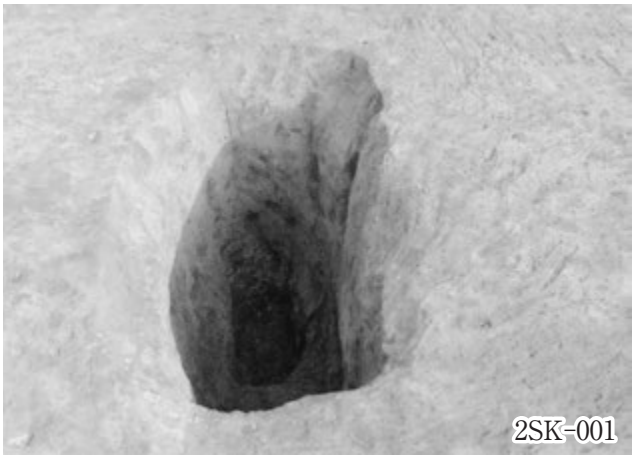

26I-78 断面（北から）

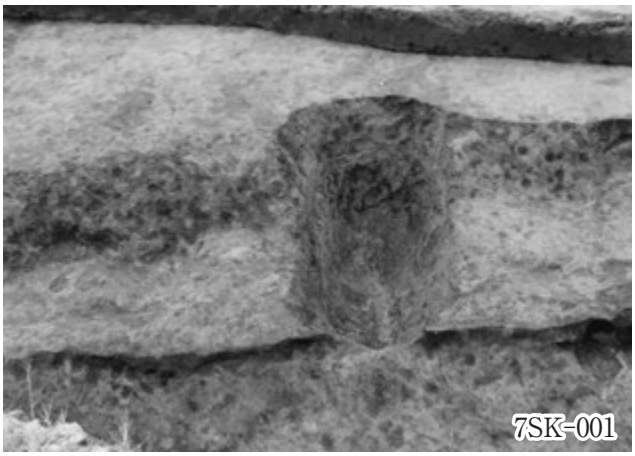
36S-93 断面（南から）


25G-24 遺物出土状況（東から）

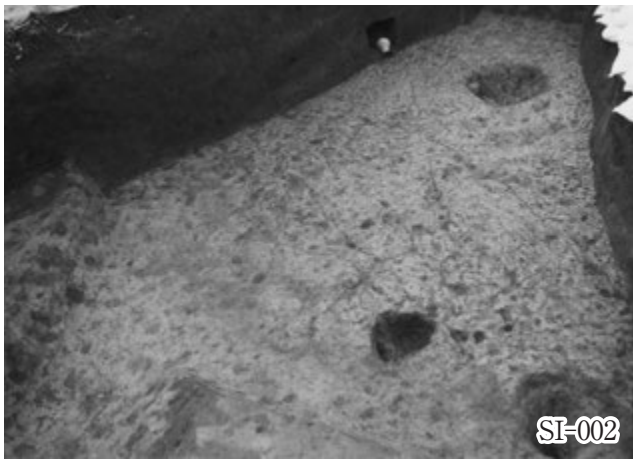

28K-73 ほか断面（西から）

図版4





SI-001

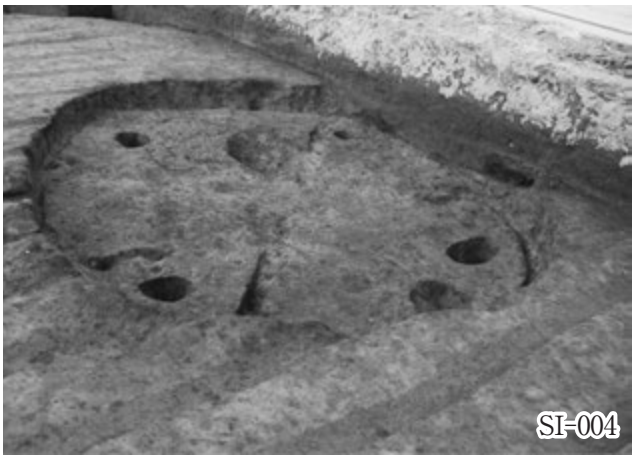

SI-002

SI-002 遺物出土状況

SI-003（H19 調査分）

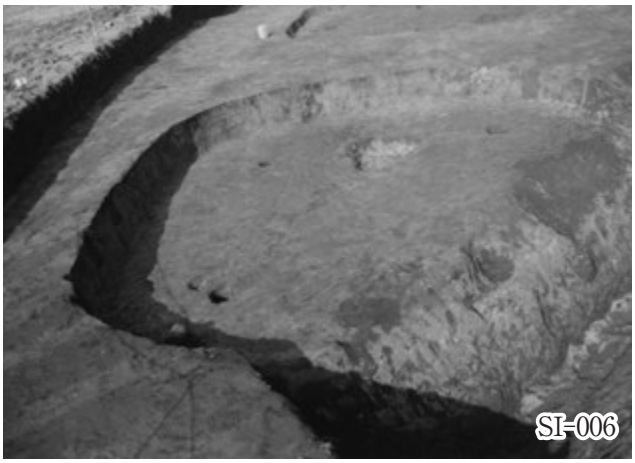
SI-003（H27 調査分）

SI-003 遺物出土状況


SI-004

SI-004 遺物出土状況

SI-005


SI-006

SI-007

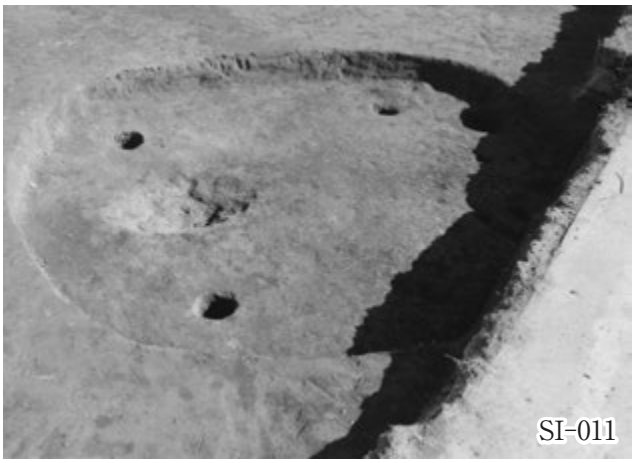
SI-007 遺物出土状況

SI-008（H19 調査分）

SI-008（H27 調査分）

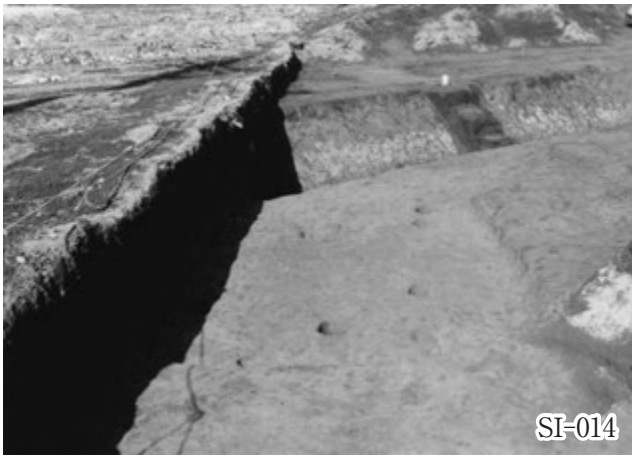
SI-009

SI-010

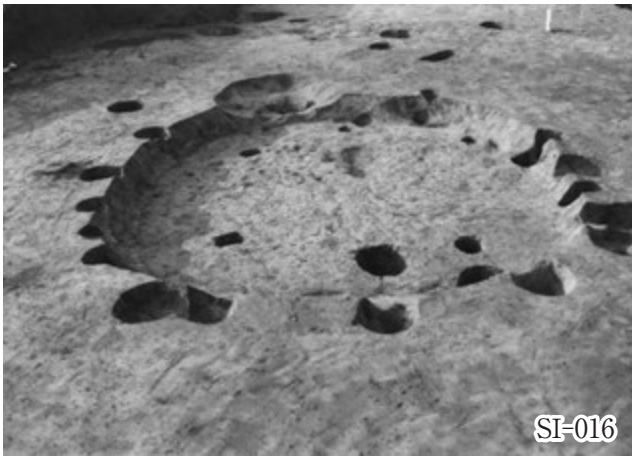

SI-011

SI-012

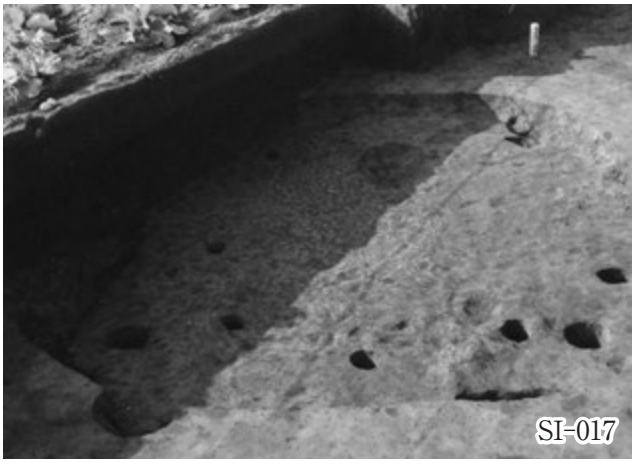
SI-013


SI-014

SI-015

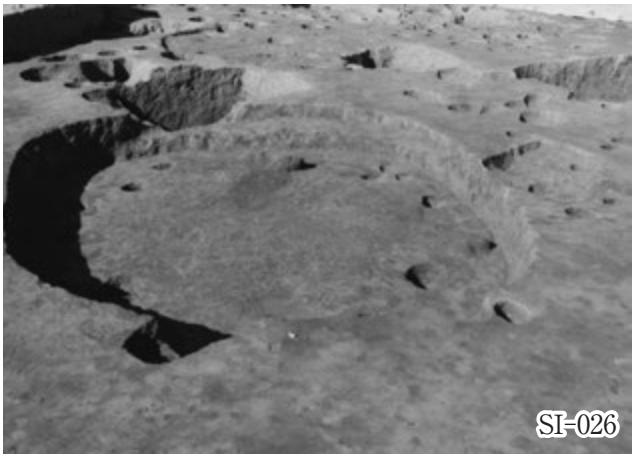

SI-016

SI-016 遺物出土状況


SI-017

SI-018

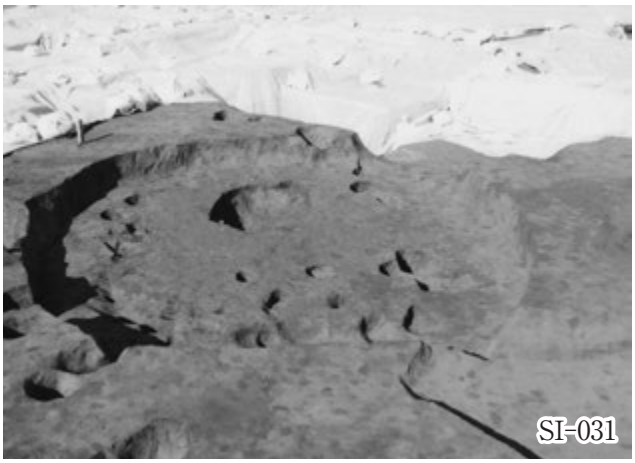
SI-021


SI-026

SI-027

SI-030

SI-030 遺物出土状況


SI-031

SI-032

SI-034

SI-035

SI-037

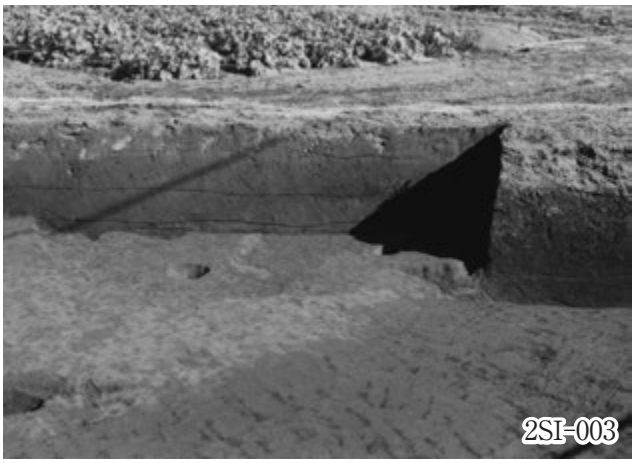
SI-038

SI-039

SI-044

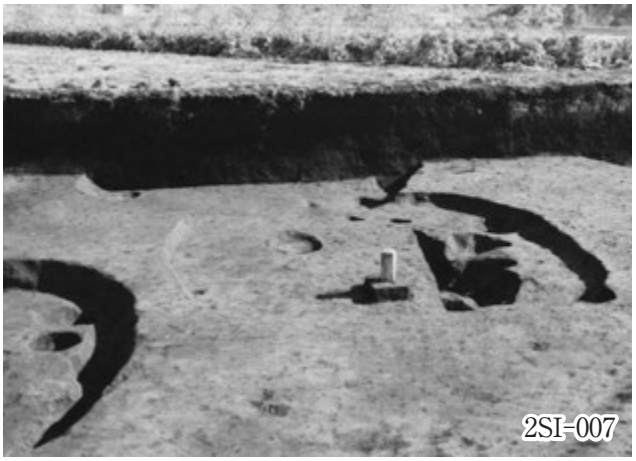
2SI-001

2SI-002


2SI-003

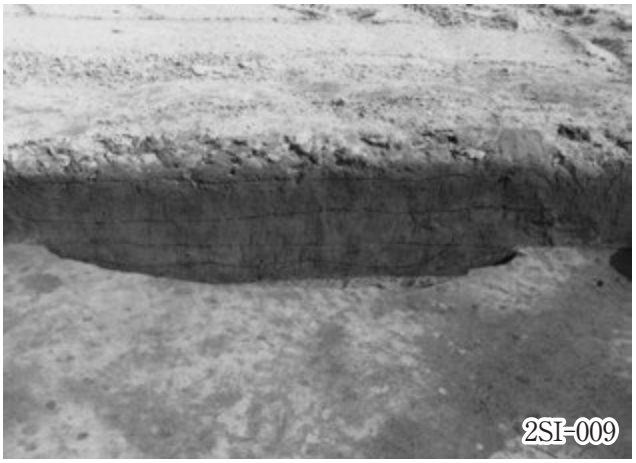
2SI-005

2SI-006


2SI-007

2SI-008

2SI-008 遺物出土状況

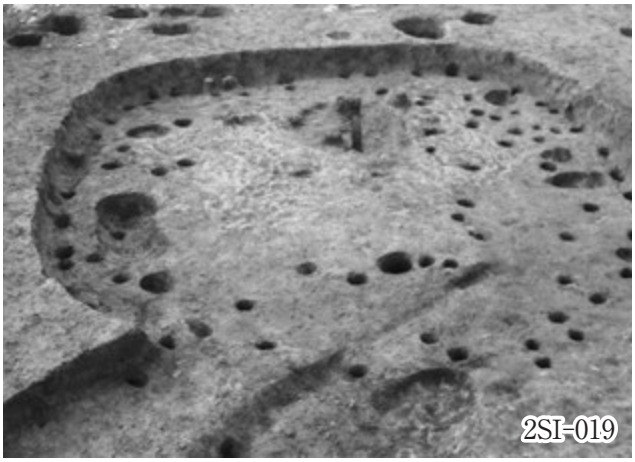

2SI-009

2SI-010

2SI-012・013

2SI-014

2SI-018


2SI-019

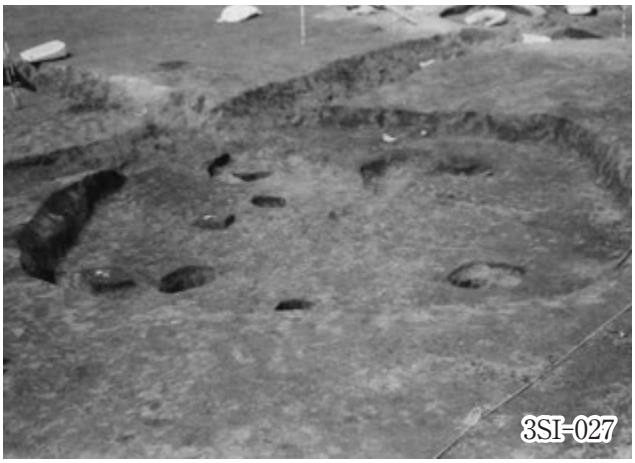
2SI-020・023

2SI-021

2SI-024

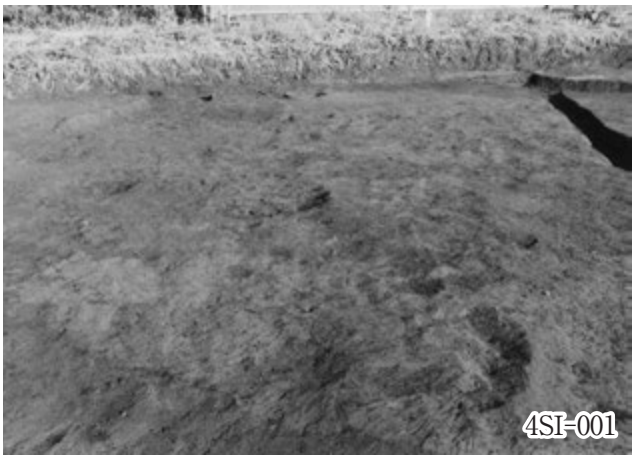
2SI-025

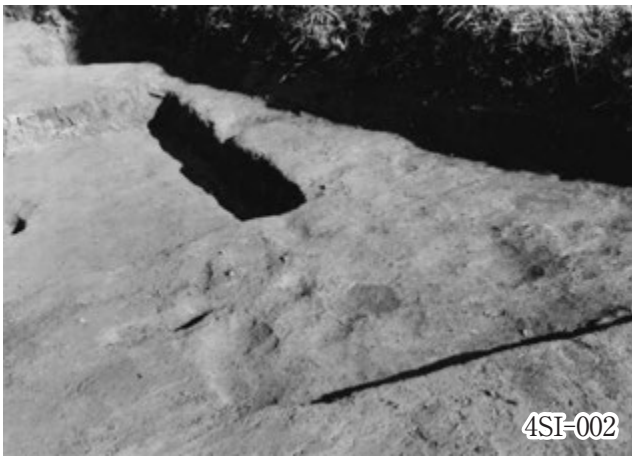
3SI-026

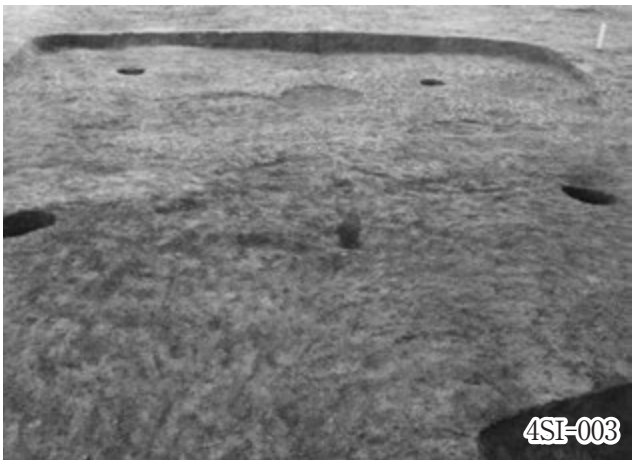

3SI-027

3SI-028

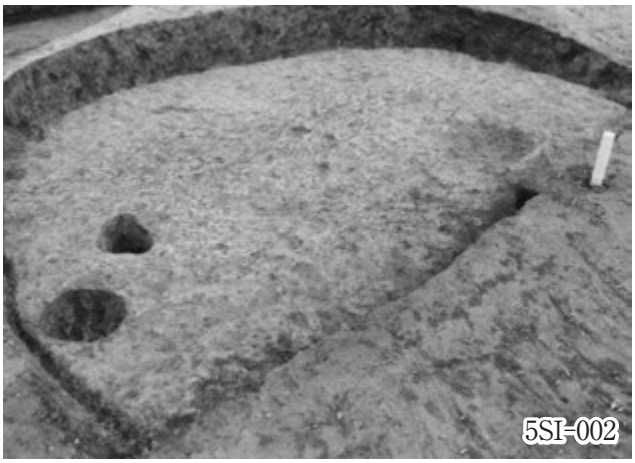
3SI-028 遺物出土状況

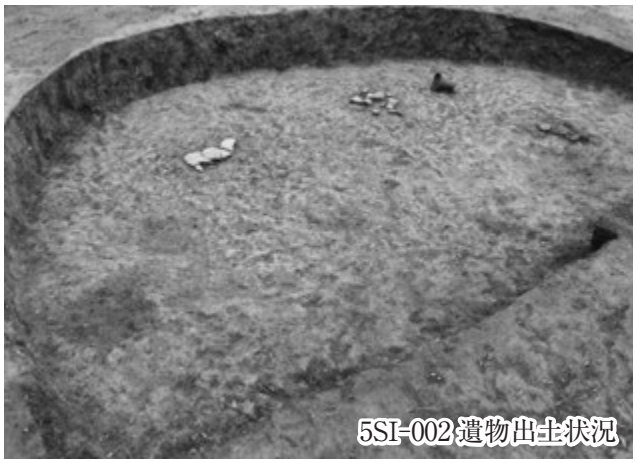

4SI-001

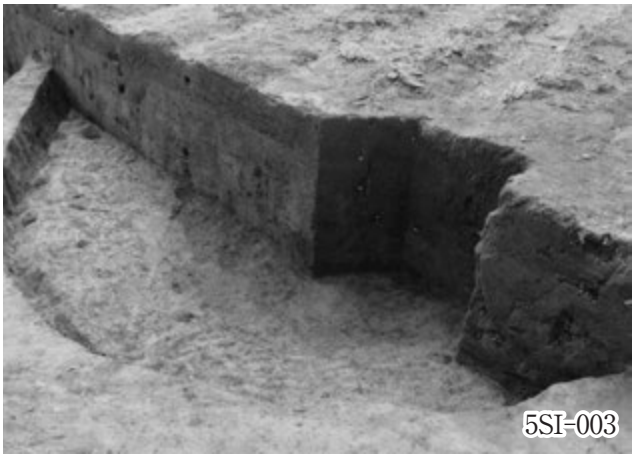

4SI-002


4SI-003

4SI-003 遺物出土状況


5SI-002


5SI-002 遺物出土状況


5SI-003

5SI-004

7SI-003

7SI-004

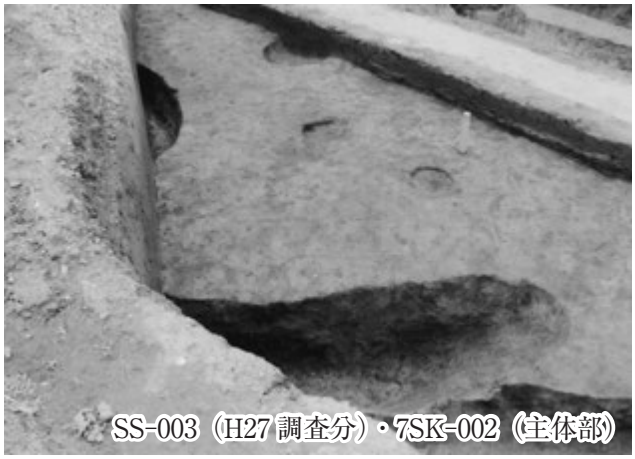
7SI-005

7SI-006

SS-001

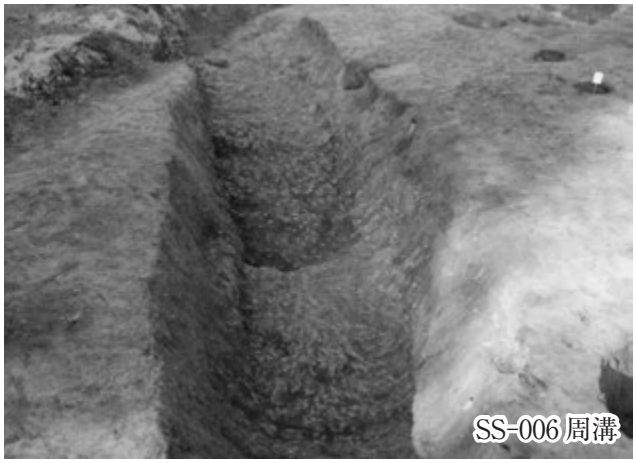
SS-002

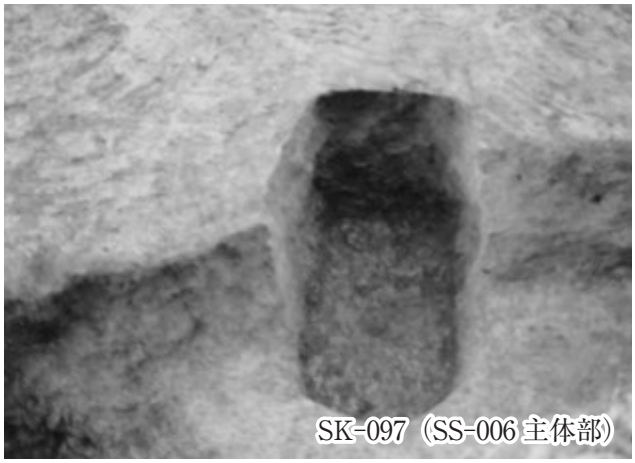
SS-003（H19 調査分）


SS-003（H27 調査分）・7SK-002（主体部）

SS-004

SK-005（SS-005 主体部）


SS-006 周溝


SK-097（SS-006 主体部）

SK-098（SS-006主体部）

SS-008

4SD-029～033

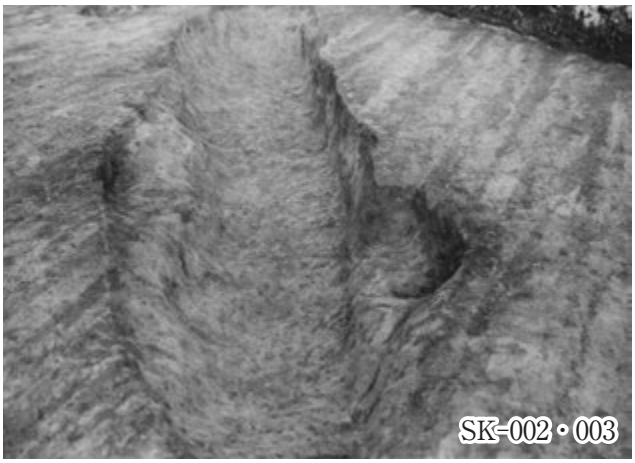
4SD-030

4SD-031・033

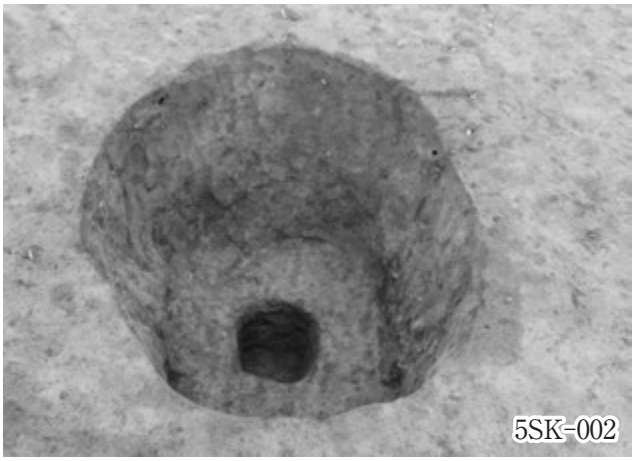
4SD-038

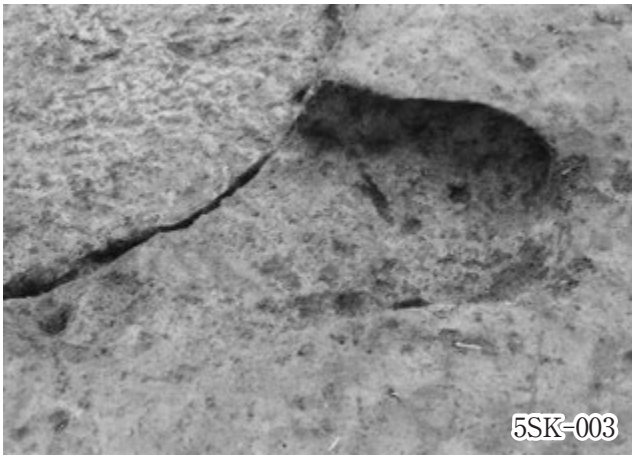
5SD-002

5SD-003


SK-002・003

5SK-001

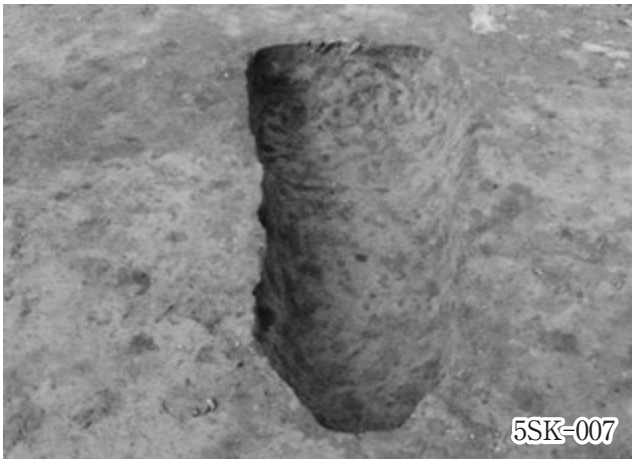

5SK-002

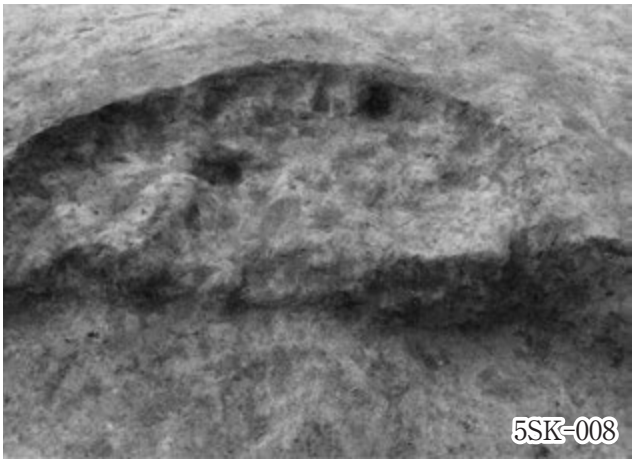

5SK-003

5SK-004

5SK-005

5SK-006


5SK-007


5SK-008

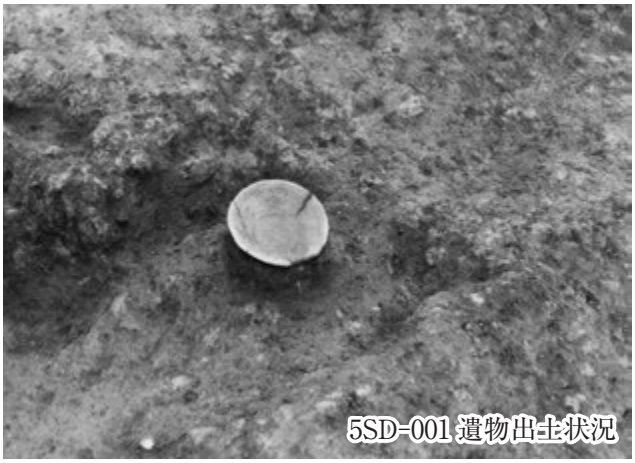
SI-036B

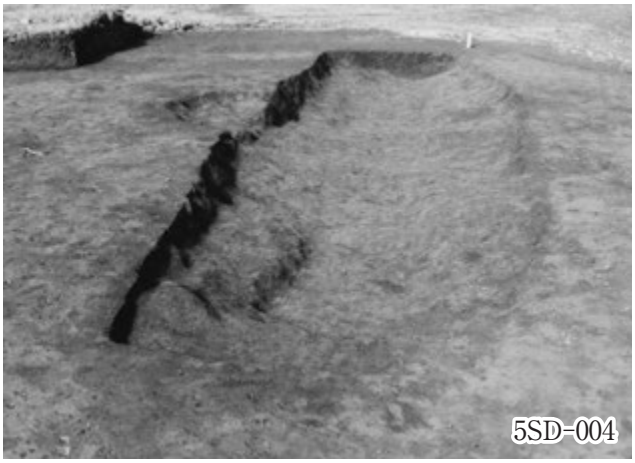
SI-043

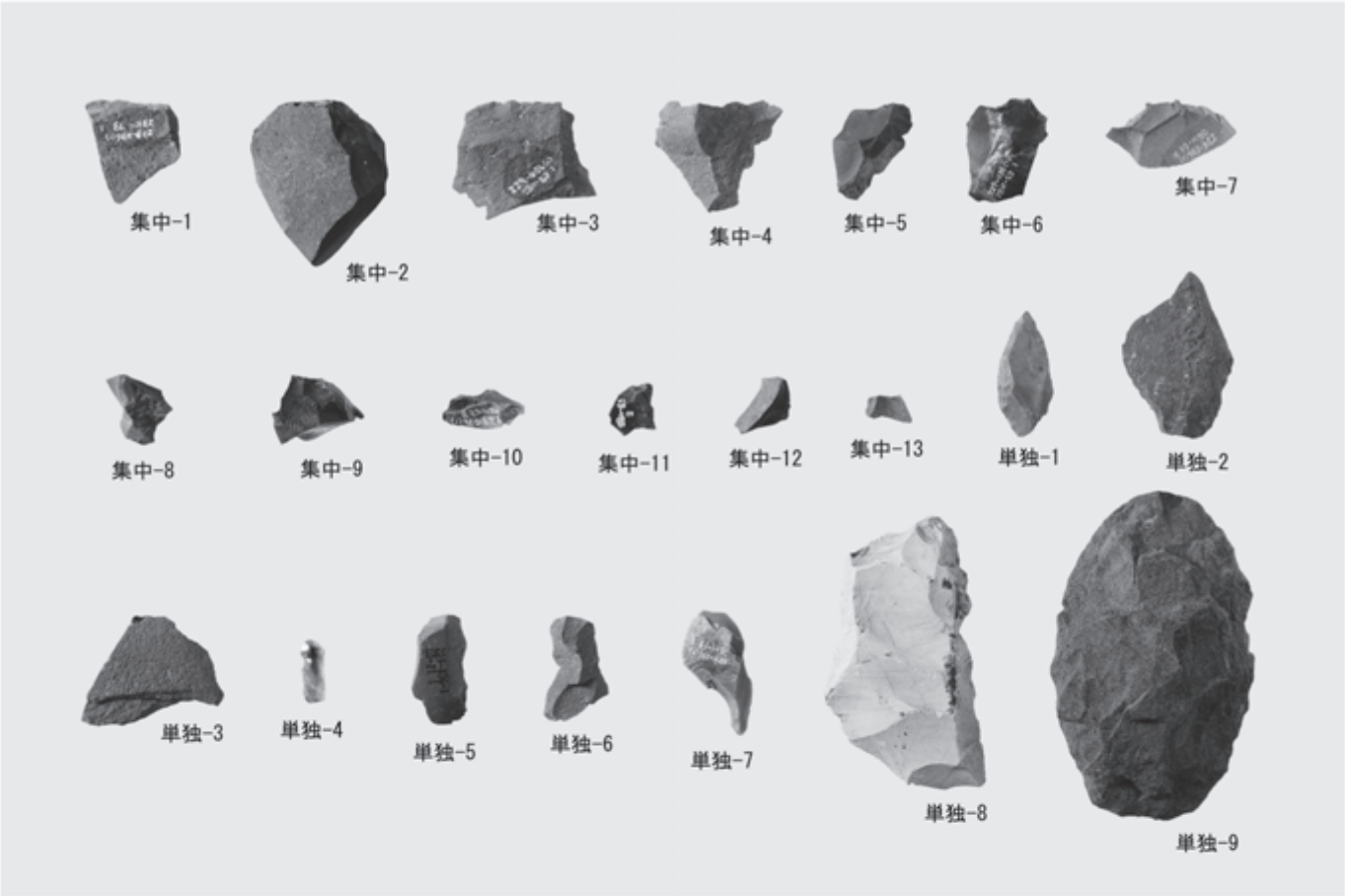
SI-043 カマド

2SI-011・2SK-003

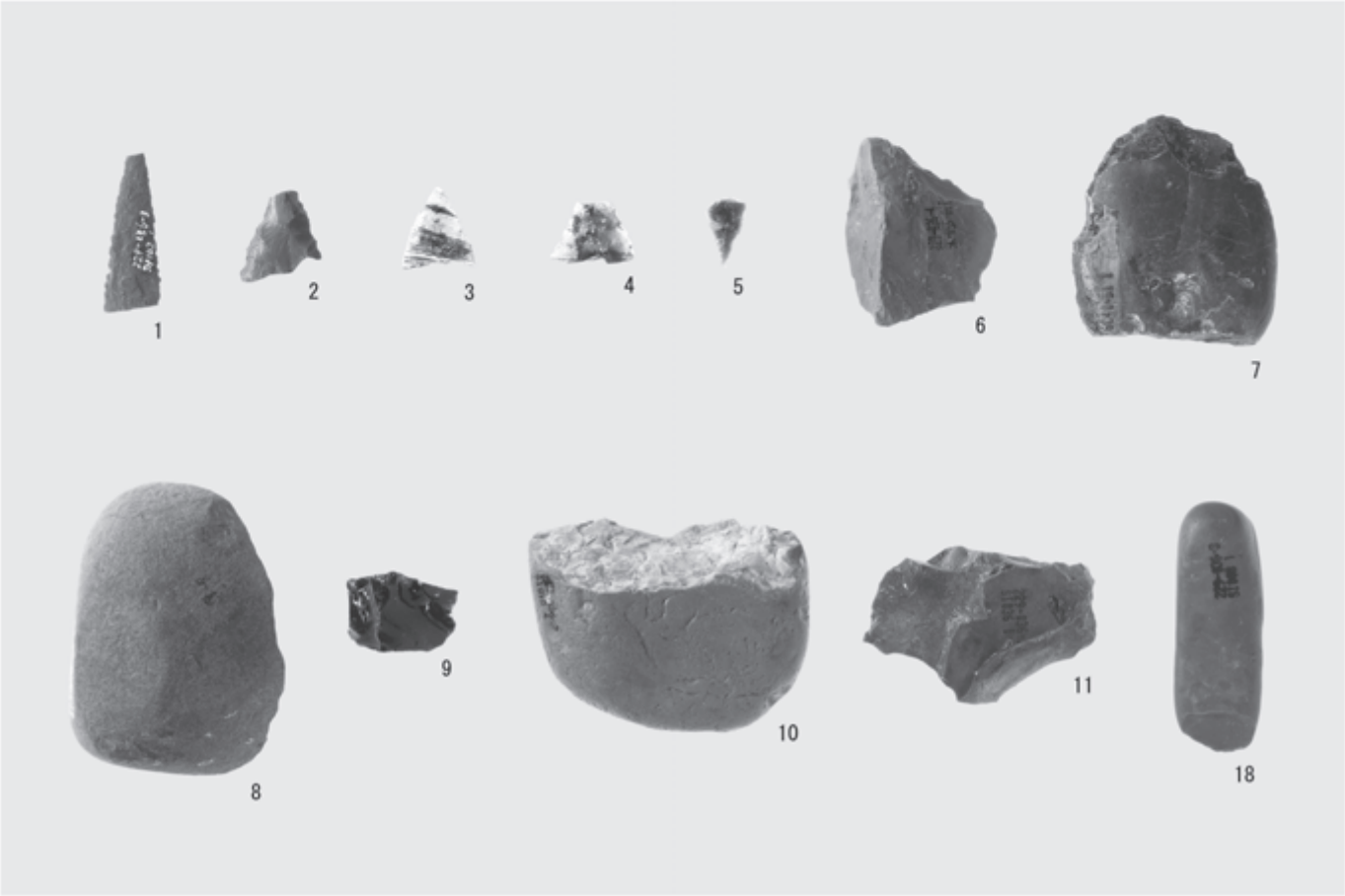
5SI-001・5SD-001


5SD-001 遺物出土状況


5SD-004

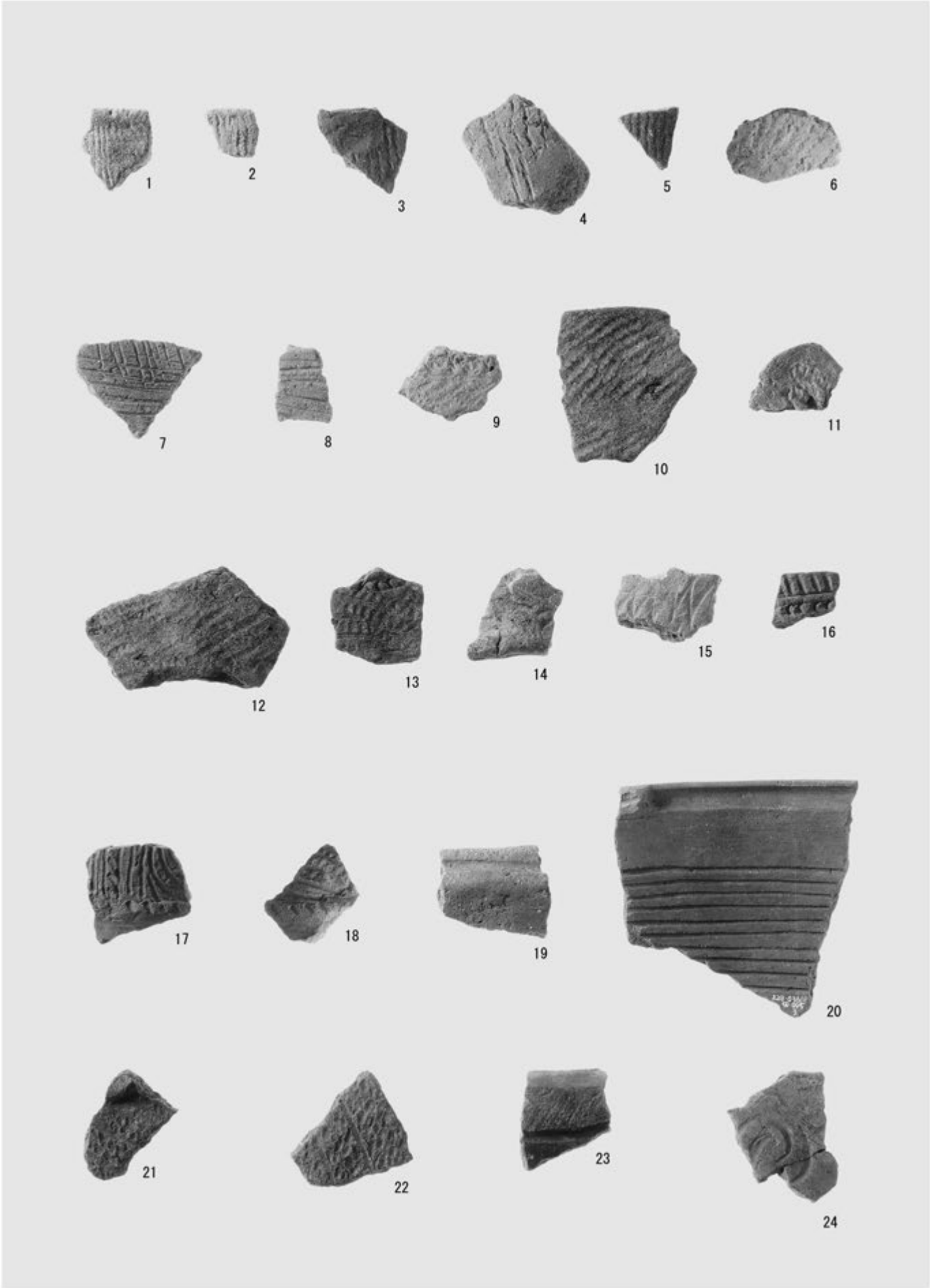


旧石器時代石器



縄文時代石器（1）

縄文時代石器（2）



縄文時代土器

SI002-3

SI002-4

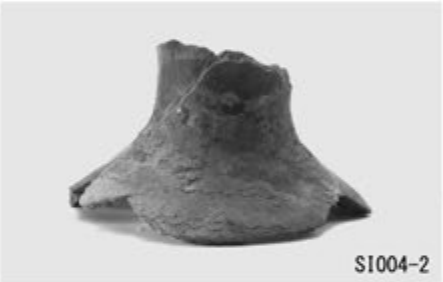
SI002-9

SI003-1

SI003-2

SI003-4

SI003-9

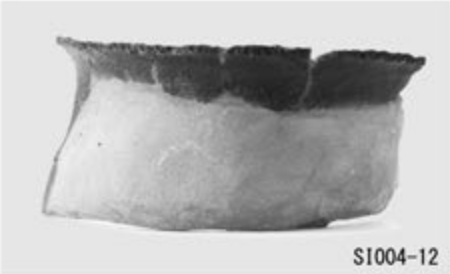

SI004-2

SI004-5

SI004-7

SI004-8

SI004-11


SI004-12

SI004-13

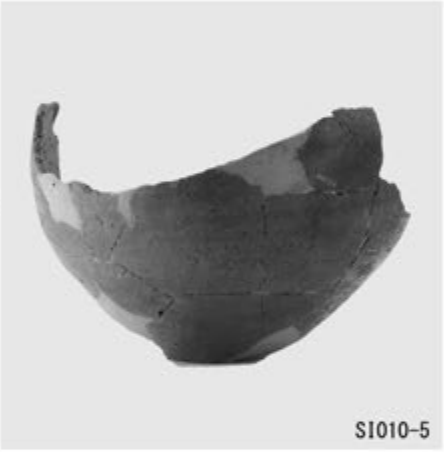
SI004-14

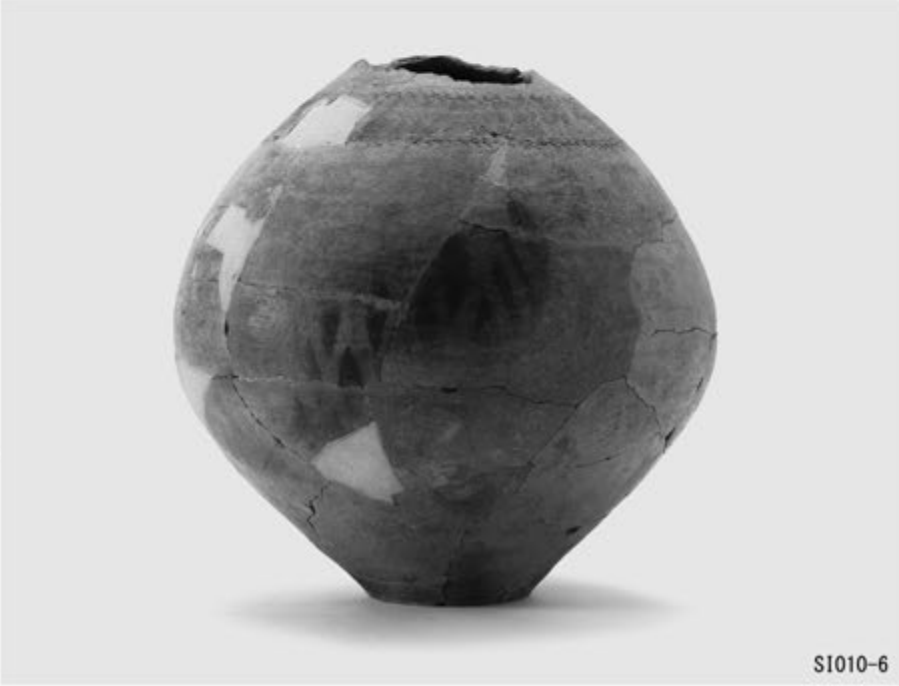
SI004-15

SI005-3

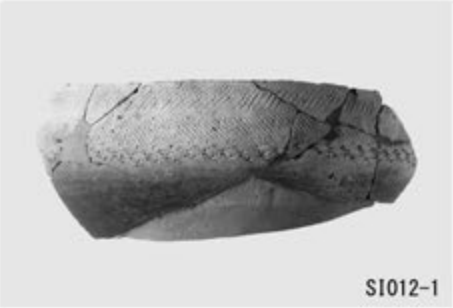
SI005-4

弥生時代土器（1）～遺構出土～





弥生時代土器（２）～遺構出土～


SI012-1

SI012-3

SI012-4

SI013-1

SI013-2

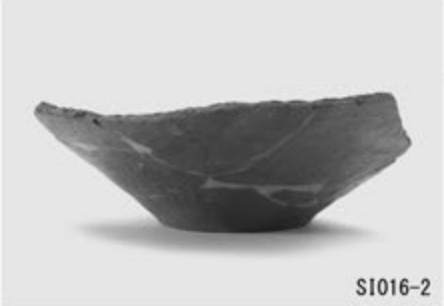
SI013-5

SI013-6

SI013-7

SI015-2

SI016-1

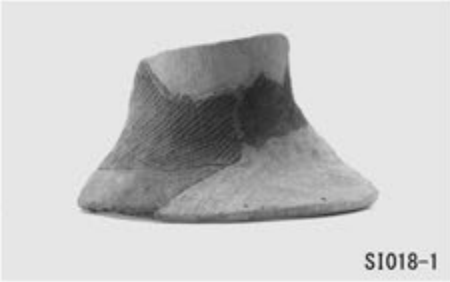

SI016-2

SI016-3

SI017-1

SI017-2

SI017-4


SI018-1

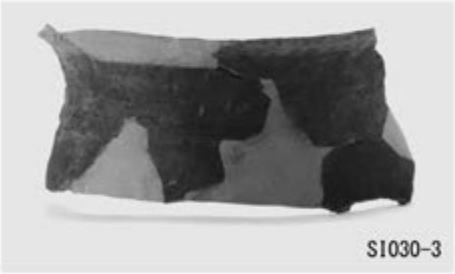
SI018-2

弥生時代土器（３）～遺構出土～

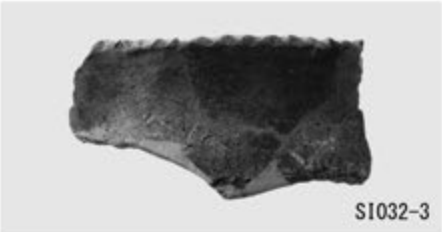
SI026-3

SI027-1

SI030-1

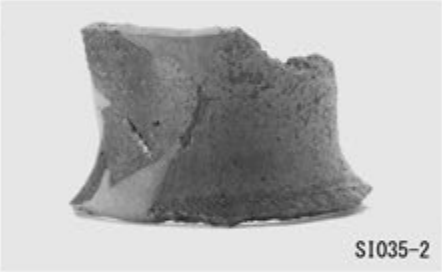

SI030-3

SI031-5


SI032-3

SI034-1

SI035-1


SI035-2

SI039-1

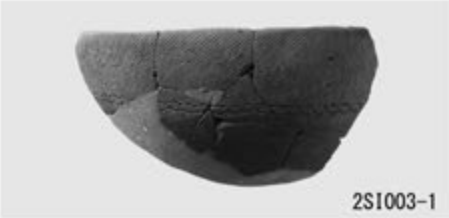
SI039-2

SI039-3

SI044-1

2SI001-1

2SI002-1


2SI003-1

2SI005-3

弥生時代土器（4）～遺構出土～

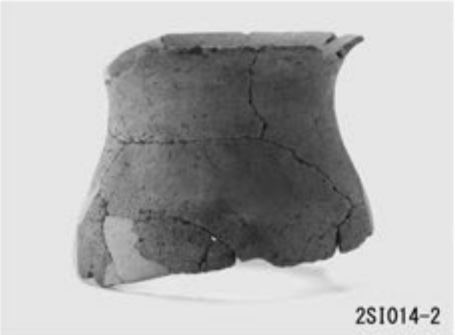
2SI008-1

2SI008-2

2SI008-4

2SI008-6

2SI014-1


2SI014-2

2SI014-3

2SI014-5

2SI014-6

2SI014-7

2SI014-8

2SI020-3

2SI021-1

3SI028-1

3SI028-2

3SI028-3

3SI028-4

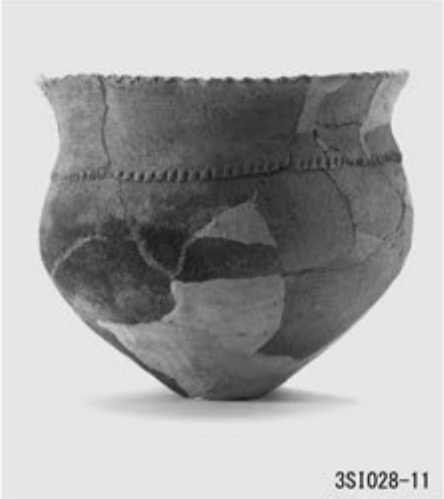
弥生時代土器（５）～遺構出土～

3SI028-5

3SI028-10

4SI001-5

3SI028-6


3SI028-11

4SI001-6

3SI028-7

3SI028-12

4SI002-3

3SI028-9

4SI001-3

4SI003-1

弥生時代土器（6）～遺構出土～

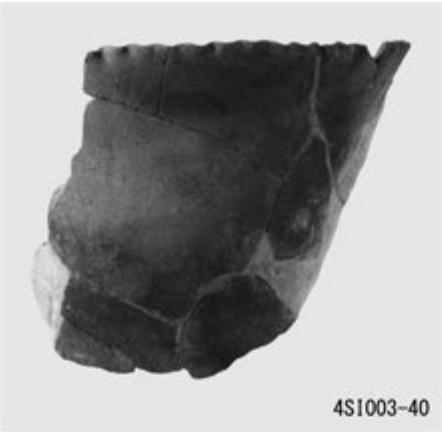
4SI003-2

4SI003-3

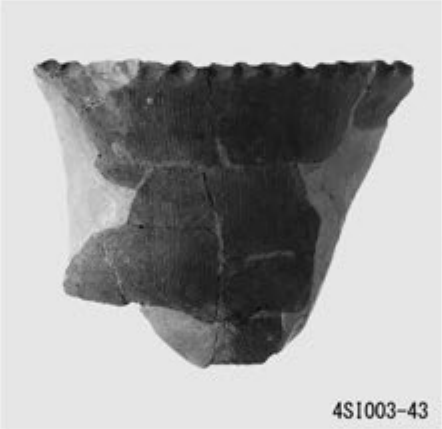
4SI003-7

4SI003-8

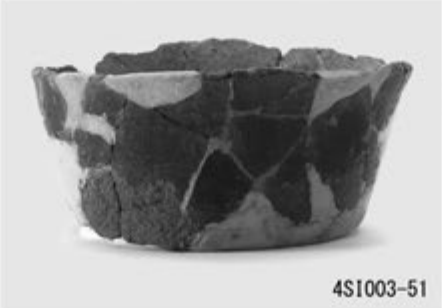
4SI003-32


4SI003-40

4SI003-42


4SI003-43

4SI003-46


4SI003-51

4SI003-52

4SI003-53

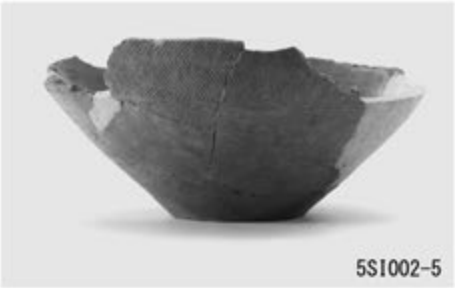
4SI003-54

4SI003-55

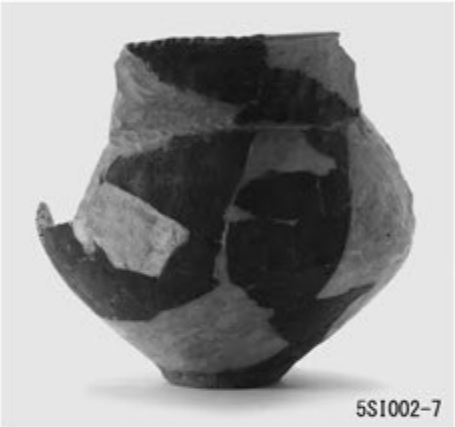
4SI003-58

5SI002-1

弥生時代土器（７）～遺構出土～


5SI002-5

5SI002-6


5SI002-7

5SI002-8

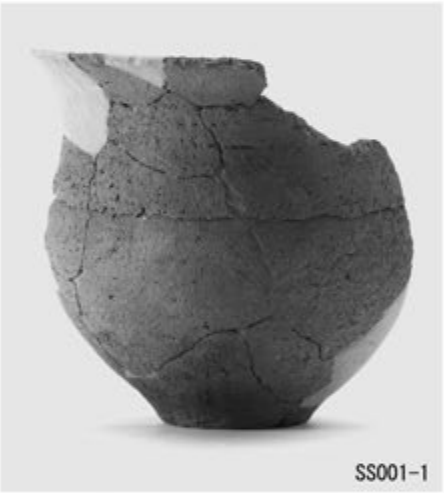
5SI003-1

5SI004-1

5SI004-3

7SI003-1

7SI005-1


SS001-1

SS002-1

SS002-2

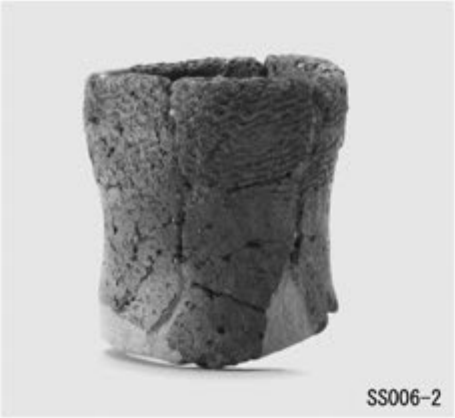
SS002-3

SS003-2

SS003-3

SS006-1

弥生時代土器（８）～遺構出土～


SS006-2

SS006-3

SS006-8

SS006-9

SS006-10

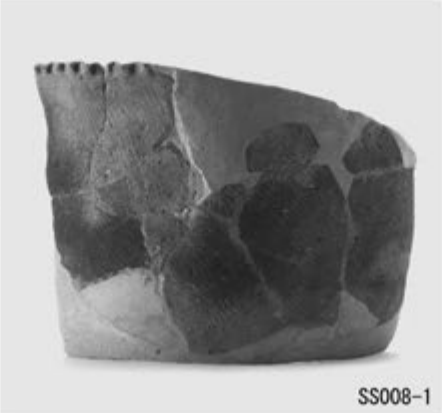
SS006-12

SS006-13

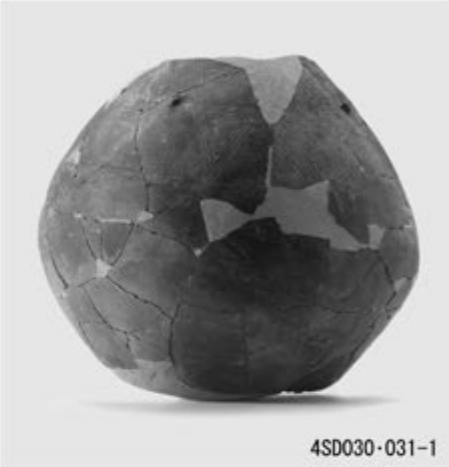
SS006-15

SS006-16

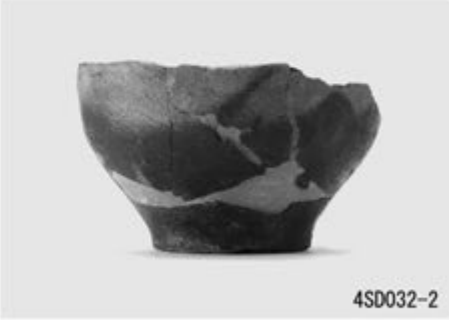
SS006-20


SS008-1

4SD029-1

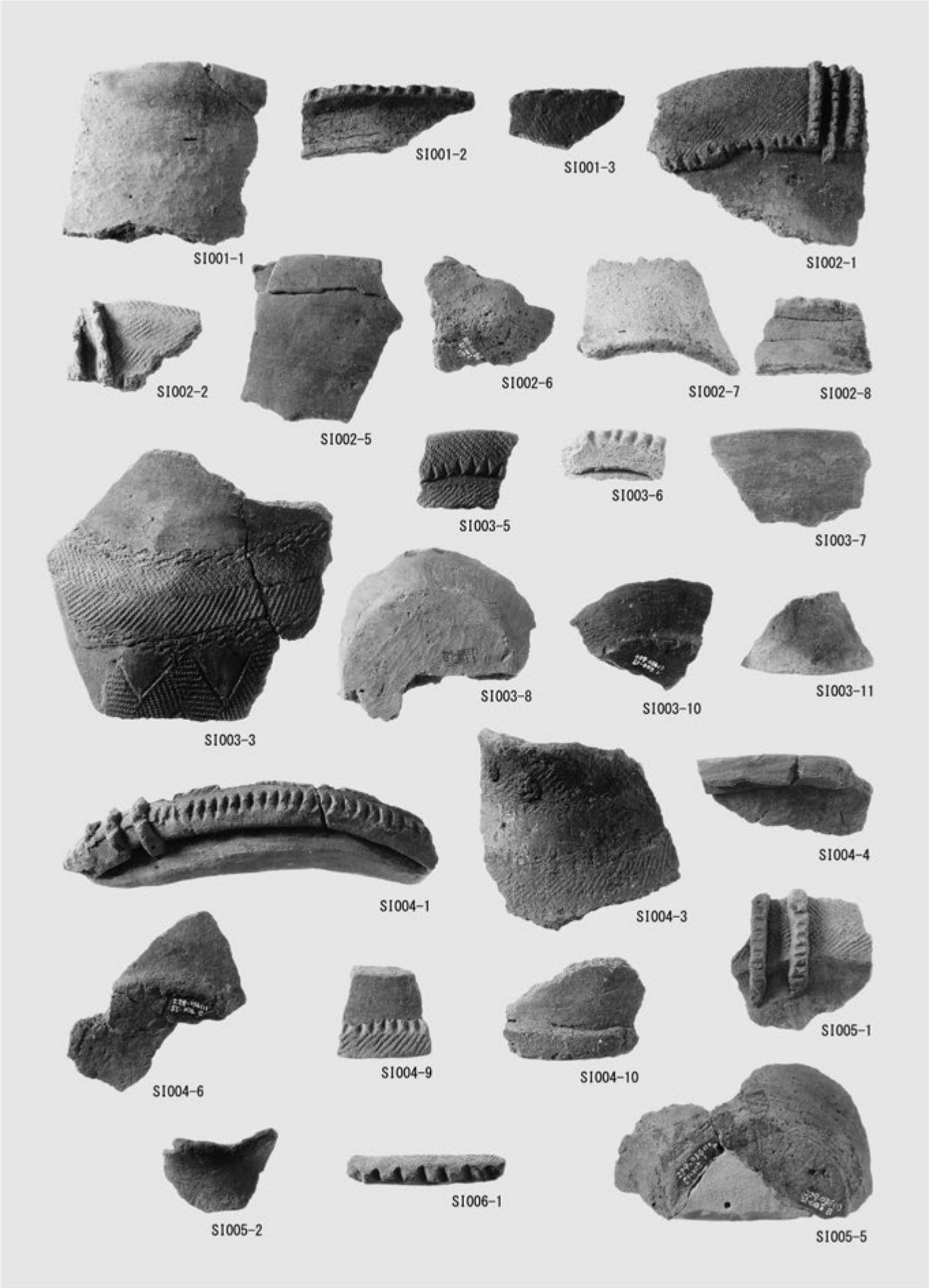

4SD030・031-1

4SD030・031-5

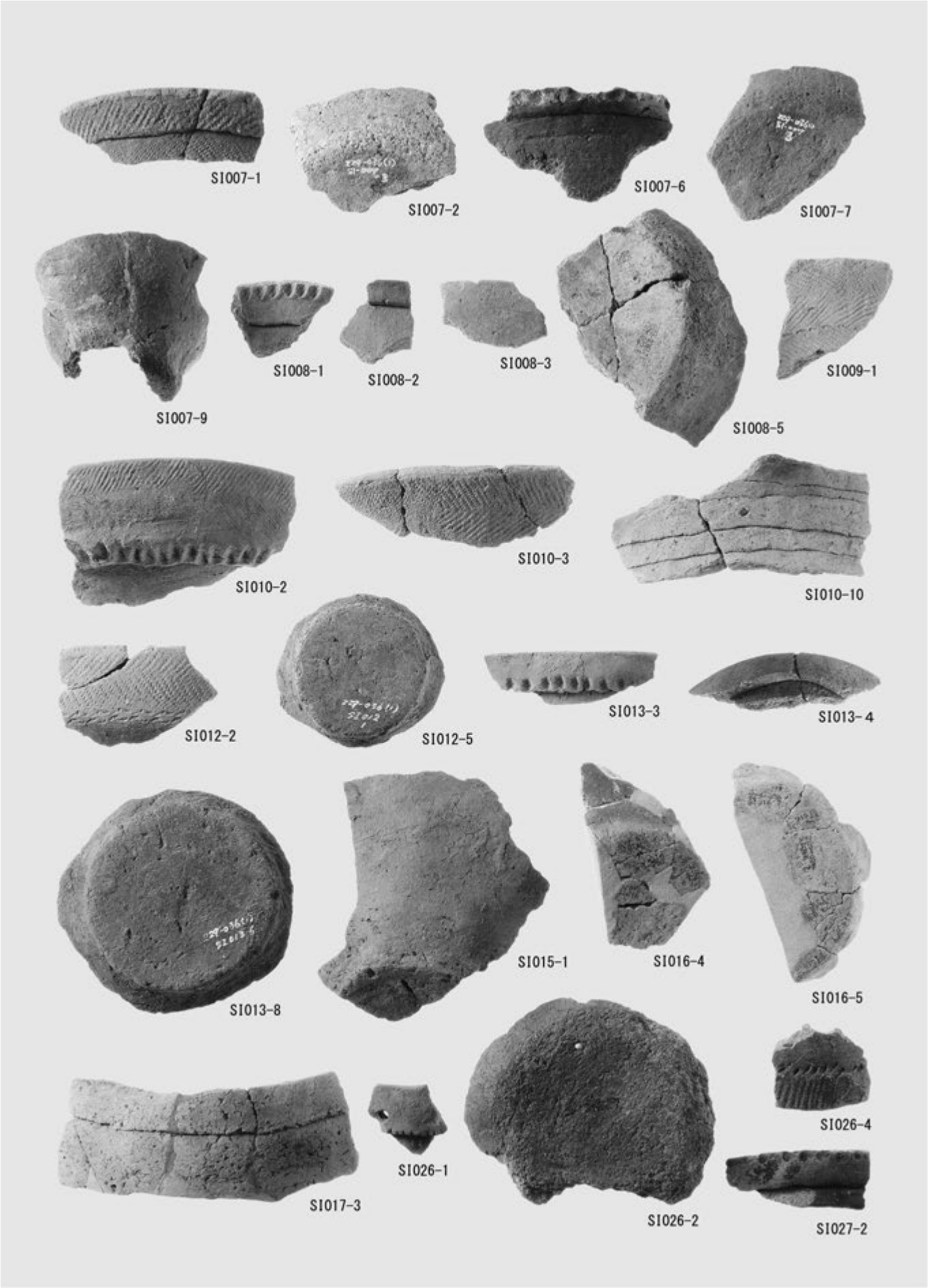

4SD032-2

5SD003-5

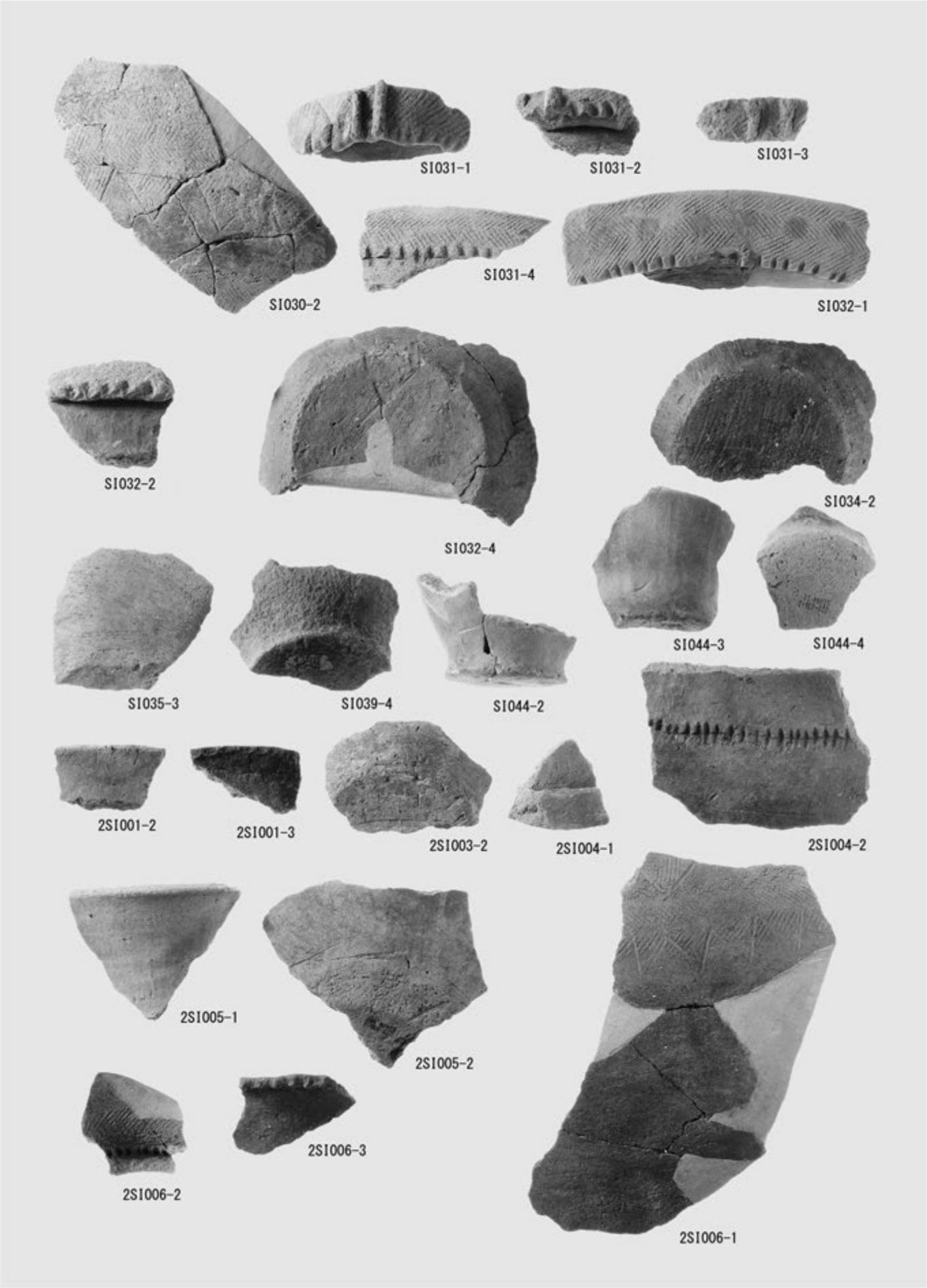
弥生時代土器（９）～遺構出土～



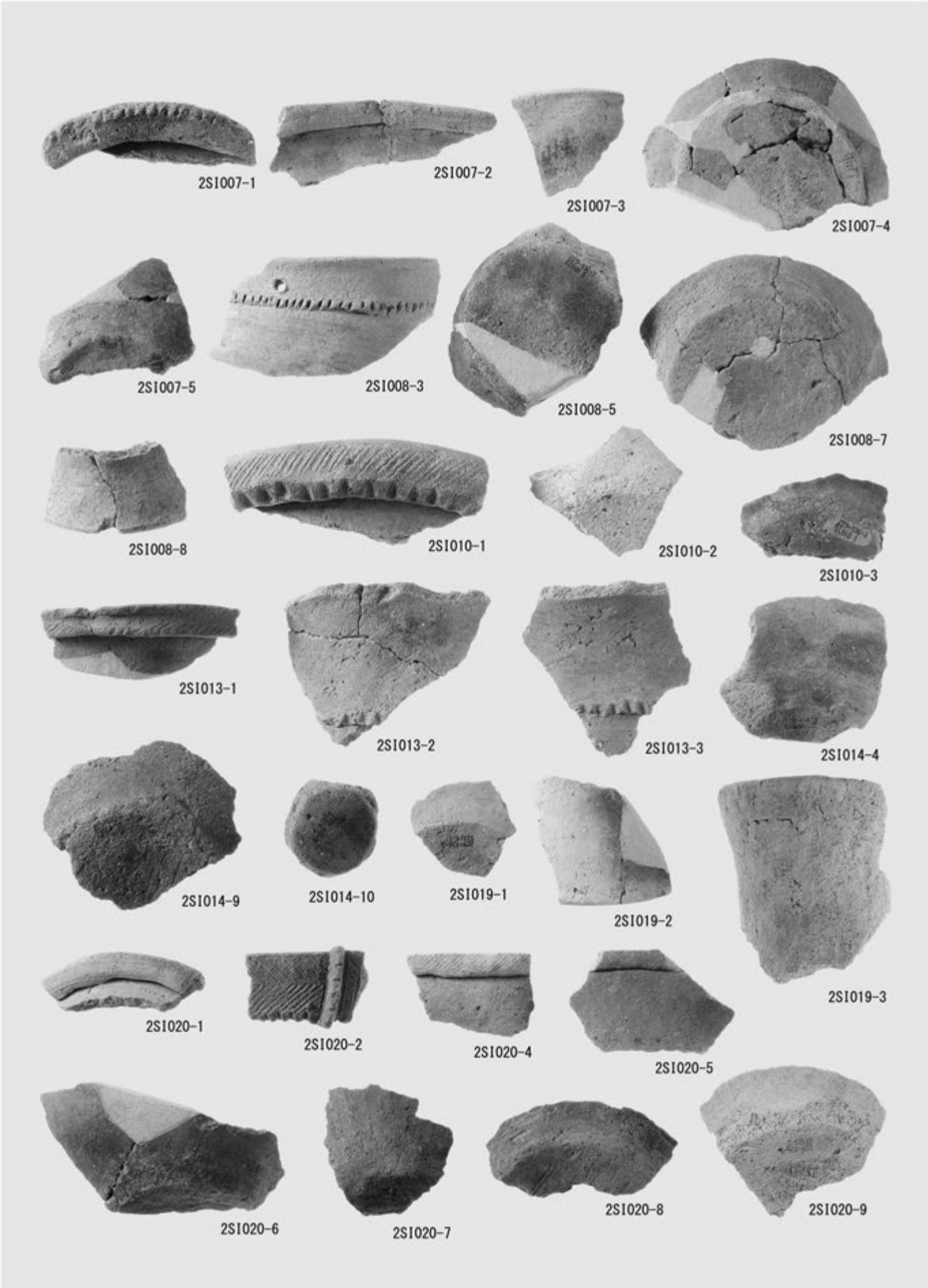
弥生時代土器（10）～遺構出土～



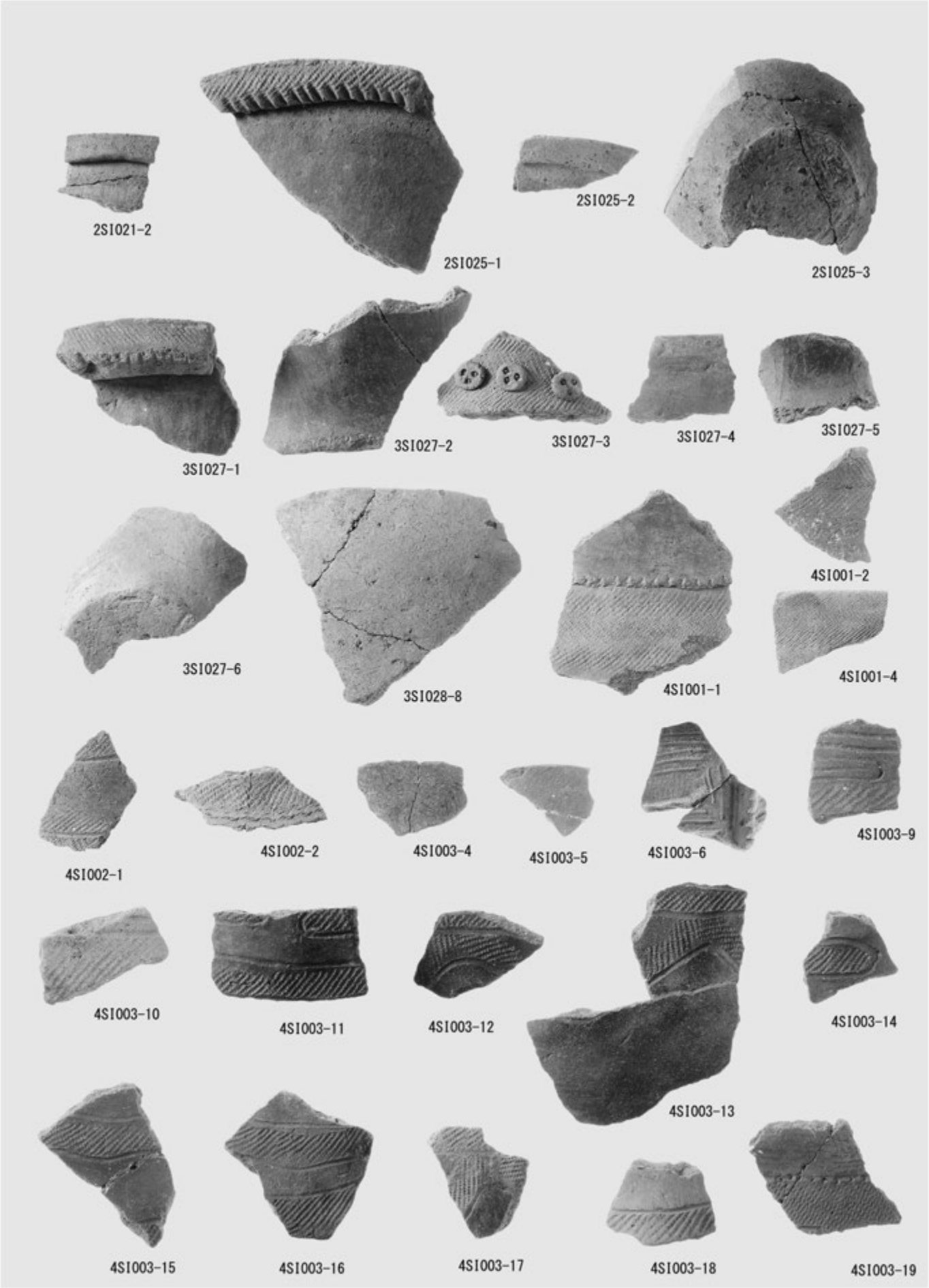
弥生時代土器（11）～遺構出土～



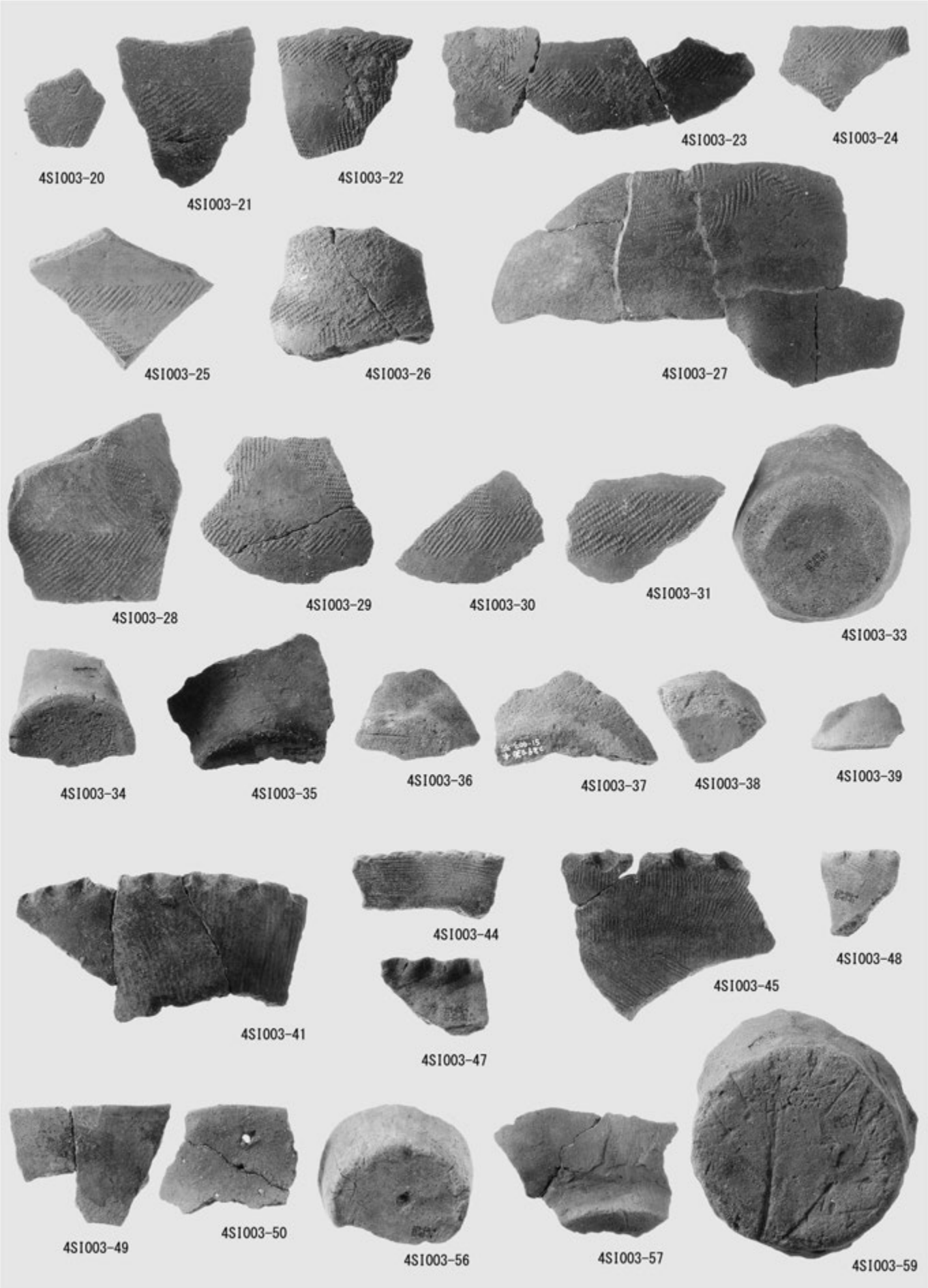
弥生時代土器（12）～遺構出土～



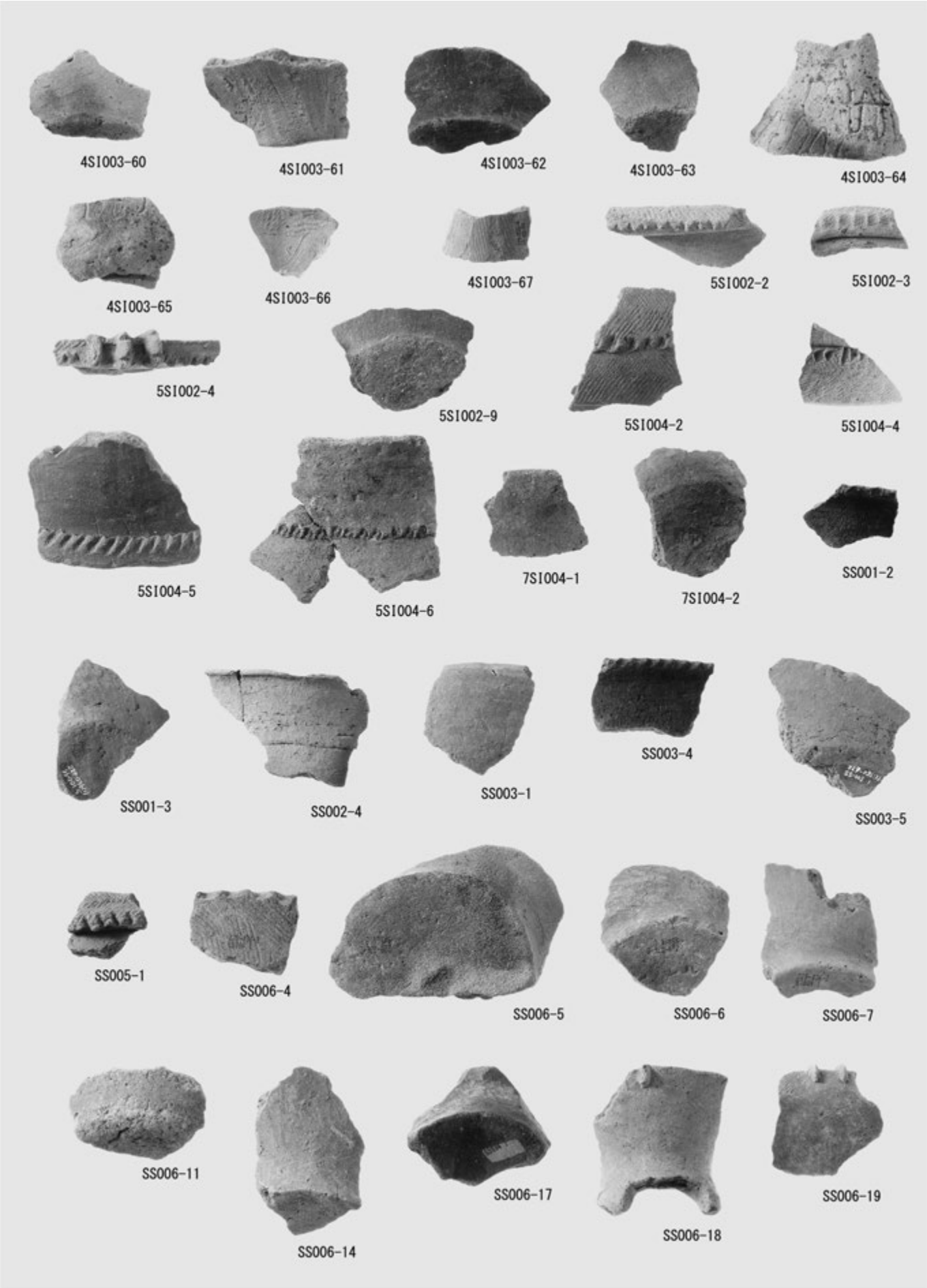
弥生時代土器（13）～遺構出土～



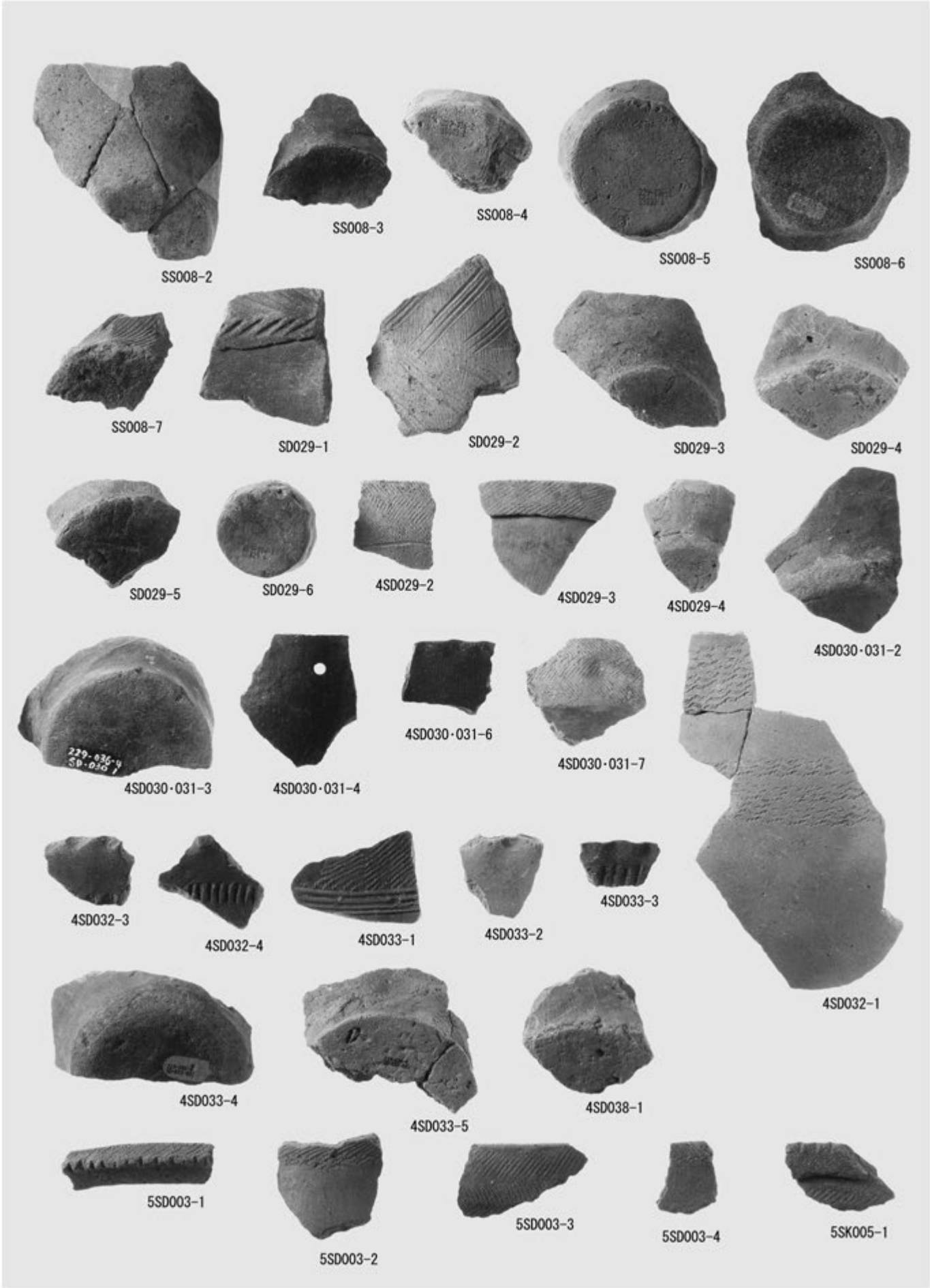
弥生時代土器（14）～遺構出土～



弥生時代土器（15）～遺構出土～



弥生時代土器（16）～遺構出土～



弥生時代土器（17）～遺構出土～

3

4

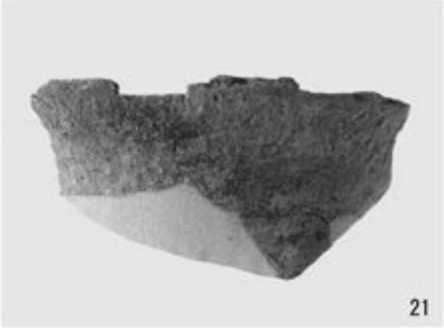
9

10

11

15

16


21

27

28

32

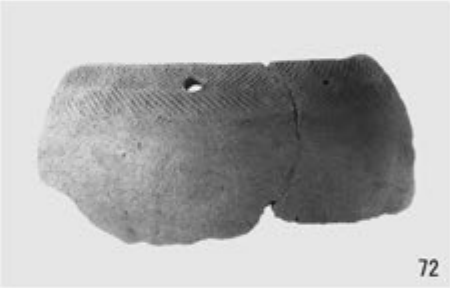
36

38

48

52

53

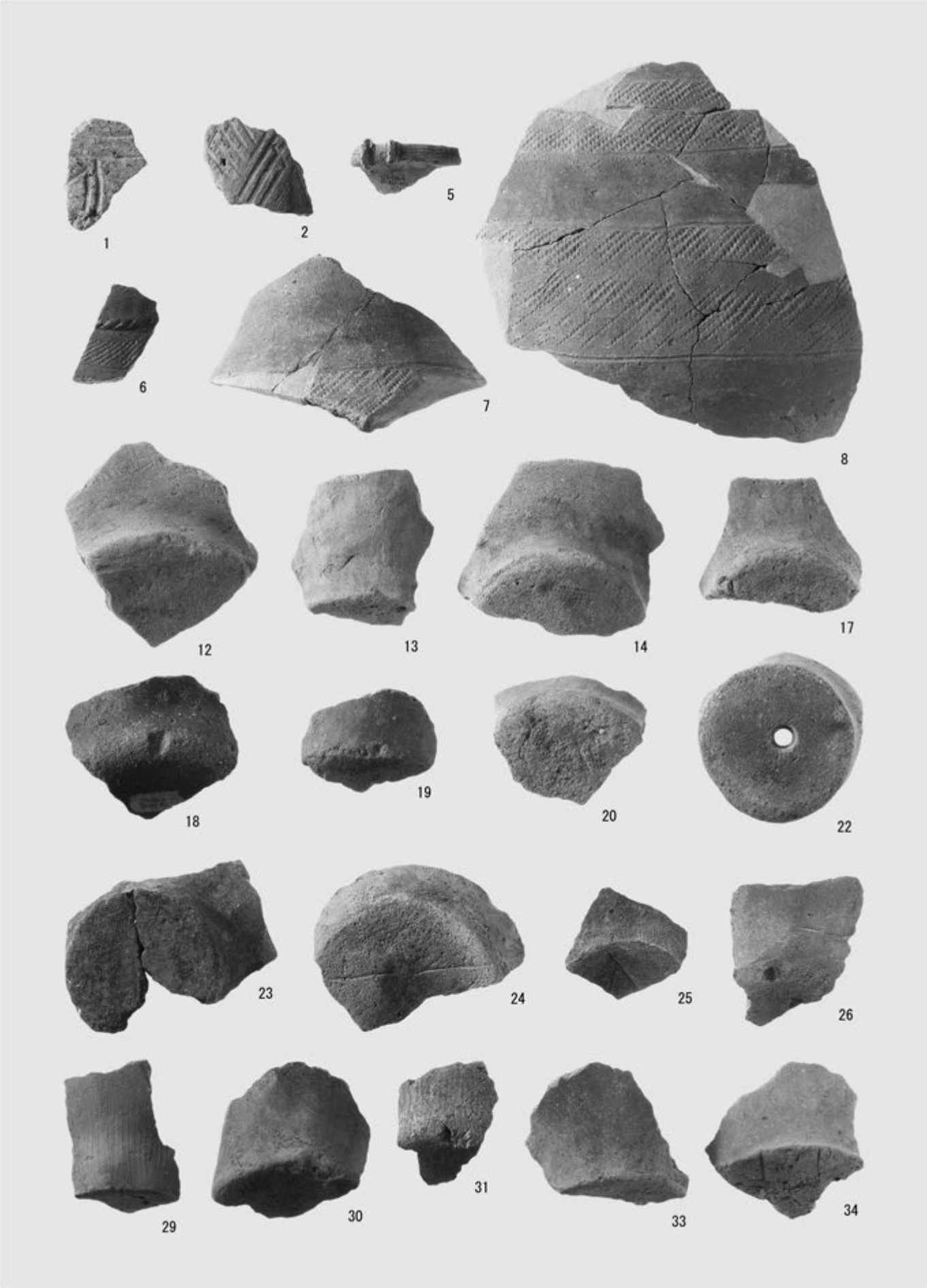

72

73

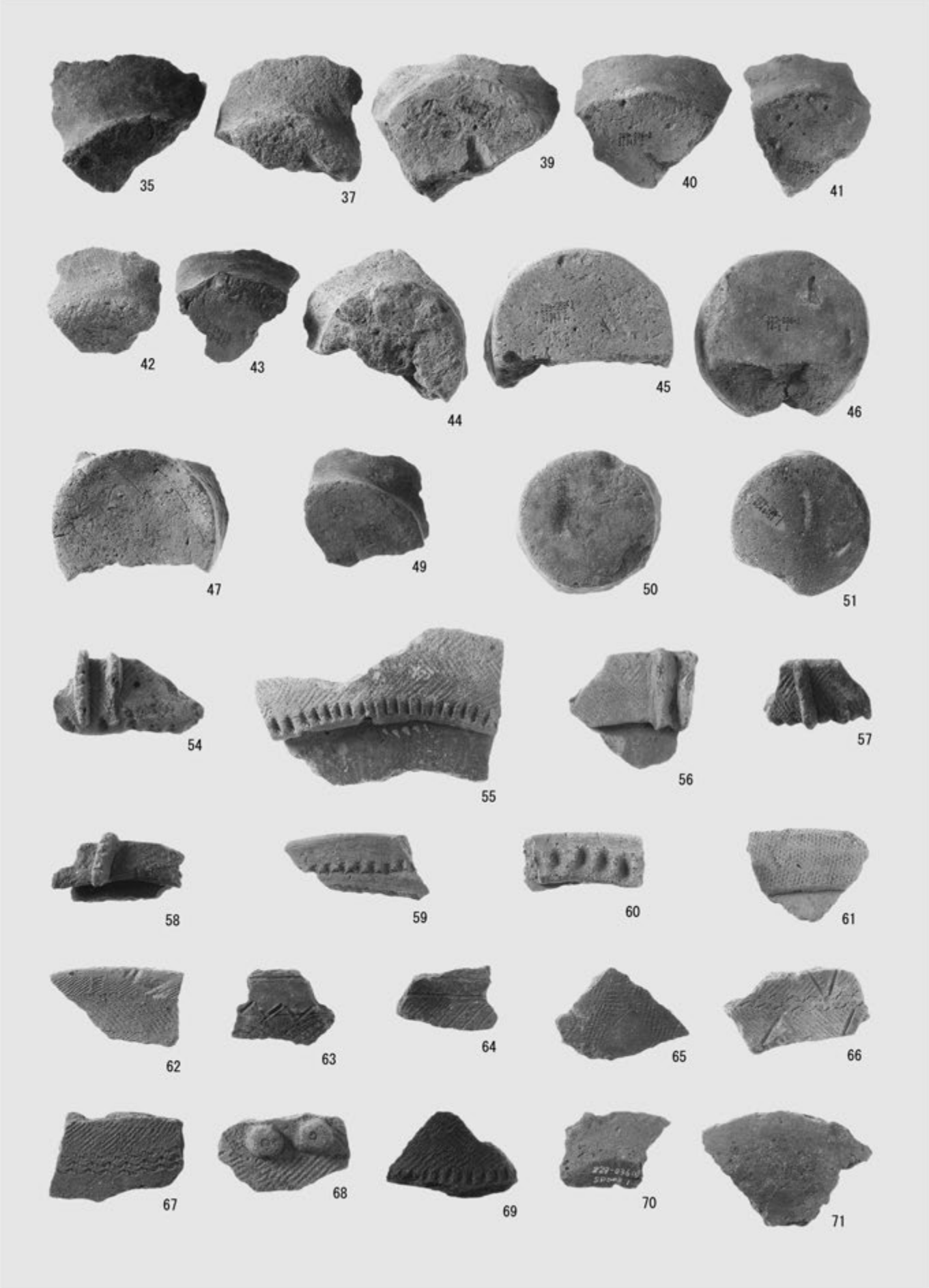
75

87

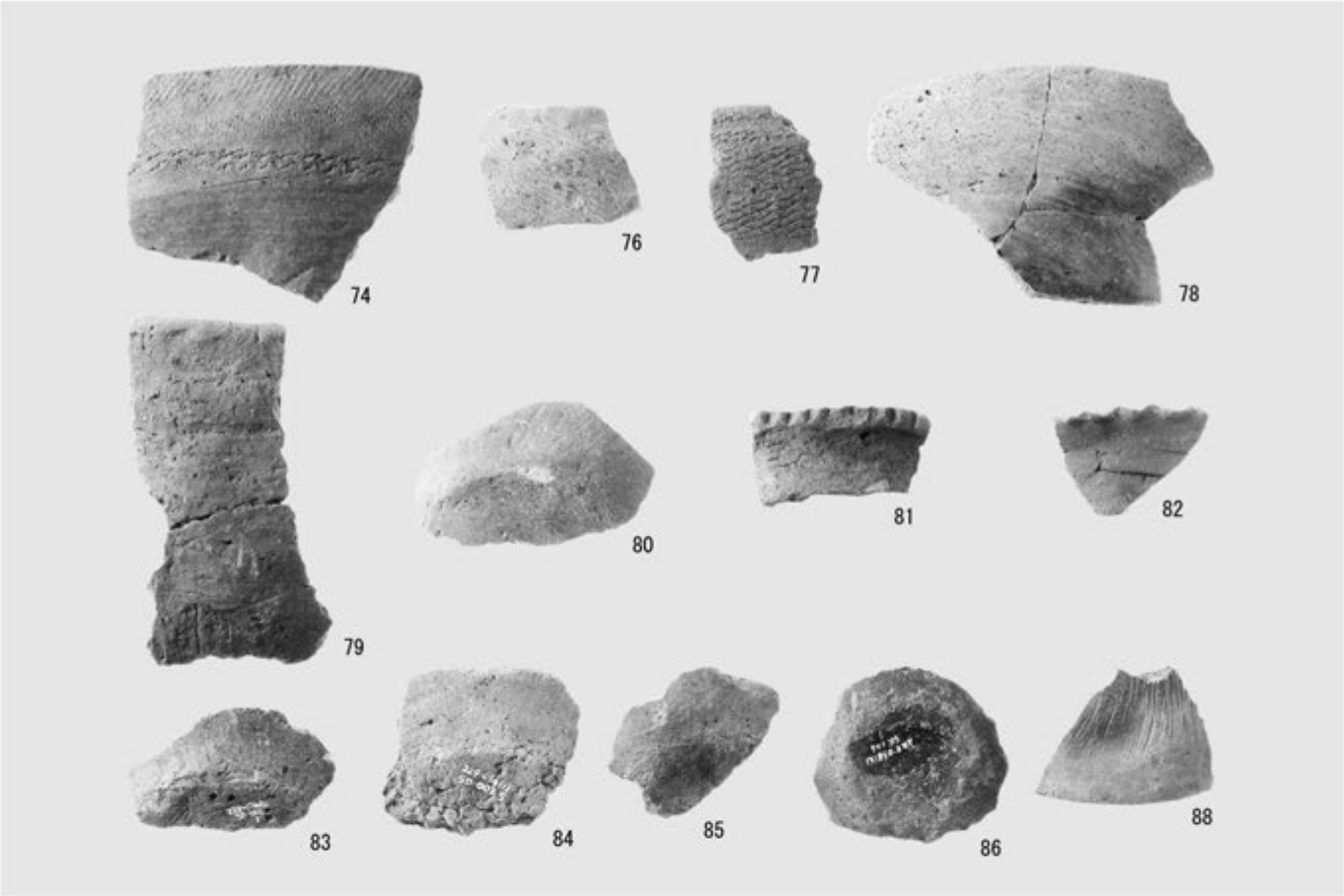
弥生時代土器（18）～遺構外出土～



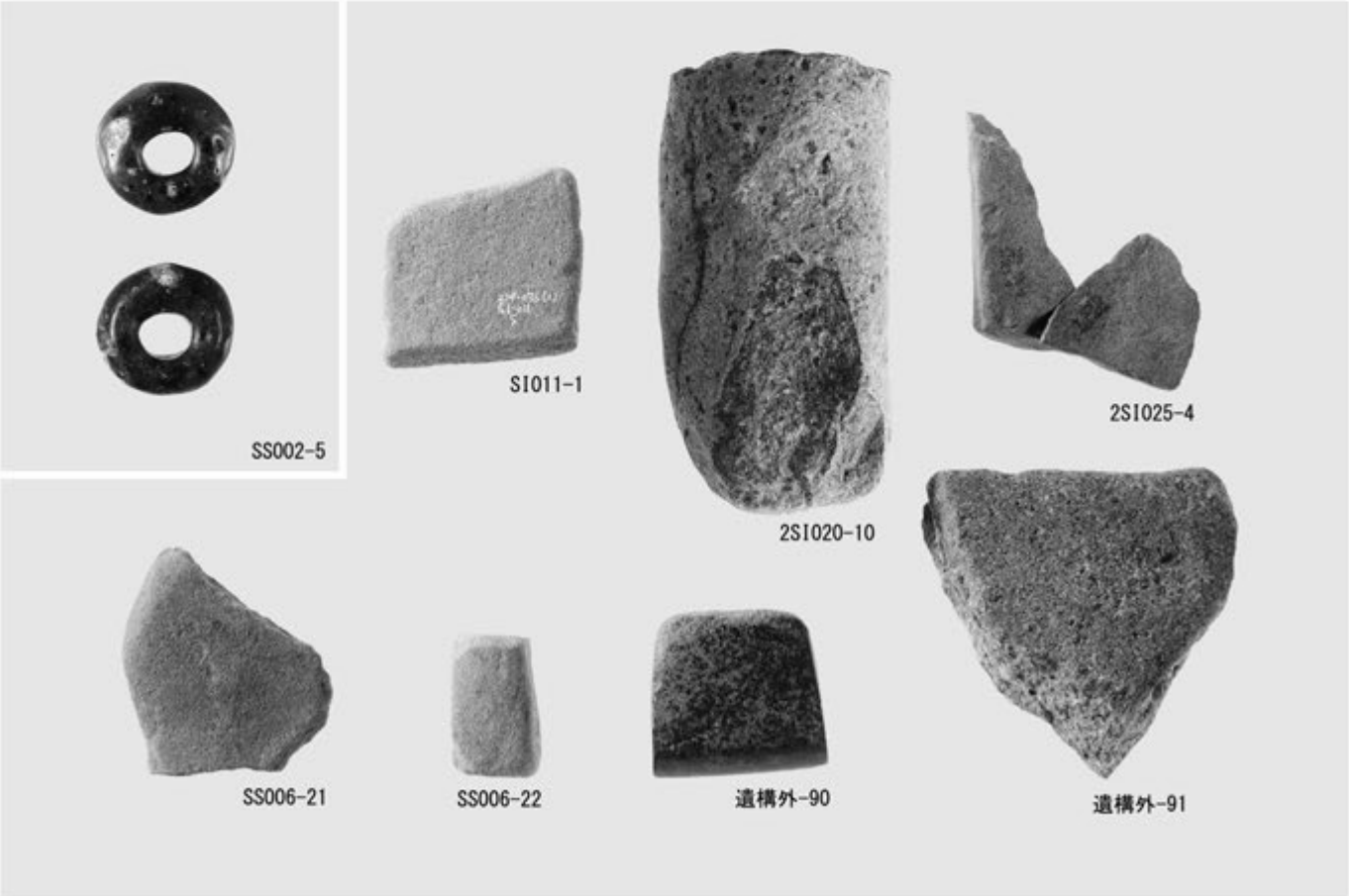
弥生時代土器（19）～遺構外出土～



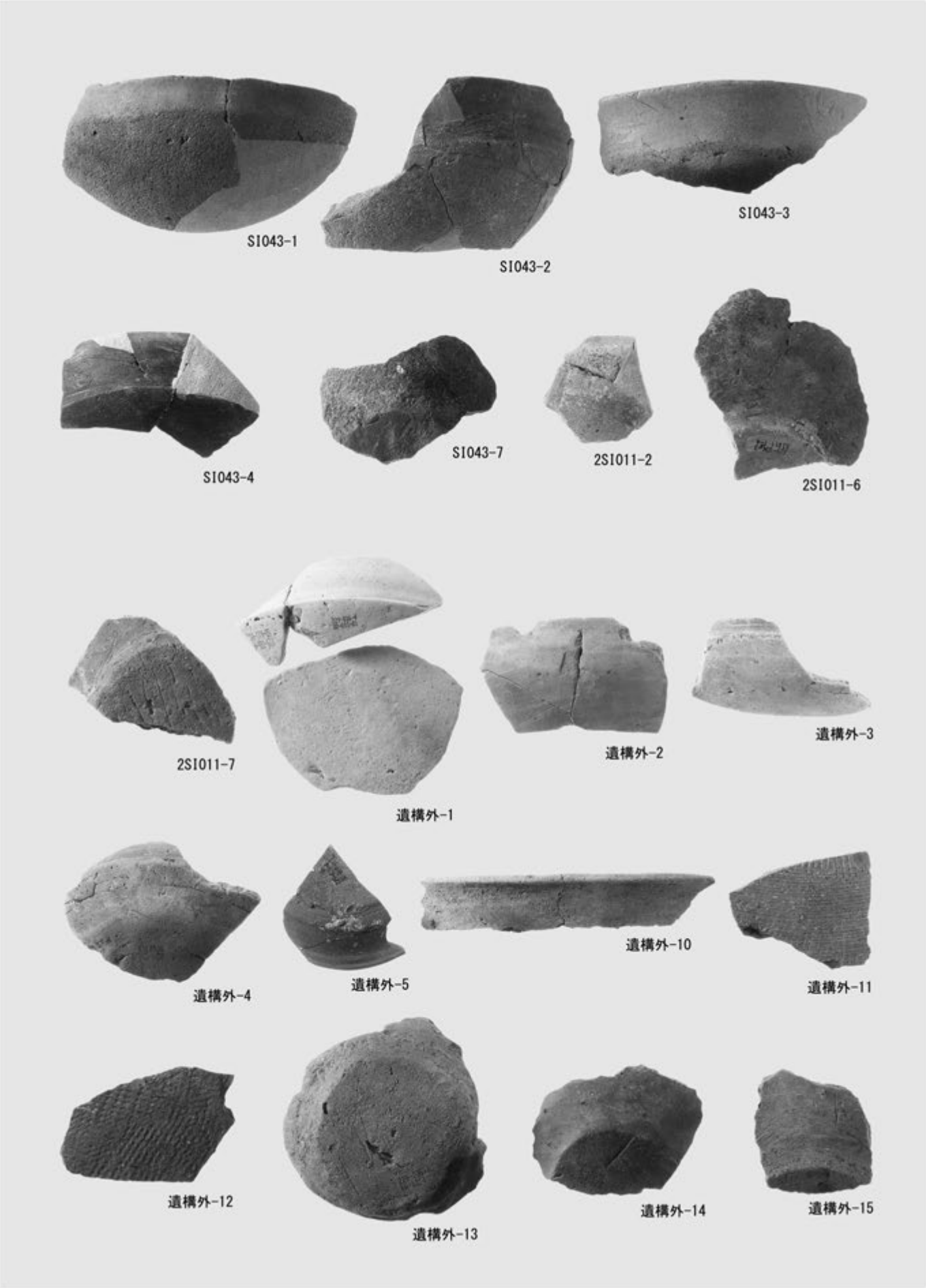
弥生時代土器（20）～遺構外出土～



弥生時代土器（21）～遺構外出土～



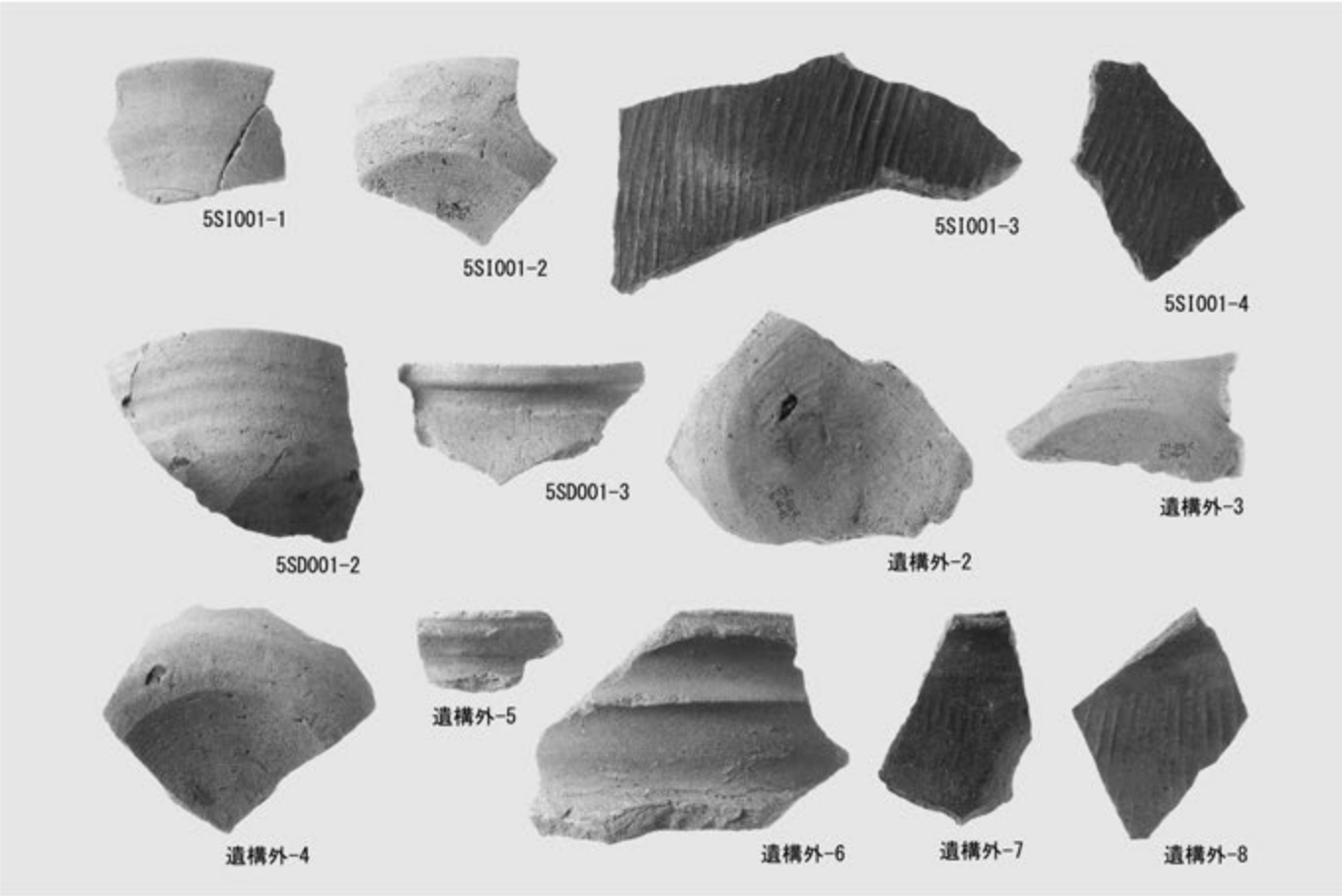
ガラス玉、弥生時代石器・石製品


SI043-1
SI043-2
SI043-3
SI043-4
SI043-7
2SI011-2
2SI011-6
2SI011-7
遺構外-1
遺構外-2
遺構外-3
遺構外-4
遺構外-5
遺構外-10
遺構外-11
遺構外-12
遺構外-13
遺構外-14
遺構外-15

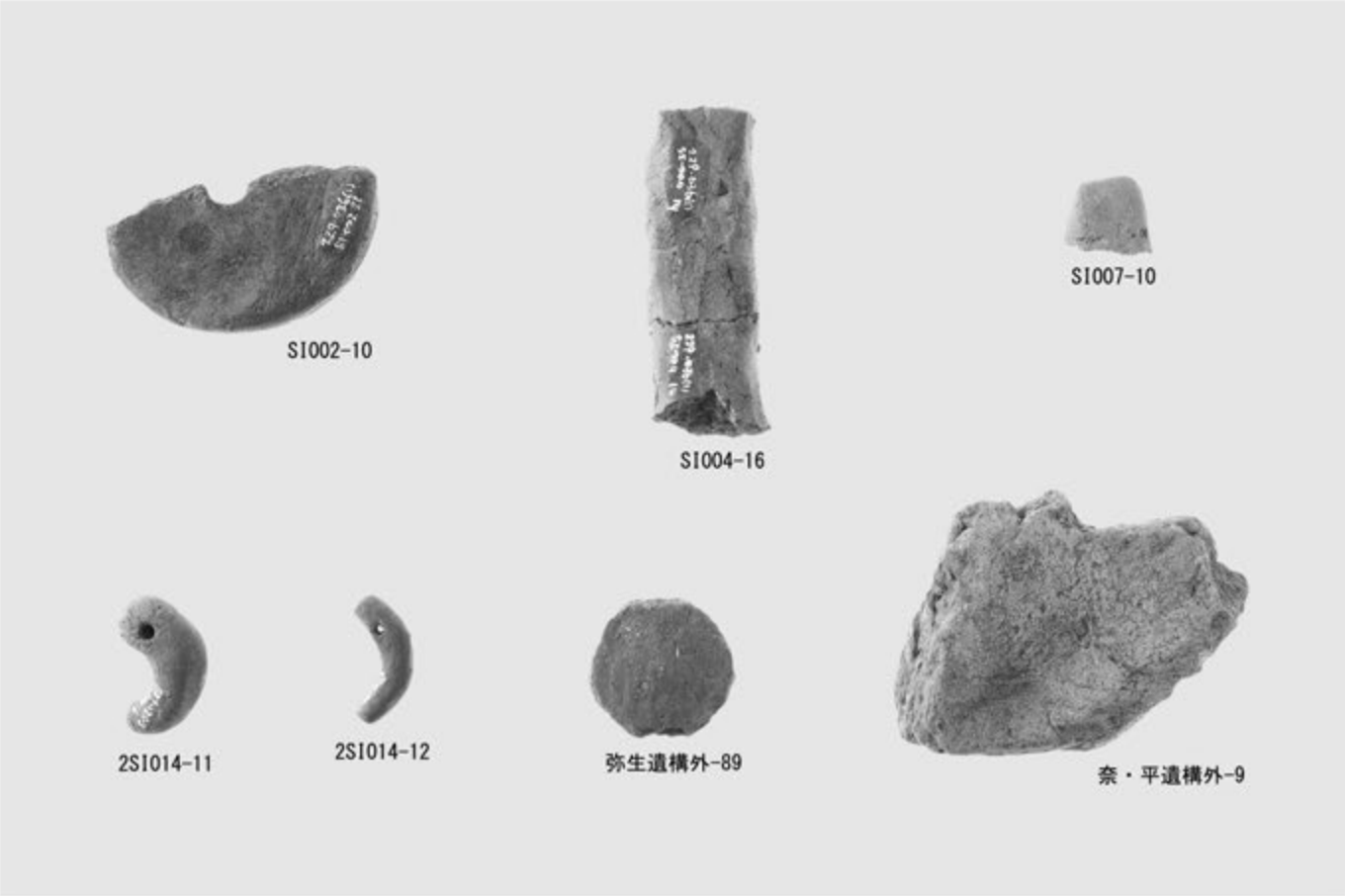
古墳時代土器（1）

古墳時代土器（2）

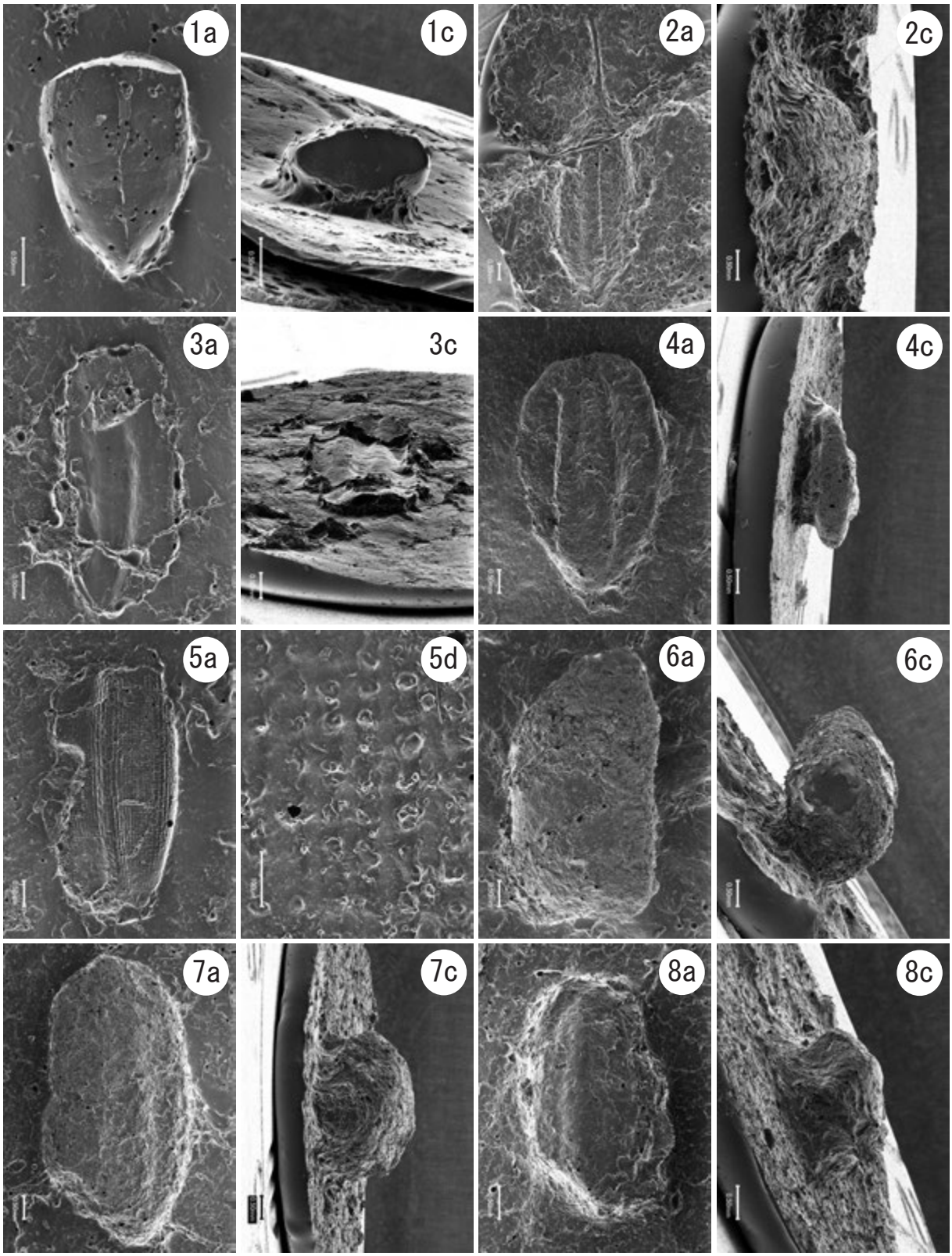
奈良・平安時代土器（1）



奈良・平安時代土器（2）

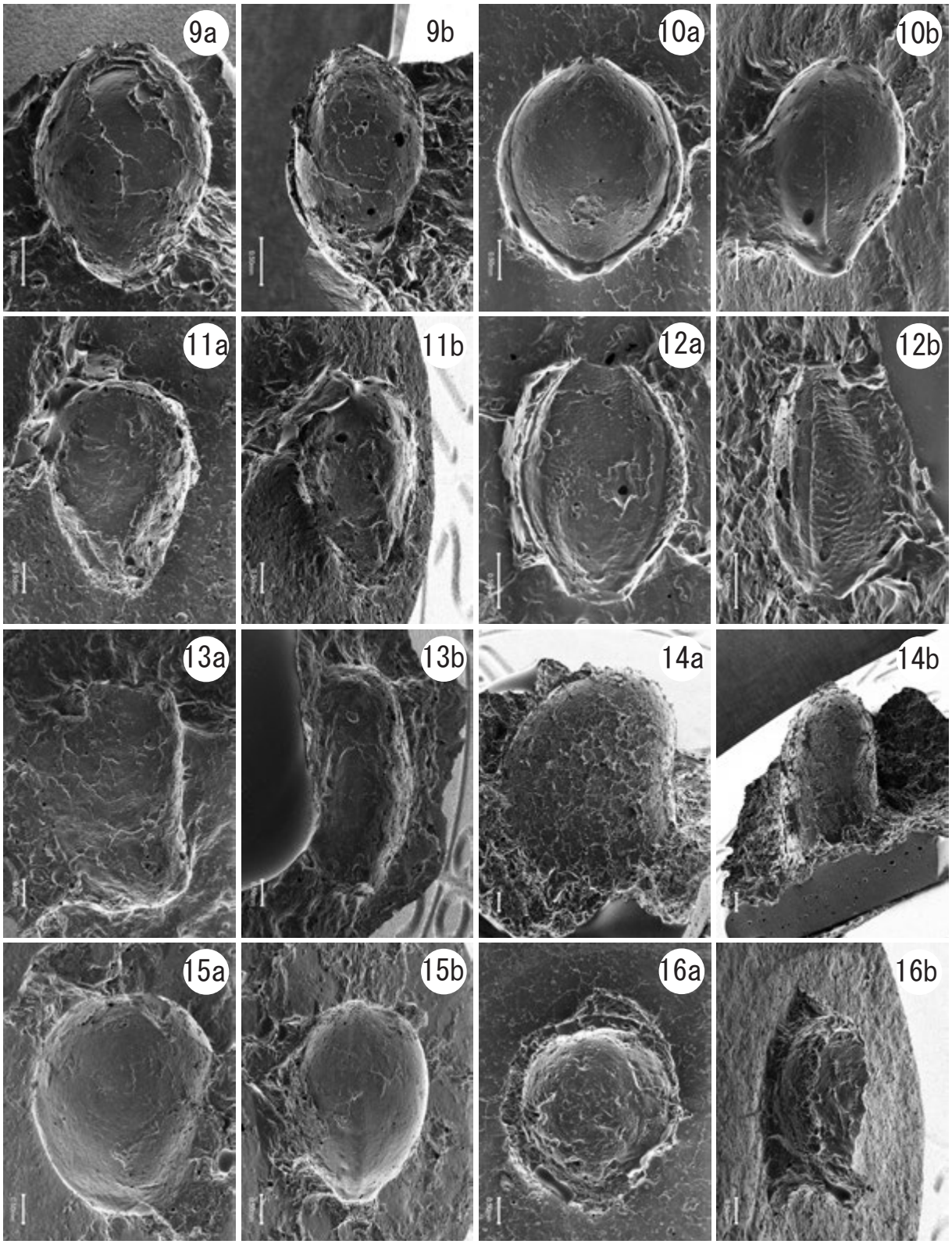


弥生時代～奈良・平安時代土製品



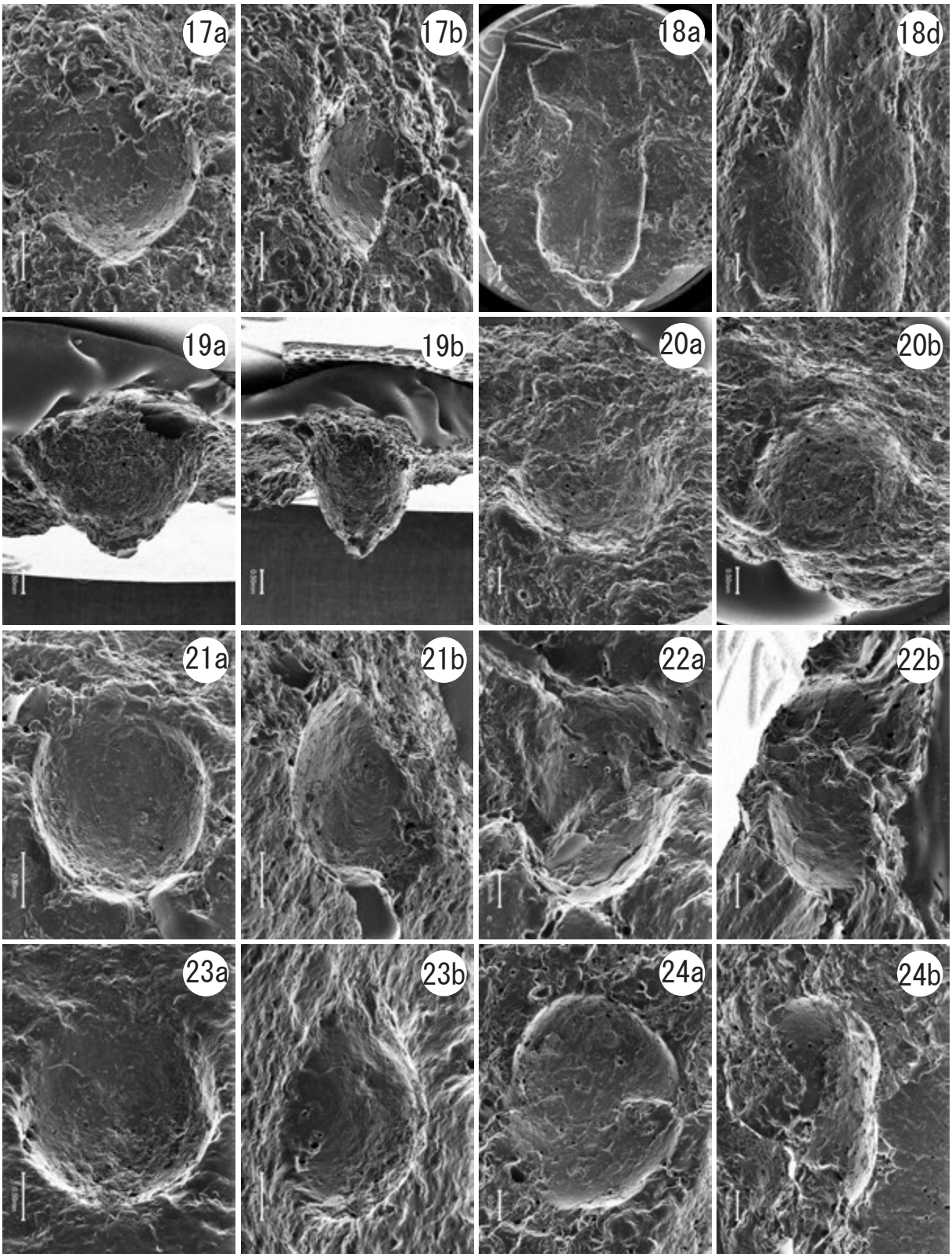
１．ニワトコ？（試料№１）、イネ籾（芒残存）（試料№26）、３．イネ籾殻（試料№２）、４．イネ籾殻（試料№16b）、５．イネ籾殻（試料№28）、６．イネ種子（試料№10）、７．イネ種子（試料№14a）、８．イネ種子（試料№86）、
ａ：側面観、ｂ：内頴側または腹面側、ｃ：上面観、ｄ：顆粒状突起の拡大

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）



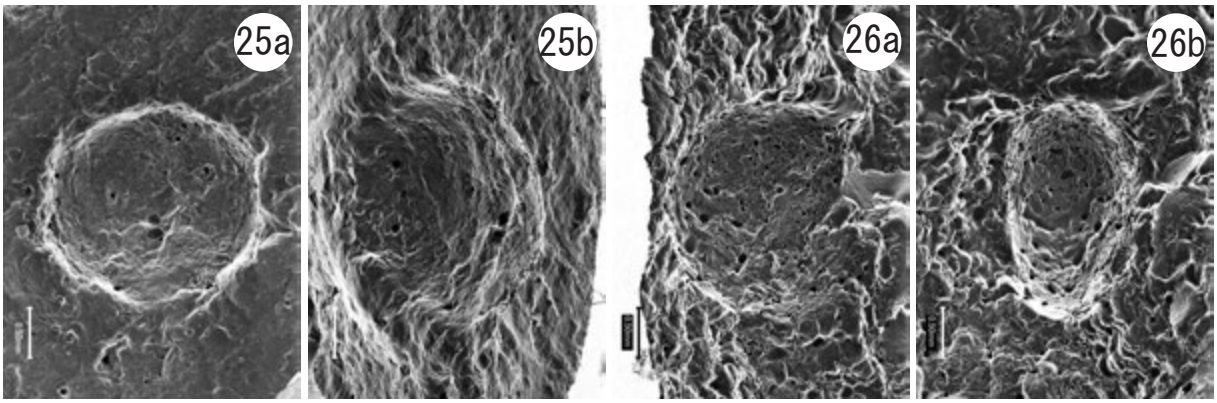
9. キビ有ふ果（試料 No.77）、10. キビ有ふ果（試料 No.128）、11. キビ？有ふ果（試料 No.116）、12. アワ有ふ果（試料 No.7）、13. マメ科？種子（試料 No.18b）、14. マメ科？種子（試料 No.74）、15. アサ核（試料 No.90）、16. アサ？核（試料 No.173）
a：側面観、b：内頴側または腹面側

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（2）



17. シソ属？果実（試料 No.60）、18. シダ植物裂片（試料 No.135）、19. 不明種実（試料 No.45）、20. 不明種実（試料 No.76）、21. 不明種実（試料 No.89）、22. 不明種実（試料 No.119）、23. 不明種実（試料 No.134）、24. 不明種実？（試料 No.62）
a：側面観、b：腹面側、d：部分拡大写真

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（3）



25. 不明種実？（試料 No.132）、26. 不明種実？（試料 No.175）
a：側面観、b：腹面側

文脇遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（4）

報　告　書　抄　録

ふりがな	そでがうらしふみわきいせき（きゅうせっきじだい～なら・へいあんじだいへん）
書名	袖ケ浦市文脇遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）
副書名	主要地方道千葉鴨川線(袖ケ浦市高谷)県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第29集
編集者名	大谷弘幸・高梨友子・佐々木由香・米田恭子・バンダリ　スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町１－１　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2019年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
ふみわきいせき 文脇遺跡	そでがうら しかみいずみ 袖ケ浦市上泉 あざみなみはら 字南原618－２ ほか	12229	036	35度 24分 ８秒	140度 ２分 45秒	20071203～ 20150618	24,582.8㎡	主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
				日本測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
文脇遺跡	包蔵地 集落跡 城館跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	石器出土地点３地点 陥穴６基 土坑２基 竪穴住居跡65軒 方形周溝墓15基 土坑10基 竪穴住居跡３軒 土坑１基 竪穴住居跡１軒 溝状遺構３条	土器、土製品（勾玉など）、石器・石製品（扁平片刃石斧など）	

要約	本遺跡からは旧石器時代から中・近世にわたる遺構や遺物が多数検出された。本書は旧石器時代から奈良・平安時代を対象としたものである（中・近世編は既刊）。遺構の主体は弥生時代後期で、竪穴住居跡のほか方形周溝墓なども検出されている。これまで文脇遺跡については、数次にわたる調査が行われているが、今回新たに、台地北端部から弥生時代中期の竪穴住居跡と方形周溝墓が検出されたことは、弥生時代の集落立地を考える上で特筆される。 また、掲載されたすべての土器を対象に種実圧痕の有無を確認し、圧痕についてはレプリカ法を用いて種実の同定を行った。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第29集

袖ケ浦市文脇遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）

－主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
埋蔵文化財発掘調査報告書２－

平成３１年３月２８日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南2－7－2